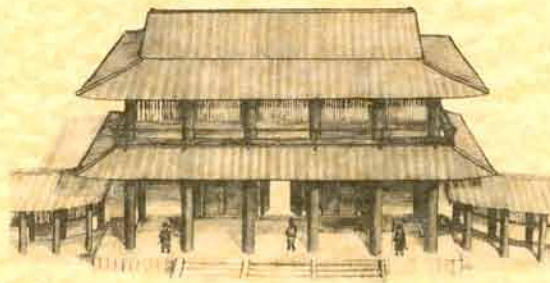


難波宮址の研究

第十二

— 宮殿周辺地域の調査 —



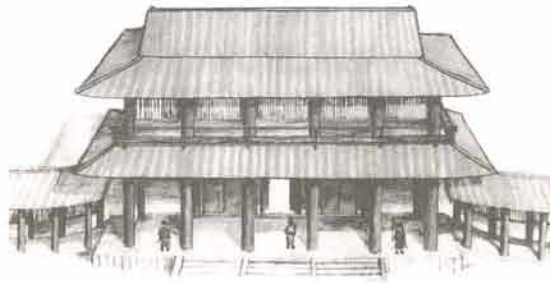
2004.7

財団法人 大阪市文化財協会

難波宮址の研究

第十二

— 宮殿周辺地域の調査 —



2004.7

財団法人 大阪市文化財協会



前期難波宮「朱雀門」(宮城南門)跡全景(NW93- 5次調査：南西から)

難波宮址の研究

第十二

— 宮殿周辺地域の調査 —



2004.7

財団法人 大阪市文化財協会

序 文

今年は山根徳太郎博士が難波宮跡の発掘調査を開始して、ちょうど50年になる。博士は非常に厳しい社会状況の中で調査を推し進めて、この地に前後二時期の宮殿が存在することを明らかにした。一方、文化遺産としての重要性を真摯に訴え、幾度の保存運動は、現在、多くの市民に親しまれる史跡公園として結実している。我々はまさにこうした先学の築いた礎の上に立っている。50年という節目に本書を上梓できるのは何かの縁であろう。あらためて先学諸氏に敬意を表したい。

本書では宮殿周辺の50件の調査を報告した。その中にはこれまで報告が待望されてきた「東方官衙」や「朱雀門」もある。さらに、上町台地出土の百済から将来された土器も報告することができた。我々はこうした地道な調査成果の積み重ねによって明らかになったことを、多くの市民へ還元することに努めたい。

最後に、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、種々のご協力を頂いた各関係機関の皆さま方に、心より御礼を申し上げる。

2004年7月

財団法人 大阪市文化財協会
理事長 脇 田 修

例 言

- 一、本書は大阪市中央区に所在する難波宮跡の発掘調査報告である。1979～95年度にかけて行った50件の調査を報告する。
- 一、発掘調査と報告書作成の費用は、第Ⅰ章第2節の表3に記した各調査の原因者の負担による。
- 一、発掘調査は、財団法人大阪市文化財協会企画課長中尾芳治(当時、前帝塚山学院大学教授)・同八木久栄(当時、現難波宮跡整備計画専門委員)、調査課長永島暉臣愼(当時、現国際文化財調査研究所長)の指揮のもと、表3に記した担当者によって行われた。
- 一、本書の編集は現場担当者との協議の上で、調査研究部研究資料課長京嶋覚、同課課長代理松尾信裕の指揮のもと、同課研究資料係学芸員寺井誠が行った。また、第Ⅱ章第2節については京嶋が、第Ⅲ章第3節は学芸部学芸課学芸第1係長佐藤隆が、第Ⅳ章第1節は調査研究部事業企画課長南秀雄が一部を執筆した。
- 一、金属関係の遺物については保存科学担当係長伊藤幸司が、木簡などの墨書の积文については保存科学室鳥居信子が担当し、建築学的見解は調査課難波宮調査事務所学芸員李陽浩から教示を得た。
- 一、第Ⅴ章第1・2節は寺井が、第3節は李が執筆した。また、第4節の動物遺存体の分析は奈良文化財研究所宮路淳子氏・松井章氏に、第Ⅴ章第5節の出土人骨の分析は大阪市立大学大学院医学研究科安部みき子氏・石井麻里絵氏に依頼し、玉稿を頂いた。
- 一、巻末の英文目次・要旨は、中西裕見子氏(英国ケンブリッジ大学)の助力を得て、寺井が作成した。
- 一、金属器・木器の保存処理と整理は、伊藤・鳥居が行った。また、蛍光X線分析は伊藤が大阪歴史博物館設置の文化財用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用いて、非破壊で表面の分析を行った。
- 一、遺構写真の撮影はおもに各調査担当者が行い、一部は徳永圀治氏および(財)大阪市都市協会に委託した。遺物写真は内田真紀子氏に委託した。
- 一、発掘調査で得られた遺物、その他の資料はすべて当協会が保管している。
- 一、発掘調査時および報告書編集に当って以下の方々に貴重ご教示を頂いた。記して深謝の意を表したい(五十音順)。
李タウン氏(大韓民国圓光大学校)、林志暎氏(奈良大学)、植木久氏(大阪市教育委員会)、植野浩三氏(奈良大学)、大庭康時氏(福岡市教育委員会)、北野重氏(柏原市教育委員会)、金武重氏(大韓民国畿甸文化財研究院)、木原克司氏(鳴門教育大学)、佐久間貴士氏(大阪松蔭女子大学)、清水眞一氏(桜井市教育委員会)、高志ころ氏(大阪市立大学)、樽野博幸氏(大阪市立自然史博物館)、坪井清足氏(元興寺文化財研究所)、中尾芳治氏(上記)、長山雅一氏(流通科学大学)、花谷浩氏(奈良文化財研究所)、平郡達哉氏(大韓民国木浦大学校)、町田章氏(奈良文化財研究所)、水野正好氏(奈良大学)、宮井善郎氏(福岡市博物館)、毛利光俊彦氏(奈良文化財研究所)、八木久栄氏(上記)、山本孝文氏(大韓民国釜山大学校)
- 一、発掘調査から本書の作成に係わる作業には協会職員ならびに補助員諸氏の協力を得た。深く感謝の意を表する。

凡 例

1. 調査次数に冠せられるアルファベットについて、NWは難波宮跡、OSは大坂城跡、MRは森の宮遺跡の略号で、たとえばNW98-3次という調査は1998年度の3番目の難波宮跡の調査であるということを示す。なお、本報告で扱う調査はOS89-89次以外はすべてNWを冠する調査である。各調査を示す場合、本文中ではNWを冠するが、位置図などでは特に断らないかぎり省略することにした。
 2. 遺構名の表記は、石垣(SW)、堀・柵(SA)、掘立柱建物(SB)、柱穴(SP)、土塋(SK)、溝(SD)、堀(SM)、井戸(SE)、そのほかの遺構(SX)の略号を冠した。
 3. 遺構番号および遺物番号は、掲載したすべてに対して、各節ごとで通し番号を付した。なお、遺構番号の付け方については層序の説明とともに第I章第2節で示した。
 4. 本書で用いた方位には、磁北・座標北・真北の3種類がある。これらの区別は右図の指北記号によって示した。ただ、基準点測量を行っていない調査地については本来磁北で示すべきであるが、方位や位置の基準を一定にするため、『大阪市道路現況平面図(1:500)』を用いて可能なかぎり国土座標を示した。
-
5. 本書に報告する調査はいずれも2002(平成14)年3月以前のものであり、座標北および座標値は世界測地系ではなく、それらの調査で使用した旧来の日本測地系(国土平面直角座標第VI系)を用いている。
 6. 水準値はT.P.値(東京湾平均海面値)を用い、本文・挿図中ではTP±〇mを記した。
 7. 本書で用いた土器編年と器種名については、古墳時代の須恵器は[田辺昭三1966・1981]に、飛鳥・奈良時代の土師器・須恵器は[佐藤隆2000]、豊臣期の青花・国産陶器は[森穀1992]に従う。これらの文献は煩雑を避けるため本文中では引用を割愛した。
 8. 註は各節末に、引用・参考文献と索引は巻末に掲載した。
 9. 本報告書で使用する中・近世の時期区分については、これまでの大坂城跡・大坂城下町跡の調査成果をもとに下記の区分を採用している。これは一般的な時代区分とは異なるが、記録に残る火災や築城に伴う大規模開発に対照しうる地層を鍵層にして出土遺物を検討した結果得られたものであり、遺跡を解釈する上で設定した時期区分である。

大坂本願寺期	本願寺創建(1496(明応5)年)から焼亡(1580(天正8)年)まで
豊臣前期	本願寺焼亡より大坂城三ノ丸築城開始(1598(慶長3)年)まで
豊臣後期	三ノ丸築城より大坂夏ノ陣(1615(慶長20)年)まで
徳川氏大坂城期(徳川期)	大坂夏ノ陣以降
 10. これまで大坂城二の丸や三の丸、あるいは大坂冬の陣・夏の陣の用語についてはひらがなの「の」を用いていたが、本報告では『大坂城跡』Ⅵ・Ⅶのように文脈の読み取りやすさと単語として認識しやすいように、二ノ丸、三ノ丸あるいは大坂冬の陣・夏の陣と、カタカナで記載した。
 11. 今回の報告地点の地山はいずれも上町層に当り、特に断らない限り、地山は上町層を指すこととする。

本文目次

序文

例言

凡例

第Ⅰ章 難波宮跡発掘調査の概要	1
第1節 難波宮調査研究略史	1
1) 概要	1
2) 近年のおもな調査研究	1
3) 難波宮と普及啓発事業	3
第2節 今回報告する調査の概要	6
1) 地区分けの概要	6
2) 層序の概要	6
第Ⅱ章 宮殿東方地域の調査	9
第1節 NW84－6次およびその周辺の調査	9
1) 調査地と周辺の概要	9
2) 調査の結果	10
3) まとめ	14
第2節 NW80－9次およびその周辺の調査	17
1) 調査地と周辺の概要	17
2) 調査の結果	18
3) まとめ	40
第3節 OS89－89次調査	47
1) 調査地と周辺の概要	47
2) 調査の結果	47
3) まとめ	48
第4節 NW89－17次およびその周辺の調査	49
1) 調査地と周辺の概要	49
2) 調査の結果	49
3) まとめ	53
第5節 NW94－20次および86－23次調査	55

1) 調査地と周辺の概要	55
2) 調査の結果	55
3) まとめ	59
第Ⅲ章 宮殿南方地域の調査	61
第1節 NW88-21次および82-39次調査	61
1) 調査地と周辺の概要	61
2) 調査の結果	61
3) まとめ	62
第2節 NW87-21次およびその周辺の調査	63
1) 調査地と周辺の概要	63
2) 調査の結果	63
3) まとめ	68
第3節 NW93-5次およびその周辺の調査	69
1) 調査地と周辺の概要	69
2) 調査の結果	69
3) まとめ	84
第4節 NW90-20次およびその周辺の調査	88
1) 調査地と周辺の概要	88
2) 調査の結果	89
3) まとめ	93
第Ⅳ章 宮殿西方地域の調査	95
第1節 NW93-4・12次およびその周辺の調査	95
1) 調査地と周辺の概要	95
2) 調査の結果	95
3) まとめ	116
第2節 NW90-7次および85-39次調査	119
1) 調査地と周辺の概要	119
2) 調査の結果	119
3) まとめ	145
第3節 NW90-29次およびその周辺の調査	150
1) 調査地と周辺の概要	150
2) 調査の結果	150
3) まとめ	155
第4節 NW84-40次および85-44次調査	159
1) 調査地と周辺の概要	159

2) 調査の結果	160
第V章 遺構と遺物の検討	161
第1節 難波宮成立期における土地開発	161
1) はじめに	161
2) 旧地形の復元	161
3) 整地の時期と規模	164
4) まとめ	168
第2節 古代難波の外來遺物	171
1) はじめに	171
2) 外來遺物の概要	171
3) 瓶形土器の検討	176
4) 難波を舞台にした対外交渉	177
5) おわりに	180
第3節 前期難波宮宮城南門および複廊の建築について	181
1) はじめに	181
2) 造宮尺について	181
3) 柱配置からみた宮城南門の平面と構造について	182
4) 宮城南門東西にとりつく複廊について	187
5) おわりに	188
第4節 NW90-7次調査地から出土した動物遺存体	193
1) はじめに	193
2) 出土した動物遺存体の概要	193
3) 考察	194
4) まとめ	197
第5節 法円坂2丁目所在近世墓地の出土人骨	203
1) はじめに	203
2) 各人骨の概要	203
3) まとめ	218
引用・参考文献	222

あとがき・索引

英文目次

報告書抄録

原色図版目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 東方官衙地域の調査
上：NW80-9次調査地全景(西から)
下：NW80-9次調査地全景(北から)</p> <p>2 NW80-9次・OS89-89次出土遺物
上：NW80-9次のガラス玉鋳型と共伴須恵器
下：NW80-9次・OS89-89次出土小型丸瓦</p> | <p>3 「朱雀門」の調査
上：NW93-5次SB701全景
下：焼土を含む柱穴(NW93-5次SC701のC2)</p> <p>4 NW90-7次出土遺物
上：百濟土器瓶
下：その他の朝鮮半島系土器</p> |
|--|--|

図版目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 NW84-6次調査の遺構
上：調査地全景(西から)
中：SB701検出状況(東から)
下：SK701遺物出土状況</p> <p>2 NW80-9次調査の遺構(一)
上：SK802遺物出土状況(北から)
中：SB813完掘状況(南東から)
下：SB814竈検出状況(南から)</p> <p>3 NW80-9次調査の遺構(二)
上：SB706・707および周辺遺構(西から)
中：SB706(北から)
下：SB707(北から)</p> <p>4 NW80-9次調査の遺構(三)
左上：SB703(南から)
右上：SB702(南から)
左下：SA702(南から)
右下：SB701(南から)</p> <p>5 NW80-9次調査の遺構(四)
上：SK702遺物出土状況(南東から)
中：SK503遺物出土状況(北から)
下：中近世遺構完掘状況(北から)</p> <p>6 NW82-10・44次調査の遺構
左上：NW82-10次SC701・SA703・SD703
(第Ⅱトレンチ；南から)
右上：NW82-10次SB815・SC701・SA703・
SD703(第Ⅲトレンチ；北から)
左下：NW82-44次全景(西から)
右下：NW82-44次SA706・SD404・SA406
(東から)</p> | <p>7 NW86-12・89-17・94-20次調査の遺構
上：NW86-12次柱穴検出状況(北東から)
中：NW89-17次SD701瓦出土状況(東から)
下：NW94-20次谷地形完掘状況(南東から)</p> <p>8 NW80-8・87-21次調査の遺構
上：NW80-8次調査地西部完掘状況(南から)
中：NW87-21次SM501・502完掘状況(西から)
下：NW87-21次SM501断面(東から)</p> <p>9 NW86-2・89-20次調査の遺構
左上：NW86-2次調査地全景(南から)
右上：NW89-20次SP705・706(西から)
左下：NW86-2次SB704西側柱列
およびSB705(北から)
右下：NW86-2次SB704西側柱列(南から)</p> <p>10 NW93-5次調査の遺構(一)
上：SK801検出状況(北から)
中：SK801断面
下：SC701のN2断面(南から)</p> <p>11 NW93-5次調査の遺構(二)
上：SB701のS5検出状況(西から)
中：SB701のS5断面(南から)
下：SB701のS3断面(南から)</p> <p>12 NW93-19次調査の遺構
上：SP804~806およびSC702柱穴(南から)
中：SB702・703(北から)
下：SB703・SD701(北から)</p> <p>13 NW90-20・95-10次調査の遺構
上：NW90-20次調査地全景(南から)
中：NW90-20次SB701・702(北から)</p> |
|--|---|

- 下：NW95-10次SD401(西から)
- 14 NW84-46・85-10・86-24次調査の遺構
上：NW84-46次SB801・802検出状況(南から)
中：NW85-10次SB701検出状況(西から)
下：NW86-24次SP701・702検出状況(北から)
- 15 NW93-4・12次調査の遺構
上：NW93-4次SB703(東から)
中：NW93-12次SB702・803(南から)
下：NW93-12次近世墓地(北から)
- 16 NW93-12次調査の遺構(一)
上：5号墓人骨出土状況(写真上が東)
中：7号墓人骨出土状況(写真上が北)
下：10号墓人骨出土状況(写真上が北)
- 17 NW93-12次調査の遺構(二)
上：15号墓人骨出土状況(写真上が北)
中：16号墓人骨出土状況(写真上が北)
下：38号墓検出状況
- 18 NW90-7次調査の遺構(一)
上：SX901断面(北から)
中：SX901完掘状況(南東から)
下：SX901獣骨出土状況(北西から)
- 19 NW90-7次調査の遺構(二)
上：SD401南半完掘状況(南西から)
中：SD401南半の横矢板(西から)
下：SD401南端完掘状況(北東から)
- 20 NW90-29次調査の遺構
上：SX901・SD701断面(西から)
中：SX901完掘状況(南から)
下：SA401検出状況(南から)
- 21 NW80-9・84-6・89-17・94-20次調査出土遺物
- 22 NW90-7次調査出土遺物(一)
- 23 NW90-7次調査出土遺物(二)
- 24 NW90-7次調査出土動物遺存体(一)
- 25 NW90-7次調査出土動物遺存体(二)
- 26 NW93-12次調査出土人骨(一)
- 27 NW93-12次調査出土人骨(二)
- 28 NW93-12次調査出土人骨(三)
- 29 NW93-12次調査出土人骨(四)
- 30 NW93-12次調査出土人骨(五)
- 31 NW93-12次調査出土人骨(六)
- 32 NW93-12次調査出土人骨(七)

挿 図 目 次

- 図1 難波宮跡の位置 1
- 図2 本書での地区割りおよび調査地位置図 6
- 図3 NW84-6次などの調査地位置図 9
- 図4 NW84-6次西壁・北壁断面図 10
- 図5 NW81-8次第9地点南壁断面図 10
- 図6 NW161・84-6次遺構配置図 11
- 図7 NW84-6次SB701・SK701平面図 12
- 図8 NW84-6次SK701断面図 13
- 図9 NW84-6次出土遺物 13
- 図10 NW84-6次調査地周辺の遺構 15
- 図11 NW80-9次などの調査地位置図 17
- 図12 NW80-9次などのトレンチ配置図 17
- 図13 NW80-9次西壁・南壁断面図 18
- 図14 難波宮造営前の遺構配置図 19
- 図15 SB813実測図 21
- 図16 SB814竈実測図 21
- 図17 古墳時代の遺物 22
- 図18 難波宮期の遺構配置図 24
- 図19 SB701および周辺遺構平面図 25
- 図20 SB702および周辺遺構平面図 26
- 図21 SB703および周辺遺構平面図 27
- 図22 SB704および周辺遺構平面図 28
- 図23 SB705および周辺遺構平面図 29
- 図24 SB706および周辺遺構平面図 30
- 図25 SB707および周辺遺構平面図 31
- 図26 SB708および周辺遺構平面図 32
- 図27 前期難波宮期の遺構および第7b層出土遺物 .. 33
- 図28 SK702~705平面図 34
- 図29 SK702~705および第6層出土遺物 35
- 図30 NW80-9次出土小型丸瓦および
NW30次出土小型鴟尾 36
- 図31 NW80-9次SK501~503出土遺物 37
- 図32 NW80-9次SK503実測図 37
- 図33 中世~豊臣期の遺構配置図 38
- 図34 豊臣期の遺物 39
- 図35 金坪遺跡とNW80-9次出土ガラス玉鏝型 .. 40

図36	東方官衙地域の遺構前後関係模式図	42	図76	NW93-19次Dトレンチ実測図	82
図37	NW30次出土遺物	44	図77	NW86-2次SB704・705平面図	83
図38	OS89-89次調査地位置図	47	図78	NW89-20次SP705・706 と南側の遺構平面図	84
図39	OS89-89次平断面図	48	図79	NW93-19次出土金箔押軒丸瓦拓影	84
図40	OS89-89次出土遺物	48	図80	「朱雀門」とその周辺の遺構配置図	86
図41	NW89-17次などの調査地位置図	49	図81	NW90-20次などの調査地位置図	88
図42	NW89-17次などの調査地平断面図	50	図82	NW90-2次北壁東側断面図	89
図43	NW89-17次SD701断面図	50	図83	NW95-10次西壁断面図	89
図44	NW89-17次SD701出土の 重圀文軒丸瓦・鬼板	51	図84	NW90-20次遺構配置図	90
図45	NW89-17次SD701出土の重圀文軒平瓦	52	図85	NW90-2次遺構配置図	91
図46	調査地周辺の後期難波宮期の遺構配置図	53	図86	NW90-2次SK701出土遺物	91
図47	NW94-20・86-23次調査地位置図	55	図87	NW90-2次SK701実測図	91
図48	NW94-20次断面図および地山上面平面図	56	図88	NW95-10次遺構配置図	92
図49	NW94-20次出土遺物(古代)	57	図89	NW95-10次出土遺物	92
図50	NW94-20次出土遺物(豊臣期)	59	図90	NW90-20次調査地とその南側の建物群	93
図51	NW81-30次出土遺物および 調査地周辺地形復元図	60	図91	「朱雀門」以南の建物と地山上面の地形	94
図52	NW88-21・82-39次調査地位置図	61	図92	国立大阪病院内および周辺の旧地形復元図	96
図53	NW88-21次調査地平断面図	62	図93	国立大阪病院内および周辺の層序模式図	97
図54	調査地周辺の前期難波宮期の遺構配置図	62	図94	NW84-46次および172次遺構配置図	98
図55	NW87-21次などの調査地位置図	63	図95	NW80-4次SX903実測図	98
図56	NW85-32次層序模式図	63	図96	NW86-24次SP801~803平面図	98
図57	NW80-8次遺構配置図	64	図97	NW93-4・12次地山上面遺構配置図	99
図58	NW85-32次平面図と周辺遺構分布図	65	図98	NW93-12次SB803実測図	99
図59	NW87-21次SM501断面図	66	図99	NW85-10次遺構配置図 および東壁断面図	100
図60	NW87-21次遺構配置図	66	図100	NW86-24次SP701・702平面図	101
図61	NW87-21次SM501および 徳川期土壌出土瓦	67	図101	NW86-24次東区遺構配置図	101
図62	NW93-5次などの調査地位置図	69	図102	NW93-12次SB702実測図	101
図63	NW93-5次西壁断面図	70	図103	NW93-4次SB703 および周辺遺構実測図	102
図64	NW86-2次南北断面模式図	70	図104	NW93-4・12次豊臣期遺構配置図	103
図65	NW93-5次SK801断面図	71	図105	NW93-12次拡張区の位置	105
図66	NW93-5次SK801出土遺物(1)	72	図106	NW93-12次近世墓配置図	105
図67	NW93-5次SK801出土遺物(2)	73	図107	NW93-12次1~10号墓検出状況	106
図68	NW93-5次SK801出土遺物(3)	74	図108	NW93-12次11~18号墓検出状況	107
図69	豊学校内の難波宮造営前の遺構の分布	75	図109	NW93-12次拡張区近世出土遺物(1)	108
図70	NW89-20次SK802出土遺物	75	図110	NW93-12次拡張区近世出土遺物(2)	109
図71	NW93-5次SB701・SC701・702実測図	76	図111	NW93-12次拡張区近世出土遺物(3)	110
図72	NW93-5次SC701・SK801実測図	77	図112	NW93-12次拡張区近世出土遺物(4)	111
図73	NW93-5次SB701・SC701柱穴出土遺物	79	図113	NW93-12次拡張区近世出土遺物(5)	112
図74	NW93-5次出土重圀文瓦	80	図114	NW93-12次拡張区近世出土遺物(6)	113
図75	NW93-19次A・Bトレンチ遺構配置図 およびSC701柱穴断面図	81	図115	NW93-12次拡張区近世出土遺物(7)	115
			図116	NW93-12次拡張区近世出土遺物(8)	116

図117 国立大阪病院敷地内の変遷	117	第4b層基底面検出遺構	151
図118 NW90-7次・85-39次調査地位置図	119	図148 NW90-29次古墳-飛鳥時代の遺物	152
図119 NW90-7次断面図の位置	120	図149 NW90-29次豊臣期の遺物	154
図120 NW90-7次北壁および西壁断面図	120	図150 NW90-29・88-2次豊臣期遺構配置図	154
図121 NW90-7次SX901平面図	121	図151 古地図に描かれた下水	155
図122 NW90-7次第8a層出土土師器	122	図152 調査地周辺で検出された難波宮期の遺構	156
図123 NW90-7次第8a層出土土師器・須恵器	123	図153 NW84-40次トレンチ配置図	159
図124 NW90-7次第7b2層出土土師器(1)	124	図154 上町台地北端の旧地形復元図	162
図125 NW90-7次第7b2層出土土師器(2)	125	図155 整地された地点とその時期	165
図126 NW90-7次第7b2層出土須恵器(1)	126	図156 OS87-133次整地層出土遺物	165
図127 NW90-7次第7b2層出土須恵器(2)	127	図157 OS93-6次整地層出土土師器・須恵器	166
図128 NW90-7次第7b1層出土土師器(1)	130	図158 OS93-6次整地層下層出土埴輪	167
図129 NW90-7次第7b1層出土土師器(2)	131	図159 難波出土の新羅土器	172
図130 NW90-7次第7b1層出土須恵器(1)	133	図160 OS90-50次SK502出土の新羅土器 とその共伴遺物	172
図131 NW90-7次第7b1層出土須恵器(2)	134	図161 難波出土の百済土器と関連資料	174
図132 NW90-7次豊臣期の遺構配置図	135	図162 OS99-16次出土の北部九州系須恵器 と関連資料	175
図133 NW90-7次SD401実測図	136	図163 日本と韓国の瓶	177
図134 NW90-7次SD401-3層出土 土師器・瓦質土器	137	図164 上町台地先端における新羅・ 百済土器の分布	178
図135 NW90-7次SD401-3層出土焼締陶器	138	図165 2号墓人骨残存部位	203
図136 NW90-7次SD401-3層出土 輸入陶磁器	139	図166 5号墓人骨残存部位	204
図137 NW90-7次SD401-3層出土 瀬戸美濃焼・その他の遺物	140	図167 6号墓人骨残存部位	206
図138 NW90-7次SD401-2・1層出土遺物	142	図168 7号墓人骨残存部位	207
図139 NW90-7次豊臣後期遺構出土遺物	143	図169 10号墓人骨残存部位	208
図140 NW90-7次出土李朝白磁	144	図170 9・13号墓人骨残存部位	209
図141 NW90-7次徳川期の遺構配置図	145	図171 14号墓人骨残存部位	210
図142 NW90-7次調査地周辺の旧地形復元図	146	図172 15号墓人骨残存部位	212
図143 土師器杯Cの径高指数比較	147	図173 16号墓人骨残存部位	213
図144 須恵器杯H・Gの法量比較	147	図174 22号墓人骨残存部位	215
図145 NW90-29次などの調査地位置図	150	図175 37号墓人骨残存部位	216
図146 NW90-29次東壁断面図	151	図176 38・48号墓人骨残存部位	217
図147 NW90-29次地山上面および			

表 目 次

表 1	難波宮跡の発掘調査略年表	2	表 17	造営尺の復原	182
表 2	2000年以降の難波宮関連著書・論文・資料紹介	4	表 18	桁行柱間が5間以上で等間の門の例	184
表 3	調査地一覧表	7	表 19	古代の門における桁行／梁行比	185
表 4	新旧遺構名対照表	18	表 20	NW90-7次出土動物種名表	193
表 5	難波宮造営前の掘立柱建物一覧	20	表 21	NW90-7次出土動物遺存体観察表(1)	199
表 6	方位による掘立柱建物のまとまり	20	表 22	NW90-7次出土動物遺存体観察表(2)	200
表 7	ガラス玉鑄型一覧	41	表 23	NW90-7次出土動物遺存体観察表(3)	201
表 8	難波宮期遺構一覧	43	表 24	NW90-7次出土動物遺存体観察表(4)	202
表 9	NW89-17次SD701出土の重圏文軒平瓦観察表	52	表 25	1・2号墓人骨の歯の残存状況	203
表 10	NW93-5次SB701・SC701柱穴データ	78	表 26	3～5号墓人骨の歯の残存状況	204
表 11	国立大阪病院内および周辺の調査概要	96	表 27	6～8号墓人骨の歯の残存状況	205
表 12	NW93-12次近世墓一覧	104	表 28	9～12・14号墓人骨の歯の残存状況	209
表 13	NW93-12次墓の前後関係	105	表 29	7・15号墓人骨の計測値	210
表 14	難波出土の新羅土器一覧	171	表 30	15・16号墓人骨の歯の残存状況	213
表 15	難波出土の百濟土器一覧	174	表 31	17・22・37号墓人骨の歯の残存状況	216
表 16	『日本書紀』に登場する難波の外交関連記事	179	表 32	出土人骨の性別年齢一覧表	219
			表 33	上顎の歯の計測値	220
			表 34	下顎の歯の計測値	221

写 真 目 次

写真 1	NW84-6次現地説明会風景	9	写真 17	NW93-4次出土金箔押し龍面鯉瓦	103
写真 2	NW80-9次現地説明会風景	17	写真 18	16号墓蓋検出状況	114
写真 3	SB705の小柱穴から出た土師器杯(34)	29	写真 19	西脇氏と刻まれた墓石	116
写真 4	OS89-89次SX401検出状況	47	写真 20	NW85-39次調査で検出された石垣	119
写真 5	NW86-11次調査地完掘状況(南から)	49	写真 21	瓶114の頸部内面	127
写真 6	NW86-12次調査地遠景(西から)	49	写真 22	瓶114の体部下半の調整	127
写真 7	NW89-17次SD701断面と瓦溜検出状況	50	写真 23	瓶114の底部内面	127
写真 8	NW86-23次A区北壁断面	55	写真 24	瓶114の底部外面の調整	127
写真 9	NW87-21次SM501瓦出土状況	66	写真 25	須恵器甕118に熔着した杯H蓋の痕跡	128
写真 10	NW81-17次調査地全景(西から)	69	写真 26	須恵器甕118の車輪文当て具	128
写真 11	NW82-58次柱穴	74	写真 27	土師器片に付着したスラグ	141
写真 12	NW81-35次調査地全景(南から)	88	写真 28	NW80-19次で検出された近世の整地層上面	150
写真 13	NW87-7次の石垣の根太(西から)	88	写真 29	NW90-29次で出土した巨石	154
写真 14	NW87-47次の難波宮期土壌	88	写真 30	銅座公園東側の段差	163
写真 15	NW95-10次南西端深堀部分断面	89			
写真 16	NW90-2次SK701検出状況	91			

第Ⅰ章 難波宮跡発掘調査の概要

第1節 難波宮調査研究略史

1) 概要

難波宮跡は上町台地の北端に位置し、行政的には難波宮跡公園を中心に東西約450m、南北約500mの範囲が埋蔵文化財包蔵地に指定されている。約50年の調査研究成果は計11冊の報告書で公表され、難波宮についての著作・論文は数しれない。1979年以前の調査については難波宮址顕彰会などが担い、この間の調査や研究の推移が整理され[長山雅一1981a]、近年の調査研究動向については[中尾芳治1997・2003]や[古市晃2002・2004a]によって整理されている。また、難波宮研究の体系的な著書としては、直木孝次郎氏の『難波宮と難波津の研究』や中尾氏の『難波宮の研究』、直木・中尾両氏によって編集された『シンポジウム 古代の難波と難波津』などがある[直木1994、中尾1995、直木・中尾2003]。参考までに

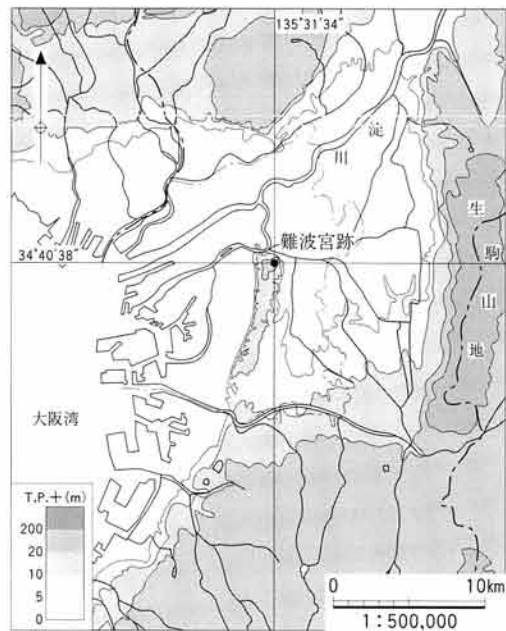


図1 難波宮跡の位置

表1には難波宮跡の発掘調査の略史を示し、表2には2000年以降の関連著書・論文を掲載した。本節では本書に関連する近年の調査研究の動向についていくつかトピックを取り上げ、簡単に記したいと思う。

2) 近年のおもな調査研究

i) 宮殿周辺地域の調査の進展

水利施設が見つかった現NHK・大阪歴史博物館建設に伴う調査や[大阪市文化財協会2000a]、その北側の大阪府警建替えに伴う調査[大阪府文化財調査研究センター2002]は宮殿北西部の状況を具体的に明らかにするものであった。水利施設は前期難波宮内裏西方官衙地域の北西隅にあり、前期難波宮造営時に谷地形を整地して造られていた。この中で泉施設SG301については、湧水による水の供給という実用的な側面とともに、祭祀遺物が出土していることから神聖視を受けた施設ではないかと考えられている[大阪市文化財協会2000a：pp.250－252]。

大阪府警建替えに伴う調査では東西方向の谷地形が検出され(第Ⅴ章第1節の「本町谷」)、その中の自然堆積層から前期難波宮造営時の土器とともに絵馬や「戊申年」(648年)と書かれた木簡が出土した。

表1 難波宮跡の発掘調査略年表

西暦	事項(括弧内の数字は発掘調査の次数を示す)	西暦	事項(括弧内の数字は発掘調査の次数を示す)
1913	陸軍被服支廠で蓮華文・重圈文軒瓦出土	1979	[財団法人大阪市文化財協会]設立 難波宮瓦窯跡が吹田市七尾で発見される
1952	法円坂一帯の踏査 [大坂城址研究会]設立	1981	東方官衙遺構の検出(80-9)
1953	法円坂住宅建設地から鵺尾片出土	1984~86	朝堂院西方で2棟の五間門跡を検出(84-30・85-22)
1954	発掘調査始まる 瓦堆積などの検出(1~4)	1986	朝堂院跡1,556.7㎡が国史跡の追加指定を受ける 前期朝堂院東第5・6堂跡を検出、後期朝堂院東第4堂および朝堂院南面回廊を検出、後期朝堂院が8堂型式であることが判明(86-28)
1955	後期凝灰岩溝跡の検出(4~5) [難波宮址研究会]設立	1987~90	市立中央体育館跡地(現NHK・大阪歴史博物館)の調査で5世紀代の倉庫群・前期難波宮の「並び倉」などを検出(87-20・88-1・89-1)
1957	後期内裏回廊跡の検出(6)	1988	前期東八角殿跡の調査(87-54)
1958	前期内裏回廊・門跡の検出(8)	1989	前期朝堂院第一堂を検出(88-26)
1960	後期内裏回廊跡を確認(6~12) [難波宮址顕彰会]設立	1990	宮殿南西部で谷地形を埋める整地層から百濟土器出土(90-7)
1961	後期大極殿・同後殿の検出(13) 後期内裏西外郭築地跡・難波宮下層遺跡堅穴の検出(14)	1993	前期「朱雀門」跡を検出(93-5)
1962~64	後期内裏正殿・同前殿の調査(16~18) 前期内裏前殿・内裏後殿検出(16~18) 後期大極殿・内裏正殿跡など17,500㎡が国の史跡指定	1993~94	前期西「朝集殿」跡を検出(93-19)
~65	内裏地域の調査(19~21)	1995	後期朝堂院西第三堂跡を検出(94-15) 宮殿北西部で難波宮造営前の鍛冶関連遺構や平安時代初頭の蔓草麒麟鏡・海獣葡萄鏡・隆平永宝を副葬する墓を発見(センター調査)
1965~67	前期朝堂院跡の検出(22)と朝堂院地域の調査(23・25~29)	1996	後期朝堂院西第六堂を検出(95-12)
1968	難波宮東部の遺構・難波宮下層遺跡の検出(30)	1997	後期朝堂院東第三堂跡を検出(96-19)
1969~72	大極殿院跡の調査が始まる(33~42) 前期内裏南門跡の検出(33~34)	1998	中央体育館跡地で石組み溝を伴う水利施設を検出(97-3)
1970	後期大極殿院跡の発掘(37)	1999	前期朝堂院東第四堂を検出(99-12) 宮殿南西部で前期段階の鍛冶遺構を検出(99-15)
1972	前期八角形建物跡の検出(42) 前期朝堂院南門跡の検出(45) 東方の森之宮勝山線で難波宮と下層の遺構検出(43・56)	2000	宮殿北西部で出土した「戊申年」などの木簡が公表される(センター調査) 後期朝堂院南門を検出(00-11)
1974	難波宮跡の調査で古代の木簡が初めて出土(66) 朝堂院跡を起債により先行取得	2001	前期東八角殿院回廊と東長殿の調査(01-5)
1975~77	高速道路東大阪線(阪神高速)の調査(75・93・100・112・121)	2002	前期東八角殿と後期東外郭築地の調査(02-8)
1976	朱雀大路跡の調査(107)、立会調査開始 内裏・朝堂院跡71,603㎡が国史跡の追加指定 後期大極殿の整備、一般公開	2003	宮殿南東部の谷地形で木簡出土(02-13)
		2004	宮殿北西部で前期難波宮の北を画すると思われる堀と、谷中から奈良時代の絵馬が多量に出土(センター調査) 後期朝堂院東第4堂の調査(03-8)

※[大阪市立博物館1995：p.13]の表を改変し作成

堆積状況から谷は埋められずに自然のままに窪みを残しており、宮殿北西を画する役割を果たしたことであろう。

宮殿南東部に当るNW02-13次調査では、GL-7m(≒TP+14m)以上ある深い落込みから7世紀までに収まる土器片とともに多量の木屑が出土し、その中に木簡が含まれていた[大阪市文化財協会2003b]。難波宮跡の範囲確認のための試掘調査であったことから、十分な断面観察はできなかったものの、整地されたような状況は見受けられなかった。よって、前期難波宮朝堂院東回廊から約200m、東方官衙地域の建物群(第Ⅱ章第2節)の約200m南に大きな谷地形が宮殿と併存したことになる。

また、宮殿周辺での空間利用を知る上で、谷地形の窪地において鉄鍛冶施設が宮殿南西で見つかったことは興味深い[辻美紀2002]。これは難波Ⅲ新段階に当るものである。また、上町台地東斜面で

は後期難波宮期の焼け歪んだ瓦が多量に出る地点があることから、瓦窯の存在が想定される。以上のような工房関係の遺構の検出はまだ少ないが、宮殿周辺の窪地や斜面に存在することが予想され、今後とも注意していく必要がある。

京域のあり方についての研究は、近年、積山洋によって進められている[積山1997・2000]。この研究は正方位をとる遺構を集成し、900尺の方角地割による前期難波京の建設が天武朝に着手されたことを想定した。このような事例はまだ少ないものの、重要な視点であり、今後の発掘調査の展開による研究の進展を待ちたい。

ii) 宮殿施設に関する調査研究

大阪市文化財協会では毎年、史跡難波宮跡の整備に伴う調査を実施し、その成果を蓄積している。ここ数年でも前期朝堂院第四堂や八角殿院、後期難波宮朝堂院南門や東外郭築地などが調査され、その成果はさまざまな形で紹介されている。本書ではこれらの宮殿中心部に関する調査は対象にしないが、東方官衙地域(第Ⅱ章第2節)や前期難波宮宮城南門(第Ⅲ章第3節)は本書で正式な報告を行う。前者の地域の南側では近年小規模なトレンチをいくつか設定して発掘調査が行われた。そこで東方官衙と同時期と思われる柱穴が見つかり、さらに南側に建物群が広がる展望を得ることができた[大阪市文化財協会2003b]。

ところでこの東方官衙に焦点を絞った研究は意外と少なく、近年の[佐藤隆2001]が本格的に論じたものとしては初めてと思われる。この論文ではNW30次や本書第Ⅱ章第2節で報告するNW80-9次などの調査内容を出土遺物を含めて徹底的に再検討し、前期と後期に分けられていた建物群がいずれも前期に収まる可能性が高いことを示した。本書ではこの作業を引き継いで、年代の解釈において問題となってきた遺構や地層の出土遺物を再検討し、同様の結論を得ることができた。

iii) 難波宮後に関する調査研究

難波宮は784年に長岡宮に移されることによって、その役目を終えるが、宮殿廃絶後の調査研究も蓄積されてきている。上町台地西斜面地域を対象とした『大坂城跡』Ⅶが刊行され、奈良時代末から平安時代初頭の遺構・遺物が多く残っていたことを紹介した[大阪市文化財協会2003a]。[積山洋2002]では難波宮が長岡宮に移された後、南の四天王寺周辺と北の大川沿岸に遺構・遺物が集中することを指摘し、大川の南岸に集中する背景として難波津の水運を通じた経済活動によるものと考えている。なお、史跡整備に伴う宮殿域の調査でも、廃絶後の土地利用の痕跡が残されているが、その多くは中世の耕作地のみで、居住地は見つかっていない。

3) 難波宮と普及啓発事業

難波宮跡の調査研究は、山根徳太郎博士の「遺跡は国民の共有財産であり、子孫に伝えていかなければならない」という基本的な考えで始まった。こうした精神は現地説明会の開催や高校生をクラブ活動の一環で発掘調査参加を受け入れてきたことにも表れている。そして、門戸を広げたこのような普及活動が、難波宮跡保存を主張する住民訴訟につながり(11年間の裁判ののち、和解)、文化財保存運動史上に大きな足跡を残すことになったのである。

表2 2000年以降の難波宮関連著書・論文・資料紹介

2000年

植木久「後期難波宮朝堂院西方区画の性格をめぐって－五間門区画を通してみる“副都”難波宮の実態」：大阪市教育委員会編『大阪の歴史と文化財』第6号

同「後期難波宮と難波京－平城京、長岡京との比較から－」：条里制・古代都市研究会編『条里制・古代都市研究』第16号
大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一

佐藤隆「前期難波宮跡の調査概要」：『第40回大阪府埋蔵文化財研究会資料』

積山洋「古代都市難波京の諸段階」：地方史研究協議会編『巨大都市大阪と摂河泉』

辻美紀「古代難波工房見つかると!?－飛鳥時代の鍛冶遺構の調査から－」：『葦火』86号

宮本佐知子「前期難波宮朝堂院東第4堂跡の調査」：『葦火』85号

2001年

木原克司「前期難波宮の宮域をめぐって」：徳島地理学会編『徳島地理学会論文集』第4集

佐藤隆「後期難波宮朝堂院南門を発見！」：『葦火』91号

同「難波宮跡朝堂院の調査成果－史跡難波宮跡平成12年度の発掘調査から－」：『第42回大阪府埋蔵文化財研究会資料』

同「難波宮東方官衙の再検討」：『大阪市文化財協会研究紀要』第4号

豊田裕章「前期難波宮と「周制」の三朝制について」：大阪歴史学会編『ヒストリア』第173号

宮本佐知子「難波宮跡出土6241型式蓮華文軒九瓦について」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号

2002年

大阪市文化財協会『大坂城跡』V

同『大坂城跡』VI

大阪府文化財調査研究センター『大坂城跡』II

大阪府文化財センター『大坂城跡発掘調査報告』I

京嶋寛・辻美紀「難波宮跡南西部における鉄に関わる生産跡」：『日本考古学協会』

積山洋「難波長柄豊碕宮と飛鳥浄御原宮－大極殿の成立をめぐって－」：大阪府立大学日本史学会編『市大日本史』第5号

辻美紀「NW99－15次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告－1999・2000年度－』

奈良文化財研究所「創立50周年記念 日中古代都城図録」奈良文化財研究所第57冊

福岡澄男「難波宮跡出土の『素人凡国評』木簡をめぐって」：『第44回大阪府埋蔵文化財研究会資料』

古市晃「難波宮発掘」：森公章編『倭国から日本へ』吉川弘文館

同「都市の成立」：仁木宏編『【もの】から見る日本史 都市』青木書店

李陽浩「難波宮史跡公園を掘る－前期難波宮東八角殿院回廊と東長殿の調査－」：『葦火』96号

同「難波宮跡八角殿院付近の調査成果－史跡難波宮跡発掘調査(NW01－5次)について－」：『第44回大阪府埋蔵文化財研究会資料』

2003年

大阪市文化財協会『大坂城跡』VII

佐藤隆「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年－陶器窯跡編年の再構築に向けて－」：『大阪歴史博物館研究紀要』第2号

寺井誠「難波宮南方の土器群と開発」：『大阪歴史博物館研究紀要』第2号

直木孝次郎・中尾芳治編『古代の難波と難波宮』学生社

林部均「古代宮都と前期難波宮－その画期と限界－」：石野博信編『古代近畿と物流の考古学』

李陽浩「14年ぶりに東八角殿院が顔を出しました－前期難波宮東八角殿院の調査から－」：『葦火』102号

同「建替えられた築地堀－後期難波宮東外郭築地の改修工事－」：『葦火』103号

同「難波宮発掘の最新成果－史跡難波宮跡2002年度の発掘調査から－」：『第47回大阪府埋蔵文化財研究会資料』

2004年

古市晃「都市史から見た難波宮・難波京研究の展望」：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社

同「孝徳朝難波宮と仏教世界－前期難波宮内裏八角殿院を中心に」：同上

積山洋「孝徳朝の難波宮と造都構想」：同上

大阪市文化財協会難波宮調査事務所では毎年、小学校の社会見学を受入れ、難波宮や大坂城についての学習支援を行っている。子供たちは教科書にあまり登場しない難波宮や大坂の歴史について自分たちなりに学習し、私たちにいろいろと質問をぶつけてくる。そして、1999年度からは難波宮の史跡整備に伴う調査で小中学生を対象とした体験発掘が正式に始まった。こういった普及事業は、生の資料に触って、郷土の歴史を勉強することへの楽しさを教えるとともに、さらには将来の考古学者を生み出すことにつながるかもしれない。

2001年11月には大阪歴史博物館が開館したことによって、難波宮についての研究成果をさらに市民へ還元できるようになった。この博物館は宮殿の北西部に位置し、展示に遺跡の一部を取り入れているのが特徴である。10階は難波宮をテーマにした展示で、南東側では後期難波宮大極殿の内部が原寸大に復元されている。その壁面に設けられたスクリーンでは、天平16(744)年に難波宮遷都の日に行われたであろう儀式を復元して上映し、それが終わると暗幕が上がり、ガラス窓から眼下に広がる難波宮跡公園が望めるようになっている。また、北西側の展示室ではこれまでの難波宮跡調査で明らかになったことを出土遺物や写真・遺構模型などを用いて説明されている。さらに、8階には「なにわ考古学研究所」という考古学体験コーナーがあり、難波宮跡の発掘現場が再現され、体験的な学習ができるよう工夫されている[岡村勝行2002b]。

なお、本書が刊行される2004年は難波宮跡が山根徳太郎氏によって調査されてちょうど50年になる。これに伴う記念事業が大阪歴史博物館や大阪市文化財協会で現在計画されている。

第2節 今回報告する調査の概要

1) 地区分けの概要

本書で扱う範囲は、『大坂城跡』Ⅵ[大阪市文化財協会2002b]で区分して定義されたG地区に相当する。扱う調査総数は50件で、難波宮跡でこれだけの数を一度に報告する試みは初めてであり、上町台地北端部については『大坂城跡』Ⅵ・Ⅶに次いで3冊目となる[大阪市文化財協会2002b・2003a]。

G地区は北が大坂公園南端、南が長堀通、東が森之宮勝山線、西が谷町筋で囲われた範囲であり(図2)、本書ではさらにG地区を便宜的に宮殿東方地域、同南方地域、同西方地域の3つに区分して、それぞれ第Ⅱ～Ⅳ章に割り当てた。さらに、各章では数箇所の調査地のまとまりによって、各節を設定した(図2・表3)。

2) 層序の概要

難波宮跡は地山が高いため、後世の削平によって豊臣期以前の地層が良好に残っている場合が少ないが、谷地形といった周囲よりやや窪んだところでは確認できることもある。地山より上で確認され

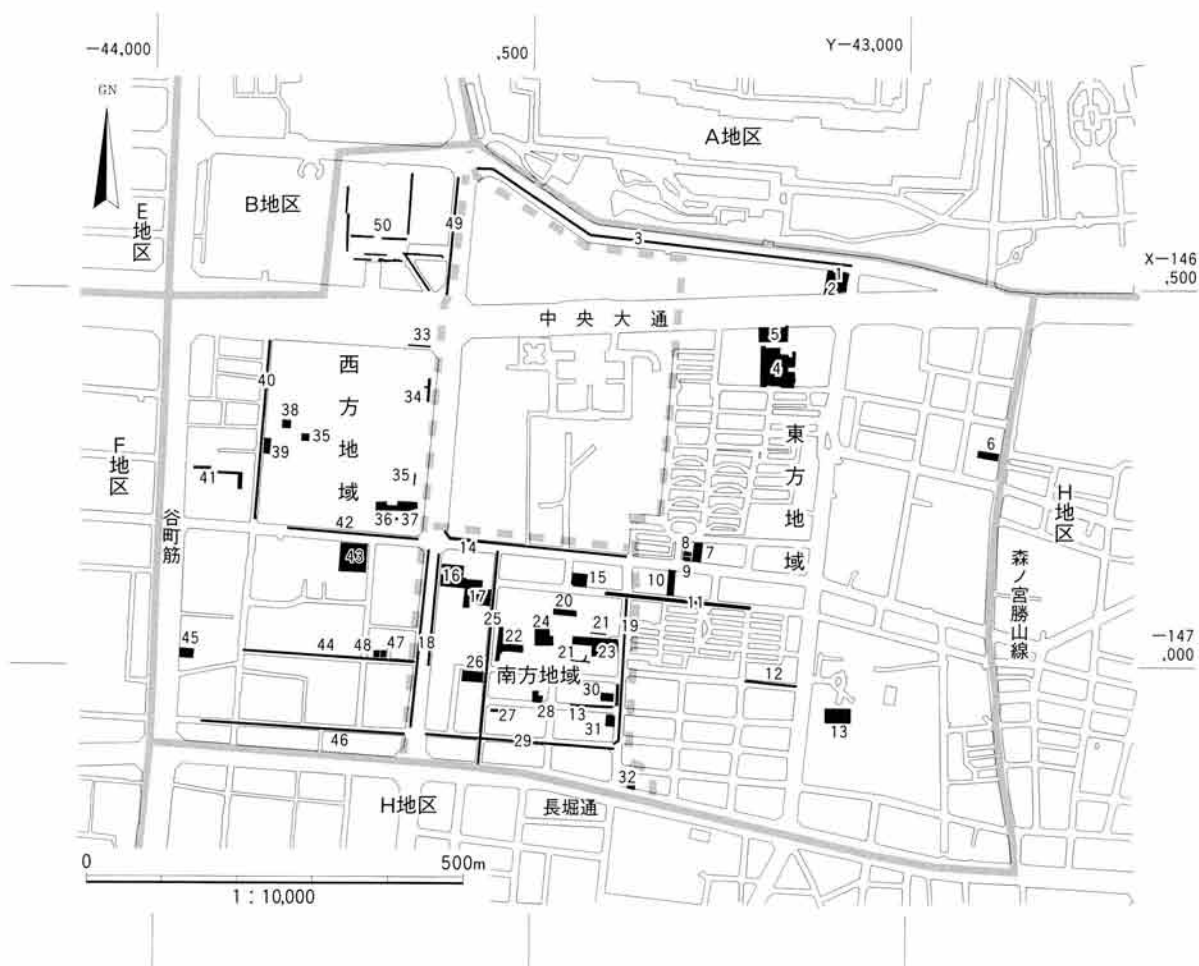


図2 本書での地区割りおよび調査地位置図

表3 調査地一覧表

番号	調査次数	面積	調査地番	調査の原因	担当者	調査期間	章・節
1	NW84-6	550㎡	中央区馬場町2-12	大阪共済会館による建替工事	松尾信裕	1984年4月25日～6月23日	2-1
2	NW161	320㎡	同 馬場町2-12	大阪共済会館による増築工事	藤田幸夫	1979年8月20日～10月6日	2-1
3	NW81-8	40㎡	同 馬場町3	大阪市水道局による水道管ライニング工事	西田昭一・永島輝臣	1981年7月20日～9月22日	2-1
4	NW80-9	2300㎡	同 法円坂1-1-38	(財)大阪市教員会館による教職員の福利厚生施設と共同住宅の建設工事	木原克司・田中清美・京嶋覚	1980年12月1日 ～81年5月31日	2-2
5	NW82-10・37・44	1000㎡	同 法円坂1-1-38	(財)大阪市教員会館による教職員の福利厚生施設と共同住宅の建設工事	木原克司・植木久	1982年5月17日 ～83年2月26日	2-2
6	OS89-89	150㎡	同 森ノ宮中央2-4-2・3・19	浜地産業(株)による建設工事	宮本佐知子	1989年10月12日～10月24日	2-3
7	NW89-17	240㎡	同 法円坂1-4-10	生和(株)による建設工事	金村浩一	1989年12月1日～12月26日	2-4
8	NW92-9	35㎡	同 法円坂1-4-10	マルサン(株)による建設工事	伊藤純	1992年8月24日～8月27日	2-4
9	NW86-12	80㎡	同 法円坂1-4-13	(株)丸三株式会社による社屋建替工事	富山直人	1986年5月31日～6月9日	2-4
10	NW86-11	184㎡	同 上町1-16-4	ダスキ(株)による事務所ビル建設工事	植木久・川村紀子	1986年5月12日～5月27日	2-4
11	NW82-21	150㎡	同 上町1	大阪市水道局による上町1丁目配水管敷設工事	藤田幸夫	1982年7月21日～8月11日	2-4
12	NW86-23	34㎡	同 上町1	大阪瓦斯(株)によるガス管敷設工事	宮本佐知子	1983年7月31日～8月11日	2-5
13	NW94-20	580㎡	同 玉造2-26-6	学校法人大阪女学院による建設工事	黒田慶一	1995年4月10日～5月18日	2-5
14	NW82-39	29㎡	同 法円坂1-5-6	関西電力(株)による電柱建替工事	藤田幸夫・伊藤純	1982年10月13日～10月18日	3-1
15	NW88-21	115㎡	同 上町1-17-5	佐伯建設(株)による建設工事	藤田幸夫	1989年1月9日～1月25日	3-1
16	NW80-8	1010㎡	同 上町2	大槻能楽堂による建替工事	藤田幸夫・松尾信裕	1980年9月16日～12月13日	3-2
17	NW87-21	328㎡	同 上町1	大京観光大阪支店による建設工事	松尾信裕	1987年7月27日～8月21日	3-2
18	NW85-32	370㎡	同 上町	大阪市下水道局による下水道工事	八木久栄	1985年9月25日～12月3日	3-2
19	NW86-2	400㎡	同 上町1	大阪市下水道局による上町他8町地内下水管渠築造工事	松尾信裕	1986年4月2日～6月20日	3-3
20	NW81-17	280㎡	同 上町1-19-31	大阪市教委による豊学校校舎建設工事	八木久栄	1981年9月28日～12月28日	3-3
21	NW82-58	60㎡	同 上町1-19-31	大阪市教委による大阪市立豊学校バックネット設置工事	植木久	1983年3月15日～3月28日	3-3
22	NW89-20	580㎡	同 上町1-19	大阪市教委による市立豊学校建設工事	黒田慶一	1990年1月22日～2月17日	3-3
23	NW93-5	1120㎡	同 上町1-19	大阪市教委による市立豊学校建設工事	佐藤隆	1993年6月21日～9月16日	3-3
24	NW93-19	452㎡	同 上町1-19	大阪市教委による市立豊学校々々地における建設工事	佐藤隆	1993年11月29日 ～94年4月11日	3-3
25	NW92-12	187㎡	同 上町1・上本町1	大阪瓦斯(株)によるガス管敷設工事	松尾信裕	1992年10月6日～12月9日	3-3
26	NW90-20	372㎡	同 上町27-1・2	木本起佐子氏による建設工事	植木久	1990年9月7日～10月19日	3-4
27	NW87-47	140㎡	同 上町1-22-17	結城氏による建設工事	今津啓子	1987年1月11日～1月22日	3-4
28	NW95-10	20㎡	同 上町1-21-3・4・18	ベルデホーム(株)による建設工事	横山洋	1995年8月21日～9月8日	3-4
29	NW80-15	289㎡	同 上町1-22-28	大阪瓦斯(株)によるガス本管敷設工事	藤田幸夫	1981年1月13日～3月10日	3-4
30	NW90-2	75㎡	同 上町1-1	和田年夫氏による建設工事	宮本佐知子	1990年4月6日～4月17日	3-4
31	NW87-7	155㎡	同 上町1-23-1・2	的場氏による建設工事	南秀雄	1987年5月18日～5月29日	3-4
32	NW81-35	232㎡	同 上町1-8-5	ハynes恒産によるマンション建設工事	藤田幸夫	1982年3月29日～4月5日	3-4
33	NW167	33㎡	同 法円坂	阪神高速道路公団による法円坂歩道橋改築工事	木原克司	1979年12月10日～12月15日	4-1
34	NW85-10	175㎡	同 法円坂2-1	国立病院による改築工事	宮本佐知子	1985年5月27日～6月10日	4-1
35	NW86-24	344㎡	同 法円坂2-1	国立大阪病院による高エネルギー棟の増築工事	宮本佐知子	1986年8月6日～9月30日	4-1
36	NW93-4	345㎡	同 法円坂2-1-14	国立大阪病院による建設工事	清水和	1993年6月7日～9月30日	4-1
37	NW93-12	470㎡	同 法円坂2-1-14	国立大阪病院による建設工事(第2期)	清水和・南秀雄	1993年10月1日～12月22日	4-1
38	NW84-41	330㎡	同 法円坂2-1	国立大阪病院による建設工事(第9期工事)	宮本佐知子	1984年11月12日～12月5日	4-1
39	NW84-46	156㎡	同 法円坂2-1	国立大阪病院によるR1貯溜槽設備工事	宮本佐知子	1984年12月4日 ～85年1月5日	4-1
40	NW80-4	758㎡	同 谷町4-2	大阪市下水道局による下水管渠築造工事およびガス中圧本管敷設工事	木原克司	1980年7月28日～10月31日	4-1
41	NW83-33	258㎡	同 谷町4-1	住宅都市整備公団による建設工事	宮本佐知子	1983年12月15日 ～84年2月4日	4-1
42	NW85-39	6㎡	同 法円坂	関西電力(株)による電柱建替工事	宮本佐知子	1985年11月20日～11月22日	4-2
43	NW90-7	727㎡	同 内久宝寺町2-18	(株)総通による建設工事	植木久・清水ひかる	1990年5月7日～8月1日	4-2
44	NW164	153㎡	同 龍造寺町1-21	大阪瓦斯(株)によるガス管修繕入替工事	永島輝臣	1979年10月22日～11月29日	4-3
45	NW80-19	12㎡	同 谷町5-17	伊西組による店舗付共同住宅建設工事	森毅	1981年2月9日～2月28日	4-3
46	NW80-16	400㎡	同 安堂寺町1-69・1-19	大阪瓦斯(株)によるガス管入替工事	永島輝臣	1981年1月27日～3月31日	4-3
47	NW88-2	20㎡	同 龍造寺町14	大喜金属(株)による建設工事	金村浩一・上垣幸徳	1988年4月25日～4月28日	4-3
48	NW90-29	150㎡	同 龍造寺町2-14他	小池彰子氏による建設工事	伊藤純	1991年2月4日～3月2日	4-3
49	NW85-44	128㎡	同 上町	大阪瓦斯(株)によるガス管敷設工事	八木久栄・永島輝臣	1985年12月8日 ～86年2月9日	4-4
50	NW84-40	1440㎡	同 法円坂6	大阪市総合計画局による東区法円坂埋蔵文化財発掘調査	宮本佐知子・植木久	1984年11月1日 ～85年3月31日	4-4

(註)番号と次数がゴシック体になっているものは国庫補助金との按分であることを示す。

る地層のほとんどは整地層で、これらの時期は上町台地の大規模な開発の段階と一致する。国立大阪病院(現国立病院機構大阪医療センター)内の調査報告(『難波宮址の研究』第八)ではこのような開発の段階を考え合わせて8つに区分している[大阪市文化財協会1984：pp.52-56]。今回対象の調査でもこの区分は有効で、若干手を加えて採用した。層序区分は以下のようになる。

第1層 現代整地層。

第2層 近代の整地層。

第3層 徳川期の整地層。

第4層 豊臣期の地層で、大坂夏ノ陣の焼土層を第4a層、豊臣後期の整地層を第4b層、豊臣前期の地層を第4c層と命名し、具体的な時期が不明な場合は単に第4層と称する。

第5層 中世の整地層・作土層。なお、豊臣期と区別するため、大坂本願寺期の地層や遺構についてはここに含めることにした。

第6層 後期難波宮の瓦を伴った難波宮廃絶後の層。

第7層 難波宮期の整地層が基本的にこれに該当する。後期難波宮期の整地層を第7a層、前期難波宮期の整地層を第7b層と細分した。時期が確認できなかった場合は第7層と一括して表記する。

第8層 難波宮造営前の遺物包含層や開析谷内でしばしば検出される無遺物の水成層といった難波宮期以前の地層を一括して指す。ただ、本書では弥生時代以前の地層が検出された現場は含まれていないが、「上町谷」の底では縄文時代晩期の遺物包含層がある(第Ⅴ章第1節)。また、将来的に上町台地全体で層序を整理する際には、台地縁辺の弥生時代の包含層を含む沖積層も対象としなければならないため、当層は細分されなければならないであろう。

第9層 上町層の地山。

なお、報告遺構については定められた遺構のアルファベット記号のあと、番号の3桁目に各段階の番号を冠することにした。例えば、難波宮期の掘立柱建物であれば、SB701というように表記した。

第Ⅱ章 宮殿東方地域の調査

第1節 NW84-6次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では共済会館建設に伴うNW161・84-6次調査と、配水管工事に伴うNW81-8次調査を報告する(図3)。

前者の調査地は前期難波宮大極殿の約300m東に位置する。仮に難波宮西方官衙地域の南北方向の柵SA303[大阪市文化財協会1992・2000a]を宮域の西端とし、難波宮中軸線で東に折り返したとすると、NW161・84-6次調査地の西部を南北に通ることになる(図10)。また、南隣にはNW93次MP-5区[大阪市文化財協会1981b]、西隣にはNW71次[八木久栄1981]、NW01-3次[李陽浩2003]といった調査があり、難波宮造営前から豊臣期にかけての遺構が検出されている。なお、当調査地中央には25mプールが造られていたため、東半分が大きく攪乱されていた。しかし、難波宮造営前および前期難波宮期の掘立柱建物を良好な状況で検出することができ、NW84-6次調査では1984年6月23日に現地説明会を実施した(写真1)。

NW81-8次調査は大阪城公園の南側に延びる



写真1 NW84-6次現地説明会風景

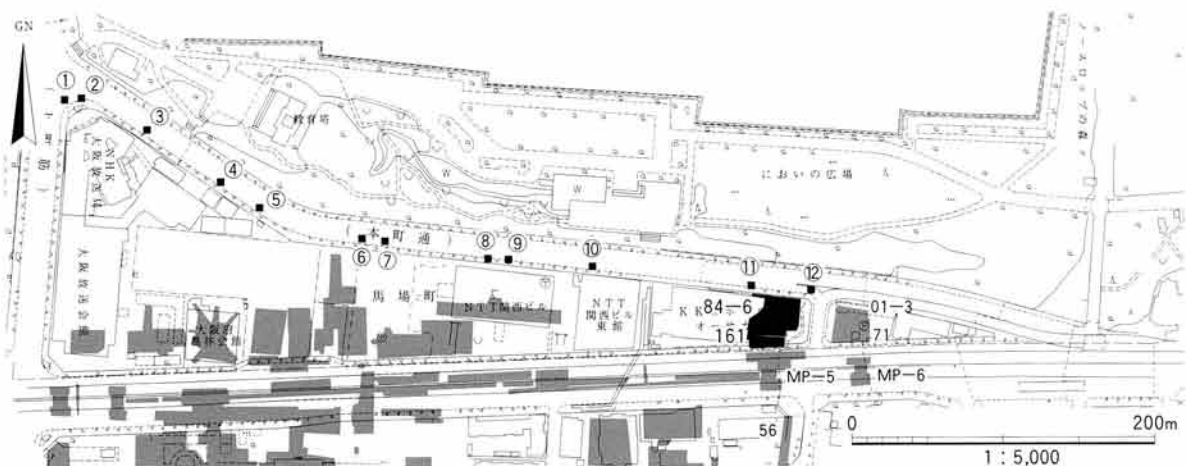


図3 NW84-6次などの調査地位置図(丸数字はNW81-8次の各トレンチを指す)

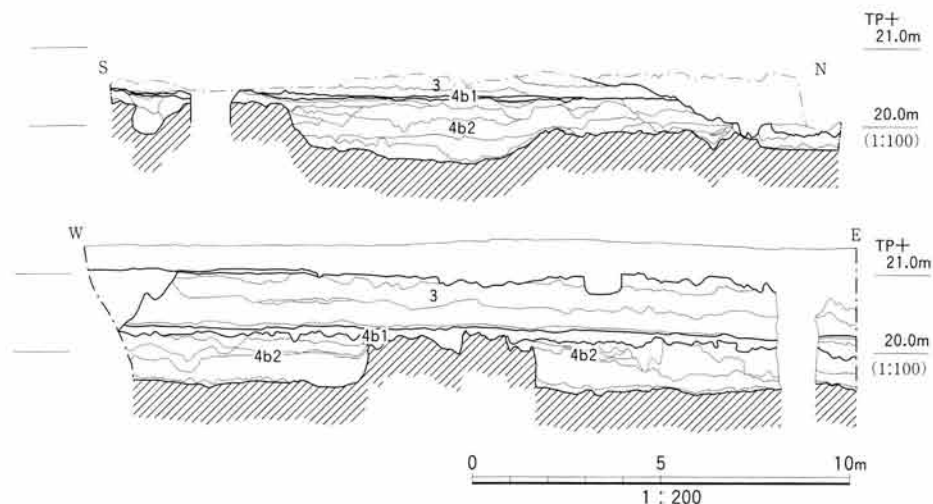
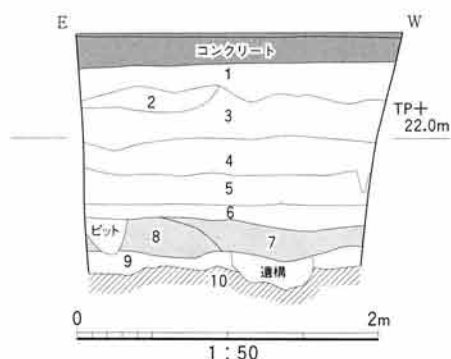


図4 NW84-6次西壁・北壁断面図



- 1: 淡黄褐色細礫混り砂(徳川期盛土)
- 2: 汚れた淡黄褐色シルト混り砂(徳川期盛土)
- 3: 灰色砂混り粘土(徳川期盛土)
- 4: 汚れた灰褐色砂混り粘土(豊臣期盛土)
- 5: 暗灰色シルト～砂混り粘土(豊臣期盛土)
- 6: 淡灰褐色シルト～砂混り粘土(難波宮廃絶後の層)
- 7: にぶい灰褐色粘土(難波宮期整地層)
- 8: 黄褐色粘土(難波宮期整地層)
- 9: 明黄褐色細粒砂混り粘土(難波宮造営前の層)
- 10: 明淡黄褐色砂(地山)

図5 NW81-8次第9地点南壁断面図

本町通に、図3のように12個所の作業坑を設けて、地層・遺構の確認を行った。その結果、地山のレベルを把握し、一部のトレンチで難波宮期の整地層を確認することができた。

2) 調査の結果

i) 層序

NW84-6次調査地では近現代盛土の下に近世の地層を3層確認したが、それより古い地層は遺構内にしか残っていなかった(図4)。

第3層 人頭大の礫を含み、黄灰色を呈するシルト～砂質シルト層で、層厚は最大80cmある。周辺調査を参考にするなら、徳川期初頭の整地層に相当すると思われる。

第4b1層 砂礫や炭・木片を含む灰褐色を呈するシルト質砂層である。層厚は約10cmで、非常に堅く締まっている。青花・瀬戸美濃焼・唐津焼・備前焼などが出土した。豊臣後期の生活面を整地した層と思われる。

第4b2層 暗褐色を呈する粘土や炭・シルト偽礫が混在する整地層で、第4b1層の下位に広く分布する。大坂城三ノ丸を造成する際の整地層と思われる。

また、NW81-8次調査の第9地点では地層が良好な状態で確認された(図5)。各地層の時期は調査時の見解から図5のように推定されているが、遺物による裏付けはできていないため、統一層序の番号は付けていない。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前の遺構(図6)

NW161・84-6次調査地では、地山上面で難波宮造営前と難波宮期の遺構が検出された。この中で柱穴の一边が1m以下で、建物や柱列の向きが正方位から大きくはずれるものを難波宮造営前の遺

構と認定した。掘立柱建物3棟、柱列1条、その他の柱穴10数基を検出した。

SB801 両調査地にまたがって検出された桁行4間(7.0m)以上、梁間2間(3.9m)の掘立柱建物である。NW84-6次の調査後の見解では、**SA801**とこの建物の北側の柱列が平行に延びて、柱穴も対応することから、これらが組み合ってひとつの建物になると考えられた。しかし、本節ではNW161次の柱穴と柱筋が揃うことから図6のように組み合うとした。建物はN27°Eの方向である。

SB802 NW84-6次調査地の南東隅で検出された南北2間(3.9m)以上、東西2間(4.3m)以上の

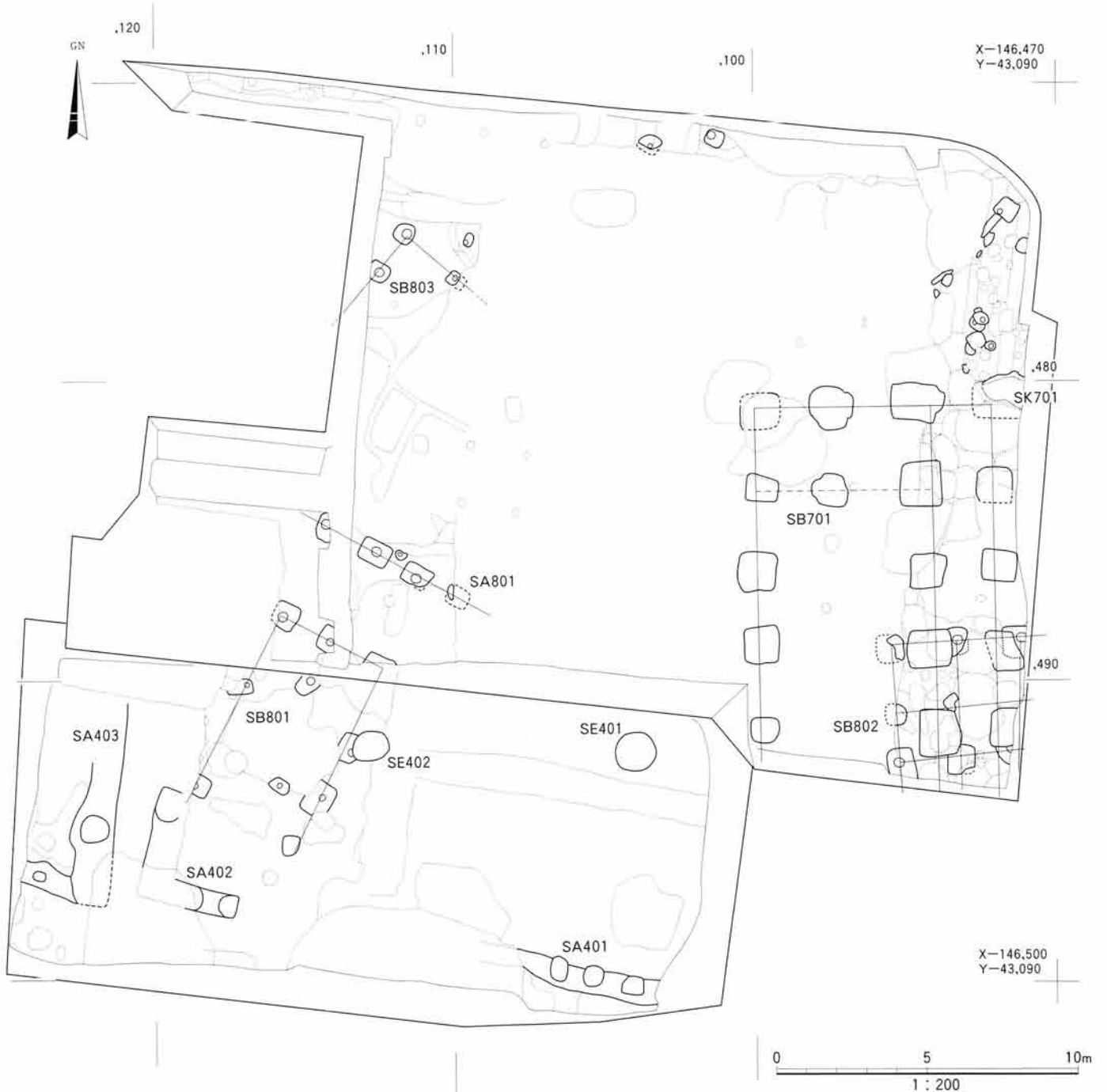


図6 NW161・84-6次遺構配置図

総柱の掘立柱建物で、方向はN3°Wである。柱の掘形は一辺1m前後で、柱痕跡の直径は約0.3mである。建物の方向が正方位に近いものの、前期難波宮期のSB701に柱穴が切られることから、難波宮造営前と判断した。

SB803 調査地の北西で、直角に曲がる柱列を検出したことから掘立柱建物と判断した。N40°Eの方向に延び、柱間は東西2.2m、南北1.8mである。南側は削平を受けているため、形状は不明である。

SA801 SB801の北側でE30°Sの方向に延びる柱列である。調査時はSB801の北側の柱列と組み合わせ掘立柱建物と判断されたが、前述の判断から柵と考えた。柱間は約2mである。

b. 前期難波宮期の遺構と遺物

NW84-6次調査地で掘立柱建物とその柱穴を切る土壌を検出した(図7、図版1)。

SB701 東西2間(5.8m)、南北4間(11.0m)以上の身舎と、東に庇をもつ掘立柱建物である。柱

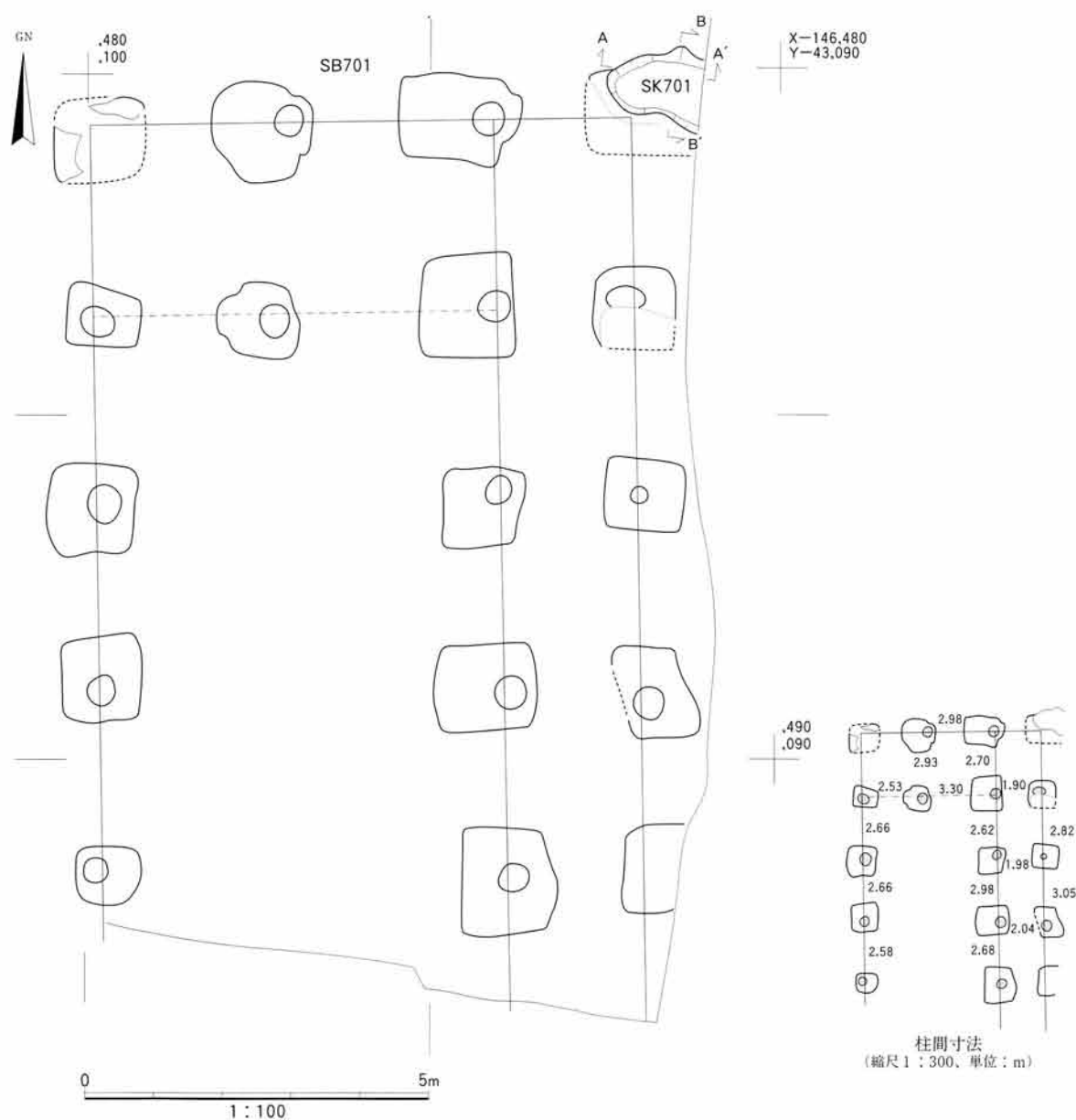


図7 NW84-6次SB701・SK701平面図

掘形は最大のもので一辺1.5mあり、柱痕跡は直径0.40~0.45mある。現場で計測した柱間の距離は図7の右下のとおりで、柱間寸法のばらつきが目立つ。建物の方向はN0.5°Wで、前期難波宮中軸線とほぼ等しい。調査時は東と北の2面に庇をもつ建物と考えられたが、こうすると東面と北面の柱間が違うと同時に、屋根勾配や軒の出などが異なるようになるため、東面のみが庇とする方が妥当と思われる。また、北から2番目の東西柱列は柱間が等間でないことから、間仕切りと推定した(註1)。なお、調査終了後も柱穴が保存されることになったため、柱穴は完掘していない。

柱穴からは瓦片14~16が出土した(図9)。14は丸瓦で凹面に布目が残っている。15は凸面に粗い格子タタキメが残っていて、凹面には布目がある。これらの瓦は前期難波宮造営前のものと思われる。難波宮造営前の瓦の多くは凸面をケズリで仕上げるため、格子タタキメを残すものは少ないが、NW49次では6~7世紀の遺物を含む前期難波宮造営時の整地層からも出土している[八木久栄1973a]。16は平瓦で、凹面には布目残り、凸面はケズリで仕上げられる。分割は内側からで破面は調整されていない。

SK701 調査地東端で検出した土壌で、深さは0.2mある(図7・8)。南側が攪乱で失われて、全体の形状はわからない。SB701の柱穴を切っている。

出土遺物には土師器杯1・杯C2~5・皿C6・壺7、須恵器杯H9、同蓋8に加え、瓦10~13がある(図9、図版21)。1は体部に稜をもち、暗文はない。杯Cは口径が10cm前後の小型のもの2・3と、16~17cmの大

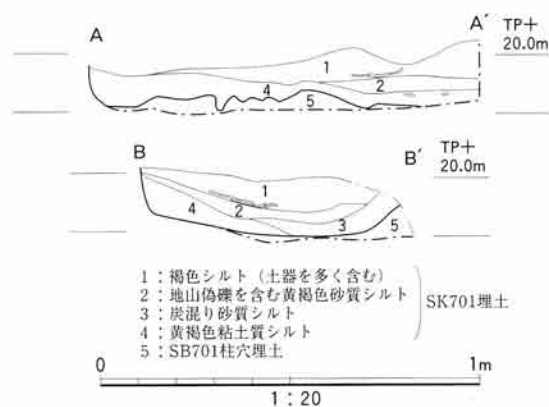


図8 NW84-6次SK701断面図

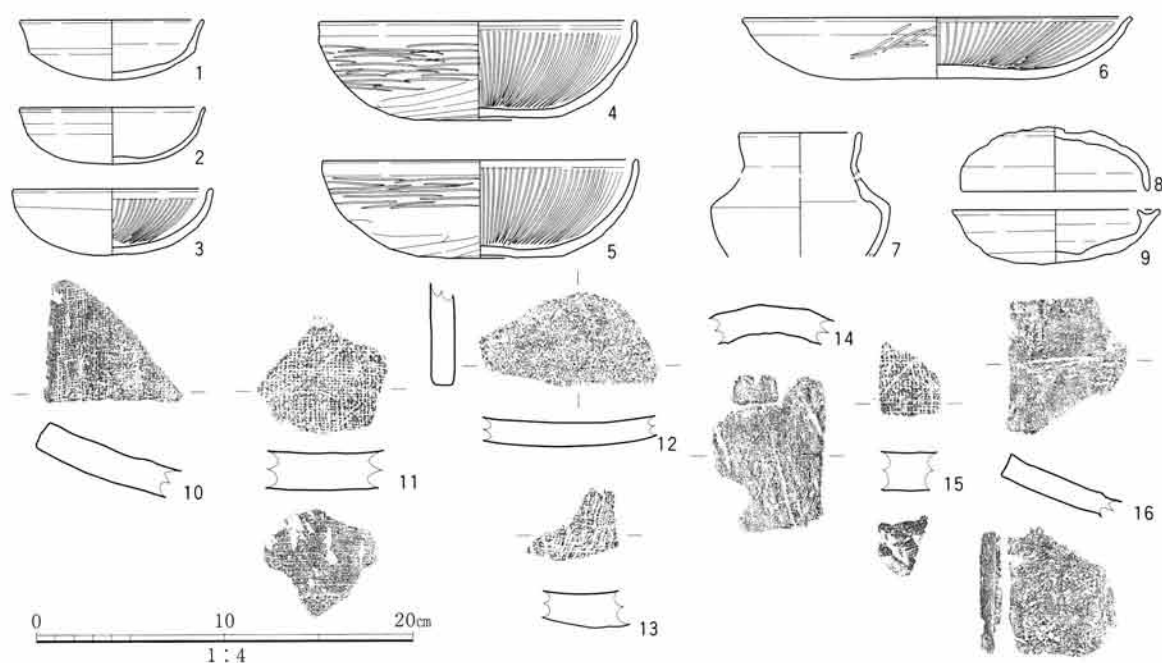


図9 NW84-6次出土遺物
SK701(1~13)、SB701柱穴(14~16)

型のもの4・5がある。2は器面が荒れているため暗文の有無はわからないが、3～5は内面に放射状の暗文が施されている。2～5の径高指数は30～33である。6は外面ヘラミガキで内面には放射状の暗文が施される。7は口縁部と体部の破片に接点はないが、胎土・調整から同一個体と判断した。口径6.2cm、器高6.5cm以上に復元できる。内外面ともナデで仕上げられる。

8は口径10.0cm、器高3.4cmある。9は口径8.6cm、器高2.9cmで、口縁部の立上がりが非常に短く、受部よりも端部が低い位置にある。いずれも天井部・底部はヘラ切り後、調整が施されておらず、杯Hとしてはもっとも新しい特徴を有する。

これらの遺物について土師器杯Cの径高指数から判断して、難波Ⅲ中段階に属するものである。

瓦は凹面にはいずれも布目が残っている。11は凸面にケズリが施され、表面に斜格子タタキメの一部と思われる凹みがある。前述の15と胎土や凹面の布目がきわめて類似しており、同一個体の可能性がある。10もケズリが施されるが、表面の残りは非常に悪く、12・13にいたっては残りが悪いため、判断できなかった。焼成は10が須恵質、11・13が生焼けぎみの須恵質、12が土師質である。

c. 豊臣期の遺構

NW161次調査地で豊臣期と推定される柵3条、井戸2基を検出した(図6)。

SA401～403 布掘りの掘形をもつ柵である。SA401・402は一連の可能性があり、SA402は南西に隅をもつ。これらが一連とした場合、方向はN13°Eである。SA403は南東に隅をもち、東側の調査区外に延びる。

SE401・402 調査地の北東と中央北よりで検出した。いずれも直径1.5m前後の円形で、井戸側は検出されなかった。SE401については底部近くで急激に狭くなっており、元来は井戸側が存在した可能性がある。焼壁や焼瓦が出土していることから、大坂夏ノ陣で廃絶したと思われる。

NW84－6次調査地でも土壌や柱穴が多数検出されたが、組合せはわからなかった。

3) まとめ

今回の調査では難波宮造営前と前期難波宮期の掘立柱建物が検出された。ここでは東隣のNW71次[八木1981]と南隣の阪神高速建設に係わる調査成果[大阪市文化財協会1981b]も交えて、一帯の遺構について検討してみよう。

まず、難波宮造営前では多くの柱穴が検出されており、掘立柱建物としての組合せが認定されたものを図10に掲載した。この中で総柱建物はSB802に加え、東隣のNW71次調査地では東で北に約20°振る東西3間(4.8m)、南北3間(4.2m)の「倉庫」と報告された総柱建物が見つまっている[八木1981]。この「倉庫」は柱穴から瓦が出土しているということから、報告では難波宮期に位置づけられているが、瓦は難波宮造営前にも存在すること、規模的にもSB802と類似することから、難波宮造営前に位置づけるのが妥当と思われる。

また、NW71次調査地の北西部に、「倉庫」検出面より2.3m低くなる落込み(TP+16.9m)があり、土師器・須恵器を含む地層で埋っているとされている[八木1981]。これは北側に延びる小支谷の谷頭で、前期難波宮造営に伴って整地され埋められたのであろう。北隣のNW01－3次調査地では豊臣

期の盛土以下は調査することができなかったが、TP+17m以下もこの盛土が続いていた[李2003]。地山が低くなっているのは後世の改変によるものではあるが、同時に旧地形も北側が低くなっていたことを反映していると思われる。

これらの調査で出土した難波宮造営前の遺物はきわめて少ないが、SB701の柱穴やSK701から出土している瓦はおそらくこの時期のものが混入したと思われる。いずれも薄手で凹面に布目を残す。凸面は格子タタキメを残すものが1点あるが、そのほかはケズリで仕上げられている。難波宮造営前の瓦は前期難波宮造営に伴う整地層などから出土しているが、この段階で瓦が使用されている建物は寺院のみとされている。当地にどのような仏教関係の建物があったのか詳細はわからないが、宮成立前の当地の性格を考える上で興味深い。

続く前期難波宮期の遺構にはSB701・SK701とNW93次MP-5区のSA9321、NW112次下水トレンチのSZ11221があり[大阪市文化財協会1981b]、南側のNW56次調査地でも難波宮期と考えられる柱穴が見つまっている[長山雅一1974b]。これらの柱穴はいずれも一辺1mを越えるものであり、宮域の建物に係わるものであろう。

逆に東側のNW71・01-3次調査地やMP-6区では、谷頭の整地層以外、当該期の遺構は確認されていない。また、本調査地以东は地山レベルが急激に下がるため、難波宮期の遺構はSB701より東にはあまり拡がらないものと思われる。

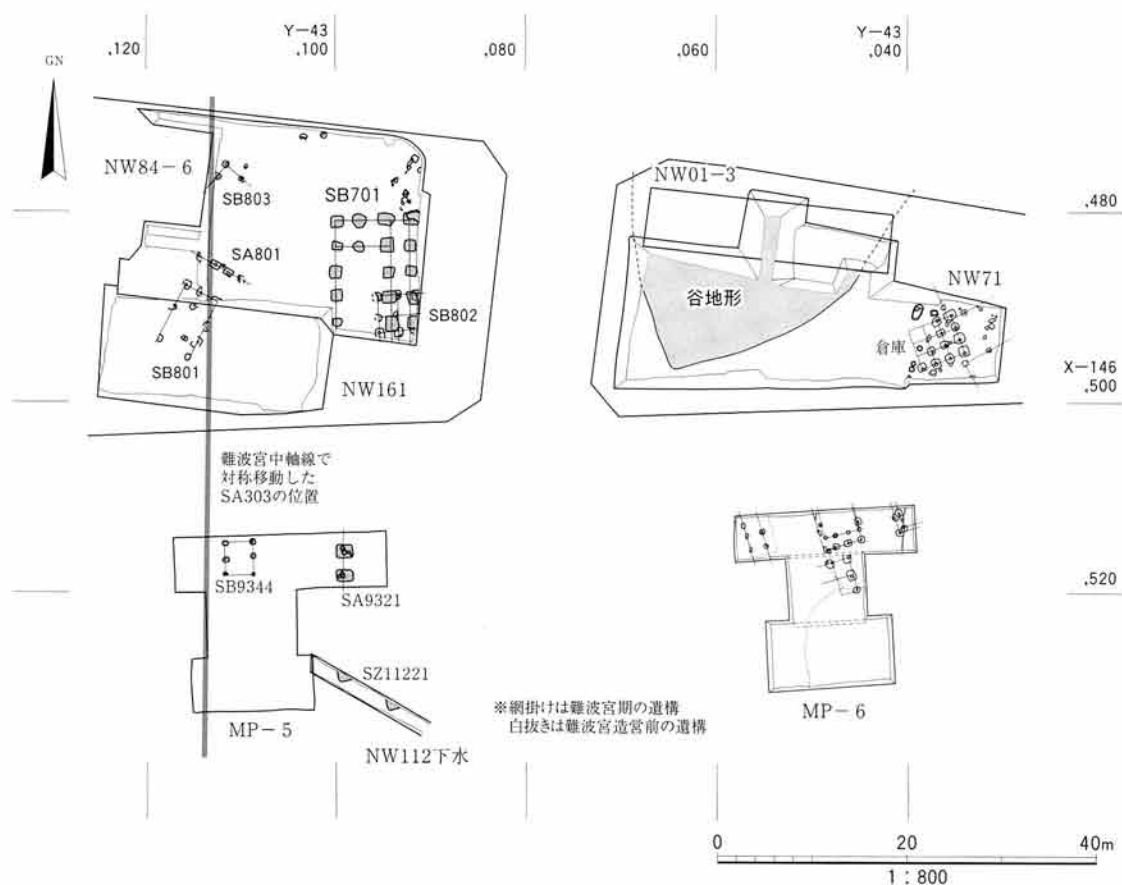


図10 NW84-6次調査地周辺の遺構

図10には、難波宮西方官衙地域で検出された南北方向の柵SA303[大阪市文化財協会1992・2000a]を難波宮中軸線で東に折り返した線を引いてみた。SA303は宮域の西端を区画していると考えられている柵であるが、本節報告のSB701はその対称線よりSB701は13mあまり東にある。このことは前期難波宮の宮域が東西非対称で、東側が広くなるという可能性を示すものであろう[佐藤隆2001]。

(寺井)

註)

(1)SB701についての建築学的な見解については、李陽浩より教示を得た。

第2節 NW80-9次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では教員会館建設に伴うNW80-9次および82-10・37・44次調査を報告する(図11・12)。当地は難波宮東方官衙跡として知られており、すでにいくつかの書籍・論考で取り上げられている。

当地の調査はNW30次で「聖武朝難波宮に属する可能性が高い」建物群が発見されたことに始まる[難波宮址顕彰会1969a]。その後、1971年の緊急調査[長山雅一1972]、NW158-⑦次[大阪市文化財協会1979]の調査があり、東隣の国立衛生試験場敷地内でもNW56次[長山1974b]や150次調査[宮本佐知子1981]が行われている。また、これらの東側の森の宮・勝山線の建設工事に伴ってNW43・47次調査もある[長山1973b・c]。本節対象のものを含むこれらの調査では、難波宮造営前および難波宮期、さらには宮殿廃絶後の遺構が検出された。

NW80-9次調査地はNW30次の東隣に位置する。調査当初から当地の重要性が認識されており、予想どおり難波宮期の掘立柱塀・掘立柱建物などの遺構が検出され、1981年6月6日の現地説明会では多くの見学者にその重要性を訴えた(写真2)。現地説明会終了後も遺構の保存問題が議論され、最終的には文化庁記念物課の河原純之氏(当時)の指導の下、保護砂によって遺構を覆い、遺構を避けて杭を打つ措置を行った。

NW82-10次は前調査の未解決の問題を究明するため、7つのトレンチを設定し、柱穴を確認した。NW82-37次は電柱の移設に伴って教員会館北東の歩道に1箇所トレンチを入れて、GL-3mまで掘削



写真2 NW80-9次現地説明会風景

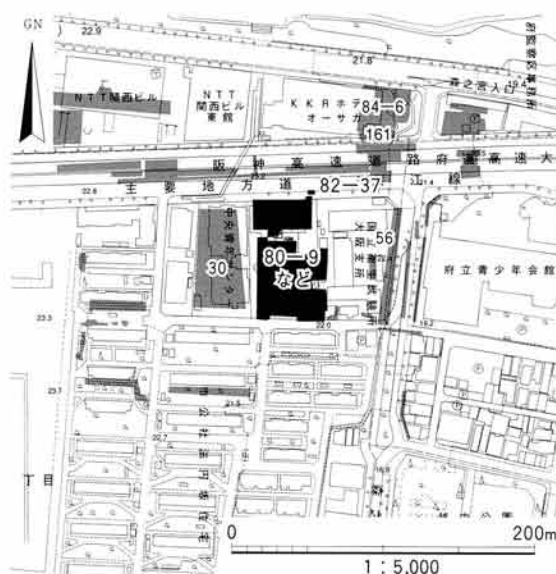


図11 NW80-9次などの調査地位置図

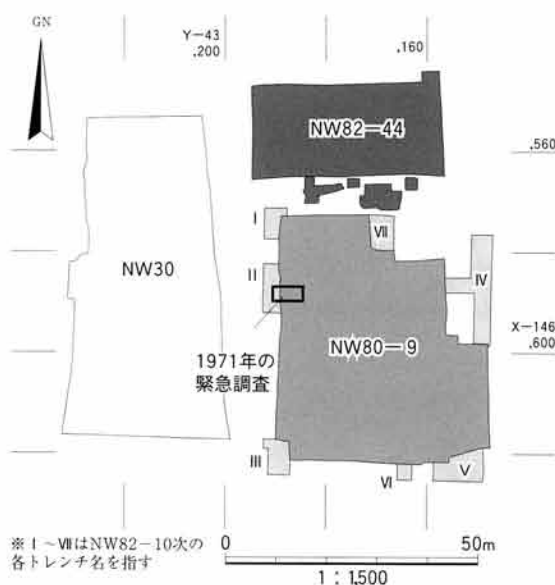


図12 NW80-9次などのトレンチ配置図

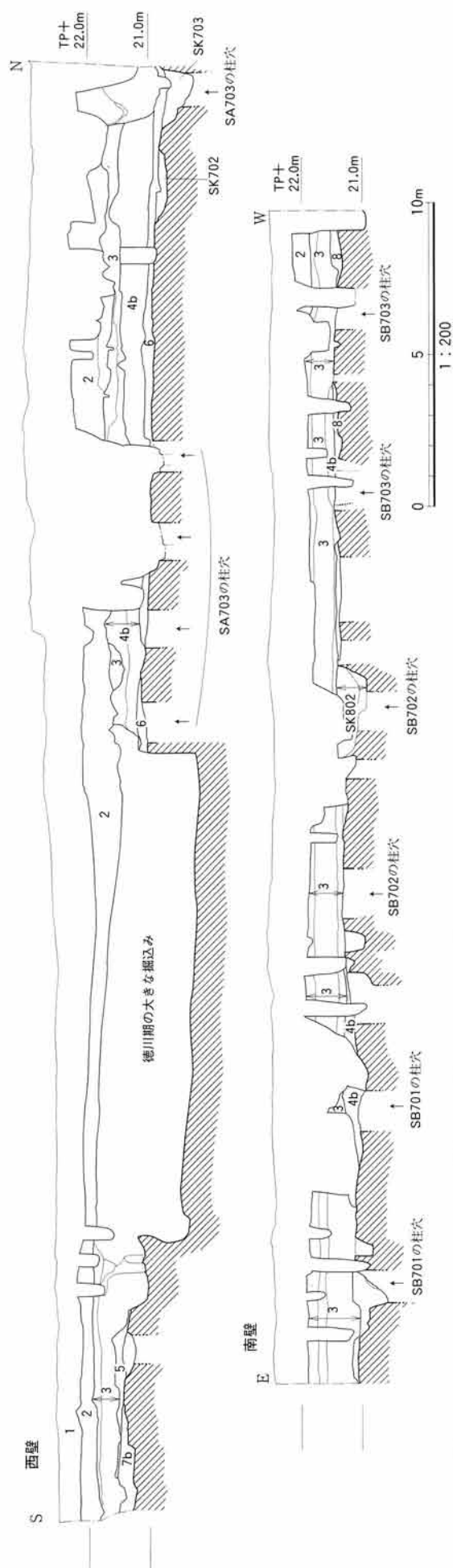


図13 NW80-9次西壁・南壁断面図

表4 新旧遺構名対照表

難波宮造営前		難波宮期		難波宮廃絶後～	
旧	新	旧	新	中世	
SB51	SB801	SB01	SB701	旧	新
SB52	SB802	SB02	SB702	SK81	SK501
SB53	SB803	SB03	SB703	SK82	SK502
SB54	SB804	SA04	SB704	SK83	SK503
SB55	SB805	SA05	SB705	豊臣期	
SB56	SB806	SB06	SB706	旧	新
SB57	SB807	SB04	SB706	SX61	SM401
SB58	SB808	SB05	SB707	SX62	SM402
SB59	SB809	SB07	SB708	SA154	SA401
SB60	SB810	SA01	SA701	SA151	SA402
SB61	SB811	SA02	SA702	SA153	SA403
SB62	SB812	SA03	SA703	SA152	SA404
SB71	SB813	SA07	SA704	SA156	SA405
SB72	SB814	SA06	SA705	SA11	SA406
SK201	SK801	SA08	SA706	SA12	SA407
SK202	SK802	SA09	SA707	SA13	SD401
SK203	SK803	SA10	SD701	SD41	SD402
		SD01	SD702	SD42	SD403
		SD02	SD703	無	SD404
		SD03	SD704	流路-1	SD405
		SD04	SD705	流路-2	SE72
		SD05	SK702	SE71	SE401
		SK101	SK703	SE71	SE402
		SK102	SK701	SK85	SK401
		SK103	SK704		
		SK104	SK705		
		SK105	SK706		
		SK106			

したが、すべて現代盛土であった。NW82-44次はNW80-9次調査地の北側のパル法円坂建設に伴う調査で、難波宮期の柵や掘立柱建物を検出した。当調査後については砂を入れて地盤を上げることによって、遺構を保護した。

なお、上記の調査成果が先行論文で取り上げられる際、旧報告[大阪市文化財協会1981c・1983a]の遺構名がそのまま用いられてきた。本節では旧報告で示された遺構名を表4のように変更した。

2) 調査の結果

i) 層序(図13)

NW80-9次の西壁および南壁で地層の観察を行なった。厚さ100～150cmまでが徳川期の地層で、それ以下に中世・難波宮廃絶後・難波宮・難波宮造営前の各期の地層が薄く残っていた。

第1層：現代盛土および攪乱。

第2層：レンガ・焼土など含む近代の盛土と攪乱。

第3層：淡褐色細粒砂やシルトで構成される徳川期の整地層。

第4b層：淡褐色細粒砂層。調査時は中近世の地層と認識したが、肥前陶磁を含まないことから、豊臣期の地層と考えられる。

第5層：淡褐色細粒砂層で瓦器が含まれる。

第6層：暗褐色粘土層で瓦が多く含まれる。

第7b層：淡褐色粘土層。前期難波宮造営に伴う整地層である。

なお、地山である第9層の上面はTP+20.8~21.5mで南側が高く、北側が低くなる。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前の遺構と遺物(図14、図版2)

掘立柱建物SB801~812、竪穴住居SB813~815、土壌SK801~803、多数の柱穴を検出した。

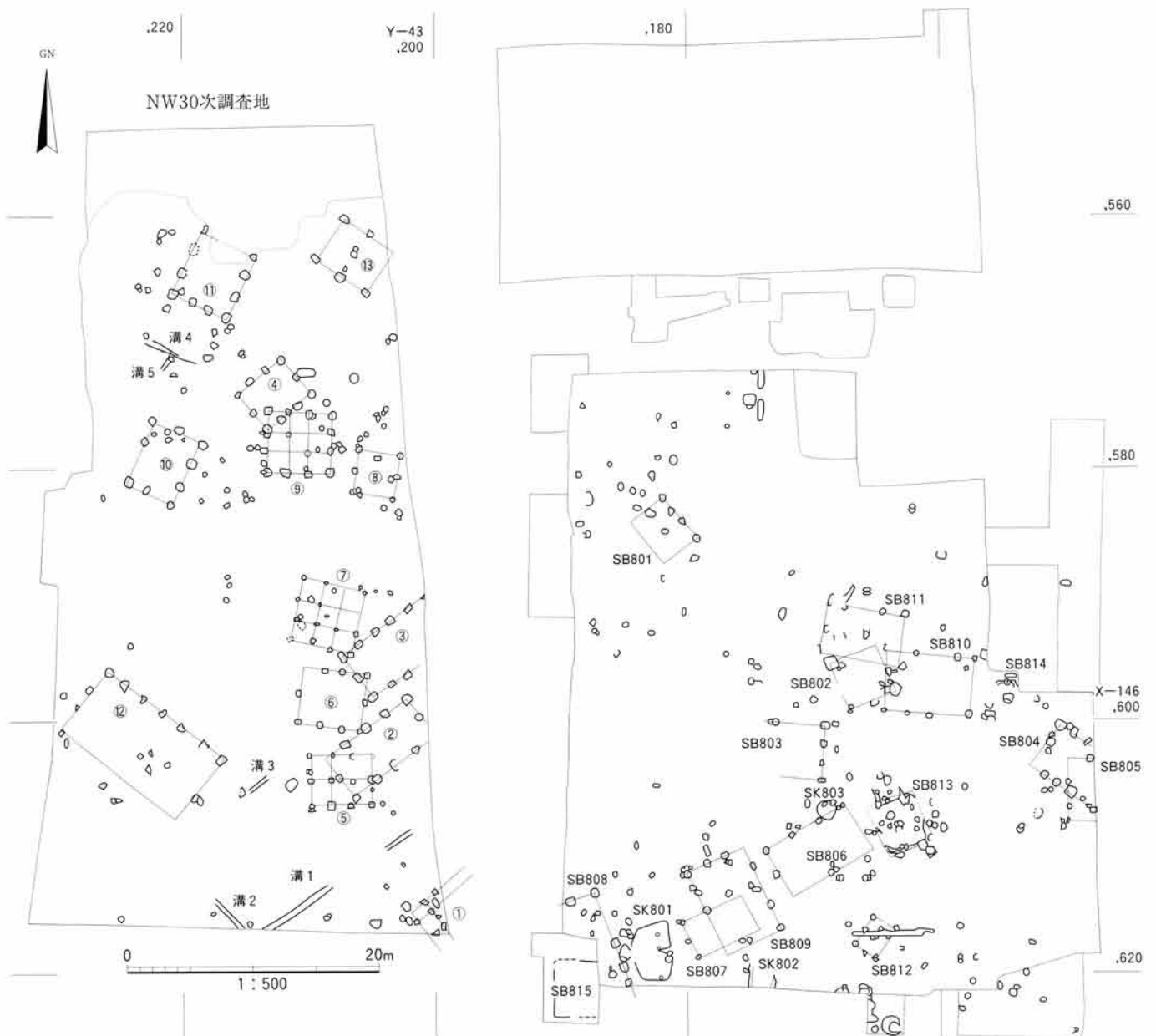


図14 難波宮造営前の遺構配置図

表5 難波宮造営前の掘立柱建物一覧

遺構名	規模(間)	東西柱間(m)	南北柱間(m)	方向
SB801	2×4	1.6	1.0	N39°W
SB802	2×4	2.0	2.0	N22°W
SB803	1以上×3	1.4	1.7	N84°W
SB804	2×4以上	1.5	2.0	N53°W
SB805	1以上×3	1.5	1.7	ほぼ正方位
SB806	2×3	2.1	2.3	N61°E
SB807	2×2	2.4	1.6	N67°E
SB808	1以上×4以上	1.9	1.9	N20°W
SB809	3×4	1.5	1.7	N24°W
SB810	3×4	1.6	1.4	N84°W
SB811	2×4	1.5	2.1	N79°W
SB812	2×2	1.0	1.4	N33°E

SB801～812 掘立柱建物については、調査中に認識することができた12棟を表5にまとめた。すべて側柱建物であり、柱穴の掘形は一辺0.5～0.6mの方形で、難波宮期に位置づけられるものより小さい。時期を決定できるような遺物は出土していないが、おそらく6～7世紀のものと思われる。

なお、本節報告の調査地および西接するNW30次調査地[難波宮址顕彰会1969a]では多くの掘立柱建物群が検出されている(図14、註1)。これらの建物を大まかではあるが、表6のように方位によって分けてみると、

表6 方位による掘立柱建物のまとめ

群	方位	NW30次	本節
I	N35～40°Wもしくはそれに直交	建物12・13号	SB801・804
II	N20～25°Wもしくはそれに直交	溝1～3・建物1～4号	SB802・806～809・813・814
III	ほぼ正南北もしくは正東西	建物5・9	SB803・805・810・811
IV	N5～10°Eもしくはそれに直交	建物6～8	SB811
V	N20～25°Eもしくはそれに直交	建物10・11	

Ⅱ群としたものがもっとも多い。Ⅱ群に属する1号建物は総柱建物か庇付建物になると思われ、2・3号建物は梁間が2間で桁行が4間および5間以上の側柱建物である。また、

2号建物が6号建物の柱穴を切り、4号建物が9号建物の柱穴を切っていることから、方向の同じものが同時存在したと仮定した場合、Ⅱ群がもっとも新しい一群になる可能性がある。また、2・3号のような梁間が2間で桁行が長い側柱建物は桑津遺跡[高橋工1991、大阪市文化財協会1998a]や瓜破遺跡[南秀雄1987、大阪市文化財協会2000b]の7世紀前～中葉の建物に例があり、これらの建物も難波宮が造営される直前の建物群であったことが想定される。

SB813(図15、図版2中) 東西3.8m、南北4.2mの竪穴住居である。幅0.2～0.3m、深さ0.2～0.3mの周壁溝が巡り、壁高は0.1mである。柱穴は3基検出され、本来は4本柱の構造と思われる。北東隅に粘土で構築された幅0.6mの竈が付設され、煙道は北側に1.5m延びる。なお、住居跡の上層から須恵器杯H28・同蓋27・高杯29などが出土したことから(図17)、調査時は7世紀初頭の竪穴住居と考えられたが、本調査地で5世紀後半の遺構・遺物が多く見つかったこと、さらに現NHK・大阪歴史博物館の敷地内でも5世紀末～6世紀初頭の竈付の竪穴住居が検出されていること[大阪市文化財協会1992]から、SB813は5世紀後半の竪穴住居で、27～29は竪穴住居廃絶後の窪みに入ったものと考えられる。

SB814(図16、図版2下) 粘土で構築された幅0.9mの竈で、竪穴住居の輪郭は検出できなかった。竈の中から土師器壺30が出土した。30は口縁部が直立気味に伸び、頸部にヨコハケが施される。

SB815(図版6右上) NW82-10次の第Ⅲトレンチで検出した竪穴住居で、南北4.5m、東西3.0m以上ある。

SK801 調査地の南東隅で検出した。平面は東西3.0m、南北4.3mの隅丸方形で、深さは0.08mである。[京嶋寛1987]のSK501に相当し、小型の竪穴住居の可能性もある。土師器・須恵器・ガラス

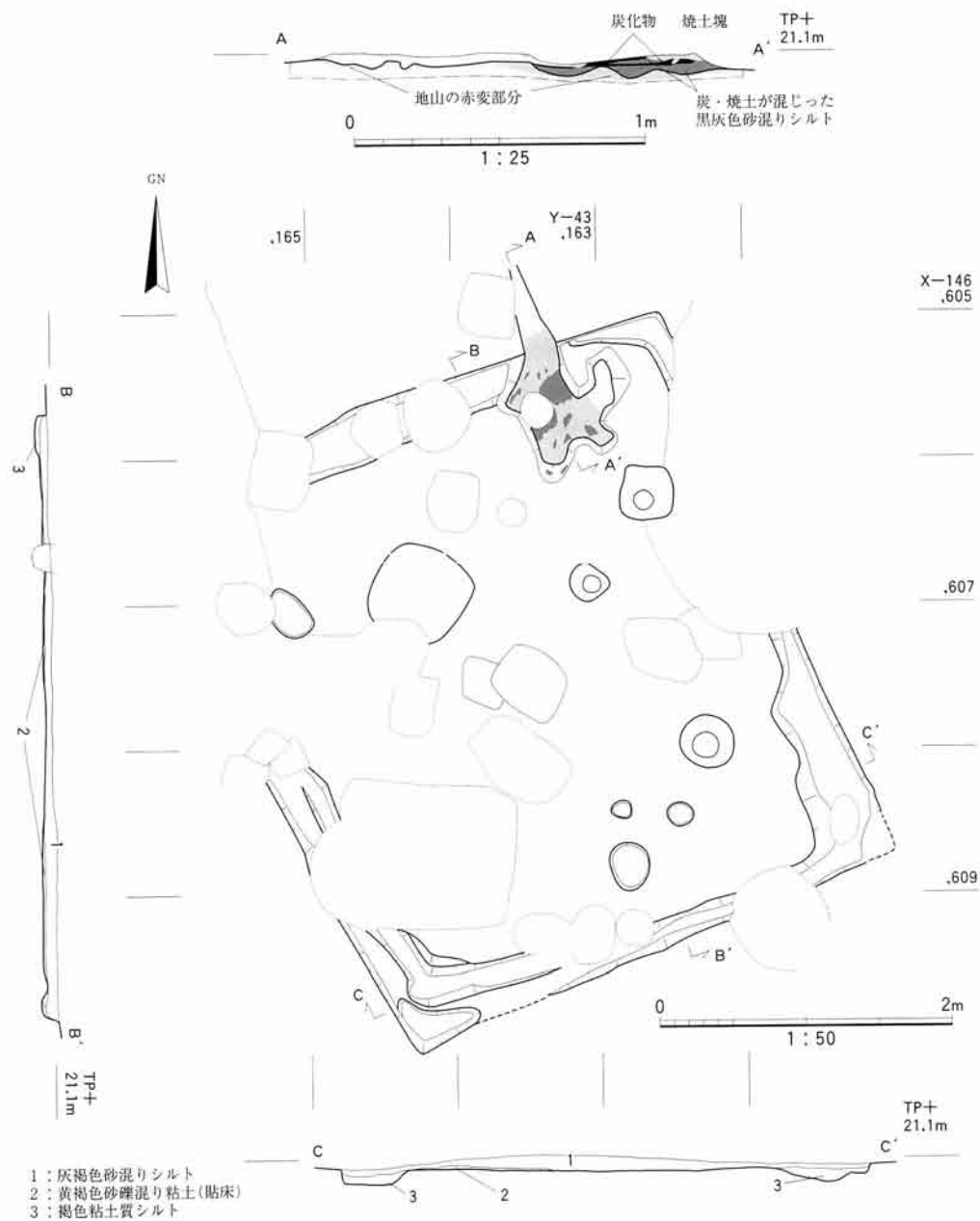


図15 SB813実測図

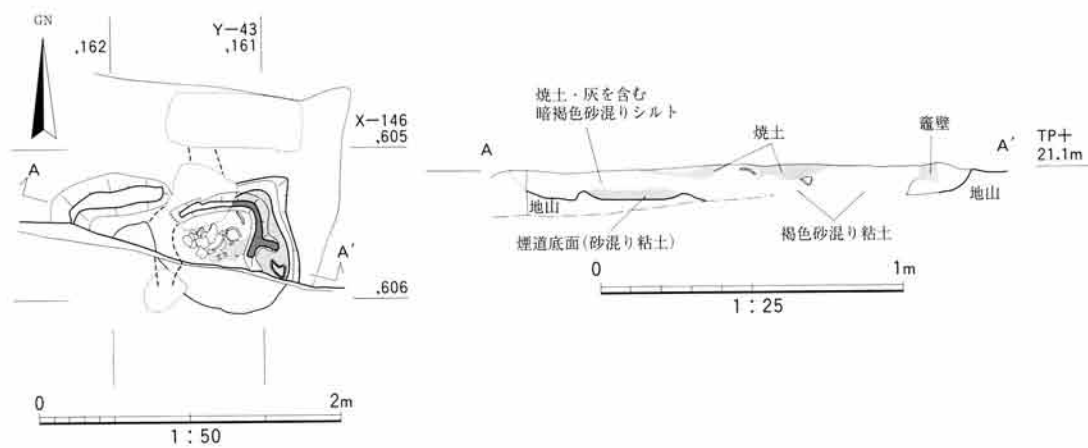


図16 SB814竈実測図

小玉の鋳型が出土した(図17)。須恵器の年代観から5世紀後半～末に位置づけられる。

土師器には高杯1、甕2・3、甑4がある。1は器高11.2cm、口径14.0cm、脚裾径9.0cmある。杯部は弱く内湾し、碗形を呈する。脚柱部内面にはシボリメが残り、裾部はナデで仕上げられる。2・4は口縁端部に面をもち、上を向いている。

須恵器には杯H9～12、同蓋5～8、高杯14・15、同蓋13、器台16・17、甕18、格子タタキが施された破片19が出土した。杯蓋は口径が11.8～13.0cmあり、天井部は平坦な7以外は丸みがある。杯身は口径が10.4～11.2cmあり、いずれも口縁端部に面をもつ。これらの須恵器はTK208もしくはTK23型式に該当する。19は陶質土器の可能性がある。

20は発掘調査当時は用途不明としていたが、その後、奈良県布留遺跡[山内紀嗣1991]や上之宮遺

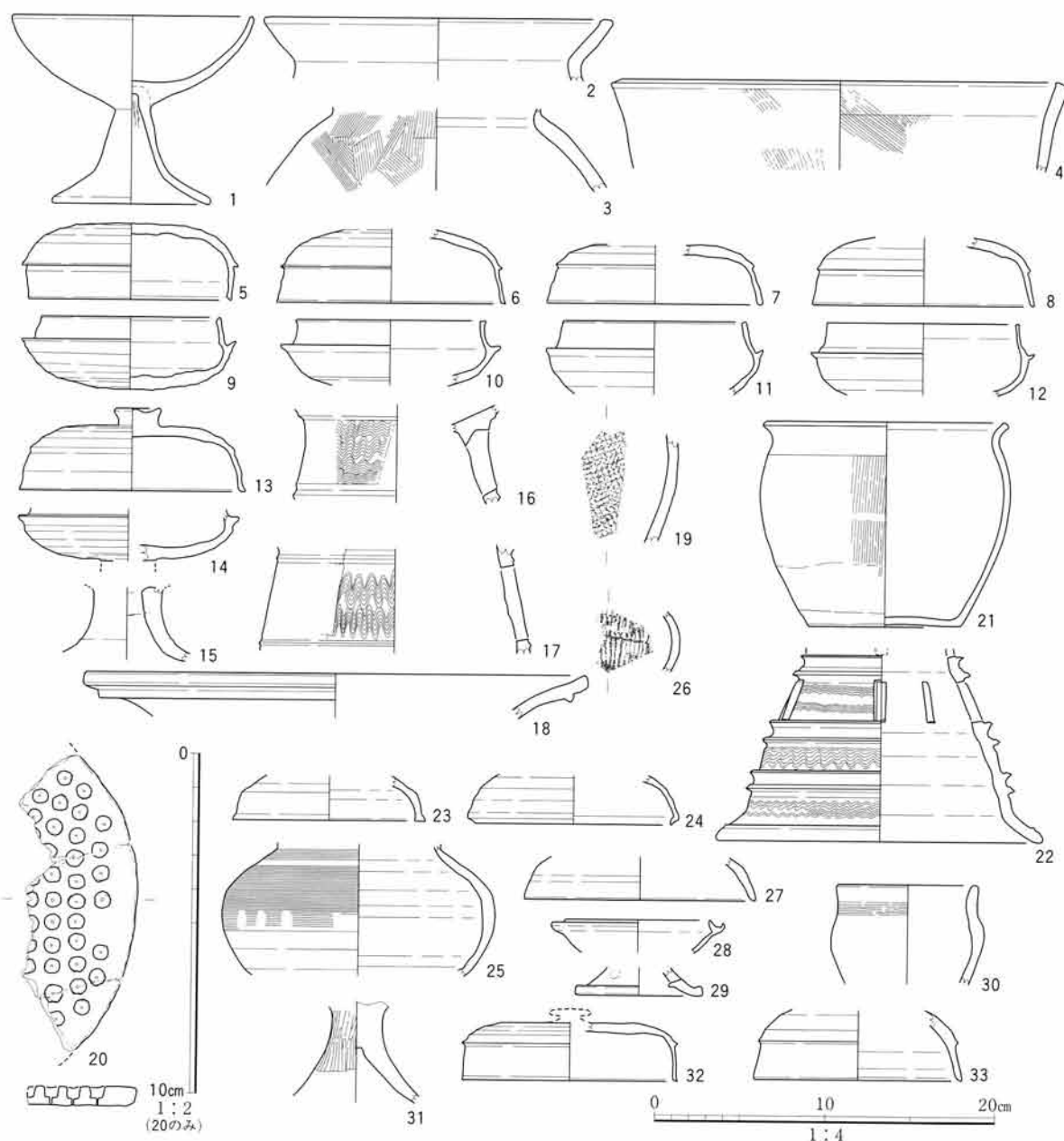


図17 古墳時代の遺物

SK801(1~20)、SK802(21~22)、SK803(23~26)、SB813上層(27~29)、SB814(30)、第7b層(31~33)

跡[清水眞一1992]から出土した同様の資料にガラスが付着していたことから、ガラス玉の鋳型であることが判明したものである(原色図版2上)。長さ87mm、幅32mm、厚さ5~6mmの板状をなす破片で、遺存する外縁部は正円形の弧をなし、形状を円形と考えれば直径128mmとなる。片面に直径4.5mm、深さ3.5mmの型穴を棒で突いてつくり、その底中央には直径0.5~1.0mmの針で突いたような小孔があり、裏面にまで達している。型穴は1.5~3.0mm間隔で規則正しく並んでおり、現存する部分で35個確認できる。全体を復元すると約200個の小玉ができたものと思われる。型穴にガラスの付着は見られない。

表面は風化して荒れており、調整痕はほとんど見えないが、裏面には調整痕らしき幅14mmの帯状の凹みがかすかに認められる。また、外縁部は幅3~4mmの面をなすようにナデ調整が施されたようである。酸化焰焼成で明灰褐色に焼き上がった軟質で、図の上端の裏面には灰色の黒斑状の部分がある。胎土は0.2~1.0mmの砂粒を少量含むが緻密なものである。

SK802(図版2上) 幅約2m、深さ0.15mの溝状の土壇で、断面は逆台形状を呈する。[京嶋寛1987]でSK501と紹介されたものに相当する。韓式系の軟質平底鉢21、須恵器器台22が出土した。21は縦方向の平行タタキが施される。22は貼付けによる鋭く仕上げられた突帯が2条1組で3段あり、その間は細かい波状文が施される。下から3段目の区画には長方形スカシが8方向に施されている。TK216型式に該当すると思われる。

SK803 直径1.4m前後、深さ0.1mの円形の土壇である。須恵器蓋23・24、壺25、壺の体部26が出土した。23・24は口縁端部が内外に拡がり、杯蓋ではなく、壺の蓋と考えられる。26は平行条線と直交する1条の直線で構成されるタタキメが残る。このタタキメは韓国全羅南道でしばしば見られ、陶質土器の可能性はある。

なお、第7b層からは瓦質焼成の高杯31、須恵器杯H蓋32・33が出土した(図17)。31は縦方向のミガキが施されている。脚の裾に近い部分は剥離して観察できない。

b. 難波宮期の遺構と遺物

掘立柱建物・回廊・掘立柱塀・溝・土壇を検出した(図18、原色図版1)。

①掘立柱建物

SB701(図19、図版4右下) 桁行4間(11.6m)以上、梁間2間(6.0m)で、妻側の中柱が攪乱で破壊されている。柱痕跡が残っているところで1間の平均を取ると2.93mある。柱痕跡は直径0.32mあり、すべて抜取られていた。

SB702(図20、図版4右上) 桁行5間(14.6m)以上、梁間2間(5.9m)の南北に長い側柱建物である。1間の寸法は桁行で2.93m、梁間で2.96mの等間隔であった。柱痕跡は直径0.33mあり、すべて抜き取られていた。北東と北西の柱穴には柱痕跡の直径が0.1mの小柱穴が付随していた。なお、東西両側にあるSB701とSB703とは北側の柱列が揃い、建物間隔がいずれも7.0mである。

SB702の柱穴からは須恵器杯H45・46・52・53、同蓋40・42、平瓶54、円筒埴輪38が出土した(図27)。この内、42・54は柱の抜き取り穴から出土した。一番新しい特徴をもつ53は口径8.2cmで、口縁部が短く伸びることから、難波Ⅲ中段階に位置づけられる。

SB703(図21、図版4左上) 桁行6間(5間で14.5m)以上、梁間2間(5.9m)の南北に長い側柱建

物である。柱痕跡が残っているところで1間の平均を取ると、桁行2.92m、梁間2.94mの等間隔であった。北東の柱穴には柱痕跡の直径が0.1mの小柱穴が付随していた。

SB704(図22) 当遺構は旧報告[大阪市文化財協会1981c]では北側の柱列をSA04、南側をSA05と称し、前者をA期(前期難波宮期)、後者をB期(後期難波宮期)としていたが、両柱列の柱位置が揃っていることから一連の掘立柱建物と考えた。北側では柱穴が7基検出されており、さらに東西両側では多少攪乱されているものの、柱穴が検出されなかったため、桁行は6間(17.6m)で、1間の平均は2.93mである。梁間は2間(5.9m)であったと思われる。東側の中柱の位置には豊臣期の堀SM402が、西側は徳川期の掘込みがあるため、柱穴が壊されたのであろう。柱穴から須恵器杯H50が出土した。

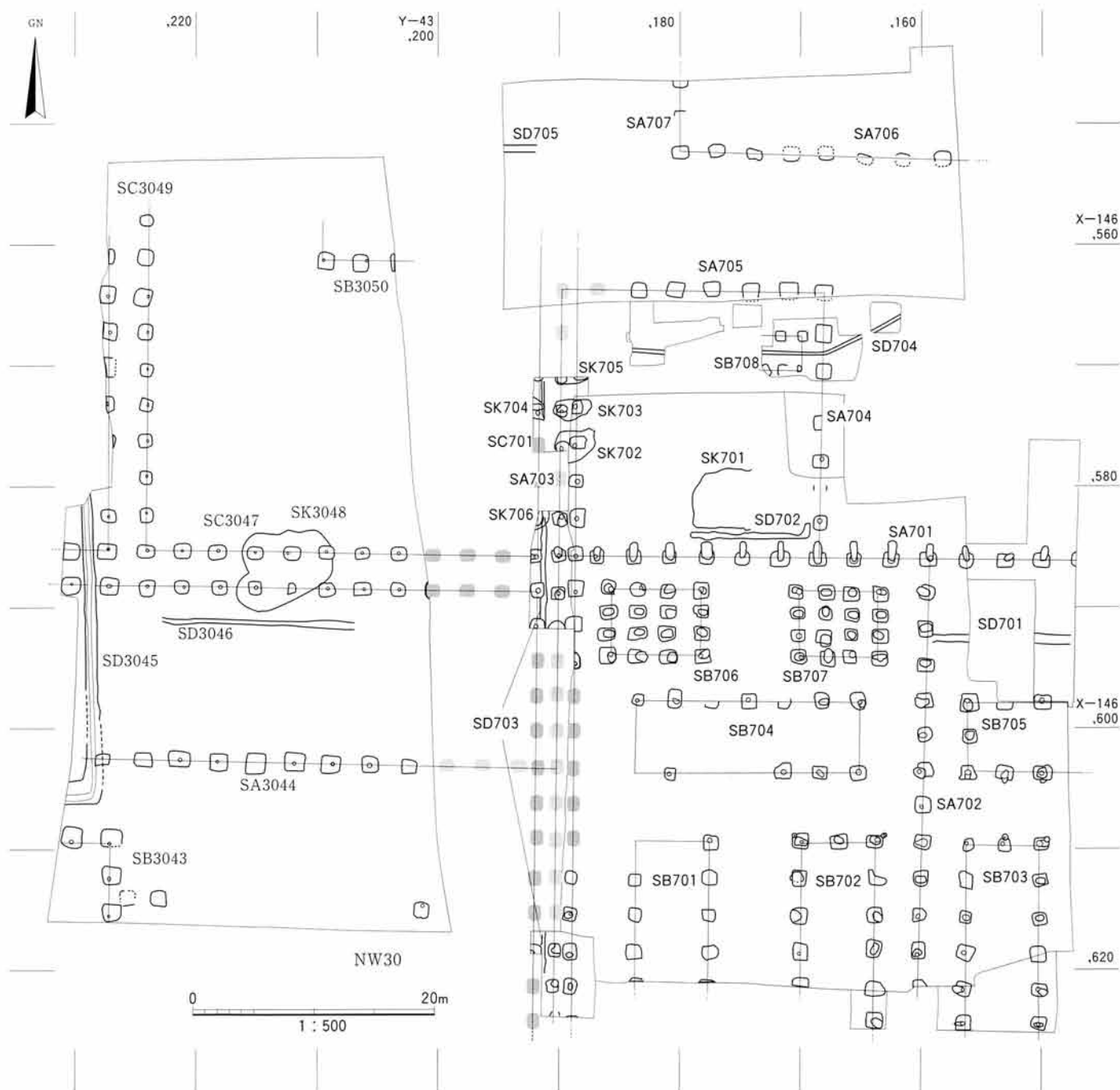


図18 難波宮期の遺構配置図

SB705(図23) SA702の東側に位置する東西に長い側柱建物で、東側の調査区外に伸びる。桁行3間(2間分で5.9m)以上、梁間2間(5.9m)で、柱間の1間の平均は桁行が2.92m、梁間が2.93mである。柱痕跡の直径は0.35~0.45mで、すべて抜き取られていた。また、側柱の掘形を切って、小柱穴が掘られていた。

小柱穴から土師器杯34・高杯37が出土した(写真3、図27)。34は器表面が磨滅しているため、調整を観察することはできないが、器形から判断して7世紀中葉~後葉のものと考えられている[佐藤2001]。37は中空の脚部で、古墳時代のものである。

SB706(図24、図版3) 桁行3間(7.1m)、梁間2間(5.3m)の総柱建物で、1間の平均は梁間1.80m、桁行2.37mである。柱痕跡は直径約0.4mで、すべての柱穴に抜き取り穴が確認された。柱穴の掘形から土師器杯C35が、抜き取り穴からは須恵器杯H48・同蓋43が出土した(図27)。35は口縁端部は残っていないが、ヨコナデが見られることから、端部に近い部分まで残っていると判断することがで

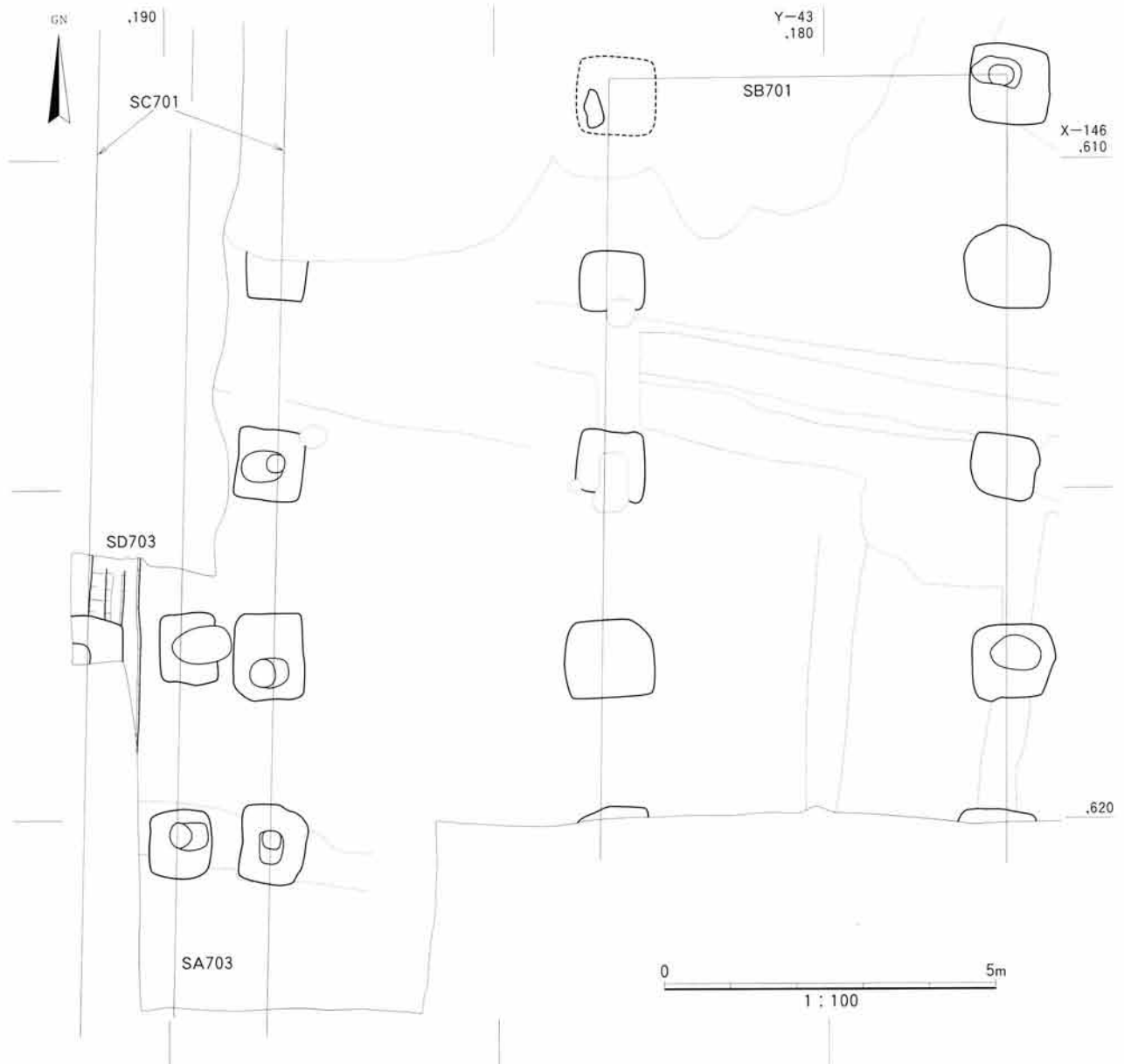


図19 SB701および周辺遺構平面図



図20 SB702および周辺遺構平面図

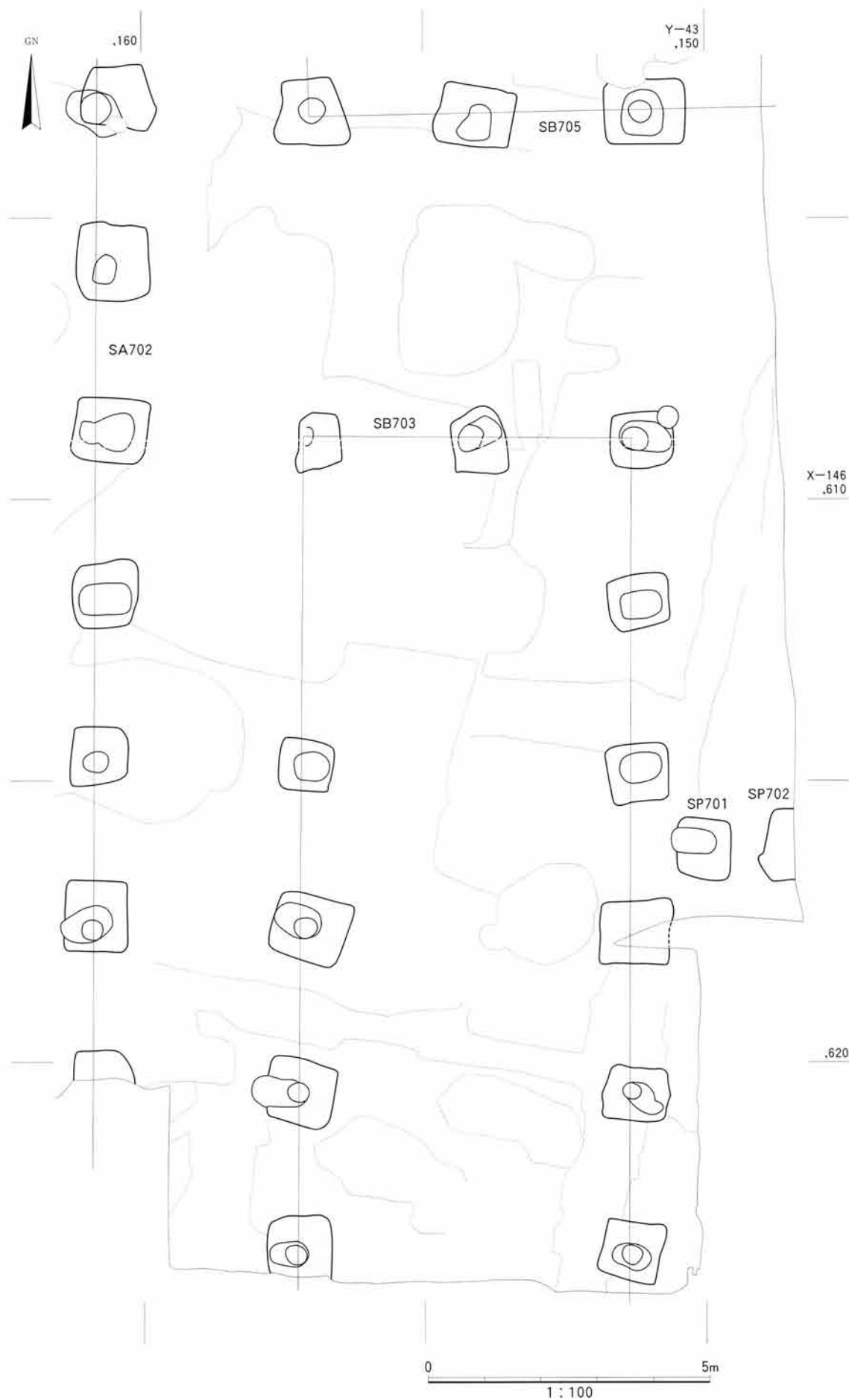


図21 SB703および周辺遺構平面図

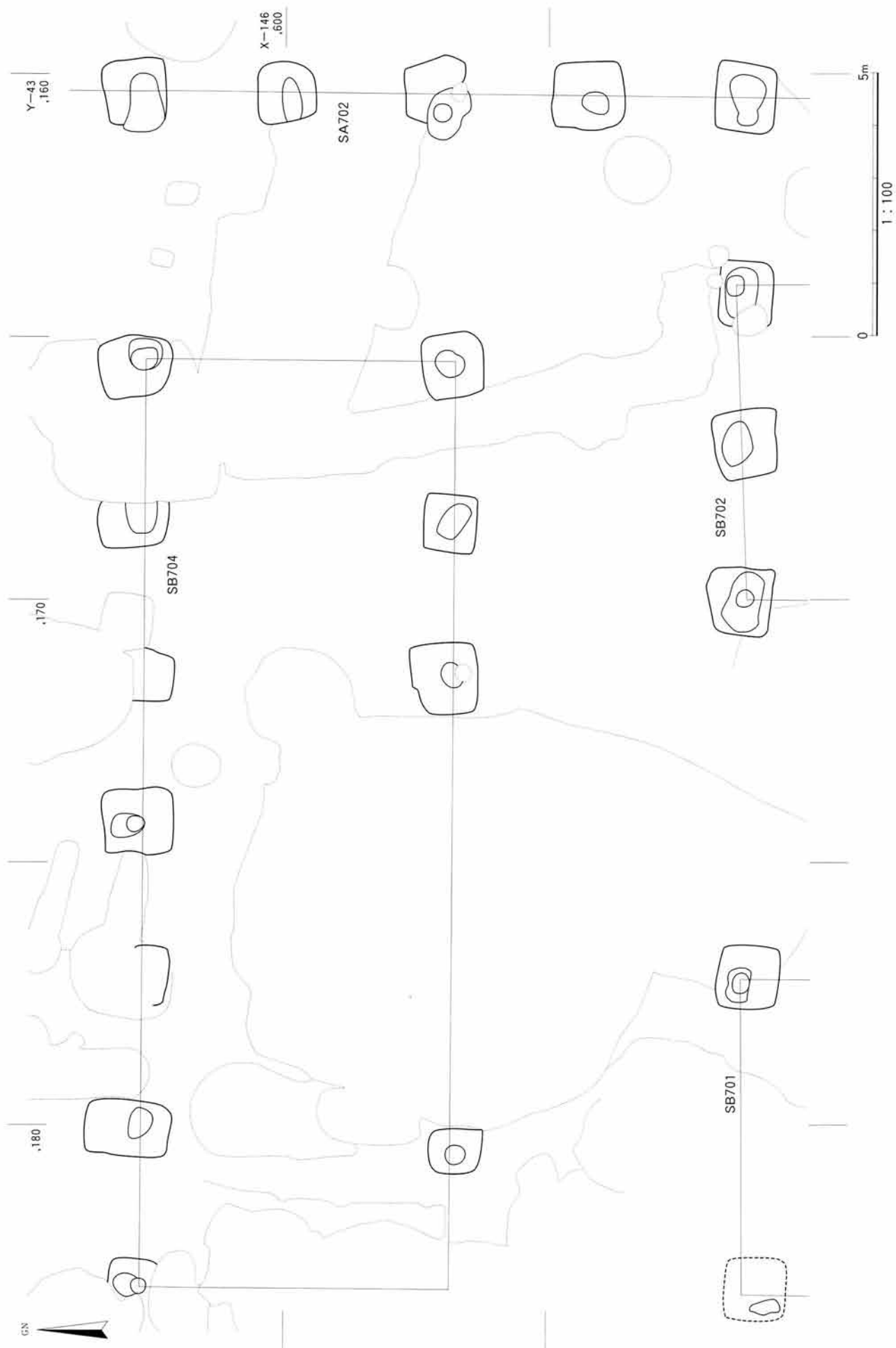


図22 SB704および周辺遺構平面図

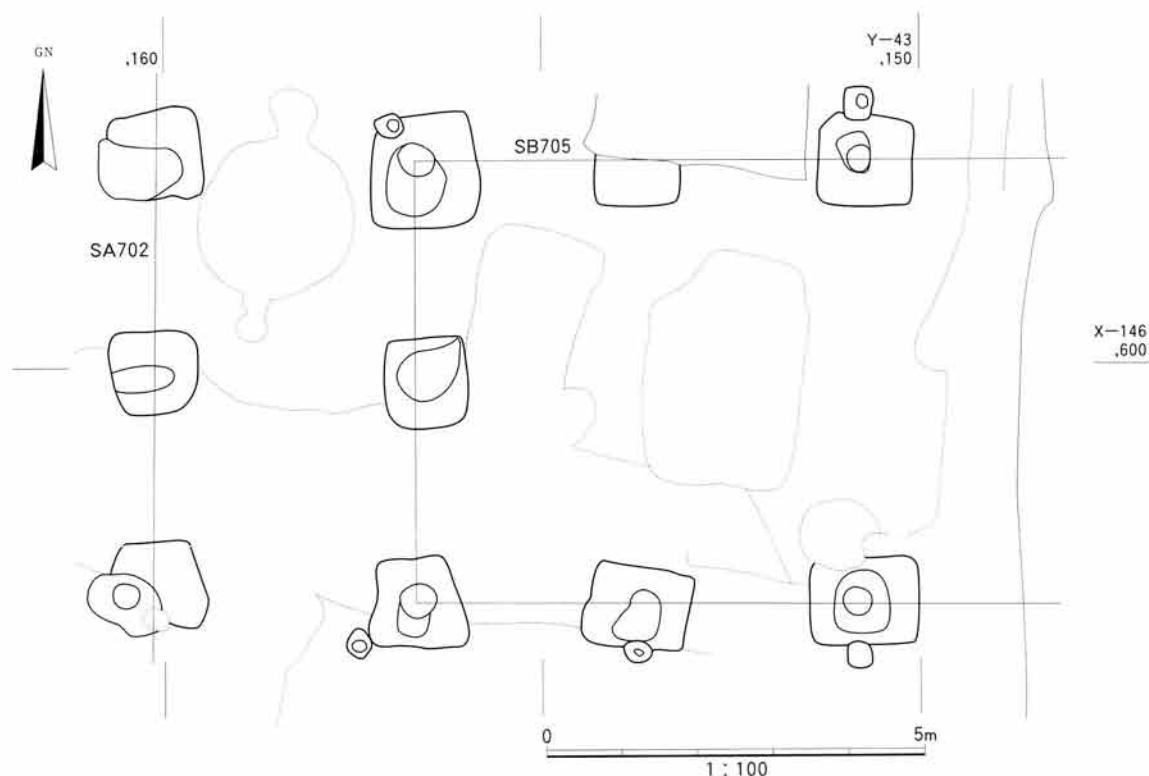


図23 SB705および周辺遺構平面図

き、径高指数が30程度と推測できる。43・48はともに細片で口径復元は難しいが、以上3点は難波Ⅲ中段階に比定できる。

SB707(図25、図版3) 桁行3間(6.3m)、梁間2間(5.3m)の総柱建物で、SB706より1m程度東西に短く、1間の平均は梁間1.79m、桁行2.09mである。柱痕跡の直径は0.4m前後あり、すべての柱穴に抜き取り穴が伴う。

SB708(図26) NW82-44次調査で検出された、桁行2間(3.1m)以上、梁間1間(2.7m)の掘立柱建物である。柱穴は一辺0.7~0.8mの方形で、柱痕跡は直径0.2mある。南側の柱列には北向きに柱の抜き取り穴がある。方向はSA704・705と同じであるが、他の掘立柱と比べて掘形が小さく、プランも異なる。北西の柱穴の掘形埋土から須恵器杯G蓋44が出土した(図27)。口径9.4cm、かえり径7.4cmと小振りで、難波Ⅲ中~新段階のものである。

②単廊・堀

SC701(図18・19・24、図版6左上・右上) 調査地西端を南北に延びる2条の掘立柱列で構成される単廊である。柱間1間の寸法は2.6~3.2mとばらつきが目立ち、平均すると2.93mになる。また、東西の柱列の間隔は3.0mである。この両側の柱列の間にSA701がわずかに方向を違って延びるが、柱穴の切合いは見られない。一方、SA701と平行に延びる溝SD703はSC701の西側の柱列に切られて

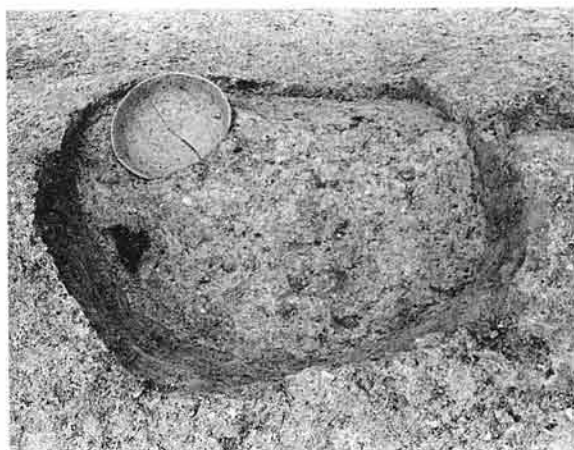


写真3 SB705の小柱穴から出た土師器杯(34)

いる。西側の柱穴からは飛鳥時代の土師器高杯36・須恵器杯H47・同蓋41が出土した。

なお、NW30次で検出されたSC3046はSC701に西側で接続する。柱間の1間の平均寸法は2.60～2.92mとばらつきが目立ち、平均値は2.82mとなる。

SA701(図18・24・25) 調査地のほぼ中央で東西方向に14間以上延びる。1間の平均が2.94mあり、総延長は41m以上になる。西側はSA703に接続し、東側は調査区外に延びる。柱痕跡は0.3m前後で、柱穴は東から3番目のものが北東方向に抜かれている以外は、すべて北方向に抜かれていた。抜き穴から埴55が出土した(図27)。厚さは5.4cmある。

SA702(図18・20～23・25、図版4左下) SA701の東から5番目の柱穴から南に12間(34.5m)以上延びる。柱穴はほぼ等間隔で、1間の平均が2.93mあり、柱痕跡の直径は0.3mある。柱はすべて西方向に抜かれていた。抜き穴から須恵器杯H49・51、同蓋39が出土した(図27)。39はTK208型式で、古墳時代中期の遺構・地層から遊離したものと思われる。49は口径の復元が困難であるが、51は難波Ⅲ中段階かそれ以前のものであろう。

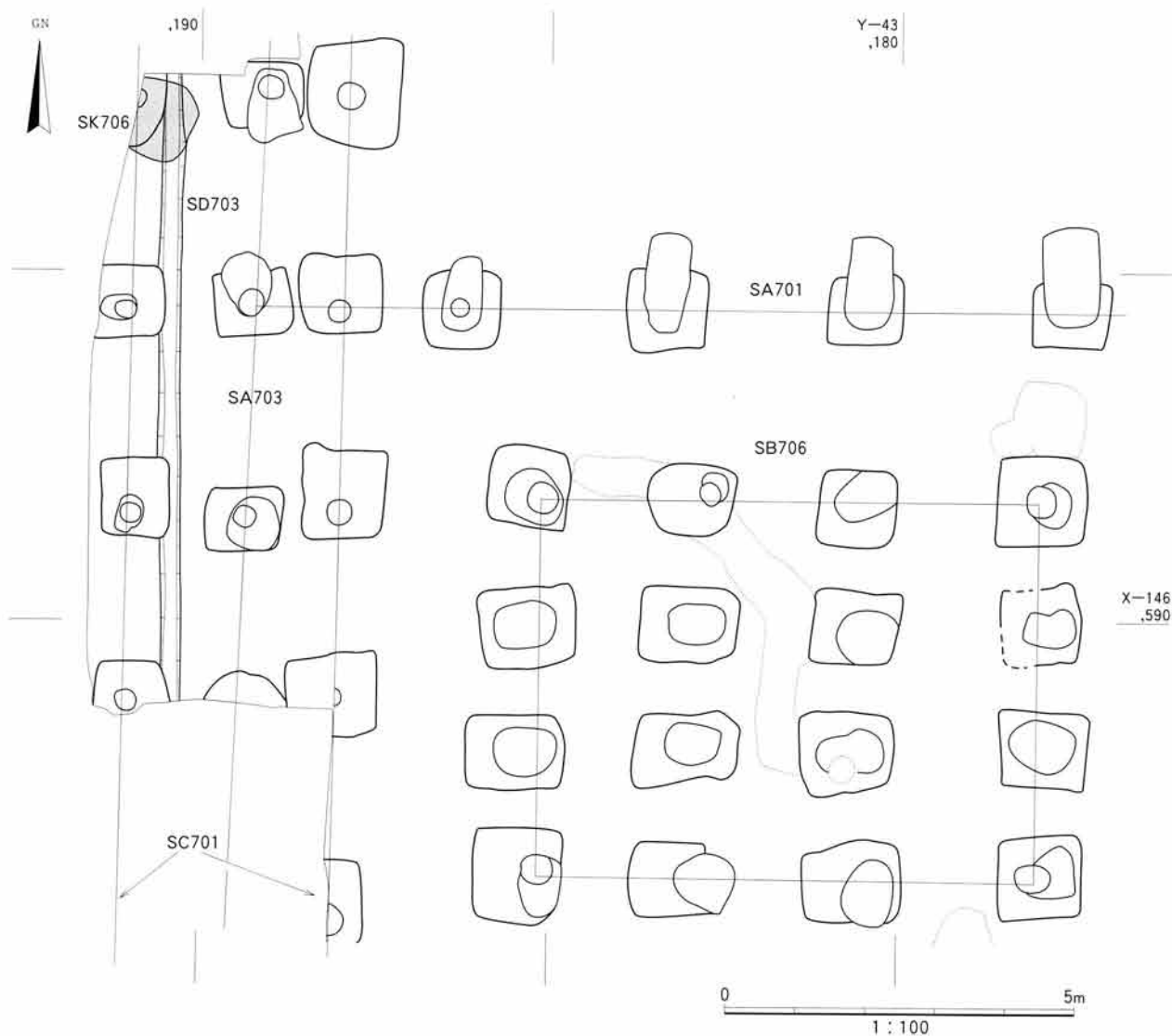


図24 SB706および周辺遺構平面図

SA703(図18・19・24、図版6左上・右上) NW82-10次調査で検出され、南北方向に延びる。総延長は59m以上あり、柱穴はほぼ等間隔である。掘形から西に0.4mのところには平行して延びる溝SD703がある。柱の抜き取り穴から出土した平瓦56は凹面に布目が残し、凸面はナデで仕上げられる。破面については表面が磨滅して調整不明である。橙褐色を呈し、難波宮造営前の瓦と思われる。

SA704(図18・26) 調査地の北部で検出され、南北方向に7間(22.0m)延びる。柱穴はほぼ等間隔である。SA701の東から8番目の柱穴から北に7間(22.0m)延び、西に延びるSA705に繋がる。柱痕跡は直径0.2m程度で、柱穴には抜き取り穴が伴う。

SA705(図18・26、図版6左下) NW82-44次調査地で検出された。SA704の北端から西に折れ曲がり、5間分(14.7m)を検出した。柱穴はほぼ等間隔である。それより西側は建物の地下室によって破壊されていた。一番西側で検出された柱穴からちょうど2間分のところがSA703の北への延長線上にあることから、西側でSA703に連結したと思われる。

SA706(図18、図版6右下) NW82-44次調査地で検出された。一部豊臣期の溝SD405に壊されているが、西から7間(21.4m)以上ある。破壊部分より西側は1間3.15mであるが、それより東側は3.30mで、攪乱された4間の平均は2.89mになる。柱痕跡は直径0.3m程度で、抜き取り穴は検出されなかった。

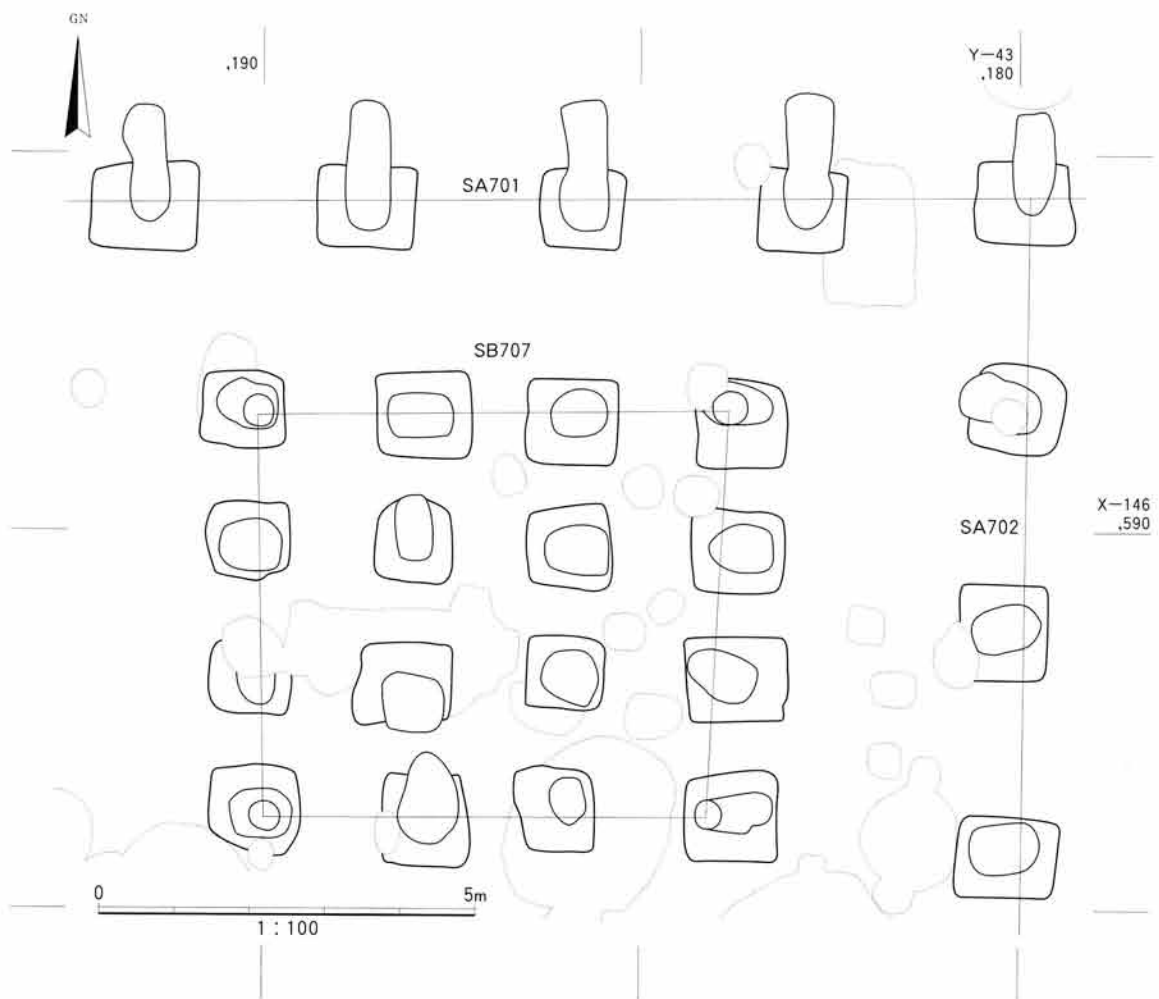


図25 SB707および周辺遺構平面図

SA707(図18) SA706の西端から北に折れる。2間分を検出したが、それ以北は調査地外である。南から2番目の柱穴が豊臣後期の溝SD404によって壊され、一番北端の柱穴も柱痕跡が検出されなかった。1間の寸法はわからなかった。

③溝

SD701(図18) 調査地中央の東側で検出された東西方向に延びる溝である。幅が0.3～0.5m、深さが0.05mあり、断面はU字形である。東側は調査地外へ続き、西側はSA702の手前で消えてなくなる。この溝からは後期難波宮期の瓦が出土したとされているが、出土状況は不明である。

SD702(図18) SA701とSA704に沿ってL字状に延びる溝である。幅0.3～0.4m、深さ0.05mあり、埋土は玉石を含む暗褐色粘土である。SA701からは1.6m、SA704からは1.1mの距離がある。土師器蓋57と甕58が出土した(図27)。57はかえり径が10.2cm、口径が13.5cmで、かえりがまっすぐ伸び、つまみは欠損している。回転ナデが施されるなど、須恵器と共通する技法で作られていて、飛鳥時代かそれ以前の須恵器の壺蓋に共通する特徴を有する。58は器面の磨滅が激しいが、わずかにハケメを観察することができる。

SD703(図18・24、図版6左上・右上) 調査地西端で検出した南北方向に延びる溝である。上端の幅が0.7m、下端の幅が0.3m、深さが0.4～0.5mの逆台形状の断面をもち、部分的には2段掘りになっている。埋土は灰黄色砂質シルトで、柱掘形内の埋土と非常に類似する。SA703の約1m西にあり、溝の西肩はSC701の西側の柱穴に切られていた。

SD704(図18・26) NW82-44次調査地で検出された溝で、西側ではSA705とほぼ平行して延び、SA704と交わる付近でやや北に振る。上端の幅が0.4～0.5m、下端の幅が0.2～0.3m、深さ0.3～0.4mあり、断面は逆台形状である。埋土は灰黄色シルト質粗～中粒砂で固く締まり、水流の痕跡はない。

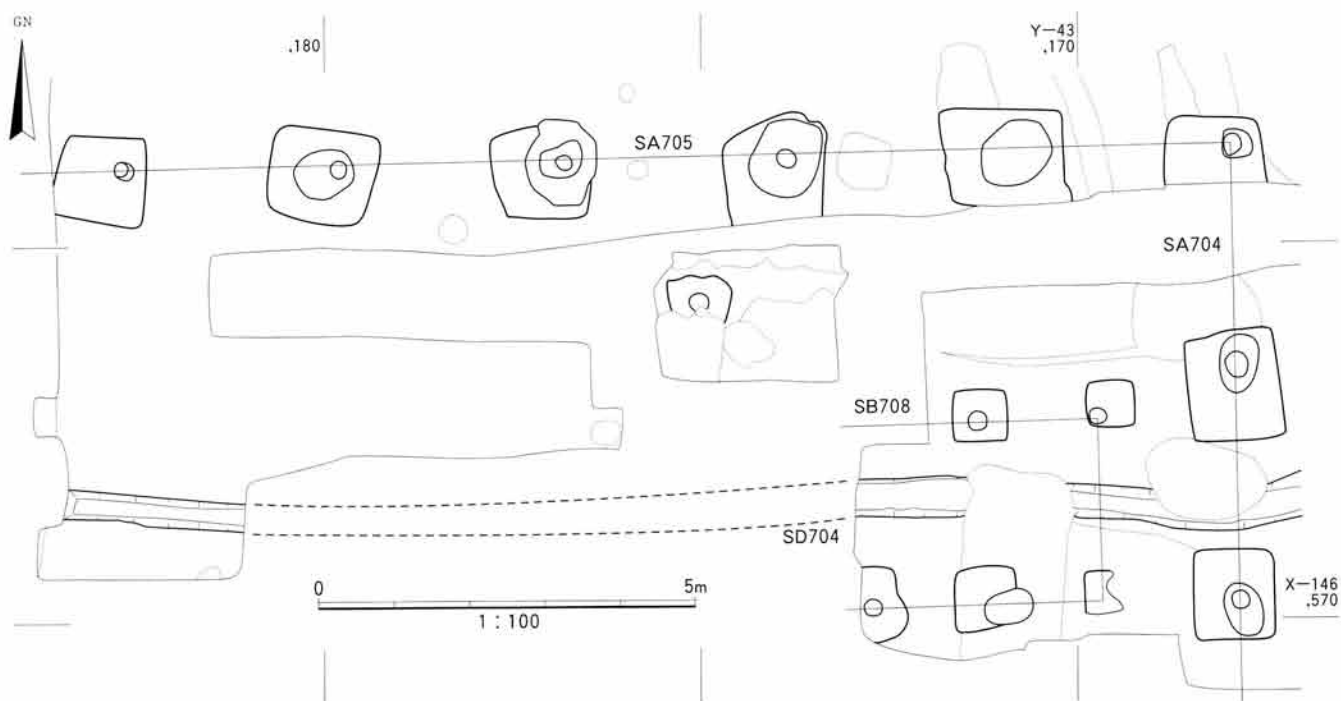


図26 SB708および周辺遺構平面図

SD705(図18) NW82-44次調査地の西端で検出した東西方向に延びる溝である。上端幅0.6~0.7m、下端幅0.5m、深さ0.2mあり、黄褐色砂質粘土の埋土の上方からは後期難波宮期の瓦が出土した。

④土坑

SK701(図18) 調査地の北西で、位置的にはSD702の内側にある。東西4.8m以上、南北5.0m、深さ0.5mあり、埋土は暗褐色である。出土遺物には須恵器杯H59がある(図27)。口径が12.6cmあり、難波Ⅲ古段階に属すると思われる。調査時は前期難波宮期の遺構と認識されたのでここで報告したが、それよりも古くなる可能性も残す。このほか飛鳥時代の須恵器・土師器・凝灰岩片が出土した。

SK702~706(図24・28) 調査地の西端に位置する5基の土坑で、SA703やSC701の柱穴を切る。SK702は東西3.3m、南北2.9mの楕円形を呈し、深さ0.5mある。SK703は東西3.1m、南北1.7mの長

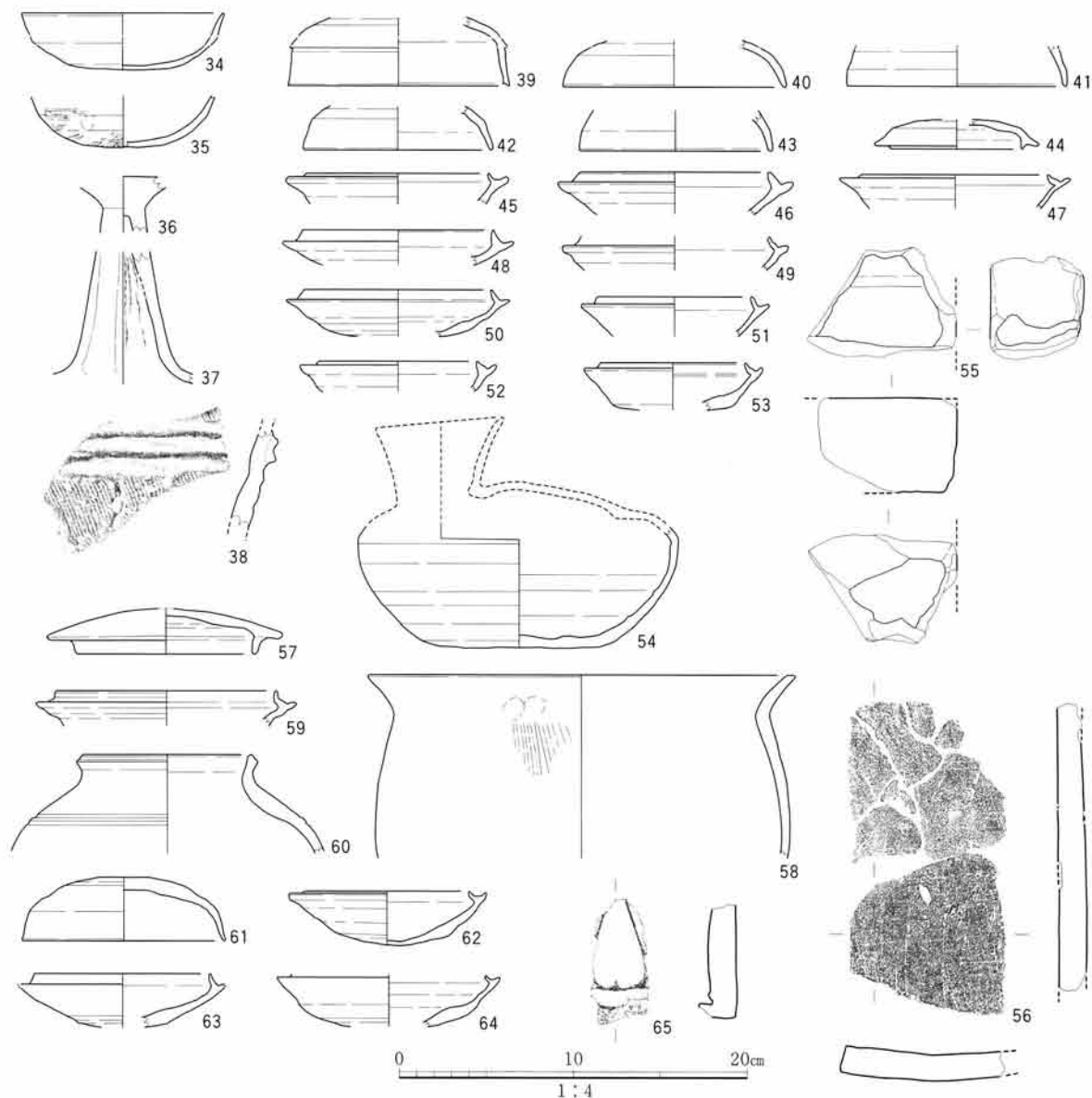


図27 前期難波宮期の遺構および第7b層出土遺物

SB702(38・40・45・46・52・53)、SB702抜(42・54)、SB704(50)、SB705小柱穴(34・37)、SB706(35)、SB706抜(43・48)、SB708(44)、SC701(36・41・47)、SA701抜(55)、SA702抜(39・49・51)、SA703(56)、SD702(57・58)、SK701(59)、第7b層(60~65)

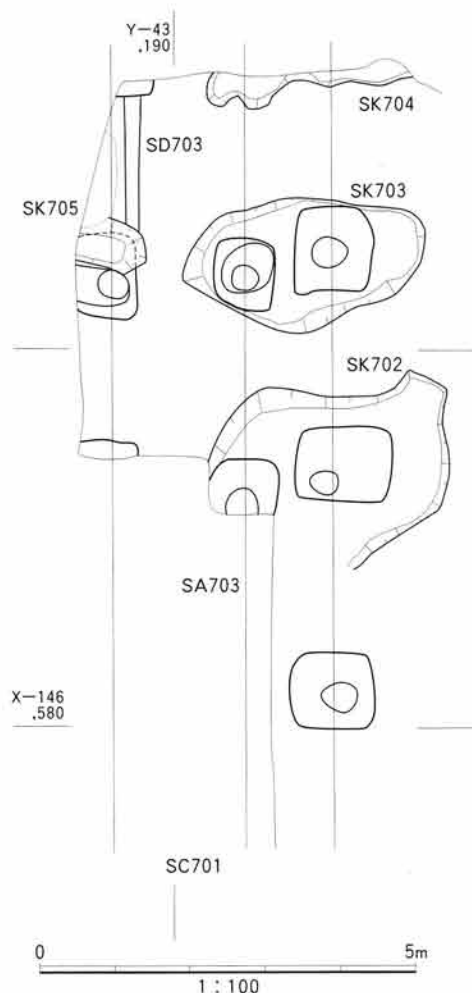


図28 SK702～705平面図

楕円形を呈し、深さは0.5mある。SK704～706は調査区外に拡がるため、形状はわからない。

SK702からは土師器杯A66～69、皿A70～72、須恵器皿B蓋73、杯Aもしくは杯B74、壺蓋75、重圈文軒丸瓦82・83、凝灰岩片が出土した(図29、図版5上)。66・70・71には放射状の暗文が施され、さらに70には連弧状の暗文が加えられる。杯・皿の口縁端部は69が丸く収まる以外はいずれも内側に肥厚する。82・83は復元径が19.4cmあり、第2圈と第3圈の幅が狭いことから6017型式になると思われる。以上の遺物は難波V古段階に属する。

SK703からは重圈文軒丸瓦84・同軒平瓦85が出土した(図29)。84は直径15.6cmに復元できる。第3圈と外縁間が狭いことから6014型式である。85は凸面に縄タタキの痕が残るが、凹面は磨耗が激しく、表面の観察ができない。6572D型式に位置づけられる。

SK704からは土師器杯A76・皿A77・甕78が出土した(図29)。76・77はいずれも内面はナデで仕上げられ、口縁端部が内側に肥厚する。暗文がないということでやや新しい傾向が見られるものの、近接するSK702やSK705と同じく難波V古段階に位置づけられる。

SK705からは土師器皿79・須恵器杯B80・製塩土器81が出土した(図29)。79は底部に丸みがあり、ナデで仕上げられ、内面に暗文は施されない。80は底部のやや内寄りに高台が付き、難波V古段階に位置づけられる。81は口縁部が外反し、内外面は器表が荒れて観察できない。胎土には数mm大の長石・チャート・シャモットの円礫が非常に多く含まれる。胎土から同一個体と思われる破片が多数出土しているが、復元することができなかった。このような器形・胎土の特徴を有する製塩土器は大阪府阪南市の田山遺跡で出土していて、煮沸煎熬用と考えられている[大阪文化財センター1983]。なお、これとは別個体で内面が丁寧なナデで調整されたものもあったが、細片のため実測不可能であった。

SK706からは縄タタキが施された瓦片が出土した。

なお、第6層から6572E型式に位置づけられる重圈文軒平瓦86も出土した(図29)。

⑤第7b層

須恵器杯H62～64、同蓋61、壺60、単弁蓮華文軒丸瓦65が出土した(図27)。61は口径11.6cm、62～64は10cm前後である。65は飛鳥寺の瓦と同範である可能性が高い。

⑥小型瓦(図30、原色図版2)

87は遺構面清掃中に出土した小型丸瓦である。玉縁の部分が欠損しているが、それ以外は完存しており、残存長3.9cm、高さ0.9cmある。凹面はヘラミガキによって表面が整えられ、内面には細かい布

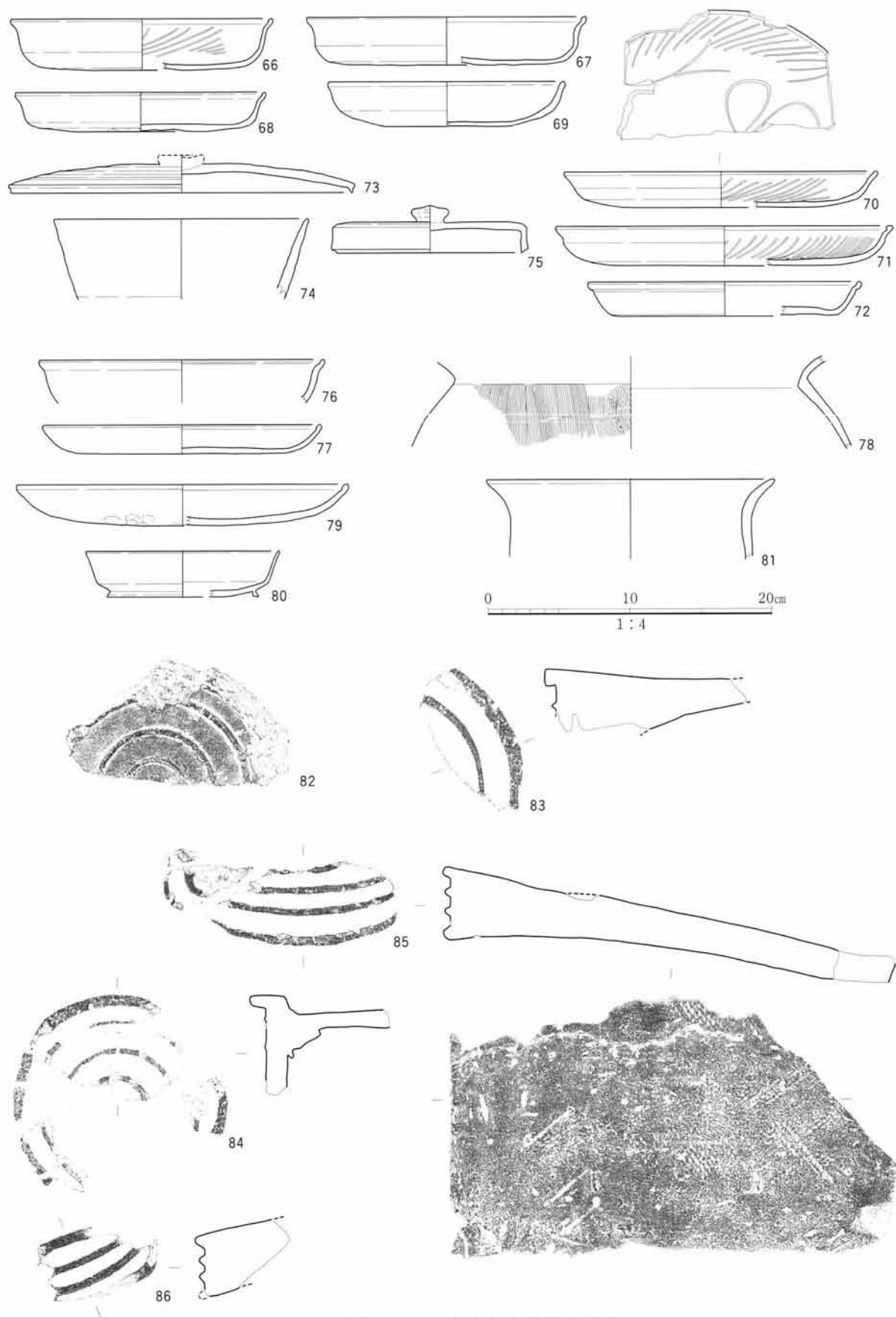


図29 SK702～705および第6層出土遺物

SK702(66～75・82・83)、SK703(84・85)、SK704(76～78)、SK705(79～81)、第6層(86)

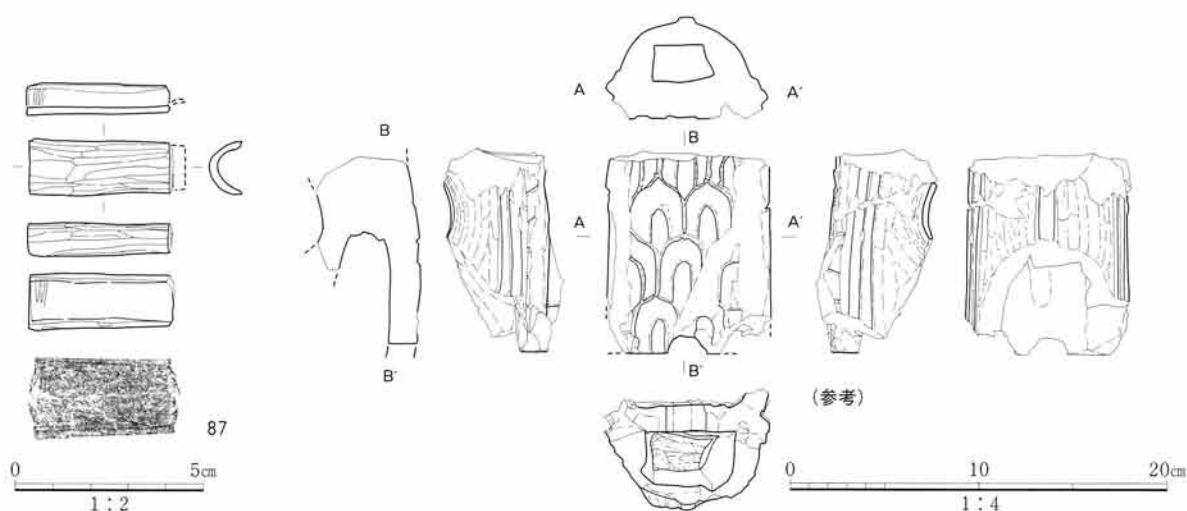


図30 NW80-9次出土小型丸瓦およびNW30次出土小型鴟尾

目が残る。破面はケズリによって整えられている。詳しい出土状況はわからないが、おそらく前期難波宮期に属すると思われる。同様の小型瓦は当調査地から約350m東南東に位置するOS89-89次調査地(本章第3節)や、兵庫県宍粟郡山崎町の千本屋廃寺でも出土している[飛鳥資料館1984]。

隣接するNW30次調査地のSD3045からは小型の鴟尾が出土しており(図30右)、[飛鳥資料館1980]などですでに紹介されている。この鴟尾は頭部と頂部を欠損しており、現存高は10.9cmある。腹部は基底部が残し、中央に幅2.0cm、高さ0.9cmの丸みのある台形を呈する削り形があり、羽根形の文様を4段以上重ねて削り出す。復元高は約17cm、基底部前後長は約10.5cmと推定される。

なお、法隆寺の玉虫厨子の鴟尾はNW30次出土資料の約2/3の大きさであり、丸瓦は玉縁がなく、87に長さ0.5cm前後の玉縁がついたとしたら、長さはその2/3程度である(註3)。瓦の大きさが建物の大きさに比例するとは必ずしもいえないが、もし、難波宮跡で出土した小型瓦が玉虫厨子のような小建築に用いられていたとしたら、玉虫厨子並かそれよりやや大きいものに使用されていたと想定される。難波長柄豊碕宮での国家的儀礼に仏教的要素が多く見られるという指摘もあり[古市晃2002a・2004b]、このような小型瓦・小型鴟尾は興味深い遺物である。

c. 中世の遺構と遺物

NW80-9次調査で土壌3基を検出した(図33)。

SK501 調査地北部で検出した。長径0.5m、短径0.2mの楕円形を呈し、深さは0.15mで、埋土は灰褐色粘土である。両黒で、11世紀中頃に位置づけられる黒色土器碗88-90が出土した(図31)。

SK502 調査地中央で検出した。南北1.4m、東西0.8m、深さ0.2mあり、埋土は炭を含む淡黄褐色細粒砂である。この土壌からは複弁六葉蓮華文軒丸瓦98が出土し(図31、図版21)、すでに[宮本佐知子・佐藤隆1996]の図62-28で取り上げられている。この瓦は中房が右巻の二巴文で、巴の尾部が周囲の界線に接している。蓮弁は丸く肉厚で、周縁は直立縁である。この瓦は八尾市の向山瓦窯産で、平等院や鳥羽離宮、平安京内などで出土しており、12世紀初頭に位置づけられる[江谷寛1994]。

SK503(図32、図版5) 調査地南東部のSA702の柱穴の直上で検出した。南北1.3m、東西0.8mの長方形で、深さが0.2mある。北側で12世紀中頃に位置づけられる土師器皿91-95、瓦器皿96・97が

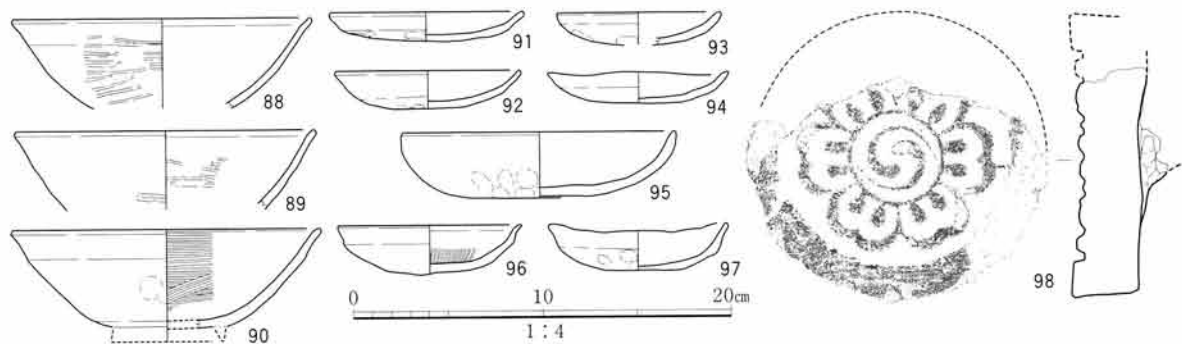


図31 NW80-9次SK501~503出土遺物
SK501(88~90)、SK502(98)、SK503(91~97)

かたまって出土し(図31)、その状況から土壙墓と考えられる。

d. 豊臣期の遺構と遺物(図33、図版5下)

堀状遺構・塀・掘立柱建物・溝・井戸・土壙を検出した。

SM401 NW80-9次と82-44次調査地にまたがって検出された堀状遺構である。上端の南北は約15m、東西は約8m、深さは1.2~1.4mあり、底は平坦である。内部にL字状に曲がり、底からの約0.5mの高さがある土手状の高まりがあることから、平面形は長方形ではなく、鉤状に曲がる可能性がある。

SM402 L字状に曲がる堀状の落込みで、東西約14mあり、南北約6m、幅は2.3~3.0m、深さ0.5~0.8mある。

SA401 南北方向に平行して延びる2条の柱列で、調査時は東側のSA154(図23のaと表示した柱列)と西側のSA151(同b)というように別々の塀と認識されていた。しかし、SA151がSA154と平行で、かつ柱穴がひとつ置きにあることから、SA151が控え柱の列となる一連の塀と考えた。柱穴の間隔は大体1.6~1.8mで、控えと思われる柱列との間隔は1.2mであり、柱痕跡は直径0.15mである。方向はN12°Eである。なお、SA401-aは旧報告では徳川期初頭と考えられたが、近隣の豊臣期の遺構の方向と等しいことから本節では豊臣期に含めた。

SA402 SA401-bの2.5m西に平行して延びる塀である。柱穴の間隔は大体1.6~1.8mで、柱痕跡は直径0.12mである。SA401と近接しているため、同時存在はしなかったと思われる。

SA403・404 SA401・402と直交する方向に延びる塀である。旧報告[大阪市文化財協会1981c]ではこれらの塀はSA401-bと直角に接続するように復元されているが、コーナーに当る部分の柱穴がないため、別々のものと考えた。SA403は柱間隔が約1.8m、柱痕跡の直径が0.1m前後で、SA404は柱間が約1.5m、柱痕跡の直径が0.08mである。

なお、NW80-9次調査時にはこれ以外に、SA401・402に直交する方向の塀(旧報告のSA155・157)が認定されたが(図33で点線で表示されたもの)、検出された柱穴の数が少ないため、遺構として認定するのは困難と考えた。

SA405~407(図版6左下・右下) SD404に平行で、SA401・402とは直交する方向に延びる。SA405は直径0.2~0.3mの掘形で、柱間隔は1.1~1.9mと疎らである。SA406は一辺0.5m前後の方形



図32 NW80-9次SK503実測図

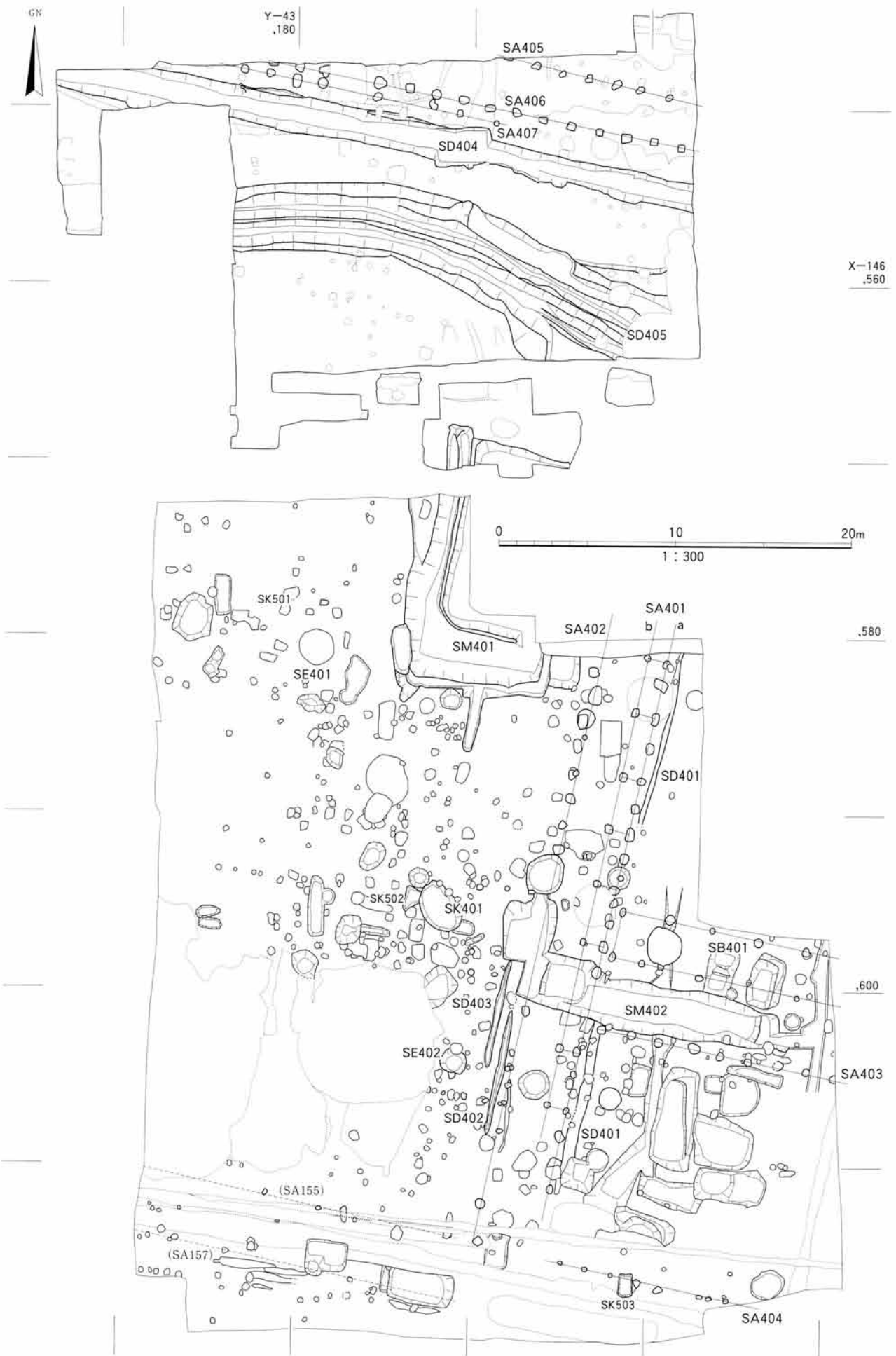


図33 中世～豊臣期の遺構配置図

を掘形をもち、それぞれの柱間隔は1.6mではほぼ等しい。一部の掘形には上面が平らな石が根石として使用されていた。SA407はSA406の0.8m南にあり、柱も対応する位置にあるが、建替えによるものと思われる。

SB401 調査時にSA401・402と直交する方向に延びる梁間1間(2.7m)、桁行4間(10.8m)以上の掘立柱建物と認定されたものである。柱痕跡は0.1m前後である。

SD401~403 SA401・402に平行して延びる溝である。幅0.2~0.6m、深さ0.1~0.2mである。SD401はSA401に近接し、一部では掘形に接するため、雨落ち溝ではなく、堀の基部に係わる構造物の痕跡かもしれない。

SD404(図版6左下・右下) 幅1.6~2.0m、深さ0.7~1.2mで、断面逆台形を呈し、SA405~407と平行して延びる。埋土の下層は暗灰色粘土と細粒砂が互層に堆積し、上層は淡黄褐色細粒砂で、いずれも水成層である。埋土中から青花皿107・碗108が出土した(図34)。107は漳州窯産のもので、見込みに内禿げがあり、高台内側も釉がかかっていない。108は饅頭心である。このほか唐津焼や瀬戸美濃焼志野の破片も出土していることから豊臣後期に位置づけられる。

SD405 上端の幅約4m、深さ0.9~1.2mの溝である。中央に底からの高さが0.2~0.3mの土手状の高まりを残して掘削されており、水成層の埋土も溝の底に沿って堆積していた。埋土中から青磁碗

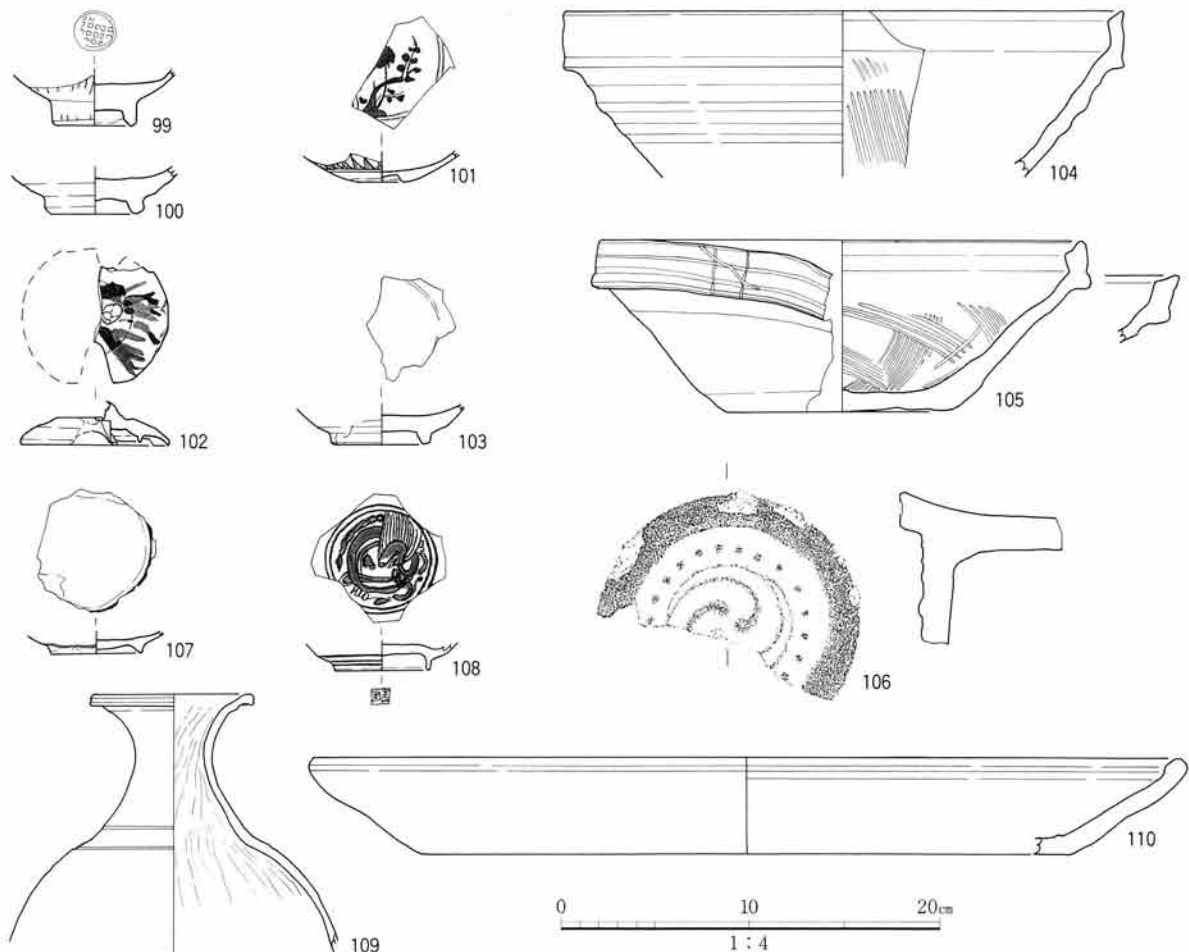


図34 豊臣期の遺物

SD404(107・108)、SD405(99~106)、SE401(110)、SK401(109)

99、磁器碗100、青花皿101、瀬戸美濃焼志野灯明具蓋102、唐津碗103、備前焼播鉢104・105、巴文軒丸瓦106が出土した(図34)。99は見込みに格子目を刻み、その周囲を円で囲っている。100は白い釉が施され、陶胎は粗い。釉は二次焼成を受け、ただれている。輸入磁器と思われるが、産地は不明である。101は碁笥底である。106は瓦当の直径は13.4cmある。

SE401 直径2.0mの素掘りの井戸である。備前焼大平鉢110(図34)や常滑焼・硯・石臼の破片が出土した。また、黄色の熔着物のある陶器片も出土した。この熔着物を蛍光X線分析(非破壊)したところ、多量の鉛を検出した(註4)。

SE402 直径1.5mの素掘りの井戸である。青花片などが出土した。

SK401 長径2.7m、短径2.0mの楕円形で、深さが0.9mの土坑である。李朝施釉陶器瓶109が出土した(図23)。109は頸部内面にはシボリメが残るが、当て具の痕は見られない。頸部には沈線が2条巡る。器壁が0.4cmで通常の李朝瓶よりも厚いため、唐津焼である可能性も残す。

なお、調査地南東部の土坑群は、詳細な時期は不明であるが、徳川期の土取穴である可能性が高い。

3) まとめ

i) ガラス玉鑄型について

ガラス玉鑄型は、奈良県布留遺跡や上之宮遺跡、さらに飛鳥池遺跡[奈良国立文化財研究所1992]で鑄型が報告されることによって、本資料と同様、用途不明とされていた類例が次々と明らかになり、管見によるかぎり国内15遺跡で41点がある。また、清水氏が想定されていたとおり[清水眞一1992]、韓国でも同様の資料があることが判明し、8遺跡9点の資料が確認されている(表7)。以下に、これら他遺跡出土の資料と比較して、本資料の特徴を提示しておきたい。

形状としては、本資料の遺存する外縁部からは全形を円形と推定できるが、これは近畿地方で出土例がある奈良県と大阪府の各遺跡の資料と共通している。直線的な外縁部をもつ破片は、近畿地方では上之宮の1例と平城京の資料の中に認められるのみである。

関東で出土例がある東京都と千葉県各遺跡と北部九州で唯一出土している福岡県西新町遺跡の資料

[福岡県教育委員会2000・2003]には外縁部が弧をなす資料はいまのところない。

韓国では京畿道漢沙里遺跡[漢沙里先史遺蹟発掘調査団ほか1994]にみられるような長方形など、外縁部が直線的な資料がほとんどであり、関東や北部九州の資料に近いが、全羅南道寶城郡の金坪遺跡(図35-A・B)の資料は唯一外縁部が弧をなす近畿地方と共通する形状をなしている[全南大学校博物館ほか1998]。金坪遺跡の報告では、日本出土例が厚さ10mmを越えるものが多いのに対して、韓国出土例は薄いものが多いとし、厚さ5mmの当該資料もその一例とみている。金坪遺跡例は厚さや形

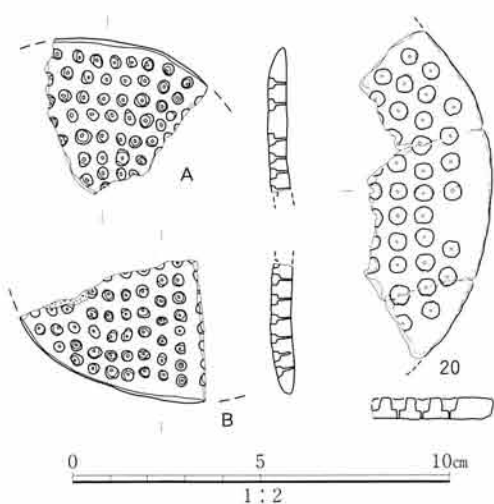


図35 金坪遺跡とNW80-9次出土ガラス玉鑄型

状において、本資料と極めて近似している点が注目される。

製作された玉の大きさを反映する型穴の直径は、日韓の資料ともに3～8mmであり、全羅南道金坪遺跡の2.5mmが最小で、奈良県上之宮遺跡、大阪府讃良郡条里遺跡[大阪府教育委員会1991]、慶尚南道隍城洞遺跡[國立慶州博物館2000]が8mmで最大である。本資料の4.5mmは平均的な大きさといえる。

本資料の時期である5世紀後半は、奈良県布留遺跡の資料に近いと思われ、奈良時代までである近

表7 ガラス玉鑄型一覧

遺 跡 名	所 在 地	出土遺構	鑄型法量(mm)			型穴(mm)		細孔径 (mm)	穴 数	外縁部 形状	時期	備 考	文 献
			縦	横	厚さ	径	深さ						
布留遺跡袖之内地区	奈良県天理市	溝	32.5	44.0	17.0～19.0	3.5～4.0	2.0	0.5	35		5C末	6C前半の鉄器・石製玉工房	山内紀嗣1991
			24.0	31.0	13.0	3.5～4.0	2.0	0.5	11	?			
			25.5	32.5	15.0	3.5～4.0	2.5	0.5	9				
南郷	奈良県御所市												
上之宮遺跡	奈良県桜井市	圃池遺構	58.0	38.0	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	14	○	6C末～7C	ガラス付着	桜井市1990 清水真一1992
			49.0	48.0	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	17	□?			
			57.0	27.5	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	16				
			47.0	35.5	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	8	○			
			26.0	24.5	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	4	○			
			17.0	39.5	10.0	7.0～8.0	6.0	1.0	3	○			
谷遺跡ショブ地区	奈良県桜井市	トレンチ包含層	31.0	18.0	11.0	5.0	4.0	1.0	12		7C	ガラス付着	桜井市1990
飛鳥池遺跡	奈良県高市郡 明日香村	ガラス製作 工房遺構	36.0	26.0	12.0	5.0	3.0	1.0	16		7C末 々		奈文研1992
			42.5	47.0	12.0	4.0	2.5	1.0	26	○			
			40.0	44.5	12.0	4.0	3.0	1.0	35				
藤原京左京北四条三坊	奈良県橿原市										5C末		
四条大田中遺跡	奈良県橿原市	金属工房遺構	45.0	39.0	10.0	3.0	3.0	1.0	8	○	8C	ガラス付着	橿原市・橿考研1988
平城京左京一条三坊	奈良県奈良市	溝	57.5	52.0	7.0～9.0	5.0	3.0	1.0	25	○	8C前半	裏面格子叩き	奈文研1991
平城京左京 七条一坊 十五・十六坪	奈良県奈良市	溝SD6400	40.0	42.0	9.0	3.0	2.0	1.0	21	○	8C	裏面布目	奈文研1997
			38.0	41.0	9.5	4.0	3.0	1.0	13	□	8C	裏面格子叩き	
			53.0	41.0	8.5	4.0	2.5	1.0	22	□	8C	裏面布目	
			30.0	30.0	7.0	4.0	3.0	1.0	11	□	8C	裏面布目	
難波宮跡	大阪府大阪市	土壇	87.0	32.0	5.0～6.0	4.5	3.5	0.5～1.0	35	○	5C後半～末		京嶋寛2000.本節
讃良郡条里遺跡	大阪府寝屋川市	自然河川	43.0	38.5	15.0	8.0	8.0	1.0	10	○	6C?		大阪府教委1991
大泉南遺跡	大阪府柏原市	83-6次包含層										鉄器生産遺跡	柏原市教委1985
		92-2次											北野重1999
		93-2次包含層	56.0	30.0	15.0	5.0	3.5	1.0	25		6～7C		柏原市教委1995
		93-4次包含層	39.0	37.0	11.0～13.0	3.5	3.0～3.5	0.5～1.0	23	○	7C末～8C		
川戸下遺跡	千葉県四街道市	住居址	163.0	143.0	8.0～15.0	4.0	3.5～4.0	1.0	308	□	4C	ガラス付着	
鶴ヶ岡1号墳	千葉県木更津市	古墳墳丘内	53.0	35.0	15.0	4.0	4.0	1.0	22		4C前半	ガラス付着、 小玉副葬	酒巻忠史1998
			44.0	29.5	18.0	4.0	4.0	1.0	15				
豊島馬場遺跡	東京都北区	方形周溝墓	46.0	57.0	10.5	3.5	2.0	1.0	57		4C前半		中島広顕1993 東京都北区教委1995
			36.0	42.0	10.0	3.5	4.0	1.0	30				
			36.0	32.0	10.0	3.0	3.0～3.5	1.0	25				
			69.0	68.0	12.0	4.0	2.0～3.0	1.0	103	□			
			18.0	31.0	10.0	3.5	1.0	1.0	9				
			15.0	25.0	6.5	4.0	1.5	1.0	7				
			76.0	58.0	11.0	3.5～4.0	3.5	1.0	59	□			
			11.0	19.5	9.5	3.5～4.0	2.5	1.0	6				
		グリッド	17.0	16.0	8.0	3.0	2.0～2.5	1.0	5				
			14.0	22.5	10.0	3.5	2.5	1.0	7				
西新町遺跡	福岡県福岡市	131号住居址	42.0	32.0	6.0以上	5.0	4.0～5.0	1.0	9	□	布留式 古・中 古墳時代	土製ガラス勾玉鑄 型も114住居で出土	福岡県教委2000
		45号土壇	76.0	34.0	7.0～9.0	4.0～5.0	3.5～4.0	1.0	27	□			
		44号住居址	34.0	15.0	9.0	3.0～4.0	3.0	1.0	14				
		Ⅱ区中5包含層	40.0	21.0	10.0	4.0～5.0	3.0～4.0	2.0	8	□			福岡県教委2003
		Ⅰ区南1攪乱	69.0	28.0	9.0	3.0～4.0	3.0	1.0	38	□			
漢沙里遺跡	京畿道河南市	第010号住居址	95.0	101.0	7.5～9.0	5.0	3.5～4.5	1.5	110	□	1C		漢沙里調査団ほか1994
風納土城 (慶堂地区)	ソウル市 松坡区風納洞		35.0						26	□			ソウル歴史博2002
中島遺跡	江原道春川市 中島洞	文化層(包含層)	31.0	22.0	7.0～10.0	4.0～5.0		1.0		□	1～3C		國立中央博物館1980
石帳里遺跡	忠清北道鎮川郡	B区	35.0	27.0	5.0～8.0	3.0～7.0		2.0	8	□	4C後半 ～5C初	製鉄遺跡	國立清州博ほか1997
隍城洞遺跡	慶尚南道慶州市		50.0	46.0	14.5	8.0	7.0	2.0	13	□		石製ガラス勾玉 鑄型も出土	國立慶州博物館2000
郡谷里遺跡	全羅南道海南郡	EピットV期層	40.0	42.0	6.0	4.0	2.0	1.0	47	□	3C後半 ～4C後半	貝塚	木浦大ほか1987
玉谷里防築 遺物散布地	全羅南道羅州市	地表採集	32.0	27.0	0.5	0.6			25				國立光州博物館1998
金坪遺跡	全羅南道寶城郡	V～VI層	40.0	56.0	5.0	2.5		1.0	54	○	3C前半 より後出	貝塚 上と同一個体	全南大博物館ほか1998
		(郡谷里V期層)	41.0	41.0	5.0	2.5		1.0	52	○			

畿の資料の中では最古である。一方、関東および北部九州の資料はいずれも3・4世紀とされており、近畿地方の出土傾向と際立った差異を示している。また、韓国では1～5世紀までの時期が与えられている(註2)。

ii) 東方官衙地域の建物について

東方官衙地域の建物群については、時期・性格の議論がある。前述したように、NW30次調査の報告では「聖武朝」の瓦が出土したということで、「聖武朝難波宮に属する可能性が高い」とされ[難波宮址顕彰会1969a]、NW80-9次調査終了時には堀と掘立柱建物で構成されるA期と、単廊および堀・掘立柱建物で構成されるB期に分け、前者を前期難波宮、後者を後期難波宮に属すると考えられた[大阪市文化財協会1981c]。しかし、NW82-10次調査では遺構の切合いを確認し、建物群が2時期存在することを確認したものの、どの遺構も時期を決定するだけの材料に欠けると慎重な見解を提示した[大阪市文化財協会1983a]。さらに、[佐藤隆1997・2001]は遺構の切合い・配置関係や出土遺物から、いずれの時期も前期難波宮期に収まる可能性が高いことを示した。

ここでは本節で報告した遺構とNW30次の遺構について、[佐藤2001]で行なったような、切合いや位置関係、出土遺物の時期を整理することを通じて、各遺構の時期的な位置付けを行った。

① 建物群の広がり

まず、建物群の広がりの可能性について触れておこう。本調査地の東約50m(NW56次)、南約30m(NW02-13次Ⅱ区第3トレンチ)では難波宮期の柱穴が検出された。特に後者は位置的にSC701もしくはSA703の延長線上にあり、今後の詳細な調査が待たれる[大阪市文化財協会2003b]。また、NW56次の東隣のNW46次調査では東が低くなる落込みが、南約200mの地点では周囲より6m以上低くなる落込みが検出されており(NW02-13次Ⅲ区第2トレンチ)、これらの地形的に制約された範囲が東方官衙の最大限の広がりを示す。

② 切合いと位置関係

切合い関係はSD701・SC701・SK702～706の間にあり、後者ほど新しい(図36)。また、SD701はSA703と位置的に平行であり、SA703はSA702・704に接続する。さらにSD702はSA701・704に沿うことから、SA701～704およびSD701・702は同時存在したと考えられる。また、NW30次のSA3044についてはSA703との接点はないものの、一番東端の柱穴から約12m(4間)のところにSA703の柱筋が通る。さらにこの交点はNW82-10次の第Ⅲトレンチで検出された一番北側の柱穴から約15m(5間)ある。よって、SA3044についてもSA703に接続し、同時存在したと思われる。また、

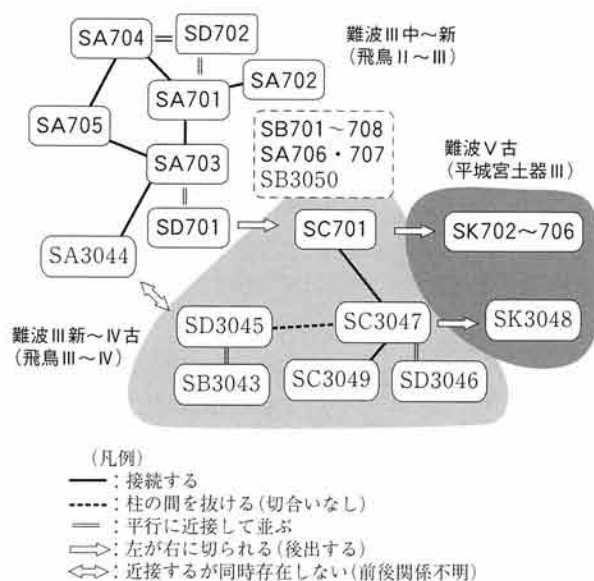


図36 東方官衙地域の遺構前後関係模式図

表8 難波宮期遺構一覧

遺構名	建物・塀・単廊の規模	桁行1間平均	梁間1間平均	遺物の時期	備 考
SB701	桁行5間以上×梁間2間	2.93	×		
SB702	桁行6間以上×梁間2間	2.93	2.96	難波Ⅲ中(含抜取穴)	
SB703	桁行6間以上×梁間2間	2.94	2.92		
SB704	桁行6間×梁間2間	2.93	2.93	難波Ⅲ古	
SB705	桁行3間以上×梁間2間	2.92	2.93	難波Ⅲ中～新(小柱穴)	
SB706	桁行3間×梁間3間	2.37	1.80	難波Ⅲ中(含抜取穴)	
SB707	桁行3間×梁間3間	2.09	1.79		
SB708	桁行2間以上×梁間1間	1.60	×	難波Ⅲ中～新	
SB3043	桁行3間以上×梁間2間以上	2.86	2.95		[大文協1981c]では後期(B期)
SB3050	2間以上×2間以上	3.42	×		[大文協1981c]では後期(B期)
SA701	15間以上	2.94	(-)		抜取穴より埴51出土
SA702	13間以上	2.93	(-)	難波Ⅲ中(抜取穴)	
SA703	17間以上	2.88	(-)	飛鳥時代	抜取穴より平瓦52出土
SA704	7間	2.94	(-)		
SA705	6間以上(7間?)	2.95	(-)		
SA706	8間以上	3.04	(-)		
SA707	3間以上	×	(-)		
SA3044		3.01	(-)		[大文協1981c]では後期(B期)
SC701(南半)	17間以上	2.92	3.02	難波Ⅲ中	SD703を切る。旧報告では後期(B期)
SC701(北半)		2.88	3.02		
SC3047	9間(13間)以上	2.83	3.00		[大文協1981c]では後期(B期)
SC3049	10間以上	2.87	3.01		[大文協1981c]では後期(B期)
SD701					
SD702				飛鳥時代	飛鳥時代と思われる蓋53出土
SD703					SA703に平行、SC701の柱穴に切られる
SD704					
SD705					
SD706					
SD3045				難波Ⅲ新～Ⅳ古	小型鷄尾出土、[大文協1981c]では後期(B期)
SK701				難波Ⅲ中	
SK702				難波Ⅴ古	重園文軒丸瓦79・軒平瓦80出土
SK703				奈良時代	重園文軒丸瓦81・軒平瓦82出土
SK704				難波Ⅴ古	
SK705				難波Ⅴ古	
SK706				奈良時代	縄タタキの瓦出土
SK3048				難波Ⅴ古	

SC701にはNW30次のSC3047が、SC3047にはSC3049が繋がる。よって、SC701およびSC3047・3049は同時存在し、前半期には塀が、後半期には回廊が巡る建物群が存在したという推測ができる。

次に、NW80-9次調査で検出された建物群の配置について通観してみよう。まず、南北棟のSB701～703はいずれも梁間が2間であり、北側の柱筋が揃い、建物間隔が7.0mと均等である。さらに、SB704・705についても東西方向の柱筋が揃い、梁間が2間の同一規模の建物であったと思われる。また、SB701とSB704の西側の柱列が揃い、SB703とSB705の西側の柱列が揃う。

一方、SB706・707については東西長は異なるものの、南北長が等しい。東西方向の柱列が揃い、両建物の距離は7.8mある。また、SB701～705とは柱筋が揃っていない。

NW30次調査のSD3045について、SC3047の柱穴の間を通り、SA3044の柱穴に重なり、SB3043の約3m手前で西側に曲がる。SD3045は攪乱がかかっていたため、SA3044との明確な切合いを確かめることはできなかったが、その配置から同時存在はしていなかったはずである。一方、SB3043を避け、SC3047の柱穴の間を通っているということで、これらは同時存在した可能性がある。

③出土遺物による遺構の時期

続いて、出土遺物を基にして遺構の時期を検討してみよう(表8)。

まず、一括資料として確実なのはSK702～705出土の土器であろう(図30)。これらの土壌から出土した土師器杯A・皿Aは口縁端部が短く外反し、内側に若干肥厚する。SK702からは内面に1段の放射状の暗文があるものと、ナデで仕上げられるものが出土しているが、SK704・705出土の土師器杯A・皿Aには器面が残っているにもかかわらず、暗文は見られない。また、須恵器杯Bは高台が内寄りに付き、皿B蓋は天井部から口縁部にかけて比較的直線的に伸びる。

SK3048からは図37のように土師器杯A3～5、杯C1・2、皿A6、甕7、須恵器杯A17～21、杯B15・16、同蓋8～14が出土した。土師器杯A・皿Aについては、暗文が施されているのがきわめて少なく、口縁端部内面の肥厚はあまり顕著なものとそうでないものが両方ある。また、4は深みがあるという古い特徴を有する。須恵器杯Aは口縁部が直立に近い17～19、斜めに伸びる20・21とがある。杯Bは高台がやや内寄りに付き、蓋には口縁部が外湾するものは見られない。

以上の土壌の遺物について、土師器杯A・皿Aに暗文が施されたものが少ないため、難波V古段階でもやや新しい傾向が見られるが、同時期の地域色の可能性もある[佐藤2001]。

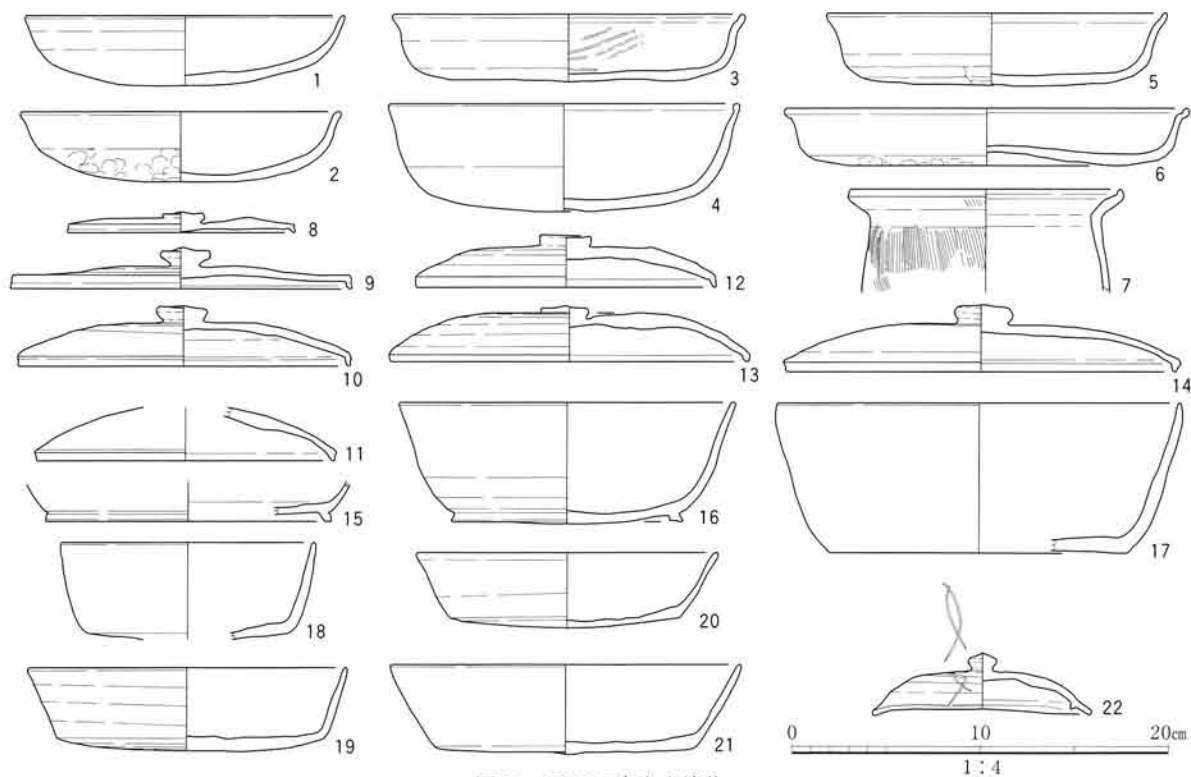


図37 NW30次出土遺物
SK3048(1～21)、SD3045(22)

また、SA701・704に平行するSD702から出土した土師器蓋57については、飛鳥時代やそれ以前の須恵器の壺蓋に類例が求められるので、7世紀中葉までに収まるものと思われる。一方、SC3047やSB3043と共存すると思われるSD3045からは、図37に示した難波Ⅲ新段階～Ⅳ古段階の須恵器杯G蓋22が出土しており、7世紀後葉に位置づけられる。これがおそらくSC3047・3049およびSC701の時期に近いものと思われる。なお、この溝から後期難波宮期の瓦が出土したと報告されているが、上・下層で分けて取り上げている地点で瓦が含まれているのは上層のみであり、廃絶後の落込みに瓦を含む地層が堆積したという[佐藤2001]の見解を支持したい。

建物や塀・単廊の柱穴およびその抜き取り穴からは古墳～飛鳥時代の土師器・須恵器が出土している。基本的に柱穴の断割りを行っていないため遺物は少量であるが、後期難波宮期まで下る遺物は出土していない。SB705小柱穴やSB706柱穴出土の土師器杯31・32や須恵器杯G蓋41は難波Ⅲ中～新段階(7世紀中～後葉)に位置づけられ、これらの建造物の時期に比較的近いと思われる。

④建物群の年代と性格

変遷過程を考えるうえで、まず単廊の柱穴上に掘削されたSK702～706やSK3048の性格について検討しなければならない。これらの土壌について、柱穴の直上にあるということで、単廊が廃絶した時期のものと考えられてきた[大阪市文化財協会1981c]。しかし、これらの土壌が抜き取り穴ではないこと、SK503のように中世でも難波宮期の柱穴の直上に土壌が掘られる例があるということから(図32)、土壌と単廊を直接結びつけるのは困難であり、単廊は前期難波宮期に収まる可能性が高い。特に、柱穴の直上に掘られたという点については、たとえば柱の抜き取りなどで生じた陥没がしばらくの間残っていたり、地山の土よりも柱穴埋土の方が掘り易かったというような理由から重複が生じたのであろう。

[佐藤2001]では、建物・塀・単廊が共通の地割に基づき、同様の尺を用いて造営されている可能性が高いこと、A・B期とされたいずれの柱穴からも難波Ⅲ中～新段階よりも新しい遺物が出土していないことも、前期難波宮期で収まる可能性が高い根拠として挙げている。前者については、SA701とSC701が前後関係があるにもかかわらず、ほとんど同じ方向で、かつ柱間寸法も同じであることから理解できる。後者については、本節で報告したとおりである。また、朱鳥元(686)年の火災痕跡が見つかっていないということについても、難波宮全域に火災が及んでいるわけではないことから、火災痕跡がないということが時期決定に繋がらないとしている。

したがって、掘立柱建物・単廊・塀はいずれも前期難波宮期に収まると考えられる。具体的な時期について、SC701などの単廊はSD3045出土の須恵器杯G蓋22(図37)から少なくとも7世紀後葉に廃絶したと考えられ、塀SA701～705はそれ以前に位置づけられる。当調査地の北東に位置するNW84-6次のSB701のように(本章第1節)、前期難波宮の存続期間内でも建物の廃棄・建替えが行われた例があることから、当地でも塀が単廊に建替えられたことは十分考えられる。

なお、塀や単廊がどの建物と併存したかという点についてはよくわからない。NW80-9次で検出されたSB701～707が同時存在していて、さらにこれが塀と併存していたとしたら、きわめて窮屈な配置となるため、これらの建物が同時存在せず、新たに建築されたり、古い建物が取り壊されたりし

た結果、密集した遺構配置になったと考えるのも可能である。ただ、切合いなどによる前後関係を確認できていないため、具体的な配置案を示すことは控えたいと思う。また、建物群の性格については、[佐藤1997]で「東宮(皇子宮)」と考えたが、[佐藤2001]では7世紀代ではまだ皇太子制が確立していないことなどから、前説を撤回している。具体的な性格はわからないものの、前期難波宮の中で重要な機能を有していたことには違いない。

最後に、当建物群が「東南新宮」と考えられたことについて見解を示しておきたい。NW30次調査の報告では、『続日本紀』天平勝宝8(756)年2月28日の孝謙天皇紀に記載された「東南新宮」に当たると記された[難波宮址顕彰会1969a]。おそらくこういった見解がNW80-9次調査でも影響したために、2時期の建物群が前期・後期難波宮期に当てられたのであろう。しかし、SK702~705・SK3048出土の土師器・須恵器は実年代では新しくても750年までに収まると思われ、若干の齟齬が生じる。また、これらの土壌から重圏文瓦が出土しているが、出土状況から廃棄土壌と考えられ、さらに、これに伴うと思われる建物跡は見つかっていないことから、これらの遺物を基にして「東南新宮」と結びつけるのは困難と考える。また、この「東南新宮」説には[佐藤2001]の註2で書かれたような背景も影響したのかもしれない(註5)。ただ、宮内でこれだけ後期難波宮期の遺物がまとまって出土している地点がないこと、重圏文瓦が出土していることなどから、当地もしくは近隣に後期難波宮期でも比較的古い時期の建物が存在した可能性が高い。

(寺井・京嶋覚：註6)

註)

- (1) 図14に示されたNW30次の遺構名について、掘立柱建物1~13号については[難波宮址顕彰会1969]に従って①~⑬で示し、溝については命名されていなかったので本節では溝1~5と仮称した。
- (2) ガラス玉鋳型の検討に際して、清水真一・北野重・金武重・林志暎の各氏に類例についてのご教示を得た。記して深謝いたします。
- (3) 玉虫野子の鴟尾や丸瓦の計測値については、奈良文化財研究所の毛利光俊彦氏・花谷浩氏からご教示を頂いた。記して深謝いたします。
- (4) 大阪歴史博物館設置の文化財用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用いて、非破壊で表面の分析を行なった。
- (5) NW30次調査は当時の市立中央青年センター建設を巡る難波宮保存問題が絡み、具体的な宮殿名を必要とする状況であったということを、長山雅一氏(流通科学大学・元大阪市教育委員会文化財保護課)のご教示を得て記している。本節執筆に当たっても長山氏から当時の状況を教えていただいた。
- (6) 本節ではガラス玉鋳型についての報告及びまとめの部分を京嶋が執筆した。また、遺構の検討については佐藤隆、李陽浩を初めとする多くの当協会学芸員との討議を経て、寺井が執筆した。特に、遺構の時期的な位置づけは佐藤の教示によることが大きい。なお、NW30次調査の内容については中尾芳治氏(前帝塚山学院大学)、八木久栄氏(元協会企画課長)、NW80-9および82-10・44次調査の内容については木原克司氏(調査担当者・現鳴門教育大学)、NW80-9次の行政措置の経緯と経過については長山雅一氏、建築学的な内容については植木久氏(大阪市教育委員会文化財保護課)からご教示いただいた。記して深謝いたします。

第3節 OS89-89次調査

1) 調査地と周辺の概要

調査地は上町台地東斜面で、前節報告のNW80-9次調査地から東約300mの地点に位置する。また、豊臣期大坂城の三ノ丸推定範囲であり、当時の遺構が検出されると予測された地域でもあった(図38)。

本調査では工事敷地全域がすでにGL-1.5mまで重機掘削が行われ、建設のための工事杭も各所に打たれていた。試掘立会の結果では西半分は地山が高く、東半分は低くなっていたので、東側の地山の落ち際から低くなる傾斜地のみの調査を行うこととなった。

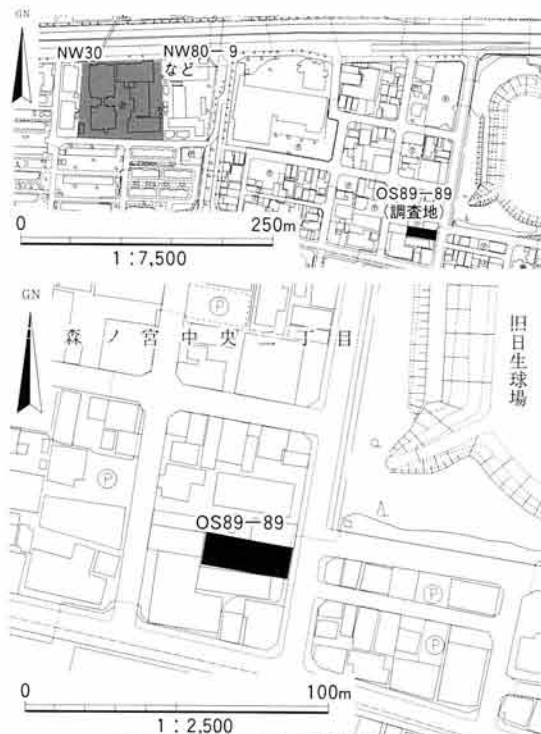


図38 OS89-89次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序と遺物

地山上面は全体的に東側が緩やかに下がる地形で、南側に深い落込みがある。これは「玉造谷」(第V章第1節)の谷頭と考えられる。第8層は地山の再堆積層で、遺物はまったく含まれていなかった。第5層は瓦器を含む包含層で、ここからNW80-9次調査(本章第2節)で出土したような小型丸瓦1が出土した(図40、原色図版2)。第4層は青花を含む豊臣期の地層である。

ii) 遺構と遺物

おもに近世の遺構を検出した(図39)。

SE401 調査地中央の地山が低くなった地点で8層を掘り抜き、非常に深かったために完掘することができなかった(註1)。掘形は直径が1.2mの円形で、井戸側には桶が転用されていた。青花皿の破片が出土していることから、豊臣期に位置づけられる。井戸が埋没した後は瓦が敷かれ(SX401)、生活面が作られていた(写真4)。瓦敷きには縄タタキのある後期難波宮期のものと、豊臣期のものが使われていて、前者が全体の2/3ある。2は前者、3は後者の一部を図示したものである(図40)。同様に瓦を転用して敷いた例は阪神高速道路に伴うMP-8区や9区でも検出されている[大阪市文化財協会1981b]。

SK301 SX401が埋没した後に掘られた土壌である。中から



写真4 OS89-89次SX401検出状況

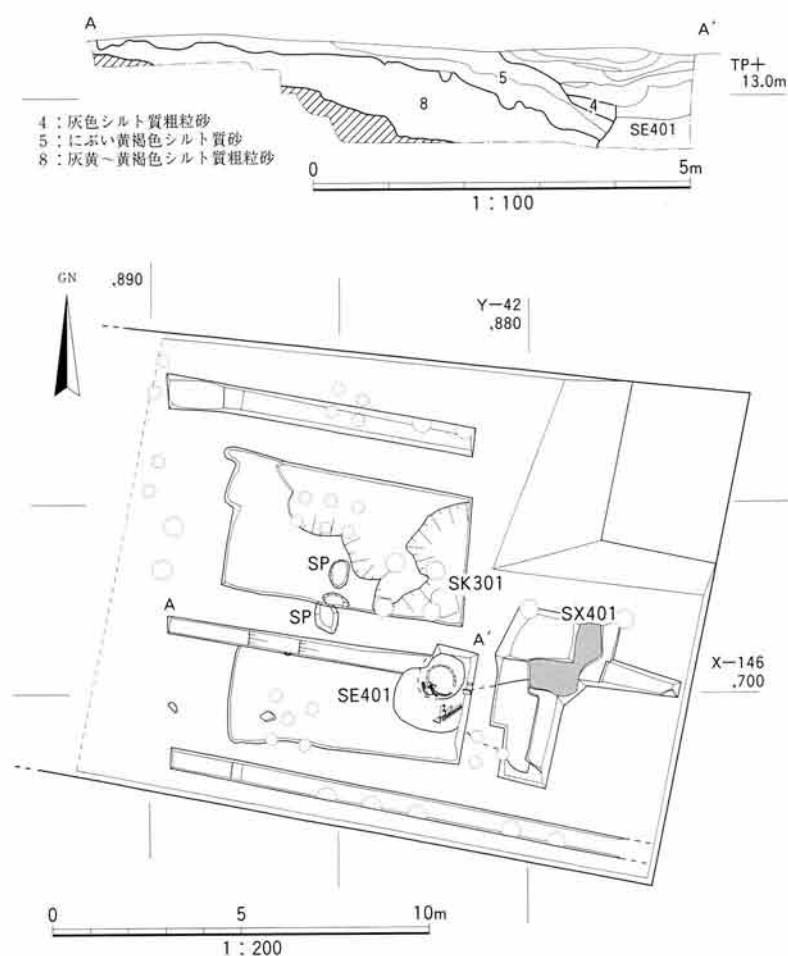


図39 OS89-89次平断面図

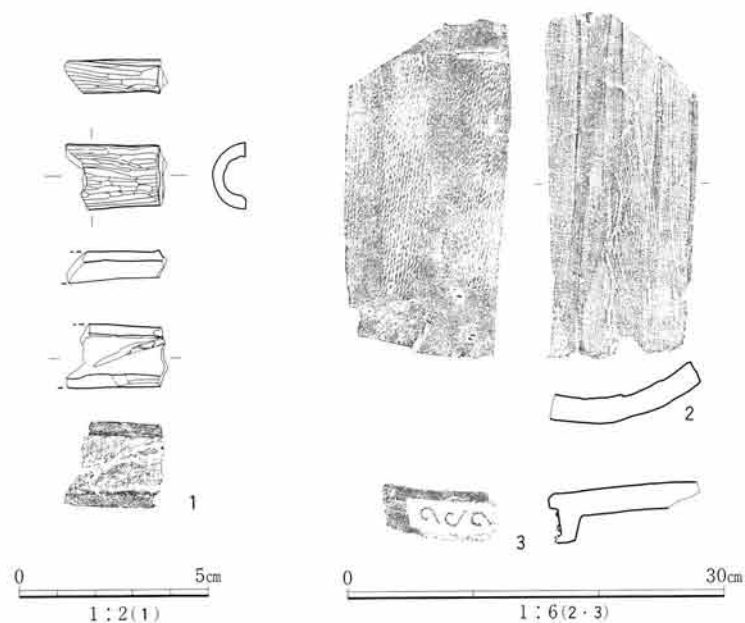


図40 OS89-89次出土遺物
第5b層(1)、SX401(2・3)

関節の部分だけを鋭利な刃物で切り取ったウシの骨が多量に出土した(註2)

また、地山上面で南北に並んだ2個所の柱掘形を検出した(図39のSP)。長径0.7m、短径0.5mの楕円形で、深さは0.5mであった。時期は不明である。

なお、第5層から出土した小型丸瓦1は長さ2.7cm以上、最大幅1.8cm、高さ0.9cmあり、玉縁は欠損している。凸面はミガキで仕上げられ、凹面には布目が残る。

3)まとめ

当調査地では難波宮期に当る遺構は見つからなかったが、小型丸瓦1や縄タタキの平瓦2が出土した。1は時期は不明であるが、おそらく前期難波宮に関係するものであろう。また、後期難波宮期の瓦は当調査地だけでなく、近隣でも多く出土している。当地が上町台地の東斜面に当り、付近に瓦窯があった可能性も残される。

註)

(1)この井戸は施主と工事業者の協力により、砂で埋められて保存されている。

(2)獣骨の同定は大阪市立自然史博物館の樽野博幸氏に依頼した。

第4節 NW89-17次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW82-21・86-11・86-12・89-17・92-9次調査を報告する(図41)。NW86-12・89-17・92-9次調査地は、前期難波宮朝堂院回廊の南東隅の東側、NW86-11次は南側に位置する。上記4調査はいずれも建物の建替えに伴う調査で、NW82-21次調査は配水管埋設に伴うものである。

2) 調査の結果

i) 層序

ほとんどの地点で近現代や徳川期の盛土を除去すると地山が露出したが、NW82-21次調査のB地点で厚さ約0.6mの暗褐色粘土質細粒砂層を検出した。この地層はNW32次調査[難波宮址顕彰会1969b]およびNW128次調査[大阪市文化財協会1981a: pp.44-45]で検出された谷地形を埋める整地層に共通する。NW128次では谷の埋土が上下に分かれ、それぞれ前期・後期難波宮期に当たることが明らかになっている。NW86-11次調査地は近世に攪乱され、難波宮期の遺構は残っていなかった(写真5)。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前の遺構

NW86-12次調査地で2基、NW89-17次調査地で5基の柱穴を確認したが、いずれも組合わない(図42)。NW85-34次やNW160次調査でも同様の柱穴が見つかった。

b. 難波宮期の遺構と遺物

NW86-12次調査

SA701(図42、写真6、図版7上) 2基の柱穴SP701・702を検出し、これがNW85-34次調査

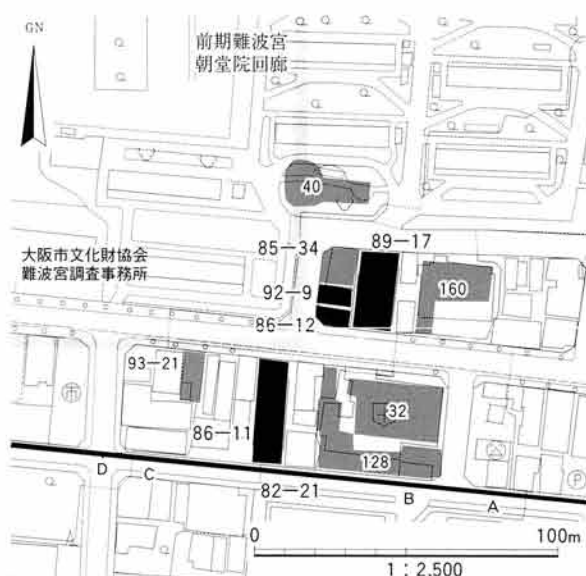


図41 NW89-17次などの調査地位置図



写真5 NW86-11次調査地完掘状況(南から)



写真6 NW86-12次調査地遠景(西から)

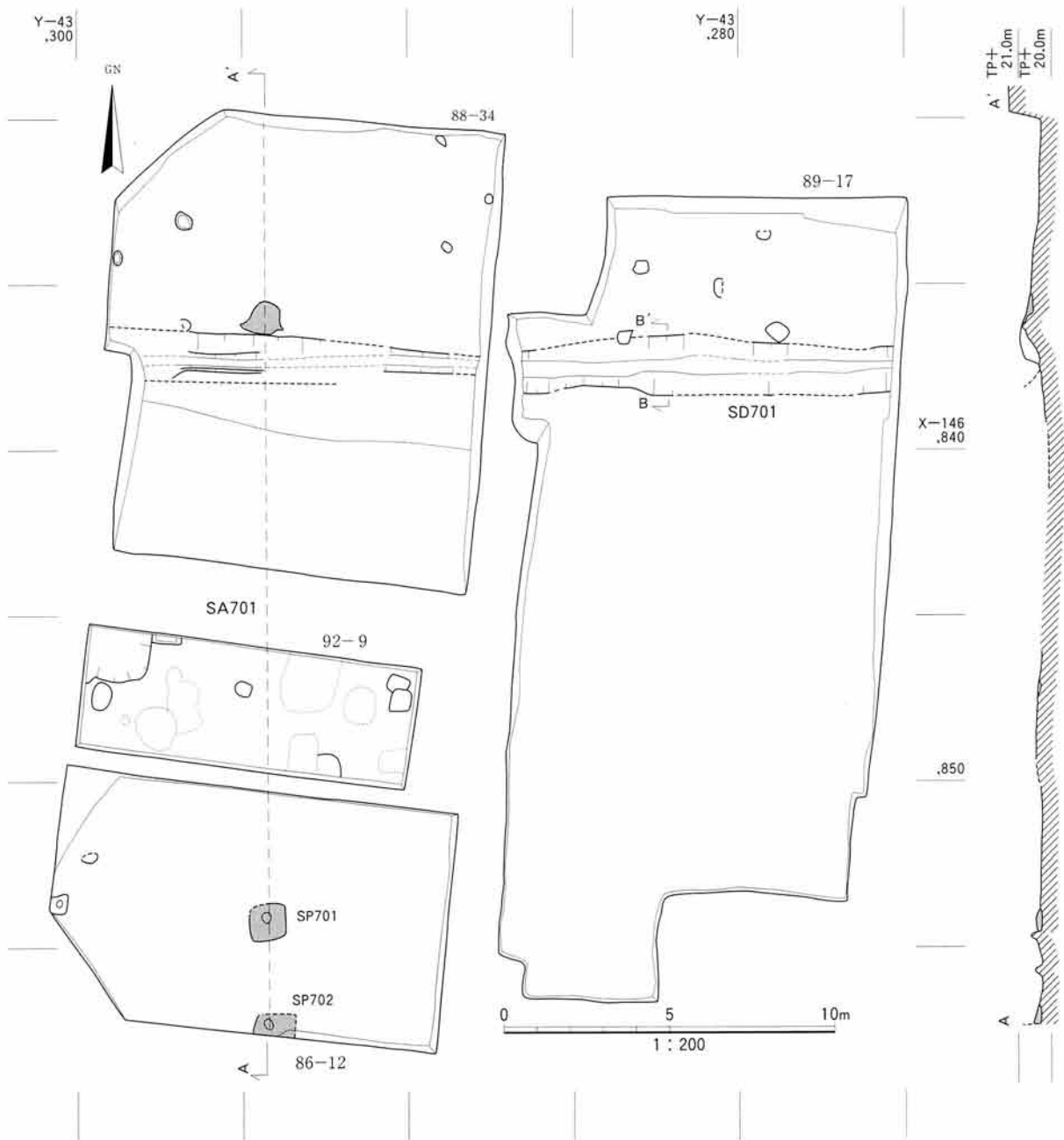


図42 NW89-17次などの調査地平面図

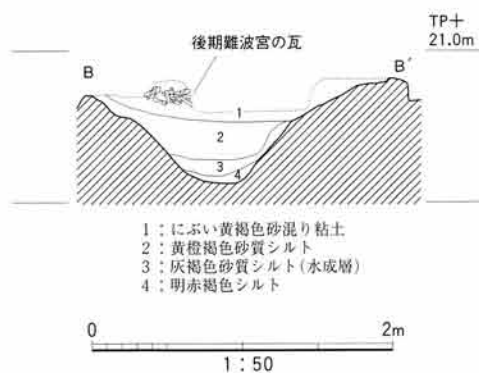


図43 NW89-17次SD701断面図

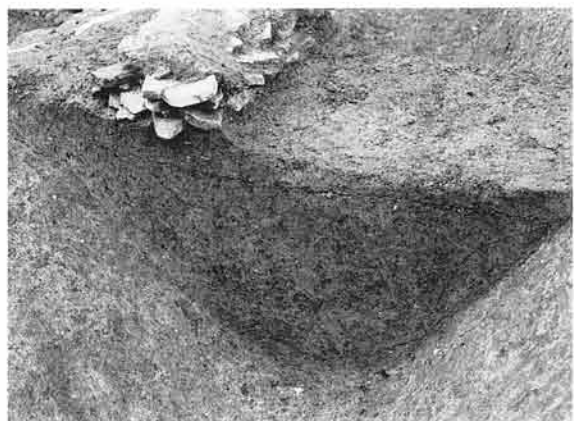


写真7 NW89-17次SD701断面と瓦溜検出状況

[大阪市文化財協会1985]の柱穴と同一直線上に並ぶため、一連の塀と考えた。SP701は東西1.1m、南北1.0mの掘形をもち、柱痕跡は直径0.3mある。SP702は掘形が一辺1.0mあり、柱痕跡の直径が0.3mある。これらの柱間の距離は2.98mである。同調査地内やNW89-17・92-9次調査地では攪乱が大きかったため、検出できなかったが、SP701の約17.7m(≒6間)北にはNW85-34次調査地の柱穴がある。後述する後期難波宮期の溝SD701がNW85-34次調査地の柱穴を切っていることから、前期難波宮期になる可能性がある。

NW89-17次調査

SD701(図42・43、写真7中) 最大幅約1.8m、深さ0.65mの素掘り溝で、底の標高は東側が低くなる。埋土は4つに区分できる(図43)。4層は加工時形成層で、3層は水成の砂質シルト層の機能時堆積層である。この溝の延長は東隣のNW160次、西隣のNW85-34次調査地でも検出されている。なお、3層からは重圈文軒平瓦5・7が、1層からは重圈文瓦を含む多量の瓦が出上した(写真7)。

出土遺物には重圈文軒丸瓦1・2、同軒平瓦5~14、同鬼板3・4がある(図44・45、図版21)。

1の瓦当は直径18.1cm、第1圈内径3.7cm、第2圈内径7.4cm、第3圈内径12.4cmある。2は第1圈内径が3.7cm、第2圈内径7.4cm、第3圈内径は推定12.4cmある。これらは6016型式と思われる。

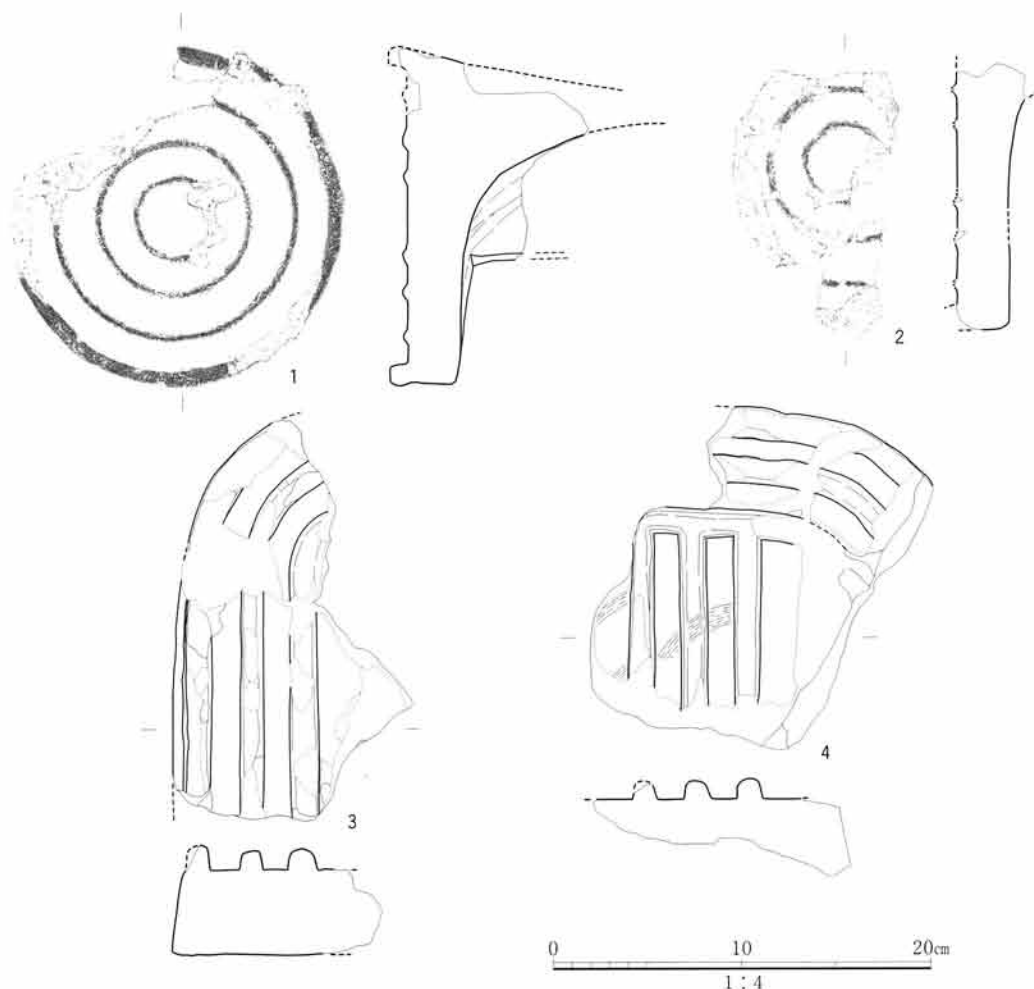


図44 NW89-17次SD701出土の重圈文軒丸瓦・鬼板
SD701-1層(1~4)

表9 NW89-17次SD701出土の重圈文軒平瓦観察表

番号	型式	瓦当			上外縁		下外縁			色調	硬度	凹面	凸面
		厚さ	圈内厚	圈外厚	内区厚	幅	高	幅	高				
5	6574C	6.2	1.8	3.5	—	0.5	0.5	0.8	0.4	灰色	やや軟	ケズリ	—
6	—	—	—	—	—	0.7	0.5	—	—	橙色	硬	—	—
7	6574D	5.9	1.9	3.7	4.7	0.6	0.4	0.3	0.4	灰色	やや軟	ケズリ	—
8	6574C	6.2	1.9	3.5	4.7	0.6	0.4	0.5	0.4	灰色	やや軟	—	—
9	6574D	—	2.0	3.6	—	0.6	0.5	—	—	灰白色	やや硬	ケズリ	—
10	—	—	1.9	3.5	—	0.4	0.4	—	—	灰色	やや軟	—	—
11	6574C	6.2	2.1	3.6	4.8	0.6	0.4	0.7	0.4	灰色	やや軟	ケズリ	ケズリ
12	—	—	—	—	—	0.5	0.3	—	—	灰色	やや軟	—	—
13	6574C	6.1	2.0	3.4	4.5	0.7	0.4	—	—	灰色	硬	ケズリ	ナデ
14	6574C	—	1.9	3.4	—	0.6	0.5	—	—	灰色	硬	ケズリ	ナデ

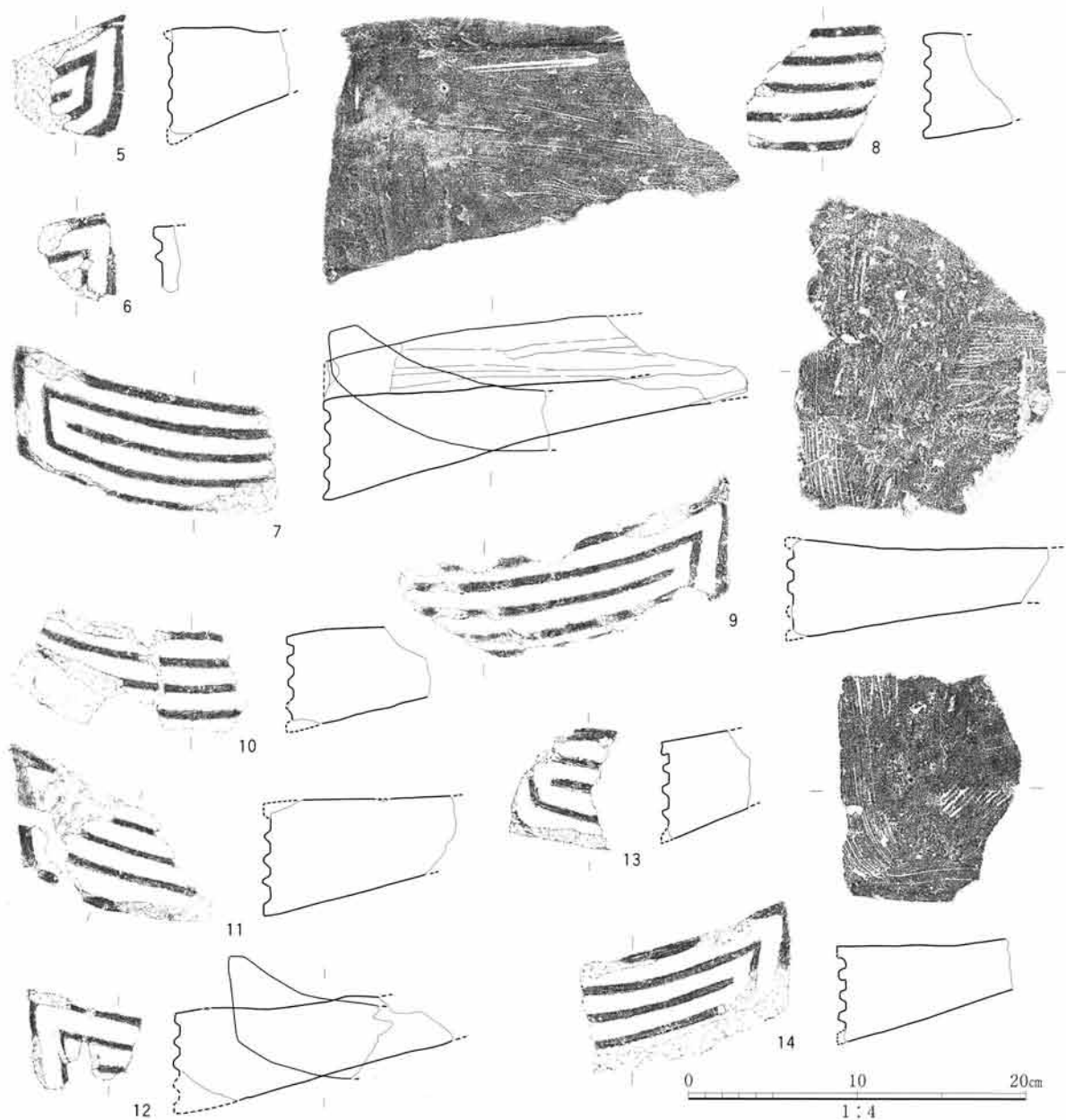


図45 NW89-17次SD701出土の重圈文軒平瓦
SD701-3層(5・7)、同1層(6・8~14)

3は3条の凸線が直線的に伸び、途中で右に曲がることから、左側縁部に当ると思われる。一番外側の凸線と側面の間には幅0.1cmほどの段がある。側面は縦方向のヘラケズリが施される。後期難波宮大極殿で出土した6921型式[大阪市文化財協会1995：図版15-160]と凸線の太さや間隔がほぼ等しい。4は3条の平行する直線と弧線の凸線が結合している。鬼板の中心部分とも考えられるが、直線と弧線の交わりが直角ではなく86°であり、釘孔も見られず、不自然である。また、瓦当面に斜め方向に伸びる擦痕は、型に押し込む粘土を切った際の糸切り痕と思われる。

軒平瓦については表9にまとめた。型式のわかるものはすべて6574C・Dである。瓦当は完存していないため、上弦幅・下弦幅・弧深は不明であり、掲載していない。7は凹面には縦方向のヘラケズリが施されている。表面が黒く瓦質焼成である。9は凹面の瓦当に近い側には横方向の、それ以外は縦方向のヘラケズリが施され、一部布目痕が残っている。

なお、SD701周辺では南西部を中心に多量の瓦が出土しているが、後期難波宮期のほかの遺構は見つからなかった。

NW82-21次調査

C地点では東西幅1.8m以上、深さ0.6mの土壇状の落込みを検出した。ここからは土師器の細片とともに、縄タタキの瓦が多数出土した。

同D地点では一辺約1m、深さ0.9mの柱穴を検出した。この柱穴はNW86-2次調査の「前期難波宮東朝集殿」SB704東側柱列の北側延長に当る(第Ⅲ章第3節の図77)。

3)まとめ

本調査地は前期・後期難波宮朝堂院の南東に位置し、各時期に該当する遺構を検出した。

前期難波宮に該当すると思われる堀SA701は、NW40次で検出された朝堂院東回廊の東側柱列を南

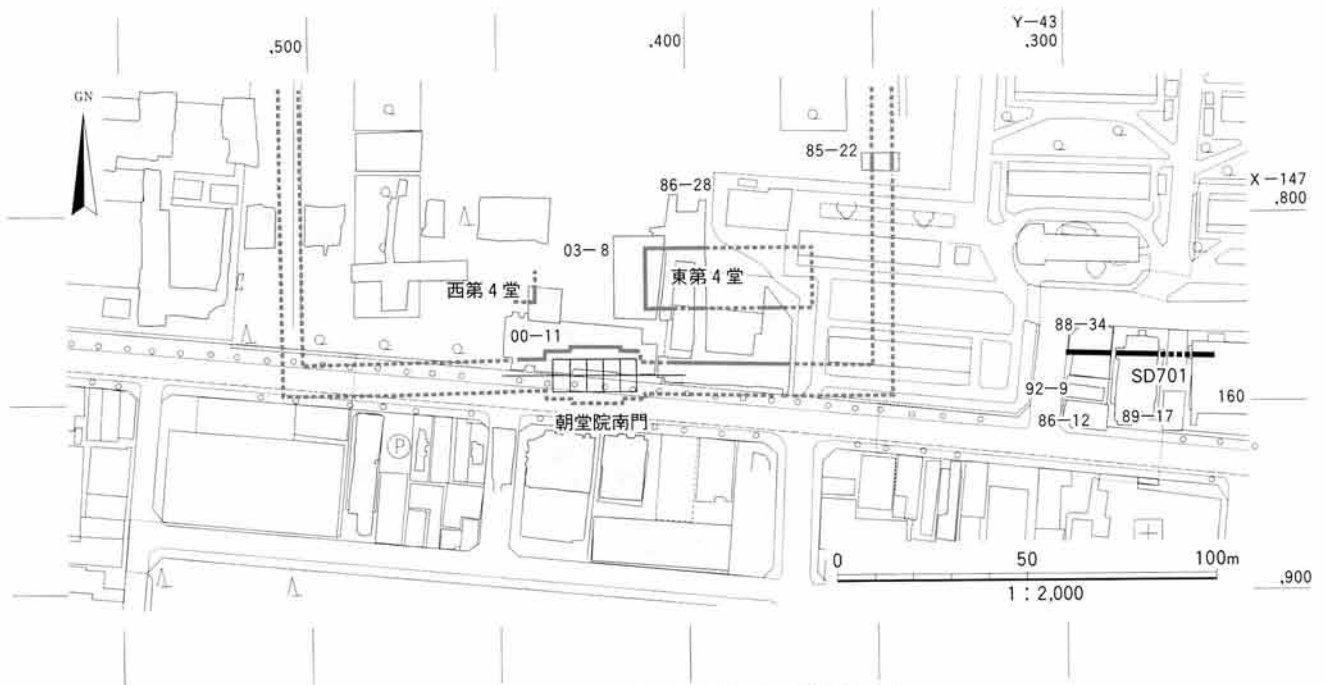


図46 調査地周辺の後期難波宮期の遺構配置図

に延長させた線から約12.2mの距離にある。

後期難波宮期の遺構・遺物としては、NW89-17次調査のSD701とその上層の瓦溜である。SD701は前述したとおり、NW160次やNW85-34次の溝と一連のもので、後期難波宮の遺構配置と合成させると図46のようになる。これを見ると朝堂院南側回廊とはほぼ同じ方向であるものの、SD701の延長が回廊の北辺に重なるわけでもなく、現状では特に有意な点は窺えない。当調査地より東側が急激に低くなることから、排水用の溝と考えられる。

また、出土した瓦の型式は軒丸瓦が6016型式で軒平瓦が6574C・Dであり、NW85-34次調査で出ている軒平瓦も同様の型式である[大阪市文化財協会1985]。こういった型式の瓦は後期難波宮創建時のものと想定されていて、6574C・D型式の軒平瓦については中軸線よりも東に多い傾向があるという[八木久栄1989・1995]。

(寺井)

第5節 NW94-20次および86-23次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではガス管埋設に伴うNW86-23次調査と、大阪女学院の校舎建替えに伴うNW94-20次調査を報告する。前者は大阪女学院・大阪クリスチャンセンターの西側で1個所(A区)、市立聾学校の南側で2個所(B・C区)行われた。いずれもトレンチ幅が0.5mと細かったため、包含層の有無を確認するに留まった。

後者の調査地は前期難波宮「朱雀門」(宮城南門)跡(第Ⅲ章第3節)の東約300



図47 NW94-20・86-23次調査地位置図

mの地点に位置する。2回の試掘調査で大きな落込みを検出し、堀が存在すると想定されたことから本調査に至った。その結果、豊臣期の木簡などの遺物が出土し、その下位には堀ではなく飛鳥時代に埋められる谷地形が存在することが明らかになった。本節ではこの調査の成果を中心に報告する。

2) 調査の結果

i) 層序

NW86-23次調査のA区は古代の南北溝が検出されたNW81-30次調査地(図51)の北側に当たるため精査したが、削平のため遺構は検出されなかった(写真8)。B区では褐色の砂混りシルト層が確認され、難波宮廃絶後の整地層と考えられる。C区では近世の整地層を確認した。また、NW94-20次調査地は以下のような地層を確認することができた(図48)。括弧内は[黒田慶一1996b]で用いられた地層名である。

第4b層(第1層)：暗オリーブ～黄褐色の砂礫や粘土の偽礫からなる整地層で、厚さは3m以上ある。北側から斜行した堆積が見られることから、北側から埋められたことがわかる。16世紀末頃の陶磁器が出土したことから、三ノ丸造成に伴う整地層と考えられる。

第4ci層(第2層)：暗オリーブ色シルト質細粒砂の作土層である。上面で0.6～0.8m間隔で畝が検出された。豊臣前期に位置づけられる。

第4cii層(第3層の上部)：灰オリーブ～黄褐色粘土質粗粒砂層で、最大厚は0.6mある。豊臣前期に



写真8 NW86-23次A区北壁断面

位置づけられる瀬戸美濃焼天目碗21が出土した。

第5a層(第3層の下部)：暗オリーブ灰色粘土質粗粒砂層で、最大厚は0.9mある。[黒田1996b]では本報告の第4cii層と一括して扱われているが、調査時は掘り分けられていて、下部の層からは陶磁器が出土していないことから、豊臣期よりも古い時期の地層と判断した。

第5b層(第4層)：暗緑灰色粘土質砂礫層である。最大厚は0.6mある。10世紀頃に位置づけられる須恵器碗16や円面硯17が出土した。

第7b層(第5層)：暗緑灰色細粒砂層で、最大厚は0.5mである。出土遺物は難波Ⅲ中段階に位置づけられることから、前期難波宮造営の頃の整地層であろう。

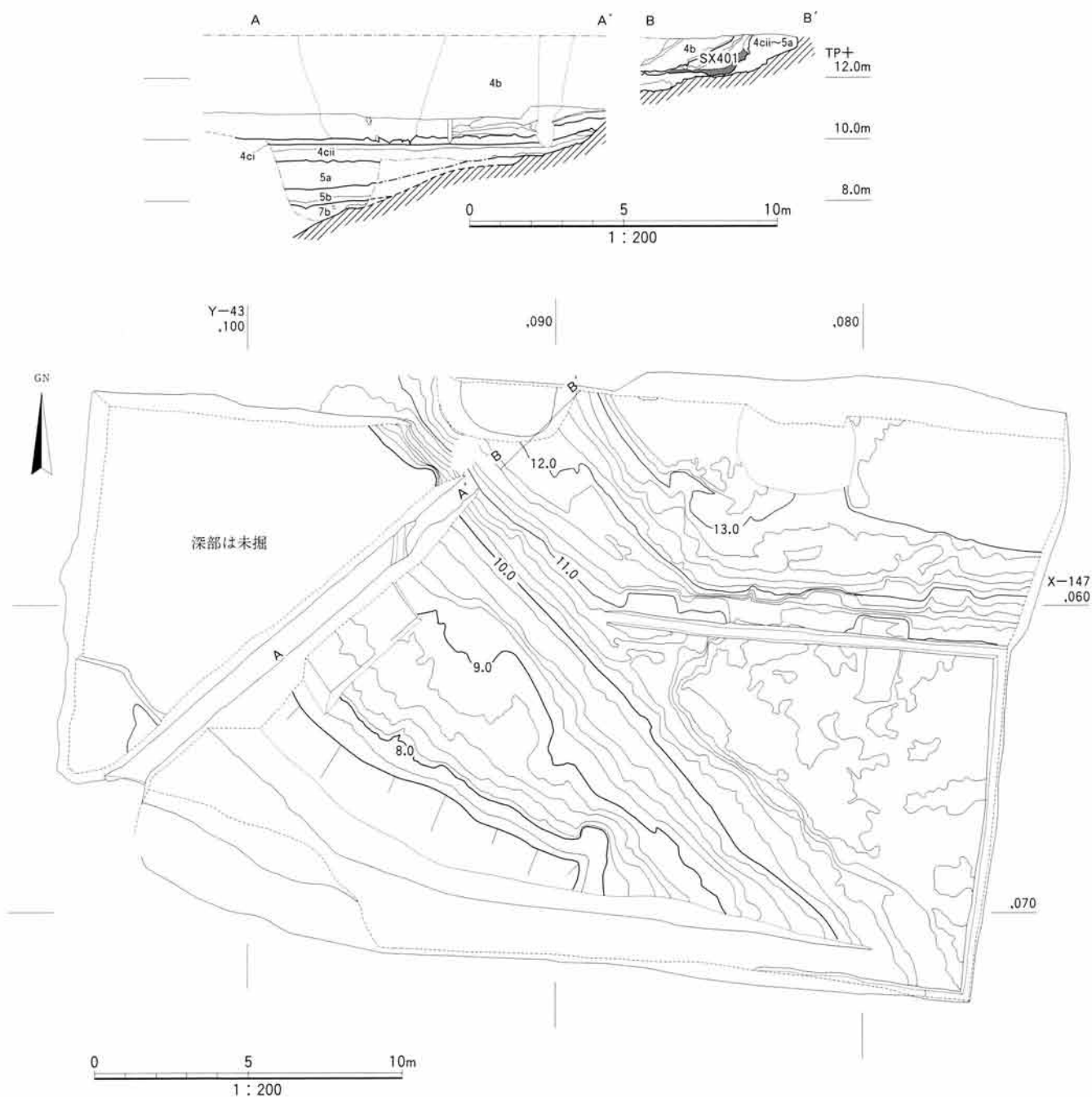


図48 NW94-20次断面図および地山上面平面図

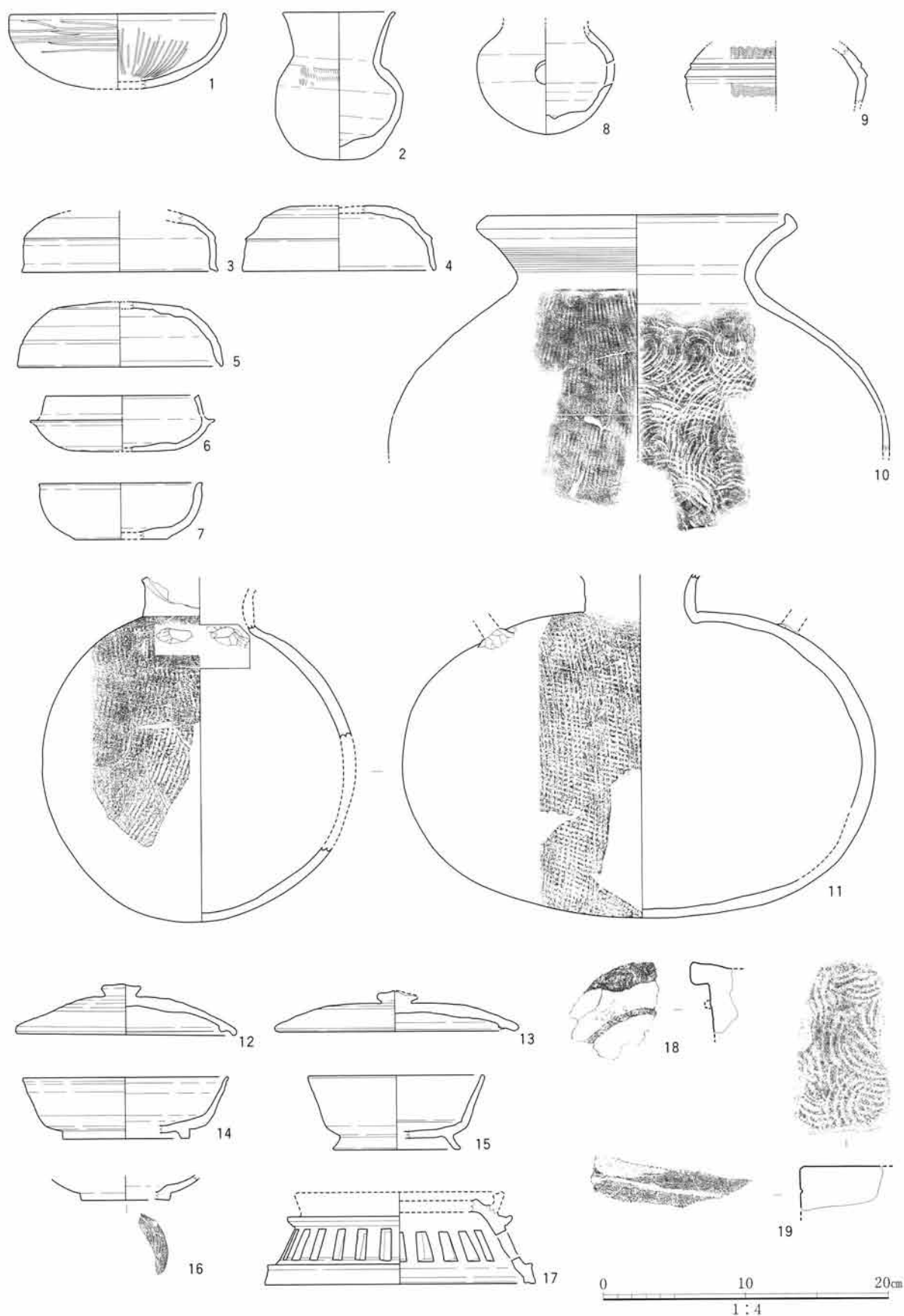


図49 NW94-20次出土遺物(古代)

第7b層(1~11)、第5b層(16・17)、第5a層(18・19)、第4cii層(12~15)

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮期およびその前後の遺物

当調査地では北西－南東方向の谷地形が検出された(図48、図版7下)。北西に位置するNW81－30次調査地でも南東で大きな落込みが見つかっており、これらは一連のものと思われる(図51右)。

谷を埋める地層から前期難波宮造営前後の遺物が多量に出土した(図49)。

第7b層からは土師器杯C1、壺2、須恵器杯H6、同蓋3～5、杯G7、甕8、壺9・10、横瓶11が出土した。1は内面に放射状の暗文が、外面にはヨコミガキが施される。7は口径11.3cm、器高4.0cmある。底部はヘラ切り後に調整が施されていない。11は肩部に環状の把手が一對貼付けられる(図版21)。この中で3～6、9は古墳時代のものであるが、1・7は難波Ⅲ中段階の指標となる遺物である。

以下、遊離資料であるが重要と思われる遺物を列記する。

12・13の須恵器杯B蓋はいずれも短いかえりをもつ。14・15の同身は高台が内寄りに付くことから難波Ⅳ古段階に位置づけられる。遊離資料の中にはこの時期の須恵器が多くあった。

16は須恵器椀である。底部には回転糸切り痕が残り、体部は内湾気味に伸びる特徴は京都府亀岡市の篠窯産のものに共通する[石井清司1995]。10世紀頃に位置づけられ、第5b層の下限を示すものであろう。

17は須恵器円面硯である。陸の縁には低い堤があり、台脚には長方形のスカシが巡る。陸の部分に自然釉が付着することから正置の状態で窯詰めされたことがわかる。

18は重圈文軒丸瓦である。残存状況が悪いが、外縁の幅が1.5cmと大きいことから6011A型式に該当すると思われる。19は素文軒平瓦である。瓦当には沈線が1条施され、凹面には同心円文が残る。前者の特徴は大韓民国の百済烏含寺[李タウン1999]や四天王寺[四天王寺文化財管理室1986：p.36]に類例が求められ、いずれも7世紀第一四半期に位置づけられるものである[李タウン1999、網伸也1997]。また、当て具痕が付く瓦は飛鳥寺創建時など瓦陶兼業窯で焼かれた製品にしばしば見られる[田中琢1984]。

b. 豊臣前期の遺構と遺物

自然地形の傾斜に直交もしくは平行する畝をもつ畠を検出した。作土(第4ci層)から瀬戸美濃焼碗23・常滑焼甕22・金箔押し熨斗瓦24・墨書された曲物の蓋43が出土した。43の積文は[黒田ほか1996]に従った。下位の第4cii層からは瀬戸美濃焼天目碗20・青磁碗21が出土した。

SX401(図48) 地山の高い部分で検出した落込みである。埋土は腐植土を多く含む灰黄褐～黒褐色の細礫を含む粗粒砂である。出土遺物には土師器皿25～35、青花碗36・37、備前焼水注38、同播鉢39、瀬戸美濃焼皿40、木簡41・42がある(図50)。25は底部に墨書があり、29・32・33には煤が付着している。36は口縁端部が短く外折する。37は饅頭心の底部である。38は水注で、把手の部分は残っていない。

41・42の積文は[黒田ほか1996]に従った。42の「てつはう」は鉄砲のことで、「鉄砲33挺を、5挺ごとと結わえて運ぶ」という意味であろう。「<□」については、判別できる文字が「の」のみであり、[黒田1996b]のように「たつの」と読むのは困難と思われる(註1)。

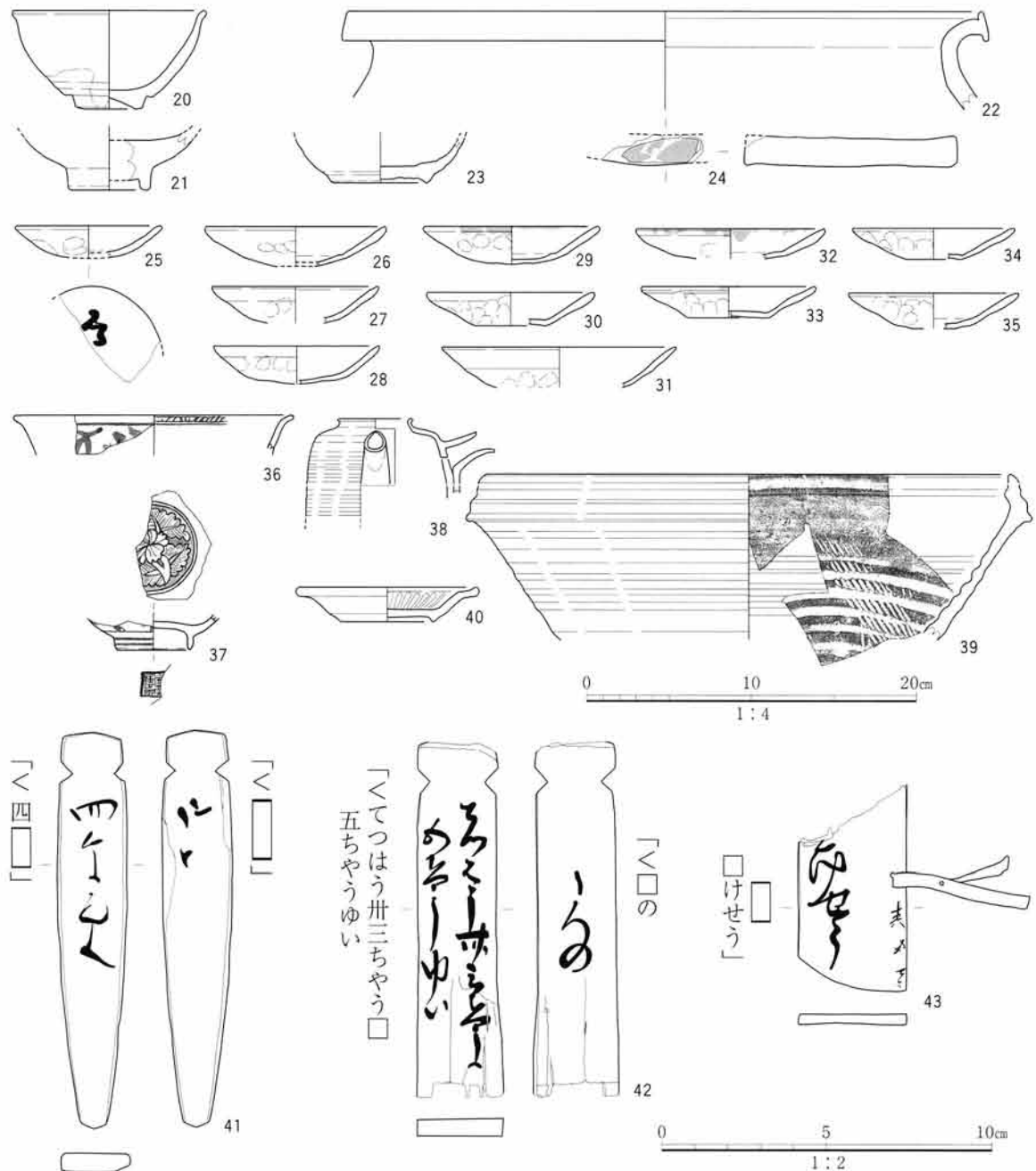


図50 NW94-20次出土遺物(豊臣期)

第4cii層(20・21)、第4ci層(22~24・43)、SX401(25~42)

3) まとめ

i) 難波宮期

本節で報告したNW94-20次調査地は埋没谷に当り、そこからは古墳時代から豊臣前期に至る遺物が多く出土した。特に、前期難波宮造営期の整地層が確認されたことは重要である。一方、遊離資料の中に7世紀後葉の須恵器が多く含まれていることは、上町台地東斜面で同時期の遺物が多く出土していることと共通し[積山洋1999]、この時期に開発のピークがあったと考えられる(第V章第1節)。

また、前期難波宮期の整地層は道路を挟んで向かい側のNW81-30次調査地でも見つっている。その整地層は最大層厚が2mを越え、難波Ⅲ中段階の遺物を含んでいた(図51左-1~5)[大阪市文化

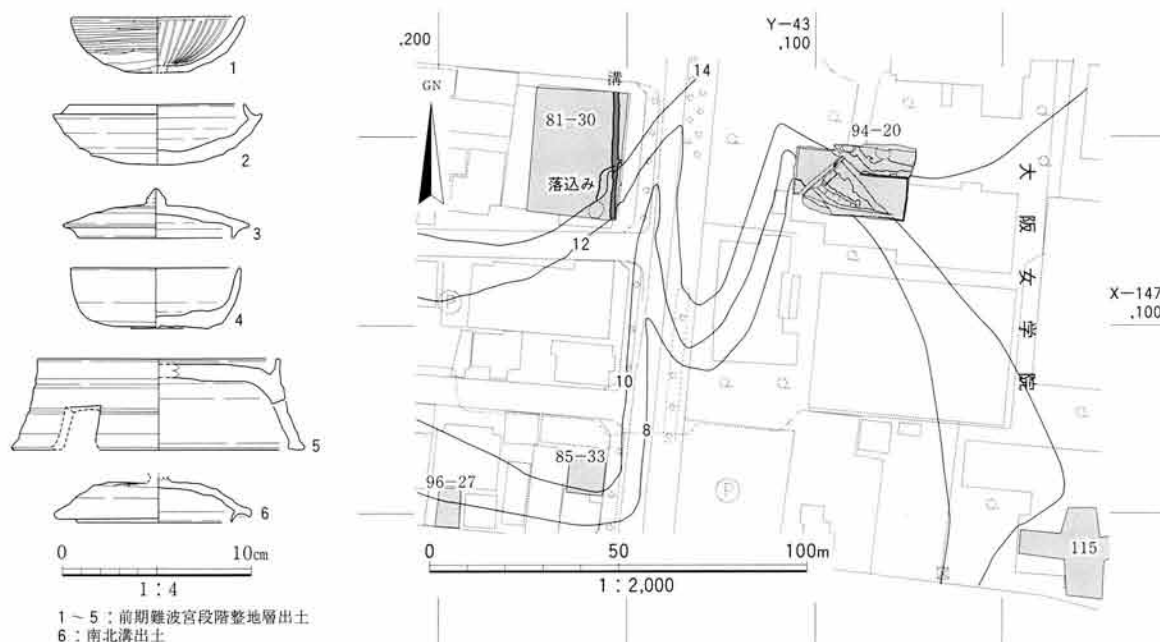


図51 NW81-30次出土遺物および調査地周辺地形復元図

財協会1982]。また、整地層の上面はほぼ正南北の溝を検出した(図51右)。この溝は幅1.3~1.8m、最大深0.45mあり、難波Ⅲ中段階の須恵器杯G蓋が出土した(図51左-6、註2)。

以上の調査地は、前期難波宮の東限をNW84-6次調査地(本章第1節)、南限をNW93-5次調査地(第三章第3節)とした場合、宮域の南東隅よりも外になる。加えて、想定宮域の南東部も台地の傾斜面であり、難波宮期の建物は見つかっていないため、当地一帯は宮域外に当ることは確実である。NW81-30次の溝の性格についても、十分な検討を要するが、整地後に掘られているということで、宮殿造成に伴う道路側溝や排水溝の可能性が高い。

ii) 豊臣期

NW94-20次調査地は試掘時の見解では大きな堀状の遺構が存在すると想定されたが、報告のとおり自然の谷地形であった。ただ、自然の谷地形の傾斜を利用して畠を作り、その後の大坂城の拡張に伴う造成により埋められるという状況は、OS99-16次調査地と共通する[大阪市文化財協会2002a]。この造成は大坂城三ノ丸造成に伴うものと考えられる。

また、[黒田1996b]などで取り上げられた42の木簡については、「<□>の」が「たつの」と読めるという前提で文禄3~4(1594~95)年に龍野城主であった小出吉政に関連させられたが、本節で記したとおり「たつの」と読むのは困難である。しかし、鉄砲を注文するのは大名以外には考えられず、豊臣氏大坂城下の大名屋敷に関連する資料として重要であることには変わりない。

(寺井)

註)

(1) 当協会内で検討した結果、「たつの」と読むのが困難と考え、本報告はそれに従った。

(2) 溝の年代について調査時の見解では「後期難波宮の瓦片」が出土したということで後期難波宮期に位置づけているものの、少量であり、溝廃絶後の整地層からも瓦片が出土している。よって、溝出土の瓦片も溝が埋没した後の窪みに含まれる可能性があると考え、ここでは前期難波宮期に位置づけることにした。

第Ⅲ章 宮殿南方地域の調査

第1節 NW88-21次および82-39次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW88-21・82-39次調査について報告する(図52)。

NW88-21次調査地は、前期難波宮朝堂院南門が検出されたNW45次調査地の南隣に位置する。東隣のNW41次調査ではあまり大きな攪乱を受けていないにもかかわらず、特に顕著な遺構が検出されなかったということで、NW88-21次調査は朝堂院南門の南側の土地利用を考える重要な調査であった。なお、旧建物のコンクリート基礎が残ったままで本調査が行われたため、その基礎によって地区分けを行なった。

NW82-39次調査は電柱の設置に伴って、難波宮跡公園の南辺に10個所のトレンチを設けたものである。いずれのトレンチも難波宮に関する遺構・遺物や地層は発見されなかったが、GL-0.5~1.0mで地山が検出されたことからそれほど削平は進んでいないと考えられる。

本節ではNW82-21次調査の内容を、周辺調査の成果を交えて報告する。

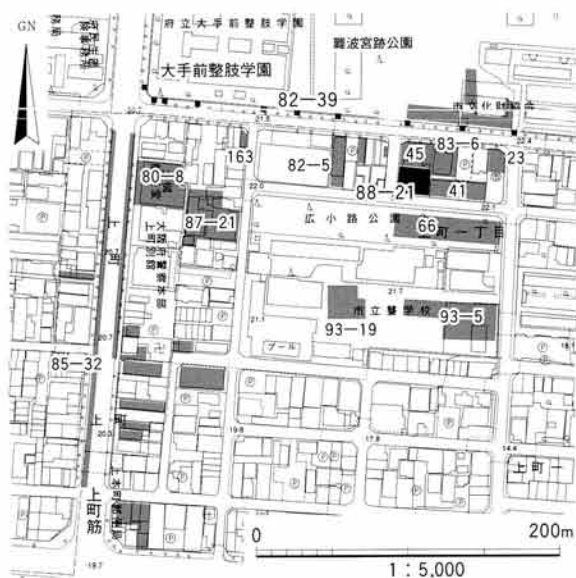


図52 NW88-21・82-39次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図53)

NW88-21次調査地では近代以降・近世・中世の地層を確認した。中世の第5層からは少量の瓦器とともに、後期難波宮期の瓦を多く含む。

ii) 遺構と遺物

SD501(図53) 幅1.7m、深さ0.4mの南西-北東方向に延びる溝である。埋土中に後期難波宮期の瓦が多量に含まれていたが、瓦器が少量出土したことから、中世の溝と判断した。なお、溝周辺で検出されているピットも中世のものと思われる。

この溝以外に顕著な遺構は見られなかった。

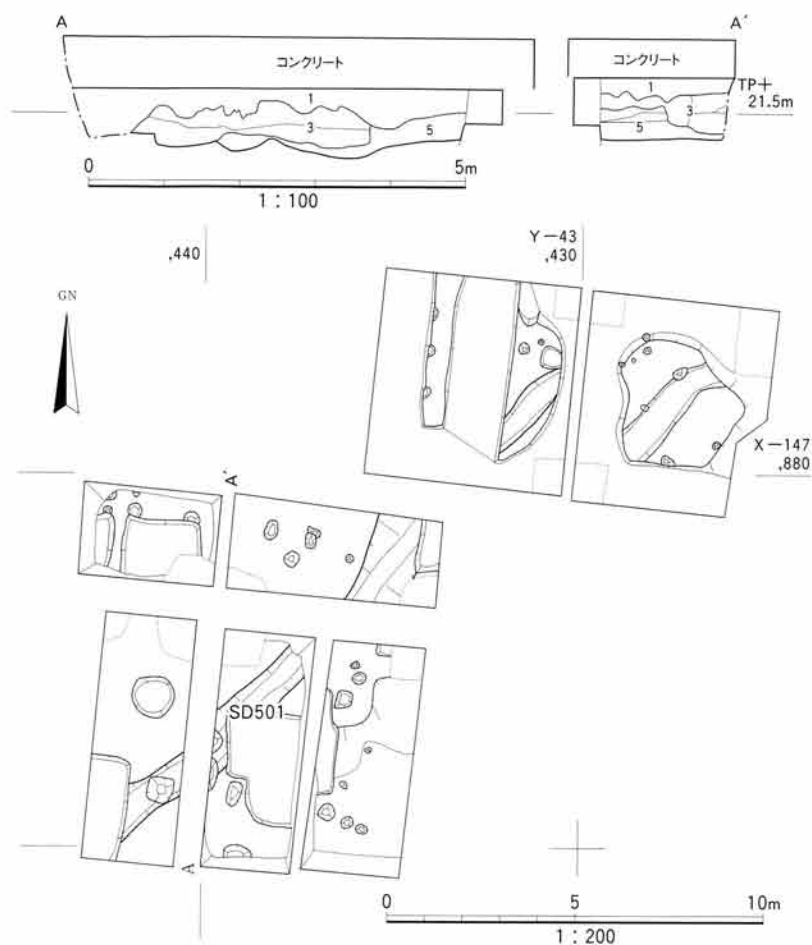


図53 NW88-21次調査地平断面図

3)まとめ

NW88-21次調査地では難波宮期にまでさかのぼる遺構は検出されなかった。ただ、中世の遺構は残っていたことから、それほど削平は被らず、本来的に遺構が存在しなかったのであろう。東隣のNW41次調査でも同様の結果が得られている。当地が前期難波宮朝堂院南門のすぐ南側であり、後期難波宮においても朝堂院南門に近接した位置にあることから(図54)、いずれの時期も空閑地が広がっていたのであろう。

(寺井)

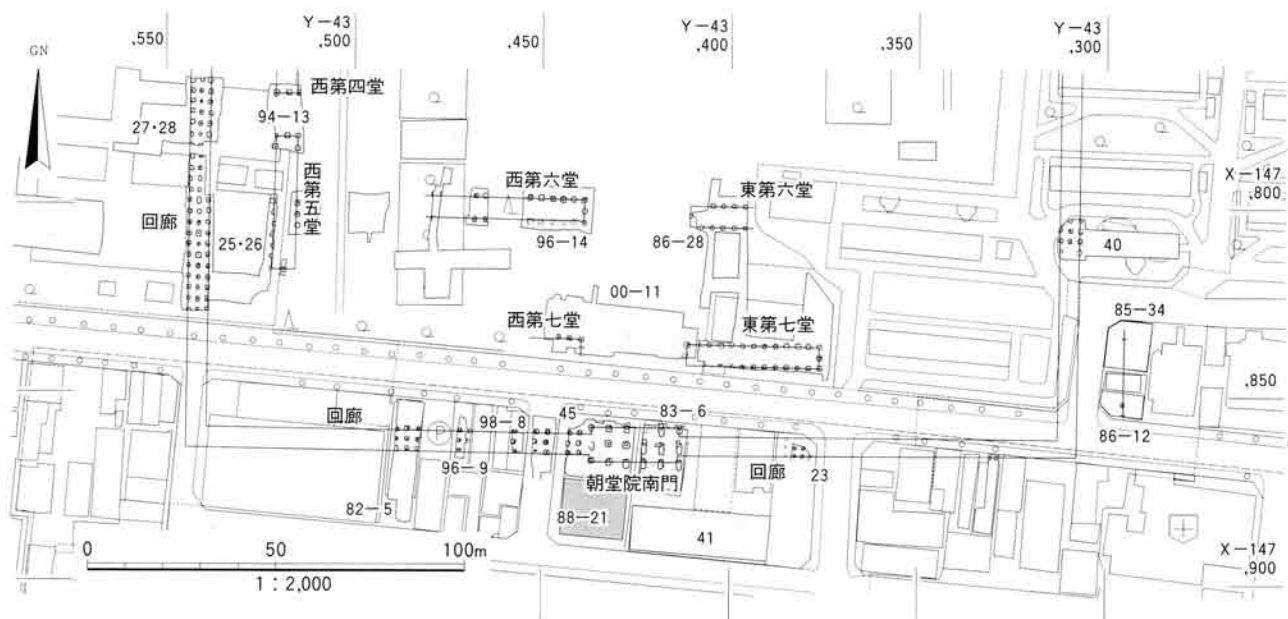


図54 調査地周辺の前期難波宮期の遺構配置図

第2節 NW87-21次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節で扱う調査はいずれも難波宮跡公園の南側で、上町筋およびその東側に位置する(図55)。

NW80-8次調査は大槻能楽堂建替えに伴う調査である。調査地内は攪乱が多く、難波宮期の溝と宮造営前の掘立柱建物や柱穴を検出したにすぎなかった。

NW85-32次調査は上町筋の下水工事に伴って夜間に行われた調査である。図55のように大きくI～Ⅲ区に大別して調査を行い、難波宮造営に伴うと思われる整地層や掘立柱列を検出した。

NW87-21次調査地はNW80-8次調査地の南東に位置する。調査地南側で大坂本願寺期に推定される巨大な堀(いわゆる「薬研堀」)を検出した。

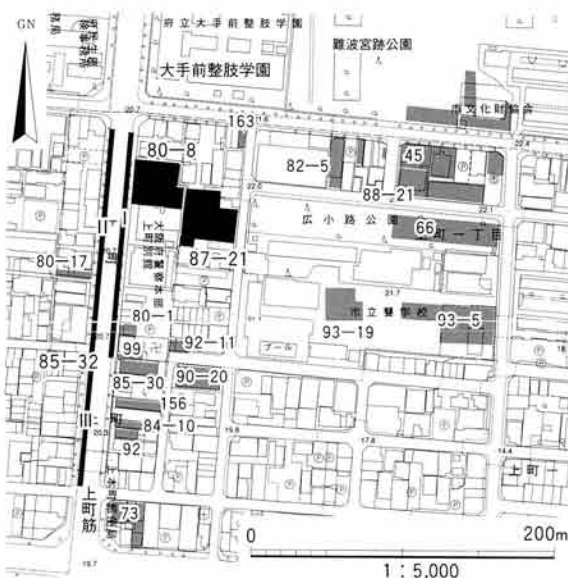


図55 NW87-21次などの調査地位置図

(I～ⅢはNW85-32次の各地区)

2) 調査の結果

i) 層序

NW80-8・87-21次調査地は徳川期以前の地層は残っていなかった。NW85-32次調査地は古代の地層も部分的に残っており、Ⅱ・Ⅲ区で記録した断面図

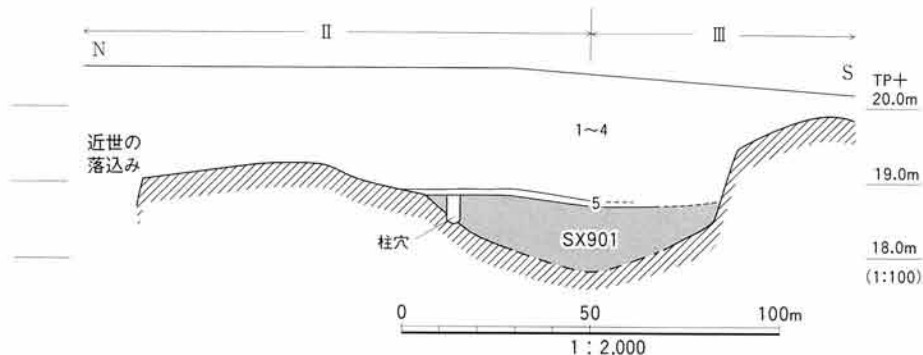


図56 NW85-32次層序模式図

を基にして、図56のような模式図を作成した。近世の整地層や中世の作土、古代の整地層(第7層)を検出したが、前2者については、夜間調査で観察時間が十分とれなかったため、広がり是不明である。

I区の一部やⅡ区の南側からⅢ区の北側にかけては、後述のSX901を埋める整地層が広がる。整地層の厚さは80cm以上ある。Ⅱ区の南側ではこの整地層の上から掘られたSA703の柱穴を検出した。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前の遺構

SX901と整地層(図56・58) SX901は北から南に延びると推定される谷地形で、Ⅱ・Ⅲ区の境界部

分ではTP+18.2m以下は地山を確認することができなかった。整地層はⅡ区の南側からⅢ区の北側にかけて幅約70mにわたって検出され、Ⅰ区では北寄りの地点で幅5mほどの窪み内に残っていた。整地層には須恵器杯Gが含まれていた。西約50mのNW90-29次調査地で前期難波宮期に整地された谷地形があることから(第Ⅳ章第3節)、SX901も同じところに整地されたものと考えられる。

SB801(図57、図版8上) NW80-8次調査地の北西部で検出された掘立柱建物の南東隅である。柱穴の掘形は一辺0.65m、柱間は約1.8mである。このほか、調査地内ではSD701の南側でも2基検出された。

SA801(図60) NW87-21次調査地の東部で南北に並ぶ柱穴を3基検出した。もっとも残りの良い北端のものは東西0.6m、南北0.7mで、柱間は約1.5mである。

以上の掘立柱建物と柱列は、柱穴が小さいために調査時は難波宮造営前と考えられていた。ただ、後述するSA702は難波宮期の整地層の上から掘られていて、規模はこの柱列に等しいため、これらの遺構は難波宮期に下る可能性も残す。

b. 難波宮期の遺構と遺物

SD701(図57、図版8上) NW80-8次調査地の南西部で検出した溝で、難波宮中軸線に直交する方向に延びる。

SA701~703(図58) SA701・702はNW85-32次のⅠ区で、SA703は同Ⅱ区で検出した。いずれ

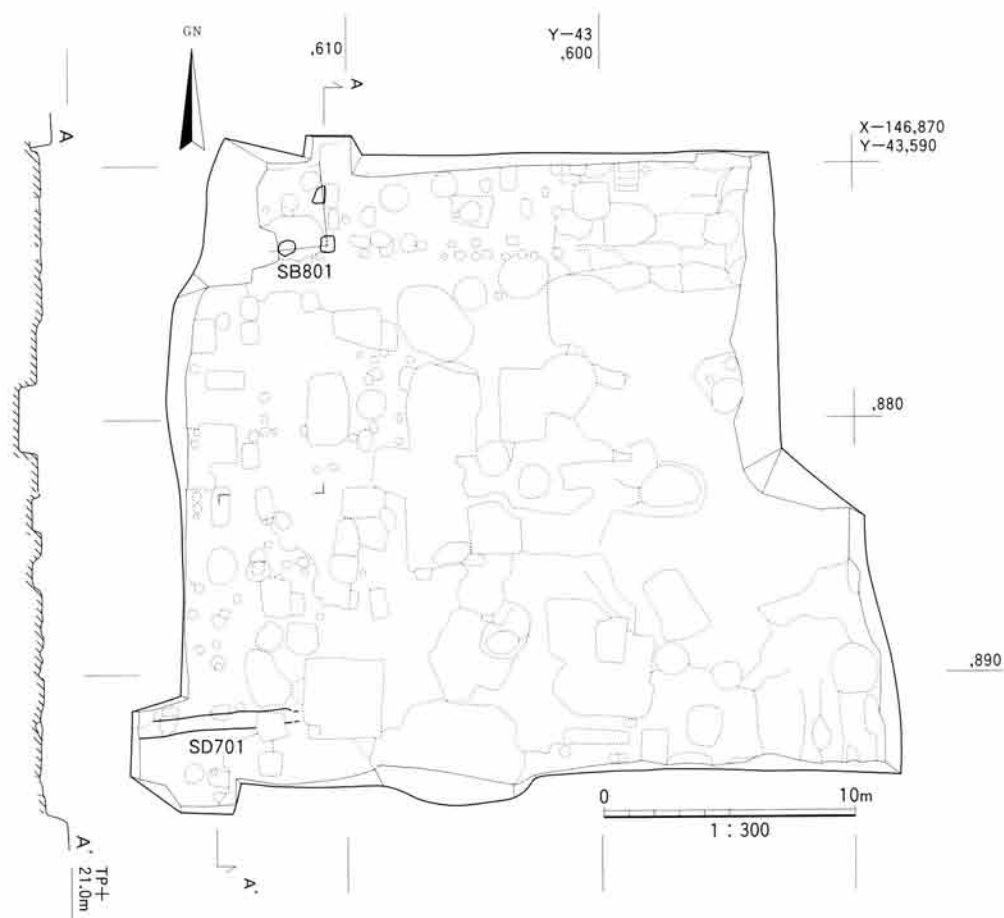


図57 NW80-8次遺構配置図

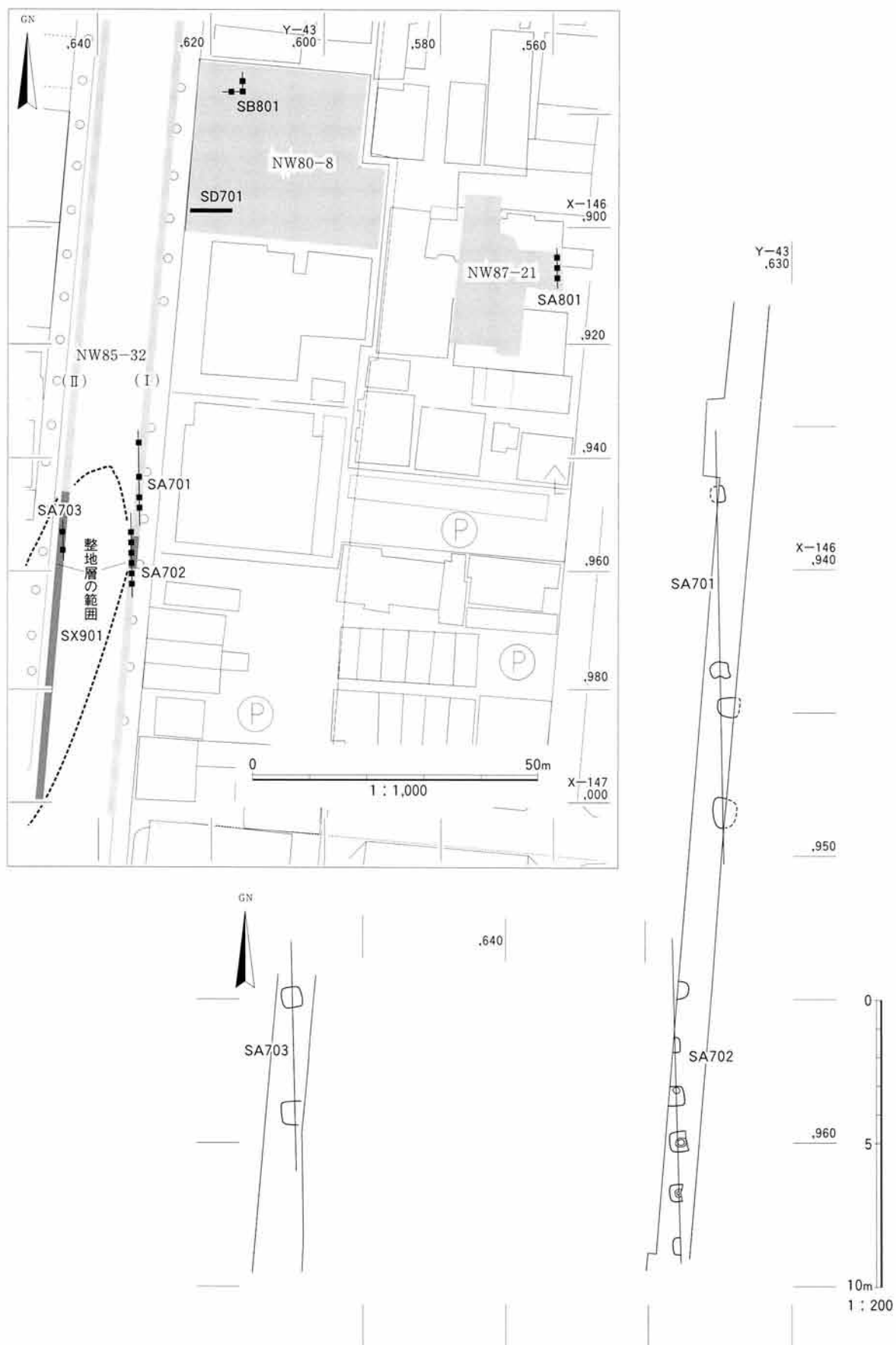


図58 NW85-32次平面図と周辺遺構分布図

も一辺0.5～0.6mの方形の掘形で、柱痕跡がわかるものは直径0.2mである。柱穴を6基検出したSA702は柱間は約1.8mである。細いトレンチのため柱列しか検出することができなかったが、本来は調査区外に柱穴が展開する掘立柱建物であった可能性もある。

なお、当調査地の徳川期の土壌から後期難波宮期の重圈文軒丸瓦1・唐草文軒平瓦2が出土した(図61)。1は6016型式に該当すると思われる。2は均等唐草文で、6664A型式に該当する。

c. 大坂本願寺期の遺構と遺物

SM501・502(図59・60、図版8中・下) 上幅が9.0m、深さが4.3mある巨大な堀で、幅7.3mの陸橋を挟んで西をSM501、東をSM502と呼ぶことにした。ほぼ正東西に延び、断面はV字状で、底から0.5mあまりはにぶい黄褐色細粒砂の水成層が堆積し(3層)、それより上は人為的に埋められていた(2層)。なお、1層はSM501が埋められた後の陥没に堆積した徳川期以降の層である。この調査地の西約50mに当るNW85-32次調査では続きは見つからなかった。

3層から多量の瓦が出土し、その中で巴文軒丸瓦3、波頭文軒平瓦4、丸瓦5・6、雁振瓦7、鬼板8を図示した(図61)。3は直径約14cmに復元することができる。4は瓦当の幅21.0cm、瓦当厚3.3cmあり、小振りである。5～7は凹面に糸切り状のコビキ(コビキA)がよく残っており、室町時代後半の特徴を有する。5は玉縁が付くが、6は先端が急に縮まり、行基瓦のようになる。7は全長26.8cmで幅は22cmに復元できる。8は葉の表現がある。接合はしないが、桃の実のような破片もあるため、鬼ではなく桃の葉と実を造形したものと思われる。

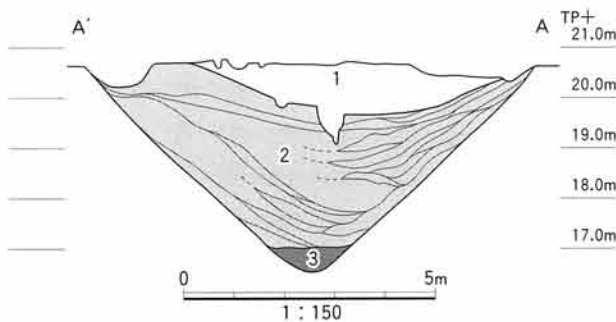


図59 NW87-21次SM501断面図



写真9 NW87-21次SM501瓦出土状況

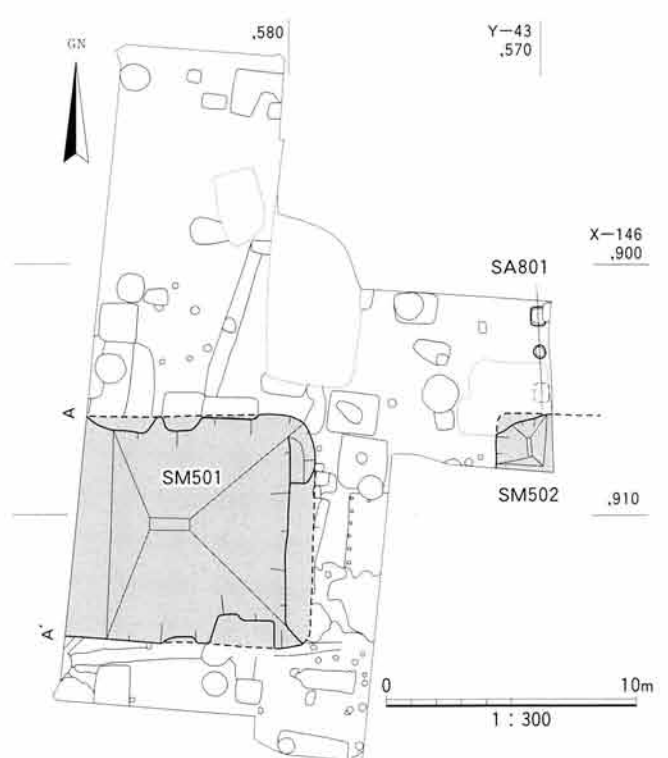


図60 NW87-21次遺構配置図

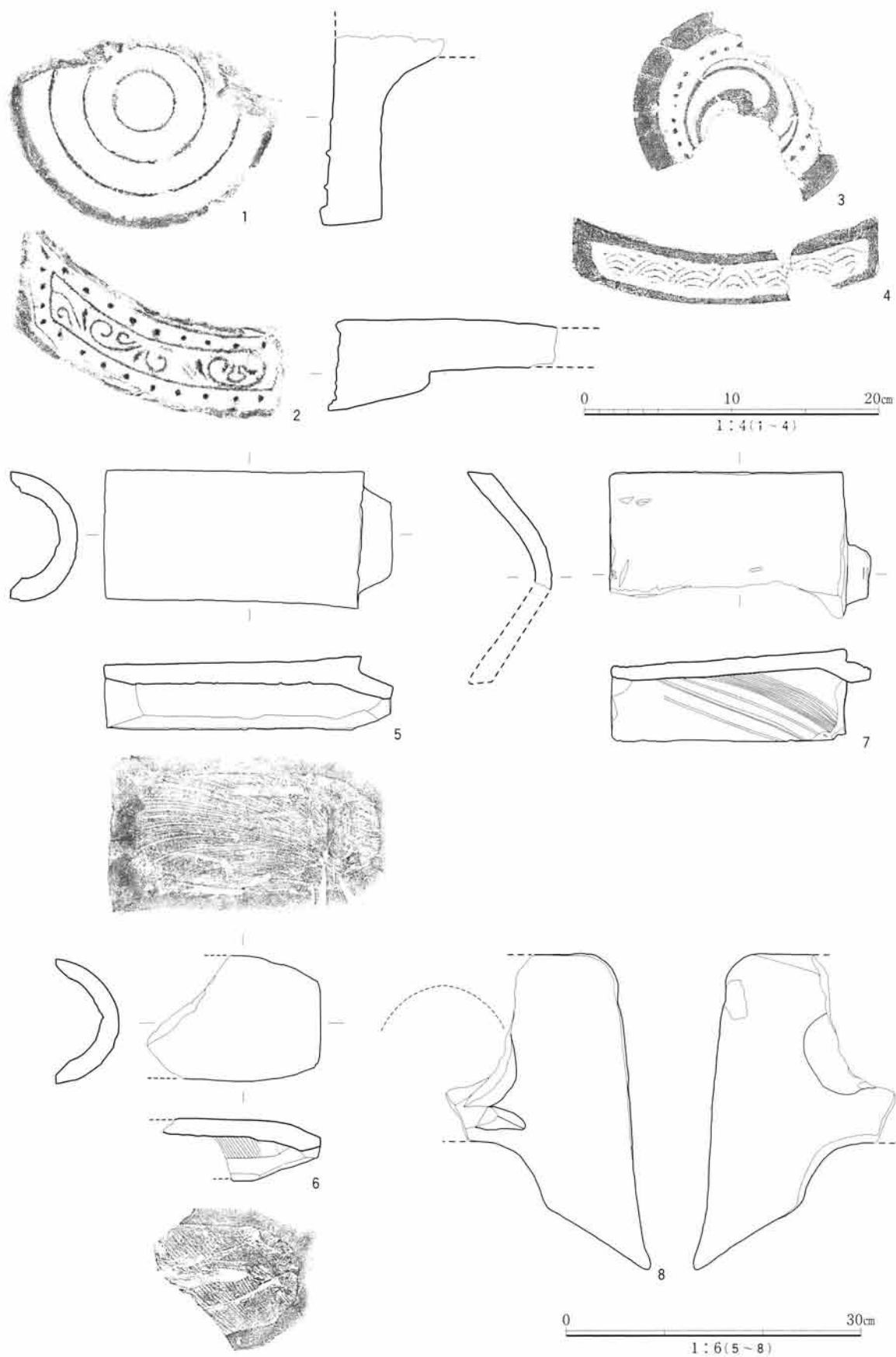


図61 NW87-21次SM501および徳川期土壙出土瓦
徳川期土壙(1・2)、SM501(3~8)

3)まとめ

難波宮期の遺構としてはNW85－32次調査で検出された南北方向の柱列が挙げられる。柱穴は小さいものの、整地層の上から掘られていることから、宮殿の周辺を整備した後に建てられたものである。当調査地以東では前期難波宮期の南北方向の建物が多く発見されており(第Ⅲ章第4節)、SA701～703も同時期のものと思われる。

また、SM501・502は大坂本願寺期に該当する堀である。当該時期の堀は上町台地北東端で多く見つかっているが[大阪市文化財協会2003a：pp.7－16]、近隣ではNW71・93・112次調査で南北方向のものが見つかっている[大阪市文化財協会1981b、松尾信裕2000]。ただ、こういった堀がどの程度連続するかは詳細はわからないが、少なくともSM501についてはNW85－32次調査地で検出されていないことから、長さは最大でも40m程度であり、短く収まる可能性が高い。

第3節 NW93-5次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW81-17・82-58・86-2・89-20・92-12・93-5・93-19次調査の成果を報告する(図62)。これらは大阪市立聾学校敷地内、およびその周辺での発掘調査である。難波宮跡公園の南方にあたり、前期難波宮朝堂院南門から南へ約100mの地点である。同学校内では前期の「朱雀門」(宮城南門：註1)跡やそれに取付く回廊跡、また、東隣の南北道路におけるNW86-2次調査では前期の東朝集殿と推定される掘立柱建物跡が見つかっている。この辺りから南へ向かっては、地形が大きく落込んでおり、宮殿の敷地として平坦面を確保できる南限である。

なお、上記の聾学校敷地内のNW81-17次調査では徳川期以前の遺構は検出されなかった(写真10)。また、NW82-58・89-20・92-12次調査では古代の柱穴を1～2基検出したのみである。よって、本節ではNW93-5・19次およびNW86-2次調査を中心に報告する。なお、ひとつの調査で複数のトレンチがある場合は図80のようにアルファベットで枝番を付けた。



図62 NW93-5次などの調査地位置図



写真10 NW81-17次調査地全景(西から)

2) 調査の結果

i) 層序

NW93-5次調査地の西壁の観察を基に基本層序を設定した(図63)。

第1a層 近現代の客土である。層厚は北で60cm、南では170cmで、南へいくほど厚い。聾学校建設時の造成に伴うものか。

第1b層 黒～黒褐色砂質シルトや細粒砂からなる作土あるいは客土で、第1a層による造成直前の旧表土である。層厚は5～20cmである。

第3層 褐～オリーブ褐色の礫混りシルト～中粒砂からなる客土層である。層厚は5～60cmで、南の方が厚い。中ほどで部分的に遺構面を確認できるが、顕著な遺構は認められない。本層以上は重機により掘削したため、出土遺物の詳細は明らかでないが、近世後期の遺物が認められた。

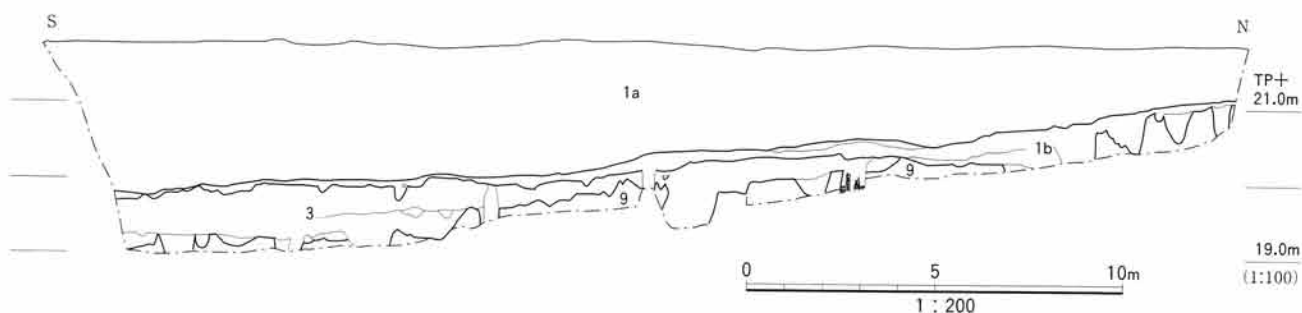


図63 NW93-5次西壁断面図

第7a層 図63にはないが、後述する難波宮造営前の大土壌SK801の上位や、調査区中央部北端の削平を免れたわずかな部分において、瓦片や凝灰岩の細片を含む褐色砂質シルトの堆積が存在した。層厚は15cm前後である。前期難波宮の柱穴はこの下面で検出された。凝灰岩のほか、後期難波宮の瓦が出土していることから、後期難波宮に係わる整地層と考えられる。

第9層 橙～明褐色粘土質細粒砂・砂礫の地山層である。本来この上位に存在していたと考えられる砂質シルト層は大部分が削平されている。西側のNW93-19次調査地の南半部ではこの砂質シルト層が同一のレベルで残っていたが、それは調査地中央部に地滑りの痕跡が東西に延びており、以南が沈下していたことによる。これは東の道路における後述するNW86-2次調査でも確認している。

NW86-2次調査では南北方向にトレンチを設定したため、南北約200mの断面図を記録することができた。図64は断面模式図である。

現代盛土直下で地山が検出されたのはDトレンチとCトレンチの北半である。D区の地山はTP+20mあまりあるが、南にいくに従って低くなり、Cトレンチ以南は傾斜面を呈する。なお、Cトレンチの中央では地山層内で地滑りの痕跡を発見した。



図64 NW86-2次南北断面模式図

Cトレンチ南半やそれ以南については、地山上面が西端辺りから東側に急激に落込み、南側でも非常に深いために検出することができなかった。この上では近世の整地層を2層確認した。上位の整地層は徳川期後葉の遺物を含み、上面では井戸を検出した。下位の整地層は地山や古代の包含層に由来する偽礫を多く含み、厚さは最大3mを超える。上面では石組溝と素掘溝を検出し、整地層内ではTP+11mで東面する石垣の上面が見つかった。下位の整地層については時期を決定できるような遺物に欠けるが、石垣が豊臣前期であれば三ノ丸造成時、後期であれば元和年間のものと考えられる。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前

NW93-5次調査(図65・72、図版10上・中)

地山上面において大土壇SK801を検出した。

SK801は調査地東部に位置し、後述する前期難波宮の回廊SC701に切られている。平面形は不整形形で、東西は最大13.0m、南北は北端が調査区外であるため明らかでないが、8.2m以上である。深さは1.3m以上で、北半部が深く南に向かってなだらかに立ち上がる。埋土は水漬きの粘土質シルト～砂質粘土と、地山や周囲の遺物包含層を主体とする客土である。最上部の客土層には多量の土器・炭が含まれていた。出土遺物には多量の土師器・須恵器と少量の瓦・石製品・凝灰岩片などがあり、層位によって遺物にはあまり変化がなく、比較的短期間で埋められたものと考えられる。また、土器は遺物整理箱にして約20箱分あるが、回廊柱穴の破壊を避けて十文字にトレンチをいれた部分のみからの出土であり、埋没している全体量は相当なものであろう。

土師器には杯C1～6、鉢7、高杯8、甕9・10、羽釜11、竈12がある(図66)。総じて器表の遺存状態が悪く、調整は部分的にしか観察できないものが多い。1・2の内面には暗文は施されていないようである。3・4については暗文の有無は不明である。5の暗文は1段、6は2段である。9の外面にはハケメは認められない。11は胎土に角閃石を多く含む生駒西麓産である。

須恵器には杯H18～31、同蓋13～17、杯G36～38、同蓋32～35、大型蓋39・40、低脚高杯41～43、甕44、鉢48、甕45～47がある(図67)。杯Hの底部と同蓋の天井部の調整は、13～15と18～23・28が回転ヘラケズリ、16・17と24～27・29・30がヘラ切り後不調整である。36～38の底部外面は回転ヘラケズリ調整である。38は底部が丸く仕上げられており、短頸壺の蓋の可能性もある。32～35のかえりは口縁端部より下方に突出する。45は口縁端部が下方に折れ、口頸部は凹線で区切られて、

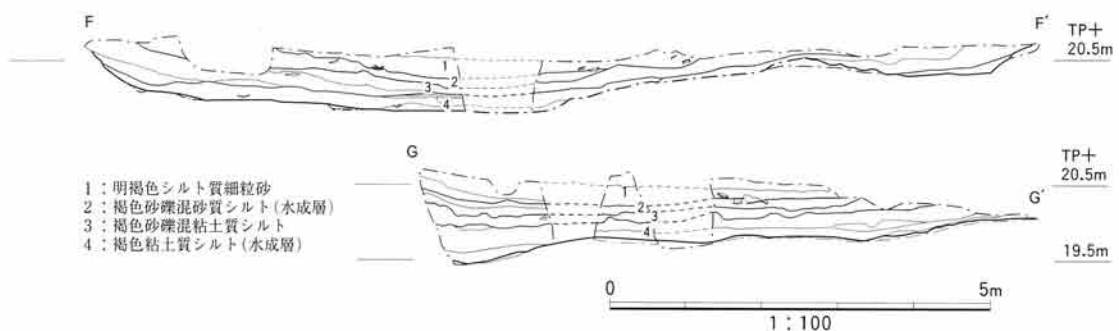


図65 NW93-5次SK801断面図

櫛描列点文が施される。46は口頸部にカキメやナデ以前のタタキメが残っている。47は内面に車輪文当て具が用いられている。

49は新羅土器長頸壺の肩部で、細片であるため類例を基に径を復元して図化した。外面はていねいなナデを施した後、凹線で区切られた文様帯に三角形文と円弧文がスタンプで施されている。器表には薄く自然釉がかかっていて、断面は暗赤灰色を呈する。

瓦には丸瓦50および平瓦51などがある(図68)。製作技法から7世紀代のものと考えられる。50は玉縁のつくりが四天王寺創建瓦と同様であることから、大阪府・京都府にまたがる楠葉平野山瓦窯の製品の可能性がある。

石製品には滑石製の小型品52と凝灰岩切石53とがある(図68)。52は平面形が台形で5.0cm×4.9cm、厚さ0.7cm、重さ30.2gで、狭端部付近に1個所孔が穿たれている。垂飾の一種かと思われる。53は加工の痕跡が認められ、基壇化粧に用いられた部材と考えられる。伴出した瓦50・51とともに付近に寺院の存在を想定させる。

これらの遺物は、土器が難波Ⅲ古段階から中段階にかけてのものと考えられるため、7世紀第2四半期の年代を与えることができる。近辺では北方約60mの地点のNW66次調査方形土壌において、中・下層から難波Ⅲ古段階、上層からはやや新しく中段階に近い土器が出土し、四天王寺創建時と同様の瓦片とともに仏教に係わる内容の木簡が共伴している[八木久栄1976、福山敏男1987]。関連するものとして注目され、付近に寺院または仏堂といった施設が存在した可能性を示す。

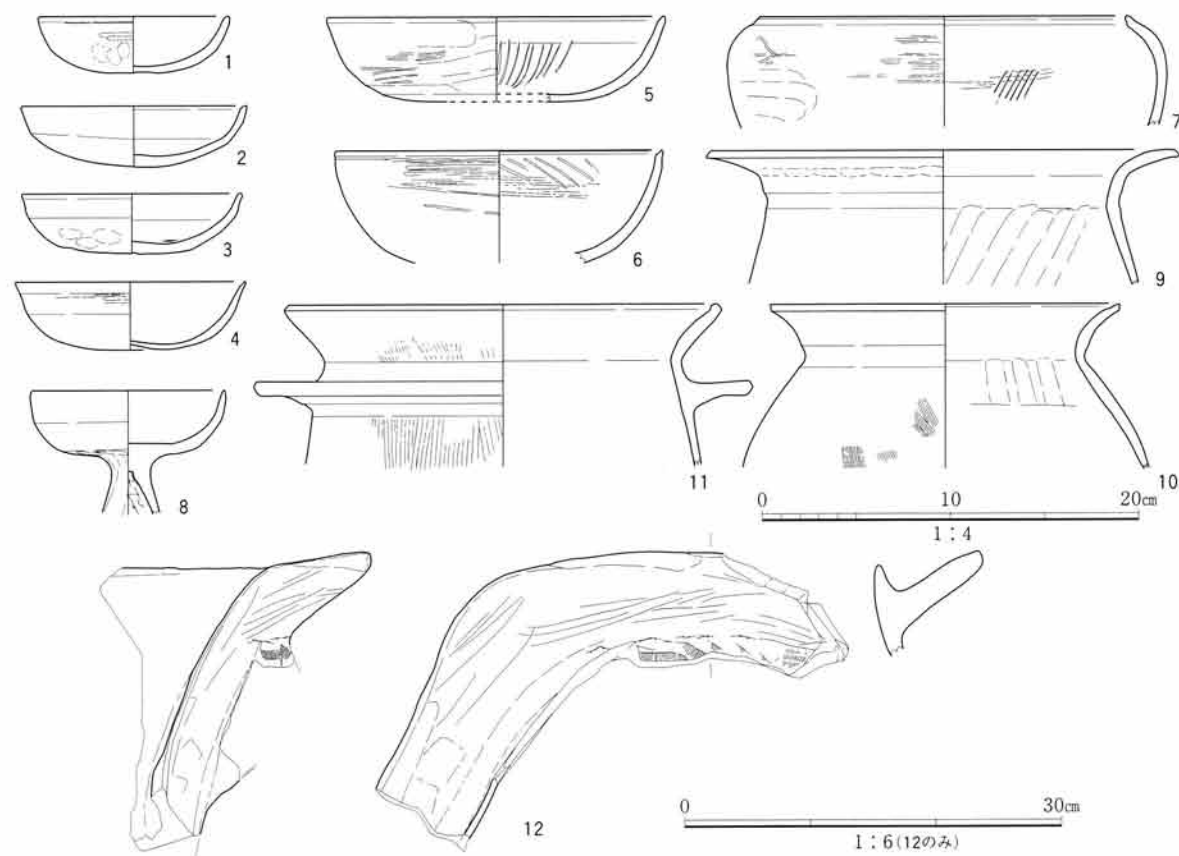


図66 NW93-5次SK801出土遺物(1)

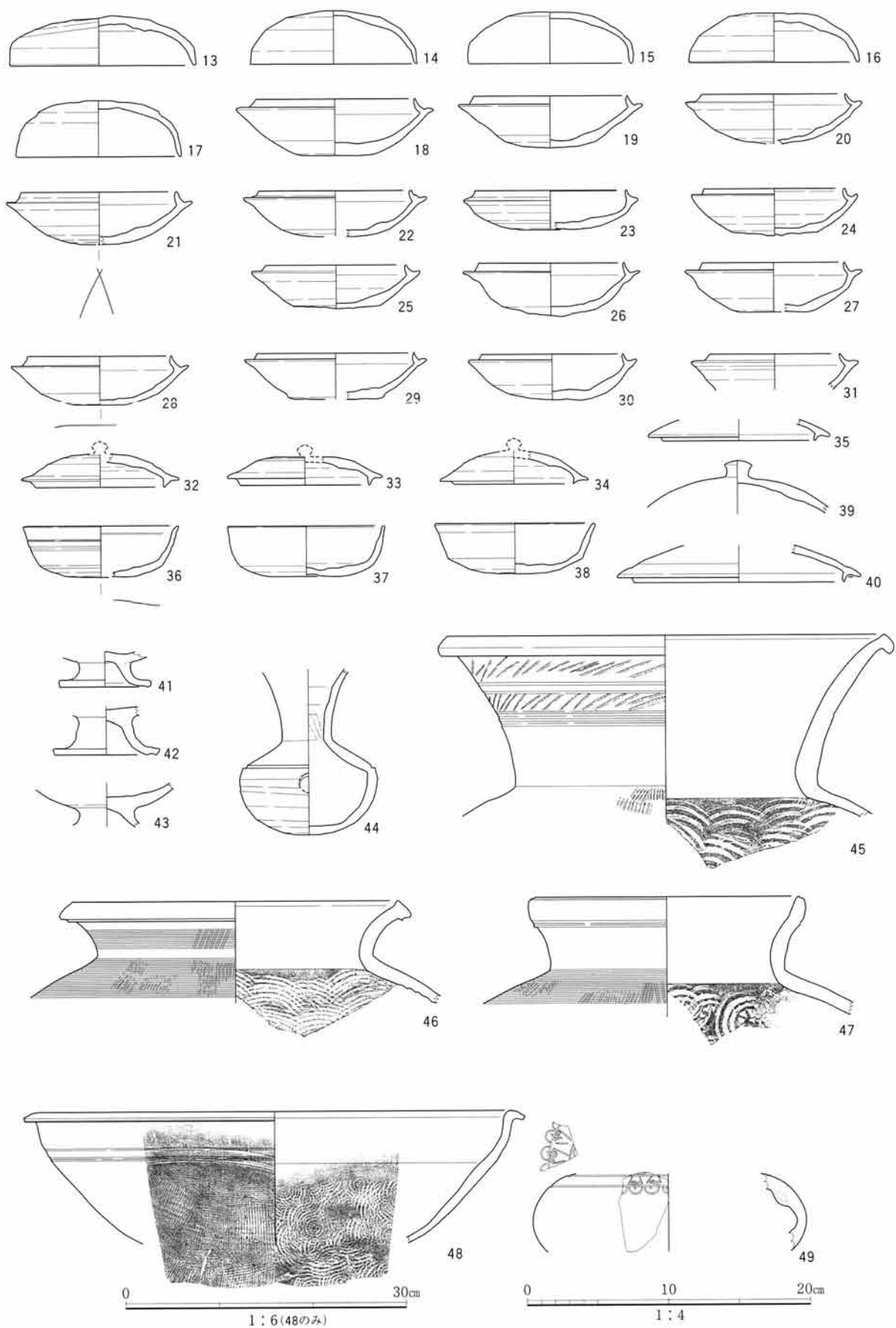


図67 NW93-5次SK801出土遺物(2)

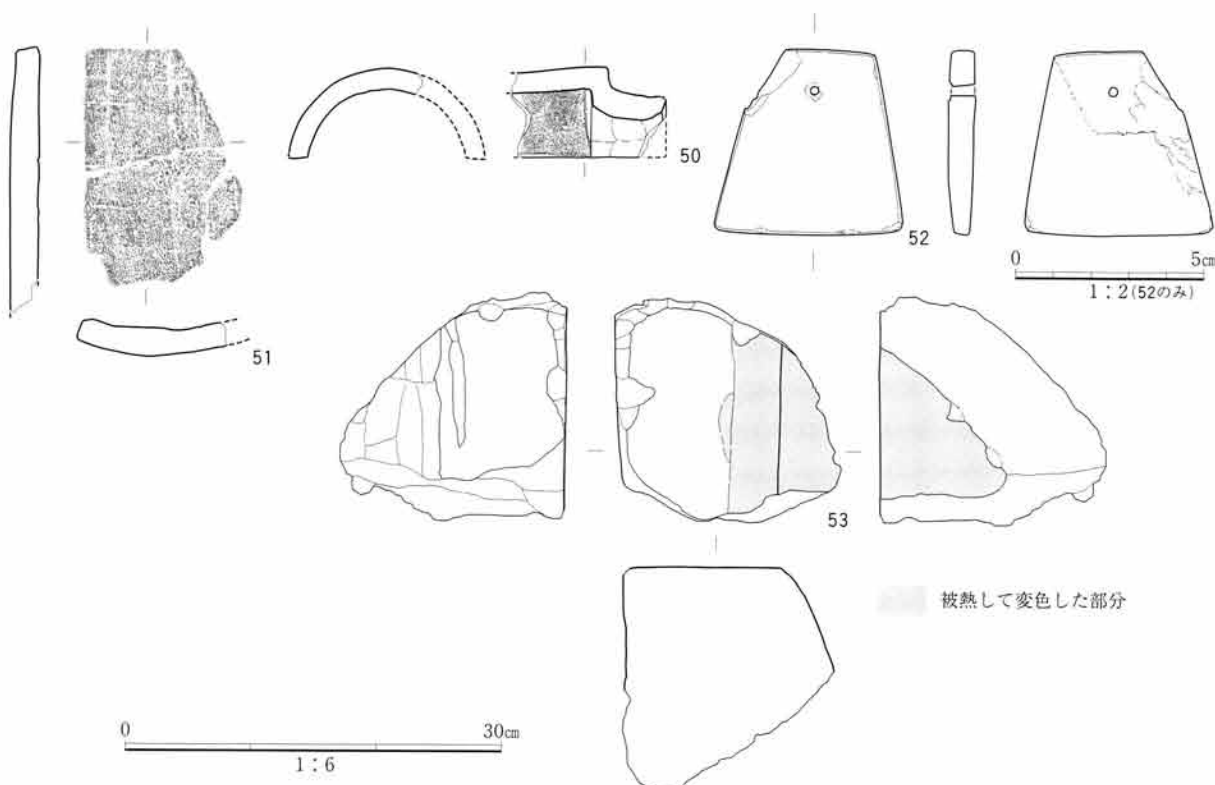


図68 NW93-5次SK801出土遺物(3)



写真11 NW82-58次柱穴

NW93-19次調査

調査地の各所で柱穴を合計13基(SP801~813)検出した。平面形は方形や不整形である。規模は一辺0.4~0.8mで、やや小さめのものが多い。組合せがわかるものはSP804~806のみで(図69右下)、性格などはわからないが、基本的には北に対して大きく東に振る方位によっている。

このほかNW82-58次やNW92-12次調査地でも一辺0.5m前後の柱穴が見つかるが、組合せはわからない(図69、写真11)。

NW89-20次調査

SK802は市立聾学校敷地南西隅で検出した、南北2.2m、東西1.0m以上、深さ0.7mの円形の土壇である(図69)。土師器高杯54、甕55、須恵器杯H57~61、同蓋56、高杯63~66、同蓋62、壺67が出土した(図70)。56~61がMT15もしくはTK10型式に該当することから、遺構の時期は6世紀前~中葉に位置づけられるが、62のように櫛描列点文が施される高杯蓋や壺67はTK208型式で、5世紀後半にさかのぼるものも含まれる。

b. 難波宮期

NW93-5次調査(図71・72、図版9下・10)

前期難波宮期の「朱雀門」(宮城南門)と考えられる掘立柱建物の門跡SB701およびその東西に取付く

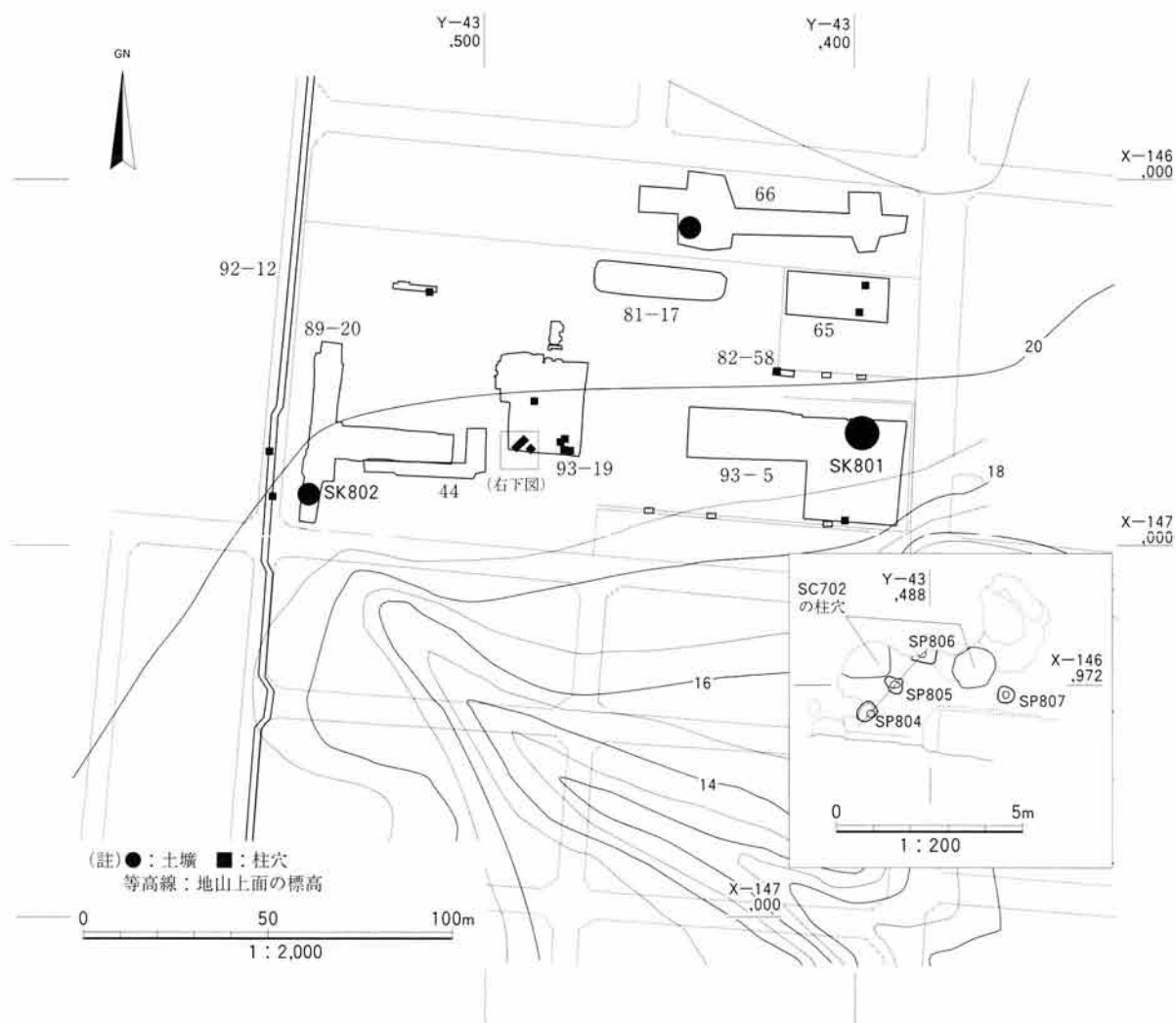


図69 難波宮造営前の遺構の分布

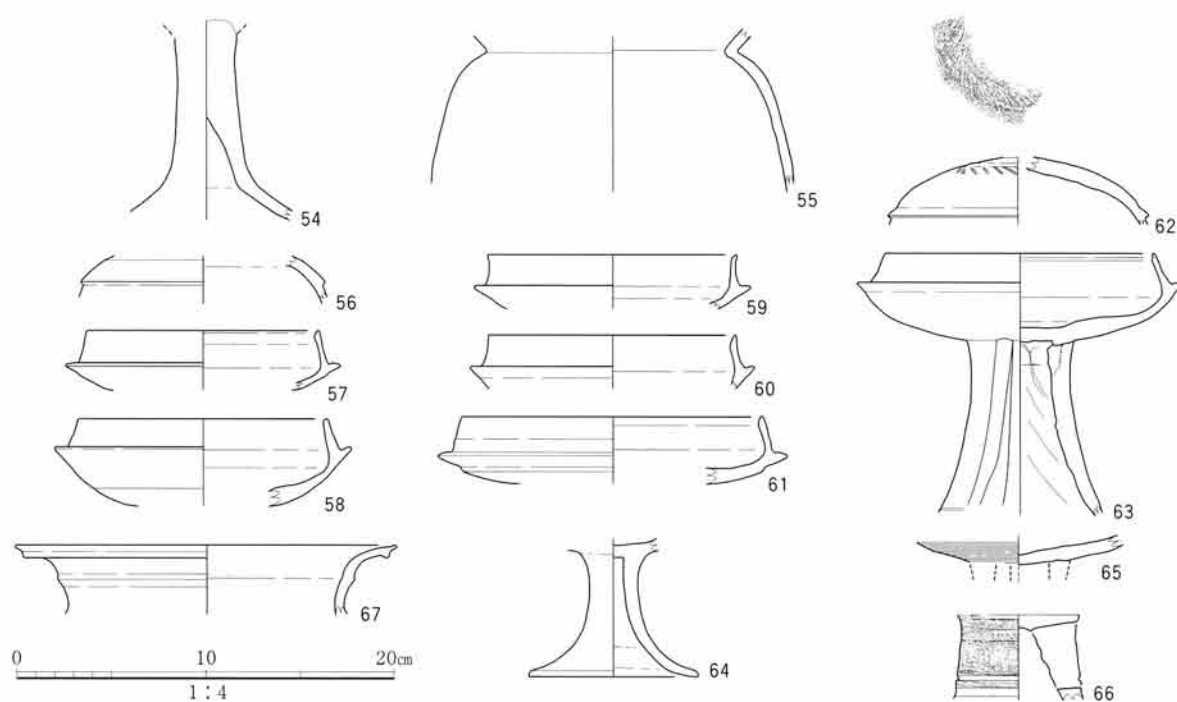


図70 NW89-20次SK802出土遺物

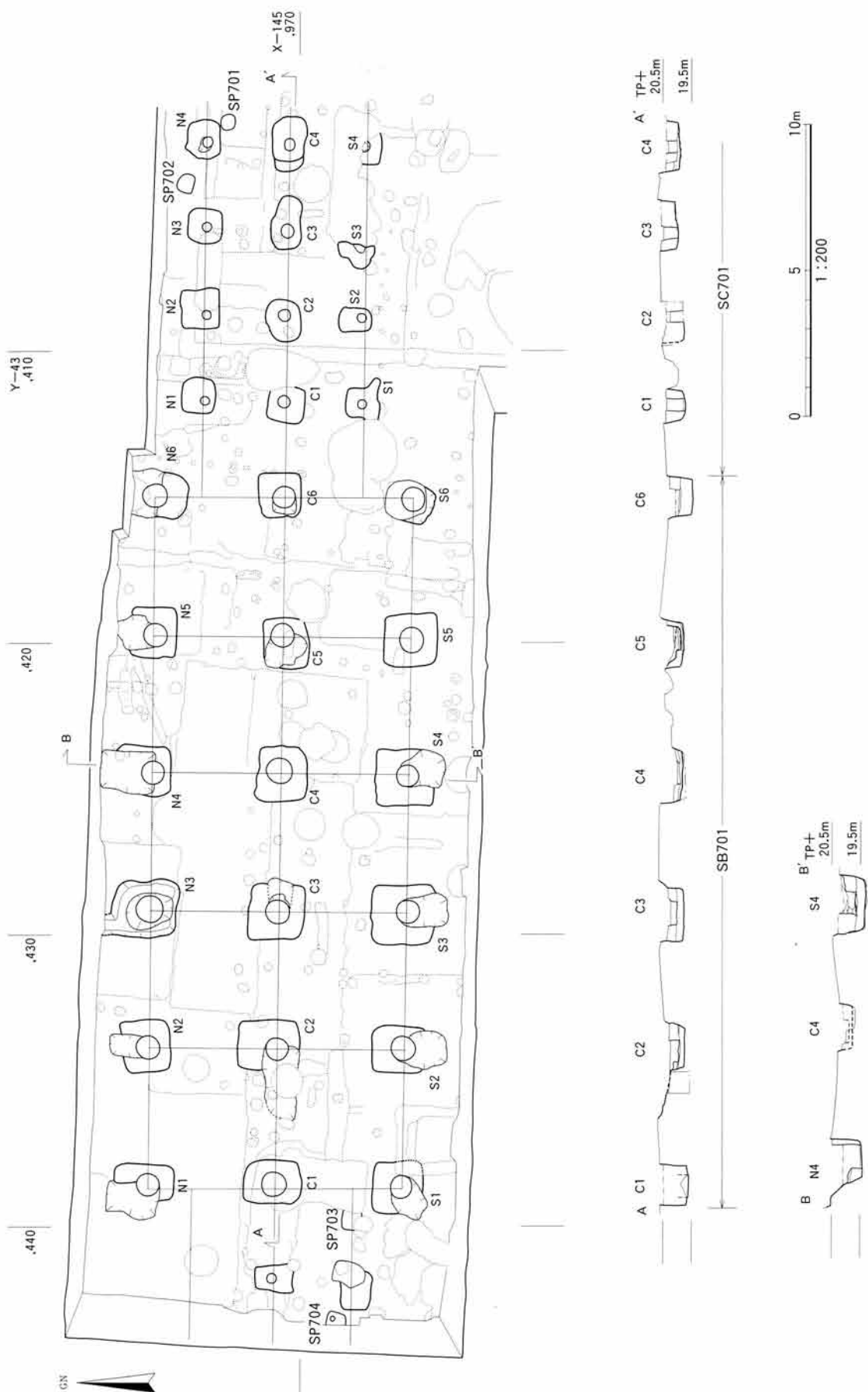


图71 NW93-5 次SB701·SC701·702实测图

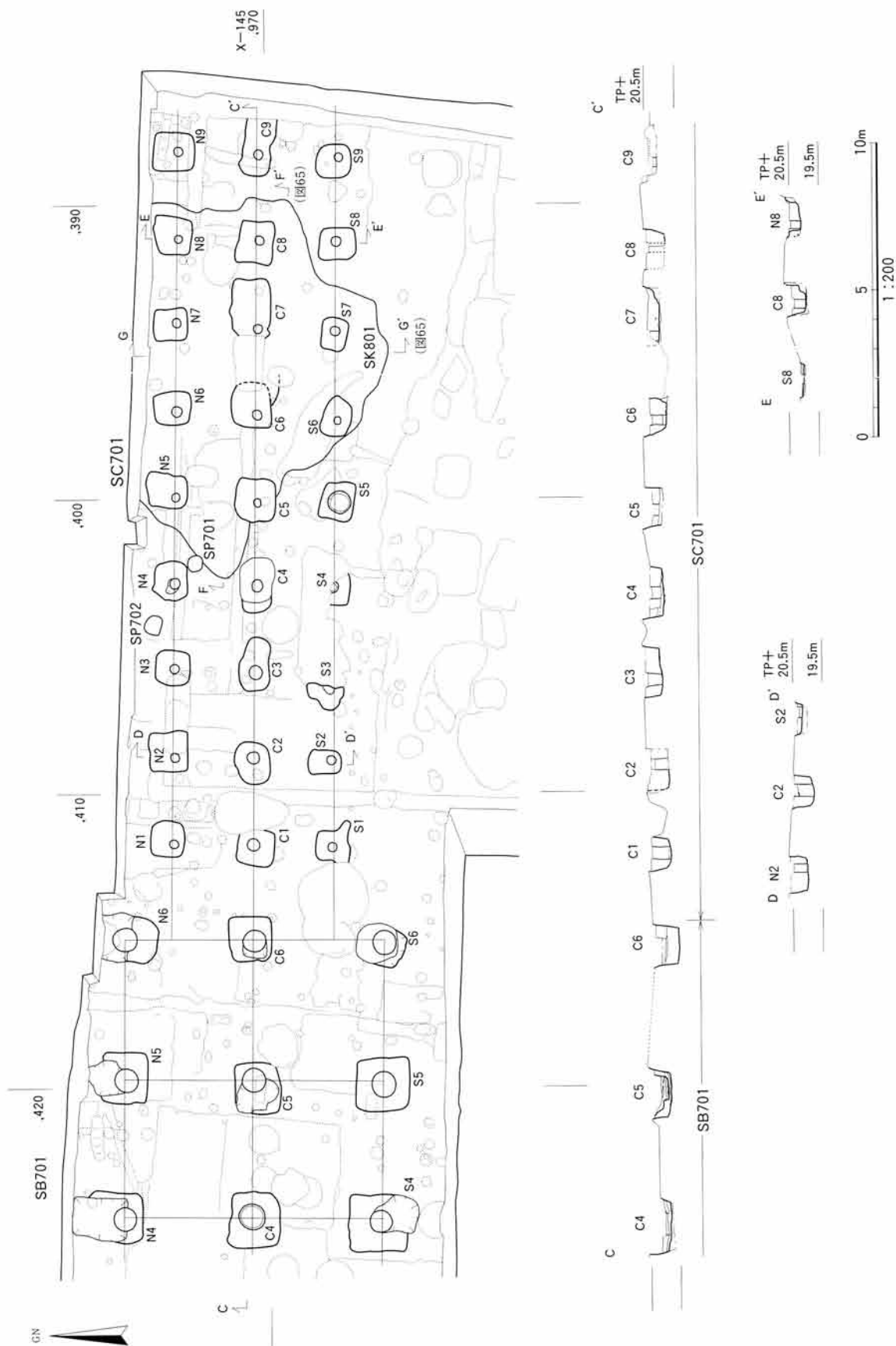


图72 NW93-5次SC701·SK801实测图

回廊跡であるSC701(東回廊)・702(西回廊)を検出した。

門SB701は東西の桁行は5間で23.52m、南北の梁間は2間で8.83mである。柱間はそれぞれ4.70m、4.42mで、1尺を0.292mで換算するとおよそ16尺、15尺となる(註2)。柱穴の平面形はほとんどが方形で、規模は1辺1.8m前後である。柱穴は断割りや柱抜取痕跡の掘下げなどによって、柱痕跡の直径や底のレベルを確認した(表10)。柱痕跡は直径0.73~0.83mで、平均すると0.787mである。柱位置と太さとの関係はないと考えられる。柱痕跡の底のレベルは、中央柱筋の柱が概して浅く、南北柱筋の柱が深い傾向にある。もっとも深いもので検出面から1.4mある。ただし、内裏南門で確認されているような長大な柱を落とし込むような「斜路」は存在せず、柱穴の平面形も長方形に近いものは少ない。また、断割りを行った柱穴の断面の観察によれば、柱痕跡が柱穴の底まで達しない例が見られた。これは当初掘下げた穴をある深さまで埋戻したのちに柱を立てる作業を行ったことを示している。柱痕跡には火災に遭ったことを示す焼土や炭の細片が含まれていた。とくに南の柱筋の西から5番目の柱穴(S5)は、柱痕跡の周囲の埋土が赤く焼け締まっているのが検出段階で観察され、朱鳥元(686)年の火災の炎や熱が地中にも及んでいることが確認できた。

なお、柱穴からは須恵器杯H81・83~85・88・89、同蓋70・71・76・78、碗94、高杯95、甕98が出土した(図73)。須恵器杯H・同蓋の底部・天井部の調整について、70・71・81・83はヘラケズリ、84・85はヘラ切り後不調整である。

回廊SC701・702は南北の梁間2間の複廊である。東回廊SC701は東西の桁行9間分を検出し、西回廊SC702は東西の桁行1間分を検出し、さらに西側の続きはNW93-19次調査地で確認された。SC702は北柱筋の柱穴を検出できなかったが、中央・南の柱筋の柱穴の位置や、調査地西半部が近世段階の土取りのために大きく損なわれており、地山の削平が柱穴の底の深さに近いところまで及んでいることから、本来は存在したが失われた可能性が高いと判断できた。桁行1間は2.93mでおよそ10尺等間、梁間1間は2.70mでおよそ9尺と1/4尺の等間である。ただし、門との取り付けの部分のみ

表10 NW93-5次SB701・SC701柱穴データ

遺構	柱穴	柱痕跡直径	柱底レベル
SB701	N1	0.78	+19.27
	N2	0.81	+19.52
	N3	不確か	(+19.73)
	N4	0.78	+19.53
	N5	0.77	+19.27
	N6	0.80	+19.60
	C1	0.78	+19.60
	C2	0.73	+19.93
	C3	0.81	+20.01
	C4	0.78	+19.93
	C5	0.79	+19.82
	C6	0.77	+19.93
	S1	0.76	+19.37
	S2	0.83	+19.50
	S3	0.79	+19.46
	S4	0.77	+19.67
	S5	0.83	+19.45
	S6	0.80	+19.32
遺構	柱穴	柱痕跡直径	柱底レベル
SC701	N1	0.29	—
	N2	0.29	+20.02
	N3	0.32	—
	N4	0.32	—
	N5	0.29	—
	N6	0.36	—
	N7	0.32	—
	N8	0.27	+20.09
	N9	0.32	—
	C1	0.42	+19.80
	C2	0.41	+19.78
	C3	0.40	+19.98
	C4	0.40	+19.99
	C5	0.37	+20.06
	C6	0.33	+19.79
	C7	0.34	+20.01
	C8	0.29	+19.97
	C9	0.32	+20.07
遺構	柱穴	柱痕跡直径	柱底レベル
SC701	S1	0.30	—
	S2	0.33	+20.17
	S3	0.30	—
	S4	0.32	—
	S5	不確か	—
	S6	0.30	—
	S7	0.32	—
	S8	0.32	+20.02
	S9	0.29	—

(註)柱底レベルはT.P.値で、柱痕跡直径を含め単位はmである。

柱間3.25mで11尺ある。柱穴の平面形は方形で1辺1.2m前後である。柱痕跡の直径および底のレベルは表10に示した。柱痕跡は直径0.27~0.42mで、門に近い部分では中央柱列が太く南北の柱列は比較的細いことがわかる。底のレベルも門に近い部分では中央柱列のみがやや深く、南北の柱列は比較的浅いという特徴が指摘できる。柱の太さと深さにおける中央と南北柱列との差は、どちらも門から離れるほど顕著でなくなるため、この特徴が回廊の建築構造と密接に関連している可能性が高いことを示している。また、門SB701と同様に柱抜取穴からは焼土や炭の細片が出土した。SC701の柱穴C2の柱抜取穴には、塗りの状況が観察でき、土壁の破片であることが確認できる壁片が含まれていた。

なお、柱穴からは土師器杯C 68、高杯69、須恵器杯H 79・80・82・86・87、同蓋72~75・77、杯G 91・92、同蓋90、蓋93、甕96・97が出土した(図73)。須恵器杯H・同蓋の底部・天井部の調整について、72・79・80はヘラケズリ、73・74・82はヘラ切り後不調整である。多くはSB701柱穴出土遺物と同様に難波Ⅲ古段階に収まるが、90~92のように中段階に下る可能性があるものも含まれる。

また、SC701・702の柱穴の周辺から一辺0.5~0.7mの小さな柱穴がそれぞれ2基見つかっている(図71・72のSP701~704)。難波宮造営前の遺構の可能性もあるが、大土壙SK801を切っているもの

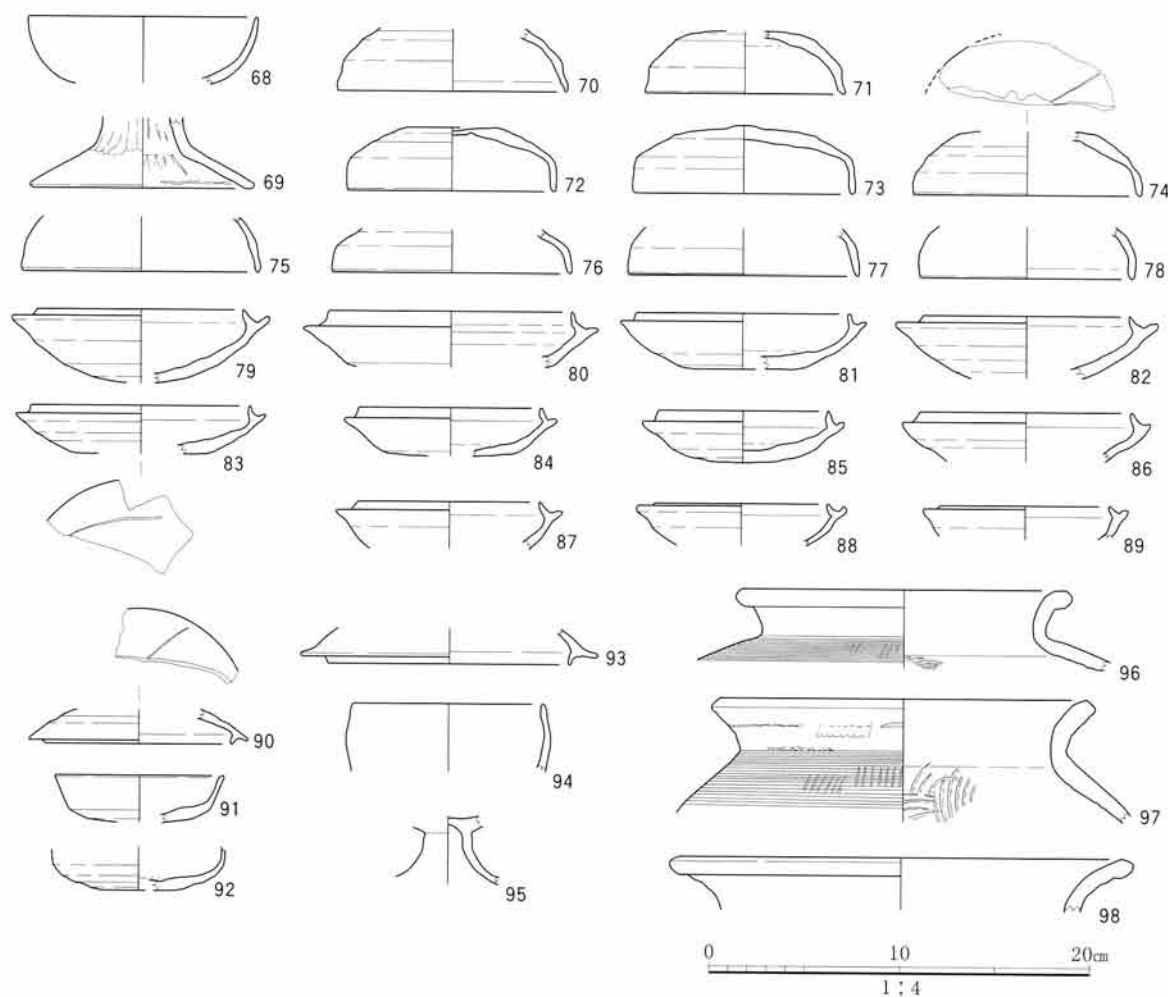


図73 NW93-5次SB701・SC701柱穴出土遺物

SB701柱穴(N1: 94、N2: 81・88、C1: 76、C2: 71、C3: 78・95、C5: 85、S2: 70・84、S3: 98、S5: 83、S6: 89)、SC701柱穴(N7: 75、N8: 74・79・80・82・86・87、C1: 97、C3: 92、C4: 77、C6: 90、C7: 68・69・72・91、C9: 73、S6: 93・96) ※ゴチック体は掘形出土遺物

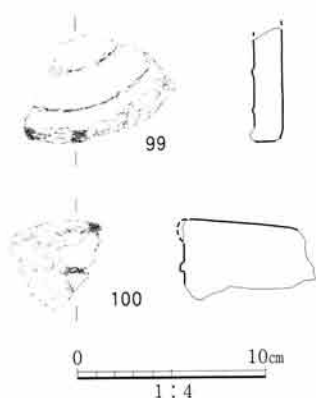


図74 NW93-5次出土重圏文瓦

もあり、建物としてまとまらないため、足場穴などの付属の柱穴としてこの時期に含めた。

その他、地山に近い近世の地層から後期難波宮期の重圏文軒丸瓦99・100が出土した(図74)。99は難波宮6014型式であり、100は型式不明である。

NW93-19次調査(図75・原色図版3・図版11)

Aトレンチの北部とBトレンチにおいて、前期難波宮西朝集殿と考えられる掘立柱建物跡SB702、時期不明の東西棟の掘立柱建物跡SB703、および後期難波宮に属する東西溝SD701と土壌SK701を、また、調査

区南部でNW93-5次調査地で検出した前期難波宮の回廊SC702の西の続きを検出した。

西朝集殿SB702は南北の桁行4間以上、東西の梁間2間の南北棟である。聾学校の遊具等の合間における調査のため断片的な検出となった。南西隅の柱穴の位置には後期難波宮期の土壌SK701があり、その底面では確認できていない。桁行1間は2.93mでおよそ10尺等間、梁間1間は3.0mでおよそ10尺の等間であったと思われる。柱穴の平面形は方形で1辺1.0~1.3mである。上面検出のみで掘り下げていないが、柱痕跡の直径は抜取痕跡から推定して直径0.30~0.35m程度である。底のレベルは不明である。

東西棟SB703は東西の桁行が7間以上、南北の梁間2間である。今回調査地の西で行ったNW50次調査[長山雅一1974a]の調査区を旧建物などを参考に図上で合成すると、10間以上である可能性が高いことが明らかとなった。北柱列はSB702の南妻に近接しており、切合いはないが建物として併存したとは考えられない。南柱列は後述する東西溝SD701にほとんど重なっており、これに切られている。また、北柱列の柱穴のひとつもSK701に切られていた。柱間寸法はばらつきが大きく、桁行・梁間とも1間はほぼ2.90~2.96mほどで、10尺等間で設計されたと考えられる。柱穴の平面形は方形のものが多く、1辺1.3m前後である。柱痕跡の直径は抜取痕跡を掘り下げていないため、断面や底部に近いところで確認したものから推定して0.27m前後で、0.3mを超えるものはなさそうである。底のレベルは一部断割りをを行った個所や地山の削平状況からTP+20.3~20.4mほどと推定される。

後期難波宮に属する東西溝SD701は、長さ約21mにわたって検出した。幅は1.0~1.1m、深さは最大で0.3mである。東西棟SB703の南柱筋とはほぼ同方向に掘られ、その柱穴を切る。埋土は一様で、明褐色の砂混り粘土質シルトからなり、水が流れたり溜ったりした痕跡はない。後期難波宮の丸瓦・平瓦が出土している。東西の延長部分については、西はNW50次調査地[長山雅一1974a]、東はNW29次調査地[八木久栄1968]があるがいずれも攪乱が著しく、存在は不明である。

前期難波宮「朱雀門」に取り付く西回廊跡であるSC702はAトレンチの南部で検出した。近世の掘込みによって地山が大きく攪乱を受けており、北柱列は検出できなかった。断割りによって確認した柱痕跡の底のレベルからみて、削平されたものと判断できる。中央と南の柱筋はほとんどが検出できたが、そのおよそ半数は柱穴が東西に長く、二度掘られた状態を呈していた。平面的な切合いを見るために精査を行ったが、確証が得られなかったため、一部の柱穴を攪乱を利用して断割ったところ、西

側の穴には柱を据えた痕跡がなく、すぐに埋め戻して東の柱穴を掘り始めたと考えられる状況であった(図75左下)。柱間寸法は、SB701に近い部分に比べるとばらつきが著しいが、平均すると桁行2.93mで10尺、梁間は2.70mで9尺と1/4尺となり、同じ設計規格であることがわかる。柱痕跡から推定される柱の太さは0.26~0.30mで、SC701の東寄り(門から離れた部分)と大差ない。

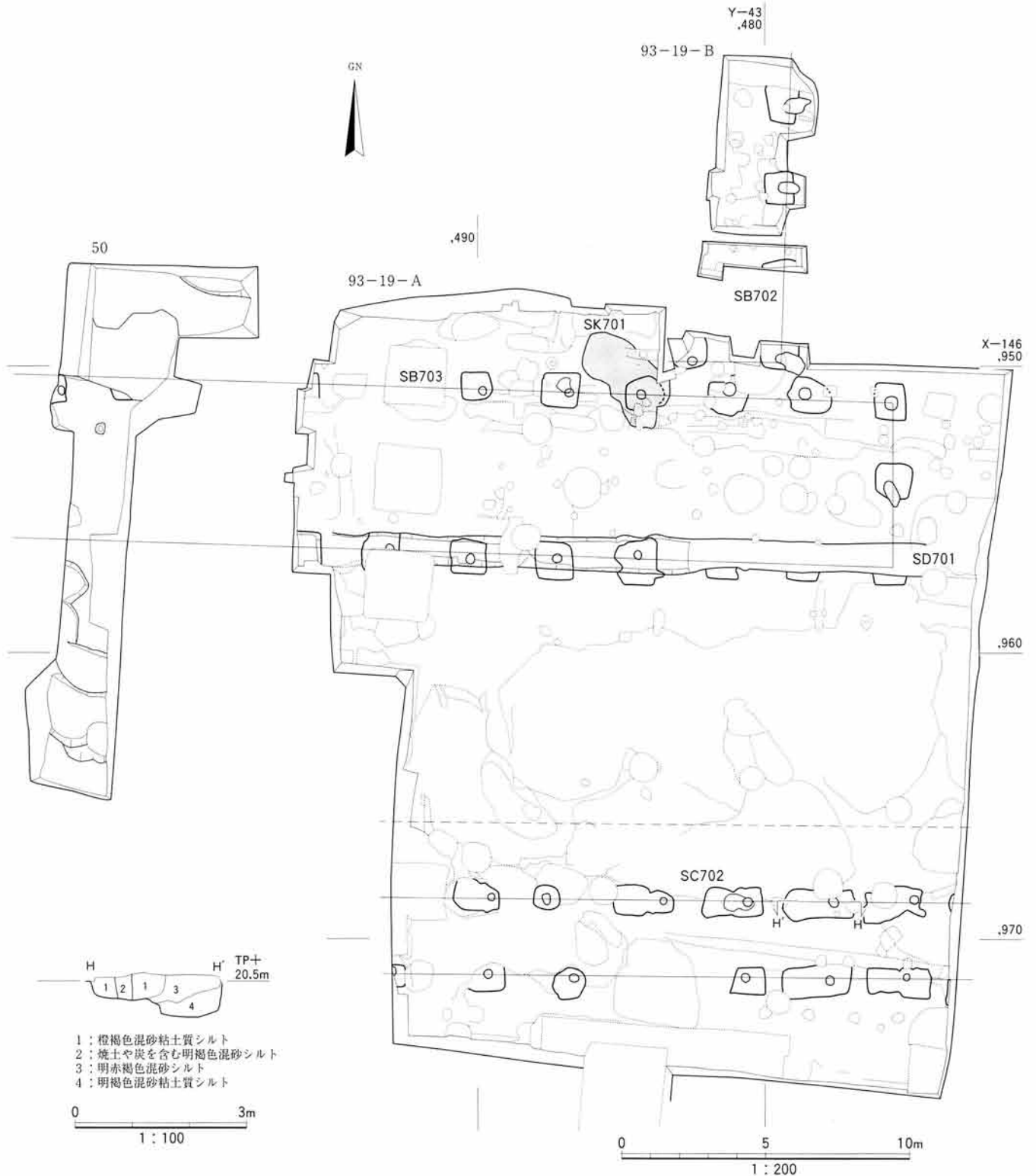


図75 NW93-19次A・Bトレンチ遺構配置図およびSC701柱穴断面図

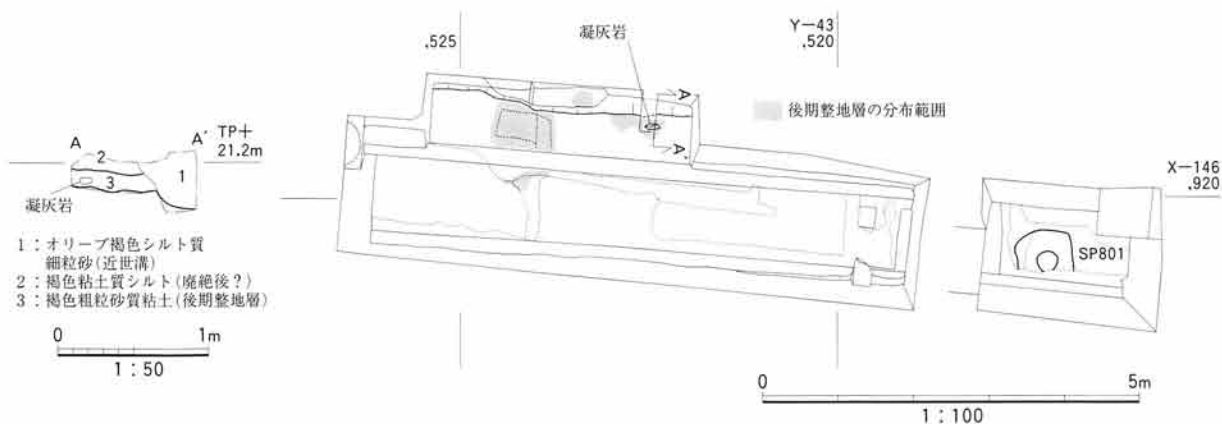


図76 NW93-19次Dトレンチ実測図

SC702の柱穴の掘り直しがどのような目的で行われたかについては、後述するように、NW93-5次調査で検出した遺構との位置関係から2つの調査区間の未調査区に何らかの施設を付加した可能性がある。

また、北西部に設定したDトレンチでは凝灰岩を含み、厚さ10cm程度の後期難波宮期の整地層と廃絶後の地層を確認した(図76)。

NW86-2次調査(図77、図版9左上・右下・左下)

一番北に設定されたDトレンチで計25基の柱穴を検出した。さらに北側のNW82-21次調査地(第Ⅱ章第4節)、NW85-7次試掘調査地(註3)、東側の1972年度緊急調査地[難波宮址顕彰会1973]を合わせて、前後する2棟の掘立柱建物が明らかになった。

南北棟SB704は南北の桁行が17間(48.5m)以上、梁間が2間(約6m)と推定される建物である。柱間寸法はPW12とPW13と13番目が2.6mであるのを除くと、すべて2.92m前後の数値で収まる。柱穴の掘形は一辺1.0~1.2mの方形で、柱痕跡は直径0.3mあり、いくつかの柱穴では北向きの抜取穴が確認された。ただ、非常に攪乱が多いため、柱穴全体がわかるものは少ない。この建物は前期難波宮東朝集殿と推定されており、西朝集殿と推定されるSB702の南限を基準とすると、PW18からさらに2間分南に延び、南北長は50mを超えることになる(註4)。なお、この建物の柱穴は後述するSB705の柱穴に切られている。

SB705は5基の柱穴が検出された(図77でトーンが掛けられたもの)。柱列の延長や対応する柱穴が見つからないため、堀の可能性も残されるが(註5)、細いトレンチでの調査であったうえに攪乱が多かったため十分な遺構検出ができなかったこともあり、同じ個所での建替えの可能性も残る。また、北から3番目と4番目が約6mの間隔があるが、本来柱穴があったもののおそらく攪乱で失われたものであろう。一番北側の柱穴は南側に抜取穴が延び、その埋土には焼土が含まれていた。この焼土は朱鳥元(686年)の火災によるものと思われる。よって、SB704・705の切合いは前期難波宮区内での建替えを示すものと思われる。

NW89-20次調査(図78、図版9右上)

聾学校敷地の南西に設定したBトレンチで柱穴SP705・706を検出した。SP705は一辺1.8mの掘形をもち、柱は抜取られていた。また、SP706は一辺1.7mの掘形で、断面で幅0.4mの柱痕跡を検出し

ていることから、本来はそれよりも大きい可能性がある。

なお、道路を挟んで南側ではNW49・52次調査地で平行する柱列が見つかっており、SP705・706もその柱列の延長に載ってくることから、南北11間(約32m)以上、東西2間(6.0m)が存在したことも想定される。また、さらに南のNW98-19次調査[清水和2000]では地山や包含層が残っていたにもかかわらず柱穴が検出されなかったので、南限はこの調査地よりも北側で12間の建物があったということになる。このような南北に長い建物は「朱雀門」SB701以南のほかの地点でも確認されている(本章第4節)。

c. 豊臣期以後の遺構

NW93-5次調査

井戸・土塋は調査地全体に分布し、西半部では土取穴による地山の削平が顕著である。東南のレベルの低い部分では、東西溝や水溜と考えられる大きな穴のほか、性格不明の窪みが多数見られた。これらの遺構は、豊臣期にさかのぼる可能性のある井戸や土塋がわずかにあるものの、ほとんどは徳川期後葉と考えられる。

NW93-19次調査

Aトレンチの中央に大きな窪みがあるほか、柱穴や杭穴と考えられる小穴や小土塋が多数検出された。大きな窪みからは豊臣期の陶磁器や金箔押し軒丸瓦101が出土しており(図79)、掘られた時期も大きくはさかのほらないと思われる。なお、101は[宮本佐知子・寺井誠2003]のM221に該当するものである。

NW86-2次調査

層序の記載でもふれたが、BトレンチにおいてTP+11mで東面する石垣の上面が見つかった(図64)。石垣は人頭大から60cmあまりの幅で、厚さ20cm程度の花崗岩の自然石を利用してい

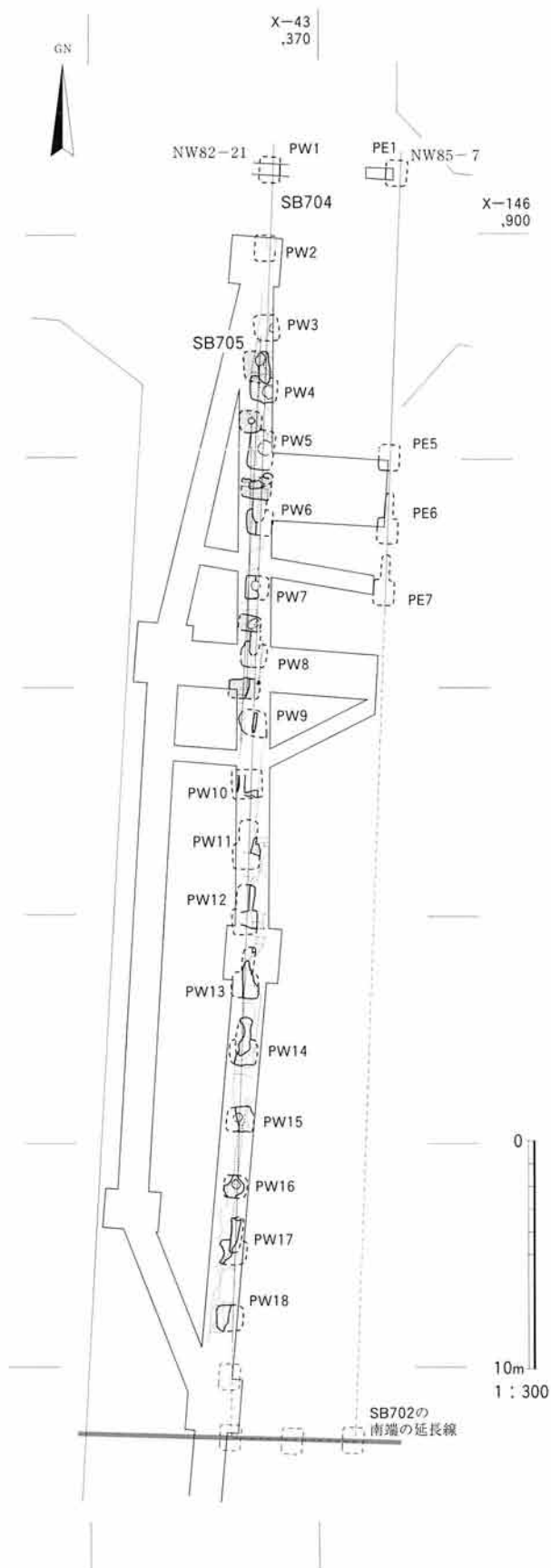


図77 NW86-2次SB704・705平面図

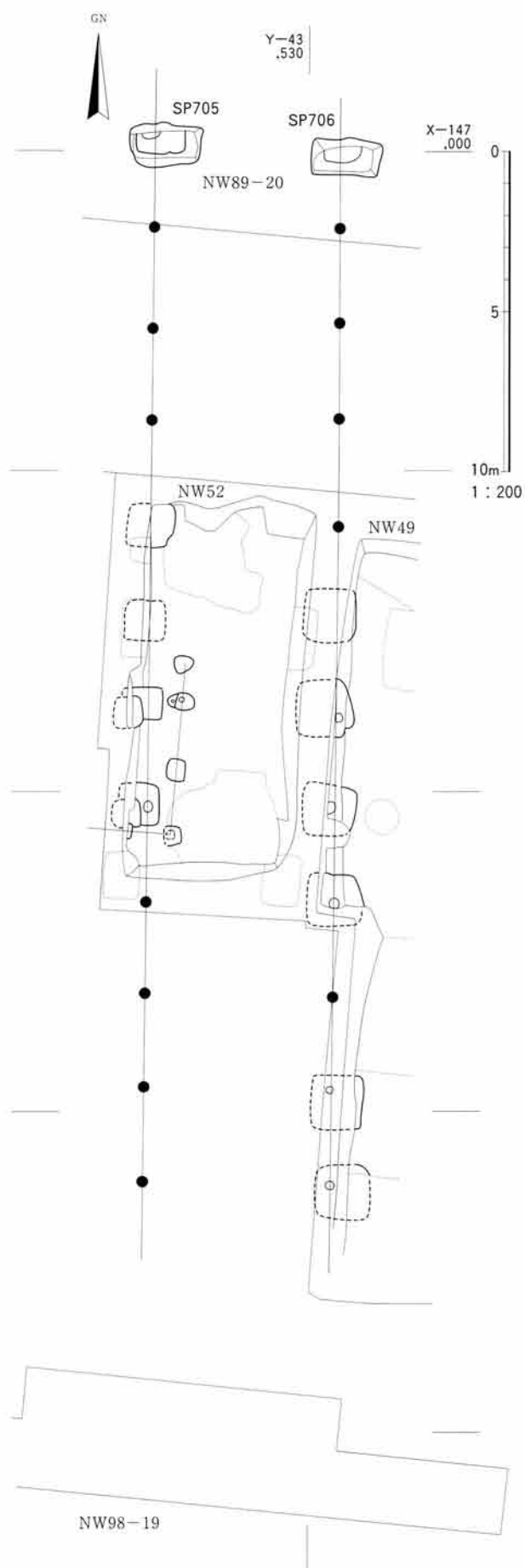


図78 NW89-20次SP705・706と南側の遺構平面図

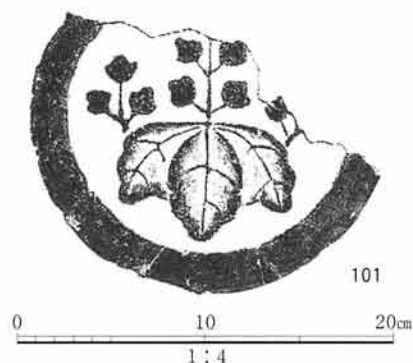


図79 NW93-19次出土金箔押軒丸瓦拓影

て、2段確認したが、それ以下は掘削深度の限界で確認することができなかった。地山が東に下がっていることから、地形を利用した石垣であることがわかる。なお、この石垣が検出された地点の南側で東西方向に延びる内安堂寺町通が豊臣氏大坂城三ノ丸の南限に推定されていることから[岡本良一1970、松尾信裕1994]、この石垣が豊臣後期のものであるなら、元和年間の復興事業で埋められたと考えられる。

3)まとめ

ここでは上述したNW93-5次調査およびNW93-19次調査で検出された難波宮期の遺構を中心に検討しておく(図80)。

門SB701

まず、この遺構が掘立柱形式で、かつすでに確認されている前期難波宮朝堂院南門とまったく同じ規模をもつ点や、いくつかの柱穴で火災に遭った痕跡が認められることから、前期難波宮に属することがわかる。ほぼ難波宮の中軸線上にあり、すでに確認されている朝堂院南門から南へ約105mの位置にある。これは1尺=0.292mで換算すると360尺で、1.2倍の大尺では300尺という値になる。後世の藤原宮や平城宮(東区上層遺構)、平安宮では朝堂院の南に朝集殿を囲む区画(朝集殿院)があるが、藤原宮では東西の区画のみで、南を画する施設はまだ

存在せず、朝集殿の南にはすぐに南面大垣(単廊とする説もある)がある。藤原宮よりも時期の古い前期難波宮では同様に朝集殿院の南門は存在しなかったと考えられるため、「朱雀門」(宮城南門)のほかには門が想定できないと考える。文献からみても、『律令』の「古記」に、宮殿の正面門は内門・中門・外門の3門しかなく、前期難波宮で内門(内裏南門)・中門(朝堂院南門)がすでに見つかっているので、その南にある今回の門は外門すなわち「朱雀門」ということになる。

回廊SC701・702

朝堂院南門に取り付く回廊との違いとしては、梁間が9尺と1/4尺(朝堂院南門に取り付く回廊は9尺)であることと、門の脇1間分の桁行が11尺(朝堂院南門の場合は10.5尺の可能性が高く、少し狭い)であることが挙げられる。また、門に近いところでは中央柱筋の柱が太くて深く、南北の柱筋はそれに比して細くて浅い傾向が強く、離れたところでも両脇ほど顕著ではないがその傾向が見られることも大きな特徴である。

なお、SB701の中心の座標は国土座標第Ⅵ系で、 $X=-146,969.52$ 、 $Y=-43,426.72$ と求められるが、その位置とNW93-19次調査のAトレンチで検出したSC702の柱位置との関係を比較すると、4尺分多く割り付けられていることがわかり、簡単な門のような施設が想定できる。東側のSC701は9間分が検出されており、この施設が東西の対称位置に存在したと仮定すれば、施設はAトレンチ東端のすぐ東(未調査地)に存在したことになる。

さらに、NW97-2次調査で検出した柱穴SP501~504[古市晃1999]は、SB701の中心からSC702の中央柱列方向に延長したライン上で、かつ10尺ごとに割り付けた位置に存在することも確認できた。

朝集殿SB702・704

NW93-19次調査で見つかった南北棟SB702とNW86-2次調査で見つかった同様の南北棟SB704とは、「朱雀門」SB701の東西の中心をはさんで対称の位置にある。外側の柱筋が内裏前殿の東西にある南北複廊の中央柱筋の南延長線上にあることからみて、これらの建物は前期難波宮に属し、その性格は藤原宮以後の歴代宮殿との比較から朝集殿に相当すると考えられる。同様の建物が他宮殿と同じ位置(朝堂の柱筋)にあるかどうかは確認できていないが、もし、朝集殿相当建物がSB702・704の2棟のみであったとすれば、他宮殿とは異なって中央に寄った位置に配置されていることになる。この要因としては、南東へ向かって著しく低くなっていく地形に影響を受けた可能性を指摘しておく。

溝SD701・掘立柱建物SB703

今回の調査では溝SD701の埋土以外からも重圏文軒瓦を含む後期難波宮の瓦が出土し、加えて後期のものと考えられる整地層も確認されていることから、何らかの施設が近くに存在したことは確実である。また先述したように、この地域は平坦面を広く確保できる南限といえるため、それが後期難波宮の南面大垣であり、SD701がそれに属する溝である可能性は充分にあると思われる。一方、建物SB703は、前期難波宮のSB702を建替えたものとする説があるが[植木久1998]、南北方向の柱筋が前期難波宮のSB702やSC702とそろわず、東西方向は南柱筋がSD701と一致していることを重視すれば、後期難波宮に属するとみることもできよう。その場合に問題になるのは建物の性格であるが、南面大垣の造営に先立って置かれた一時的な建物ということになる。いずれにせよ、年代の手掛りは

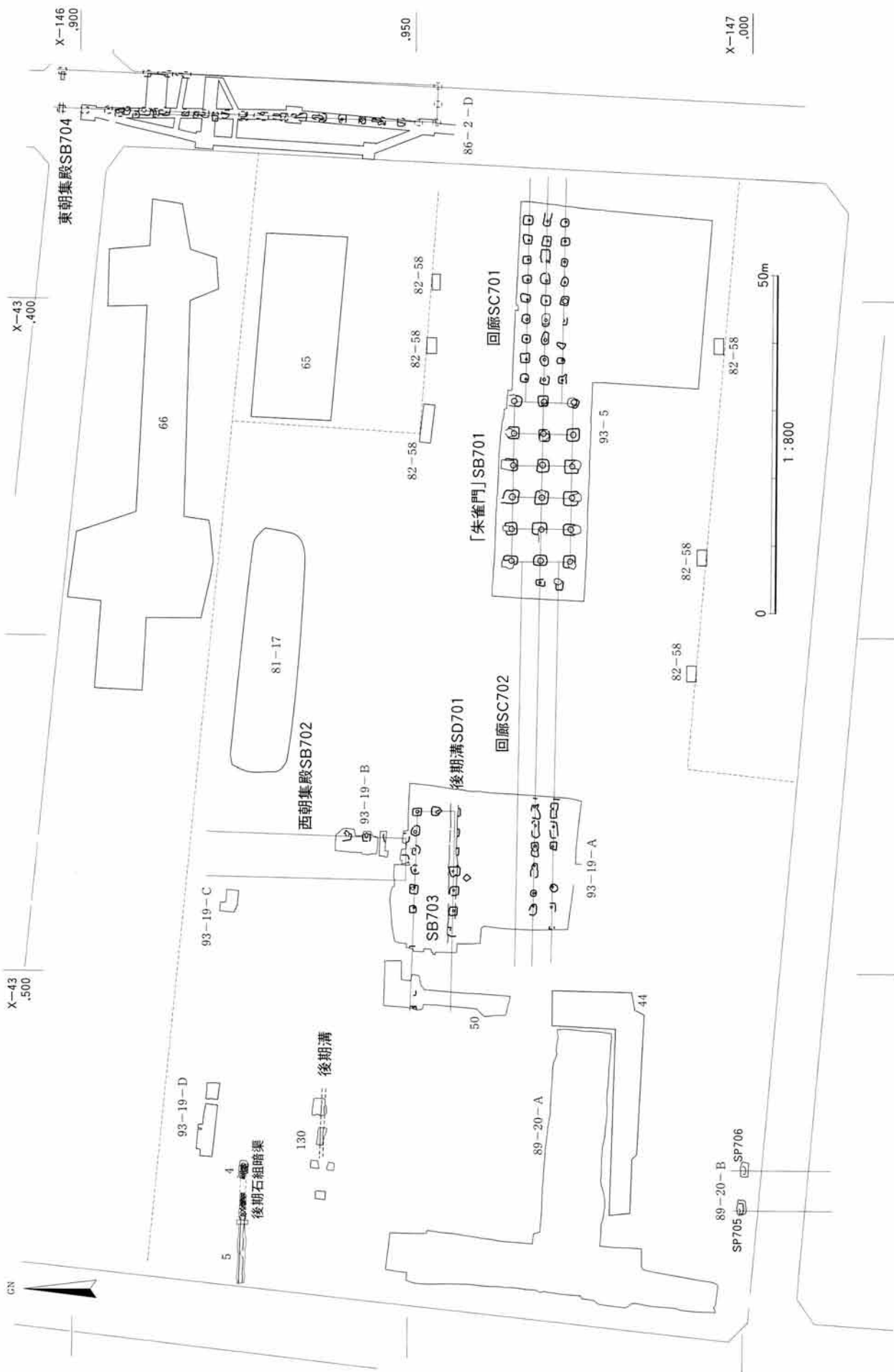


図80 「朱雀門」とその周辺の遺構配置図

きわめて少なく、限定することは困難である。

(佐藤・寺井：註6)

註)

- (1) 門の名称として、宮城の南面中門を表すものとしては「大伴門」や「朱雀門」がある。宮城の門号は古くは氏族名を付して呼称されていたが、平安時代初期に漢風の名称に変わる。前期難波宮のこの門が当時どのように呼称されていたかは明らかでなく、本来は宮城における単なる位置関係を表す語として、「宮城南門」あるいは「宮南門」などとするべきという考えもある。当協会では調査段階からこれまでの成果紹介などでも括弧付きで使用してきた経緯があり、また、「朱雀門」は『日本書紀』編纂時には門号として使用されていたようで、比較的古い段階から宮城門の名称として使用されていたと考えられるため、その名称は残したうえで、本書では「朱雀門」(宮城南門)として報告する。
- (2) 1尺を0.292~0.295mで換算するとおよそ16尺、15尺となるが、もっとも完数に近いのは1尺=0.294mである。ただし、回廊との関係を含めれば、1尺=0.292~0.293mが基準になっていたと考えられる。
- (3) 1985年5月16・17日に行われた、ガス管の入替に伴う試掘調査である。
- (4) [植木1998]の図3ではSB705の南側の梁間に柱穴が描かれているが、これはSB702を基に復元的に示されたものであり、実際は見つかっていない。
- (5) [植木1998]ではSB705について、塀の可能性を示唆している。これは南北棟の西朝集殿SB702が東西棟SB703に建替えられた可能性があることを重視して、東朝集殿でも同様に南北棟ではなく東西棟に建替えられたと想定したからである。ただ、報告で記したとおり、SB703は後期難波宮期の可能性があり、さらにSB704・705より東は傾斜地になるため、東西棟を建てるのは困難である。なお、前期難波宮期での建替えはNW80-9・82-10次調査地(第Ⅱ章第2節)でも確認されており、その北側のNW84-6次調査地では建てられた後すぐに解体されたと思われる建物SB701も見つかっている(第Ⅱ章第1節)。一方、宮殿内では調査密度は濃いにもかかわらず、長殿が建替えられているのが確認されているだけである[沢村仁1959・1961]。
- (6) NW93-5・19に係わる内容については佐藤隆が、それ以外の調査については寺井が執筆した。

第4節 NW90-20次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW80-15・81-35・87-7・87-47・90-2・90-20・95-10次調査の内容を報告する(図81)。この地区はこれまでの調査で難波宮造営前や難波宮期の掘立柱建物や整地層が多く見つかっている。本節で扱う7件のうち、NW80-15・81-35・87-7・87-47次は顕著な遺構や包含層が検出されなかったため、以下で概要を示すのみとする。

NW80-15次はガス管設置工事に伴う調査である。ほとんどの個所が地山が高く、顕著な遺構は検出されなかったが、東端は急激に低くなり、地山を検出することができなかった。落込みは難波宮期の整地によって埋められていた。

NW81-35次はマンション建設に伴う調査である。徳川期以降の土壌、井戸などが検出されたものの、中世や古代にさかのぼる遺構は検出されなかった(写真12)。

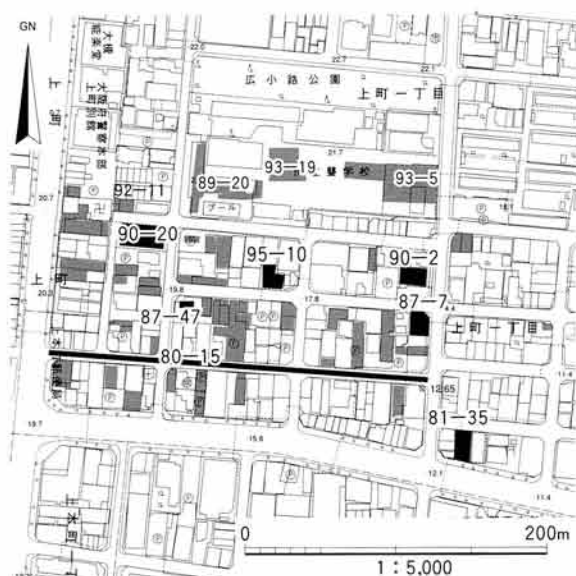


図81 NW90-20次などの調査地位置図



写真12 NW81-35次調査地全景(南から)



写真13 NW87-7次の石垣の根太(西から)

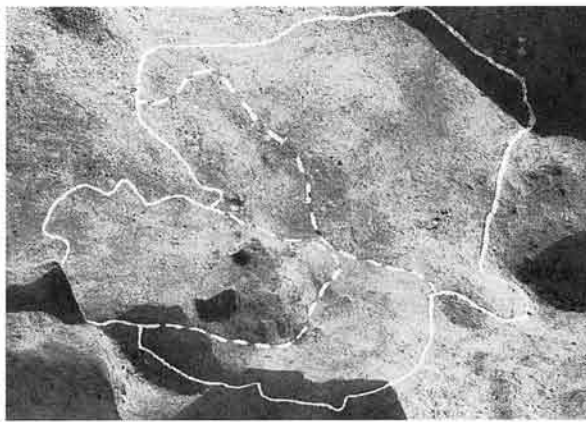


写真14 NW87-47次の難波宮期土壌

NW87-7次調査では試掘で地山が高いことが明らかになり、遺構が残っている可能性があるということで本調査が実施された。しかし、徳川期以前の遺構は検出されなかった。写真13で東西方向に延びているものは明治期の石垣の根太である。

NW87-47次調査では東側がやや低くなる傾斜面を検出した。ほとんどが徳川期の遺構によって破壊されており、難波宮期と思われる土壇1基を検出したにすぎない(写真14)。

2) 調査の結果

i) 層序

NW90-20次調査地は遺構面は良好に残っていたものの、難波宮期と思われる整地層が0.1~0.2m程度残っていたにすぎない。この地層から凝灰岩の破片や後期難波宮期の瓦が出土した。

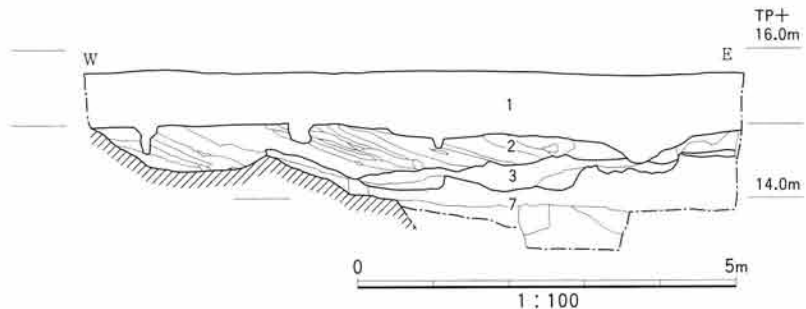


図82 NW90-20次北壁東側断面図

NW90-2次では調査地東側では近代や徳川期の地層の下に、灰色砂や明褐色砂質シルトで構成される難波宮期の整地層が良好に残っていた(図82)。東端は限界深度に達したため、地山を検出できなかった。

NW95-10次調査地でも徳川期の地層の下で、奈良時代の土師器が出土した整地層(第7a層)を確認した(写真15、図83)。地山は南側で急激に下がるため、検出することができなかった。



写真15 NW95-10次南西端深掘部分断面

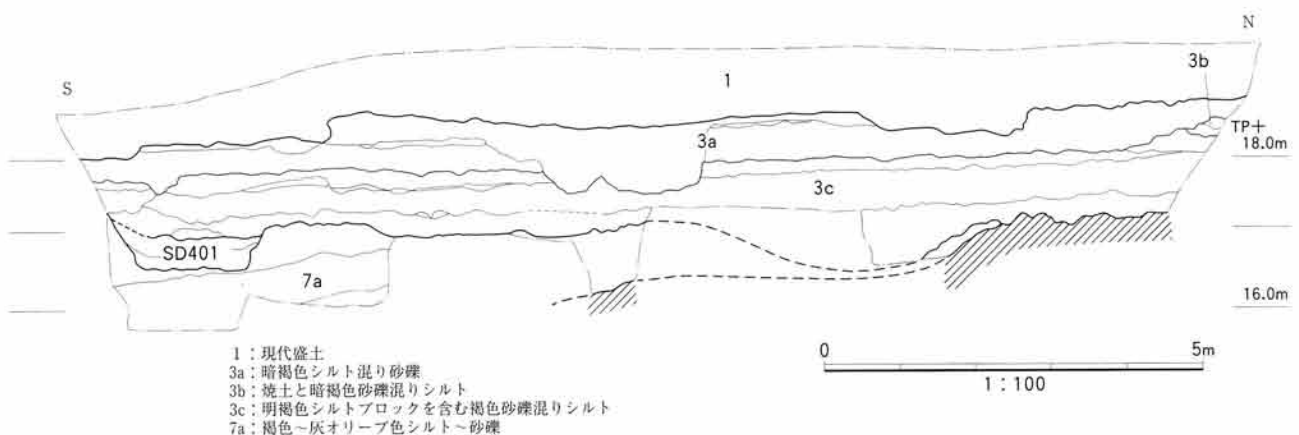


図83 NW95-10次西壁断面図

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮期の遺構と遺物

NW90-20次調査(図84、図版13上・中)

地山上面で掘立柱建物を3棟、地山上の暗褐色シルト層上面で溝を1条検出した。

SB701 調査地南西で検出した。一辺が1.0~1.2mの方形の柱穴が東西方向に4基並んで検出され、東側には続かないことから、南側に展開する東西方向の掘立柱建物と思われる。柱痕跡は0.20~0.25mあり、柱はすべて抜き取られていた。柱間寸法は東から2.60m、2.75m、2.70mであった。

SB702 調査地南東で検出した。柱穴の掘形は一辺0.9~1.1mの方形である。柱痕跡は直径0.2mあり、すべて抜き取られていた。梁間2間あり、柱間は東から2.2m、2.0mある。桁行は調査区外に延びるため不明であるが、柱間は約3.0mある。SB701の柱筋と北妻柱筋がきれいに揃う。

SB703 調査地北東で検出した。桁行4間の東西方向の建物と思われる。桁行の柱間寸法は西から3.0m(2間分)、1.67m、1.5mで、梁間の柱間は1.5mである。削平が及んでいるため、柱穴の残りは非常に悪く、深さは0.1~0.2mが残されているのみである。

SD701 SB701の北側で検出した東西方向の溝である。上端が0.6m、深さ0.1mの浅い皿状の断面である。上記の掘立柱建物とは検出面が異なるため、時期は異なるものである。

なお、この調査では地山上の窪みから後期難波宮期の瓦が出土している。よって、この時期に地山面の削平を伴う整地が行われた可能性が考えられる。

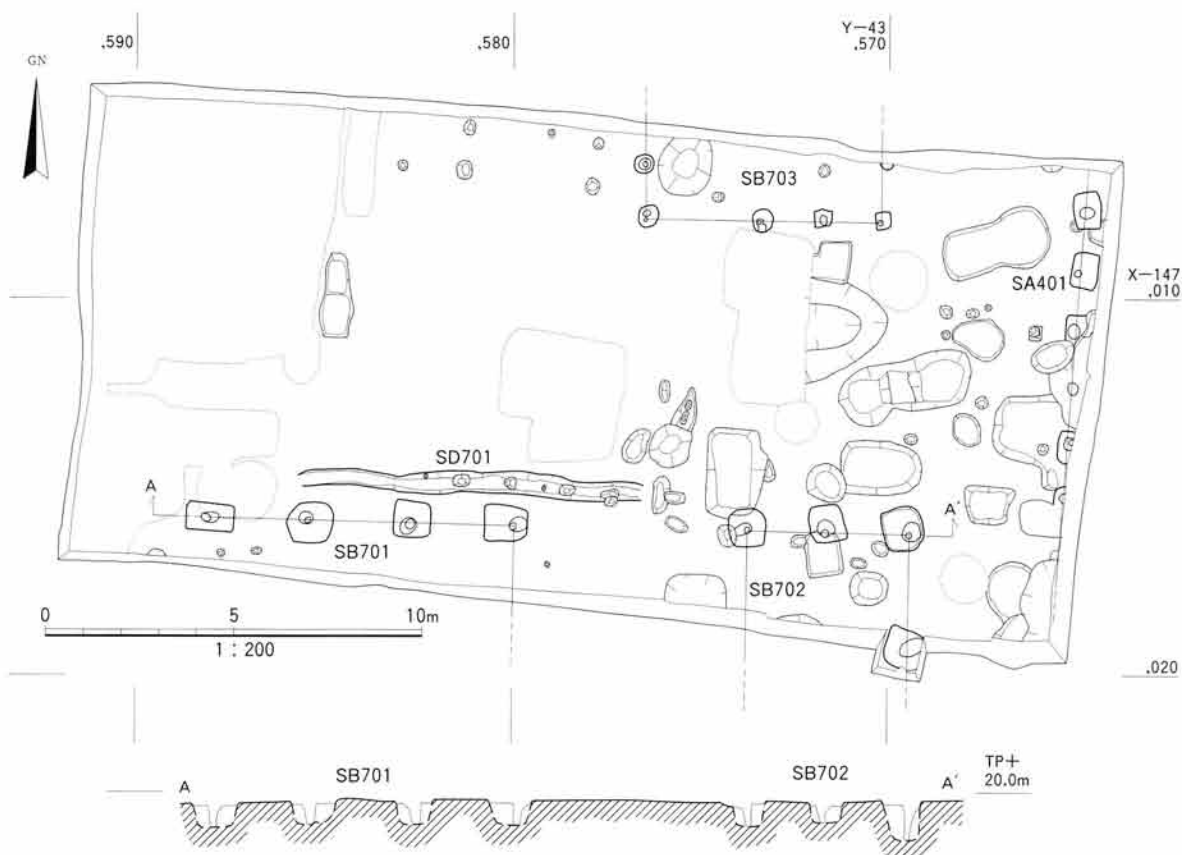


図84 NW90-20次遺構配置図

NW90-2次調査(図85)

地山上でSK701を検出した。この土壌は直径0.25m、深さ0.1mあり、土師器杯C1が同鉢2にかぶさった状況で出土した(図86・87、写真16)。1は口径16.8cm、器高5.4cmあり、内面には放射状の暗文の後、螺旋状の暗文が施される。2は口径15.8cm、器高8.1cmあり、口縁部は内湾ぎみに伸びる。外面にケズリが施され、内面には放射状の暗文がある。いずれも難波Ⅲ中段階に位置づけられる。

NW95-10次調査

整地層(第7a層)から多量の土師器・須恵器が出土し、3~16を図示した(図89)。

土師器には杯C3、杯A4~6、皿A7・8、高杯9がある。杯A・皿Aについては、8には放射状の暗文が施されているが、4~7にはない。いずれも口縁端部が内側に肥厚し、弱く外反する。難波V古段階の範疇で捉えられるものである。

須恵器には杯H12・13、同蓋10・11、杯G15、同蓋14、横瓶の口縁部16がある。いずれも難波Ⅲ中段階のものである。

近隣では後期難波宮期の整地層は見つかっておらず、希少な例となる。ただし、小規模なトレンチ調査であったため、遺構がかかっていた可能性も残される。

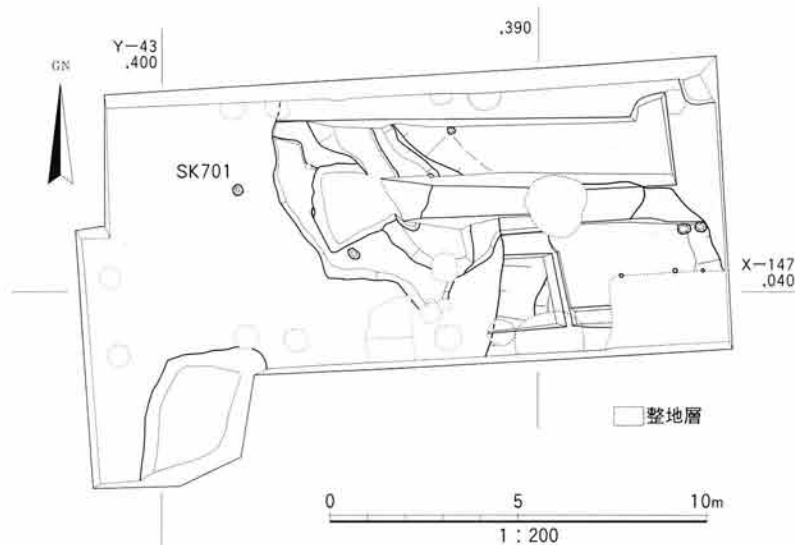


図85 NW90-2次遺構配置図

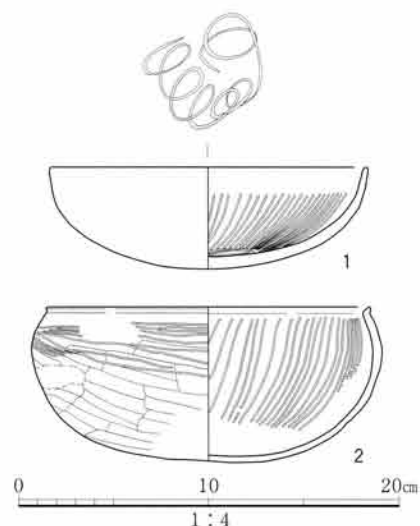


図86 NW90-2次SK701出土遺物



写真16 NW90-2次SK701検出状況

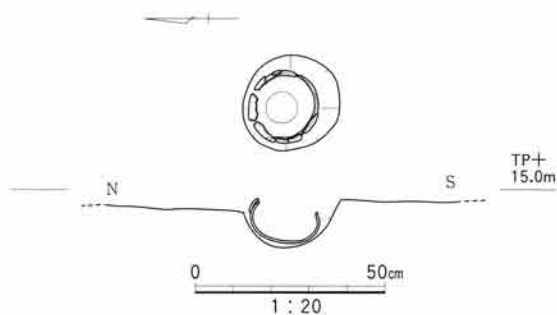


図87 NW90-2次SK701実測図

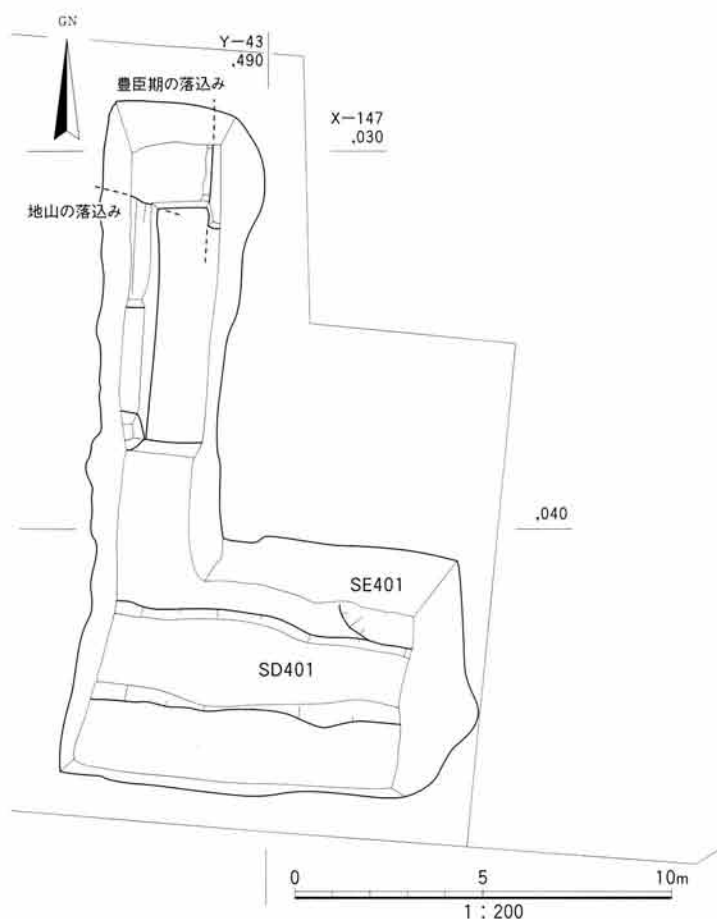


図88 NW95-10次遺構配置図

b. 豊臣期の遺構と遺物

NW90-20次(図84)

豊臣期の堀SA401を検出した。柱穴は長辺0.9～1.0m、短辺0.7mの長方形の掘形をもつ。方向は座標北に対して4～5°東に振る。なお、これを南に延長するとNW93-8次のSA101と一致する[平田洋司1995]。

NW95-10次(図88、図版13下)

SE401 直径1.7m以上、深さ1.5m以上の井戸である。調査地の壁際で検出したため、全体の状況はわからない。土師器皿17が出土した(図89)。

SD401 上端幅2.0m、下端幅1.0～1.4m、深さ0.6mの溝であり、断面は台形を呈する。肩の勾配は南側が緩く、北側が急で、方向はE7°Sである。出土遺物には唐津焼皿20～22、

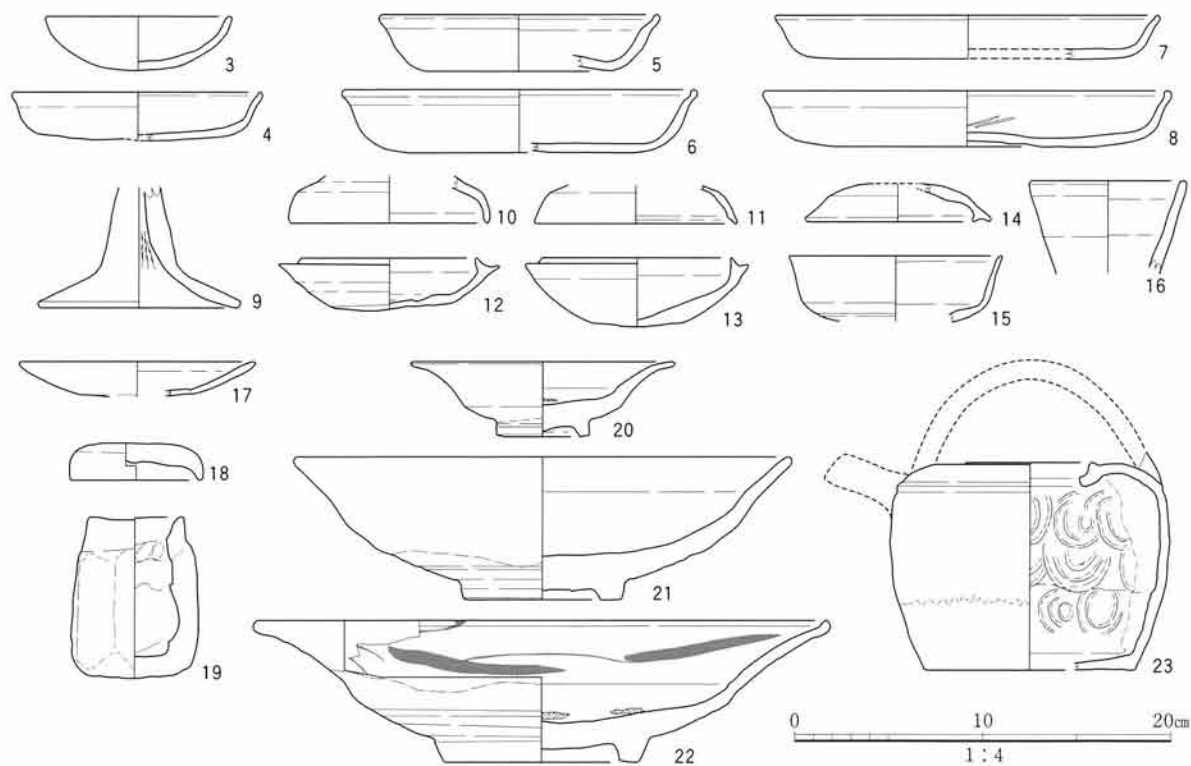


図89 NW95-10次出土遺物

第7a層(3～16)、SE401(17)、SD401(18～23)

同把手付水注23、焼塩壺19と蓋18がある(図89)。22は絵唐津で、砂目があるが、砂目のある唐津焼は大坂では元和～寛永年間に現れることから、遺物の下限は徳川期初頭である。しかし、掘削されたのは豊臣後期であったと考えられる。

3) まとめ

本節で扱った地区はいわゆる前期難波宮「朱雀門」の南側一帯に当る。この地区は西側は地山が高く、東側は谷地形が入り組んでいて、難波宮期(後述するように多くは前期に属すると思われる)に多くは整地されて埋められている。また、掘立柱列も多く発見されていて、NW90-20次調査地以南の建物との位置関係は図90のようになる。調査地が離れているため、同一建物かどうか判断するのは困難であるが、NW126次・82-41次やNW93-8次調査でSB702の南北方向の柱筋の延長線上に当たる個所で柱穴が見つっている。

また、SB701の南側のNW139次や61次で柱穴が検出されている。特にNW61次では東西方向の柱列も検出されていて、東西2.5m、南北2.3mの間隔で[八木久栄1976a]、東西の柱間はSB701にほぼ等しい。この間に同一規模の建物が並ぶと考えるのが妥当であるが、もし、これが同一建物のだとしたら、南北約27m(11～12間)、東西8.0m(3間)の大きさになる。

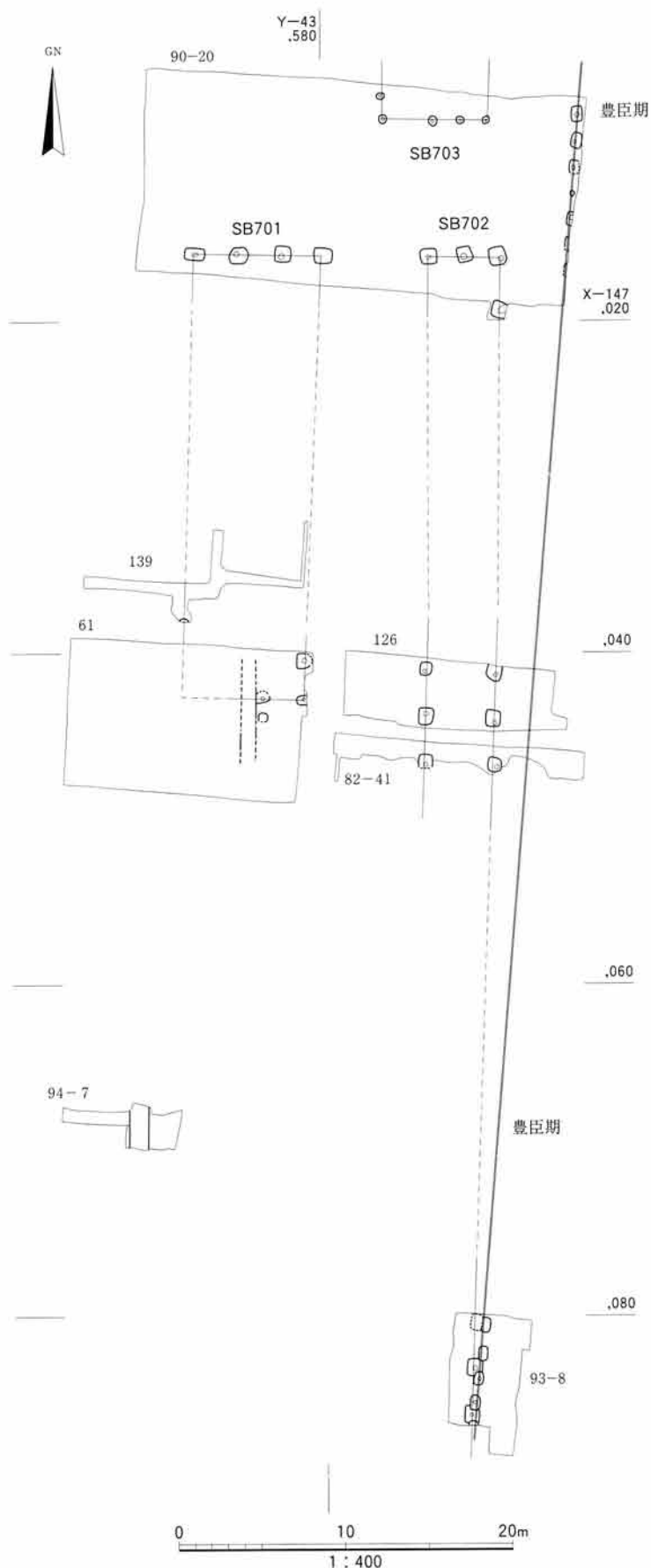


図90 NW90-20次調査地とその南側の建物群

ただ、柱筋が通るということで同一建物かどうかということについては問題が残る。これらの地区は「朱雀門」から西に延びる回廊の延長線よりも南側、つまり宮域外に当るため、複数の建物が柱筋を揃えて並んでいるということも考えなければならない。

図91は「朱雀門」の南側に広がる建物と整地層を示したものである。建物はいずれも方位を同じくしている。整地層は「上町谷」の小支谷に沿って検出されている。時期が明らかになったものの多くは難波Ⅲ中段階である。

豊臣期の遺構にはNW90-20次で検出された柵SA401がある。方向は座標北に対して4～5°東に振り、その延長はNW93-8次のSA101と一致する(図90)。この方向は現在の街区とほぼ等しく、惣構堀より南の街区の方向とは異なる。詳細はまだわからないが、豊臣期の街区を復元するうえで重要であり、今後の調査でも注意していく必要がある。

(寺井)

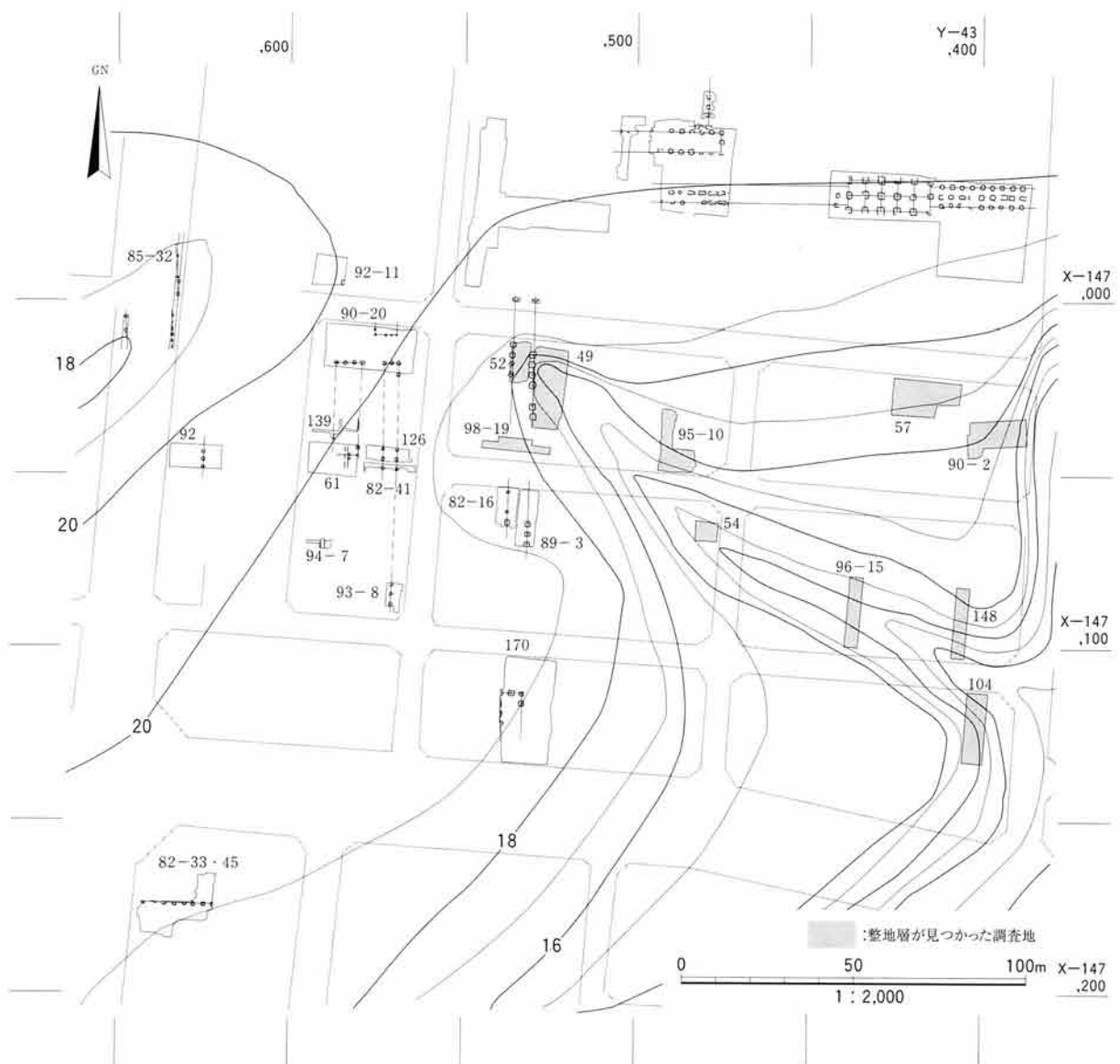


図91 「朱雀門」以南の建物と地山上面の地形

第Ⅳ章 宮殿西方地域の調査

第1節 NW93-4・12次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では1984年度から93年度にかけて行われた国立大阪病院(現国立病院機構大阪医療センター、以下略)の敷地内での6件の調査(NW84-41・84-46・85-10・86-24および93-4・12次)と、北側の歩道橋改築工事に伴うNW167次、病院西側の下水・ガス管設置に伴うNW80-4次、西側の住宅工事に伴うNW83-33次調査を報告する(図92)。

これらの調査地は前・後期難波宮朝堂院の西側に当り、北側では前期難波宮内裏西方官衙関連の建物群や石組溝を伴う水利施設が検出されている[大阪市文化財協会1992・2000a]。しかし、当地では難波宮期の遺構は少なく、不明な点も多い。これは徳川期から近代にかけての削平が大きいことにもよる[黒田慶一1984]。

国立大阪病院の敷地内は2004年6月以前に21件の調査が行われており(表11)、1982年度までの調査は『難波宮址の研究』第八[大阪市文化財協会1984](以下、「旧報告」と略称)によって報告され、難波宮造営前から近代にかけての遺構・遺物が明らかにされている。これ以降の病院内での調査や周辺調査についても表11で概要を示したので参照されたい。

2) 調査の結果

i) 旧地形と層序

国立大阪病院内では、北半分の地山の標高がTP+20mを越えるが、南半ではTP+18mぐらいまで下がる。その西側のNW83-33次調査地では東区がTP+15m前後、西区ではボーリング調査によりTP+5m前後で地山が検出された。このように本節対象地域は起伏に富んだ地形であるため、各地区で層序は異なる様相を見せる。

病院北半は地山が高いため、徳川期以降の削平を受けていることがこれまでの調査で明らかになっている。特に、近代の陸軍関係の建物による削平が著しいが、東部のやや地山が低くなる部分には豊臣期以前の地層が残っている場合もある。

病院南半は北半より地山上面が良好に残っている場合が多く、難波宮造営前から豊臣期にかけての遺構が検出され、さらに南のNW97・122次では「龍造寺谷」の小支谷の谷頭が見つかっていて、NW90-7次のSX901と合流し南に延びている。上記の3支谷では7世紀初頭の包含層と前期難波宮造営時の整地層を確認した(本章第2節)。本節で報告対象となっているNW93-4・12次調査地でも「龍造寺谷」の別の谷頭SX901が検出され、同じところに整地されていた。検出面から約2m(TP+15m)ま

表11 国立大阪病院内および周辺の調査概要

調査次数	面積(㎡)	調査成果	文 献
NW60	123	徳川期末～近代にかけての擾乱が著しく、それ以前の遺構なし。	旧報告
NW67	79	難波宮もしくはそれ以前の薄層が残っているのみで、当該期の遺構なし。	旧報告
NW89	435	難波宮下層段階の遺物を含む落込みを検出。	旧報告
NW97	600	難波宮下層段階の包含層や前期難波宮造営期の整地層で埋まる開析谷を検出	旧報告
NW119	100	徳川後期の整地層を検出。これより古い遺構はなし。	旧報告
NW122	1200	難波宮下層段階の包含層や前期難波宮造営期の整地層で埋まる開析谷、豊臣前期の溝・石組遺構を検出。溝からは金箔瓦出土。	旧報告
NW138	146	歩兵第8連隊本営の建物基礎検出。地山の削平があまり進んでいないにもかかわらず、難波宮段階の遺構検出されず。	旧報告
NW155	300	後期難波宮期の井戸・掘立柱建物、徳川期の掘立柱建物・堀・井戸・土塋を検出。	旧報告
NW172	87	難波宮下層段階の掘立柱建物を検出	旧報告
NW80-12	16.5	後期難波宮段階と推定される柱穴・溝を検出	旧報告
NW81-1	1150	徳川期以後の削平のため、それ以前の遺構は検出されず。	旧報告
NW81-28	450	徳川期以後の削平のため、それ以前の遺構は検出されず。	旧報告
NW82-1	2830	徳川期以後の削平のため、それ以前の遺構は検出されず。	旧報告
NW82-34	100	調査地東部で難波宮造営期以後の地層を確認。	旧報告
NW84-41	330	旧陸軍関係の建物のため、削平を受け、近世以前の遺構なし。	本節
NW84-46	156	難波宮下層段階の掘立柱建物・溝を検出。	本節
NW85-10	175	後期難波宮段階と思われる柱列・溝などを検出。	本節
NW86-24	344	東区・西区に分かれて調査。東区で難波宮下層段階および難波宮段階の柱穴を検出。	本節
NW93-4・12	345	開析谷、難波宮下層段階の掘立柱建物、前期難波宮段階の掘立柱建物・溝を検出。	本節
NW95-24	310	豊臣期の土塋や旧陸軍の炊事場を検出。	大文協1999d
NW99-23	1013	難波宮段階の柱穴、豊臣期の建物・井戸、大坂夏ノ陣の焼土を検出。	大文協2000c
NW167	33	難波宮下層段階以降の地層が残る。大坂夏ノ陣の焼土層を検出。	本節
NW80-4	758	古代の落込み、徳川期の遺構を検出。	本節
NW83-33	258	西側に急激に下がる傾斜面を検出。	本節

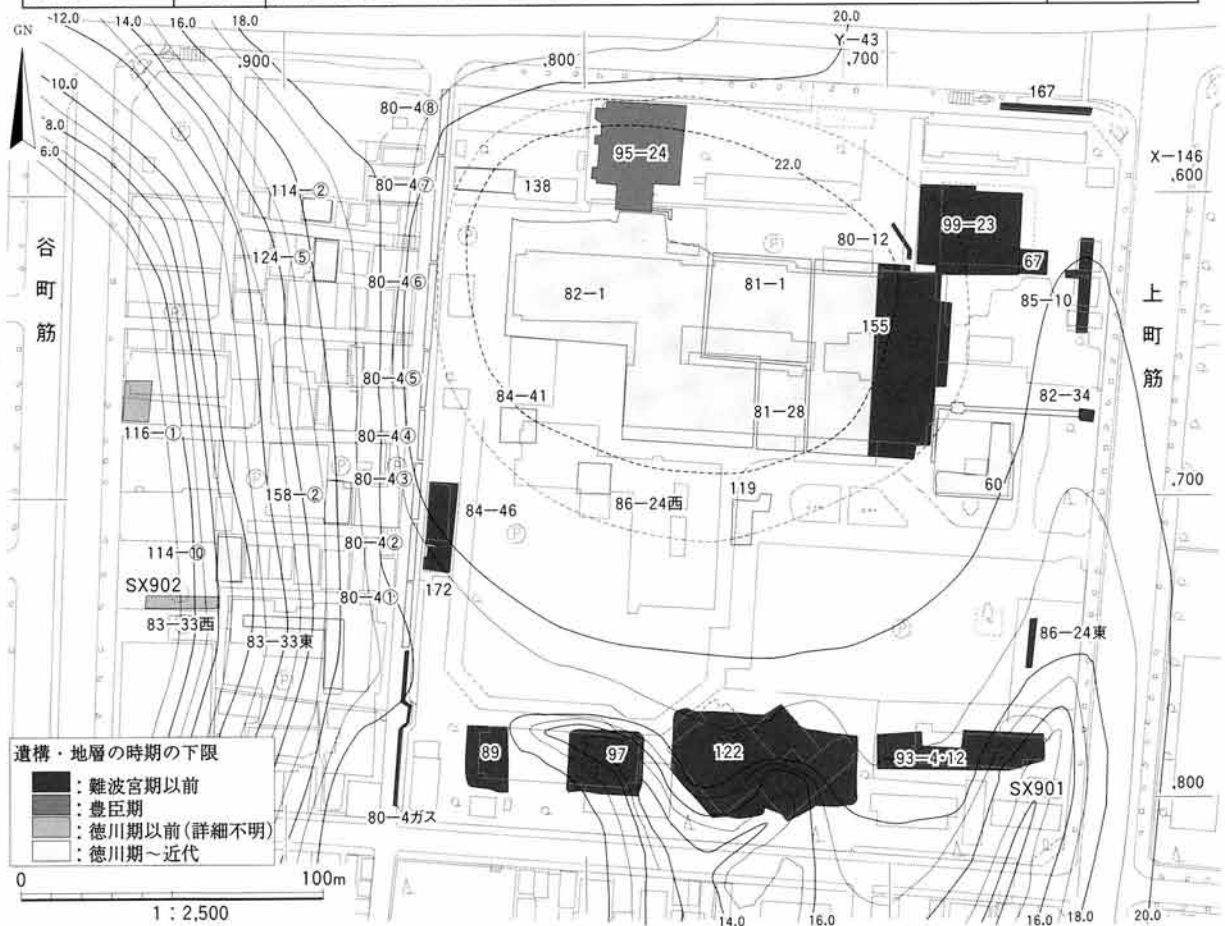


図92 国立大阪病院内および周辺の旧地形復元図(21・22m等高線は推定)

で掘削したが、底を検出することができなかった。

病院西側のNW83-33次調査については東区は地山上面が平坦で、その上位の層は薄く、徳川期末～近代初頭の遺物しか出土しなかった。また、東トレンチの西端では急激に下がる落込みSX902が検出されたが、最終的に平坦にされるのはこの時期であった。同様の結果は約150m北側に位置するNW114-②次調査地でも得られており、GL-1.5m(≒TP+15m)までが近代の整地層であり、GL-2.15m(≒TP+14.4m)で地山を検出したとされている[大阪市文化財協会1981a：p.114]。

1979年改訂の『大阪市道路現況図(1:500)』を見ると、この調査地のある街区の現地表は、北端でTP+17.6m、南端でTP+18.3mの高まりがあり、これらの高まりの間はTP+15～16mと低くなっている。これはきわめて不自然な地形であるが、NW83-33次調査などの成果から、近代初頭に大規模な削平を伴う地形改変が行われて段差がついたと思われる。SX902は「龍造寺谷」の東斜面に当るが、落込み内の地層の時期は確認することはできなかった。

以上のような手掛りを基にして復元した地山上面の旧地形復元図は図92のようになる。病院中央部は本来はTP+22m程度の高まりがあり、それより西側には現在の谷町筋に向っての急斜面が存在したと思われる。この西側の斜面については南北両側の高まりを基に復元的に等高線を引いた。

続いて、層序は旧報告に倣って以下のように区分した(図93)。今回報告対象の調査では各時期の地層がすべて残っているところはなかったが、NW85-10次が比較的良好に残っていた(図99)。

第1層 病院建設に伴う整地層。

第2層 旧陸軍に関する整地層。

第3層 徳川期の整地層。NW93-4・12次調査地では18世紀末～19世紀代と17～18世紀代の2時期の整地層を確認することができたので、前者を第3a層、後者を第3b層とする。

第4層 豊臣期の整地層。NW99-23次ではこの層の直上で大坂夏ノ陣の焼土層が確認された。

第5層 中世の整地層(包含層)。NW85-10次(図99)やNW86-24次調査の東区といった病院敷地の東側で検出されている。

第6層 後期難波宮の瓦を伴った難波宮廃絶後の層。

第7a層 後期難波宮期の整地層。NW85-10次調査では瓦を含む灰褐色シルト層が確認されている。

第7b層 前期難波宮造営に伴う整地層。NW93-12次のSX901内では、黄色シルト質粘土の偽礫を

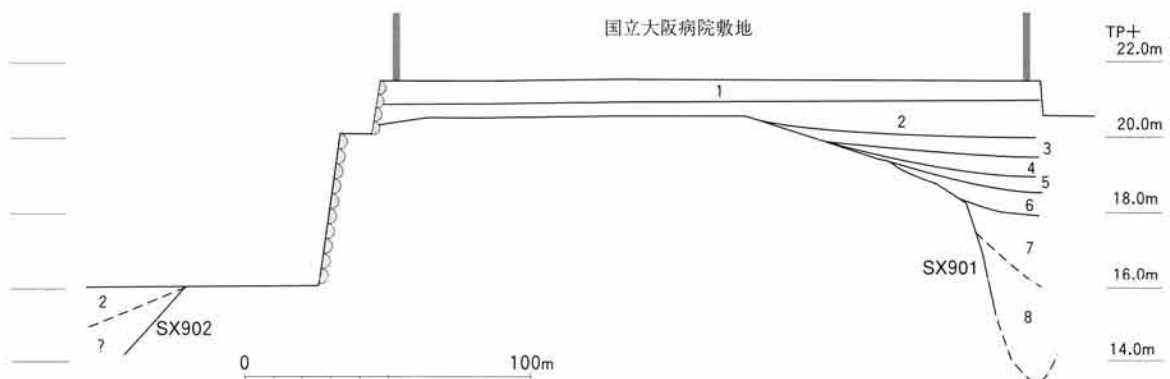


図93 国立大阪病院内および周辺の層序模式図

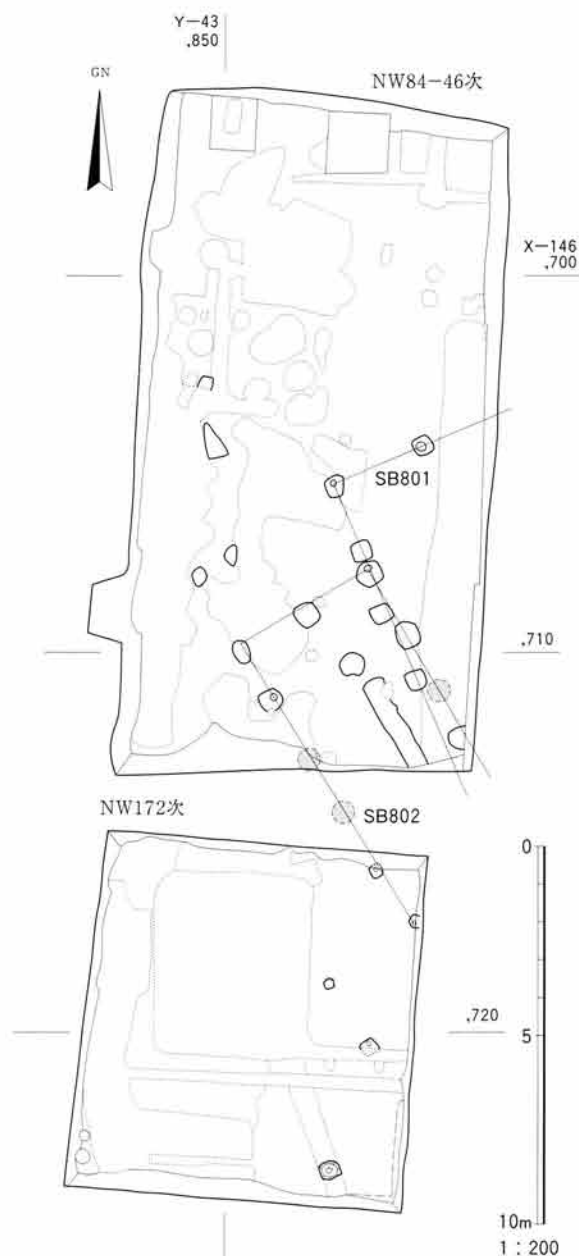


図94 NW84-46次および172次遺構配置図

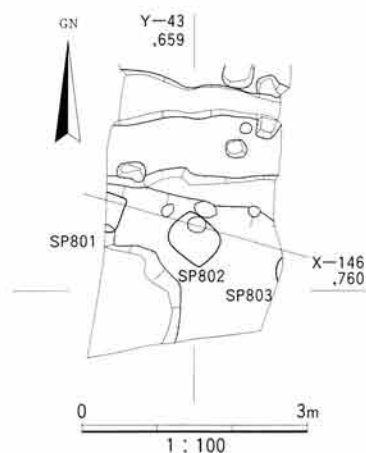


図96 NW86-24次SP801~803平面図

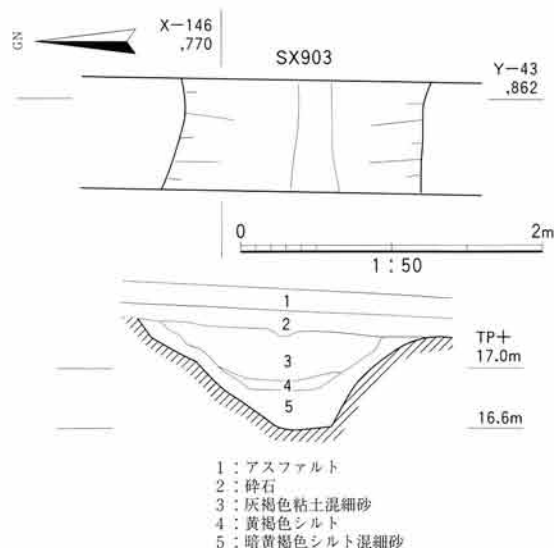


図95 NW80-4次SX903実測図

含む地層が確認された。

第8層 難波宮造営前の包含層。NW167次調査ではこれに相当すると思われる灰色シルト層が約60cmの厚さで残っていた。また、NW97・122次調査地の谷の窪み内では灰黒～黒色シルト～粘土が堆積していた。

第9層 上町層の地山。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前の遺構

NW80-4次調査(図95)

SX903 ガス管工事の単独部分南端から約43m北側で検出された窪みである。幅2.0m、深さ0.7mあり、断面がV字状を呈する。埋土の3層からは瓦器が出土し、4・5層からは須恵器・土師

器・瓦が出土した。調査時は溝と認識したが、当地点の地山の標高が周囲よりも低いことから、小支谷の谷頭である可能性もある。

NW84-46次調査(図94、図版14上)

方向が若干異なる掘立柱建物を2棟検出した。

SB801 桁行3間以上、梁間1間以上あり、N23°Wの方向をとる。柱間は南北が1.9m、東西が2.5mある。柱掘形は一辺0.5m程度の方形で、柱痕跡は直径0.2m程度であった。

SB802 桁行2間以上、梁間2間の掘立柱建物で、N30°Wの方向をとる。柱間は南北が1.5～2.0m、東西が2.0mある。柱掘形は一辺

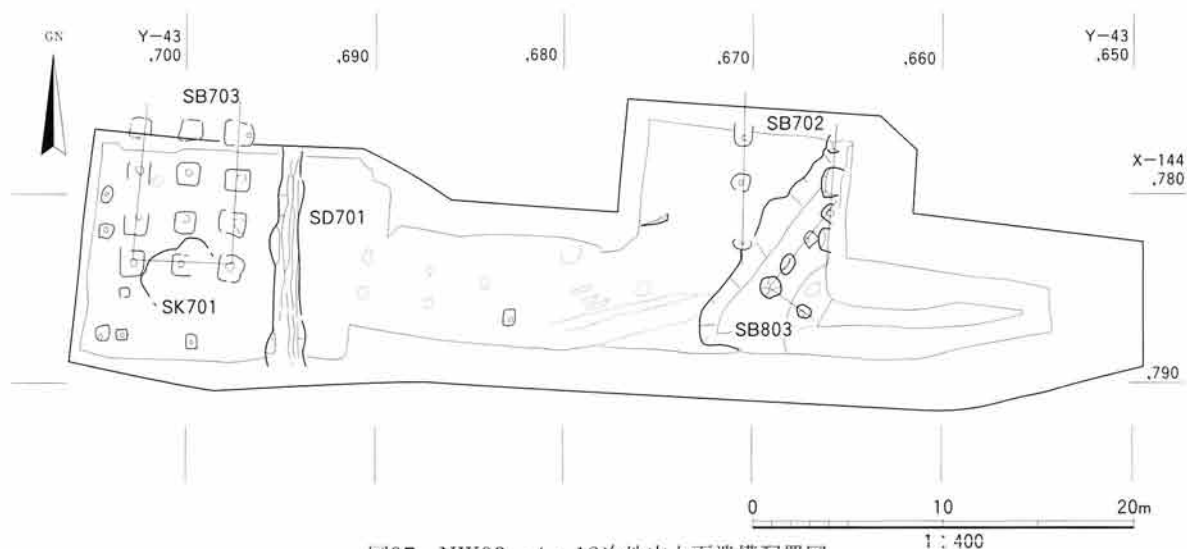


図97 NW93-4・12次地山上面遺構配置図

約0.6mの方形で、柱痕跡は直径0.2m程度であった。なお、この建物の西側の柱列の延長上にNW172次調査で検出されたSB17241の東側の柱列があり、同一の建物になる可能性がある。

当調査地は地山が西～南西に向って下がりだす地点に当ることから、これらの建物の方向は地山上面の傾斜に規制されている。

NW86-24次調査東区(図96・101)

SP801～803 調査地南部で地山の標高が下がる部分で検出した。これら3基はおそらく一連の建物もしくは柵になると思われる。全体がわかるSP802は東西0.68m、南北0.56mあり、柱痕跡は直径0.20mある。3基の柱穴はE18°Sの方向に並び、柱間隔は1.6m前後であったと推定される。当調査地の約25m南にはNW93-4・12次で

検出された谷頭SX901が存在する。こうした谷地形につながる傾斜面に規制された方向と思われる。

NW93-12次調査(図97・98、図版15中)

調査地東端のSX901の傾斜面上で掘立柱建物1棟を検出した。

SB803 調査地東端のSX901の傾斜面において、第7b層基底面で検出した掘立柱建物である。桁行3間(5.2m)以上、梁間1間(2.1m)以上あり、柱掘形は一辺0.7～0.8mの方形で、柱痕跡は0.2mあった。N37°Eの方向であるが、これはSX901の傾斜に規制されたものと思われる。

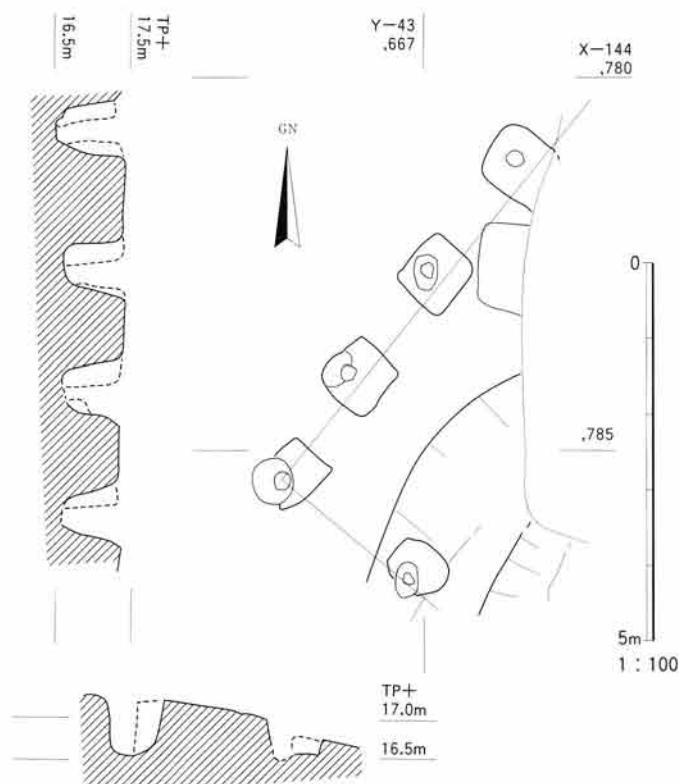


図98 NW93-12次SB803実測図

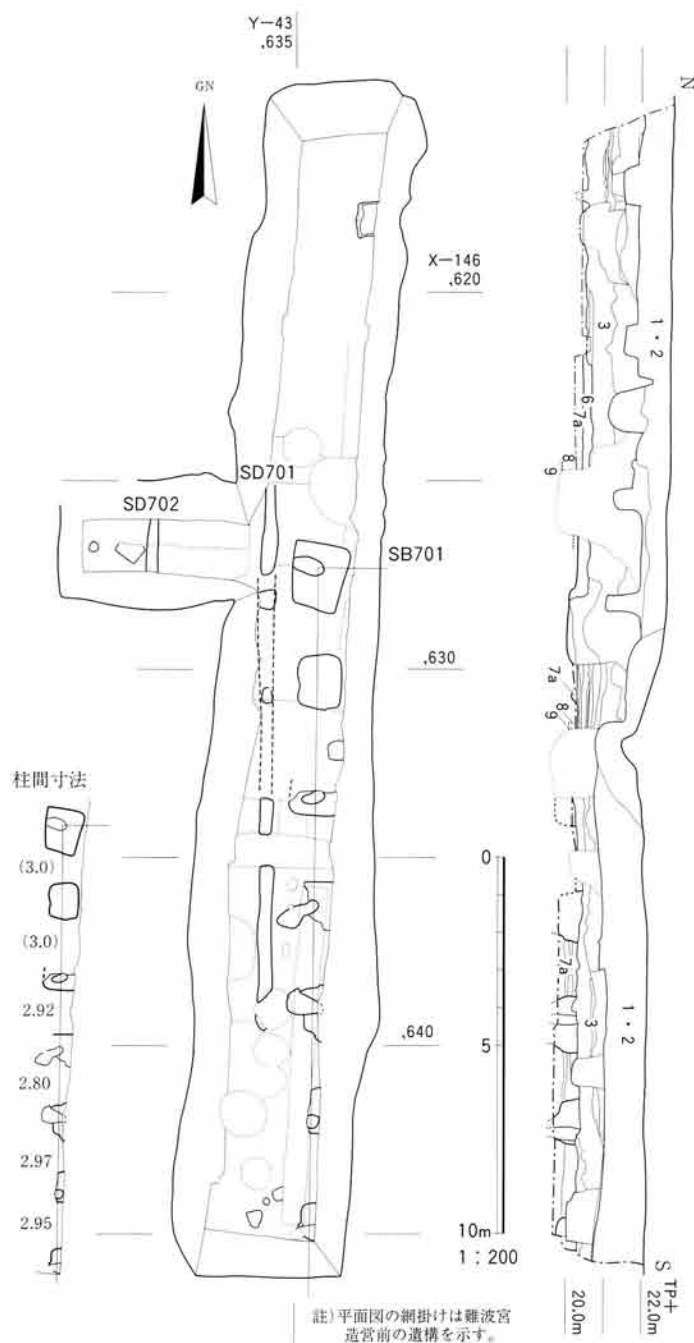


図99 NW85-10次遺構配置図および東壁断面図

SP701・702(図100・101、図版14下) 調査地の北端で検出した柱穴である。SP701は掘形の南北が1.13m、東西が0.96m以上あり、南から柱が抜かれていた。SP702の掘形は一辺1.0m、東西0.95m以上ある。柱痕跡の直径は0.28mで、柱は南西から抜取られていた。これらの柱穴は正東西に並び、同一建物に伴うと思われる。

NW93-4・12次調査

掘立柱建物2棟、溝1条、土壇1基を検出した。

SB702(図102、図版15中) 調査地の東端で検出した、梁間2間になると思われる側柱建物である。柱穴の掘形は一辺1.0~1.3mで、柱痕跡は直径0.2mである。東側と西側の柱穴の底の高低差が最大2.4

b. 難波宮期の遺構

NW85-10次調査(図99、図版14中)

第3層基底面で掘立柱建物1棟、溝2条を検出した。なお、当地で検出された整地層は、難波宮跡公園内の東部に位置するNW84-30次調査地[大阪市文化財協会1985a]で検出された後期の整地層がきわめて類似していると調査時に認識されたことから、第7a層に該当させ、以下の遺構も後期難波宮期に位置づけた。

SB701 調査地南半分で南北に並ぶ柱穴6基を検出した。柱が北側に延びず、柱列の西側に平行して延びる溝SD701・702があることから、6間以上の南北棟の掘立柱建物と推定した。柱穴は掘形が一辺1.5mの方形で、柱痕跡が直径0.28m、深さが0.72mあった。柱間は図99の左下に示したとおりで、平均は2.95mである。柱の抜取穴はいずれも西向きであった。

SD701 SB701の柱掘形の西約0.5mの位置で、建物と平行して延びる溝である。深さは0.1m未満である。

SD702 SD701よりさらに1.3m西で平行して延びる溝である。規模もSD701と同じである。

NW86-24次調査東区

mあるが、これは西側の柱穴の検出が不十分であったことによると思われる。

SB703(図103) 調査地の西端で検出された桁行3間(7.9m)以上、梁間2間(5.3m)の総柱の掘立柱建物である。柱の掘形は一辺1.1~1.3mの方形で、柱痕跡の直径は0.3mある。建物の方向はN2°Wであった。一部に柱の抜き取痕跡が見られるが、焼土の落込みは見られなかった。

SD703(図103、図版15上) 幅0.5~0.8m、深さ0.7mの2段掘りの溝で、N2°Eの方向に延び、**SB702**と平行である。

SK701(図103) 長径約4m、深さ0.1mの土坑である。7世紀代の須恵器片が出土し、**SB702**に切られていた。

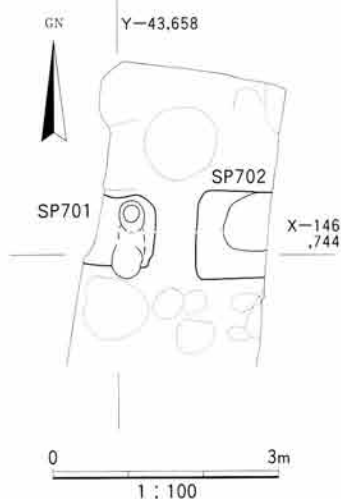


図100 NW86-24次SP701・702
平面図

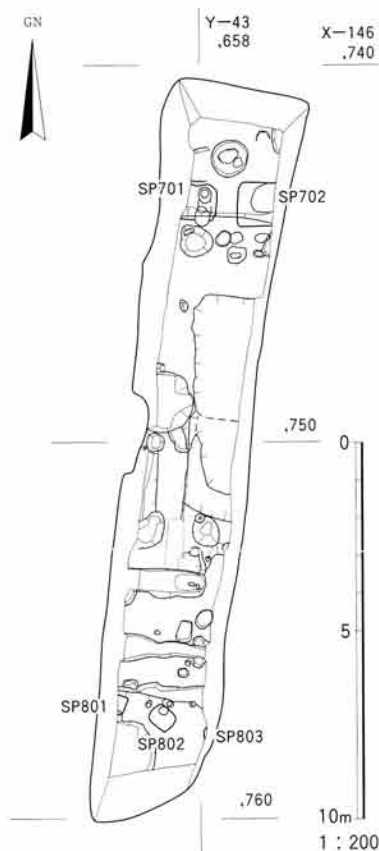


図101 NW86-24次東区遺構配置図

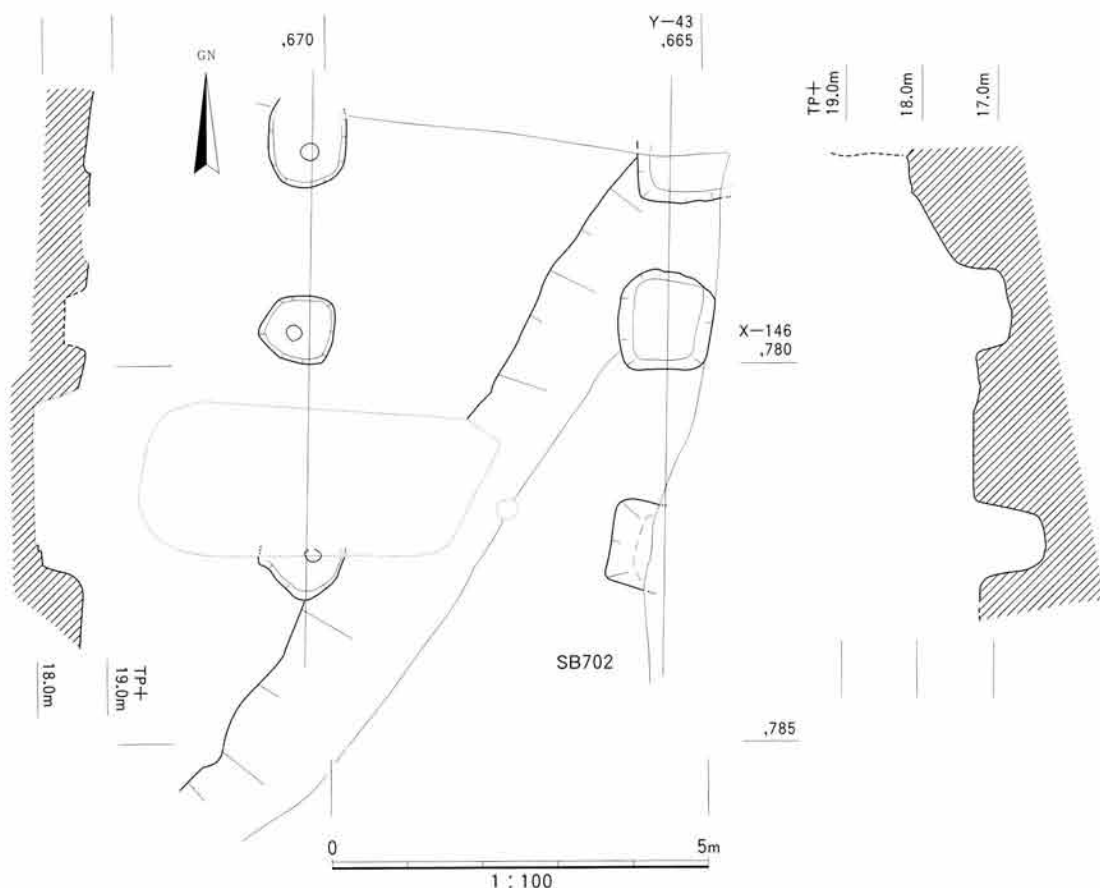


図102 NW93-12次SB702実測図

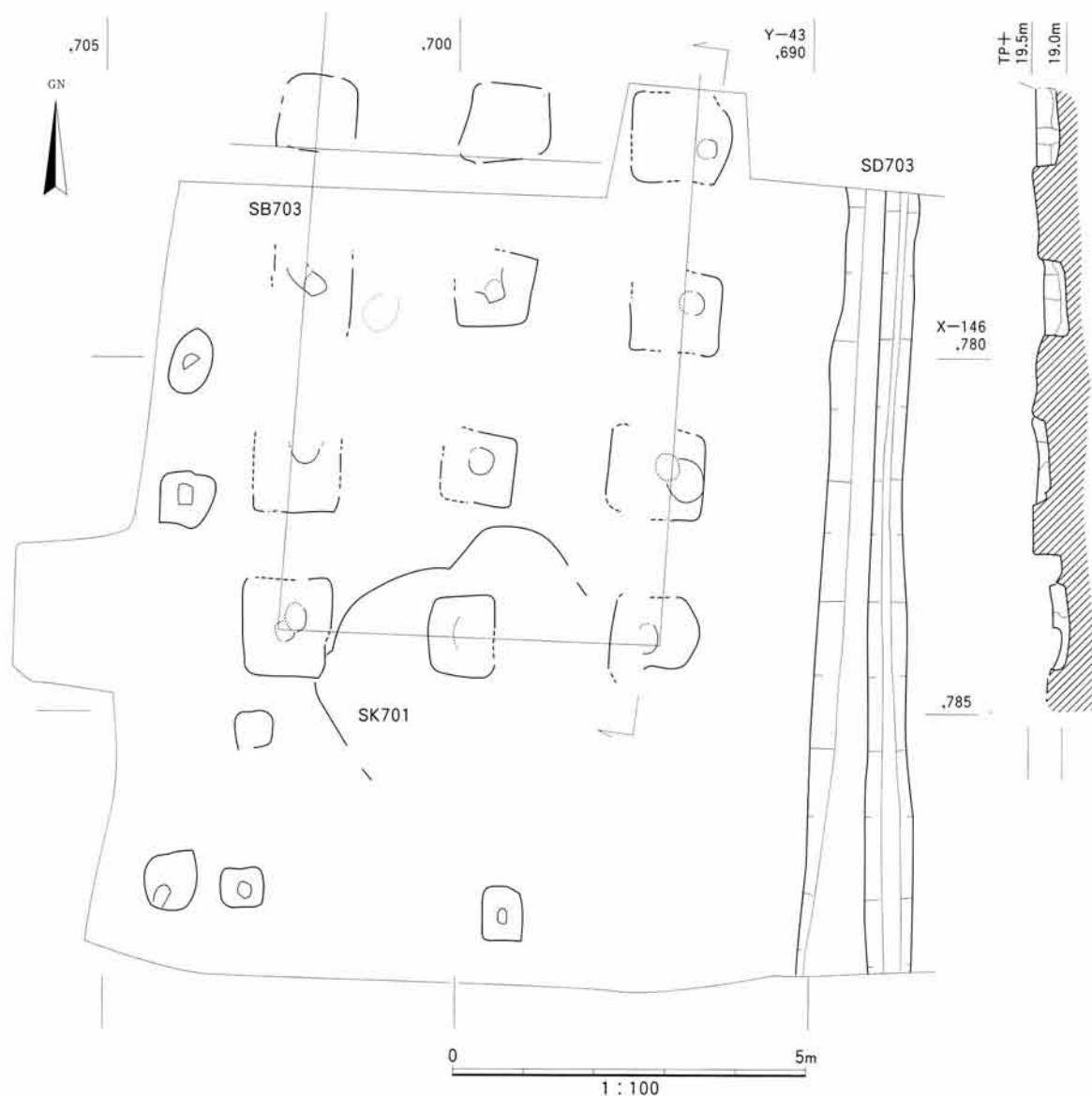


図103 NW93-4 次SB703および周辺遺構実測図

c. 豊臣期の遺構と遺物(図104)

NW93-4・12次調査地で溝・土塋を検出した。

SD401～404 調査地西部で検出された東西および南北方向の溝である。SD402～404はSD401に接続するが、その性格はわからない。SD401は最大幅0.9m、深さ0.9mあり、埋土に焼土を含むことから、大坂夏ノ陣後に埋没したと思われる。出土遺物には備前焼盤・瀬戸美濃焼天目碗・金箔押し龍面鯨瓦がある。この龍面鯨瓦は長さ約27cm、頬の部分の幅約15cmあり、NW122次調査で出土した破片と接合した[清水和1993]。

SD405 幅0.7m、深さ0.1mの溝である。備前焼播鉢・瀬戸美濃焼天目碗・唐津焼皿が出土した。

SK401 東西4.0m、南北2.0m、深さ1.2mの方形の土塋である。備前焼播鉢などの遺物が出土した。

d. 徳川期の遺構と遺物(図版15下・16・17)

NW93-12次調査地の拡張区(図105)で墓地を検出した。南北石垣に沿った東西約3m、南北約7.5mの範囲で50基が密集して見つかり(図106、表12)、さらに調査区を越えて北側へ続いていた。これ

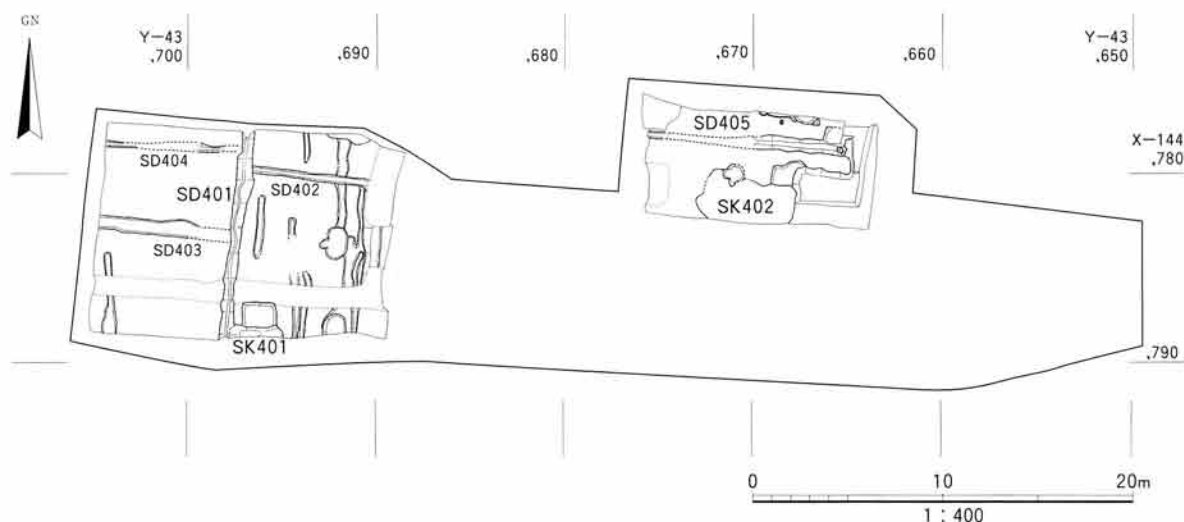


図104 NW93-4・12次豊臣期遺構配置図

らの墓は第3a層上面と第3a層基底面の2面で検出された。切合い関係は表13の通りである。拡張区の調査は墓のみに限ったもので、墓が造られる以前の時期や墓が分布していない場所は発掘していない。なお、この墓地の調査概要は[南秀雄1994]で紹介されている。

ここでは、骨が遺存していない場合の土葬か火葬かの判断は容器の大きさと種類によった。火葬容器と推定した火消し壺のなかで最大の25号墓と、土葬容器と推定した甕のなかで最小の12号墓では、容器の高さは33cm前後と似通っているが、容量においてかなりの開きがある。また、骨の遺存状態が良好なものでは、火消し壺には火葬骨、甕には土葬の骨が対応していた。



写真17 NW93-4 次出土金箔押し龍面鱗瓦

今回の発掘では、埋葬容器の掘形の掘込み面を層位的に把握できた例はほとんどないが、総体的には下部(図106左)で桶・甕を使用した墓が、上部(図106右)で小型の土師質の容器を使用した墓が見つかるという傾向があり、土葬から火葬へという変化が推定できる。ただし例外もあって、32号墓(甕)は31号墓(火消し壺)を切っている。

次に、埋葬容器の違いごとに墓の特徴や副葬品について記述する。

桶

桶を使用したと推定される墓は3・11・14・17・18号墓の計12基である。円筒形の掘形を有するもので、桶の木質がわずかに残存しているものもあった。桶の輪郭を認識できた5例では直径は47～50cmにまとまり、掘形の直径は56～70cmである。ほとんどの場合は本来の掘込み面より下で墓壙を検出しており、最も深いもので検出面から54cmあった。桶使用の墓では、骨が比較的良好な状態で残っていたものが多い。また5号墓では、墓の上に長さ40cm、幅25cmの自然石が置かれていた。

12例中8例では、銭や土師皿、紅猪口・紅皿・合子などの化粧道具、各種の土人形、土鈴などの副

表12 NW93-12次近世墓一覧

番号	容器	副葬品(数字は点数)	前後関係	備考
1	甕(丹波)2・蓋(唐津大鉢)1	寛永通宝3・土師器2・紅皿・木製人形2		副葬品・容器が2と類似
2	甕(丹波)4・蓋(唐津大鉢)3	寛永通宝5・雁首銭1・木製人形2	1より新	副葬品・容器が1と類似
3	桶	紅猪口・小杯・合子	1より新	
4	桶	紅皿・土鈴		
5	桶			上に石
6	桶	(円形土製品)		
7	桶	寛永通宝6	6より新	
8	桶	銭・土人形(子供・猫)	6より新	
9	桶			
10	桶	土師皿	9より新	
11	桶	土人形(赤ん坊・天守・城門)		
12	甕(土師質)6・蓋(唐津大鉢)5	土師皿	11より新	
13	箱状			
14	桶	寛永通宝6	13より新	
15	甕(丹波)11・蓋(唐津大鉢10・堺搦鉢9)			蓋二重・上層に墓石
16	甕(唐津)13・蓋(唐津大鉢12・一部に瓦)			写真18
17	桶		16より新	
18	桶	土師皿		
19	甕(丹波)			未掘のため蓋・副葬品は未確認
20	火消し壺21および蓋20		19より新	
21	火消し壺25および蓋24		19・20より新	
22	甕(丹波)14	寛永通宝6・鉤状銅製品・碗・土人形(猿)		蓋は腐朽か
23	甕(土師質)15	(煙管 混入か)	1より新	蓋は腐朽か
24	火消し壺27および蓋26			
25	火消し壺19および蓋18	(土師皿2・刀子 混入か)		壺に墨書「・・・釈恵王」
26	火消し壺23および蓋22		25より新	
27	炮烙(枚方産)48・49		26より新	
28	有蓋小型壺62・63			
29	炮烙(枚方産)52・53			
30	火消し壺32			原位置でない
31	火消し壺			
32	甕(丹波)17・蓋(唐津大鉢)16		4・31より新	
33	炮烙(枚方産)60・61			
34	炮烙50・51		33より新	
35	炮烙56・57			
36	有蓋小型壺68・69			蓋は火消し壺から転用
37	甕(丹波)8・蓋(唐津大鉢)7		5・9より新	四角形墓墳内に焼土
38	火消し壺31および蓋30		37より新	壺に墨書「六月十六日土屋様御家中北村宅桐青」
39	火消し壺34および蓋33			壺に墨書
40	有蓋小型壺66・67		10より新	石囲い・壺に墨書「天明六年十□吉村□圓・・・」
41	有蓋小型壺64・65			
42	炮烙54・55		41より新	
43	火消し壺36および蓋35		11・12より新	底に墨書「□力(為)」
44	炮烙58・59			
45	火消し壺29および蓋28			原位置でない
46	火消し壺38および蓋37			
47	火消し壺40および蓋39		46より新	
48	火消し壺42および蓋41		16より新	
49	火消し壺44および蓋43		15より新	

表13 NW93-12次墓の前後関係

第3a層基底面	第3a層上面
1 (K) ⇒ 3 (K)	
13 (K) ⇒ 14 (K)	
16 (K) ⇒ 17 (K)	
10 (K)	
9 (K) ⇒ 37 (K) ⇒ 38 (F)	
5 (K) ⇒ 33 (H) ⇒ 34 (H)	
	19 (K) ⇒ 20 (F) ⇒ 21 (F)
	25 (F) ⇒ 26 (F) ⇒ 27 (H)
	41 (Y) ⇒ 42 (H)
	46 (F) ⇒ 47 (F)

前後関係は「(古)⇒(新)」である
 アルファベットはK：罌、F：火消し壺、H：焙烙、
 Y：有蓋小型壺、M：桶または木箱を示す

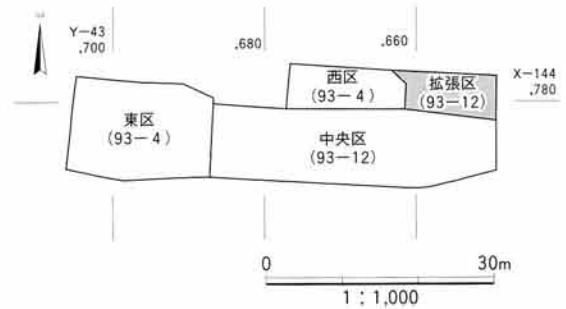


図105 NW93-12次拡張区の位置

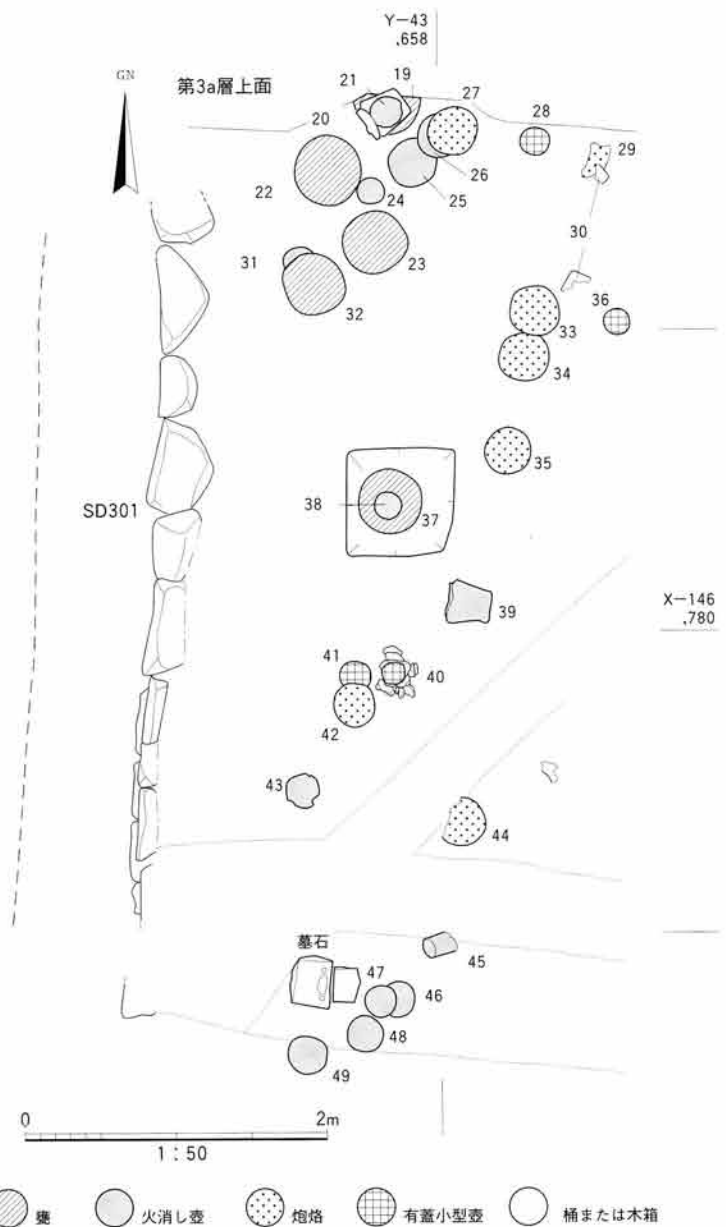
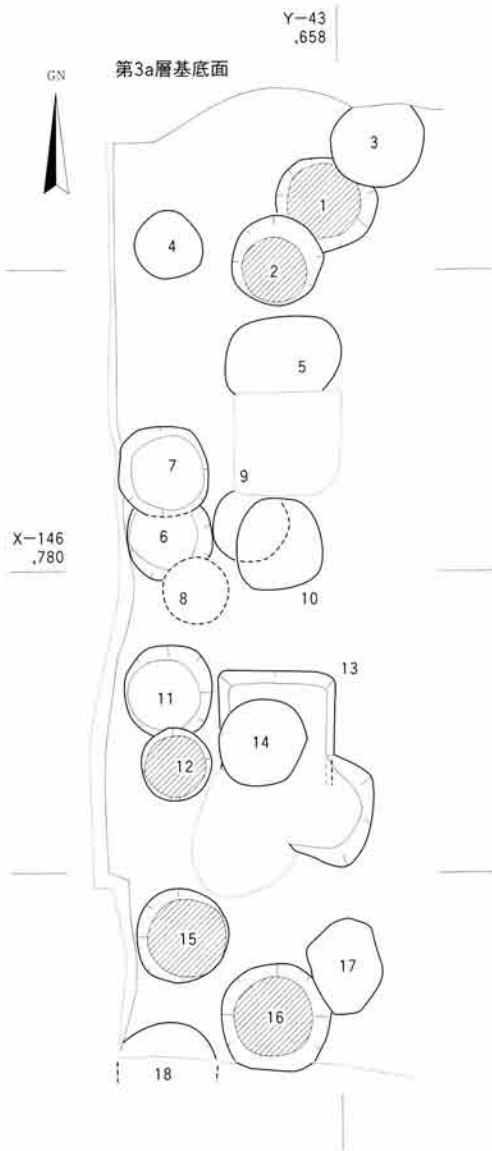


図106 NW93-12次近世墓配置図

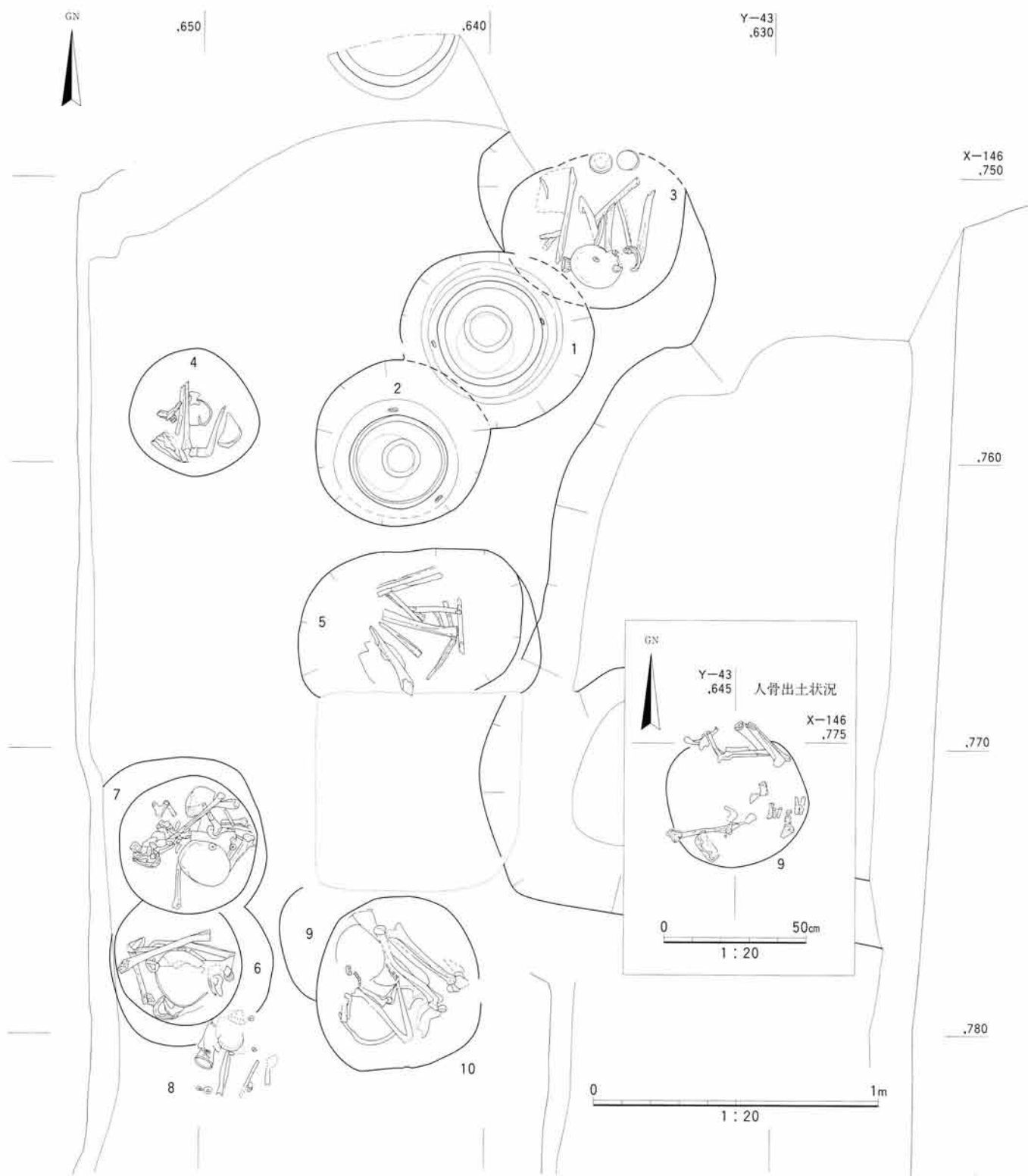


図107 NW93-12次1～10号墓実測図

葬品が発見された(表12、図115・116)。ここでは3号墓の肥前磁器白磁紅猪口105・同合子108・同小杯109、4号墓の肥前磁器紅皿106、18号墓の土師器皿74を図示した。

甕

埋葬容器に甕を使用したものは、1・2・12・15・16・19・22・23・32・37号墓の計10基であ

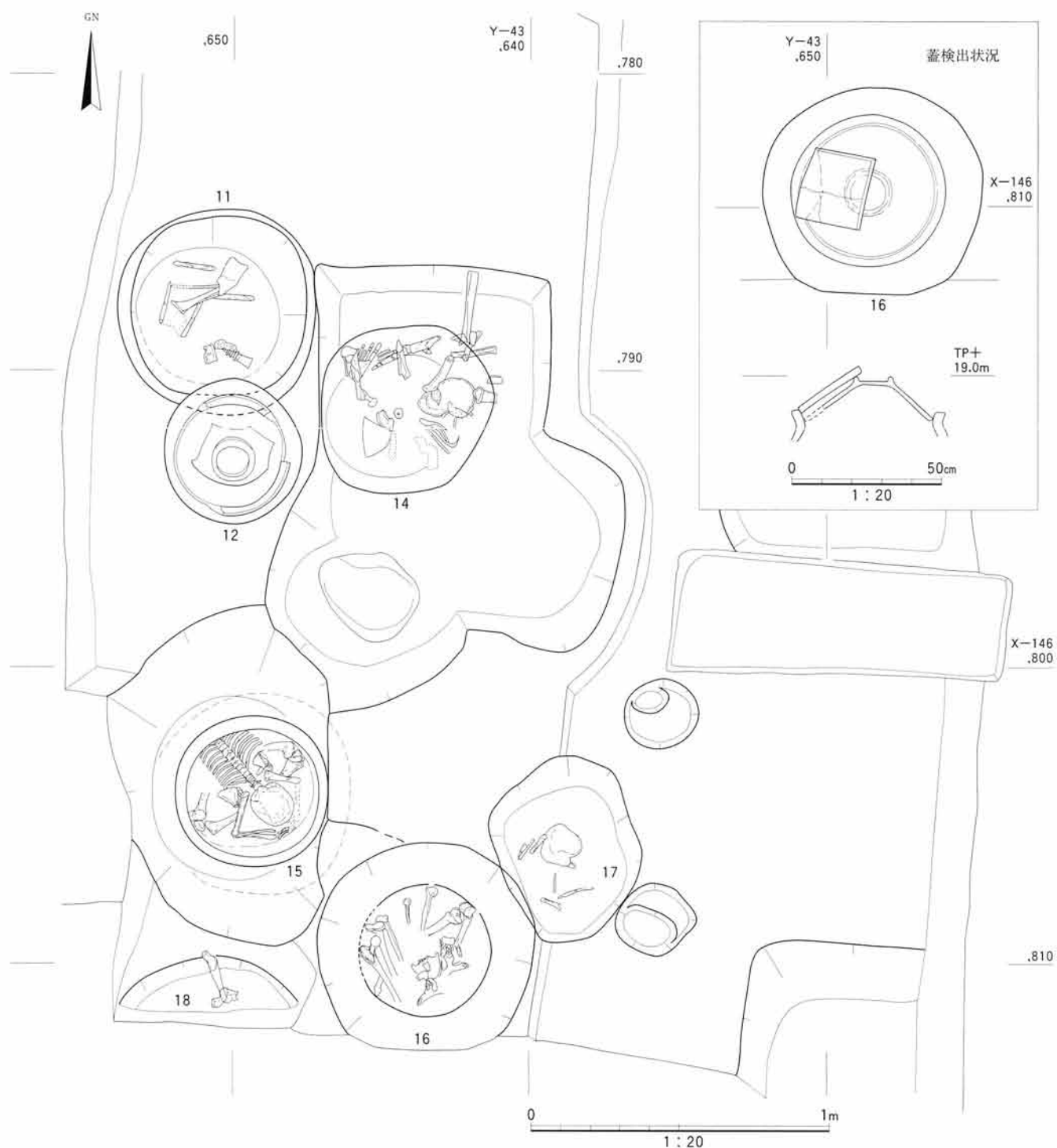


図108 NW93-12次11~18号墓実測図

る。10例中7例に唐津焼大鉢を転用した蓋が伴っていた。残り3例のうちの1例は未掘のために蓋の有無は不明で、他の2例は木蓋などが腐ってなくなったのであろう。また、平面方形の掘形をもつ37号墓では墓構内に多量の焼土が入っていたが、これは火葬骨が混入したためと思われる。

甕には大（高さ61.0~80.5cm、15・16号）・中（高さ51.0cm、37号）・小（高さ33.5~43.0cm、1・2・12・19・22・32号）の3種で、唐津焼・丹波焼と、製作技法などが同じ土師質のものがある。大型甕を使用した15・16号墓は成人人骨が出土した。15号墓では大鉢と搦鉢によって二重に蓋をされて

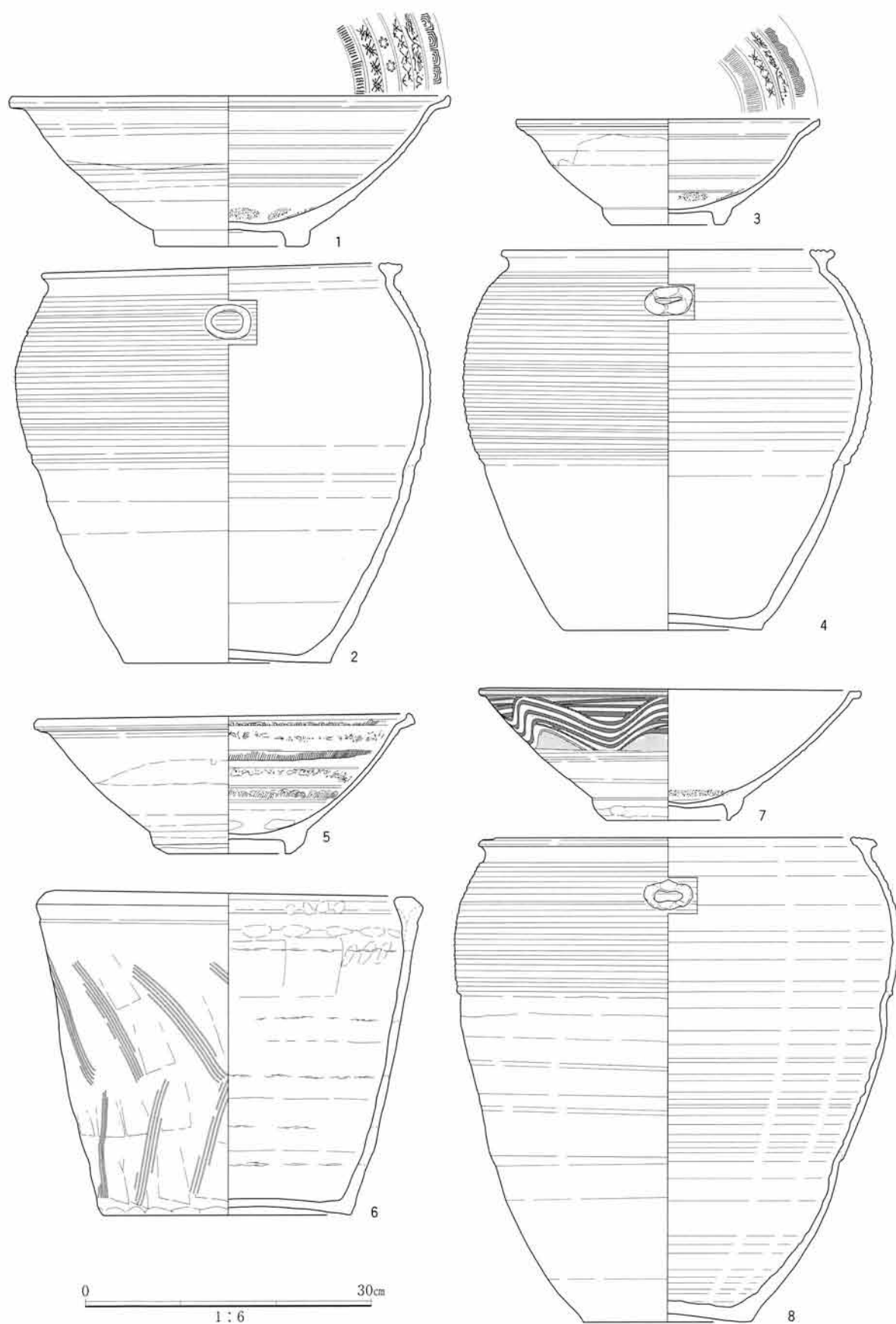


図109 NW93-12次拡張区近世出土遺物(1)

1号墓(1・2)、2号墓(3・4)、12号墓(5・6)、37号墓(7・8)

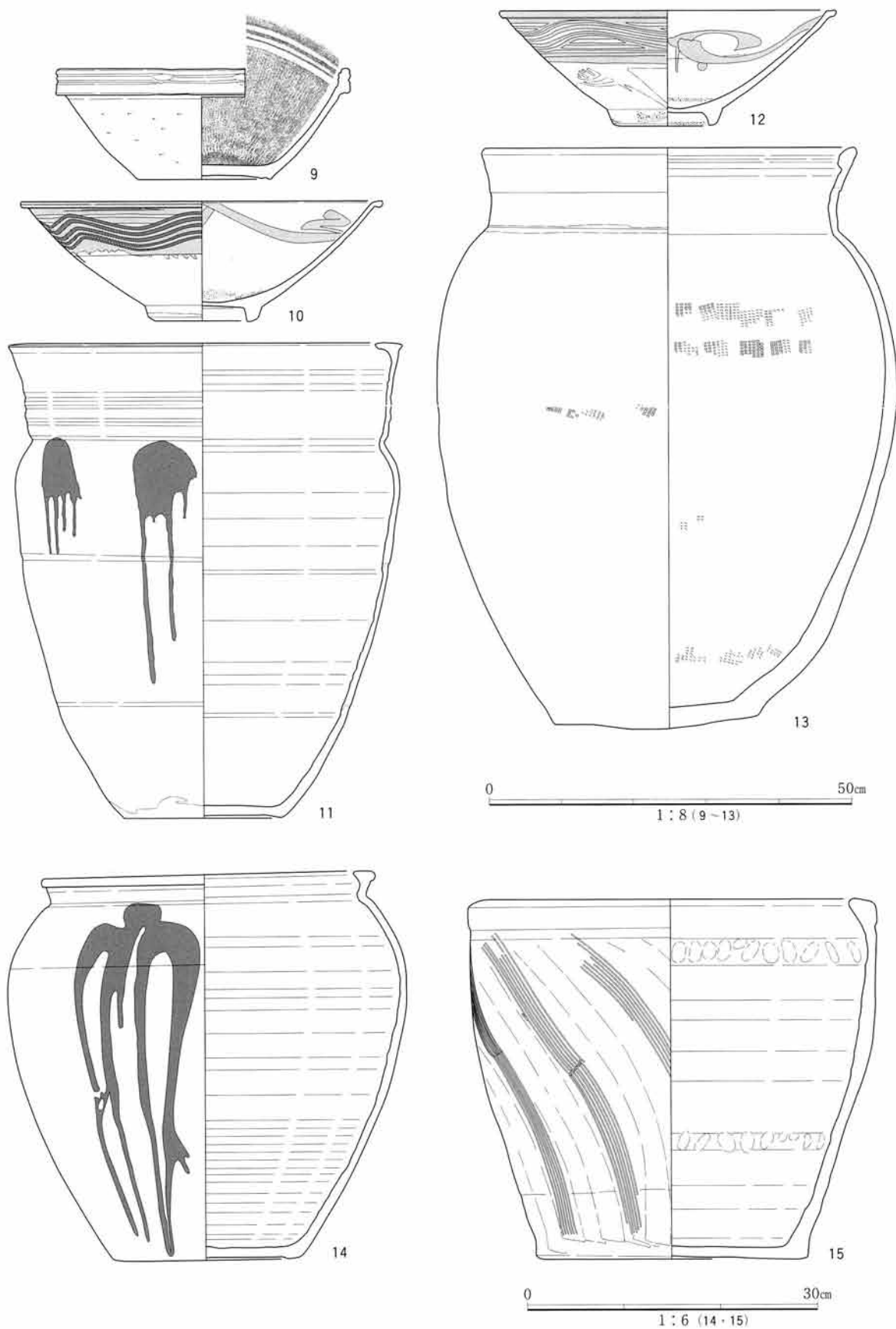


図110 NW93-12次拡張区近世出土遺物(2)
15号墓(9~11)、16号墓(12・13)、22号墓(14)、23号墓(15)

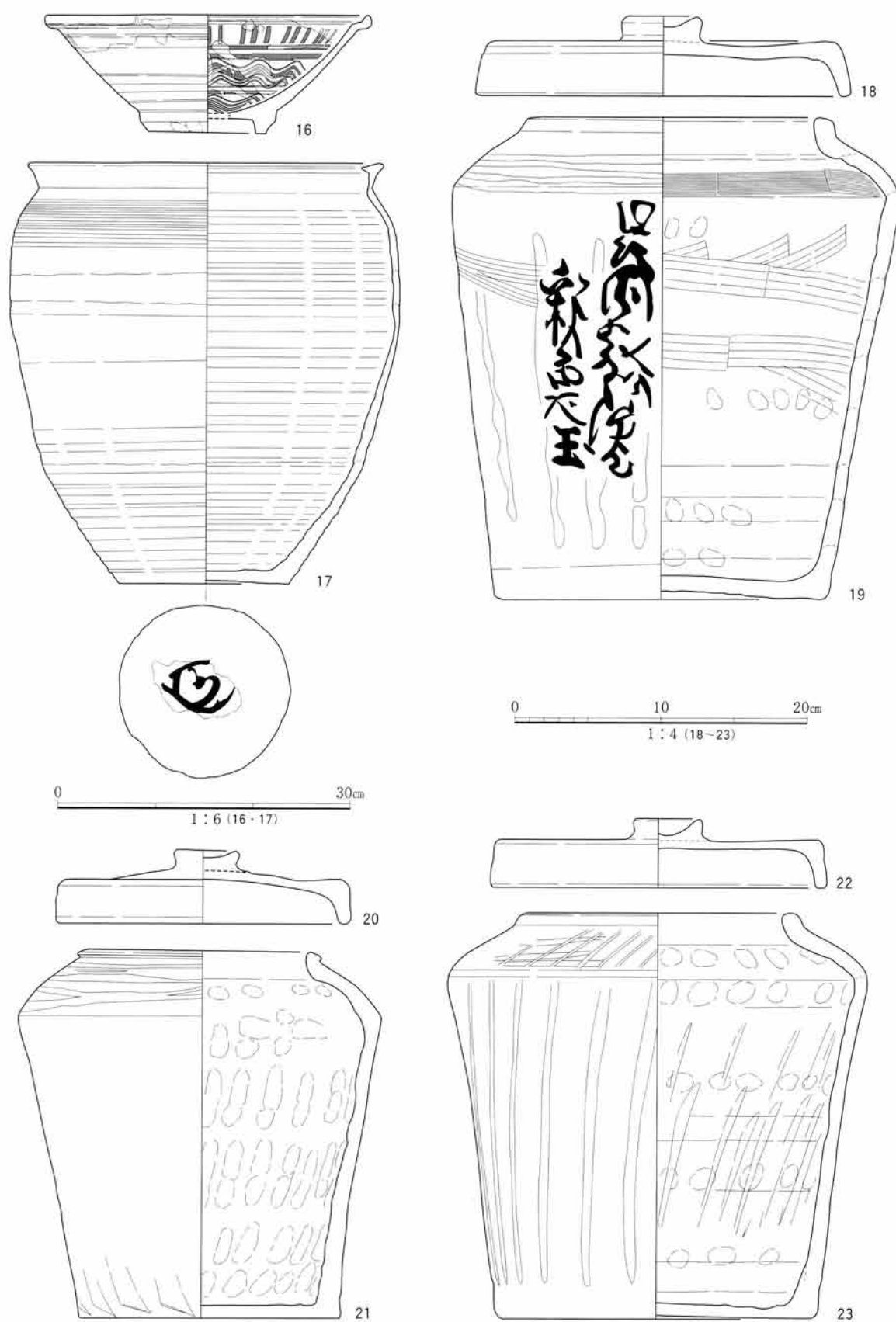


図111 NW93-12次拡張区近世出土遺物(3)

32号墓(16・17)、25号墓(18・19)、20号墓(20・21)、26号墓(22・23)

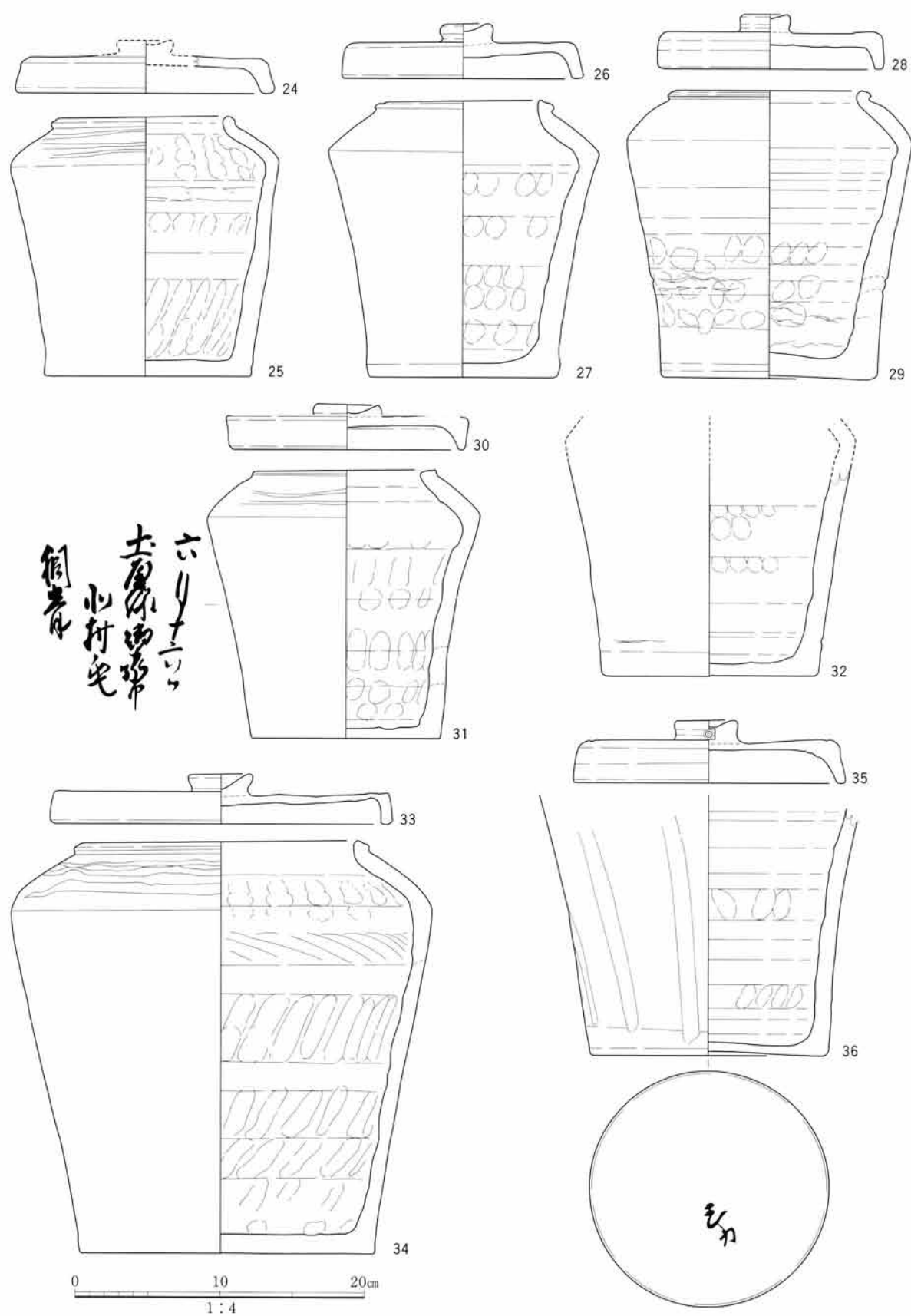


図112 NW93-12次拡張区近世出土遺物(4)

21号墓(24・25)、24号墓(26・27)、45号墓(28・29)、38号墓(30・31)、30号墓(32)、39号墓(33・34)、43号墓(35・36)

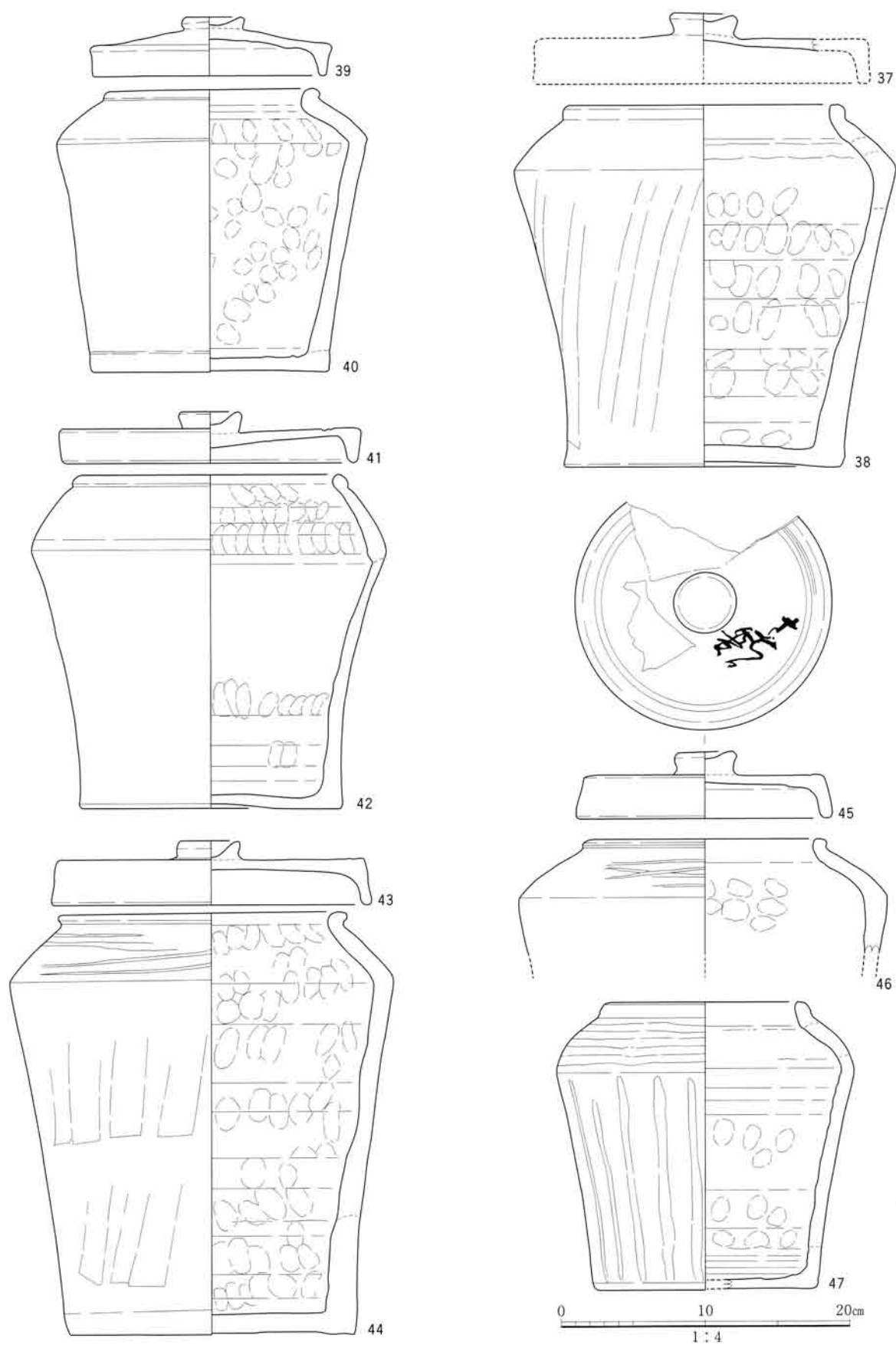


图113 NW93-12次拡張区近世出土遺物(5)

46号墓(37・38)、47号墓(39・40)、48号墓(41・42)、49号墓(43・44)、石垣西側溝(45~47)

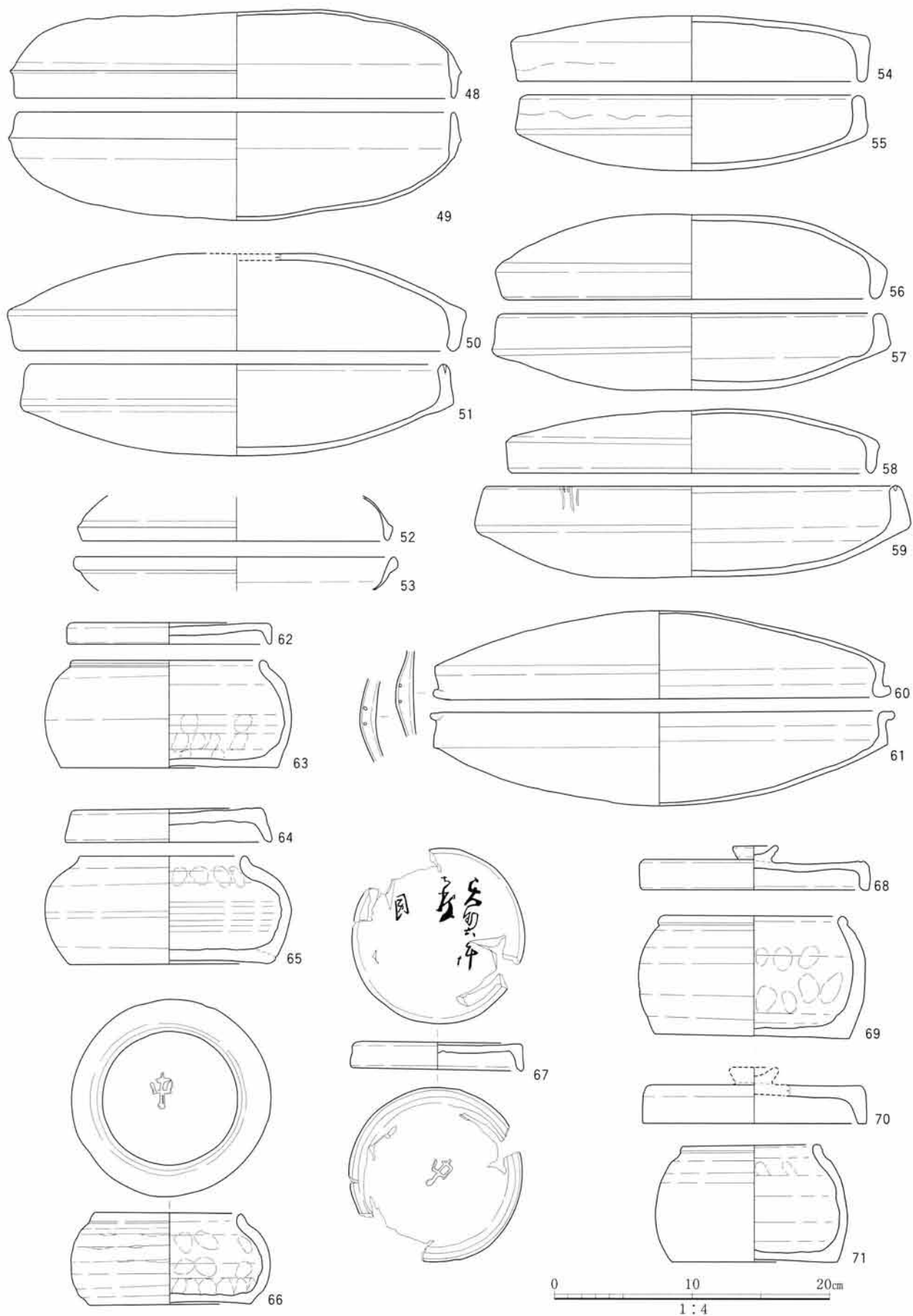


图114 NW93-12次拡張区近世出土遺物(6)

27号墓(48・49)、34号墓(50・51)、29号墓(52・53)、42号墓(54・55)、35号墓(56・57)、44号墓(58・59)、33号墓(60・61)、28号墓(62・63)、41号墓(64・65)、40号墓(66・67)、36号墓(68・69)、49号墓付近(70・71)



写真18 16号墓蓋検出状況

いた。16号墓は左大腿骨が上下逆転した状態で出土し(図版17中)、頭蓋骨に孔があり、頸部には切傷痕があった(第V章第5節)。また、唐津焼大鉢の蓋が破損し、その部分は瓦で塞がれていた(写真18)。これはおそらく後代に別の墓壙を掘る際に破損し、その時に一度遺体を取り出された後、再び甕に戻したことが推定される。

小型甕の1・2号墓は表13のように切合い関係があるが、埋葬容器や副葬品まで非常によく似て

いる。いずれも幼児が埋葬されており、同一墓所に葬られた近親者の可能性がある。興味深い副葬品として、組み立て式の木製人形がある(図115)。別作りの腕と頭を胴体に針金で取り付けることによって首・肩・肘の部分を動かせるようにしたもので、指先まで精巧に作られている。頭部と衣服は布などでできていたと考えられ、残っていなかった。2号墓出土の91は女性、88は男性と想定され、男女一対の人形が副葬されていたようである。88は右足を前に出しており、95・96のような刀を構えた武士を表現しているのかもしれない。1号墓出土の81は2号墓出土の女性人形である91と対応するが、81に組み合う80はこれら3体とは全く異なる粗雑な作りで、男性人形の代用品と考えられる。また84や98の板は、木釘を差して人形を立てた台であろう。

また、副葬品が見つかったのは10例中4例で、銭・土師皿・肥前陶磁碗・化粧道具・土人形のほかに木製人形などがあった(表12、図115・116)。出土した銭は6枚が多く、三途の川の渡し賃である六道銭を意図したものであるが、2号墓ではその中の1枚に雁首銭が混ぜられていた。雁首銭とは、煙管の雁首を潰して銭のように見せ、差した銭のなかに混せて枚数をごまかしたものである。

木箱

木箱が用いられたのは13号墓のみである。平面形が方形の墓壙を有するもので、木箱のようなものに遺体が納められていた可能性があるが、木質の痕跡は残っていなかった。土葬と推定される。

火消し壺

火消し壺をを火葬骨容器に使用したと推定される墓は、20・21・24～26・30・31・38・39・43・45～50号墓の16基ある。これらはいずれも煤などが付着しておらず、未使用の火消し壺が使われている。この中で24号墓からは大腿骨が2体分出ている(第V章第5節)。

また、SD301から出土した完形の壺47、同じくSD301から出土した墨書のある蓋45、44号墓北東から見つかった壺上半の破片46なども、未使用であることなどから原位置から動かされた埋葬容器の可能性がある(図113)。これらの壺は形態などに微妙な違いが見られるが、製作手法などがよく似ていることから同一産地の製品と考えられる。

火消し壺には蓋や体部、底に墨書があるものがある。25号墓の火消し壺19(図111)では体部に墨書が残り、右行はよくわからないが、左行には「釈恵王」と書かれていた。38号墓の火消し壺31の体部には「六月十六日土屋様御家中北村宅桐青」と書かれていて(図112)、重機掘削中に見つかった墓石の

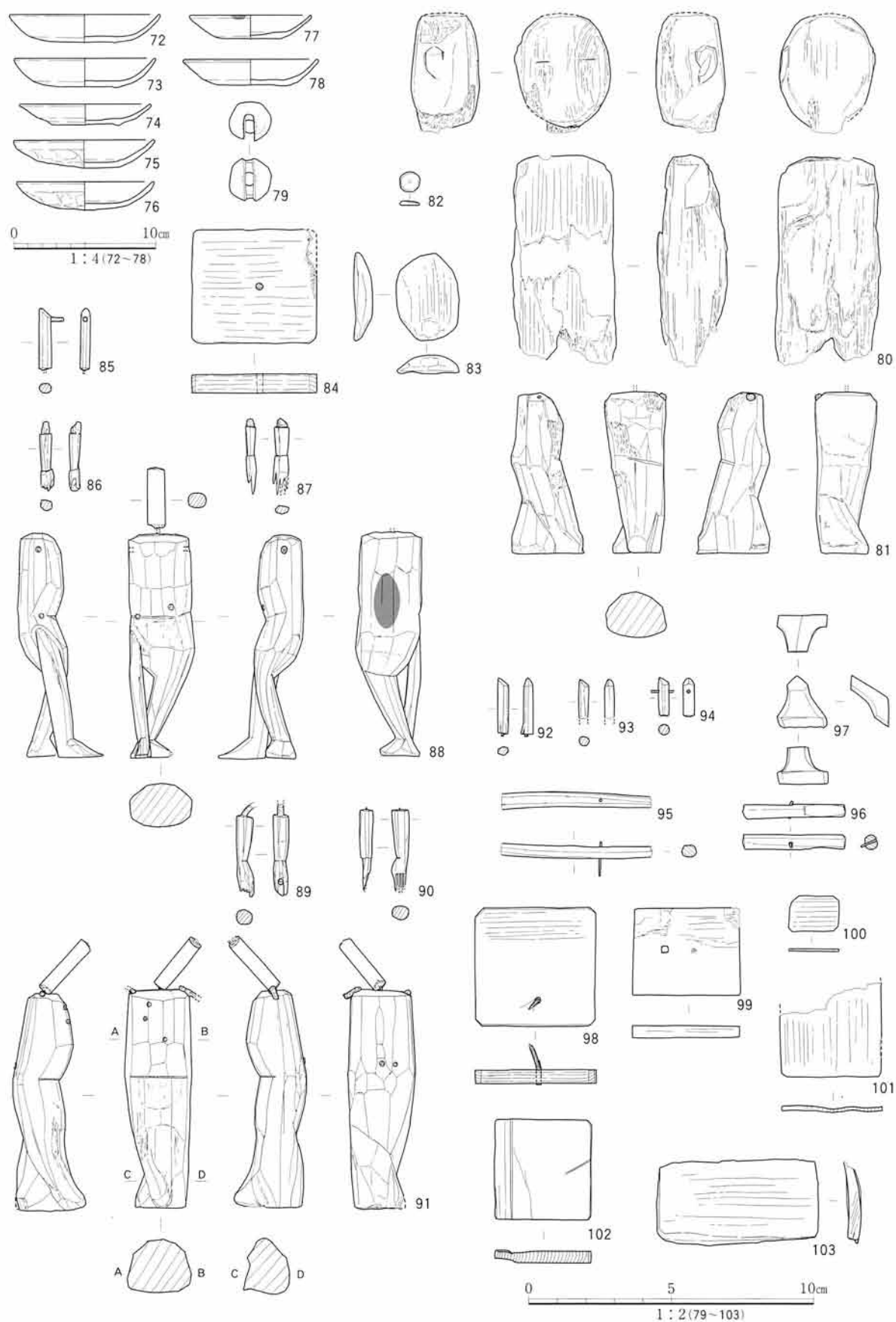


图115 NW93-12次拡張区近世出土遺物(7)

25号墓(72・73)、18号墓(74)、1号墓(75・76・80~84)、2号墓(85~103)、12号墓(77)、10号墓(78)、4号墓(79)

なかにも「北村氏」と刻まれていたものがあった。また、明治以降の盛土などからは墓石などが出土しており、そのなかには「西脇氏」と刻まれている墓石もあった(写真19)。

火消し壺を使用した墓で遺物が見つかったのは25号墓だけである。壺内から土師器皿72・73(図115)と刀子が出土したが、蓋が割れて落ち込んでいたため上層の混入の可能性もある。

炮烙

炮烙を2枚合わせにした火葬骨容器と推定されるものは、27・29・33～35・42・44号墓の7基ある。それらの炮烙も未使用のもので、口径は22.5～32.0cmである。27・29・33号墓の炮烙は枚方産であり、ほかの炮烙の産地はよくわからないが、大坂で出土する一般的なタイプである。このタイプの容器からは副葬品は発見されなかった。

有蓋小型壺

蓋をもつ球形の小型の壺を使用した墓は、28・36・40・41号墓の4基であるが、49号墓付近で見つかった同種の壺(図114-70・71)も火葬骨容器の可能性もある。40号墓は壺の周囲を石で囲んでいたが、このような火葬墓は当調査地ではほかになかった。また、36号墓の蓋は火消し壺からの転用である。

40号墓では蓋67に「天明六年十□吉村□圓・・」とあり(図112)、天明六(1786)年に吉村家のさる人物が葬られた墓であることがわかる。また壺の底と蓋の内側には焼成前に刻まれた「中」という字があった。有蓋小型壺を使用した墓でも副葬品は見つかっていない。

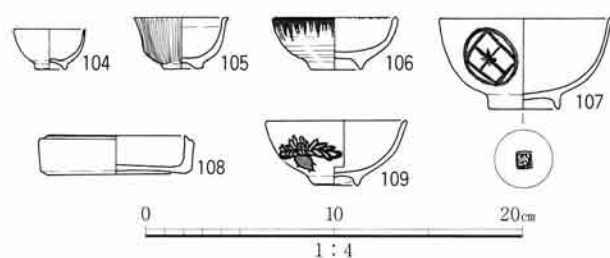


図116 NW93-12次拡張区近世出土遺物(8)

1号墓(104)、3号墓(105・108・109)、4号墓(106)、22号墓(107)

また火葬骨容器に使用されていた炮烙と有蓋小型壺は、現NHK・大阪歴史博物館敷地内で調査した大坂城代家臣屋敷の抱衣埋納容器でも用いられている器種である点に注意される[大阪市文化財協会1992：pp.240-242]。

今回調査した墓地が営まれたのは、埋葬容器や副葬品から18世紀から19世紀中ごろと推定される。なお、出土人骨についての形質人類学的な検討は第Ⅴ章第5節で行った。

3) まとめ

本節ではおもに国立大阪病院敷地内の調査を報告したが、前述したように近代の削平が著しく、検出された遺構はわずかであった。図117は難波宮造営前と難波宮期の遺構配置図である。

難波宮造営前の遺構としては掘立柱建物が挙げられる。いずれも地山上面で検出されており、詳細な時期はわからない。NW97・122次で検出さ



写真19 西脇氏と刻まれた墓石

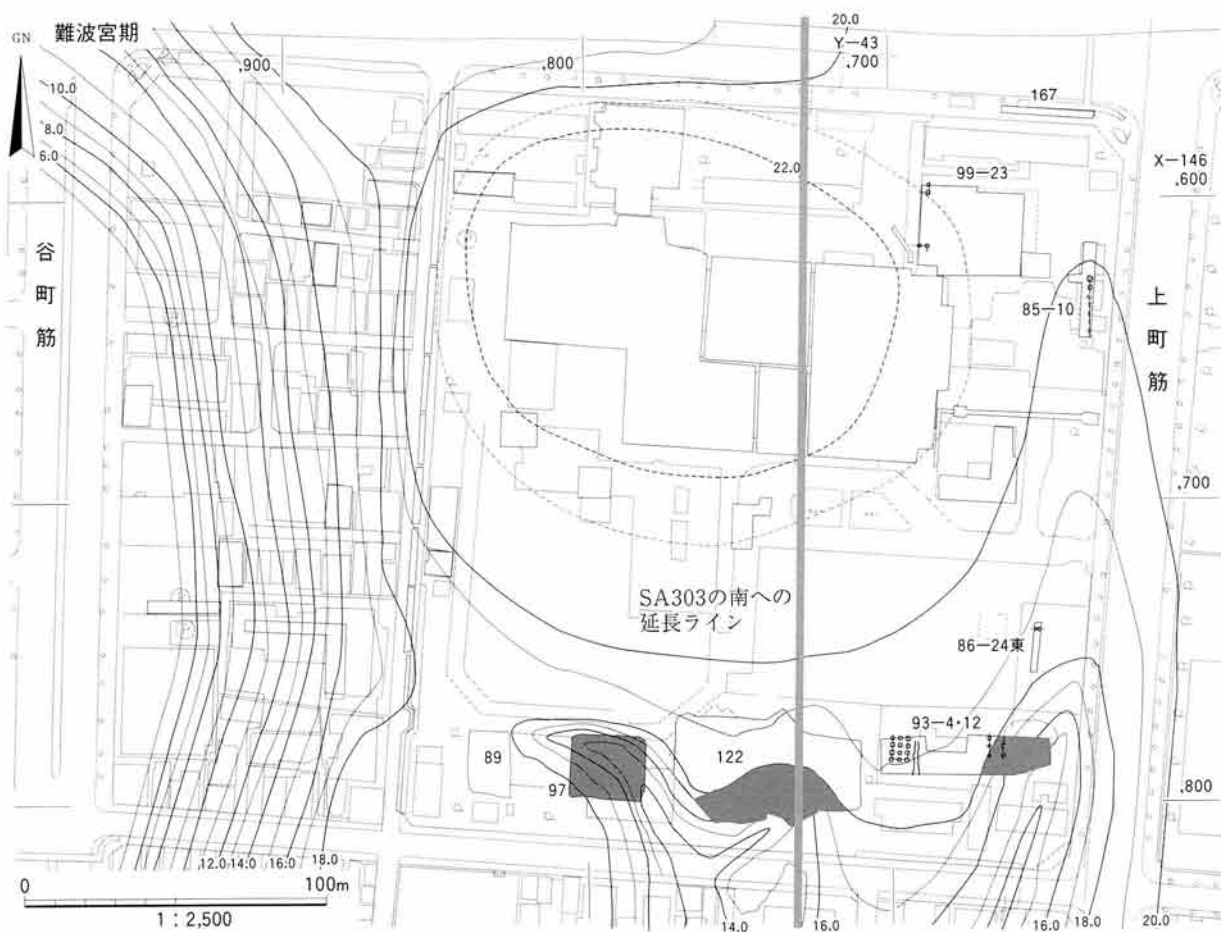
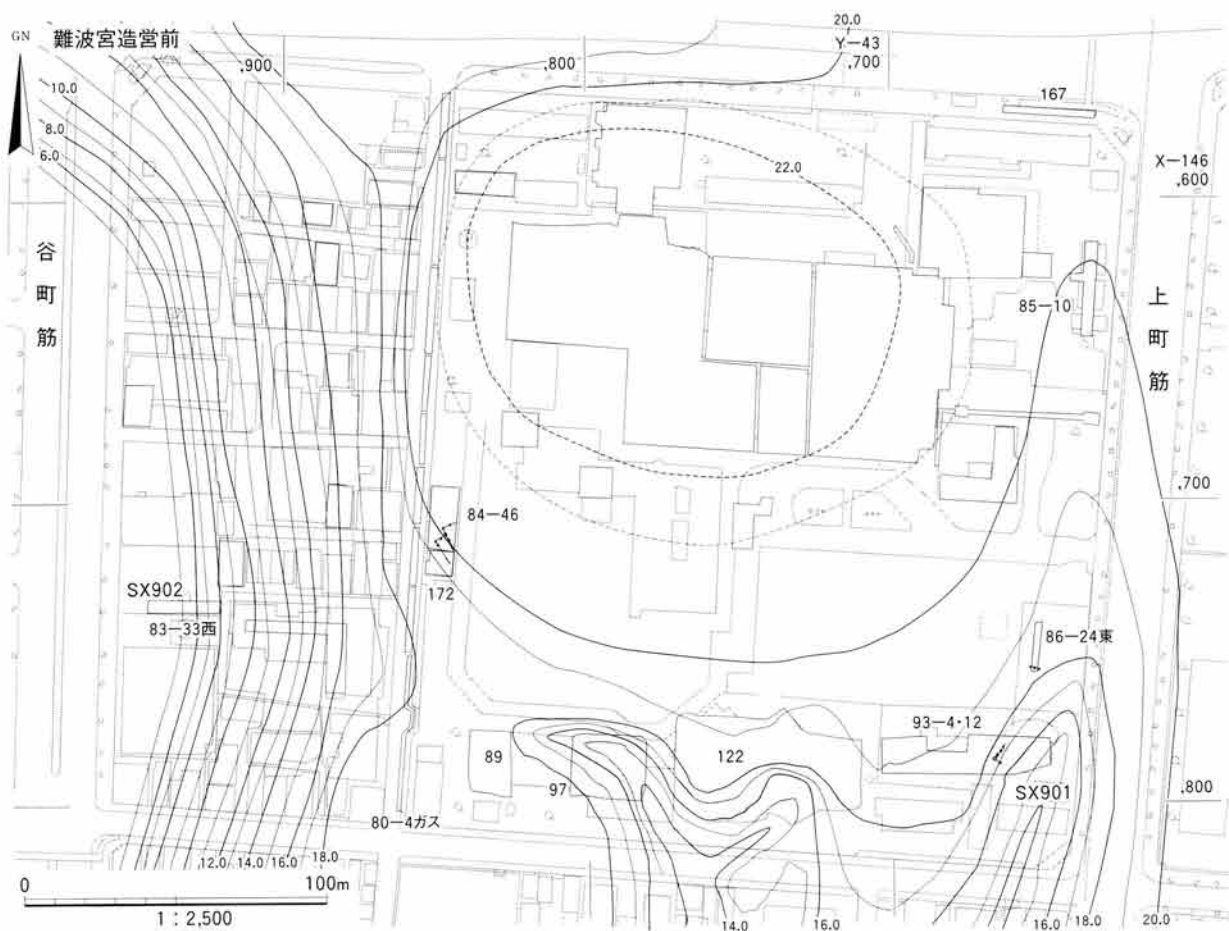


図117 国立大阪病院敷地内の変遷

れた「龍造寺谷」(第Ⅴ章第1節)の小支谷で5世紀後半から7世紀初頭までの遺物を含む包含層が検出されていることから、掘立柱建物もこの時期幅を有すると思われる。建物の方向はいずれも旧地形の傾斜に則している。

一方、前期難波宮期になると南側にある小支谷は埋められる。また、掘立柱建物も前代より柱穴が大きく、方向も正方位に近くなる。前期難波宮の宮域の西限と考えられるSA303[大阪市文化財協会1992・2000a]を南側に延長させると図115下のようになり、掘立柱建物はいずれもこの延長ラインよりも東側で検出されている。SA303の東側では倉庫が並んで検出されていることから、今回検出したSB703も宮殿に関連する倉庫の可能性が高い。

徳川期の墓地は18世紀中頃のものには土葬が多く、それ以後のものは火葬が多いということがわかった。被葬者については文献的な裏付けはできていないが、唐津焼や丹波焼といった大型甕を棺に用いたり、副葬品が備えられたりする点や、徳川期の大坂城下町の境内墓地であるという点は、NW137次調査である大念寺境内墓地の調査内容と類似する[長山雅一1981b]。大念寺墓地は出土した墓誌から、両替商の井坂家であることがわかっている。

また、38号墓の火消し壺の墨書は被葬者の手掛りを持つものである。「六月十六日土屋様御家中北村宅桐青」という墨書の「土屋様」について、安永8(1779)年から天明3(1783)年まで大坂東町奉行であった土屋守直や、嘉永3(1850)年から安政5(1858)年まで大坂城代を勤めた土屋寅直が考えられる。その家中とされる「北村氏」はどういった性格の武家かはわからないが、重機掘削中にも北村氏と刻まれた墓石が出土していることから、「北村氏」は在坂の武家だということが想定できる。ただ、「土屋」氏は在坂の武家ではない点が問題として残る。

なお、延享版『改正増補難波丸綱目』(延享5年(1748)刊行)によると、上本町2丁目に浄土真宗東本願寺派の寺として円周寺の名がある。調査地のある上本町2丁目に記載されている寺は円周寺のみである(註1)。周辺は上町筋に面した部分以外は武家地になっており、寺は町家と同様に上町筋沿いにあったと考えられるが、その敷地の西端(奥)は南北方向のSD301とそれに沿った石垣と推定される。上記のようにこの墓地は「北村氏」の墓があったことは明らかであるが、町人の居住地に寺があることや、大念寺と共通点があることから町人も墓地としても使用していたことが考えられる。

(寺井・南：註2)

(註)

(1)円周寺は明治時代になって敷地が軍隊に接収されたために移転し、現在は中央区南新町にある。

(2)本節は近世墓地は南秀雄の原稿に新知見をふまえて寺井が若干修正を加え、それ以外は寺井が執筆した。

第2節 NW90-7次および85-39次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW90-7次および85-39次調査の内容を報告する(図118)。

NW85-39次調査は国立大阪病院の南側の道路沿いに電柱を設置する工事の事前調査である。1m四方のトレンチを6箇所設定し、地層を調べた。その結果、上町筋との交差点付近のトレンチで幕末～明治時代頃の石垣を検出した(写真20)。

NW90-7次調査地は国立大阪病院と南側の道路を挟んで対面する。調査の結果、徳川期初頭の畠、豊臣前期の溝に加え、谷地形を埋める前期難波宮造営時の整地層を検出し、獣骨を含む多量の遺物が出土した。

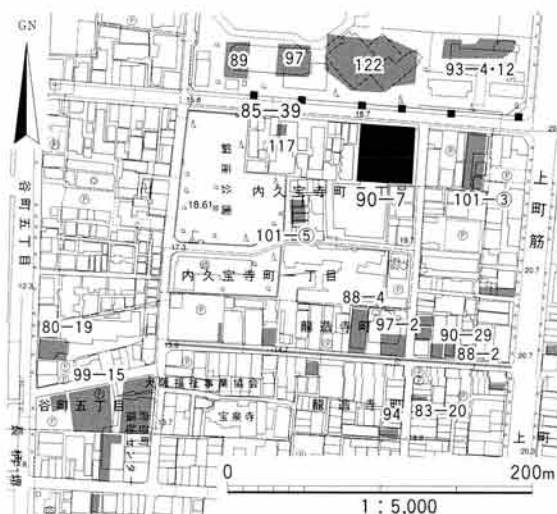


図118 NW90-7次・85-39次調査地位置図

2) 調査の結果

i) 層序(図119・120)

重機で現代盛土と徳川期の地層の一部を除去し、北壁および西壁で地層の観察を行った。

第3a層 灰色粘土偽礫を含む黄色シルト層である。元和年間以降の整地層と思われる。

第3b層 暗褐色細礫を含む中～細粒砂の作土層である。上面で畠畝を検出し、当層基底面では焼土を含む落込みを断面観察で確認した。大坂夏ノ陣以後に作られた畠と考えられる。

第4層 黄色シルトの偽礫や砂礫を多く含む整地層である。この地層については、土壌などの遺構埋土も含まれていると思われるが、調査では一括して掘削した。当層を切込むSD401が豊臣前期であることから、当地での整地は豊臣前期に行われたと思われるが、調査では土壌などの遺構も一括して掘削したため、第4層には豊臣後期の遺物も含まれる。

第7b1層 黄褐色粘土～中粒砂の整地層で、SX901の窪みを埋める。もっとも厚いところで約80cmある。難波Ⅲ中段階の土器が多量に出土した。なお、当層下面で掘込みのようなものを観察することができたが、遺構かどうかはわからなかった。

第7b2層 黄灰色シルト～粗粒砂の整地層でSX901を埋める。もっとも厚いところで約80cmある。難波Ⅲ中段階の土器が多量に出土した。



写真20 NW85-39次調査で検出された石垣

第8a層 黒灰～黒褐色シルト質粗粒砂層である。層厚は20～40cmである。SX901の斜面の崩落などによって谷底に堆積したものと思われる。当層からは難波Ⅲ古段階の土器が出土した。

第8b層 灰～灰白色シルト質中～粗粒砂層である。SX901の斜面部に堆積した崩落土と思われる。

第9層 淡灰黄色の中～粗粒砂の地山である。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前後の遺構と遺物

SX901(図121・図版18)「龍造寺谷」(第V章第1節)に繋がる小支谷の谷頭で、東肩はTP+16m

くらいで平坦面になる。もっとも深い部分は西壁の南半にあり、TP+14.4mある。

埋土は前述のように第8層と第7層のそれぞれ2層に大別される(図120)。第8層は概して崩落などによる堆積層で、後述のように難波Ⅲ古段階の遺物が出土した。また、第8a層上面ではウシやウマの骨が大量に出土したが(図版18下)、これは第7b層で埋められる直前のものと推測される(第V章第4節)。第7b層は2層に細別することができ、いずれからも難波Ⅲ中段階の土器が多量に出土したことから、前期難波宮の造営に伴う整地層である。

なお、北側の道路を挟んで北側のNW97・122次調査でもそれぞれ小支谷の谷頭が検出されている[大阪市文化財協会1984]。これ

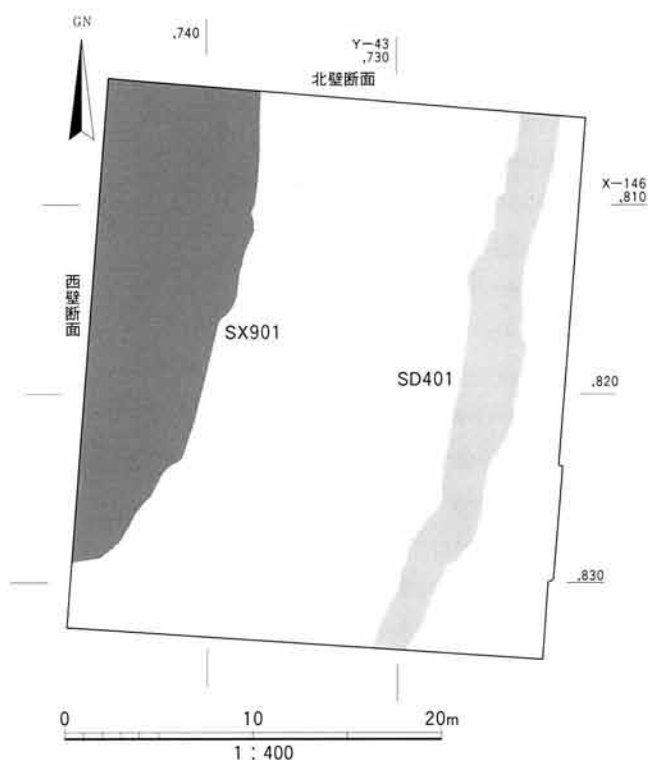


図119 NW90-7次断面図の位置

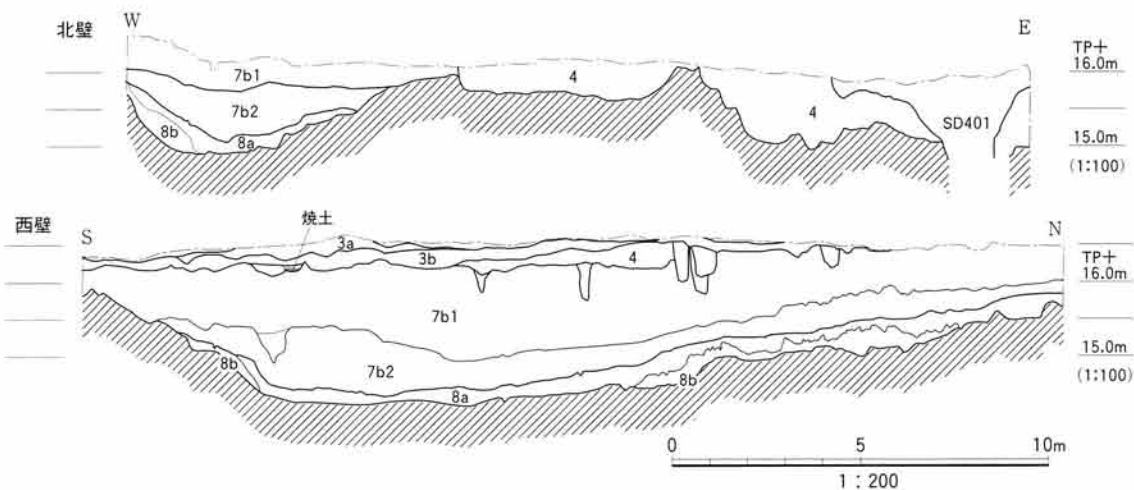


図120 NW90-7次北壁および西壁断面図

らの谷は現在の道路付近で合流して南に延び、さらにSX901が合流する(図142)。また、NW97次調査では当調査地と同様に難波Ⅲ古段階までの遺物を多量に出土したⅧ層の最上層で、ウシ・ウマ・イノシシなどの骨が出土したとされている[大阪市文化財協会1984: pp.54-55]。出土状況と報告記述から考えて、SX901と同じ時期のものと考えられる。

出土遺物

第8a層出土遺物(図122・123、図版22)

土師器には杯1~4、鉢5・6・8、台付杯7、碗9、底部に瘤状突起の付いた鉢10、台付鉢11~14、高杯15~24、中空の脚部25、甕26~30・32・33、羽釜31、壺34・35、鍋36がある(図122・123)。暗文が施された杯C1~3は径高指数がそれぞれ36・39・34である。7は「ハ」字状に開く脚をもち、内面には放射状暗文が施される。10は台付鉢11~14のように底部に木の葉の圧痕がついた後、瘤状の突起が2つ付く。鉢のような器形を推定したが、上がどのような形状なのか定かではない。15~18は杯部内面に放射状暗文が施され、15・17~20は脚部内にシボリメが残る。21~23は長く、中実の脚部をもつ。26~35の外面はいずれもナデで仕上げられているが、36はハケが施されている。31は口縁部および鐙にユビオサエの痕跡が顕著に残り、鐙は水平でなく波打っている。35は器高が50.4cmの大型の二重口縁壺で、外面はていねいなナデで仕上げられている。

須恵器には杯H39~45、同蓋37・38、蓋46、低脚高杯47・48、高杯49、台付壺50・51、長頸壺52、提瓶53・54、甕56・57、イイダコ壺55がある(図123)。37~45はいずれも天井部もしくは底部にヘラケズリが施される。口径が12cmを越える37・38や受部径が14cmを越える39~41はTK43型式で、それ以外の杯HはTK209型式に該当する。46は円筒状のつまみをもつもので、鉢か皿に伴うものであろうか。49は高杯の長脚で、長方形のスカシが3方向に施される。50は短い脚部の3方向に台形のスカシ孔を施す。51は有段の脚部をもち、体部には櫛描列点文が施される。54は内面に十字の車輪文当て具痕が残る、十字を囲う円の直径は1.5cmある。56

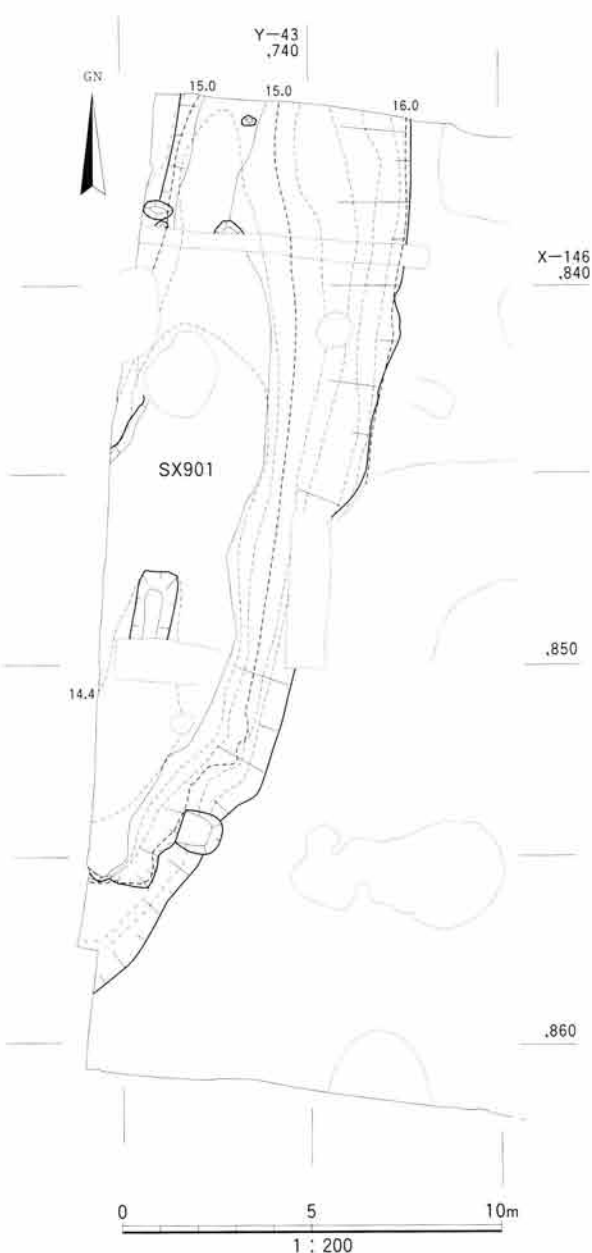


図121 NW90-7次SX901平面図

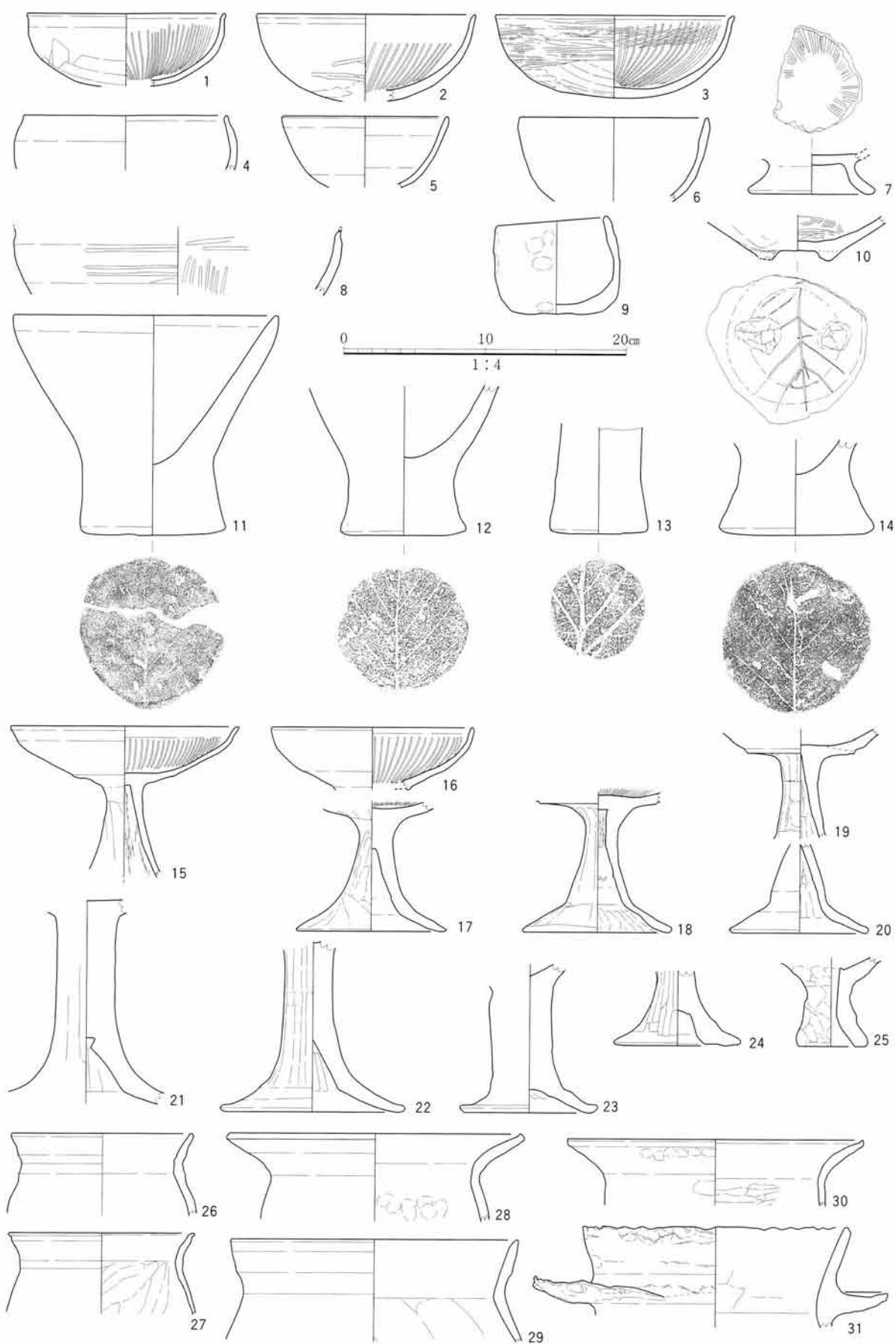


圖122 NW90-7次第8a層出土土師器

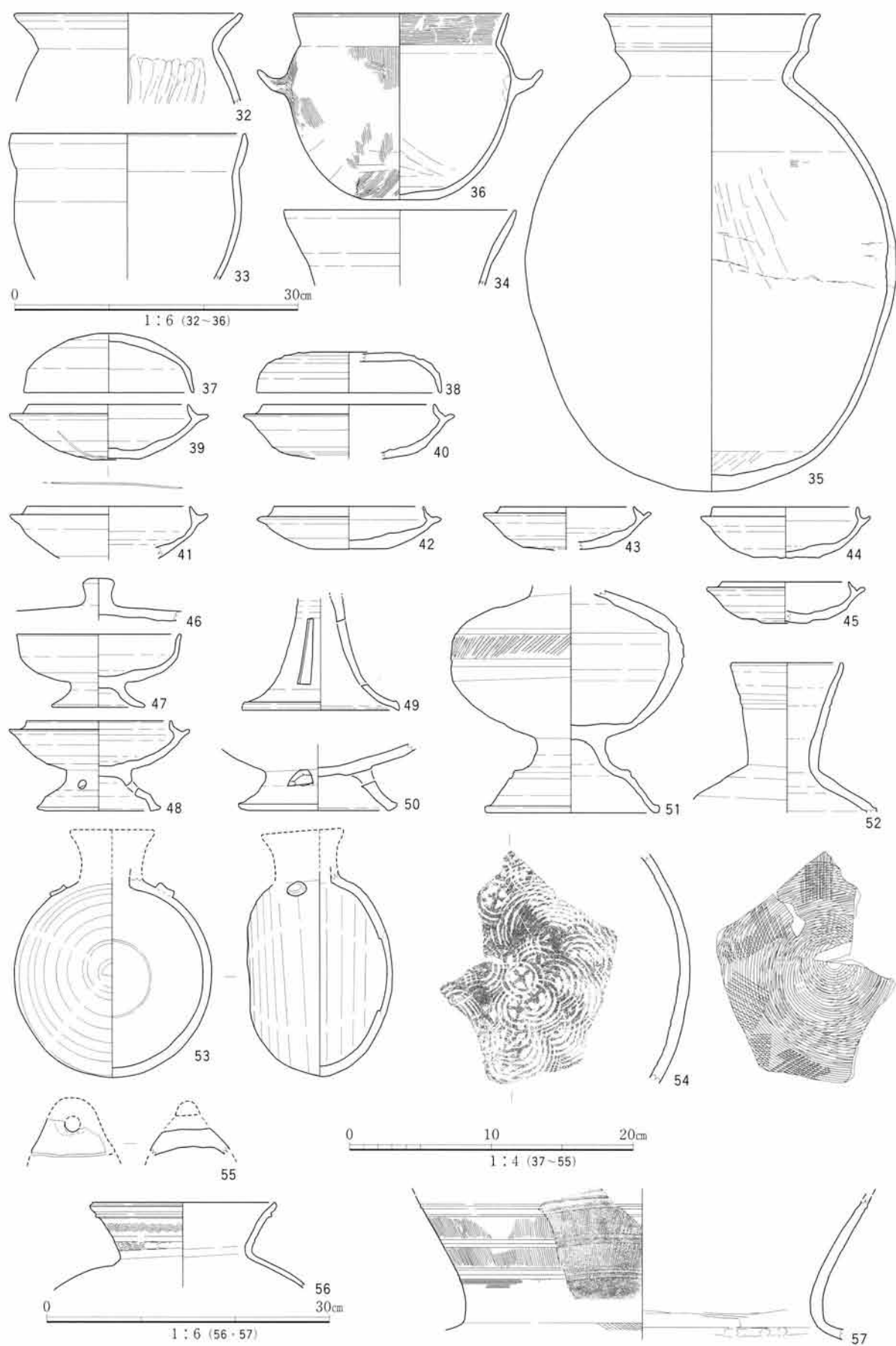


圖123 NW90-7次第8a層出土土師器・須惠器

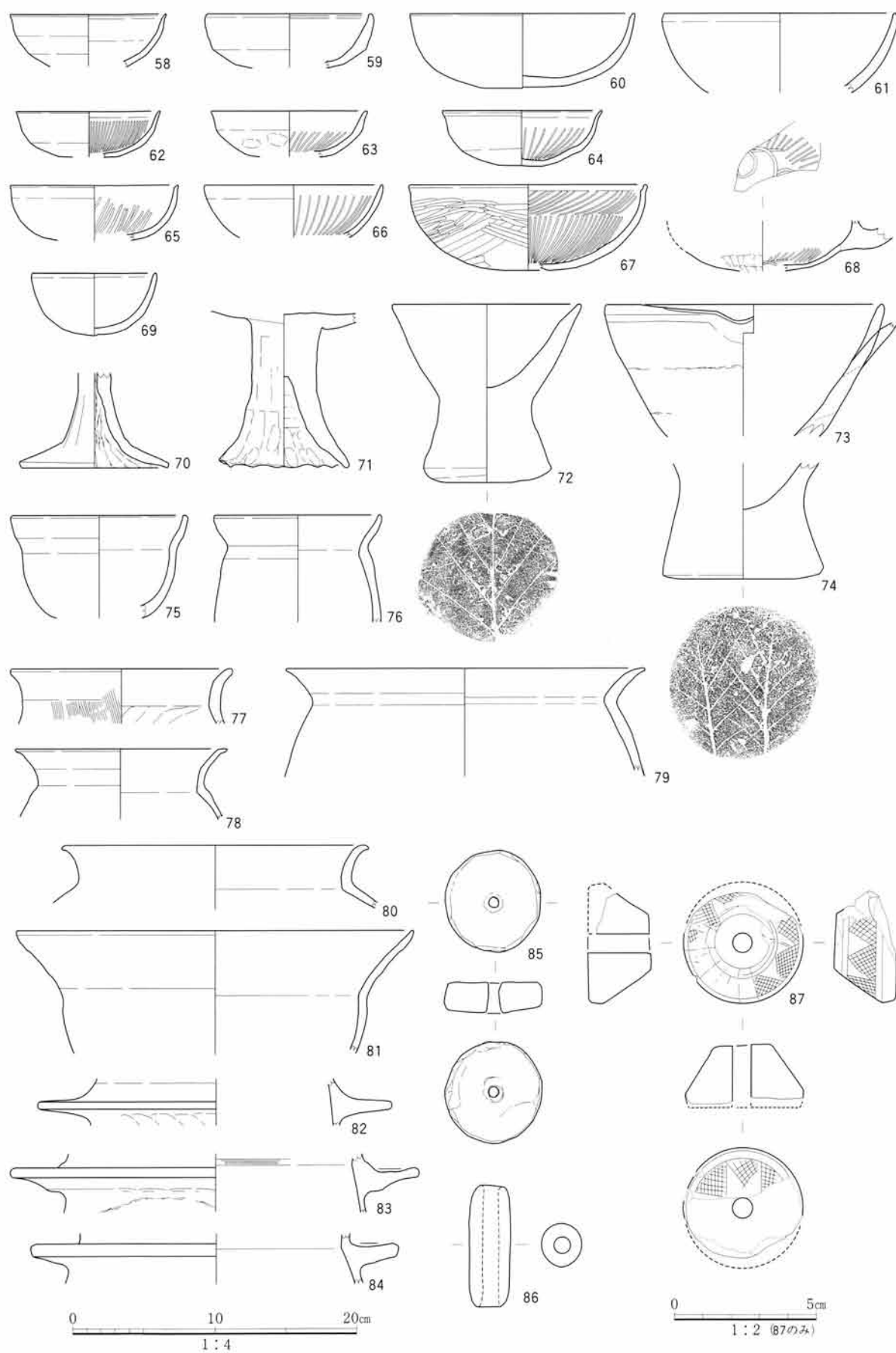


図124 NW90-7 次第7b2層出土土師器(1)

はON46もしくはTK208型式の甕であり、他の遺物よりも古い。55は釣鐘形を呈するものである。体部の割口が磨耗して、破断面が丸くなっている。

以上の遺物群は須恵器杯がHのみで構成され、土師器杯Cの径高指数が34~39であることから、難波Ⅲ古段階に位置づけられる。

第7b2層出土遺物(図124~127、図版22)

土師器には杯C 58~67、把手付碗68、碗69、高杯70・71、台付鉢72~74、甕75~79・90、壺80・88・89、鉢81、羽釜82~84、竈91がある(図124・125)。杯Cは口径16cm前後の60・61・67と、10~12.5cmのそれ以外に分けることができる。60・62・64・67の径高指数は32~35である。68は片方に把手が付き、内側面に放射状の見込みにラセン状の暗文が施される。71は脚部があまり広がらず、端部はユビオサエで仕上げられる。72・74の底部には木の葉の圧痕が付いており、74には2枚分の葉脈が見られる。甕・壺・鉢については77・88・89にのみハケが施される。91は器高27.8cmあり、全面ナデで仕上げられる。

土製品には紡錘車85、管状土鍾86、石製品には滑石製紡錘車87がある(図124)。85は土師質でほぼ完存し、長径7.2cm、短径6.7cm、厚さ2.2cm、孔径0.7cmある。87は直径4.3cm、厚さ2.2cm、上面の直径1.9cm、下面の直径4.1cm、孔径0.6cmある。側面には2条と1条の円文に挟まれて、格子文で埋められた鋸歯文が施されている。また、下面には1条の円文の内側に沿って同様の鋸歯文が施される。

須恵器には杯H 98~100、同蓋92~97、杯G 105~107、同蓋101~104、杯108、脚部109、短頸壺

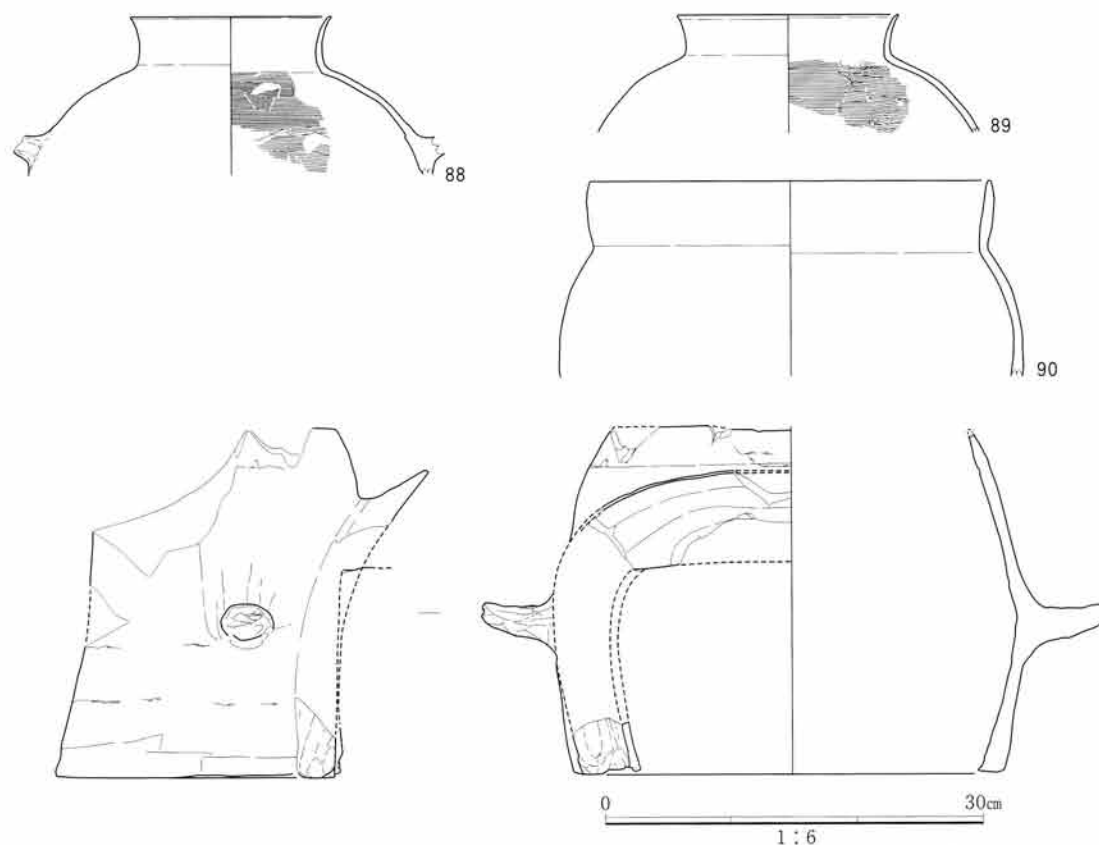


図125 NW90-7次第7b2層出土土師器(2)

110、高杯111、甕112、台付壺113、瓶114、甕115・116、甕もしくは壺117・118がある(図126・127)。92は内面に黒漆が付着している。杯H蓋の口径は95が最大で14.0cm、最小が97の9.0cmであるが、97については口縁端部が強く凹み、通常の杯H蓋の口縁端部調整と異なるので、壺などの別の器種に伴う可能性も考えられる。101～104は口径が8.6cm～10.6cm、105～107の口径は9.8～10.5cm、器高が3.5～4.1cmである。108は口径14.0cmの大振りの杯で、109は短く「ハ」字状の開く脚部をもち、脚端部はナデによって外側に張出す。111は脚部にスカシ孔はなく、脚部内面にヘラ記号がある。113は脚部に3方向に長方形のスカシ孔が施され、体部には凹線が1条巡る。

114は平底で肩が張る瓶で、残存高17.2cm、底部径9.2cm、体部最大径17.4cmである(原色図版4上)。

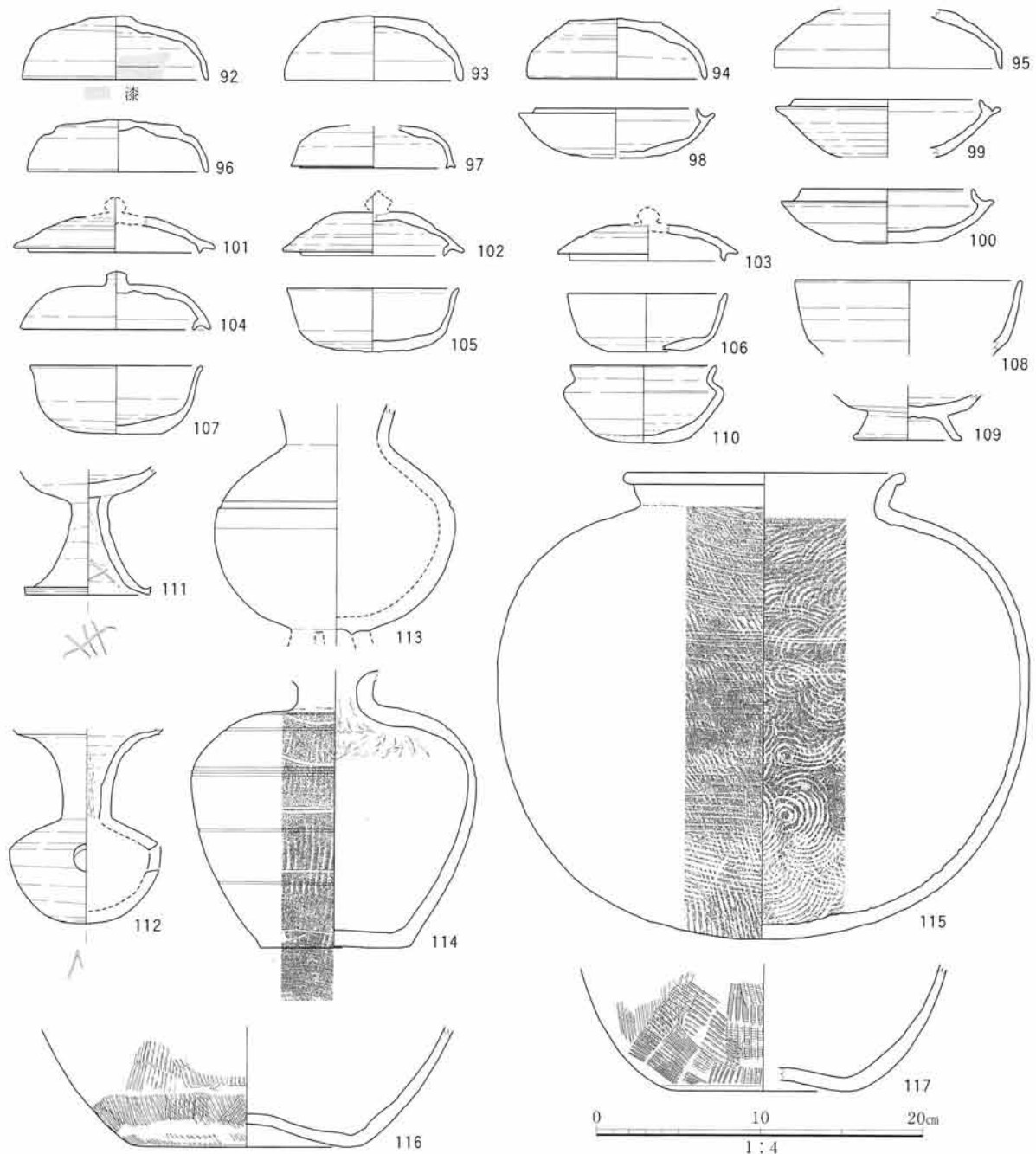


図126 NW90-7次第7b2層出土須恵器(1)

口縁部は欠失しているが、頸部からまっすぐ立上がり、強く外反している。体部外面には縦方向の平行タタキが施された後、軽くヨコナデされ、最後に横沈線が5条巡らされる。底部近くの外側面には強いナデが施される(写真22)。一方、底部内面は体部との接点にナデが施されている程度で、ほとんど調整が行われていない(写真23)。底部外面はヘラケズリが施されるが(写真24)、周縁部は磨耗してわからない。体部内面は断続的なナデで仕上げられ、肩部より上にはシボリメが残り、頸部内面にははいねいなヨコナデが施される(写真21)。なお、外面にはタタキメが残っているものの、内面には当て具痕は見られない。色調は紫灰色を呈し、肩部などには自然釉がかかる。胎土には長石の砂粒が含まれ、5mm大の角礫もある。泗沘時代(=百濟後期)の百濟に類例があり、詳細は第V章第2節で検討する。

115は球胴の甕で、口径16.8cm、体部最大径32.6cm、器高28.9cmある。口縁部は折り返されて丸く仕上げられる。体部は縦方向の平行タタキが施され、上半にはさらにカキメが施されている。内面には同心円文の当て具痕があり、胴部上半の一群が下半のものに切られている。これは外面で観察されるタタキの順序と一致する。



写真21 瓶114の頸部内面



写真22 瓶114の体部下半の調整



写真23 瓶114の底部内面



写真24 瓶114の底部外面の調整

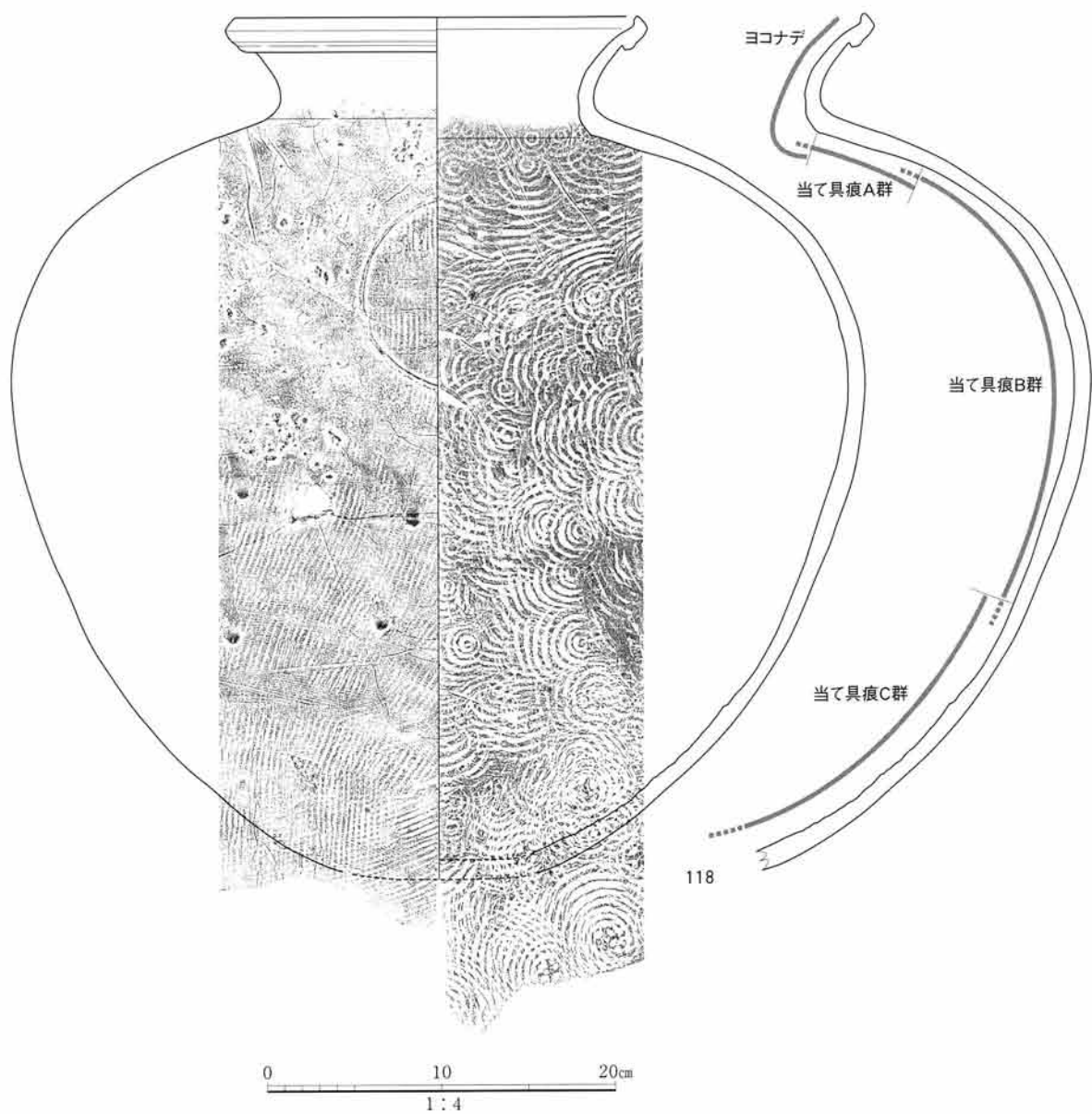


図127 NW90-7次第7b2層出土須恵器(2)

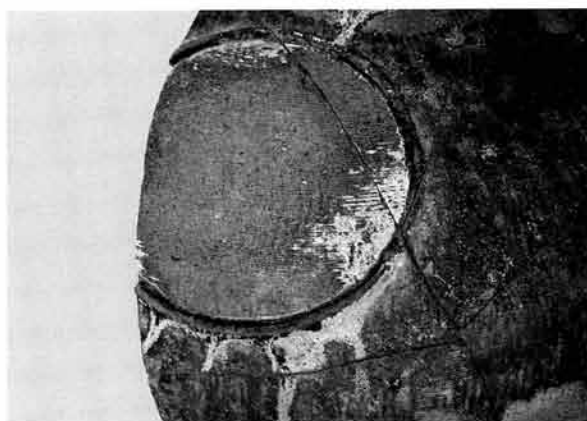


写真25 須恵器甕118に熔着した杯H蓋の痕跡

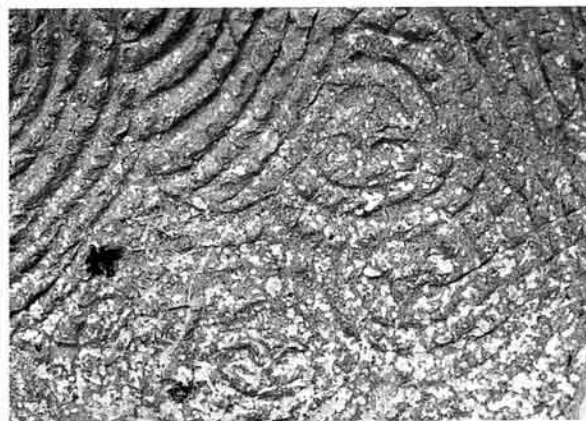


写真26 須恵器甕118の車輪文当て具

116は外面に平行タタキ、117は擬格子タタキが施され、内面はナデで仕上げられる甕もしくは壺の底部である(原色図版4下)。底部の凹みの外縁にナデが施されていることから、この凹みは焼け歪みによるものではないことがわかる。内面は粗雑なナデしか施されないため、器面の凹凸や凹んだことによる粘土の弛みがそのまま残っている。断面の内心は赤褐色を呈する。こういった底部についても朝鮮半島に類例が求められる(第V章第2節)。

118は口径23.0cm、体部最大径49.0cm、器高50.8cm以上の甕である(図127)。口縁部内外面、体部外面上半、内底面に自然釉が付着し、残存している範囲では肩部2個所に口径11.0cmの須恵器杯H身、12.2cmの同蓋の口縁端部が熔着している(写真25)。外面には平行タタキののちカキメが施され、さらに自然釉が付着しているため、体部上半のタタキの前後関係を把握することはできない。下半については、底部が体部側面のタタキメを切っている。さらに、内面の当て具痕の状況が良好であるため、これを基に以下のようにタタキの順序を復元することができる。

まず、当て具痕跡は図127のように、頸部下(当て具痕A群)、体部中央付近(同B群)、体部下～底部(同C群)の3群に区分できる。A群は同心円文が横方向に2列以上並んでおり、頸部直下の列がその下の列を切っている。また、頸部直下にある最上段の列については、複雑に切合って方向性を見出せないが、1列下のものは右側が左側を切られ、さらに下側の当て具列はより上のものに切られている。B群は上が下を切る同心円文の縦方向の列が重なっており、より右側の列が左側のものを切っている。C群は同心円の中央に十字が刻まれたいわゆる車輪文当て具で構成される(写真26)。複雑に切合っていることから、順序はわからない。これらの3群はB群がA群およびC群に切られている。B群とC群の関係については外面のタタキメの関係と一致する。B群については[横山浩一1980]の「側面叩き」で「円弧」を描く「叩き締め」に伴うものであり、C群は「底面叩き」に伴うものである。A群については肩部を膨らませるために叩いたために生じたのであろう。なお、底部と体部側面の当て具痕が異なる点については、異なる当て具を用いたことを反映しているのであろう[横山1980、白井克也1996]。

なお、車輪文当て具痕の十字を囲う円の直径は1.2cmあり、前述の須恵器提瓶54は1.5cmであることから、同じ当て具でないことがわかる。車輪文当て具が用いられた須恵器は近隣ではNW93-5次(第Ⅲ章第3節)やOS99-16次[大阪市文化財協会2002a]で出土しており、難波Ⅲ古～中段階にわずかではあるが一定量含まれる。また、熔着している須恵器杯Hの口径は同一層から出土しているものよりひとまわり大きく、むしろ下位の第8a層の法量に近いことは、製作と廃棄の時間差を示すものと思われる。当資料は製作工程や製作年代を資料単体で推測できる興味深い資料である。

以上の第7b2層出土遺物について、須恵器に口径9.8～10.5cmの杯Gが含まれ、土師器杯Cの径高指数が32～35であることから、難波Ⅲ中段階に位置づけられる(本節「まとめ」参照)。

第7b1層出土遺物(図128～131、図版23)

土師器には杯C119～133・137～145、杯134～136、台付杯147・148、皿146、鉢149～151、台付鉢152、高杯153～160、甕161～165、壺172、把手付壺166・173・174、鍋175、竈176・177、蓋167、把手168・169がある(図128・129)。

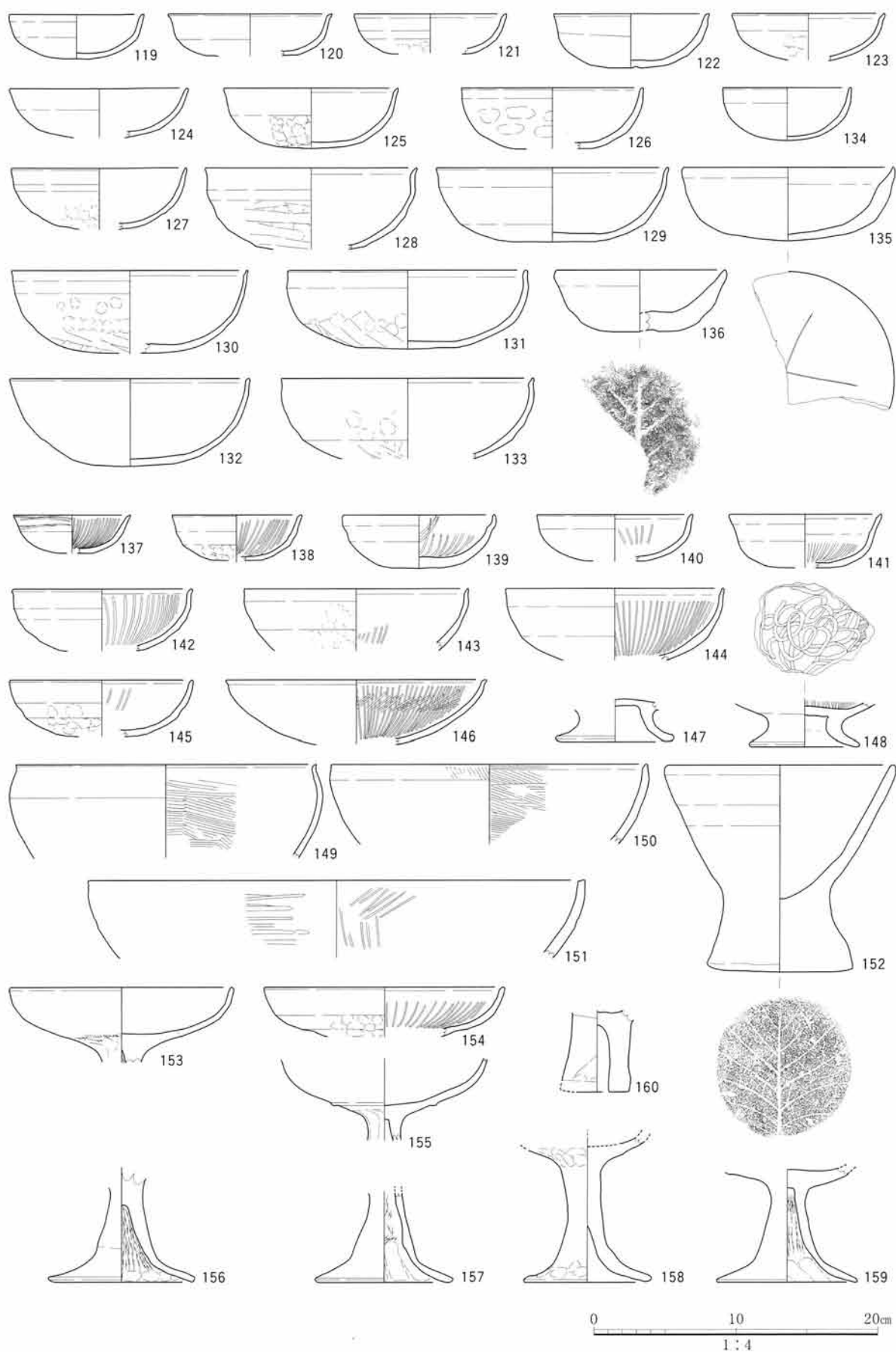


図128 NW90-7 次第7b1層出土土師器(1)

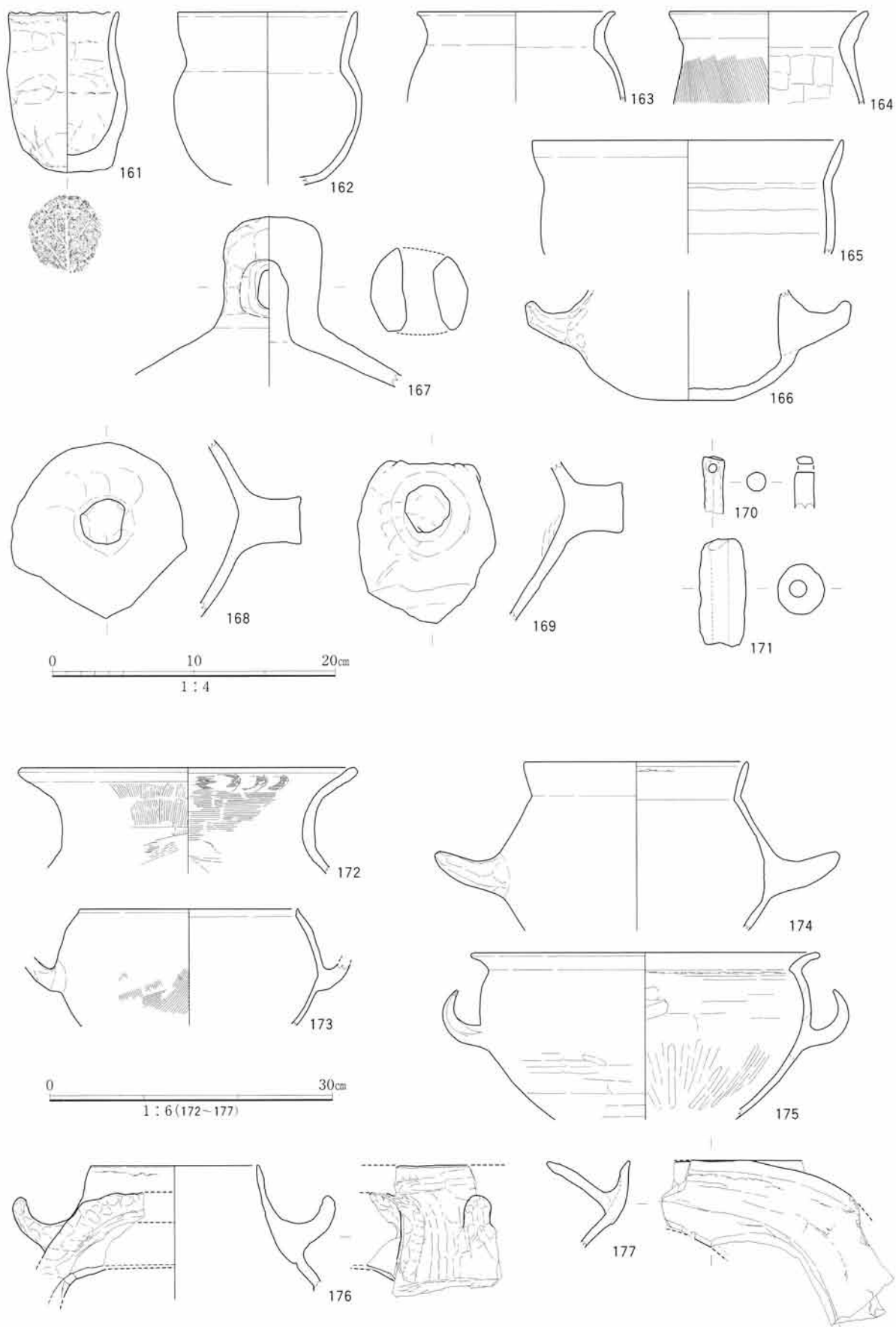


図129 NW90-7次第7b1層出土土師器(2)

杯Cは口径が10cm前後、12～13cm、15～18cmの3段階に区分できる。135の底部には針描きがあり、136には木の葉の圧痕が残る。146は口径が大きい割に器高が低い皿に含めた。147・148はハの字状の脚部をもち、148の内面には螺旋状の暗文が施される。149・150は内面にハケメが施され、151は内面に2段の放射状の暗文が、外面には横方向のヘラミガキが施される。154は内面に放射状暗文が施され、153・155～157・159の脚部内面にはシボリメが残る。161は全面ナデで仕上げられ、底部には木の葉の圧痕が残る。167～169はどのような器形になるかわからないものである。167は中空で横方向に孔があく蓋のような器形である。168・169は器形は類似するが、それぞれ胎土が異なるので別個体である。円筒状の突起をもち、ここでは把手として図示したが、蓋のつまみや脚部である可能性も残す。172は外反する口縁部をもち、173は無頸である。176・177はいずれもナデで仕上げられる。

土製品には棒状土鍾170、管状土鍾171がある(図129)。いずれも破損・磨耗が激しい。

須恵器には杯H190～199、同蓋178～189、杯G207～221、同蓋200～206、杯222、碗223、蓋224・225、鉢226～228、高杯229～236、直口壺237・244・245、台付長頸壺238・239、平瓶240、横瓶241、高台付横瓶242、罍243、甕246・247、壺底部248、不明陶製品249、丸瓦250・251がある(図130・131)。

杯の口径について、杯Hが8.9～10.5cm、同蓋が9.3～12.2cm、杯G蓋が8.4～9.4cmであり、第7b1層出土の杯よりひとまわり小さい。186の内面には口縁端部以外の全面に、おそらくベンガラと思われる赤色顔料が付着していた。189は天井部と口縁部の間に稜があり、ヘラケズリが稜の近くまで施される。東海系の杯蓋であろう(註1)。224は口径15.0cm、受部径18.0cmあり、やや大きい杯B蓋の可能性もある。225は皿か鉢の蓋であろう。226～228はいずれも底部にヘラケズリが施され、227の体部外面には凹線が巡る。229・230はハの字状に脚部が開き、口径がそれぞれ11.5cm、10.7cmある。237は小型、244・245は大型の直口壺である。238は体部に波状文が、239は櫛描列点文が施される。242はナデの方向から横瓶のような器形を想定したが、須恵器杯Bのような高台が付く。

243は罍の部分が体部から剥離したもので、体部に接していた面に縦方向の平行タタキメの圧痕が残る。罍の外縁直径が約19cm、接合部の直径が約14cmと羽釜にしては小さいため、泗沘時代の罍付土器の罍の部分に該当すると思われる[金鍾萬2001]。この時代の百済の中心である扶餘地域では平行タタキが施された例はないが、全羅南道羅州市の伏岩里2号墳周溝出土品に類例がある[全南大学校博物館・羅州市1999]。248はやや上げ底ぎみの平底で、底部の直径は約15cmに復元できる。外側面は縦方向の平行タタキが施された後、ヨコナデが施される。底部および内面全体にもヨコナデが施される。器表は灰～灰白色であるが、断面はにぶい赤褐色である。このような平底の器形は日本の須恵器には見られず、泗沘時代の中型壺の底部に類例が求められる(原色図版4下、第Ⅴ章第2節)。

249はどのような器形になるか不明であるが、残存部が裾になると仮定すればやや内傾する。外面には擬格子タタキ、内面には同心円文の当て具痕がヨコナデによって消される。

250・251は丸瓦で、断面は白く表面は灰色である(図131)。いずれも凸面の磨耗が甚だしく、調整の観察はできない。側面は面取りが行われている。凹面は布目が残りと、250の方がやや粗い。

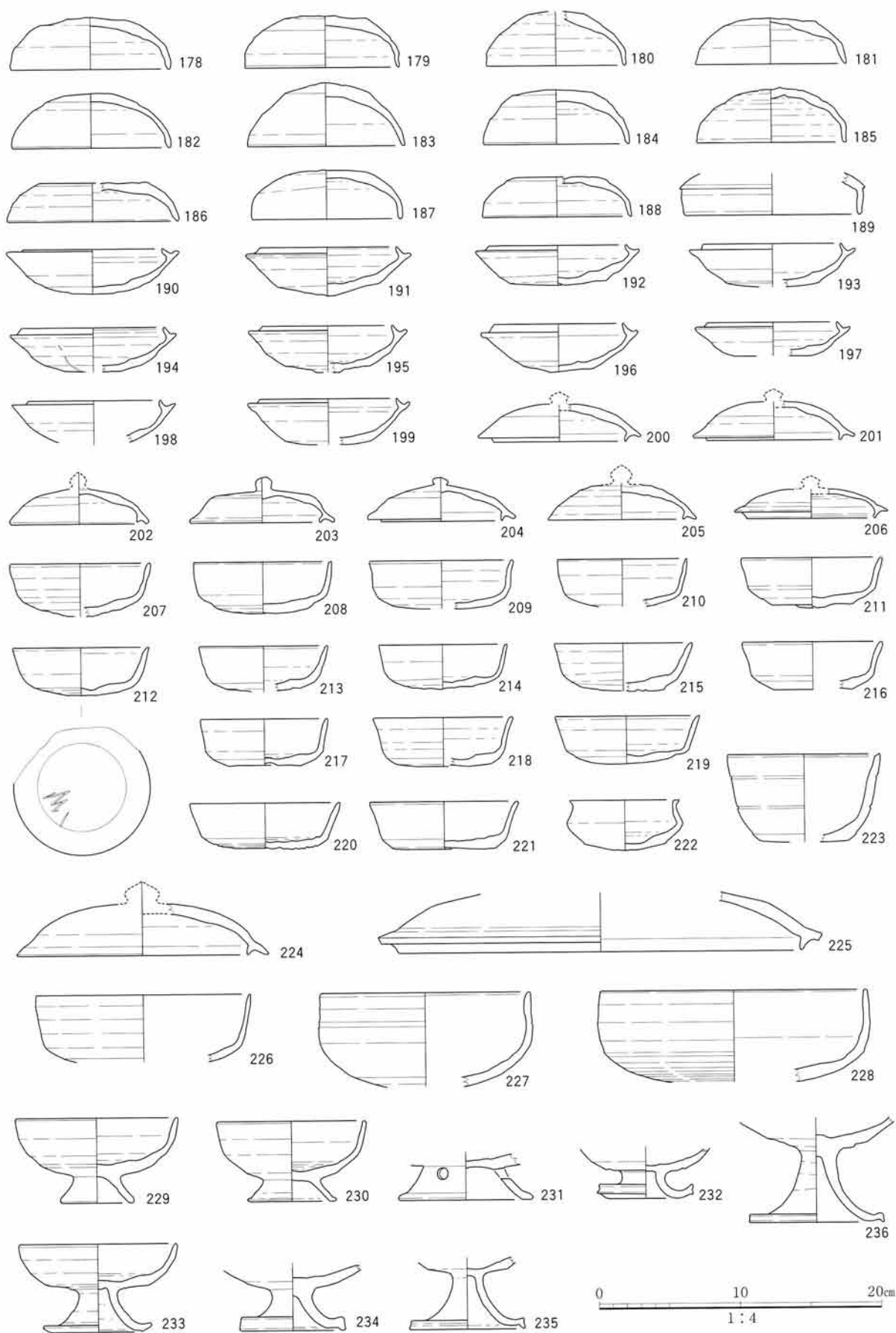


图130 NW90-7次第7b1層出土須惠器(1)

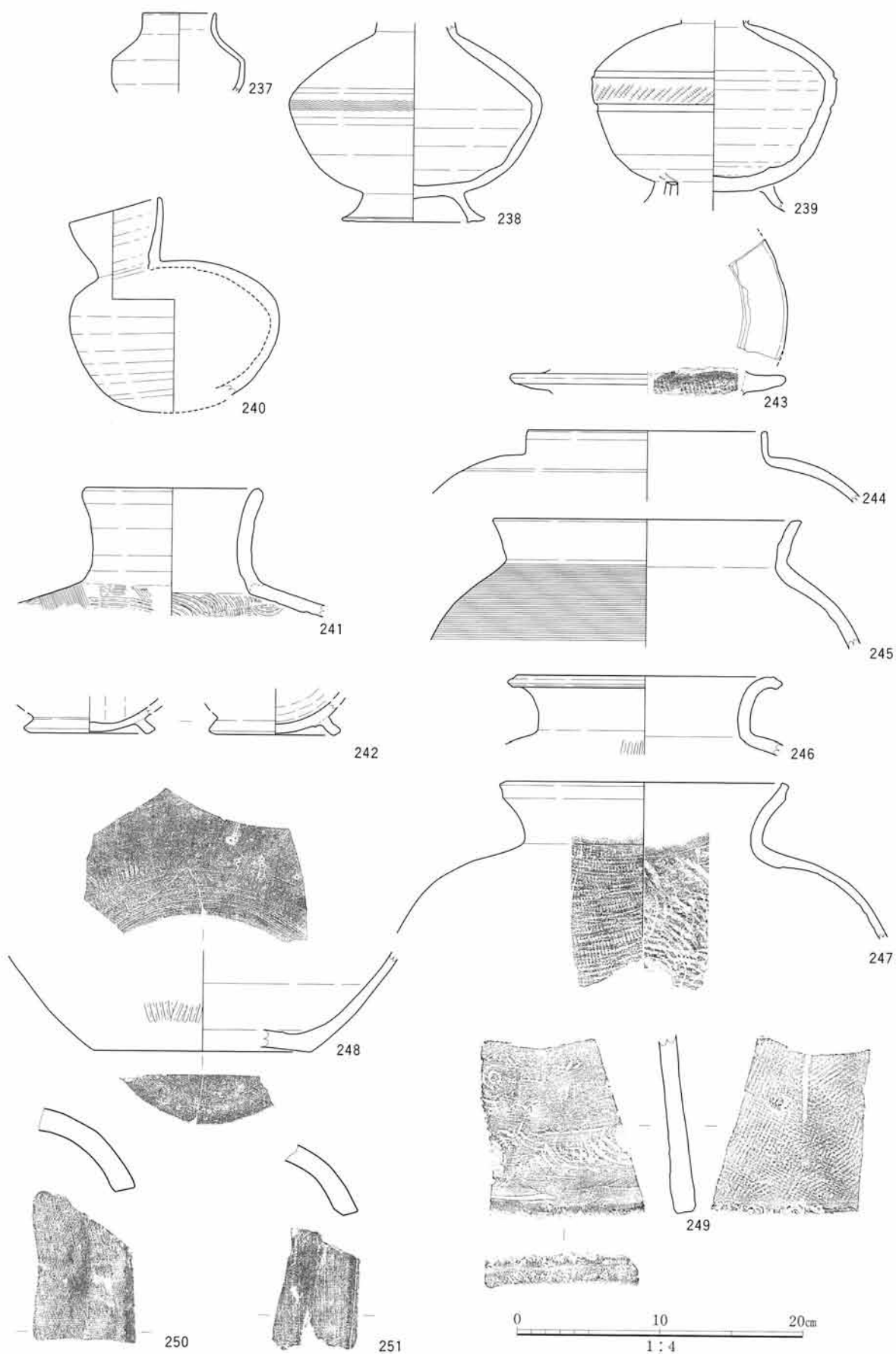


图131 NW90-7次第7b1层出土须惠器(2)

以上の第7b1層の遺物について難波Ⅲ中段階に収まるが、土師器杯Cや須恵器杯H・Gに第7b2層の遺物よりもやや新しい傾向が窺える(本節「まとめ」参照)。

b. 豊臣前期の遺構と遺物

SD401(図132・133、図版19) 調査地東部で検出した。図132に示されているのが1層掘削時の状況を示し、図133は完掘時の実測図である。ジグザクに延び、検出された範囲を北・中・南部で3分割したとすると、北部はN18°Eの方向に延び、中部ではN6°Eと正南北に近くなり、南部はN22°Eの方向に変わる。

溝の肩には丸杭や角杭を打ち、一部横矢板で土留めが行われている。溝の両側に横矢板が残っていると内側の幅が0.9~1.2mあり、杭は地中に1mあまり打込まれていた。横矢板や杭の大半は

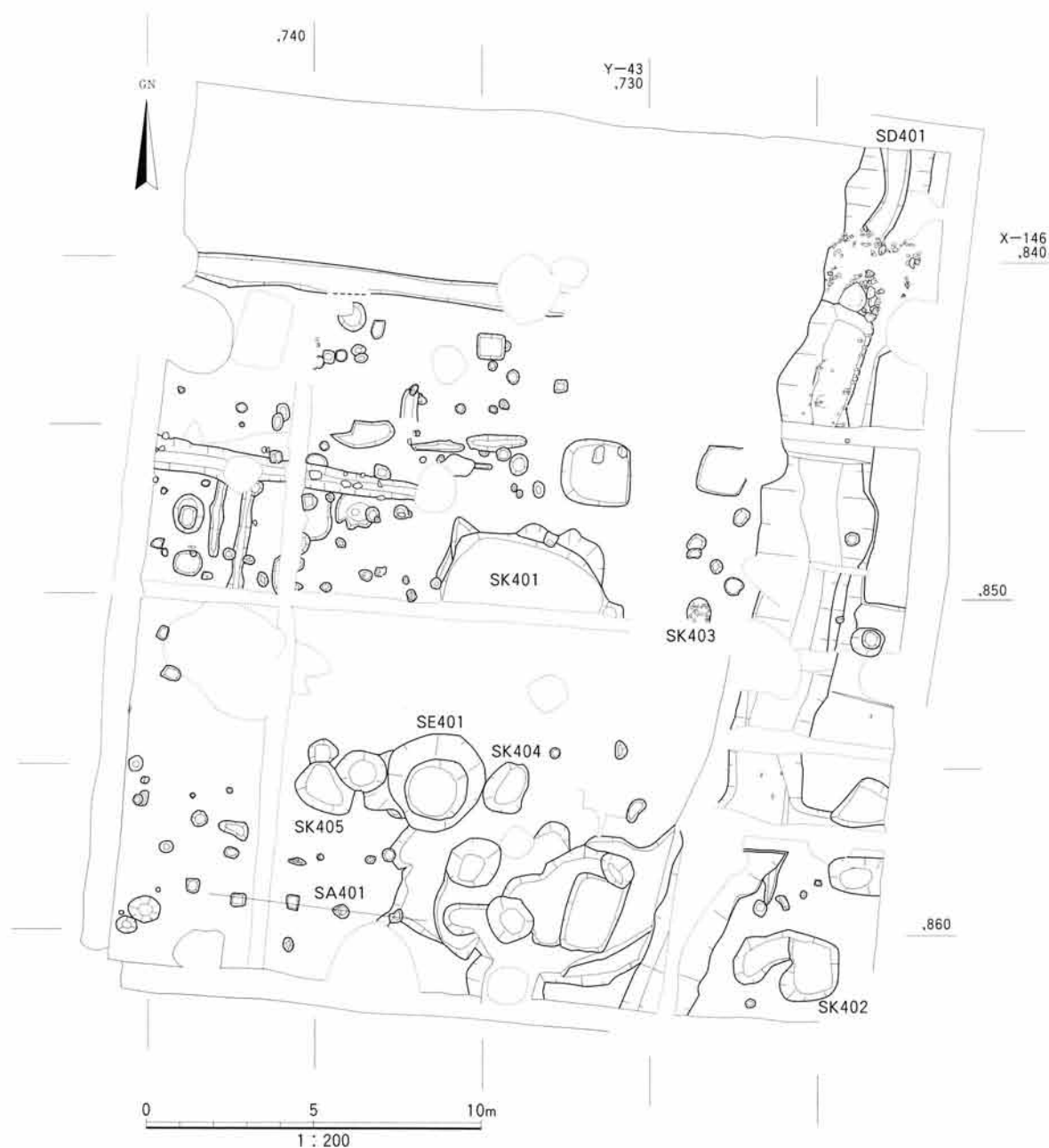


図132 NW90-7次豊臣期の遺構配置図

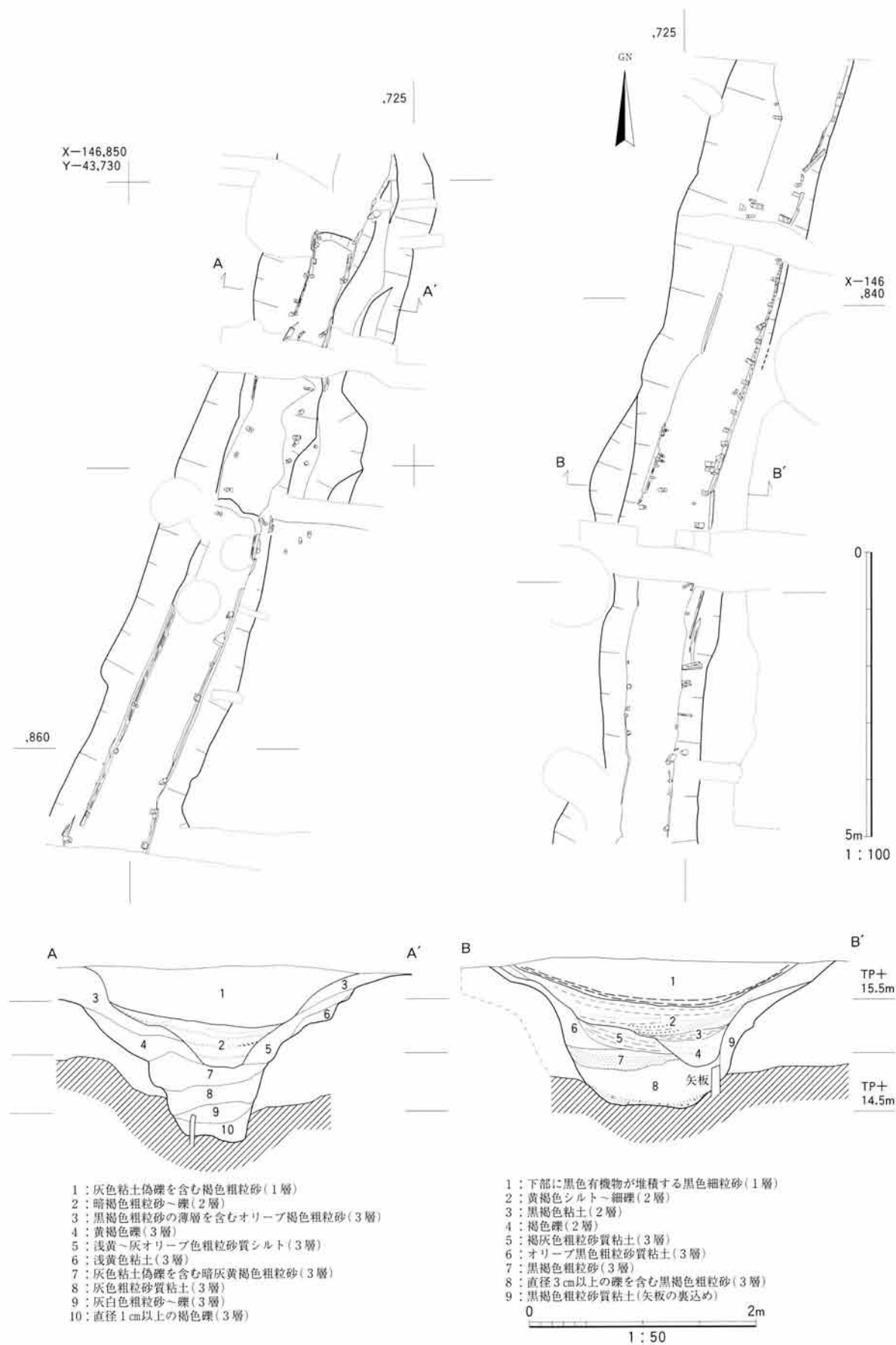


図133 NW90-7 次SD401実測図

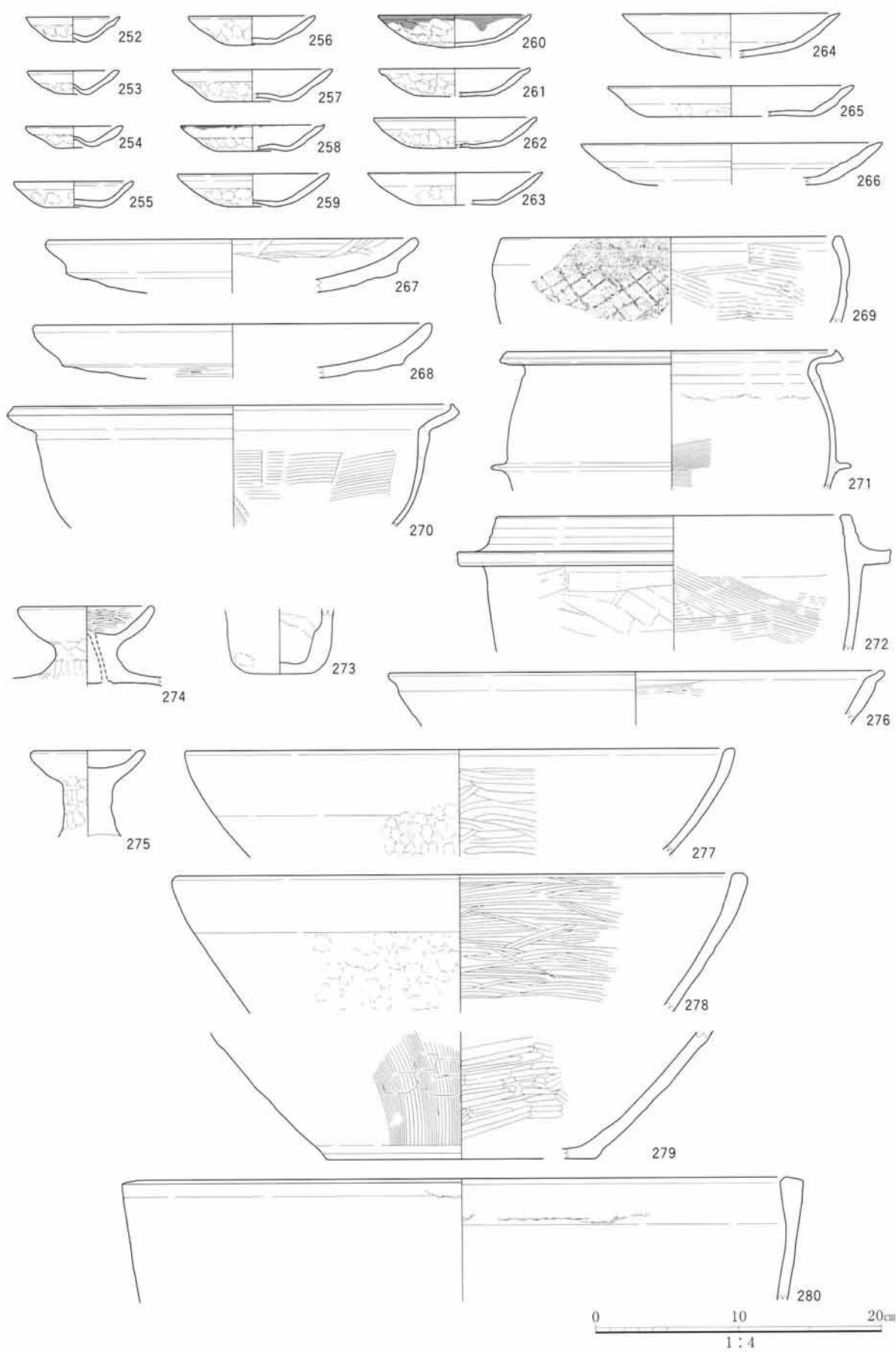


図134 NW90-7次SD401-3層出土土師器・瓦質土器

転用材で、柄孔があり、鋸が打ち付けられたままのものもあった。上端は幅約2.5m前後と広がるが、溝の肩部の崩落によるものであろう。底は南端が北端より約0.4m高くなる。これより南には「龍造寺谷」があり、それに向って排水したと思われる。

埋土は3層に区分され、後述するように最下層である3層には唐津焼が含まれないことから、豊臣前期に掘削されたことがわかる。2層には唐津焼が含まれるが、大半の遺物は豊臣前期の組成である。また、1層の上部では20cm大の円礫が多数出土した。

なお、この溝については[清水ひかる1990]ですでに紹介されている。

3層出土遺物(図134～137、図版23)

土師器252～273、瓦質土器274～280、備前焼281～286、丹波焼287～289、信楽焼290、輸入陶磁器291～336、瀬戸美濃焼337～378に加え、鯨瓦389、奈良時代の土師器杯A390、轆羽口・埴塙といった金属加工関係の遺物379～388が出土した。また、埋土中にはニホンジカの骨が含まれていた(第Ⅴ章第4節)。

土師器には皿252～268、焙烙269、鉢270、羽釜271・272、焼塩壺273がある(図134)。皿には底部が内面に大きく凹み、口径が7cm程度の252～254が含まれる。

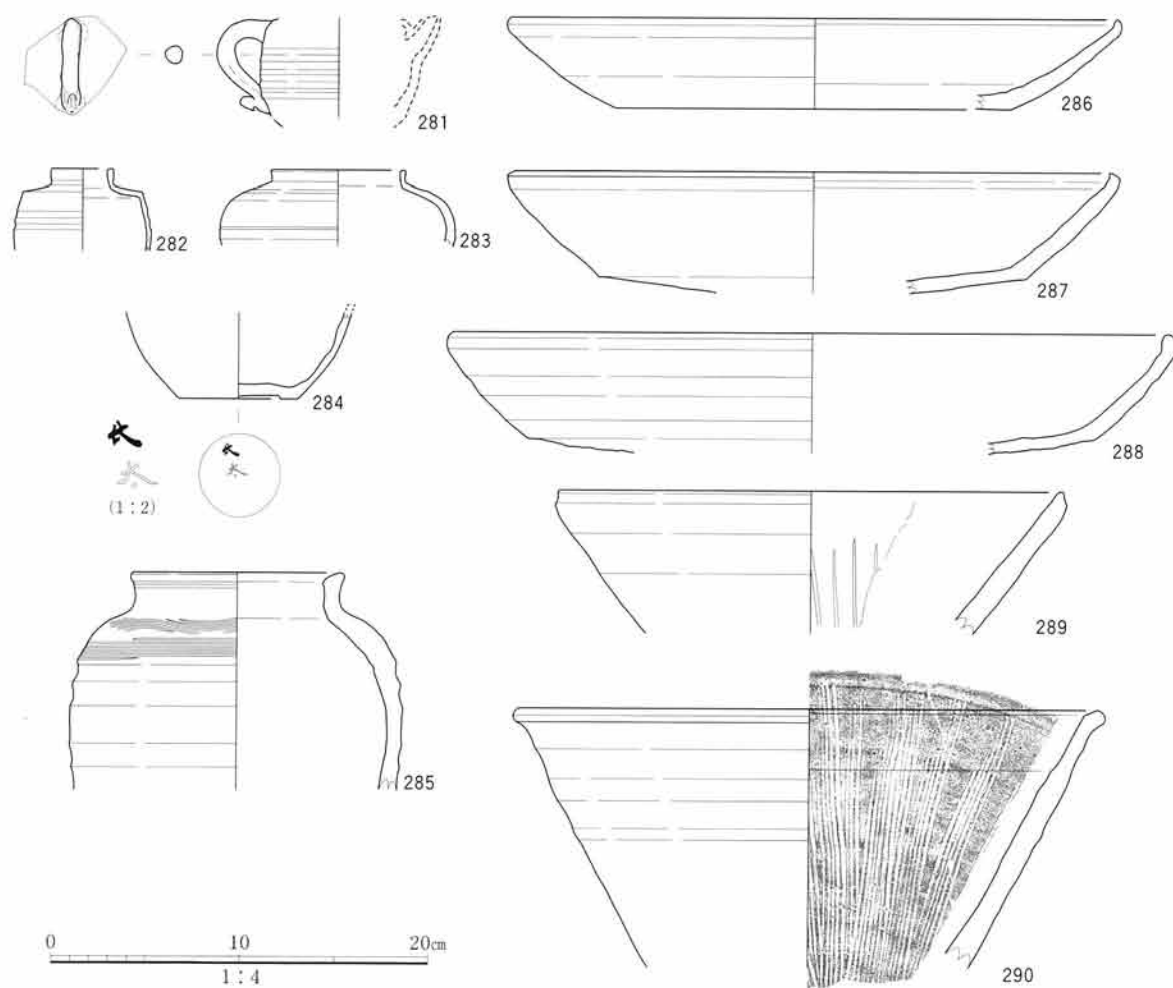


図135 NW90-7次SD401-3層出土焼締陶器

瓦質土器には瓦燈274・275、捏鉢276～279、火鉢280がある(図134)。

備前焼には水注281・茶入282・小型壺283・徳利284・壺285・大平鉢286がある(図135)。281は水注の把手部分と思われる。284の底部には「大」という線刻と「式(?)」という墨書が残る。285は肩部に櫛描波状文と直線文を施す。丹波焼には大平鉢287・288、播鉢289、信楽焼には播鉢290がある。

輸入陶磁器には青花碗291～308、同皿309～320、白磁皿321～329、青磁皿330・331、同碗332、李朝白磁333～335、同施釉陶器瓶336がある(図136)。青花碗には内底面が盛り上がる饅頭心の300

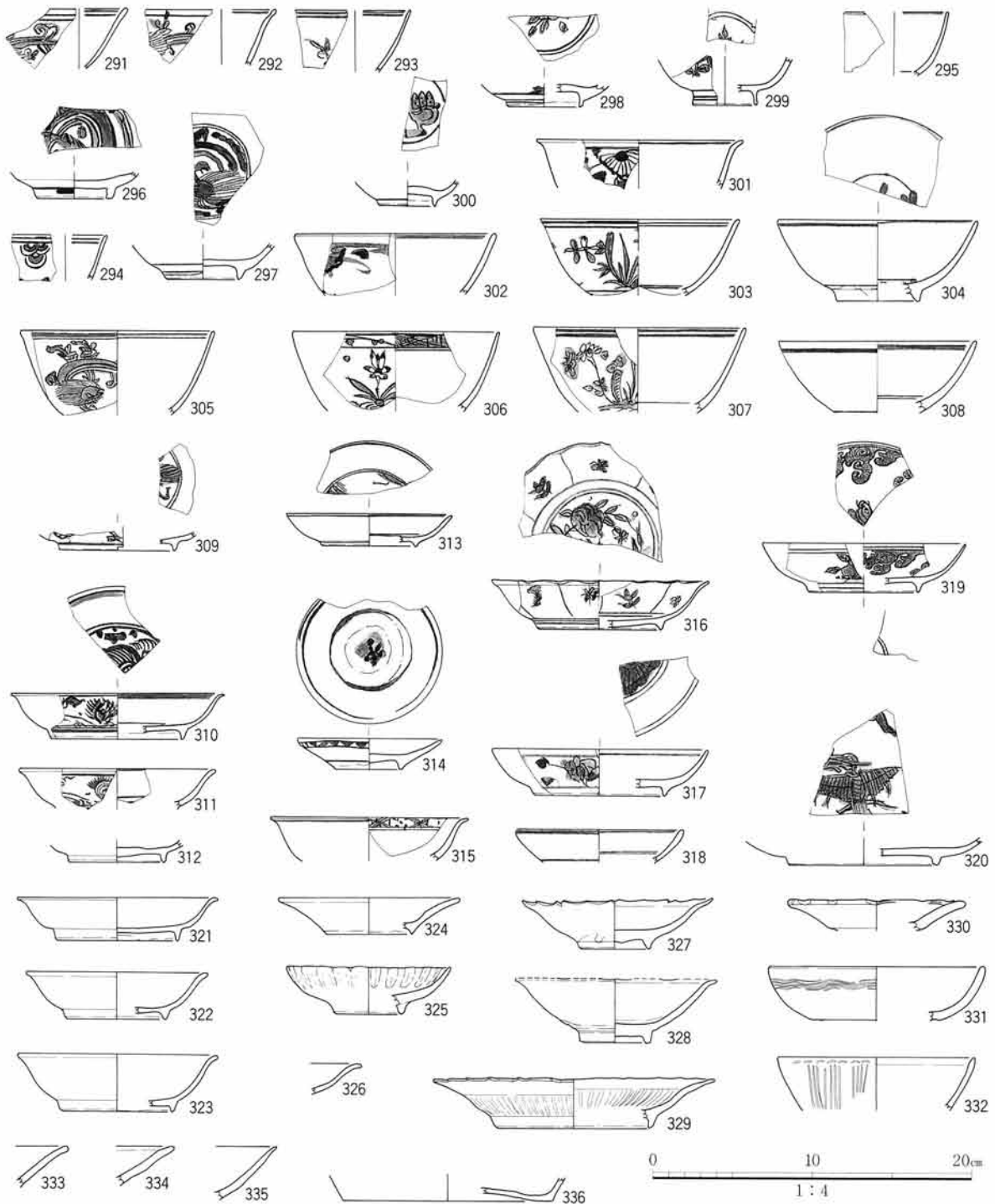


図136 NW90-7次SD401-3層出土輸入陶磁器

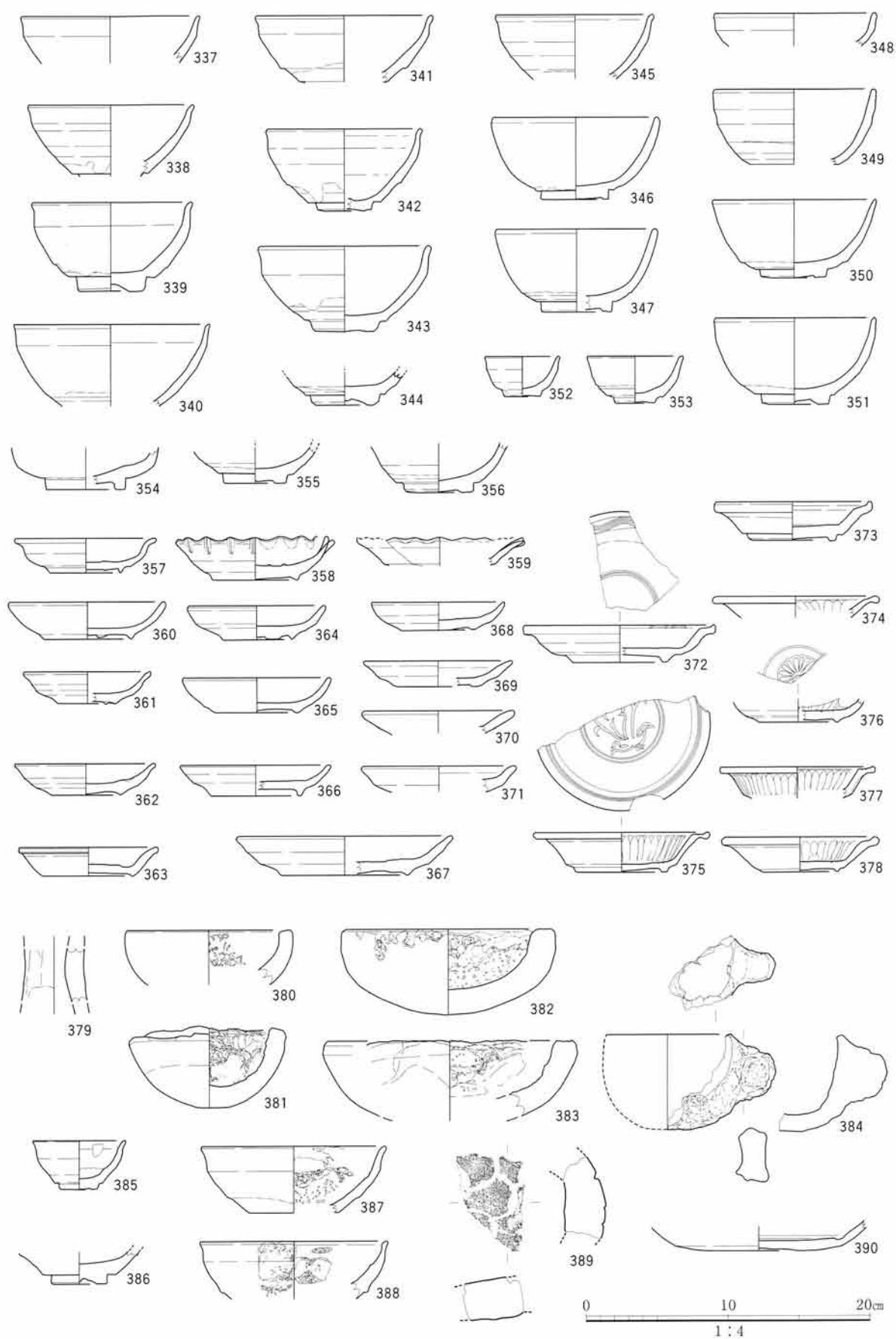


図137 NW90-7次SD401-3層出土瀬戸美濃焼・その他の遺物

(碗Ⅰ類)、高台の断面が台形で、高台脇から高台内面にかけて露胎する304(碗Ⅱb類)などがある。青花皿には碁笥底で内底面を蛇ノ目釉剥ぎする粗製の314(皿Ⅰ類)、端反りで畳付けを削る310(皿Ⅱa類)、口縁端部が芙蓉手の316(皿Ⅴ類)などがある。これらの青花の中で漳州窯産のものは301・302・304・308・314・318で、それ以外は景德鎮産と思われる。336は[森穀2001]で紹介され、図3-100に該当する。褐灰色の釉が施され、底はやや上げ底である。

瀬戸美濃焼には天目碗337~345、丸碗346~351、小碗352・353、筒碗354、碗355・356、鉄釉端反り皿357、ヒダ皿358・359、丸皿360~371、折縁皿372~378がある(図137)。354は鉄釉で硬質に焼き上がり、高台内側の削り込みの深いなど、通常の瀬戸美濃焼とは異なる要素が多く見られるため、輸入陶器の可能性もある。355・356の釉は白色で、志野のような色調を呈する。372の見込みに2条の圈線、口縁部内面には波状文、375の見込みには草文が線彫りされ、376の見込みには菊のスタンプがある。

金属加工関係の遺物には鞆羽口379、埴塙380~384に加え、埴塙もしくはトリベとして転用された瀬戸美濃焼小碗385、同天目碗386~388、土師器片1点が出土した(図137、写真27)。

379は胎土にモミガラが練り込まれている。少量の金属を溶かすための口径の小さい鞆羽口である。

384は把手状の突起が付く特異な形態のものである。外表面には全体に熔融してガラス状の付着物が見られる。内面は被熱しているものの、付着物はほとんどない。OS93-28次のSK103で出土している類例[大阪市文化財協会2003a:p.314の図312-201・202]を参考に図上復元した。なお、付着したスラグを蛍光X線分析(非破壊)したところ、亜鉛(Zn)を検出した。

380~383は碗形の埴塙である。ほぼ完形の381は口径11.0cm、器高5.7cm、器壁1.2cmである。胎土には砂粒がほとんど含まれず、モミガラやスサを混ぜ込んで作られている。内面および口縁端部にはスラグが付着しており、蛍光X線分析(非破壊)したところ、多量の銅(Cu)を検出した。380・382・383についても口径に差はあるものの、モミガラやスサを混ぜ込んだ胎土を用い、内面にスラグが付着する点は共通する。

386は底部内面が高熱を受けて釉が溶けている。387・388は内外面にスラグが付着している。385は内面に金色の小粒と白い灰のような物質が付着している。金小粒を蛍光X線分析(非破壊)したところ、金(Au)を検出した。また、灰のような物質についてはカルシウムを検出していることから、骨灰の可能性はある。

写真27の土師器片は平坦な土師器片の片面には鉍滓が付着し、それを搔取った跡が見られる。付着した鉍滓は蛍光X線分析(非破壊)により、多量の鉛(Pb)を検出した(註2)。

389は鯉瓦の鱗の部分である。390は奈良時代の土師器杯Aの底部片で、暗文は施されていない。遊離資料



写真27 土師器片に付着したスラグ

ではあるが、当調査地で確認された唯一の奈良時代の遺物である。

1・2層出土遺物(図138)

2層からは青花391～395、李朝陶磁器396～402、瀬戸美濃焼403～407、唐津焼408～410、備前焼411、土師器412～416、瓦質土器417～419が出土した。青花には碗391～393、皿394・395があり、碗には口縁が外反し、つまみ上げが明瞭な392(碗Ⅲb類)が含まれる。

396～398は施釉陶器碗である。398は[森2001]の図2-6と同一のものである。竹節状の厚い高台から単位の大きなケズリが施される。釉はよく溶けて地の褐色が見え、釉の厚い部分は緑灰色を呈する。399～401は白磁皿で、いずれも口縁部が若干外反する。402は施釉陶器甕である。

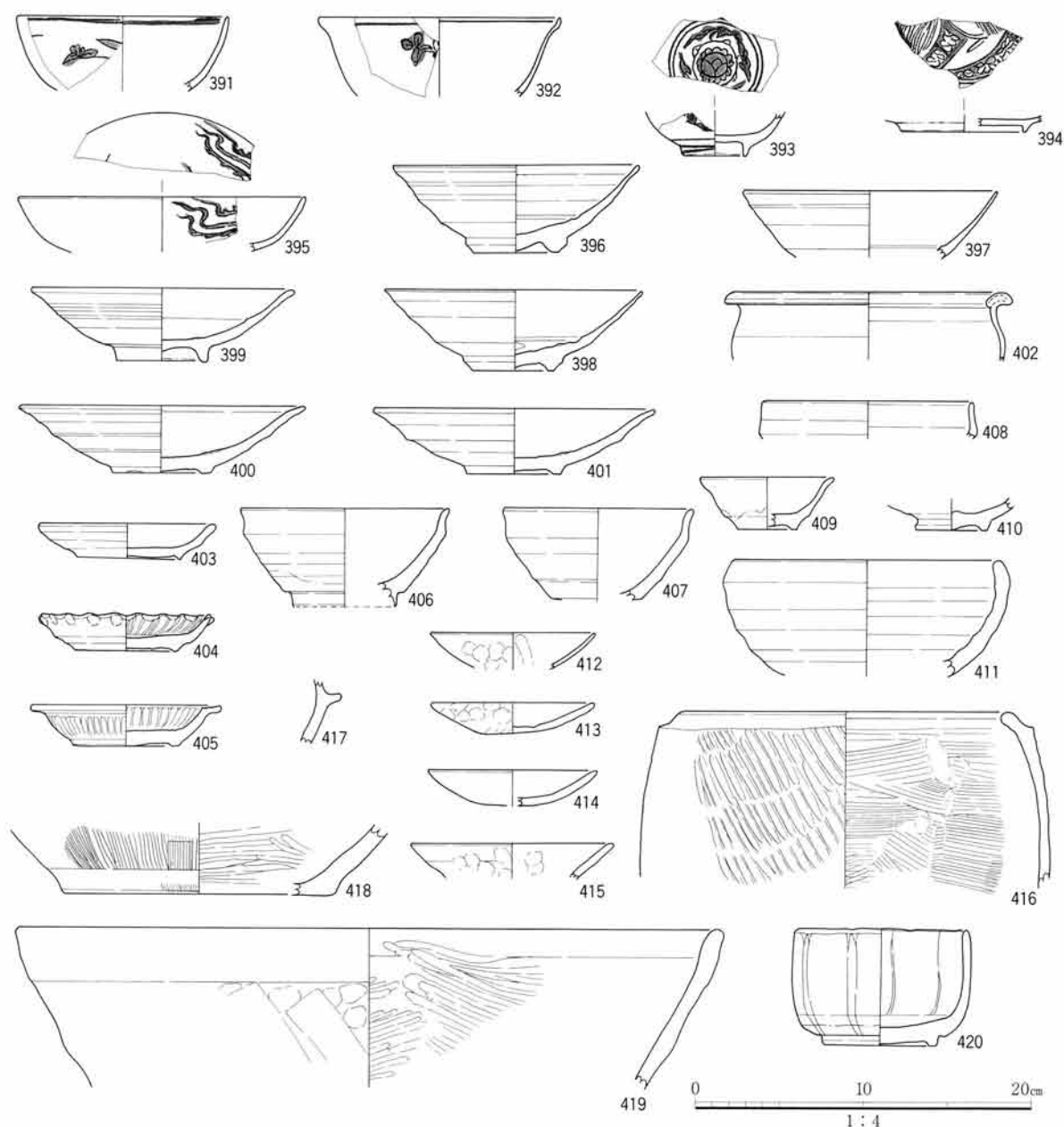


図138 NW90-7次SD401-2・1層出土遺物

SD401-2層(391～419)、SD419-1層(420)

瀬戸美濃焼には丸皿403、ヒダ皿404、折縁ソギ皿405、天目碗406・407がある。唐津焼には皿408・小碗409・碗410がある。備前焼には鉢411、土師器には皿412～415、火鉢416、瓦質土器には羽釜417、捏鉢418・419がある。

1層からは瀬戸美濃焼筒碗420が出土した。

c. 豊臣後期の遺構と遺物

第4層上面で柵、井戸、土塋、溝を検出した(図132)。以下では主要な遺構について報告する。

SA401 調査地南部で検出した。4つの柱穴を検出した。各柱穴は一辺および深さは0.4m前後で、柱痕跡はわからなかった。方向はE5°Sで、東側に延びる上町筋にほぼ直交する。柱穴からの出土遺物がないため、時期決定の手段に欠ける。

SK401 調査地中央で検出した。東西約4m、南北2m以上、深さ0.5mある。土師器皿421、瀬戸美濃焼志野皿422、同天目碗423、同丸碗424、唐津焼碗425・426が出土した(図139)。421には「志やう七郎」(もしくは「志やう長郎」)と墨書されている。422は器高が低く、底部が平底の形態である。

SK402 調査地の南東隅で検出された。東西3.0m、南北2.4m、深さ0.7mある。青花碗427・428、唐津焼碗429、同皿430・431が出土した(図139)。427は漳州窯産のV類、428は景德鎮産で、口縁部

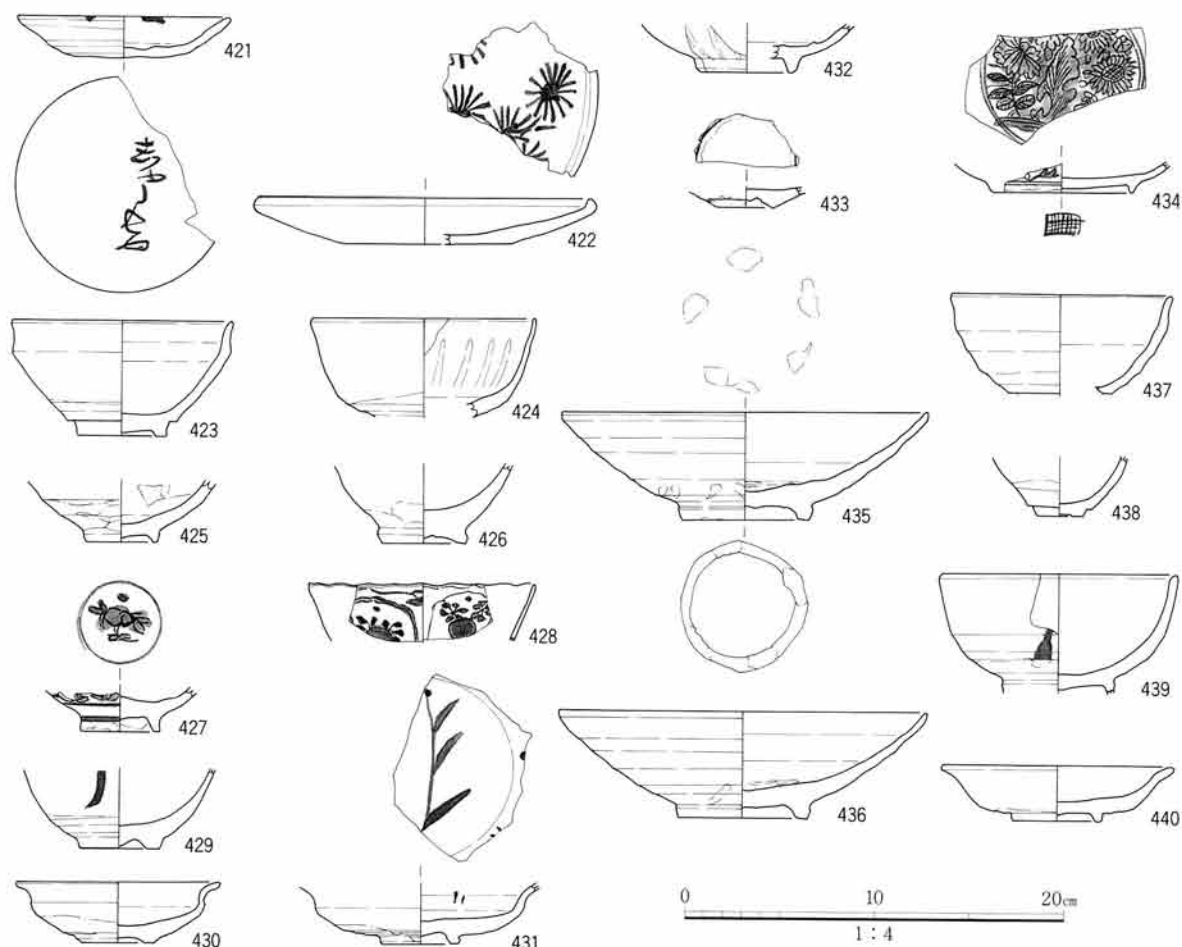


図139 NW90-7次豊臣後期遺構出土遺物
SK401(421～426)、SK402(427～431)、SE401(432～440)

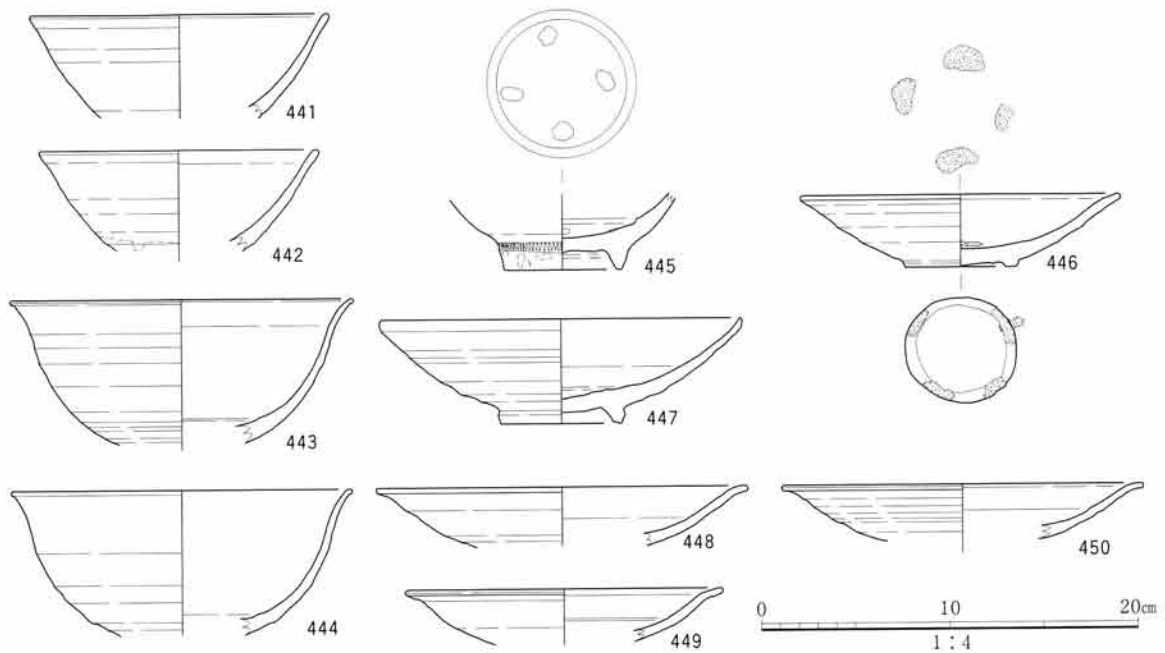


図140 NW90-7次出土李朝白磁

が芙蓉手のVI類に該当する。430は口縁部が屈曲して強く外湾し、皿B1類に当る。431は見込みに草木が描かれる皿C類に当る。

SK403 調査地中央東寄りで検出した。直径0.7m、深さ0.4mで、底から0.2mほど上で握り拳大の円礫が多数敷き詰められていた。性格は不明である。金箔押し唐草文軒平瓦(H061)が出土した。金箔押し瓦についてはこのほかSK404からは軒丸瓦(M107)、SK405からは巴文軒丸瓦(M104)が出土した[宮本佐知子・寺井誠2003]。

SE401 調査地の南端で検出した。底で直径1.1~1.3mあり、正円に近いことから本来は木製の井戸側が存在したと思われる。深さは検出面から約1mある。青白磁碗432、青花皿433・434、李朝白磁皿435・436、瀬戸美濃焼天目碗437、同碗438、唐津焼碗439、同皿440が出土した。433は碁笥底の皿Ia類である。435は[森2001]の図3-50と同一で、A-1類に該当し、内外面に砂目が残る。439は器表はにぶい赤褐色で、白化粧が施される。

このほか豊臣期の遺物として注目されるのは李朝白磁の多さである。図140には第4層や土壌から出土した碗441~445、皿446~451を掲載した。

碗は441・442が口縁部が直線的に伸びるのに対して、443・444は体部に深みがあり、口縁部が外反する。前者は[森2001]のA-1類、後者はB類に該当する。445は[森2001]の図2-39で、見込みに胎土目が残る。当調査地の第4b層でも下部の方で出土したことから、豊臣前期に位置づけられる可能性が高い。皿は口縁端部は直線的に伸びる447(A-2類)、やや内湾ぎみの447、端部が外反する448~450(A-1類)がある。

d. 徳川期の遺構

第3b層上面で畝間溝を検出した(図141)。これらの溝はN2~4°Eかそれに直交する方向に延び、幅0.4~0.6m、深さ0.05~0.10mである。断面観察によって、第2層基底面で大坂夏ノ陣に由来する

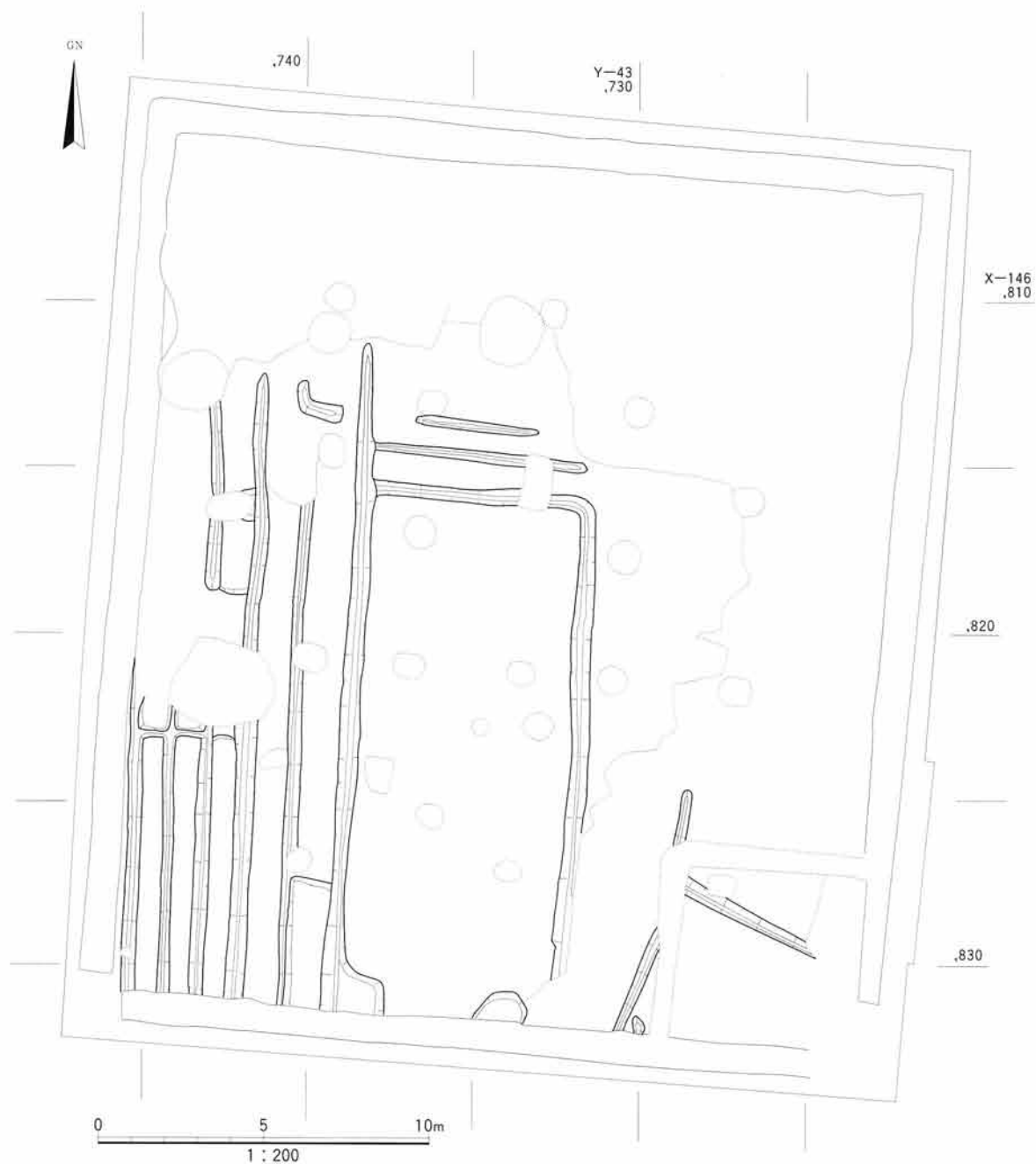


図141 NW90-7次徳川期の遺構配置図

と思われる焼土を含む土壌があることから、夏ノ陣直後に営まれた畠であろう。なお、畠の上面は上町層に由来すると思われる盛土で覆われている。この盛土は元和年間の可能性が高いことから、耕作は短期間しか行われなかったと思われる。

3) まとめ

i) 前期難波宮造営時の整地について

本調査地は前期難波宮朝堂院の約200m西に位置し、宮殿が造営された頃に小支谷を埋めて整地したことが明らかになった。このような谷は国立大阪病院内のNW97・122次[大阪市文化財協会1984]

やNW93-4・12次(本章第1節)でも検出されている。図142は周辺調査の成果を基に想定した地山上面の旧地形復元図で、SX901以外の小支谷は図142で示した名称で呼ぶことにした。

まず、NW97・122次でそれぞれ検出した谷A1・A2はSX901は、幅10m程度の谷頭である。これらが合流し、銅座公園の東側を南に延びる(谷A)。谷Aは現在でもその痕跡を残していることから、これが「龍造寺谷」の本筋になると考えられる。

谷Bについては谷頭が埋められているのが明らかになっている(本章第1節)。その南側のNW101-③次調査においてGL-4.3mで地山が検出されていることから[大阪市文化財協会1981a:p.114]、NW90-7次調査地の東側に埋没谷が通っていることが予想される。谷筋の推定地は現地表面がTP+20m前後で平坦であることから、後代に埋めて整地されたことが考えられるが、今回の調査地の東

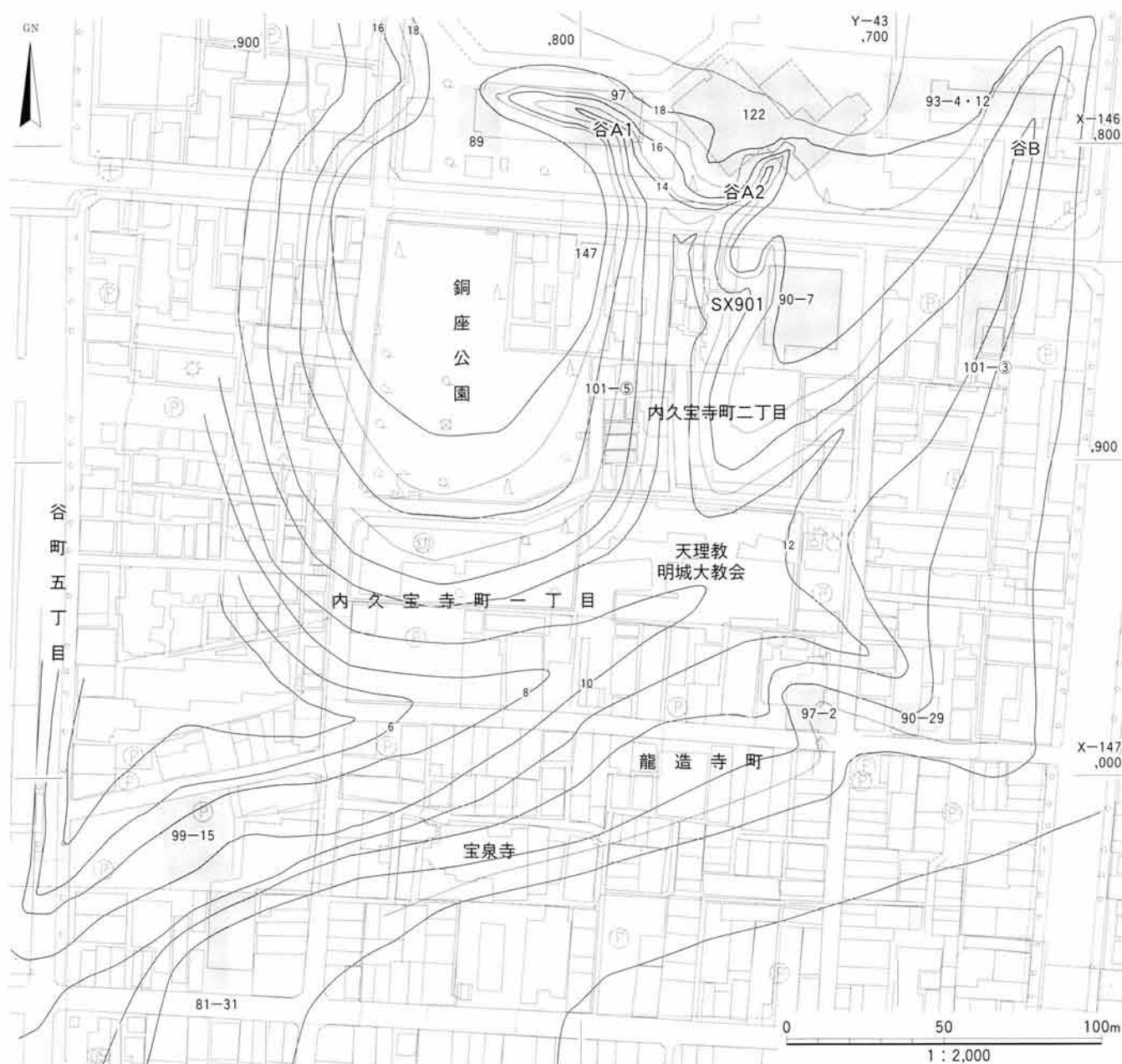


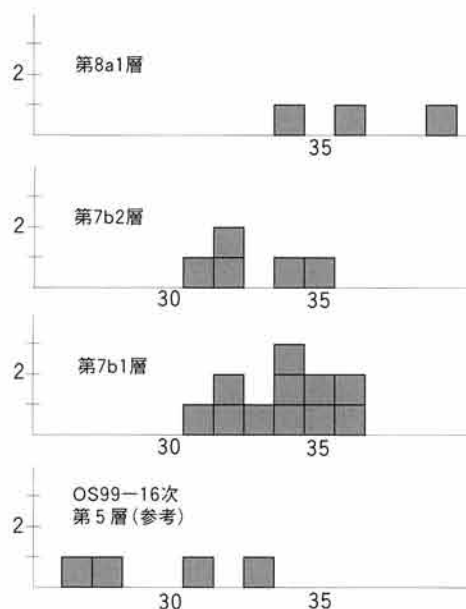
図142 NW90-7次調査地周辺の旧地形復元図

側が豊臣期に整地されていたことから、難波宮造営期よりも豊臣期かそれ以降に埋められた可能性が高い。

ii) 飛鳥時代の出土遺物について

SX901からは飛鳥時代の土師器・須恵器が多量に出土し、第8a・7b2・7b1の各層で時期差があるのは報告で指摘したとおりである。7世紀初頭の遺物が出土した第8a層は黒灰～黒褐色シルト質粗粒砂層で、NW97・122次のⅧ層に共通する。特にNW97次ではⅧ層がもっとも厚いところで約2mあり、5つに細分され、難波Ⅲ古段階に該当する土師器・須恵器が多量に出土した。

ここで本調査地の各層で共通して出土している土師器杯Cの径高指数と須恵器杯H・Gの法量比較を行ってみよう(図143)。まず、第8a1層のものは34～39である一方で、第7b2・7b1層はそれほど差がなく、31～36の間に分布している。参考までにOS99-16次の第5層(「清水谷」の小支谷を埋める整地層)の数値を挙げたが、これらは27～33の



※それぞれ縦軸は個体数で、横軸は径高指数
図143 土師器杯Cの径高指数比較

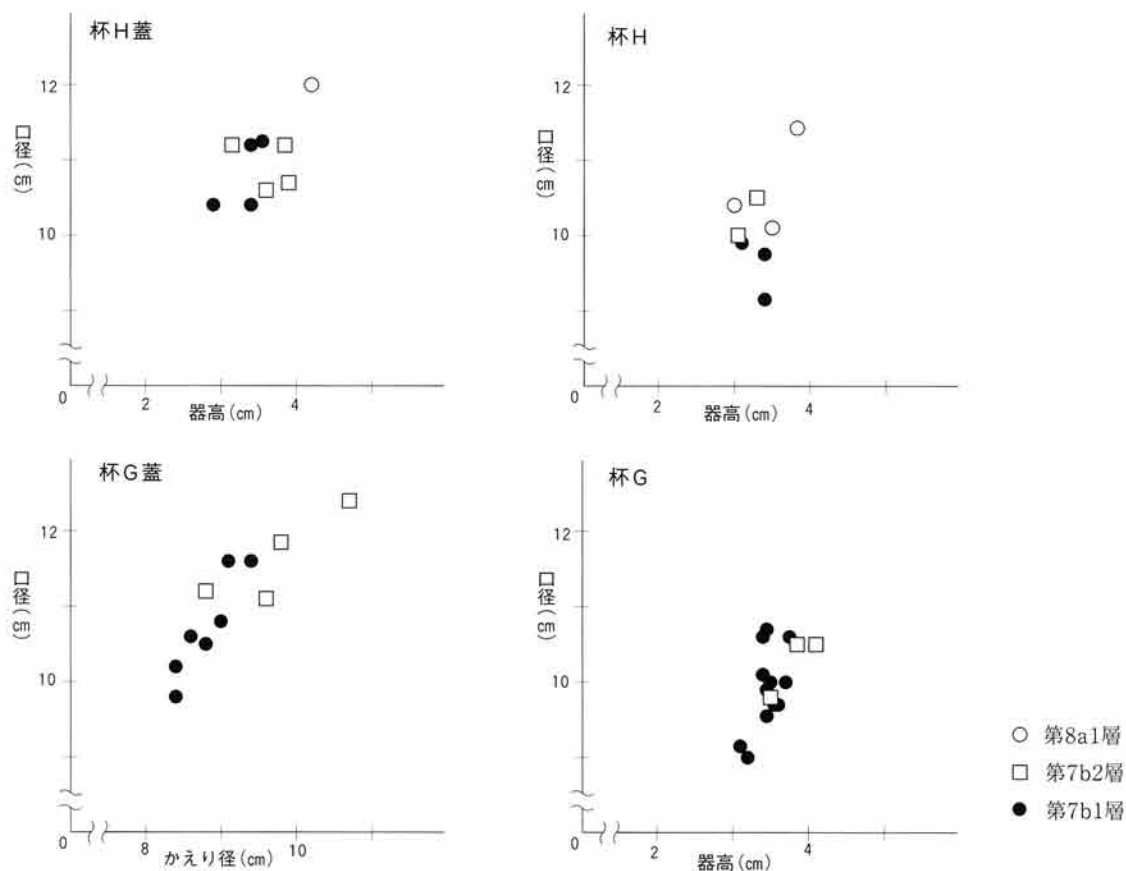


図144 須恵器杯H・Gの法量比較

間に分布し、本調査地のものより器高が低く、さらに新しい傾向を示す[寺井誠2003]。これは「清水谷」の小支谷を埋める整地が、宮殿近隣の整地より若干遅れることを示している(第Ⅴ章第1節)。

続いて須恵器杯Hや杯Gの法量を比較した(図144)。第7b層出土の須恵器杯H・Gはほぼ同量で構成されているため、報告でふれたように難波Ⅲ中段階に位置づけられるが、上部の第7b1層の杯の法量が小さくなる点や須恵器杯B蓋と思われる器種が加わる点は、若干の時期差がある。断面観察で第7b2層上面で掘込みが確認されていることから(図120)、整地が一度中断したことが想定される。ただ、これが整地の実態とどのように関係するかはわからない。

これ以外の遺物で注目されるのは百済土器で、瓶や中型壺の底部(平底)などが出土した。共伴資料が明確であり、併行関係を検討するに良好な資料と考える。これについては第Ⅴ章第2節で検討する。

iii) SD401と豊臣期の遺構分布

SD401は杭と横矢板で作られた堅固な溝である。調査地内ではジグザクに延びるが、大まかに見ると溝はN15～20°Eの方向である。現在の上町筋が調査地の東側で延びる部分でN6°E、惣構堀よりも南側でN10°Eであるから、それよりも東に振っている。

調査地北側のNW122次調査地では、豊臣期の溝SD12261や井戸などの遺構が検出されている[大阪市文化財協会1984]。SD12261は直線的には延びないものの、おおむね東から北に5～6°振った方向である。報告では下部層を大坂冬ノ陣後の和議成立以降の埋土、上部層を大坂夏ノ陣後の整地層とされているが[大阪市文化財協会1984：p.65]、下部層出土遺物に唐津焼が含まれていないこと、瀬戸美濃焼に丸皿が多いことから豊臣前期にさかのぼり、SD401とSD12261は同時存在した可能性が高い。また、いずれも上町筋の方向と異なるのは、三ノ丸造営で街区が整えられる前であるからと考えられる[松尾信裕2003]。

SD401からは豊臣前期の多量の陶磁器とともに、韃羽口や埴塙、瀬戸美濃焼を転用した埴塙が出土し、埴塙に付着したスラグからは金属は金・銅・鉛・亜鉛が検出された。当地では金属加工関係の遺構は見つかっていないものの、出土状況から考えて当地もしくは近隣に工房が存在し、SD401も工房に付随する排水溝と思われる。これらは大坂城建設に係わった職能集団によるものと考えられ、築城が一段落した後に、SD401はその機能を終え、埋められたと考えられる。同様な状況はOS88-121次調査地でも確認されており、当地と同様に豊臣前期の間に終わり、その後、整地で埋められている[大阪市文化財協会2002b：pp.113-133]。こういった金属加工関係の遺構・遺物は今後も大坂城周辺で見つかる可能性があり、注意を払う必要がある。

なお、豊臣期の内久宝寺町や龍造寺町は、「龍造寺谷」によって周辺より低くなっていた。NW90-7次調査地の豊臣期の面の標高について、第1層基底面がTP+16.5mである。畠によって多少の削平を考え合わせたとしても、TP+17m足らずと思われる。一方、その北側のNW122次調査地ではTP+18～19mの標高で豊臣期の遺構が検出されている。豊臣期の遺構は井戸や溝・土壇しかないことから削平されたことが想定され、本来はTP+19mを越えるかもしれない。このことから約20mときわめて近接しているにもかかわらず、両調査地間には約2mの高低差がある。

約50m西では銅座公園があり、その近くで行われたNW147次調査では現地表面から5cmほどで地

山が検出されていることから[大阪市文化財協会1981a：p.117]、標高はTP+18mを越える。また、約100m東のNW80-8次調査地ではTP+20mあまりで地山が検出され(第Ⅲ章第2節)、南東約80mのNW80-17次調査地では削平されていたものの、もっとも低いところでもTP+17.7mで地山が検出されている。

南側は前述のように谷町筋に向って延びる谷地形があり、現在でも窪みが残っている。龍造寺町の西端で現地表がTP+14m程度であり、もっとも低いところでの調査例はないものの、当時の地表面はこれ以下になると思われる。さらに南のNW90-29次では大坂夏ノ陣の焼土層がTP+17mで検出され(本章第4節)、その南隣のNW83-20次では豊臣後期と思われる遺構がTP+18.2mで検出されている[大阪市教育委員会ほか1985]。そして、さらに南のNW00-6次や00-20次ではTP+20mあまりで地山が検出されている。このように見ていくと、旧地形で谷にかかった部分は整地が行われていても、周囲より約2m低くなっていたことがわかる。

(寺井)

註)

(1)佐藤隆の指摘による。

(2)SD401出土の金属加工関係遺物については大阪歴史博物館設置の文化財用エネルギー分散型蛍光X線分析装置(EDAX DX95改良型)を用いて、非破壊で表面の分析を行なった。なお、これらの遺物については伊藤幸司の教示を得て執筆した。

第3節 NW90-29次およびその周辺の調査

1) 調査地と周辺の概要

本節では龍造寺町・安堂寺町1丁目および谷町5丁目に位置する5件の調査(NW164・80-16・80-19・88-2・90-29)を報告する(図145)。

NW164・80-16次は埋設管設置に伴う調査である。NW164次では「龍造寺谷」(第V章第1節)の斜面と徳川期以降の下水を確認した。

NW80-19次は谷町筋に面する共同住宅建設に伴う調査である(写真28)。工事敷がGL-2mまでであったため、近世の整地層までの調査で終わった。最終的にボーリング調査によってGL-3m(≒TP+10m)で地山を確認した。

NW88-2次と90-29次は隣同士の調査である。いずれの調査でも大坂夏ノ陣に由来する焼土層を

検出し、後者の調査ではさらに飛鳥時代の整地層や自然流路を検出した。なお、前者は[上垣幸徳・金村浩一1990]、後者は[伊藤純1991b]ですでに報告されている。

本節ではNW90-29次調査についての旧報告[伊藤純1991b]の内容を中心にして、若干補足しながら他調査地とともに報告する。

2) 調査の結果

i) 層序(図146、図版20上)

NW90-29次調査地の東壁で観察した層序を掲載する。括弧内は旧報告[伊藤純1991b]で用いられた層序番号である。

第3層(①層) 徳川期の整地層で、巨石が埋まっていた(写真29)。徳川氏大坂城築城の際の石材と思われる。

第4a層(②層) 大坂夏ノ陣の焼土層で調査地全面に分布する。瀬戸美濃焼筒碗31・丸皿32・折縁ソギ皿33が出土した(図5)。

第4b層(③～⑦層) 豊臣期の整地層および自然流路の埋土である。整地層から青花碗26、同皿27・28が出土した(図5)。

第7b層(⑨・⑩層) 灰黄褐色粘土や中粒砂から

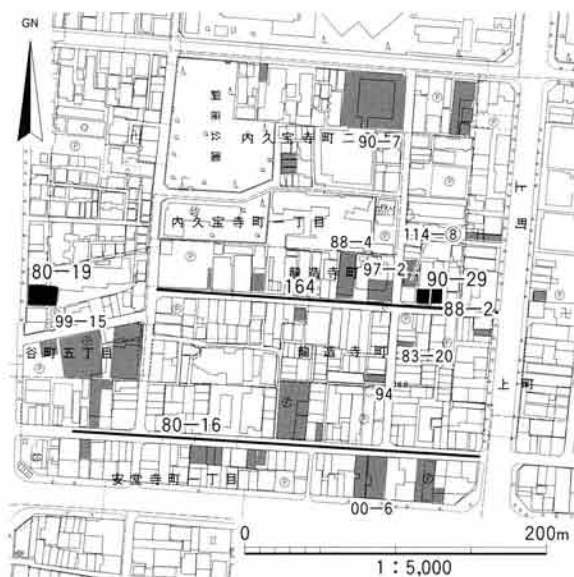


図145 NW90-29次などの調査地位置図



写真28 NW80-19次で検出された近世の整地層上面

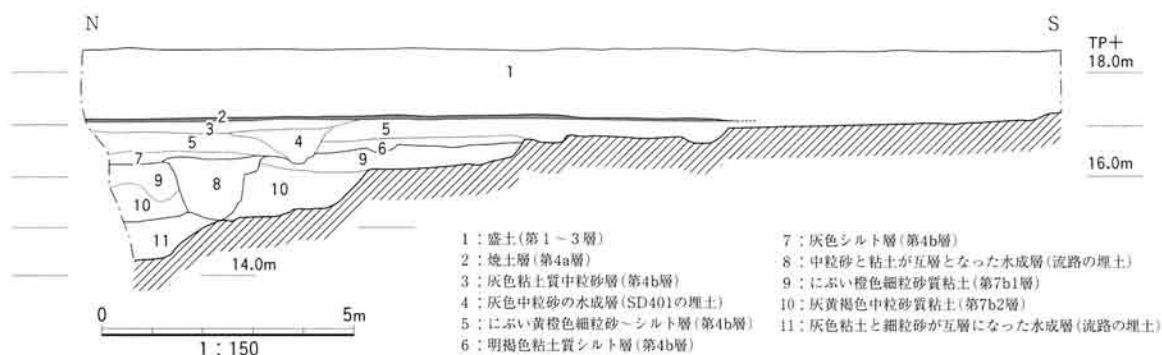


図146 NW90-29次東壁断面図

なる整地層で第7b1・2層に2分することができる。後述するように難波Ⅲ古段階の遺物を多く含むが、須恵器杯A15が第7b2層に含まれているため、古くても難波Ⅲ新段階に位置づけられる。

第8a層(⑪層) 灰色粘土と細粒砂の互層で、難波Ⅲ古段階の遺物を含む。

ii) 遺構と遺物

a. 難波宮造営前後の遺構と遺物

NW90-29次調査(図147、図版20中)

地山上面の北側で急激に下がる落込みSX901を検出した(図147左)。これは「龍造寺谷」の支谷の谷

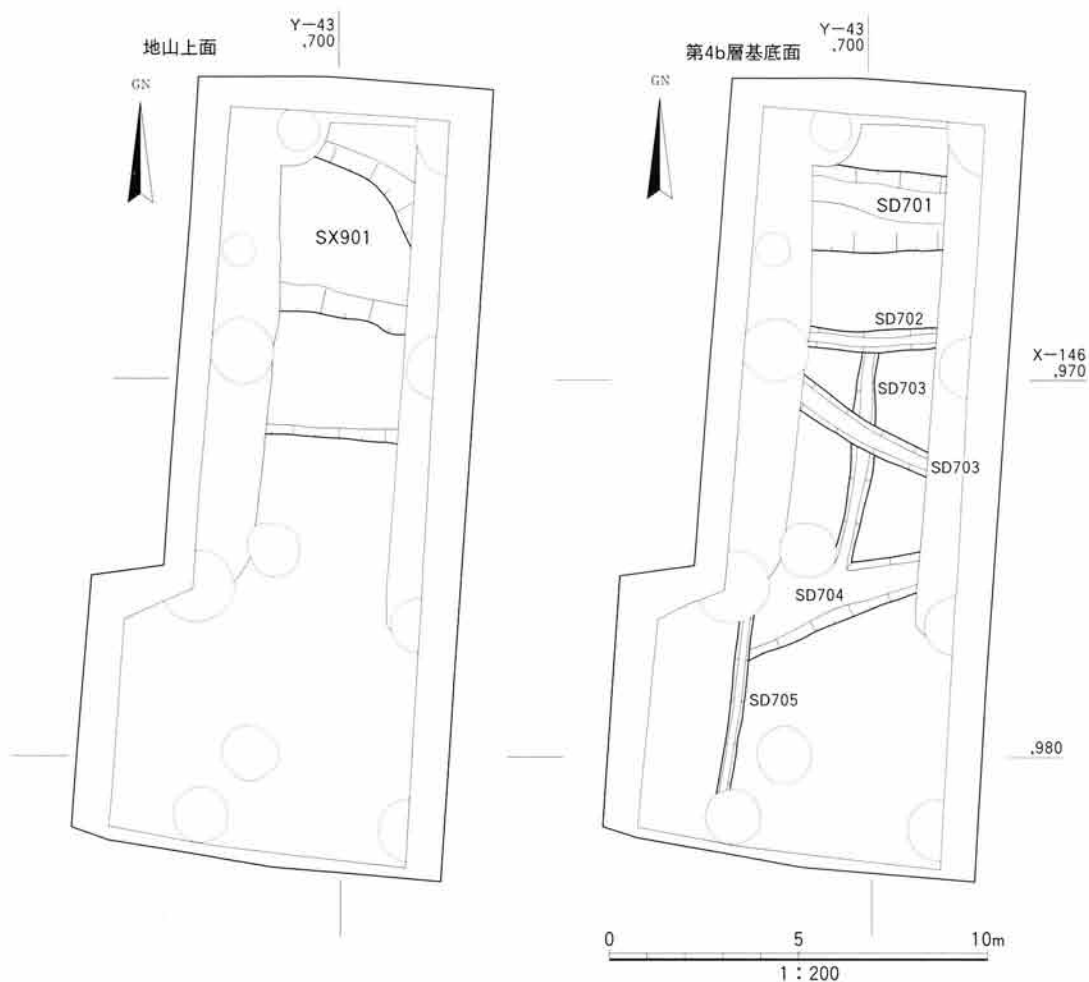


図147 NW90-29次地山上面および第4b層基底面検出遺構

頭に近い部分と思われる。落込み内には第8層の水成層が堆積し、その上には第7b層の整地層によって埋められ、当地は平坦化している。

第4b層基底面では溝を検出した(図147右)。

SD701 東西方向に延びる溝で、幅2.4m、深さ1.2mある。中粒砂と粘土が互層となった水成層(旧報告の⑧層)で埋る。旧報告では自然流路と報告されたが、肩が非常にしっかりしていること、「朱雀門」の西側回廊(第Ⅲ章第3節)と、NW97-2次で検出された堀[古市晃1999]を結んだ直線上に溝の北肩がのってくる。なお、北側では柱穴は検出されなかった。

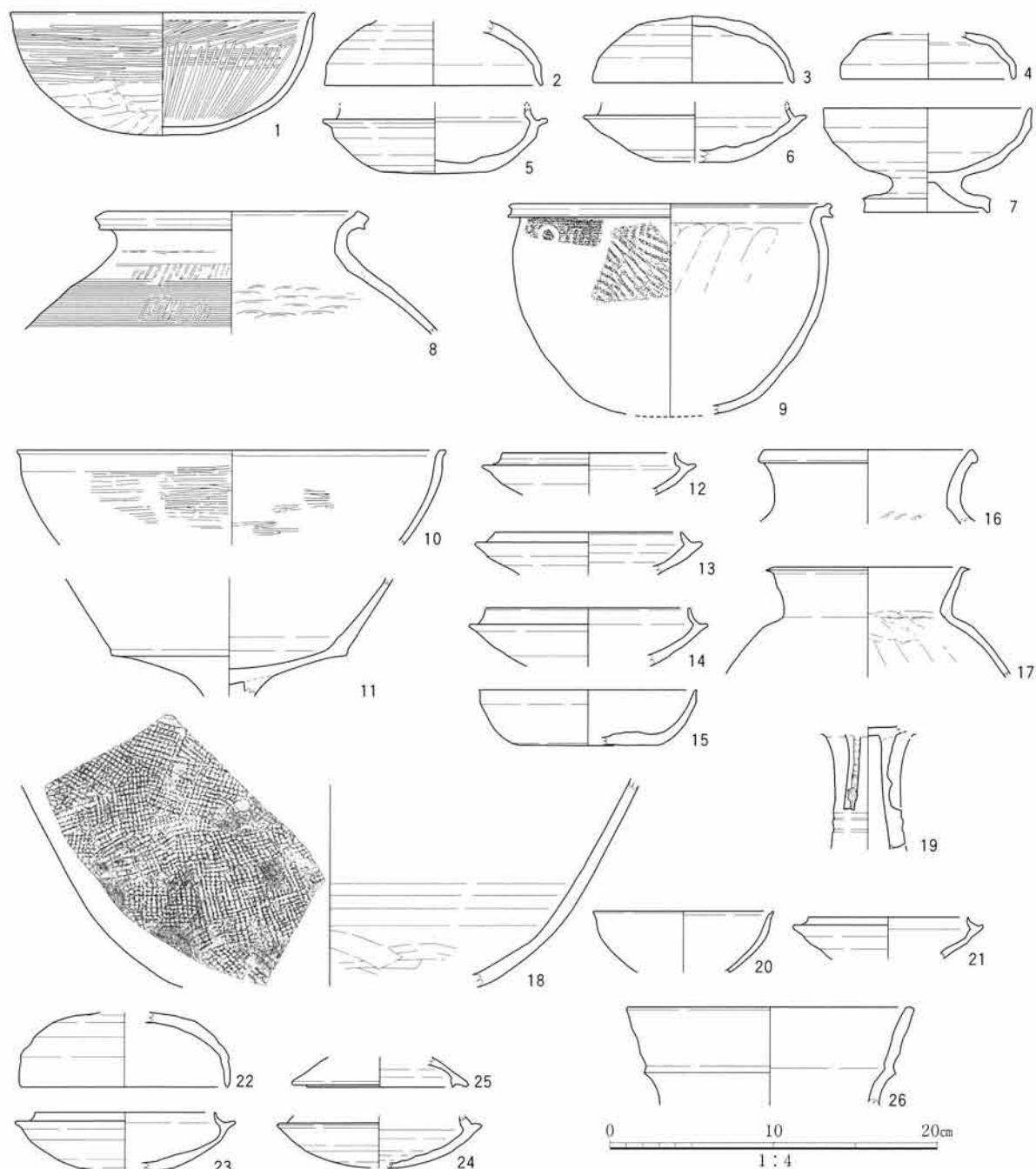


図148 NW90-29次古墳～飛鳥時代の遺物

第8層(1~9)、第7b層(10~19)、第7b1層(20・21)、第4b層(22~26)

SD702~705は深さ0.1m前後で、方向が一定でなく、性格は不明である(図147右)。

なお、第8a層からは土師器杯C1、須恵器杯H5・6、同蓋2~4、高杯7、甕8、瓦質焼成の甕9が出土した(図148)。1は内面に2段に放射状暗文が施され、外面は横方向のミガキで底部はケズリで仕上げられる。口径18.5cm、器高7.6cmで、径高指数は41である。2~4は口径がそれぞれ13.1cm、12.1cm、10.4cmある。9は外面には擬格子タタキが施され、内面はユビナデで仕上げられる。口縁端部は強いナデにより凹む。断面の内心は灰白色でその外側はにぶい黄橙色であるが、器表面は燻されたように黒く仕上がっている。口縁部・頸部は1/2近く残っているが、頸部下に円形のスタンプ文が1個所のみに施されている。なお、この土器は[伊藤純1991a]ですでに紹介されている。

第7b2層からは土師器鉢10、高杯11、須恵器杯H12~14、杯A15、甕16~18、高杯19、第7b1層からは土師器碗20・須恵器杯H21が出土した(図146)。10は内外面に横方向のミガキが施される。15は口径13.3cm、器高3.9cmある。口縁端部は内外面ともにいねいなヨコナデで仕上げられ、底部はヘラ切り後、調整が施されていない。[伊藤純1991b]では上下逆に実測され、杯H蓋として報告されていたが、本書では器形・調整から杯Aと判断した。共伴遺物には須恵器杯Gがなく、全体的に古い様相を示しているため、初現的な杯Aと考えられる。18は甕の底部付近の破片で、外面には格子タタキが施され、内面は当て具痕跡をヨコナデで消している。断面がにぶい赤褐色を呈する初期須恵器である。19は脚の3方向にスカシ孔を施そうとしているが、脚内まで貫通していない。

また、第4b層からは下位から遊離したと思われる須恵器杯H23・24、同蓋22、杯G蓋25、壺26が出土した(図148)。26は二重口縁の壺で、破断面が紫灰色を呈する初期須恵器と思われる。

以上の遺物から判断して、第8層は難波Ⅲ古段階の包含層、第7b層は須恵器杯A15が含まれることから、難波Ⅲ新段階の整地層である。

b. 豊臣期の遺構と遺物

NW90-29次調査(図150、図版20下)

第4b層上面で礎石列・土壌を検出した。

SA401 N9°Eの方向に延びる礎石列である。残りの良い部分で礎石の間隔は2mある。

SK401 調査地北西で検出した土壌で、東西1.4m、南北1.2m、深さ0.2~0.3mある。炭や焼土が大量に落込んでいた。青花皿30・備前焼鉢31が出土した(図149)。31は内面にはヨコナデによる凹凸が明瞭で、外面は底部にケズリが施される。

地層観察用の断面では第4b層の基底面で自然流路SD401を確認した(図144)。

また、第4b層からは青花碗27、皿28・29が出土した(図149)。27は碗Ⅵ類に当る芙蓉手の口縁部で、大坂では豊臣後期以降に多くなるものである[森穀1995]。よって、SA401が造られたのは豊臣後期に限定することができる。

第4b層上面を覆う焼土層(第4a層)からは瀬戸美濃焼筒碗32・丸皿33・折縁ソギ皿34が出土した(図149)。33は口縁部が直線的に伸びるA類である。

NW88-2次調査(図150)

第4b層上面で土壌SK402~405を検出した。いずれも出土遺物が少なく、詳細は不明である。

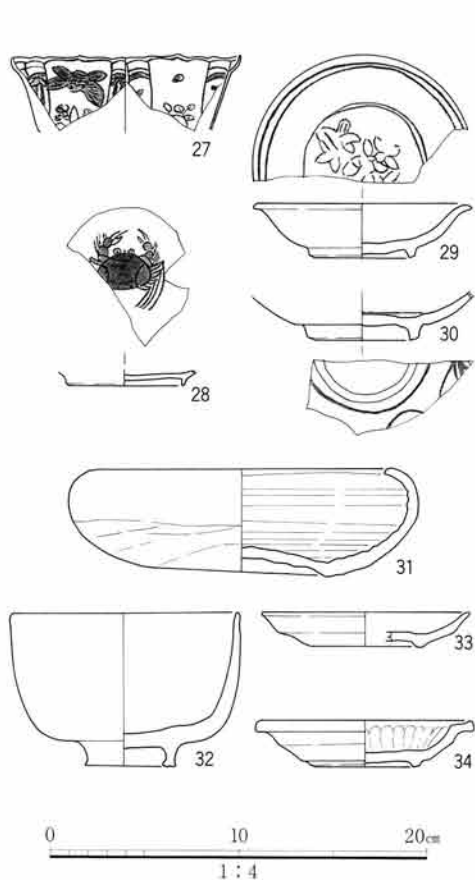


図149 NW90-29次豊臣期の遺物
第4b層(27~29)、SK401(30・31)、第4a層(32~34)

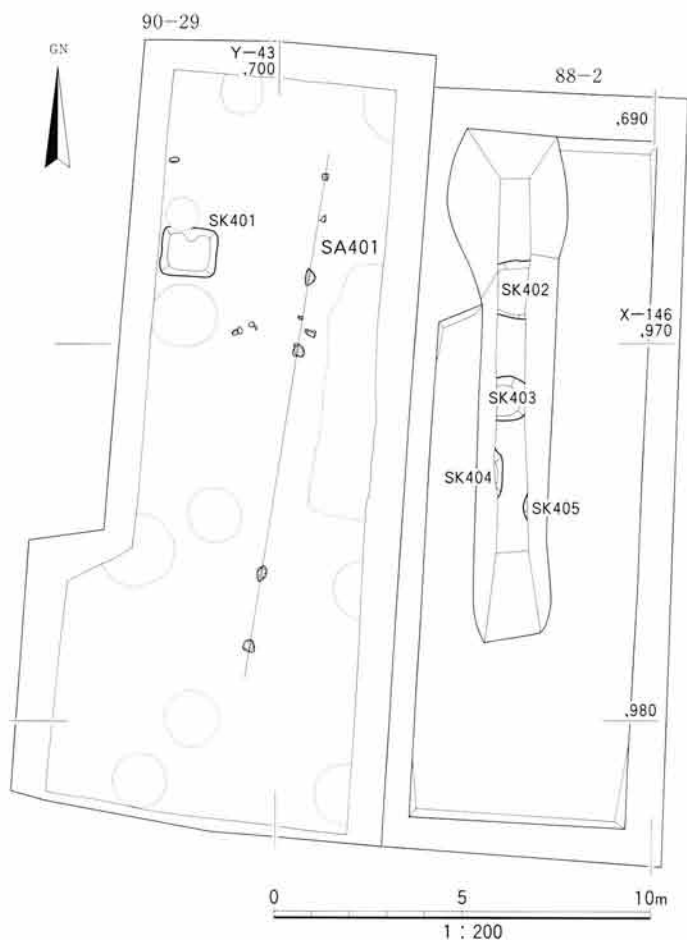


図150 NW90-29・88-2次豊臣期遺構配置図



写真29 NW90-29次で出土した巨石

なお、NW90-29次調査地大坂夏ノ陣の被災面はTP+17.1mである。東隣のNW88-2次調査地東壁において大坂夏ノ陣の被災面の標高は、北端でTP+17.4mで、それより南ではTP+17.6mで検出された。両調査地の東壁はおそらく数mの距離と思われるが、被災面が若干北西に向って下がっていることが考えられる。

c. 徳川期以降の遺構

NW90-29次調査

重機掘削中に巨石が出土した(写真29)。近隣のNW114-⑧次[中川信作・八木久栄1981]やNW97-2次[古市晃1999]などでも同様に巨石が出土しており、その中には刻印や矢穴のあるものも含まれる。大坂夏ノ陣後の大坂城再建のために石置き場にされていたと思われる。

NW164次調査

石組の下水を検出した。この下水は調査地の西端より約65m西に位置し、南北方向に延びる。縦0.2~0.5m、横0.3~0.5m、厚さ0.1~0.3mの自然石を積み上げて側石とし、栗石と漆喰で補強しており、

表土下約0.3mで上部を検出した。下水の幅は地の利で約2mあり、調査当時も野良積み側石の内側に厚さ0.2mのコンクリートを塗り、これを溝壁として使用していた。

この下水は、南大江小学校の地下を通して東横堀川に注ぐいわゆる「太閤下水」と一連のものと思われる。これは本調査地付近を起点として西に延びて、谷町筋を横断し、谷町5丁目の南西隅で北方向を転じて、直進する。そして、谷町4丁目、和泉町1丁目と南農人橋1丁目との町境で西に曲がった後、和泉町と南農人橋町との境界線を西進し、松屋町筋を横断して材木町にいたり、東横堀川に注いでいる。この延び方は「龍造寺谷」と共通する。

下水の起点について、1687(貞享4)年の『大坂絵図』には上町筋に近い東側にあり、1806(文化3)年の『増脩改正大阪地図』には宝泉寺の

北東端で北に折れ、龍造寺町通を横断した北側に起点がある(図151)。前者の地図に記入漏れがないとするなら、北に折れる下水は1687年以降に付け加えられたものといえる。また、「龍造寺谷」と同じ延び方をしているので、この窪みを利用して造られていることがわかる。

なお、谷町筋に面するNW96次のC地点で東西方向の一連の下水が検出されている[八木・中川1981](図151)。

3)まとめ

i)難波宮期

本節で報告した調査地の近隣では難波宮期の柱穴が見つかった。特に、NW97-2次[古市1999]やNW00-6次[岡村勝行2002]では一辺1m前後の掘形をもち、柱痕跡の直径が0.3mあまりの柱穴が約3mの間隔で並んで検出された(図152)。これらは堀と考えられ、いずれも難波宮の中軸線の方

向と一致する。以下これらの調査の概要を見てみよう。

NW97-2次調査地はNW90-29次調査地の約20m西に位置する。4基の柱穴が東西方向に並んで検出された。東側に延長させると前期難波宮の「朱雀門」に当り、一番西端の柱穴から直角方向に北に延ばした場合、西方官衙地域のSA303とほぼ重なるため[大阪市文化財協会1992]、東西と南北の堀の接点があると考えられた。よって、この堀の南北両側を精査したが、攪乱が多いため他の柱穴は見つからなかった。また、この調査地の南端では西側に低くなる落込みがあり、最厚150cmの古代の整地層で埋っていた。なお、この落込みは「龍造寺谷」(第V章第1節)に繋がる小支谷と考えられるが、

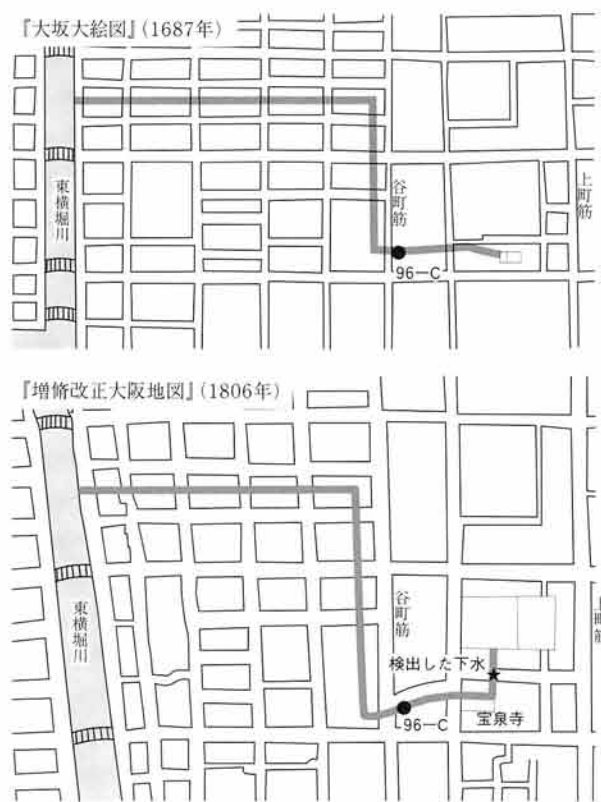


図151 古地図に描かれた下水

(いずれも原本より必要部分をトレース)



図152 調査地周辺で検出された難波宮期の遺構

NW90-29次で検出した小支谷とは別の筋である。

NW00-6次調査地はNW90-29次の約120m南に位置し、7基の柱穴が南北方向に並んで検出された(SA201)。この塀をそのまま北に延長させると、40m離れたNW94次の柱穴がその延長線上に載り[大阪市文化財協会1981a: pp.38-39]、さらに北に延長させると西方官衙のSA303にほぼ一致し、その誤差は約1m東にずれる程度である。また、この調査地の南東約100mに位置するNW82-33・45次のSA504はこの柵と直交する方向である[大阪市文化財協会2002b: pp.219-233]。なお、SA201の柱穴のひとつから2段の放射状暗文が施された土師器杯Aが出土しており、抜取穴が確認されていないことを重視すれば、NW90-29次の第7b層と同じく難波Ⅲ新段階以降に造られたことになる。

また、本節で報告した溝SD701は、北側の肩が「朱雀門」の西側に繋がる回廊とNW97-2次で検出された塀を結んだ直線にほぼ重なる(第Ⅲ章第3節)。調査地内では柱穴を検出することができなかったが、塀と溝が平行して延びるのであれば、宮域の南辺を区画し、SD701は道路側溝である可能性も残される。

なお、このような企画性の高い造営は、前期難波宮の造営プランと密接に係わっていると考えられる[岡村2002]。このようなプランを達成させるため、本節や前節で報告したように谷を埋めた整地が推し進められたのであろう。ただ、NW90-29次の整地層は須恵器杯A15を含むことから、この時期は難波Ⅲ新段階以降に位置づけられ、前期難波宮「朱雀門」から約500m南に位置するOS99-16次の整地層とはほぼ同じ時期と考えられる[寺井誠2003]。これらの点と前述のSA201の柱穴出土遺物が同じ時期に当たる可能性が高いことを重視すると、「朱雀門」より南側の造成は宮域よりもやや遅れて行われたことが想定される(第Ⅴ章第1節)。

ii) 豊臣期

NW90-29次および88-2次調査地で大坂夏ノ陣の焼土層を検出し、被災面の標高はTP+17.1~17.6mであった。これ以外の調査地では焼土層は検出されていないが、当調査地の約100m西のNW88-4次調査[西畑佳恵1990]に伴う事前の試掘立会(NW87-51次)では、GL-1.6m(≒TP+15.5m)で豊臣期の包含層の上面を検出している。一方、「龍造寺谷」を挟んで北側のNW90-7次調査地では、上面は削平されているものの、TP+16.5mで豊臣期の整地層が検出されている(本章第2節)。しかし、第2節でも指摘したように、NW90-7次の北側では約2mの高低差があったことがわかっており、当地でも約50m南ではTP+20mで地山が検出されていることから、約3mの高低差があることがわかる。

当地で検出した遺構はSA401と土塋数基であった。SA401の方向はN9°Eであった。上町筋を挟んで東側のNW90-20次で検出された掘立柱塀SA401(第Ⅲ章第4節)はN4~5°Eであり、北側のNW90-7次のSD401(本章第2節)はジグザクに延びており、今のところ惣構堀より北側では一定した方向性は抽出できていない。

なお、北から東に約10°振るという方向は、四天王寺から惣構堀の南側まで延びる寺町や平野町城下町の方角とも共通し、この町作りは豊臣秀吉が大坂城築城開始と同時に造成を始めたといわれる[内

田九州男1989]。[松尾信裕2003]は、惣構堀掘削前から堀の南側までしか城下町が延びていないことに疑問を示し、近年の発掘調査成果を基に、本来は惣構堀よりも北に延びており、惣構堀掘削によって城下町が分断されたと考えた。一方、NW90-20次のSA401は現在の上町筋の方向とほぼ等しい。これは三ノ丸造成によって造られた街区の方向で、現在にも受け継がれている。

以上の裏付ける十分な資料はまだ得られていないが、今後豊臣期の街区の復元のために、検出された遺構の方位に注意する必要がある。

(寺井)

第4節 NW84-40次および85-44次調査

1) 調査地と周辺の概要

本節ではNW84-40次および85-44次調査を扱うが、前者は旧大阪市立中央体育館跡地(現NHK・大阪歴史博物館敷地)についての確認調査に当り、後者は敷地の東側のガス管工事に伴う調査である。特に、前者の調査については後に本調査が行われ、すでにその報告書が刊行されているため[大阪市



図153 NW84-40次トレンチ配置図

文化財協会1992・2000a]、本節ではこれらの調査内容について概要を簡略に述べるに留めたい。

2) 調査の結果

NW84-40次調査は、当時まだ中央体育館があったため、体育館の利用に支障がないように幅約3m、深さ0.5m、長さ25～100mのトレンチを10本設定した。図153は『難波宮址の研究』第十一[大阪市文化財協会2000a]の付図を加工し、これらのトレンチの位置を示したものである。

調査の結果、難波宮造営前・難波宮期・豊臣期・徳川期の遺構が多く残っており、特に、難波宮期の遺構がきわめて良好であった。「並び倉」SB301の柱穴の一部はDトレンチの北側で検出された。なお、この段階では5世紀代の倉庫群の存在は把握されていなかったが、SB101～104の柱穴はF・Gトレンチで検出されていた。

NW85-44次では地山の確認を目的とする調査を行った。上町筋と中央大通との交差点付近では難波宮期の遺構や包含層を確認することができたが、それより北では地山の標高が低くなり、馬場町の交差点付近ではTP+20.7mになる。これは近世以降の削平によるものと考えられる。

(寺井)

第V章 遺構と遺物の検討

第1節 難波宮成立期における土地開発

1) はじめに

上町台地には「大坂(大阪)」という地名が示すように、起伏がきわめて多くある。難波宮や大坂城といった政治的拠点が建造されるには、こういった地形条件を時には利用して、時には窪みを整地して克服する必要があったであろう。近年の調査の増加によって上町台地北部の旧地形を知る手掛りや整地の痕跡が多く発見されてきている。本節では上町台地北端の難波宮期の谷を埋める整地を中心に検討し、難波の都市建造を考える一助としたい。

2) 旧地形の復元

i) 上町台地北端の概要

上町台地北端は台地の中でもっとも標高が高く、20mを超えるところもある。大阪在住の者なら誰もが知っているように、台地の西側と北側は急斜面であるのに対し、東斜面は緩やかである。これは上町台地が隆起する際の構造運動により西側に断層崖、北側に撓曲崖^{とうきよく}ができた後、縄文海進によって西側が、淀川によって北側が削り込まれたためである[土質工学会関西支部ほか1987：p.12、pp.18-19]。また、台地の西側には大阪湾の湾岸流により砂堆が形成され、さらにそこが陸化していく過程で潟が形成された[大阪市文化財協会1998b：pp.47-52]。一方、東側は河川によって沖積層の堆積が進み、豊臣氏大坂城惣構の東堀に利用された猫間川が流れていた。

ii) 地形復元の手順

地形復元ではまず、2003年12月までの発掘調査で明らかになった地山(上町層)上面の標高を基にし、調査の少ない地点では試掘立会やボーリングデータ[大阪城天守閣1984]、現地形も参考にして等高線を引いた。地山の標高については谷地形などの窪地の標高は有効であるが、削平が進んでいる高所の標高については正確ではないものの、起伏を明らかにするためにはある程度使用できる。等高線は2m毎の主曲線で作成し、部分的に1m毎の補助曲線を用いた。

iii) 明らかになった谷地形

こういった作業を通じて、いくつかの谷地形が存在することが明確になった。これらについては現在の地名を基にして図154のように命名した。以下は各谷地形の概要である。

a. 台地西斜面

釣鐘谷 谷町1丁目辺りを谷頭にして南西方向に延びる谷筋である。OS97-1次[大阪市文化財協会1999a]で確認され、OS87-133次調査[大阪市文化財協会2003a：pp.143-146]やOS90-51次

調査[大阪市文化財協会2003a：pp.133-142]ではこの支谷が確認されている。いずれでも谷底は確認できていない。なお、OS97-1次検出の谷地形については[積山洋2004]では北東に抜けるように図示されているが、支谷がこの谷の延長上に向って延びていることから、図154のように復元した。

本町谷 大阪城西外濠辺りから大手前3丁目を経て西に向って延びる谷筋で、小支谷がいくつもあ
る。谷頭は大手前谷と共通すると思われる。大阪府警本部建替えの調査で確認された谷底はTP+11
m以下であり、同じ敷地の地山がもっとも高い地点と8m近くの高差がある[大阪府文化財調査研
究センター2002]。ここでは谷底で飛鳥時代の遺物を含む自然堆積物が確認された。本町通と谷町筋

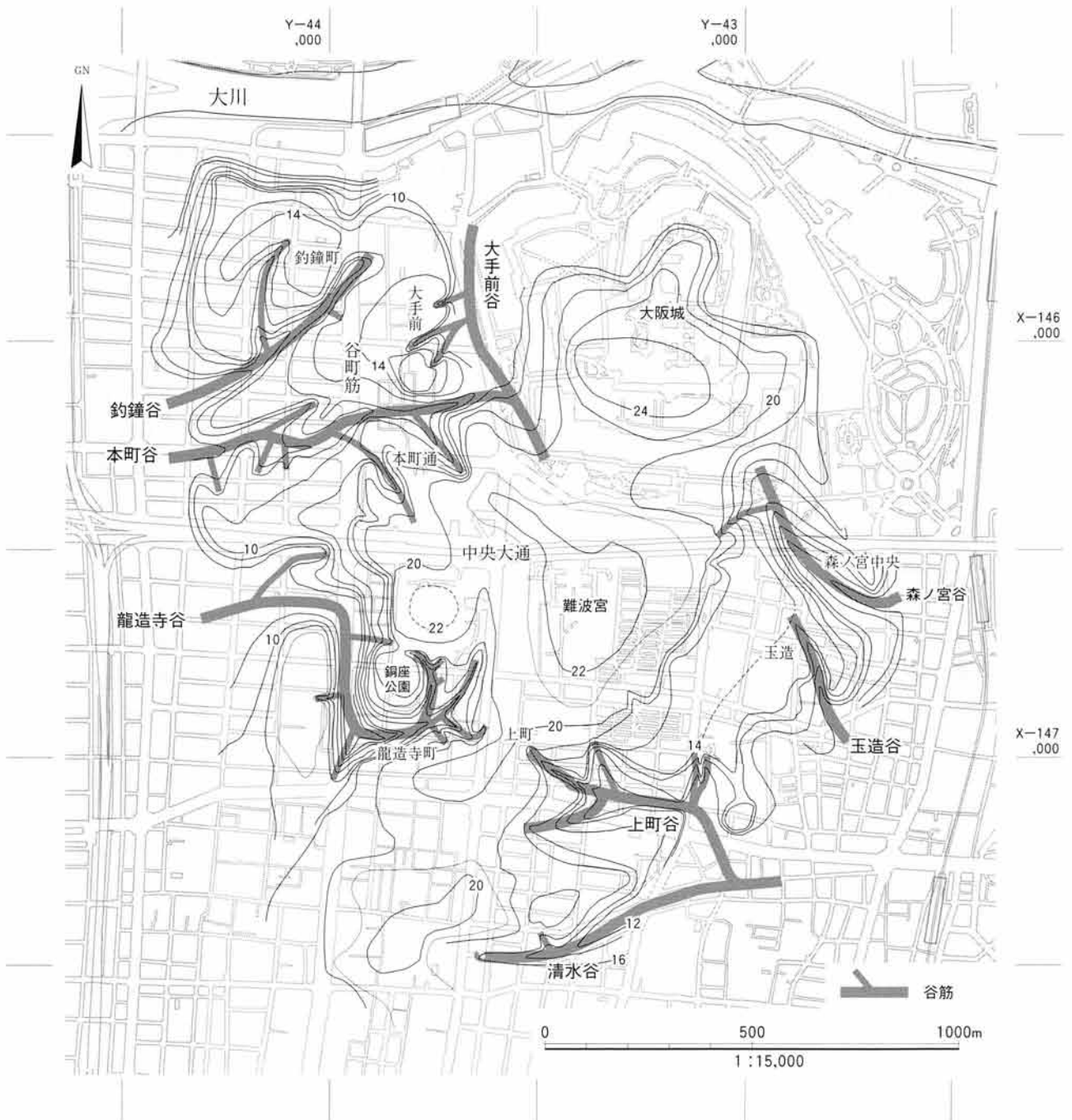


図154 上町台地北端の旧地形復元図

の交差点の南東にある東中学校敷地内では、同じ敷地の地山の最高位から6 m以上下がる谷が検出された[大阪市文化財協会2002b：pp.161-188]。幅は約30 mあり、TP+12 m以下は掘削していないため、地層は不明である。また、NW97-3次調査では同じ敷地の地山の最高位から約6 mまで掘削したものの地山は検出されなかった[大阪市文化財協会2000a]。



写真30 銅座公園東側の段差

龍造寺谷 国立大阪病院の南東に谷頭がある谷地形である。この谷筋は龍造寺町で西に曲が

り、いくつかの小支谷と合流し、さらに谷町筋で北に折れ、中央大通の手前で西に振れる。国立大阪病院内[大阪市文化財協会1984]やNW90-7次(第Ⅳ章第2節)、NW90-29次(同第3節)で検出された小支谷では地山を確認できているが、これらの谷が合流して幅が大きくなる龍造寺町では底を確認できていない。さらに、内久宝寺町や龍造寺町では現在でも谷地形の名残があり、2 m以上の段差が今も残っている個所も少なくない(写真30)。

谷町筋沿いでは東西に1個所ずつ小支谷が確認され、NW83-33次の西トレンチでは、ボーリング調査によってGL-8 m(≒TP+5 m)で地山が検出されているが、谷底はさらに西側にあると思われる。さらに、下流については南大江小学校敷地内のOS02-8次調査ではTP+2 m(GL-6.8 m)まで掘削したものの、地山を検出することはできなかった[小倉徹也ほか2003]。この調査ではTP+2.2 m以下で谷内の自然堆積物を確認できたが、それより上は盛土であった。

b. 台地東斜面

森ノ宮谷 現在の大阪城南外濠あたりから南東の森ノ宮中央1丁目辺りに向けて延びる谷筋である。旧日生球場内のMR98-2次調査では北西から南東に延びる谷地形が検出され[大阪市文化財協会1999b]、その南東のMR86-3次調査地で谷筋はやや北に振る[大阪市文化財協会2002b：pp.189-204]。中央大通の北側のNW71次調査では小支谷が検出された[八木1981]。また、旧日生球場の東隣のMR3・4次調査では西が高く、東が低くなる傾斜面を検出しており[難波宮址顕彰会1978]、これは谷の北岸の台地裾に当る。なお、MR98-2次調査では谷の最深部を検出できなかったが、TP+3.5 mで植物遺体を含む水成層を確認し、その上に弥生時代中期の遺物包含層が残っていた。

玉造谷 玉造2丁目の調査(NW88-14次)で見つかった、北西から南東に延びる谷筋である[大阪市文化財協会2002b：pp.205-218]。幅は20 m程度で最下層は厚さ2 m近くある弥生時代の水成層である。この北西約100 mの地点であるOS89-89次調査地でも大きな落込みが見つかっており(第Ⅱ章第3節)、これは谷頭に当ると思われる。

上町谷 上町1丁目辺りからいくつかの小支谷が合流して東に延びる。NW81-30次調査では最深部で古墳時代の遺物が確認され、その上が前期難波宮造営前に整地されているが[大阪市文化財協会1982、本書第Ⅱ章第5節の「まとめ」参照]、多くの地点では谷底を確認できていない。NW148次調

査地では整地層の下位で縄文時代晩期の土器や石器が出土する地層が残っていた[松尾信裕ほか1981]。一方、窪地内に近世の遺物を含む粘土層が見つかったりしている地点もあり、比較的最近まで窪みが残っていたと考えられる。

清水谷 上本町1丁目辺りから西から東に延びる谷筋で、豊臣氏大坂城の惣構南堀に利用され、現在もその窪みを残している。OS88-118次調査では北側が低くなる傾斜面を確認し、この谷の南肩に当たるとされる[大阪市文化財協会2002b: pp.205-218]。ここの最下層である粗粒砂質粘土の水成層から難波Ⅲ中～新段階の遺物が出土した。また、清水谷公園に位置するNS00-19次調査では南東が低くなる落込みを検出した[佐藤隆2002]。ここでは最下位の水成層から7世紀後半の須恵器杯G蓋が出土し、その上を豊臣期の整地層が覆うことによって、平坦になっている。この整地が惣構の造成による可能性が高いことから、豊臣前期まで谷の窪みが残っていて、谷の最深部は惣構堀に利用されたのであろう。

また、東方官衙地域の建物群(第Ⅱ章第2節)の約200m南で、朝堂院東回廊から約200m東にあるNW02-13次調査では、周囲との高低差が7m以上ある深い落込みを検出した。ここから多量の本屑が出土し、その中に木簡が含まれていた[大阪市文化財協会2003b]。この調査は難波宮跡の範囲確認のための試掘調査であったため、詳細は明らかにすることはできなかった。ただ、断面を見るかぎり、整地されたような状況は見受けられなかったため、大きな谷地形の窪みが宮殿と併存したことになる。

c. 台地北斜面

大手前谷 大阪城の西外濠に沿って南から北に延びる谷筋である。発掘調査では大阪府庁敷地内での北東方向の小支谷[大阪府文化財センター2002]や、大手前高校敷地内の西から東に延びる小支谷(註1)が検出されて、大阪城公園の大手前土橋では北が低くなる急斜面が検出されている[大阪市文化財協会2002b]。ただ、調査地点が少ないため、不明瞭な点が多い。なお、[角田栄1954]では大手前2・3丁目の中央を南から北に抜ける「埋没水路」を想定しているが、この辺りは地山が高く、[木原克司1984]の案が本節の考えに近い。

3) 整地の時期と規模

ここで古代において埋めて整地された谷地形について取り上げる。確認された地点は図155のようになる。整地の時期は、整地層のもっとも新しい出土遺物で決めた(註2)。以下では台地西斜面に延びる釣鐘谷・本町谷・龍造寺谷と、東斜面に延びる森ノ宮谷・玉造谷・上町谷、北斜面の大手前谷に分けて記述した。

i) 台地西斜面

釣鐘谷では小支谷の谷頭や斜面が整地されていた。OS87-66次調査では南西隅で落込みを検出し、難波Ⅲ中段階の整地で埋められていた[大阪市文化財協会2003a: pp.129-132]。OS87-133次調査では厚さ200cm以上の整地層を検出し、断面観察で柱穴が見つかった[大阪市文化財協会2003a: pp.143-146]。整地層からは図156のような土師器杯C1-3、脚台付杯4、甕5、須恵器杯H8・9、同蓋6・7が出土したことから、難波Ⅲ中段階に位置づけられる(註3)。また、OS90-51次調査では難波

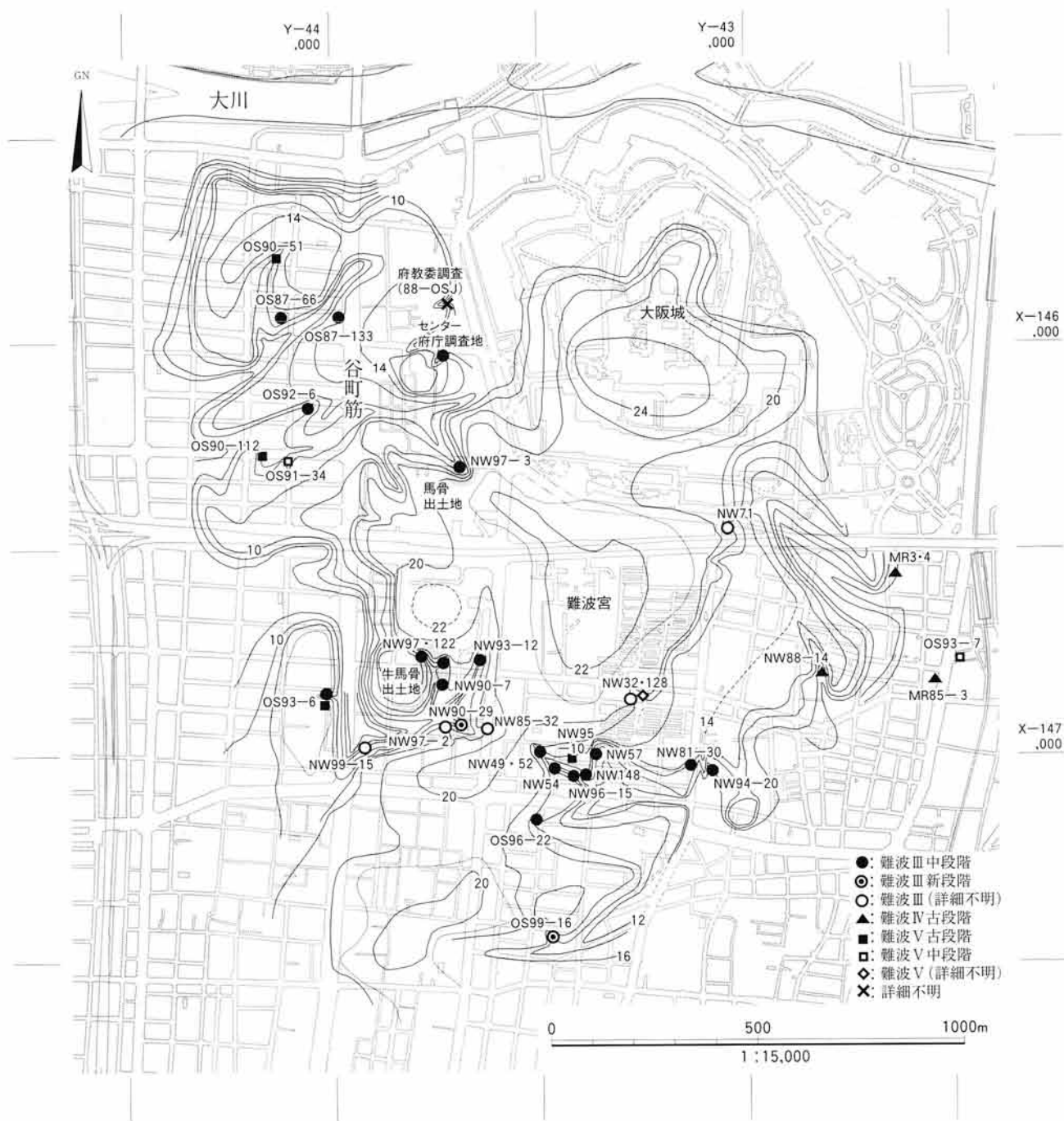


図155 整地された地点とその時期

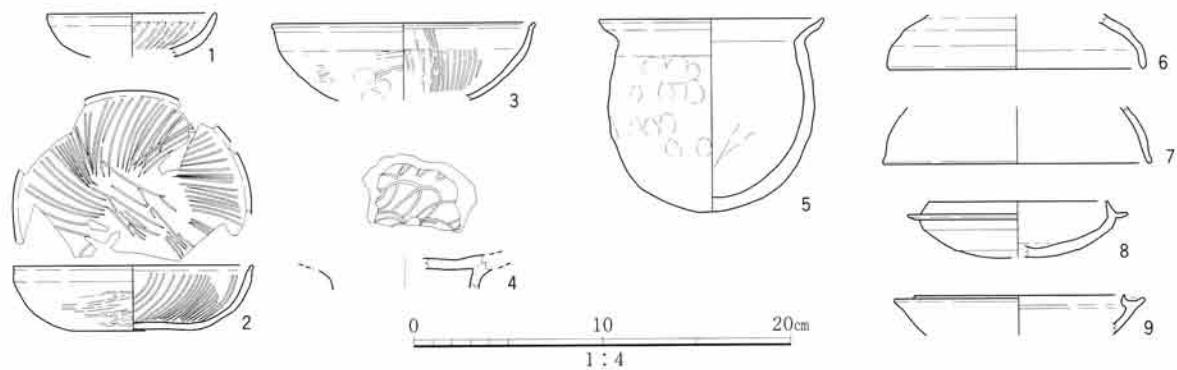


図156 OS87-133次整地層出土遺物

V古段階の整地層が見つかったが、厚さは不明である[大阪市文化財協会2003a：pp.133-142]。

本町谷では北側の小支谷で1個所、南側で3個所の整地を確認した。北側ではOS92-6次調査で厚さ2m近くの整地層が検出され、難波Ⅲ中段階の遺物が出土した[大阪市文化財協会2003a：pp.223-242]。南側のOS90-112次では厚さ約150cmの難波V古段階の整地層が、OS91-34次では厚さが250cm以上ある難波V中段階の整地層が検出された[大阪市文化財協会2003a：pp.263-274]。NW97-3次調査では幅20mあまりの谷頭を難波Ⅲ中段階に厚さ2m近くある整地層で埋め、水利施設を造っていた[大阪市文化財協会2000a]。整地層からはウマなどの動物骨が出土した[樽野博幸2000]。

龍造寺谷では、いくつかの小支谷で整地層を確認した。まず、上流の龍造寺町一帯では、幅が10-20mの小支谷の谷頭が厚さ200cm以上の整地層で埋められていた(第IV章第1-3節参照)。整地層は黄褐色の包含層を起源とする偽礫や地山の偽礫で構成される。NW90-7次やNW97・122次調査では、整地層の下面で大量のウシ・ウマの骨が出土し、NW90-7次ではウシ：ウマは大体8：3であった[大阪市文化財協会1984：pp.54-55、本書第V章4節]。また、龍造寺谷が北に折れる地点に位置するNW99-15次調査地では、難波Ⅲ中-新段階に斜面を厚さ20cm前後の薄い整地層で整地し、その後堀と思われる柱列や鉄鍛冶炉が造られていた[辻美紀2002]。

谷町筋の西側においてはOS93-6次で2時期の整地層が見つかった。図157に示したように下層からは土師器杯C1、杯B2、鉢3、甕4、須恵器杯H蓋5-7、杯G8-10、高杯11、甕12が出土し、上

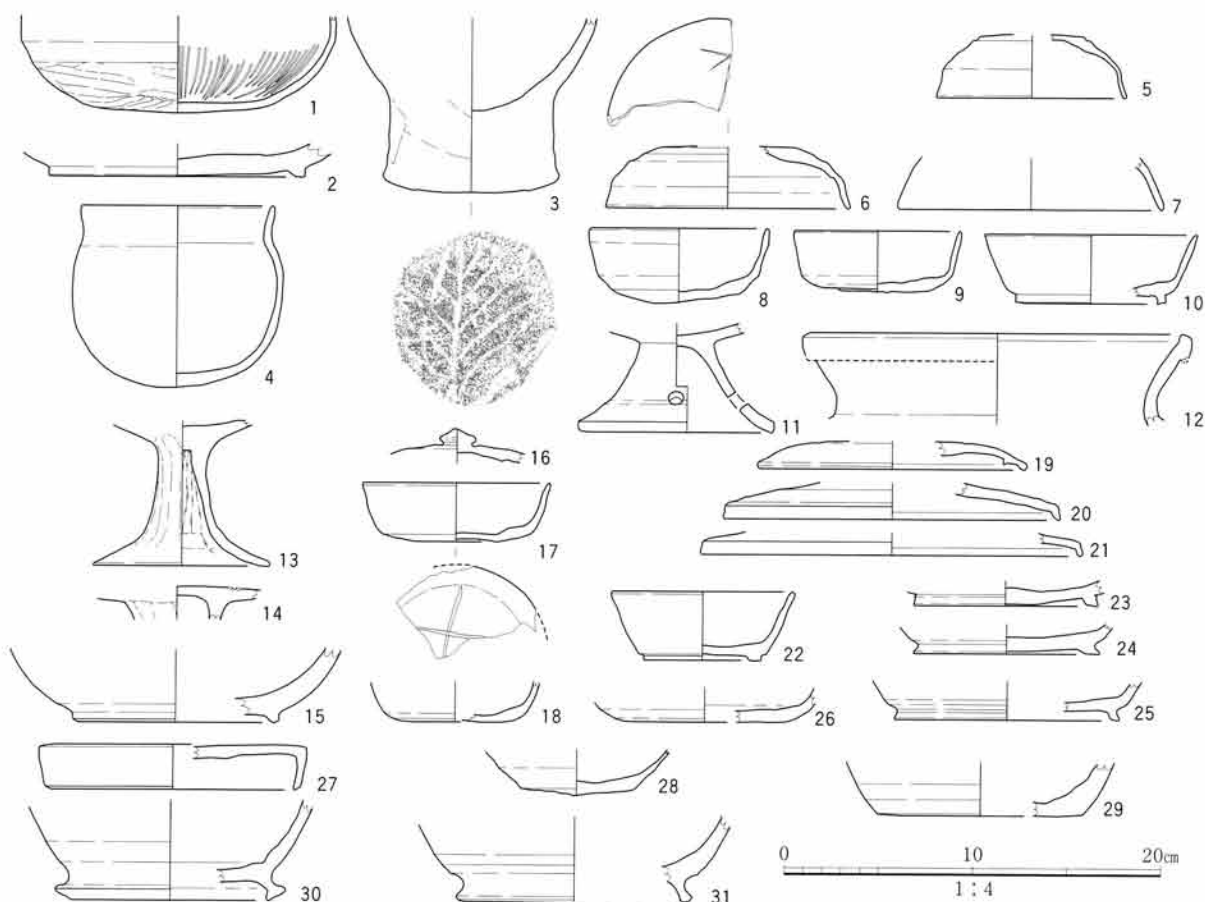


図157 OS93-6次整地層出土土師器・須恵器
下層(1-12)、上層(13-31)

層からは土師器高杯13・14、鉢15、須恵器杯G 17・18、同蓋16、杯B 22～25、同蓋19～21、杯A 26、壺28～31、同蓋27が出土した(註4)。なお、下層は混入の可能性のある2・10を除けば、難波Ⅲ中段階である。上層は杯Bやその蓋の形態から難波Ⅴ古段階に位置づけられる。

さらに、下層からは基部が完全に残っている円筒埴輪が大量に出土し、図158にその一部を掲載した。いずれもタテハケが施され、タガが低いので川西編年のⅤ期に当る[川西宏幸1978]。同じ時期の埴輪は当地から約100m南のNW99-15次調査でも出土しており[辻2002]、隣接するNW136次ではヨコハケが施されたやや古めの円筒埴輪が出土している[大阪市文化財協会1981a: pp.115-116]。龍造寺谷が北へ折れる一帯に5世紀末～6世紀初頭 of 古墳群が存在して、整地によって破壊されたのであろう。

ii) 台地東斜面

森ノ宮谷では整地は確認されていないが、北岸の台地の裾にあたるMR 3・4次調査で、最大層厚が100cm程度の整地層が見つかっている[難波宮址顕彰会1978]。この整地層は報告書でⅢ層と呼ばれているもので、土師器杯Aや径高指数が26の杯Cが出土していることから、難波Ⅳ古段階に位置づけられる。

玉造谷ではNW88-14次調査において、自然堆積である程度埋まった幅30mあまりの窪みを埋める整地層が確認された[大阪市文化財協会2002b: pp.205-218]。時期は下部が難波Ⅳ古段階、上部が同新段階である。それぞれ厚さ50cmあまりで、いずれの上面でも掘立柱建物が検出された。

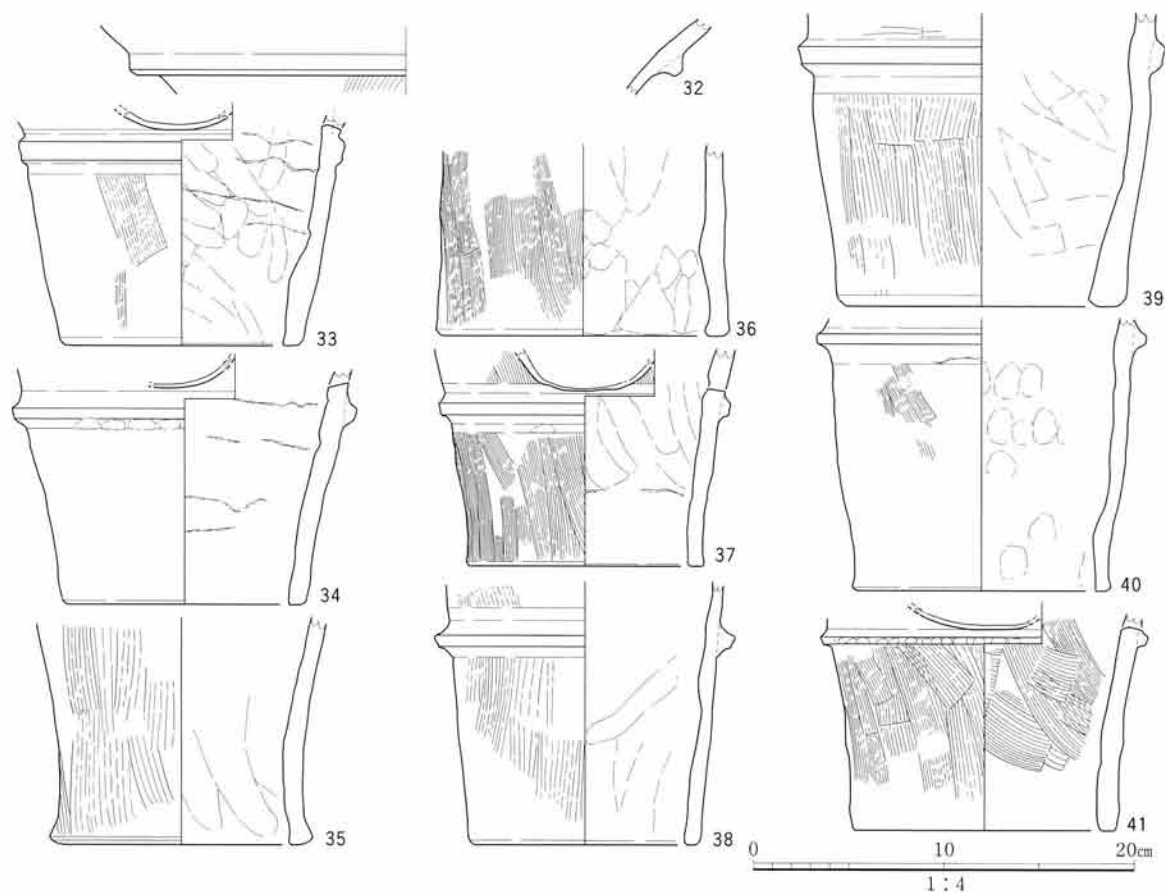


図158 OS93-6次整地層下層出土埴輪

森ノ宮谷や玉造谷の東側の低地部では難波Ⅳ古段階(MR85-3次)や難波Ⅴ中段階(OS93-7次)の厚さ30~50cm程度の整地層が検出された[大阪市文化財協会2002b: pp.189-204]。前者の上面では道路側溝と考えられる溝が検出され[積山1999]、後者の上面では木柵のある井戸を検出した。

上町谷では多くの地点で小支谷を埋める整地層が確認されており、いずれも時期は難波Ⅲ中段階である。NW96-15次では最大層厚130cm[大阪市文化財協会1999c]、NW49・52次では厚さ200cm以上の整地層で小支谷を埋めて整地し、後者の上面では掘立柱建物を検出した(第Ⅲ章第4節の「まとめ」参照)。また、NW81-30次では厚さ200cmを超える整地層によって小支谷が埋められ、その上面で南北方向の溝を検出した(第Ⅱ章第5節の「まとめ」参照)。なお、NW95-10次では難波Ⅴ古段階の遺物が整地層から出土したとされているが、上記のように周辺の整地層はいずれも難波Ⅲ中段階であることから、遺構の埋土である可能性がある(第Ⅲ章第4節)。

清水谷ではOS99-16次調査で小支谷を埋める整地層が検出された[大阪市文化財協会2002a]。この整地層は厚さ約200cmで、多量の包含層と少量の地山の偽礫で埋められていた。もっとも新しい出土遺物は難波Ⅲ新段階であったが、遺物全体としては中段階の様相を多分に残していた[寺井誠2003](註5)。さらに整地層上面では掘立柱建物と、さらにその建物の柱穴を切る難波Ⅲ新段階の土壌を検出した。また、清水谷北岸の高所(OS92-7次調査地)では難波Ⅲ中段階に建物群が廃絶し、その上は厚さ20cm程度の整地層で覆われていた[大阪市文化財協会2002b: pp.219-233]。

上記以外でもNW32・128次調査において前期・後期難波宮期の整地層が見つかったが、詳細な時期はわからない[難波宮址顕彰会1969b、大阪市文化財協会1981a: pp.44-45]。

iii) 台地北斜面

大手前谷では大阪府庁建替えに伴う調査(2B調査区)や府立大手前高校の調査で、小支谷を埋める整地層が検出された。前者は厚さ200cm近くあり、整地層の中には多量の難波Ⅲ中段階の遺物や新羅土器緑釉蓋が含まれていた[大阪府文化財センター2002]。

4) まとめ

以上、谷を埋める各地点の整地層とその時期を概観してきた。ほとんどの整地が幅20m以下の小支谷を埋める程度のものであり、整地層を構成する埋土に包含層の偽礫が多いことから、当時の地表を削ることによって埋土を確保したと考えられる。よって、整地のための土量を確保するには限界があり(註6)、豊臣氏大坂城三ノ丸の大規模な造成とは対称的である[平田洋司2000]。加えて、より幅が広がる本町谷や清水谷の本筋の部分で古代の遺物を含む自然堆積層が確認されていることは、難波宮期でも谷の窪みが残されていたことになり、当時の土木技術の限界を示している。その一方で、宮殿が選地された法円坂1丁目一帯(難波宮跡公園とその周辺)は、北・西・南に谷地形が延び、東側は斜面地であり、上町台地北端がもっとも広い平坦面を確保できる場所である。当地に宮殿が選地されたのは十分頷ける。

難波Ⅲ中段階では、宮殿の北西側の釣鐘谷・本町谷、西側の龍造寺谷、南側の上町谷のそれぞれの小支谷で整地が行われた。さらに難波Ⅲ新段階では、龍造寺谷の南岸(NW90-29次調査地)や清水谷

の小支谷が埋められており、宮殿から離れた地点は若干遅れて整地されたと思われる。

整地箇所は上町谷でもっとも多く確認されている。これは調査密度が濃いというだけでなく、前期難波宮「朱雀門」(宮城南門)の南側で重点的に整地されたことも関係する。また、上町谷から清水谷北岸の高所にかけて、宮殿造営前に一旦建物群が廃絶し、その後正方位の建物が建てられているのは、一帯を再編し、宮殿南方に官人などの居住地を造成することを目指したと考えられる[積山2004]。ただ、釣鐘谷の小支谷(OS87-133次)でも整地後に建物が造られており、宮殿南方以外でも宮殿造営とともに造られた建物が散在していたのであろう。

また、この時期の整地で古墳を破壊していることも明瞭になった。OS93-6次調査は古墳破壊のもっとも典型的な例である。基部がよく残っている円筒埴輪が多いことから、埴輪が並んだ墳丘を完全に破壊して、その排土で谷の窪みを埋めたことが考えられる。このほか、「朱雀門」南側のNW57次[中尾芳治1974]や大手前3丁目の大阪府庁調査地[大阪府文化財センター2002]では難波Ⅲ中段階の整地層から円筒埴輪が出土し、大阪府警調査地では6世紀末頃に位置づけられる陶棺の破片が出土した[大阪府文化財調査研究センター2002]。こういった状況は上町台地北端一帯に古墳群が広がっていて、前期難波宮造営時に破壊されたことを示唆する。まさに、『日本書紀』の「(白雉元年=650年)冬十月に、宮の地に入れむが為に、丘墓を壊られたるひと及び、遷されたる人には、物賜ふこと、各差有り」という記述と一致する。

さらに、宮殿西側では谷を埋める前に多量のウシ・ウマの骨が投棄されていた。ウシが多いことについては、古代では異例であり、宮殿造営の労役で使用された後、宮殿近隣の谷を埋める直前に屠殺されたことを示唆するのであろう(第V章第4節)。

なお、上町谷や清水谷一帯では、非常に高い密度で整地されたにもかかわらず、この時期以後に引き続き居住地として利用された状況は看取できない。これは『日本書紀』に記されているように、白雉4(653)年に中大兄皇子が飛鳥に帰還したり、翌年に孝徳天皇が死去したりするなどによって、整備が断絶したことを反映しているのであろう[寺井誠2003、積山2004]。

一方、難波Ⅳの段階については難波Ⅲと異なり、森ノ宮谷や玉造谷、そして台地東側の沖積地で整地が行われた。開発の重点が東側に移ったことを示している(註7)。また、難波Ⅴ古・中段階の整地層は、釣鐘谷や本町谷のより西側の小支谷や台地東側の低地で見つかっている程度で、遺構もこれらの谷の近隣の高所で多く見つかっている。以上の結果は、整地が前期より後期が多いと考える木原克司氏の見解と異なる(註8)。

このように見ていくと、難波Ⅲ中段階の整地が非常に広範囲(南北1.5km、東西1km)に行われていたことがわかる。この時期はまさに孝徳朝(645-654年)の段階であり[佐藤2000]、広範囲な造成の背景には、評制が成立し、それに基づいて大規模な物資・労働力の徴発が可能になったことが考えられる[吉川真司1997]。よって、上町台地北端の改変は孝徳朝以前では見られなかった巨大都市空間の建造を目指したもので、国家的大事業と位置づけられる。

以上、旧地形復元を基にして、孝徳朝とそれ以後の土地開発について論じた。旧地形復元図や整地箇所・時期は、今後の調査で新知見が得られることによって、変更の必要が生じるかもしれないが、本

節で行った作業を土台として古代難波の都市開発の議論に貢献できれば幸いである。(寺井)

註)

- (1) 大手前高校建替えに伴う発掘調査は1988年度に大阪府教育委員会によって行われたもので、略号は88-OSJである。地山の起伏については当時の調査担当者である佐久間貴士氏に御教示いただいた。当地は豊臣期の段階では西側が低くなっているが、これは大規模に盛土して整地したために、地山上面の傾きと逆になったそうである。なお、層序の概要は[田中清美1989]で示されている。
- (2) この前提自体に疑問を挟む向きもあるかもしれないが、NW97-3次の石組溝を造るための整地層[大阪市文化財協会2000a]や本書で報告したNW90-7次の整地層から難波Ⅲ中段階の土器が多量に出土した事例や(第Ⅳ章第2節)、OS99-16次調査で検出した多量の難波Ⅲ中段階と少量の新段階の土器を含む整地層の上で、新段階の土壌を検出した事例[寺井2003]などから、整地層に含まれる遺物は整地の時期とそれほど離れていないとして支障はないと考える。
- (3) OS87-133次調査の内容は本来は『大坂城跡』Ⅶで報告すべきものであったが、諸般の事情で詳細な報告ができなかった。そのため、本節の紙面を借りて出土遺物を報告することにした。報告では整地層の時期を難波Ⅲ中～新段階と幅を持たせた表現をしたが、今回の再整理の結果、新段階に下りうる要素は認められないので、中段階に位置づけることにした。
- (4) OS93-6次調査の内容は本来は『大坂城跡』Ⅶで報告すべきものであったが、諸般の事情で詳細な報告ができなかった。整地層の厚さは記録がないため、わからない。この調査はきわめて急を要する調査であったため、取り上げに厳密性を欠けるかもしれないが、遺物のまとまり方から、下層が難波Ⅲ中段階、上層が難波Ⅴ古段階という位置づけで支障ないと思われる。
- (5) 土師器杯Aが含まれていたということで難波Ⅲ新段階に位置づけたが、遺物の多くが中段階の様相を残す過渡的段階であるということを確認しておく。
- (6) 土量が少ないということは、谷頭や斜面地の一部を埋めた後、さらに大きな谷地形の底とは2 m以上の高低差が生じることになる。整地された平坦面の末端を法面をつけたのか、階段状にしたのか、それとも石垣を築いて克服したのか、今のところ不明であり、今後の調査で注意を払う必要がある。なお、福岡市の鴻臚館跡では7世紀後半の整地では2 m以上の段差を処理するために、石垣を築いて平坦面を確保し、掘立柱建物を造っていた。これについて、福岡市教育委員会の大庭康時氏よりご教示頂いた。
- (7) 本節で十分論じることができなかったが、難波Ⅳ古段階の整地は難波Ⅲ中・新段階とは違う個所の整地に重点が置かれているようで、[積山2000]で行っているように、台地の開発を論じるには清水谷よりもさらに南側も検討対象に含めなければならない。なお、[積山2000]では天王寺区真田山町所在の宰相山遺跡などの調査成果を基に、この頃に900尺の方格地割による整備が着手されたと考えている。
- (8) 1993年6月に行われた座談会で木原氏が「(前略)これからすると前期の整地層といわれているけれども、大部分は後期の整地層と考えられます。」と発言したことを指す[直木孝次郎・中尾2003：p.151]。木原氏の指摘するように後期の整地層は存在するのは確かであるが、前期ほど多くないのは本文で指摘したとおりである。例えば、木原氏が後期としているNW97・122次の谷地形では中世とされるⅤ層から須恵器杯Bが出土しているのみで、整地層とされるⅦ層は難波Ⅲ中段階の遺物で占められる[大阪市文化財協会1984]。また、NW90-7次の整地層についても木原氏は後期としているが、第Ⅳ章第2節や本節の註2でも記しているように、遺物はすべて難波Ⅲ中段階に収まることから、前期難波宮造営に伴った整地である。なお、中尾氏は本節と同じく前期難波宮造営に伴う整地が多いと指摘している[中尾1992]。

第2節 古代難波の外来遺物

1) はじめに

難波は古代国家日本の対外交渉の窓口として機能していた。文献によれば7世紀代に難波津に百済や新羅の使節が何度も訪れたことが記されていて(表16)、それを示すかのごとく、新羅・百済土器が多く出土している。本書でも前期難波宮造営前の遺構や整地層に伴うこれらの土器を報告したが、本節ではそのほかの例も含めて検討し、その歴史的意義について若干の展望を示してみた。

2) 外来遺物の概要

i) 新羅土器

日本出土の新羅土器については江浦洋氏によって詳細な研究が行われている[江浦洋1988・1994]。それによると近畿地方では宮都関係の遺跡に多く、器種に長頸壺が多く見られる点については、「優れた機能性と装飾性を兼備した土器として選ばれ、新羅使や遣新羅使にともなう朝貢品・交易品中の薬物・顔料などの容器として搬入された」という考えが示されている。

表14は[江浦1994]の表1に近年の成果を追加したもので、四天王寺例を含めると15点の例があり、飛鳥地域に並ぶ多さである(図159・160)。なお、表14での印花文陶器の文様の名称は[宮川禎一1988]に倣った。

一番古く位置づけられる印花文陶器はNW97-3次調査出土の長頸壺Aで、7世紀前葉に位置づけられる。ヘラ描きで三角形文や円弧文が施されている。Bは遊離資料であるが、同様の施文方法であり、Aと同じく古い特徴を有する。C・Dは7世紀前葉を下限とする地層から出土しているが、今回取り上げている新羅土器に印花文陶器が多い中でやや異質である。Cは慶尚南道陝川郡の鳳溪里第197

表14 難波出土の新羅土器一覧

	地点(次数)	器種	文様構成	共伴遺物の下限	遺構・地層	文献-図-番号
A	NW97-3	長頸壺	三角形(ヘ)+水滴形(ヘ)+円弧(ヘ)	7世紀前葉	第8a層	大文協2000a-36-181
B	NW97-3	短頸壺	三角形文(ヘ)+円弧文(ス)		(遊離資料)	大文協2000a-36-180
C	NW90-29	鉢	円弧文(ス)	7世紀前葉	第8層	本書第IV章第3節-9
D	NW122	広口壺		7世紀前葉	Ⅷ層	大文協1984-24-184
E	四天王寺	長頸壺	多弁花文(ス)	7世紀	食堂跡整地層	中村浩1989
F	NW93-5	長頸壺	三角形文(ス)+円弧文(ス)	7世紀前-中葉	SK801	本書第III章第3節-49
G	NW83-20	広口壺	三角形文(ス)+円弧文(ス)		(近世の土壌)	大阪市教委・大文協1985
H	OS90-50	長頸壺	円弧文(ス)+三角形文(ス)	7世紀中葉	土壌SK502	大文協2003a-96-11
I	OS90-50	緑釉碗	水滴形文(ス)+多弁花文?(ス)	7世紀中葉	土壌SK502	大文協2003a-写真5-a
J	OS90-50	長頸壺	円弧文(ス)	7世紀中葉	SB506に切られるビット	大文協2003a
K	NW33-34	長頸壺	三角形文(ヘ)+円弧文(ス)	(7世紀中葉)	前期内裏南門の柱穴抜き穴	大文協1995-32-2
L	大阪府庁舎	緑釉円面碗蓋	直線文(櫛)+円弧文(ス)	7世紀中葉	谷を埋める整地層	府センター2002-377-443
M	OS92-74	長頸壺	円弧文(ス)	8世紀前葉	Ⅲ8B層	大文協2002b-35-204
O	OS91-34	瓶		8世紀後葉	SX502	大文協2003a-267-98
P	OS99-72	長頸壺	円弧文(ス)	8世紀末	SD801	辻2002b-6-20

(註) 文様構成で「ヘ」としたものは「ヘラ描き」、「櫛」としたものは「櫛描き」、「ス」は「スタンプ」であることを示す。

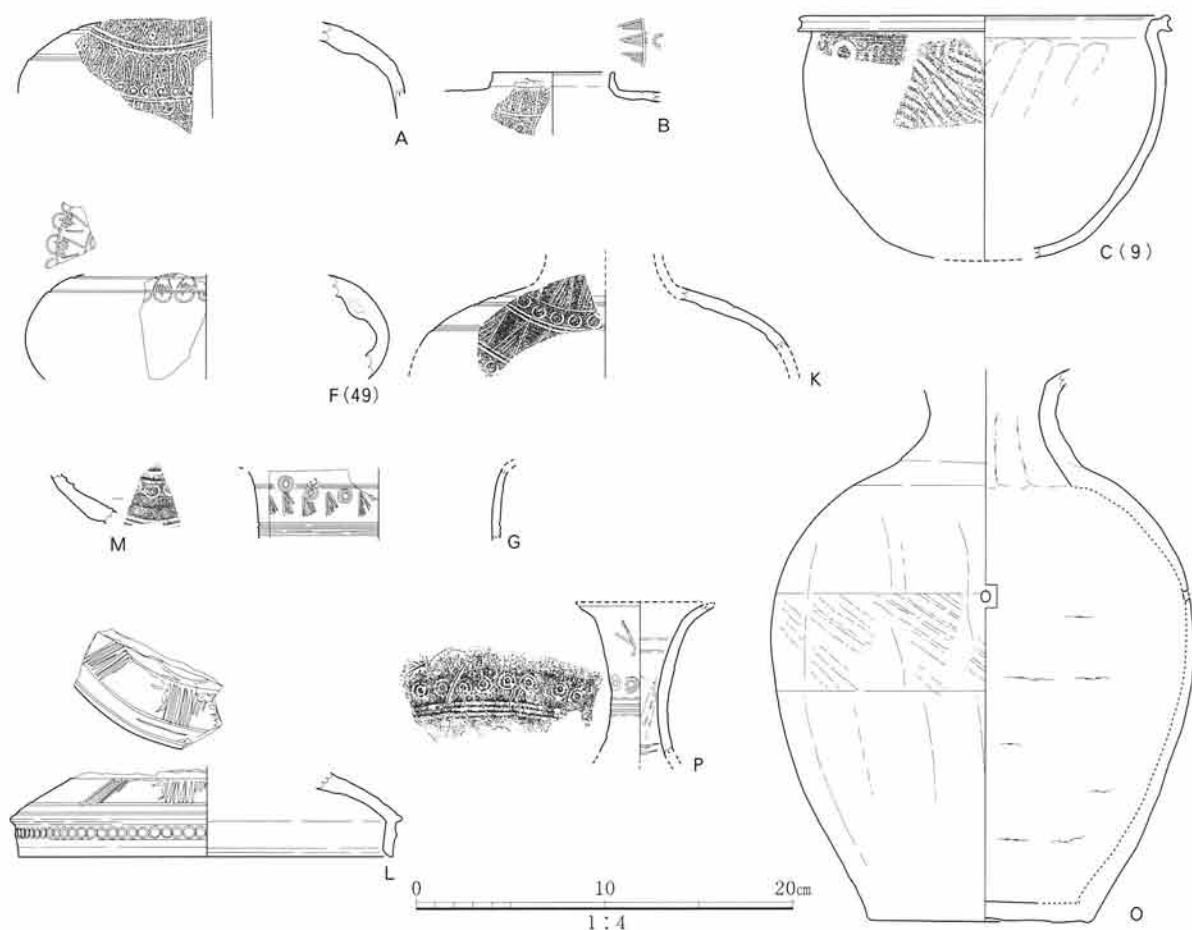


図159 難波出土の新羅土器

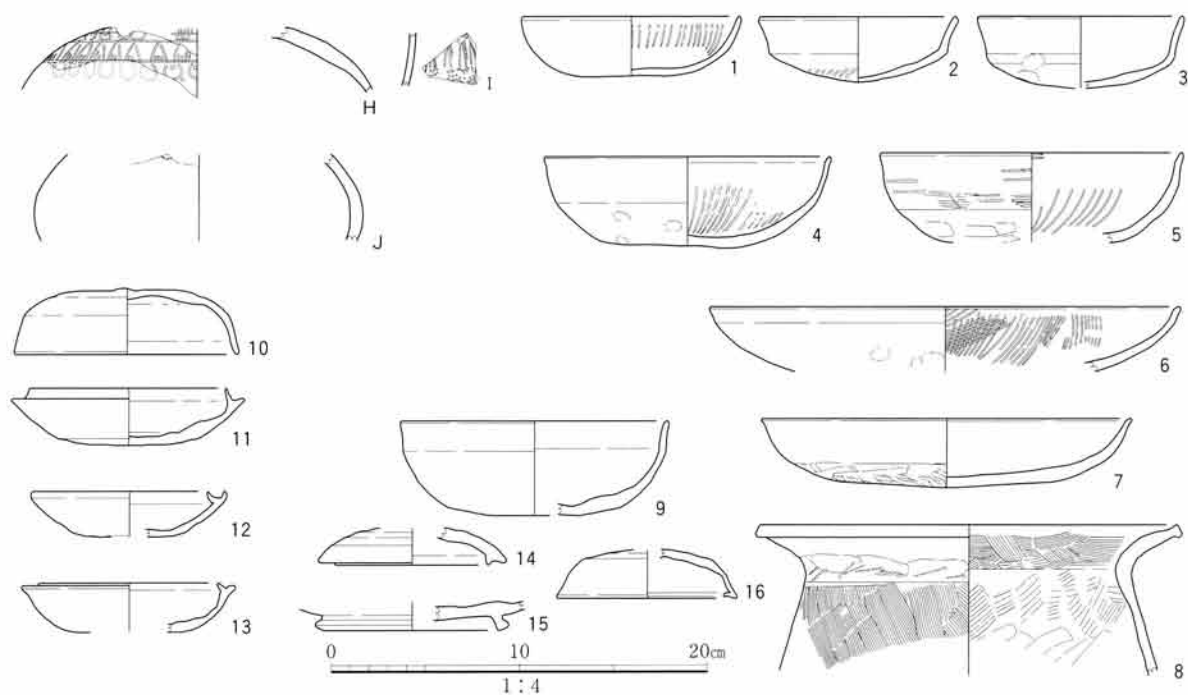


図160 OS90-50次SK502出土の新羅土器とその共伴遺物(Jは別遺構出土)

号墳に、Dは蔚山市の華山里古墳群に類例があり、いずれの類例も6世紀後半に位置づけられる[田中清美1993]。Fは第三章第3節の49である。出土遺構の下限は難波Ⅲ中段階であるものの、古段階の資料が多く出土しているため、この時期に属する可能性もある。

続く難波Ⅲ中段階の例は、点数としてはもっとも多い。Hは緑釉碗のIや土師器杯C1・4・5、杯2・3、皿C6・7、甕8、須恵器杯H11～13、同蓋10、杯G蓋14、杯B15、蓋16、碗9など一括して出土した(註1)。また、Jは[大阪市文化財協会2003a]で報告から漏れたもので、円弧文の一部がわずかに残っている。Kは1～2条の沈線で区画し、ヘラ描きの三角形文とスタンプ円弧文を交互に施している。前期難波宮内裏南門の柱穴採取穴から出土しているが、本来は前期難波宮造営に伴う整地層かそれ以前の包含層に伴っていたと思われる。Lは蓋の天井部に櫛描直線文が、側面に円形スタンプ文が施されている。

統一新羅段階に並行するものとしてはM～Pがある。ただ、Mについては難波Ⅲ～Ⅳの遺物を多く含む地層から出土していることから、遊離資料である可能性も残る。Pは形態は8世紀以降の新しい様相を示すものの、頸部に凹線とスタンプ円弧文が施されるという古い様相が残る[辻美紀2002b]。また、平底の瓶Oは難波Ⅴ中段階(8世紀後葉)の土器とともに出土した[積山洋1994、大阪市文化財協会2003a: pp.263–274]。口縁部は欠損しており、残存高29.5cm、最大径22.5cmある。なで肩で、体部には平行タタキが施された後、ヨコナデが施されている。当時の日本にはない器種であるため、統一新羅代に類例が求められると思われるが、新羅地域での類例は知りえない。

ii) 百済土器

新羅土器に比べて百済土器の日本での出土が確認されたことはこれまで少なかったこともあり、本書の第四章第2節で報告したNW90-7次調査出土資料は非常に重要なものと考えられる。瓶については後述するとして、そのほかの資料について類例を挙げてみよう(表14および図161)。

まず、b(第四章第2節-243)は鐔の部分である。外縁径が約19cmあり、やや上がり気味に伸びる。百済土器の中では、碗の縁に耳杯のような鐔が取り付く鐔付土器(註2)に類似するが、以下で記すように相違点も多い。よって、確信的ではないものの問題提起も含めてここで挙げることにした。

鐔付土器は扶餘郡やその周辺、特に泗沘時代(註3)の百済王宮と推定される忠清南道扶餘郡の官北里遺跡[忠南大学校博物館1999]や、その約40km南に位置する全羅北道益山市の王宮里遺跡[国立扶餘文化財研究所2002]で大量に出土している。報告書で見るとかぎり鐔の外縁の直径は20cm前後であり、鐔の端部は平坦面をもつものと丸みがあるものの両方がある。また、鐔は水平と斜め上に伸びるものの2種あり、後者が後出する可能性が示唆されているが[金鍾萬2001]、現在までに見つかっている個体数も少ない上に、水平のものと共伴して出土していることから、少なくとも消費地では共存したといえよう。なお、色調・焼成は灰色軟質のものが多いとされている[金鍾萬2002]。

bは鐔の直径が官北里や王宮里遺跡の例と近く、焼成・色調も共通する。ただ、bはこれらの例に比べ鐔が厚く、体部に平行タタキが施されている。平行タタキが施された鐔付土器は全羅南道羅州市の伏岩里2号墳周溝で出土しており[全南大学校博物館ほか1999]、百済中央でなく地方の特徴になるのかもしれない。

c(同248)やOS92-74次調査で出土したfは体部に縦方向の平行タタキが施され、底部が直径12～15cmあまりある平底の土器で、焼成は還元焰焼成硬質である。このような平底の器形の土器は7世紀の須恵器ではなく、新羅の土器にもあまり見られない一方で、百済では平底の器種が中～大型品に多くある。底部の直径や焼成・色調が近いことから、中型の外反口縁壺(註4)に類例が求められる[金鍾萬2001]。なお、同じ大型の平底でも大形平底鉢(百済土器で「자배기(チャベギ)」と呼ばれるもの)は表面が黒色で、破断面が黄灰色の軟質焼成のものが多いことから、本例とは異なる。

d・e(同116・117)は凹んだ底部を有する。内面に底部を凹ませた際の皺が残っており、製作工程は不明であるものの、この凹みは焼け歪みではない。こういった形態は須恵器では見られず、韓国でしばしば見られる。百濟土器とは即断できないが、a～cと同じ調査地で出土しているという点からこ

表15 難波出土の百濟土器一覽

	地点(次数)	器 種	共伴遺物の下限	遺構・地層	文献－図－番号
a	NW90-7	瓶	7世紀中葉	第7b2層	本書第IV章第2節-114
b	NW90-7	中型壺	7世紀中葉	第7b1層	本書第IV章第2節-248
c	NW90-7	鐔付土器?	7世紀中葉	第7b1層	本書第IV章第2節-243
d	NW90-7	甕もしくは壺(凹んだ底部)	7世紀中葉	第7b2層	本書第IV章第2節-116
e	NW90-7	甕もしくは壺(凹んだ底部)	7世紀中葉	第7b2層	本書第IV章第2節-117
f	OS92-74	中型壺	8世紀前葉	Ⅲ8B層	大文協2002b-34-182

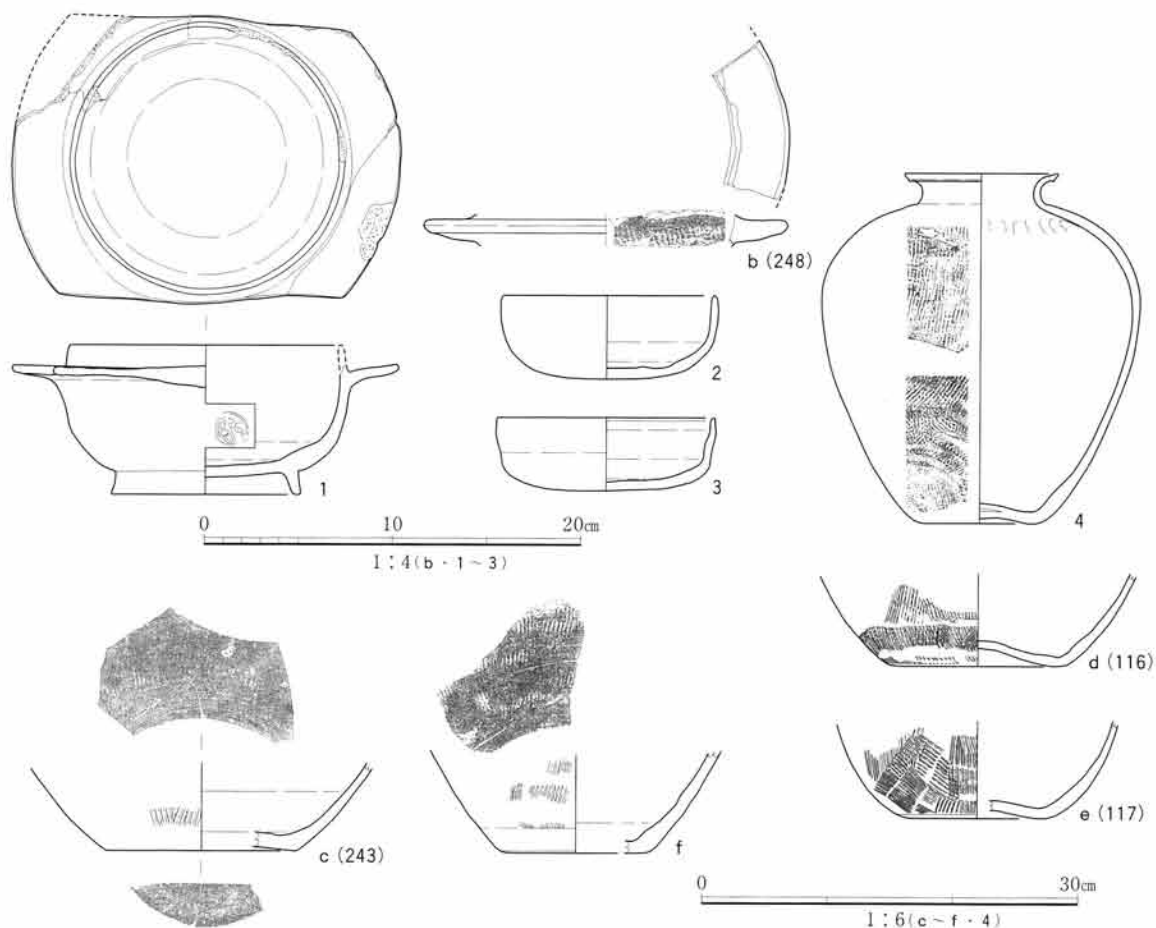


図161 難波出土の百済系土器と関連資料

NW90-7次(b~e)、OS92-74次(f)、益山王宮里遺跡(1~5)、扶餘舊衙里遺跡(6~7)

こで取り上げた。全羅北道益山市の弥勒寺跡出土の中型外反壺のこのように底部が凹んでおり、底径が16.6cmであることから、本資料に近い[金鍾萬2001]。ただ、適当な実測図が手元になかったため、小振りであるが、王宮里遺跡の壺を類例として挙げた(図161-4)。

以上、難波出土の百濟土器を挙げた。新羅土器より数が少ないのは事実であるが、瓶のような特徴的な器種や大きな平底の器種が存在するということに注意すれば、今後事例が増加することであろう。

iii) その他

難波宮の北東約1kmの地点に位置するOS88-31次調査地で、9世紀初頭の包含層から開元通宝が出土した[大阪市文化財協会2003a: pp.105-128]。開元通宝は言うまでもなく621年に唐で鑄造された貨幣であるが、朝鮮半島や琉球列島では自らで貨幣を発行せずに、開元通宝を使用していたと考えられる。特に8世紀後半以降は新羅や琉球との物流が活発になり、難波出土の開元通宝もそういった活動を通じて流入したと考える[寺井2004]。

また、難波は国内でも物流の拠点であるから、国内の他地域の須恵器も次第に明らかになりつつある。NW90-7次(第IV章第2節)やNW97-3次調査[佐藤2003]、さらに大阪府警調査地[大阪府文化財調査研究センター2002]では猿投窯などの東海系の杯H蓋が出土している。これは製品として流入したのであろう。加えて、NW97-3次調査では孔の縁が飛び出した甕や近辺ではあまり見られない器形の壺が漆容器に用いられていた[大阪市文化財協会2000a: Fig.65-504]。このような甕は東日本に類例が求められ、難波に運ばれた漆の産地を知る手掛かりとなる。

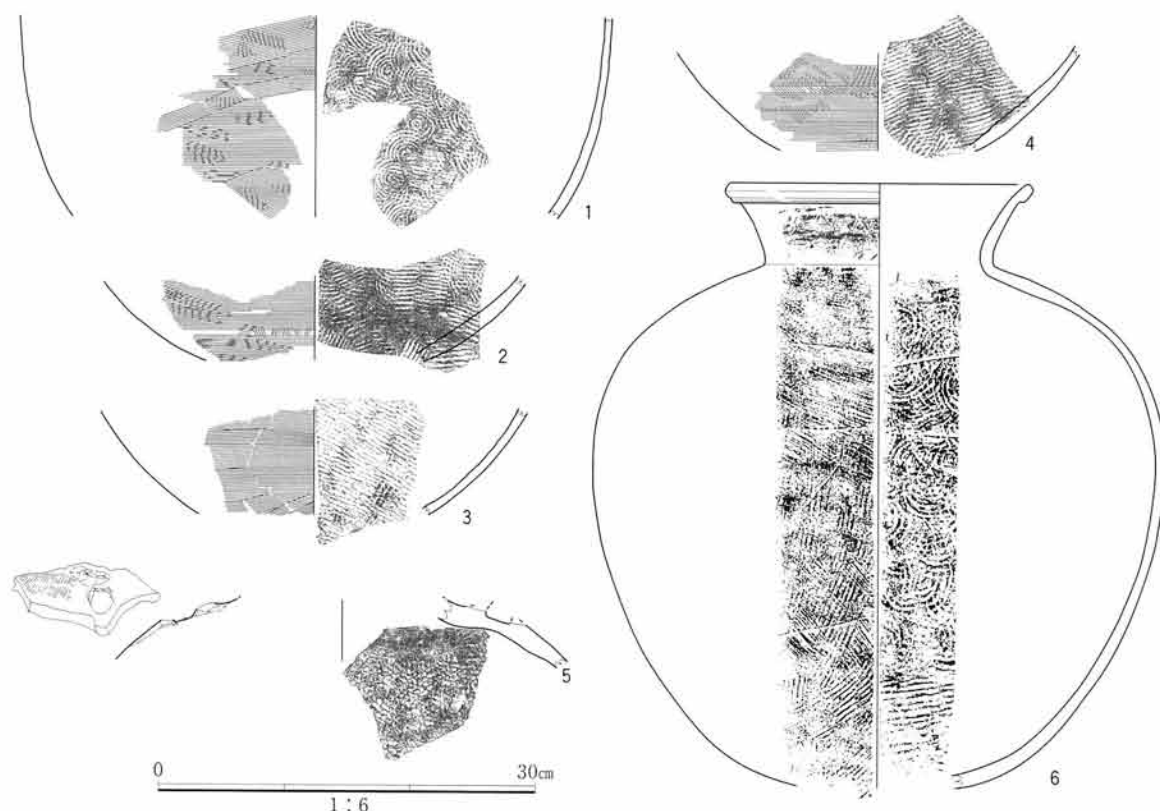


図162 OS99-16次出土の北部九州系須恵器と関連資料
OS99-16次(1~5)、福岡市鋤崎古墳群A-1号墳(6)

さらに、すでに報告済のOS99-16次調査[大阪市文化財協会2002a]で出土した遺物を再整理したところ、胎土分析は行っていないものの、北部九州産と思われる甕を発見した(図162-1~4)。これらは体部側面に同心円文の当て具が用いられた後、底部に平行文の当て具を使用しているもので、当て具の凹みは長楕円形を呈する。管見による限り、福岡市西区の鋤崎古墳群A群では7世紀前葉~中葉に位置づけられる1号墳(図162-6)や9号墳でこの種の甕が出土しており[福岡市教育委員会1997]、さらに、西区の羽根戸古墳群N群の8号墳では6世紀末の須恵器とともに3個体が出土している[福岡市教育委員会1988]。こういった甕は北部九州からの物資の運搬に用いられたのであろう。また、図162-5は内面に格子目の当て具痕が付く環状把手付の壺の破片である。格子目の当て具を用いた例は周防灘に面する福岡県荊田町の莊原池窯跡群での採集資料にある[武末純一1977]。類例が少なく北部九州系と即断するのは控えたいが、今後注意を喚起するために挙げておく。

3) 瓶形土器の検討

今回報告したa(第IV章第2節-114)のような瓶形土器は、朝鮮半島中西部から南西部のいわゆる百済の領域で5世紀中頃に登場する、熊津~泗沘時代の典型的な器種である[徐聲勳1980]。頸部が長いものもあるので、厳密にいうなら難波宮跡出土の瓶は「短頸瓶」[金鍾萬2002]と呼ぶべきものである。なお、伽耶の領域である朝鮮半島南東部(嶺南地方)の福泉洞1号墳でも見つかっているが、これらは搬入されたか模倣して作られた土器と考えた方がいいであろう[定森秀夫1994]。

百済地域の瓶は、時期が下るほど肩が張る傾向がある[吉井秀夫1991]。口縁部は二重口縁や上方に拡がったものや、端部が斜めに面をもったり、凹んだりなど非常にヴァリエーションに富むため、ここでは体部の形態を基にして分類すると図163左のようになるとと思われる。まず、A類は体部の最大径が中ほどにあり、底部径が最大径の7割程度の大きさのもので、体部高よりも最大径の方が大きな扁平な体部をもつものもある。B類は体部全体が丸みを帯び、最大径は中ほどからやや上にあり、底部は最大径の5~6割程度のものである。C類は最大径が上方にあり、最大径以下が丸みがなく直線的に下りるものである。これらはそれぞれ5世紀後葉以前、5世紀後葉~6世紀中葉、6世紀後葉~7世紀に位置づけられる[吉井1991]。

一方、日本では難波宮跡以外にもいくつかの遺跡で出土している(図163右)。A類に該当する新沢千塚281号墳[奈良県立橿原考古学研究所1980]や中大谷13号墳[田中秀和1993]のものは5世紀末~6世紀初頭の須恵器と共伴する。また、B類に当るコフノ塚遺跡[上対馬町教育委員会1984]や大山田54号墳[田中秀和1993]のものは6世紀中~後葉に位置づけられ、B・C類の中間的な形態の広石古墳群I-1号墳のものは6世紀末の須恵器と共伴する[福岡市教育委員会1977]。さらに、C類の石光山43号墳は7世紀前~中葉に当る須恵器と共伴する[奈良県立橿原考古学研究所1976]。こうして見ると、実年代の位置づけは日本と韓国で若干異なるものの、大体同じような形態的序列を確認することができた。

C類に位置づけられるNW90-7次の資料(a)は、実測図で見ると、肩部が張っているという点や横沈線が施されているという点から表井里A-7号墳や王宮里遺跡の石築排水路から出土したも

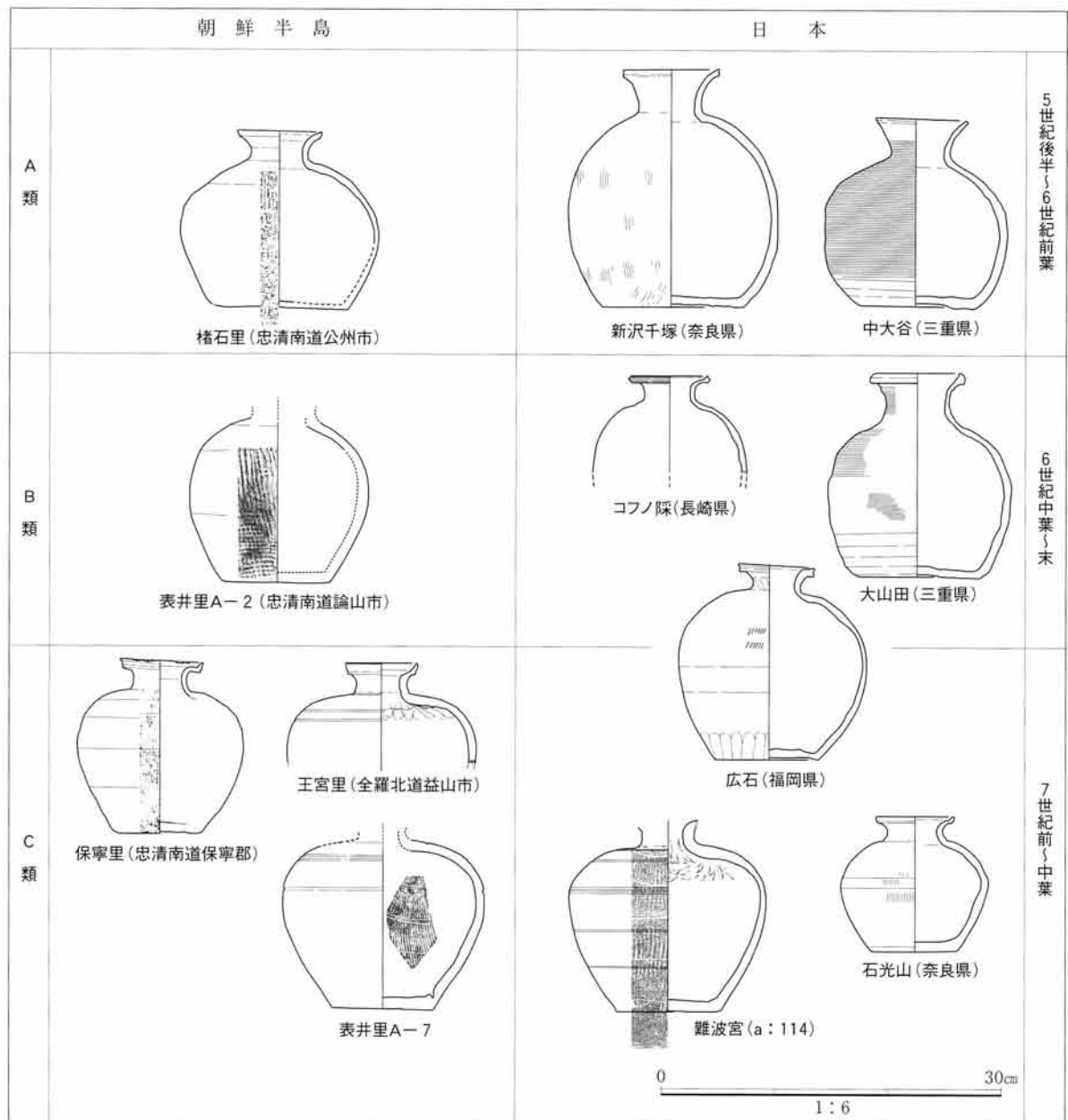


図163 日本と韓国の瓶

のが類似する。こういった肩部が張った形態のものは[金鍾萬2004]の編年表(図面28)でももっとも新しく位置づけられている。よって、難波宮例は百濟地域でもっとも新しい特徴を有するものであるといえる。さらに、整地が前期難波宮造営に伴うものであるから645～650年頃に位置づけられ、並行関係と実年代を追求することのできる重要な資料である。

4) 難波を舞台にした対外交渉

以上、難波で出土した新羅土器・百濟土器について記した。新羅土器は難波地域で多いことがよく認識されてきたが[江浦1994]、須恵器には見られない特殊な文様を施すという特徴を有することも類例の増加を助けたと考える。一方、百濟土器は日本全国的に見てもあまり認識されてこなかったの

が実情であるが、[金鍾萬2002]などで百済土器の特徴が紹介されており、こういった判別基準を基にして、難波宮跡で百済土器と認定できる遺物やその可能性があるものを本書で報告できたということは大きな成果である。図164は上町台地北端の新羅・百済土器をはじめとする7世紀以降の朝鮮半島系土器の分布であるが、点数が多いのはOS90-50次調査地と本書で報告したNW90-7次調査地である。前者は難波館や難波大郡といった当時の重要な外交施設が存在したと考えられている地点であり[千田稔1984、江浦1994]、瘤状に高まり、周囲より目立った地点であることから、そういった施設があつてしかるべきところと考える。

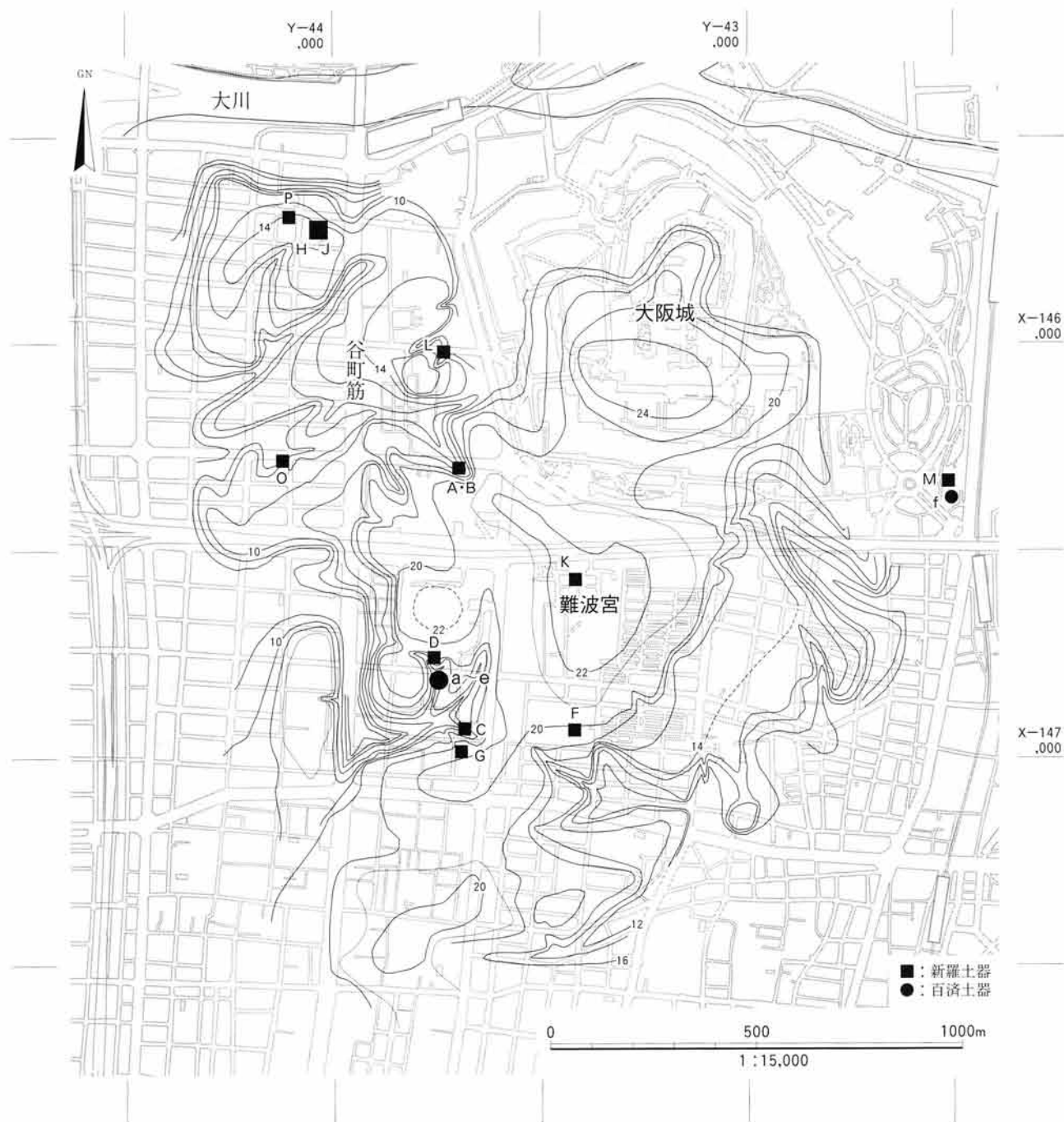


図164 上町台地先端における新羅・百済土器の分布

また、前述のとおり新羅土器には7世紀中葉のものが多くことが指摘できる。加えて、NW90-7次の百済土器は前期難波宮造営時の整地層から出土していることから、645-650年頃に埋まったとほぼ限定できる。特に、瓶aはほぼ完形で出土しており、古い時期のものが混入したとは考えにくい。難波宮造営前に渡来し、当地に廃棄されたものと考えたい。

ところで、日本では6世紀末頃から寺院建築に伴って百済から瓦工人が多く渡来したとされているが、そこに土器工人も伴っていた可能性が高い。こういった見解はすでに[田辺昭三1975：p.119]などで示されているが、近年の研究でも泗沘時代の百済で瓦陶兼業窯が多く存在することが指摘されており[金鍾萬2002・2003]、瓦製作の伝来とともに須恵器製作への新しい情報ももたらしたことは十分考えられる。日本では7世紀初頭頃から須恵器杯Gや宝珠つまみをもつ蓋が出現することは多くの研究で指摘されているが、泗沘時代にも杯Gや杯Aに類似した「盃」(図161-2・3)や宝珠つまみを有する蓋が多く存在する。また、須恵器杯Bについてはこれまで金属器指向の結果という考えが日本の学界で普及していると思われるが[西弘海1973]、中国南北朝時代の銅製品を模倣したと考えられる高台付の碗が百済においてすでに成立しており[金鍾萬2001]、[寺井誠2003]でもOS99-16次出土資料の検討を基に、7世紀中葉における杯Bの成立には百済の高台付の「盃」が関連する可能性を示した。今後、日本の須恵器と百済土器との比較検討を深めることによって、影響関係を明らかにしていくことが課題となってくる。

ここで日本書紀の記述を基に、7世紀の難波を中心とした外国使節の渡来記事を整理してみると、

表16 『日本書紀』に登場する難波の外交関連記事(註5)

	記 録 個 所	年代	記 述 内 容
①	舒明2年 是歳条	630	難波の大郡及び三韓の館を修理る。
②	舒明4年 十月辛亥条	632	唐国の使人高表仁等、難波津に泊まれり。
③	皇極元年 2月壬辰条	642	高麗の使人、難波津に泊まれり。
④	皇極元年 2月丁未条	642	諸の大夫を難波郡に遣して、高麗国の貢れる金銀等、并てその献る物を検へしむ。
⑤	皇極元年 2月戊申条	642	高麗・百済の客に難波の郡に饗たまふ。
⑥	皇極元年 5月庚午条	642	百済国の調の使の船ち吉士の船と、俱に難波津に泊まれり。
⑦	皇極2年 3月癸亥条	643	難波の百済の客の館堂と、民の家屋とに災けり。
⑧	皇極2年 5月辛丑条	643	百済の調進る船、難波の津に泊まれり。
⑨	皇極2年 7月辛亥条	643	数大夫を難波郡に遣して、百済国の調と献れる物とを検へしむ。
⑩	大化元年 7月丙子条	645	高麗・百済・新羅、並に使を遣して調進る。百済の調の使、任那の使を兼領りて、任那の調を進る。唯百済の大使佐平縁福のみは、遇病して津の館に留まりて、京に入らず。
⑪	大化元年 12月乙未条	645	(天皇、都を難波長柄豊碕宮に遷す。)
⑫	白雉元年 4月条	650	(新羅、使を遣して貢調り物献る。或本に云はく、是の天皇の世に、高麗・百済・新羅、三つの国、年毎に、使を遣して貢献るといふ。)
⑬	齐明2年 是歳条	656	小山下難波吉士国勝等、百済より還りて、鸚鵡一隻献れり。
⑭	齐明6年 5月戊申条	660	高麗の使人乙相賀取文等、難波館に到る。
⑮	天智2年 9月条	663	(～略～。船発ちて始めて日本に向ふ＝白村江の敗戦で日本軍が百済から撤退)
⑯	天智3年 3月条	664	百済王善光王等を以て、難波に居らしむ。
⑰	天武2年 9月条	673	〈新羅の〉金承元等に難波に饗たまふ。
⑱	天武4年 4月条	675	新羅の王子忠元、難波に到る。
⑲	天武8年 11月条	678	(初めて関を龍田山・大坂山に置く。仍て難波に羅城を築く。)
⑳	持統6年 11月辛丑条	692	新羅、級食朴億徳・金深薩等を遣して調進る。(中略)新羅の朴億徳に難波館に饗禄たまふ。

頻繁に高句麗・百済・新羅の使節が来ている(表16)。特に百済は皇極紀(642～645年)に非常に多く登場し、その中には百済王子翹岐や大佐平智積など百済の要人の渡来記事もあり[西本昌弘1985]、難波においても具体的記述が見られる(表16の⑤～⑨)。このように朝鮮三国が頻繁に使者を遣わしたのは、朝鮮半島に緊張が高まり、さらなる後ろ盾を日本に求めたためと考えられる[西本1985、森公章1992、山尾幸久1992、鈴木英夫1996]。

こういった『日本書紀』の記述を見るかぎり、新羅・百済土器に7世紀中葉のものが多くのは偶然ではないと考える。まさに朝鮮半島が戦争と混乱の序章を迎えようとしている時期に、新羅・百済の使節が渡来し、土器もそれに伴って運ばれて来た可能性が高い。

5) おわりに

以上、難波で出土した新羅・百済土器などの対外交渉遺物について検討した。特に百済土器はこれまであまり発見されていなかったこともあり、論じられることも少なかったが、本書での報告遺物を朝鮮半島の類例と比較しながら検討し、ほかにもその可能性があるものを指摘した。

また、本文中で何度もふれているように、難波は外交の窓口であり、新羅・百済土器によってそれを裏付けるような結果を得ることができた。今後もこういった外来遺物に注意を払い、さらには文献記述と対照させながら検討していくことが必要となってくるであろう。

最後に本稿を成すに当って、広石古墳群出土瓶の調査では宮井善郎氏(福岡市博物館)、文献収集では植野浩三氏(奈良大学)、山本孝文氏(釜山大学校)、平郡達哉氏(木浦大学校)に大変お世話になった。また、大韓民国益山市および扶餘郡の遺跡出土資料の見学では李タウン(다운)氏(圓光大学校)に案内していただいた。記して御礼申し上げます。

(寺井)

註)

- (1) この資料は『大坂城跡』Ⅶで本来報告すべき資料であったが、諸般の事情でなされなかったため、若干の共伴資料とともに実測図を新たに掲載し、Jについては本稿を成すに当って再実測を行った。また、H・Iについては前報告で「統一新羅の土器」と記載したが、すでに江浦氏が記しているとおりの7世紀中葉のものであり、「統一新羅」という記載は誤りである。
- (2) 韓国で「전달린토기(チョンダルリントギ)」と呼ばれているものを指す。
- (3) 特定の時期を称する場合は韓国の通例に倣って、都が熊津(現在の公州市)にあった時代(475～538年)を熊津時代、泗沘(現在の扶餘郡)にあった時代(538～660年)を泗沘時代と称することにした。
- (4) 手元に適当な図がなかったので図示していないが、扶餘郡の扶蘇山城や益山市の弥勒寺跡で類例がある[金鍾萬2001]。
- (5) 『日本書紀』の書き下しは[坂本太郎ほか校注1965]に依る。

第3節 前期難波宮宮城南門および複廊の建築について

1)はじめに

ここでは発掘調査で得られた成果(第Ⅲ章第3節)をもとに、前期難波宮宮城南門SB701およびその両脇で検出された複廊SC701・702について若干の考察を加えることにする。発掘調査から得られた建物に関するデータはきわめて少なく、柱の位置・規模に関するものがほとんどである。その他、建物の上部構造復原に関連する要素である基壇の有無や基壇外装の据え付け・抜き取り痕跡、雨落溝の痕跡、前面あるいは背面に広がる石敷きなどの路面舗装痕跡、東西両脇に接続する複廊の基壇・雨落溝などの痕跡は、いずれも検出されていない。これは調査が限られた範囲でのみ行われたということと、旧地表面がかなりの削平を受けていたことに起因する問題と思われる。よって、このような困難な状況の下で建物の構造とその特徴を探るには限界があるが、小稿では以下の三つのテーマに絞って考察を行ってみることにする。

2)造営尺について

まず、調査で得られたデータをもとに、建物の造営尺について考えてみたい。前期難波宮では建物の造営尺について、これまでの調査成果をもとに一尺=0.292mという数値がすでに推定されている[中尾芳治1986]。以降の調査でも、その推定値を大きくはずれるような調査データは得られていないが、ただ同時代の古代建築をみた場合、建物ごとに造営尺が微妙に異なるような場合も見いだせるのであって、この造営尺の微妙な違いを工人集団の違いと結びつけて認識できる可能性も指摘されている(註1)。よって前期の推定造営尺が宮城南門にも間違いなく当てはまるかどうかを、まず検討してみる必要がある。ここでは前期推定造営尺(1尺=0.292m)を中心に、唐尺(1尺=0.296m)・高麗尺(1尺=0.355m)をも考慮に入れながら、宮城南門・複廊の造営尺について検討してみることにする(註2)。

発掘調査の結果得られた宮城南門の規模・実測値は、桁行5間、総長23.52m、梁行2間、総長8.83mである。桁行は4.70mの等間であり、梁行は4.42mの等間である。桁行・梁行各柱間は、実際には数値に微妙なばらつきがあるが、ともに等間と考えられる。柱痕跡は抜き取られているものがほとんどで、抜き取り穴は直径73~83cmとなる。柱の太さに顕著な違いが認められないため、ここでは最小の値73cmとみることにする。なお、柱痕跡が抜き取り穴であることは、正確な柱間寸法を考えるうえでは問題となるが、地表面近くでは広がる抜き取り穴も、柱穴の底付近ではそれほど広がらず、よって断割りなどで柱穴底部の柱痕跡が判明する場合は、寸法にそれほど大きなばらつきはないものとも考えられる。次に複廊であるが、今回検出された部分は宮城南門東側で9間分、西側で1間分である。柱間寸法は平均してみると桁行が2.93m、梁行は2.70mとなる。ここでも数値に微妙な差があるが、等間と考えられよう。柱痕跡はトータルにみると直径27~42cmとなるが、宮城南門から東へ4間分では棟通りの柱がその他のものよりも太いことが指摘されている。柱掘形底部のレベルも門に向かっ

表17 造営尺の復原

建物名称	実測値	前期推定尺	復原柱間	復原造営尺	唐尺	復原柱間	復原造営尺	高麗尺	復原柱間	復原造営尺	
	(m)	(=0.292m)	(尺)	(m)	(=0.296m)	(尺)	(m)	(=0.355m)	(尺)	(m)	
宮城南門	桁行全長	23.52	80.55	80	0.294	79.46	80	0.294	66.25	66	0.356
	桁行柱間	4.70	16.10	16	0.294	15.88	16	0.294	13.24	13.2	0.356
	梁行全長	8.83	30.24	30	0.294	29.83	30	0.294	24.87	25	0.353
	梁行柱間	4.42	15.14	15	0.295	14.93	15	0.295	12.45	12.5	0.354
回廊	桁行柱間	2.93	10.03	10	0.293	9.90	10	0.293	8.25	8.25	0.355
	梁行全長	5.40	18.49	18.5	0.292	18.24	18	0.3	15.21	15	0.360
	梁行柱間	2.70	9.25	9.25	0.292	9.12	9	0.3	7.61	7.5	0.360

ていくぶん深くなっており、建築構造に関連する可能性も考えられる(註3)。

以上の数値を、前期推定造営尺・唐尺・高麗尺によって換算したものが表17である。古代建築における寸尺単位では一般的に整数比やラウンドナンバーが好んで用いられるという点からみると、数値的には1尺=0.292mがもっとも完好な数値となるようであり、その際の桁行・梁行の復原柱間寸法は、宮城南門ではそれぞれ16尺(4.67m)、15尺(4.38m)、複廊ではそれぞれ10尺(2.92m)、9.25尺(2.7m)となる。ただ、厳密にみると宮城南門では1尺=0.294~0.295mが適当と考えられ、複廊では1尺=0.292~0.293mが適当と考えられる。この違いが工人集団の違いなどとして積極的にとらえることができるかどうかは微妙であるが、1尺=0.292mを基本としつつも、異なった数値の存在を復原値として考えておく必要性はあるのかもしれない。

なお、古代建築の柱間を考える際に、各柱間の数値が完数となる(柱間完数制)のではなく、総柱間が完数となり、各柱間はそこから任意に分割されて決められた(総間完数制)という指摘がある[溝口明訓1999]。この考え方で宮城南門の総柱間をみてみると、先ほどみた前期推定造営尺による各柱間の復原値に比べて桁行では柱間完数制の方が完好な数値となり、梁行では総間完数制が完好な数値となる。このように誤差が微妙となるのは、桁行・梁行がそれぞれ5間等間・2間等間という完数値を得られやすい柱間数であるからとも考えられるが、いずれにしても今回のデータからは柱間完数制、総間完数制のどちらとも決しがたい状態であるといえる。

3) 柱配置からみた宮城南門の平面と構造について

前期難波宮宮城南門は他の前期建物と同様、掘立柱建物である。ここでは建物の平面形式を検出された柱の位置・大きさなどから復原し、その特徴を他の建物との比較から導き出すことにしたい(なお、以下の記述における寸尺は、前期難波宮の場合は1尺=0.292m、その他は唐尺とする)。

まず、宮城南門の平面形式を再度確認しておこう。前項で検討した造営尺をもって復原された数値では桁行5間(全長23.36m、80尺)、梁行2間(全長8.76m、30尺)の総柱建物であり、平面形式や前期難波宮の中軸線上に位置すること、両脇に取りつく複廊との関係(複廊に対して桁行5間分だけ桁行・梁行柱間が広い)などから門であることは明らかである。2)でみたように、桁行柱間は等間で1間4.67m(16尺)、梁行柱間も等間で1間4.38m(15尺)である。各桁行柱間が梁行柱間に比べて1尺

ほど長い。柱痕跡はすべての柱穴掘形で確認することができたが、隅柱・側柱などで柱の太さが異なるといったようなことは確認されておらず(註4)、平面的にみた場合に、平面の形が糸巻き型になるといったようなこともみられない(註5)。前期難波宮で特徴的な、いわゆる小柱穴といわれる柱穴も今回の調査では確認されていない(註6)。なお、内裏南門では掘立柱掘形断面が逆凸形になっており、長大な柱を落とし込んで据えるための「斜路」が設けられていたと考えられているが[大阪市文化財協会1995：p.64]、今回の調査ではそのような痕跡も見つかっていない(註7)。

さて、宮城南門における平面的特徴は大きく分けて3つと考えられる。一つは柱が太いということ、次に桁行柱間が等間であるということ、最後に桁行柱間(16尺)が梁行柱間(15尺)に比べて1尺長いということ、である。以下ではこれら3点について少し具体的に考えてみたい。

まず、柱の太さについてである。発掘で検出された最も信頼できる柱の直径は、抜き取り跡という点を考慮すると約73cmで、すべての柱がほぼ等しい太さと考えられる。これは現存する古代建築では東大寺転害門の柱径約72cm(2尺4寸)とほぼ等しく、古代では最も太い部類に入る。転害門は単層切妻の八脚門であるが、桁行柱間は両端間5.4m、中央間6m(桁行全長16.8m、56尺)、梁行は4.2m等間(梁行全長8.4m、28尺)である。柱の長さは約4.95m(16.5尺)である[奈良国立文化財研究所1994：p.139]。また近年復原された平城宮朱雀門も同じような柱径を持ち、初重の柱の長さは約5.3m(18尺、なお桁行柱間は17尺)としている[奈良国立文化財研究所1994：p.142]。奈良時代の建物では中央の柱間と柱の高さがほぼ等しくなる(柱間の立面が正方形に近くなる)のに対し、様式的にそれよりさかのぼると考えられる法隆寺西院金堂では柱の高さが勝る(つまり立面が長方形に近くなる)ことが指摘されている[鈴木嘉吉1982]。法隆寺金堂身舎では柱間が約3.2m(10.7尺)であるのに対し、柱の高さは約3.7m(12.4尺)、柱の太さは約63cm(2.1尺)である。また法隆寺西院中門では中央二間の柱間が約3.4m(11.5尺)であるのに対し、柱の長さは約3.8m(12.8尺)、柱の太さは約53cm(1.8尺)である。

このようにみると、転害門に比べて法隆寺の例では柱間に比べて柱が長く、それよりさかのぼる前期宮城南門でもやはり柱間(4.67m)に比べて柱の長さが少々長かった可能性を考えられそうである。また以上は古代の建物を参考にした、柱径・柱間からみた柱の長さの推測であるが、掘立柱の地中部分の深さから柱の長さを検討することのできる資料も存在する。平城宮では木樋に転用された、藤原宮大垣に用いられたと思われる掘立柱の柱材が発見されている。この柱は残存する全長約7.3mで、直径44cmであるが、下から約2.6mまでの部分がやせており、この部分が地中に埋まっていたものと考えられている[奈良国立文化財研究所1981：pp.133-138、黒崎直1997]。そうすると、低く見積もっても地中に埋まった部分の約2.8倍が全長ということになる(地上部分は約4.7m)。掘立柱の柱長さが必ずしも地中深さの2.8倍になるとは言い切れないが、一つの有力な指標ではあろう。この柱は大垣に使われたと推定されるものであるが、仮にこの数値を宮城南門に当て嵌めてみると、どうであろうか。検出された最も深い柱穴は約1.4m程度で、上部が0.8mほど削平されていると考ええると(註8)、推定される柱の全長は約6.2m(21尺)以上、地上部分は4m(13.7尺)以上ということになる。よってこの数値と先程の柱径・柱間からみた数値を考えると、宮城南門の柱の長さは地上部分でおよそ4～5m程度と推定することができる。柱間寸法により重きを置くならば、前期宮城南門の柱は5m近

表18 桁行柱間が5間以上で等間の門の例

建物名称		柱間		全長	
		柱間数	桁行	梁行	桁行
前期難波宮	内裏南門	7×2	16	21	112
	朝堂院南門	5×2	16	15	80
	宮城南門(朱雀門)	5×2	16	15	80
伝承飛鳥板蓋宮跡	内郭南門	5×2	10	9	50
	エビノコ郭西門	5×2	10	9	50
藤原宮	大極殿院東門	7×2	14	11	98
	大極殿院西門	7×2	14	11	98
	朝堂院東門	3×2	17	17	51
	北面中門	5×2	17	17	85
	南面中門	5×2	17	17	85
	東面北門	5×2	17	17	85
平城宮	第2次大極殿院閣門	5×2	15	15	75
	南面中門(朱雀門)	5×2	17	17	85
	南面西門(若犬養門)	5×2	17	17	85
	大安寺南大門	5×2	17	17	85
	陸奥国分寺中門	5×2	12	12	60
	紀伊国分寺中門	5×2	12	12	60

*柱間数以外は尺で記述。なお、前期難波宮は1尺=0.292m、その他は唐尺

くはあったものと推測されよう。

次に、桁行柱間が等間であるという点について考えてみたい。これまでに検出された前期の門遺構で桁行柱間が等間となる例には、宮城南門のほかに内裏南門・朝堂院南門があり、等間とならない例には内裏東・西外郭南門、内裏東・西門がある(註9)。内裏南門、朝堂院南門、宮城南門は宮の中軸線上に建つ門であることから、まず前期難波宮では主要な門は桁行が等間で、それ以外は副次的なものと考えることができよう。なお、宮殿建築における桁行5間の門で桁行柱間が等間の例を探すと、伝承飛鳥板蓋宮跡内郭南門・エビノコ郭西門、藤原宮南面中門・東面北門・北面中門・大極殿院東門・西門、平城宮南面中門(朱雀門)・南面西門(若犬養門)・第2次大極殿院閣門などがあげられる。

次に古代の寺院建築における門では、飛鳥寺を

はじめとして通常は中央間が広く、端間が狭いものがほとんどである。そのような中で桁行等間の例は、桁行3間のものでは四天王寺南門・中門、大海庵寺南門、橘寺中門、上総国分寺中門などが知られ、桁行が5間となるとさらに類例に乏しく、大安寺南大門(重層)、陸奥国分寺中門、紀伊国分寺中門などが知られるのみである(表18)。

このように見ると、桁行5間で柱間を等間にする例は宮殿建築によく見られ、寺院建築ではそれほど一般的ではなかったものと考えられる。またこの観点にたって宮殿建築を改めてみると、前期難波宮から藤原宮にかけて桁行等間の例が増加するのに対し、平城宮では中央3間が広く端間が狭い形式の門が増えており、8世紀になって寺院建築との混淆が進んだものと推測することができる(註10)。これは、先ほど挙げた寺院建築の桁行5間の例がすべて奈良時代以降の例であること、この時期には例えば平城宮の東朝集殿が唐招提寺の講堂に転用されるなど[岡田英男1983b]、宮殿建築と寺院建築との間には建築的に見て大きな差異はなかったと考えられること、などと密接な関係があるものと思われる。よって7世紀の段階では、いまだ宮殿建築と寺院建築の間には建築的にみて異なった状況があったものとする必要があると思われる(註11)。そしてその一端は前期難波宮から藤原宮への桁行等間の門の系譜に表れており、このことは7世紀の宮殿建築における建築的特徴を具体的に示す例としてとらえることが可能と思われる。

次に、桁行1間が梁行1間よりも長い点について考えてみることにしたい。平面からみた場合、桁行1間が梁行1間よりも長い場合には通常の五間門よりも扁平なかたちとなる。そして建物平面が正方形に近いかどうかは、その建物が単層か重層かを考えるうえでの一つの指標となる[浅野清1971:

p.92]。表19は古代における主要な門の梁行に対する桁行の長さ(桁行／梁行比)を示したものである。法隆寺西院中門、飛鳥寺中門などはいずれも桁行3間に対して梁行3間で平面が正方形に近く、重層とするに好都合である。よって飛鳥寺中門の場合も重層と考えられるが、それに対して横長平面の場合は重層にした場合に構造的・視覚的に安定がよくなく、単層と考えられる(ただこれも確実な根拠があつてのことではなく、一つの指標にとどまる)。

桁行5間の門では平城薬師寺・大安寺の例が参考となる。平城薬師寺の場合は文献などによって中門が単層、南大門が重層と考えられる[奈良国立文化財研究所1987：pp.210-212]。発掘調査によって判明した両遺構の桁行／梁行比は、3.24と2.69である。同じく大安寺も中門が単層、南大門が重層と考えられるが[太田博太

郎1977：p.58]、それらの数値は2.93、2.5である。宮城南門では桁行／梁行比は2.67で、両例における南大門(重層)に近く、ここからは重層であった可能性が考えられよう。また復原された平城宮朱雀門では、この門が平城宮の正門であることを根拠に、宮城門の中でも第一級で、重層にして屋根は入母屋造、と考えられている[奈良国立文化財研究所1994：pp.42-43]。同じ考え方ならば、前期難波宮でもやはり「重層にして屋根は入母屋造」と考えられる可能性はある。また平城宮第2次大極殿院閤門は礎石建ではあるが桁行等間の五間門で、正背面と側面との基壇の出の違いから切妻造の楼門と推定されており、参考となる。[奈良国立文化財研究所1993：p.181]。あるいは桁行等間は楼門形式と関係があるのかもしれないが、具体的な点については不明である(切妻造楼門形式なら、次に述べる隅の間の問題に有利ではある)。ここでは重層であった可能性を指摘するにとどめたいと思う。

次に桁行1間が梁行1間よりも長いということは、隅の間が真隅とならないことを表す。先ほどあげた桁行柱間が等間となる宮殿・寺院の五間門の例は、いずれも隅の間における桁行・梁行柱間が同じ寸法、すなわち隅木が真隅(45°)に納まる配置である。それに対して隅の間が正方形とならない振れ隅の例は飛鳥寺以下、古代建築では校倉などの倉庫建築を中心に見られるものである。前期宮城南門では隅木尻を柱上に納めようとする微妙に真隅とはならない。一般的に入母屋造・寄棟造で振れ隅の場合、東西面と南北面とで屋根の勾配・軒の出・軒反りなどが異なるために、問題が多いとされる[澤村仁2002：p.440]。よって振れ隅のような平面の場合、屋根形式は切妻造りの可能性が高いとして、そのように復原される場合が多い。ただ、前期宮城南門の場合、明らかに振れ隅といえるほど隅の間が長方形となるのではないため(16尺と15尺)、単純に切妻造と考えるべきかどうか判断に苦

表19 古代の門における桁行／梁行比

建物名称	柱間数 (桁行×梁行)	全長		桁行／梁行比
		桁行	梁行	
飛鳥寺中門	3×3	34.8	25.8	1.35
橘寺中門	3×2	30	20	1.5
四天王寺中門	3×2	30	20	1.5
川原寺中門	3×2	34.1	21	1.62
文武朝大官大寺中門	5×3	79	42	1.88
法隆寺西院中門(重層)	4×3	40.6	28.8	1.41
本薬師寺中門	3×2	14	11	0.98
平城薬師寺中門(単層)	5×2	81	25	3.24
平城薬師寺南大門(重層)	5×2	86	32	2.69
大安寺中門	5×2	88	30	2.93
大安寺南大門	5×2	85	34	2.5
東大寺中門(重層)	5×2	96	36	2.67
東大寺転害門(単層)	3×2	56	28	2
平城宮 復原朱雀門	5×2	85	34	2.5
前期難波宮 内裏南門	7×2	112	42	2.67
朝堂院南門	5×2	80	30	2.67
宮城南門(朱雀門)	5×2	80	30	2.67

* 桁行、梁行は尺で記述。なお、前期難波宮は1尺=0.292m、その他は唐尺

しむ。そこで、この微妙に異なるということをほかの可能性で考えることはできないだろうか。一案を挙げてみたいと思う。

古代の屋根構造が残っている例は少ないが、そのような中で参考となるものに法隆寺玉虫厨子がある。これは小さな工芸品ではあるが、実物を調査すると技術的に十分その価値が認められるものである[乾兼松1961：p.393]。実測値によればこの厨子の軒は平側と妻側で約3寸8分の長短がある。すなわち平側が長く妻側が短い。また軒反りは平の方が妻に対し2分ないし2分5厘深くなっている。すなわち軒の長さに応じて軒反り深さに大小があるのである。これによって軒反りが妻も平も一見同様に見えるという。そしてこの軒反り深さに差を設けた規矩的处理については、妻の方の軒の出を平より少なくし、それだけ隅木を振る、いわば振れ隅の工法を用いていると考えられている[乾1961：pp.393-394](註12)。また平安時代以降の野隅木の場合ではあるが、振れ隅において、入母屋造では妻飾りを大きく見せるために妻の屋根勾配をゆるくし、そのために隅木を平の方に振り、反対に寄棟造では大棟を長くするために、妻の勾配を強め、隅木を妻の方に振るということが指摘されている[岡田英男1983a：p.317]。

以上のことを参考にした場合、宮城南門が切妻造ではないとして、隅木の尻を柱上に持っていくと振れ隅となるが、その振れ方は真隅に対して隅木尻を平の方に振るかたち、すなわち妻側に長いかたちとなる。よってここから考えられる納まりは入母屋造のそれとなろう。次に、振れ方が玉虫厨子とは反対となるが、それは門の平面が横に長いために、正面からみたときの妻面の軒が著しく短く感じられないようにしたことが考えられる。仮に軒反りがあったのなら、妻側がより強かったことになる。いずれにしても四周に軒が廻ると考えるならば、このような視覚矯正の技法を採用した可能性も考えられるのではなかろうか。これは隅の間が真隅とはならないものの、真隅に非常に近いことから考えてみた一案である。少々の誤差を気にせず隅木を真隅に納めたと考えるか、あるいは切妻造と考えたほうが素直かも知れないが、一つの仮説としてここに提示しておくことにしたい。

最後に補足として、掘立柱の工法に関して、報告では宮城南門の柱穴の掘込み深さが柱筋によって異なることが指摘されているが、この点について考えてみよう。宮城南門の柱穴を断ち割った結果、柱穴の掘込み深さについては南面柱筋・中央柱筋・北面柱筋で異なった様相を呈していることが指摘されている。すなわち各梁行でみた場合、南面・北面の柱穴の掘込み深さが中央に比べて概して深く、約0.3～0.4mの差があった。このような柱筋毎の掘込み深さの違いは、何に由来するのだろうか。可能性としては、①旧地表面(あるいは基壇)のレベル差を反映している、②太さが似通っているにもかかわらず、柱材の長さが同じではない、という二つを想定することができると思われる。

まず①であるが、旧地表(あるいは基壇の存在)に関係するとした場合、かりに同じ深さで柱穴を掘り込んだとしたならば、宮城南門では中央柱筋近辺の旧地表が高かったと推定されることになる。基壇を持っていたならば、同じ門内で中央付近と端とで高さが異なることとなり、辻褄が合わない。また、例えば平城宮第1次大極殿院では掘立柱の掘込み深さをもって旧地形を復原する試みがなされているが[清水重敦ほか2002]、今回の宮城南門に同じような方法をそのまま当てはめて考えるのは困難であろう。次に②であるが、一般に掘立柱の場合、高い柱ほど深く掘り込まれるものと考えられる

が、その考えに従えば、宮城南門は南・北両面の柱筋が高く、中央柱筋が低いことになる。現在に残る古代の門では連続する柱の天端高さが揃っていることが一般的で、これは柱上を頭貫や梁などで繋ぐという工法上の要請による。よって宮城南門の柱の天端が揃っていたとするならば(註13)、同じような太さを持つ柱において、長さが異なっていた可能性を考えることができる。このことは、調達された用材が同一規格の木材だけではなかったことを表すとも考えられるが、あくまで推測の域を出ない。それは単に異なった長さなら、現場において最も有効な長さに切り揃えればいいと考えられるからである。それよりもこの②が、「結果としてそうなった」と考えられる場合はどうであろうか。すなわち、一般に柱の掘形を掘る工人と建てる工人は異なっていたと考えられるが、調査において検出される前期の柱掘形は、不揃いな例が多い。今回の調査でも明らかに掘り直されているものがあり、当時の精度を物語る(註14)。その不揃いの掘形に対してその都度柱の長さで調節しながら、結果として異なった長さの柱を用いることになったという可能性である。当初掘り下げた穴をある深さまで埋め戻した後に柱を立てた痕跡があること(第Ⅲ章第3節)も同じことを示すのではなかろうか。あくまで憶測ではあるが、ここに記すことにしたい。

4) 宮城南門東西にとりつく複廊について

前期難波宮におけるこれまでの調査では、区画施設として一本柱塀と複廊とが確認されている。一本柱塀は藤原宮などの例をみてもわかるように、外郭を区切るための用途に使われる場合が多く、前期においても内裏西方官衙SA301・302・303などで用いられており、宮の外郭を区切るものと考えられている[大阪市文化財協会1992：pp.81-82、積山洋2004など]。それに対して複廊は前期の朝堂院・内裏相当地域の外郭などを区画するもので、これまで検出されたものでは桁行寸法はすべて約10尺であるが、梁行寸法からそれぞれ9・8・7・6尺のものに分類することが可能である[植木久1998など]。調査で検出された複廊は桁行2.93m、梁行2.70mで、梁行柱間9尺の部類に属する。宮城南門の東西両脇に棟通りを等しくして接続し、どこまで続くのかは確認されていない。ただ宮城南門西方において、複廊の棟通り柱筋を西に延長した部分で発掘調査が行われ、一本柱塀が検出されている。よってそこまでは複廊として続かないことが判明している[古市晃1999・2002]。では、途中で一本柱に変わると考えられるこの複廊は、何のために設置されたのであろうか。これまでの説では、この複廊が宮城南門東西を固め、荘厳化するためのものである可能性が考えられている[中尾芳治1995：pp.136-144]。一般的に考えて、宮城南門両脇が一本柱塀と複廊とでは建物のボリューム感が全く異なるのであり、正面から臨んだ時における立派さには大きな違いがあろう。実際の機能の点からすれば一本柱塀でも十分まかなえるはずであるが、両脇を複廊にしたという点からは、前期難波宮がまず視覚的な効果を多分に考慮した上で建てられたものであった可能性を推測させる(この点は前期複廊が南から北に向けて順次各梁行寸法を1尺ずつ減少させること、内裏南門の東西に八角殿を配することなどとも関連しよう)。

ただ、この問題を考える上で興味深い例が、近年藤原宮の発掘調査で見つкаっている。それは藤原宮朝堂院東南隅での調査例であるが[奈良文化財研究所2003b：p.2、奈良文化財研究所2003d]、そ

ここでは朝堂院回廊(複廊)南面東端から南に延びる複廊跡が検出されたのである。この部分は後の平城宮において朝集殿院を区画する施設が置かれるところであり、これまでの調査では、藤原宮で朝集殿院区画施設は検出されていない。それが今回複廊を検出したことで、藤原宮における朝集殿院の存在が俄然現実味を帯びてきた。ただ、藤原宮での朝集殿院の存在如何は興味深い問題ではあるが、ここでまず問題としたいのは、この複廊が南面中門(朱雀門)の両脇部分とどのように接続するか、というところにある。かつて日本古文化研究所によって行われた調査では、朱雀門脇に単廊がとりついていたと推定されており[日本古文化研究所1941]、後に行われた奈良国立文化財研究所の調査でもはっきりとしたことが判明していない[奈良文化財研究所1976：p.72]。ただ藤原宮全体としてしてみると、近年の調査でこれまで単廊と考えられて大極殿院東面北回廊が、再調査の結果、複廊であったと推定されることになった[奈良文化財研究所2003c：pp.78-84]。この結果を受けて大極殿院の再検討が行われ、北面回廊、西面北回廊も同じような複廊の可能性が指摘されている[奈良文化財研究所2003c、同上]。すると藤原宮の中で単廊と推定される部分は、残るは朱雀門の脇だけとなり、奇異な感じとなる。以後の発掘調査によって明らかにされる必要があるが、当然複廊であった可能性を考慮に入れる必要があると思われる。そしてこの複廊が、朝堂院回廊から南に延びる南北方向の複廊に接続すると考えた方が素直ではなかろうか。こう考えた場合、前期難波宮宮城南門両脇の複廊も同じように後の朝集殿院に相当する部分を取り巻くものであった可能性が想定されよう。前期難波宮では朝堂院南面から南に延びる朝集殿院区画施設が検出されていないが、後の朝集殿に相当すると考えられる建物は検出されている[第三章第3節、植木久1998]。前期難波宮と藤原宮での宮殿配置における多くの類似点を考えた場合[中尾芳治1986：pp.50-51など]、朱雀門両脇の複廊の存在は、朱雀門北方に後の朝集殿院に相当する区画が存在していた可能性を示唆するものではなかろうか(註15)。

5) おわりに

以上、前期難波宮宮城南門とその両脇に繋がる複廊について若干の考察を試みた。

宮城南門に対する検討では、まず柱の太さ・柱の掘込み深さなどから柱の高さを推定し、次に桁行等間の門が7世紀段階における宮殿建築の特徴を表している可能性を指摘した。また梁行に対して桁行が1尺長い平面については、その桁行／梁行比から単層よりも重層であった可能性を指摘した。また隅の間が真隅とならないものの、真隅に非常に近いところからは、屋根形式が入母屋造でかつ視覚矯正の技法を用いていた可能性を探ってみた。残念ながらいずれの案も現段階では憶測にすぎず、可能性を示すにとどまっている。次に、宮城南門東西で検出された複廊については、これが後の朝集殿院相当区画を形成するものである可能性を指摘した。宮城南門東西を固め、荘厳化するためのものであるとする説(翼廊説)は、実は単に朝集殿院相当区画を複廊で囲ったことによる副次的な結果であるとも考えられ、結果として、正面から見た宮城南門付近を荘厳化することに繋がったと考えられるのではなかろうか。さらに検討を重ねたいと思う。

前期難波宮はそれ自身の持つ意義とともに、古代宮都の研究においては(中心部分の構成が判明している最も早い時期のものという点で)出発点であり、(すでに大規模な朝堂院相当施設や他に類例の

ない八角殿院を備えるなどという点で)転回点でもある。ここまでの指摘ではその実態に近づきたいと思うあまり、徒に憶測を重ねた部分も少なくない。限られたデータから、蓋然性が高いと思われる推測・これまであまり扱われてこなかった問題点の提示を心がけたが、同時に問題提起としての役割すら果たせていないのではないかという危惧をも抱く。大方の御叱正を請う次第である。

(李陽浩)

(註)

- (1)例えば、7世紀中頃に造営が開始された山田寺では、発掘調査の成果によって、創建期の回廊内の建物と宝蔵・大垣、天武朝造営期の講堂・塔・南門などの間に造営尺の違いが指摘されており、そこでは造営尺の違いを工人集団の違いと結びつけて考えている[奈良文化財研究所2002：p.453]。近年、前期難波宮ではその造営時期が孝徳期の長柄豊碕宮にまで遡ることが確実視されてきているが[大阪市文化財協会2000a、古市晃2002など]、天武期における「羅城」の記事、あるいはそれに伴って前期難波宮が改修された可能性などについてはいまだ不明な点が多い。仮に造営尺に違いがあるとするならば、工人集団の違いなども含めて、これら問題にアプローチできる一つの足がかりともなる可能性がある。
- (2)唐尺(1尺=0.296m)は大極殿の調査によって判明した数値を用いる[大阪市文化財協会1995]。高麗尺(1尺=0.355m)は単純のその数値を1.2倍したものである。これは大宝令において大尺が小尺の1.2倍に当たるということに基づく数値であるが、法隆寺などの調査において推定された高麗尺とも齟齬のない数値である。高麗尺の実態はいまだよく判明しておらず、よってこのような推定値を用いることにした。
- (3)調査で得られたデータ(表9)を見ると、棟通り柱筋の柱掘形は門に向かっていくぶん深くなるもののようである。掘立柱の場合、掘形の深さはそこに据えられる柱の高さと関係があると思われるが、柱の太さと掘形深さの点からみて、他の柱よりも幾分高かったと推測することもできる。宮城南門がある程度の高さの基壇を持っていたとして、それに取りつく部分の複廊基壇が南門に向けて徐々に高くなっていったような場合を想定することも可能かもしれない。
- (4)門ではないが、前期朝堂院東第4堂の調査において隅の柱痕跡が0.45m、それ以外が0.3mで、隅柱のみが太かった可能性が指摘されている[大阪市文化財協会1999d]。なお、古代建築においては視覚的・構造的な点から隅柱を若干延ばす技法があるが[太田博太郎1957：p.118]、東4堂の柱の太さの違いは、あるいはそのような隅延びに関係している可能性も考えられる。
- (5)古代建築における視覚的・構造的な技法の一つであるが、現存する建物では東大寺法華堂(三月堂)で確認されている[太田博太郎1957：p.118]。
- (6)小柱穴に関しては中尾芳治1986、植木久1999などの論考がある。なお、小柱穴が主要な建物だけに用いられるとした場合、中軸線上に立つ朝堂院南門や今回の宮城南門などにみられないことが疑問点として指摘されている[中尾芳治1997]。また内裏南門では小柱穴が本柱と同じ深さを持つことから、宮城南門において後世に削平されたとは考えにくいという指摘があるが[長山雅一1995]、小柱穴の深さは遺構ごとに異なっており[植木久1999]、この点から宮城南門に小柱穴があったかどうかを決めるのは困難であろう。宮城南門では削平が激しく、調査ではその存在如何がはっきりとは分からないというのが実態と考えられる。
- (7)ただ、朝堂院南門の調査では南北に細長い柱掘形が検出されており[大阪市文化財協会1983b]、断面が逆凸形あるいは逆L形になる可能性がある。また同じような「斜路」を持つ西八角殿の調査をみると、「斜路」を持つ掘形は底からある程度の高さまではほぼまっすぐ立ち上がり、そこから急激に広がるのが見て取れる[大

阪市教育委員会1984：図面Ⅱ]。よって宮城南門においても掘形上部が削られて消滅していると考えられるならば、「斜路」があった可能性も考えられるのではなかろうか。

(8) 同じ前期の門遺構で柱の深さが判明しているものに内裏東門SB7501があるが、そこでは北妻面東隅の柱の深さが約2.2mと報告されている。ちなみに柱径は45cmである[大阪市文化財協会1981b：p.34]。この例からみた場合、建物の規模としてより大きな宮城南門でも同じ程度の柱の深さはあったものと推定することができる。すると最低でも約0.8mは削平されていると考えることができよう。

(9) 等間とならない例では、中央間だけが広く(13尺)、ほかは等間(10尺)となっている。

(10) 前期難波宮(652年～)で検出された桁行5間以上の門の総数は7例で、そのうち桁行が等間の例は3例である(それ以外の4例は桁行中央間のみが広い形式である)。この3例は内裏南門SB3301・朝堂院南門・宮城南門で、中軸線上に立つ中心的な門である。伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期遺構(656年～)では、ほぼ同規模の門である内郭南門SB8010、エビノコ郭西門SB7402の2例が知られるが、桁行5間(各10尺)等間、梁行2間(各9尺)と考えられている(いずれも唐尺)[檀原考古学研究所1982]。なお、伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期遺構の例は梁行柱間に対して桁行が1尺長く、前期宮城南門と同形式で注目される。また藤原宮(694年～)では柱間の判明している例のすべてが等間と考えられる(大極殿院東・西門、朝堂院東門、北面中門SB1900、南面中門SB500、東面北門SB2500)。最後に、平城宮(710年～)では判明している8例のうち、桁行が等間の例は3例で、この3例は南面中門(朱雀門)SB1800、南面西門(若犬養門)SB11210、第2次大極殿院閣門SB11200である。これら各宮殿の等間の例に対し、桁行中央3間が広く端間が狭い例には、平城宮第1次大極殿院南門SB7801・朝堂院南門SB9200・第2次大極殿院閣門下層南門SB11210・朝堂院下層南門SB16950・小子門SB5000などがある。この中央3間が広く端間が狭い形式は、判明している範囲では平城宮で初めて現れる形式といえる。このようにみると、まず7世紀の宮殿において中心的な門は桁行が等間であると指摘することができ、また桁行等間の門の割合は前期難波宮から藤原宮にかけて増加し、平城宮にかけて減少していることが見て取れる。また平城宮ではそれに比例して中央3間が広く端間が狭い例が現れ、この例は寺院建築によく見られる形式といえる[宮本長二郎1979：p.100の表]。これは宮殿における門の形式に変化が起こったことを物語るものと考えられよう。ちなみにその他の宮殿例では、近江大津宮(667年～)の推定南門SB001が知られるが、これは東端から4間分だけの検出で、桁行柱間は東端から2.7、3.1、3.14、3.24m、梁行が3.2mである[林博通2001]。この例は中央間(3間以上)が広く端間が狭い形式であり、前記難波宮から続く桁行等間の系譜とは一応別であると考えることができる。以上から、とりあえず近江大津宮の例を別にするならば、前期難波宮から伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期遺構、藤原宮、平城宮へと続く、中心的な門を桁行等間とする系譜は、当時の宮殿建築の一つの特徴と考えることができよう。

なお、近江大津宮の例はこれまで桁行7間として復原されているが、柱掘形の特徴などから桁行5間と考える説がある[黒崎直2001]。近年、大津宮の復原図を再検討された林部均氏は、これまで大津宮の遺構を前期難波宮の遺構に沿わせて解釈してきたことに異議を唱え、むしろそれが伝承飛鳥板蓋宮跡Ⅲ期遺構に類似することを指摘された[林部均2001：pp.78-81]。黒崎・林部両説の観点をふまえたうえで、7世紀において中軸線上に立つ桁行7間の門が前期難波宮にしかないこと、その難波宮の門は宮殿建築における桁行等間の系統と考えられること、さらに7世紀の宮殿建築の門では中央間3間が広く端間の狭い形式がみられないことなどを勘案すると、あくまでひとつの推測ではあるが、近江大津宮の例は桁行5間で、かつ中心的な門ではなかった可能性も考えられるのではなかろうか。

(11) 7世紀の寺院建築に五間門が少ないのは、宮殿に比べて寺院建築の規模が小さいからとも考えられる。ただ、その場合でも桁行等間の門の例が少なく、翻って当時においてはこの五間門という規模そして桁行等間

ということが、宮殿建築の門を表すひとつの指標ということもできると思われる。

- (12)法隆寺金堂は隅において斗栱が45°方向にしか出ず、さらに進んで山田寺金堂や正家廃寺金堂の斗栱形式は玉虫厨子のような放射状のものであった可能性が考えられている[奈良文化財研究所2002：pp.455-456]。これらは、以上にみた玉虫厨子の実測データからすれば、隅の斗栱の角度をある程度自由に換えられる(すなわち視覚矯正が容易である)という点で、極めて美的な観点から採用された可能性も考えられるのではないだろうか。
- (13)通常、掘立柱の建物は足元が固定されるために、柱上部の組み方が比較的ルーズであってももつと考えられ、礎石建ての建物は柱上部を緊結し、重い瓦で押さえることで安定すると考えられる。ただ、文献などからみられる古来の例からすれば、掘立柱であっても礎石建てであっても組み物をはじめとする建物上部構造はそれほど異なっていなかった可能性が指摘されている[浅野清1970：pp.492-497]。
- (14)掘立柱における掘形の掘削では、礎石の据え付けほどの精確度が要求されなかった可能性が指摘されている[工藤圭章1976：pp.92-93]。
- (15)なお、藤原宮で見つかった朝集殿院を画する複廊は掘立柱塀を造り替えたものであることが知られている[奈良文化財研究所2003b：p.2]。そうすると、藤原宮朝集殿院が独立した区画として当初から存在していたとしても、朝集殿院東西を区画する施設が当初は複廊ではなかったことになる。すなわち藤原宮朱雀門脇が当初から複廊であった可能性も現段階では不明となるのである。ここから翻って前期難波宮に朝集殿院区画があったとしても、当初から朝集殿院区画が複廊であった保証はないことになる。よって現段階では翼廊説も引き続き視野に入れつつ検討を行う必要がある。具体的な姿の解明は以後の調査に期待したいと思う。

<引用・参考文献>

- 浅野清1970、「古代建築の構造と建築遺跡」：奈良県立橿原考古学研究所編『日本古文化論攷』吉川弘文館、pp.487-504
- 1971、「講座宮殿と寺院遺跡③ 寺院遺跡(上)」：『仏教芸術』80号 朝日新聞社、pp.84-111
- 石田茂作1972、『飛鳥随想』学生社
- 乾兼松1961、「規矩」：明治前日本科学史刊行会著『明治前日本建築技術史』日本学術振興会、pp.357-420
- 植木久1998、「前期難波宮の造営年代に関する一考察 ―他宮殿との比較から―」：『大阪の歴史と文化財』創刊号、pp.13-21
- 1999、「前期難波宮遺構にみる建築的特色―いわゆる“小柱穴”遺構を中心に―」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.31-49
- 大岡實1971、『日本建築の意匠と技法』、中央公論美術出版
- 大阪市教育委員会1984、『史跡難波宮跡―環境整備事業中間報告―』
- 大阪市文化財協会1981b、『難波宮址の研究』第七
- 1983b、『株式会社センヨウ社屋建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW83-6)略報』
- 1992、『難波宮址の研究』第九
- 1995、『難波宮址の研究』第十
- 1999d、『難波宮跡環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査(NW99-12)報告書』
- 2000a、『難波宮址の研究』第十一
- 太田博太郎1957、「日本建築史古代」：『建築学体系四-I』彰国社、pp.114-122

- 1977、「大安寺の歴史」：『大和古寺大観 第三巻』 岩波書店、pp.53-64
- 岡田英男1983a、「建築規矩術」：『講座・日本技術の社会史 第7巻』 日本評論社、pp.302-317
- 1983b、「古代における建造物移築再用の様相」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』 同朋舎、pp.619-641
- 工藤圭章1976、「古代の建築技法」：『文化財講座 日本の建築2 古代Ⅱ・中世Ⅰ』 第一法規出版、pp.79-137
- 黒崎直1997、「掘立柱塀と築地塀―藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって―」：立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅰ』、pp.323-336
- 2001、「近江大津宮「内裏南門」柱穴考」：西田弘先生米寿記念論集刊行会編『近江の考古と歴史』、pp.163-169
- 斉藤忠1996、「第五 国分寺跡の規模と建物」：『新修国分寺の研究』第六巻 吉川弘文堂、pp.145-204
- 澤村仁2002、「(2)太宰府政庁中心域の建築」：九州歴史資料館編『太宰府正庁跡』 吉川弘文館、pp.439-451
- 清水重敦・長尾充・平澤麻衣子・中島義晴2002、「平城宮第1次大極殿院回廊基壇の復原」：『奈良文化財研究所紀要2002』、pp.27-29
- 鈴木嘉吉1982、日本の美術196『飛鳥・奈良建築』 至文堂
- 積山洋2004、「孝徳期の難波宮と造都構想」：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』 山川出版社、pp.41-63
- 中尾芳治1986、考古学ライブラリー46『難波京』 ニューサイエンス社
- 1995、『難波宮の研究』 吉川弘文館
- 1997、「難波宮―研究状況と課題―」：『都城研究の現在』 おうふう、pp.45-64
- 長山雅一1995、「第2節 前期難波宮の内裏南門」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十、pp.149-158
- 奈良県立橿原考古学研究所1982、「飛鳥京址第74次調査、第78次調査」：『奈良県遺跡調査概報 1980年度』、pp.256-259, 272-275
- 奈良国立文化財研究所1976、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ 小墾田宮推定地・藤原宮の調査』
- 1981、『平城宮発掘調査報告Ⅺ ―第1次大極殿地域の調査―』
- 1987、『薬師寺発掘調査報告』
- 1993、『平城宮発掘調査報告ⅪⅣ』
- 1994、『平城宮朱雀門の復原的研究』
- 奈良文化財研究所2002、『山田寺発掘調査報告』
- 2003a、『吉備池廃寺発掘調査報告』
- 2003b、『奈文研ニュース NO.10』
- 2003c、「大極殿院の調査 ―117次」：『奈良文化財研究所紀要2003』、pp.78-84
- 2003d、『飛鳥藤原第128次調査現地説明会資料 藤原宮朝堂院東南隅の調査』
- 日本古文化研究所1941、『藤原宮址傳説地高殿の調査 二』
- 林部均2001、『古代宮都形成過程の研究』 青木書店
- 古市晃1999、「NW97-2次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』、pp.63-68
- 2002a、「難波宮発掘」：森公章編『日本の時代史3 倭国から日本へ』 吉川弘文館、pp.198-234
- 溝口明訓1999、「山田寺金堂と法隆寺中門の柱間寸法計画について 古代建築の柱間寸法計画と垂木割計画(1)」：『日本建築学会計画系論文集 NO.516』 日本建築学会、pp.229-234
- 宮本長二郎1979、「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」：『日本古寺美術全集2 法隆寺と斑鳩の寺』 集英社、pp.97-104

第4節 NW90-7次調査地から出土した動物遺存体

独立行政法人奈良文化財研究所

宮路淳子・松井章

1) はじめに

NW90-7次調査地は、上町台地北部の大阪府中央区内久宝寺三丁目に所在し、前期難波宮宮殿域や大坂城に隣接する(第IV章第2節)。調査区は、上町台地から西に向かう埋没した谷地形に当り、それを埋める整地層からは飛鳥時代の土器や動物遺存体、豊臣前期の溝からは陶磁器、金属生産関係遺物や動物遺存体が出土した。

今回報告する動物遺存体は、前期難波宮の造営直前(7世紀中頃)に整地のため埋められた、開析谷SX901の第7b2層と第8a層上面、および豊臣前期の溝SD401から出土したものである(表19)。

出土した動物遺存体の破片数は207点で、そのうち種まで同定できたのは117点である(表20~23)。内訳は、ウシが83点と最多で、ウマが31点と続き、この2種で大部分を占めるが、これらはいずれもSX901から出土したものである。また、ニホンジカが3点出土したのは豊臣期の溝SD401である。以下に出土した動物の概要を述べる。

2) 出土した動物遺存体の概要

i) ウマ

破片数で31点出土している。同定できた部位は下顎骨(左3、右3、左右不明2)、肩甲骨(左1)、橈骨(左1、左右不明1)、中手骨(右1)、脛骨(左1)、中足骨(左1、右3)、中手または中足骨(左右不明4)、寛骨(左1)、踵骨(右1)、基節骨(3)、中節骨(1)、遊離歯(4)などである。出土したのは、いずれもSX901の埋土である第7b2層と第8a層上面である。最小個体数はそれぞれ2個体と1個体である。

ii) ニホンジカ

破片数で3点出土しているのみである。同定できた部位は上腕骨(左1)、脛骨(左1)、中足骨(左右不明1)である。いずれも豊臣前期のSD401から出土した。特に加工痕は見られない。

iii) ウシ

破片数で83点出土している。同定できた部位は上顎骨(左4)、下顎骨(左6、右9)、角芯(3)、肩甲骨(左1、右1)、上腕骨(左1、右4)、橈骨(左2、右5)、中手骨(左1、右1)、脛骨(左1、右1)、踵骨(右2)、足根骨(3)、大腿骨(左3、右2、左右不明5)、中足骨(左2、右2)、中手または中足骨(左右不明2)、基節骨(1)、距骨(左1、右3)、遊離歯(10)である。出土したのは、SX901

表19 NW90-7次出土動物種名表

哺乳綱	Mammalia
奇蹄目	PERISSODACTYLA
ウマ	Equus caballus
偶蹄目	ARTIODACTYLA
ニホンジカ	Cervus nippon
ウシ	Bos taurus

内の第7b2層と第8a層上面からで、層位別の最小個体数は、第7b2層が3個体、第8a層上面が3個体と、計6個体を数える。

3) 考察

i) 考古学的に明らかになったウシ

今回出土した動物遺存体のもっとも大きな特色は、ウマに比べてウシが多いことである。筆者らがこれまで扱ってきた、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡から出土する動物遺存体は、一般にウマが多く、ウシが少ないという傾向があった。たとえば平城京右京八条一坊十一坪の、西堀川に相当する運河から出土した動物遺存体617点の中では、ウマが破片数500点以上と大部分で、ウシは10点、イヌが3点、ニホンジカが1点にすぎなかった[松井章1984]。平城京の他の地点でも動物遺存体がまとまって出土する例は決して多くないが、それでもウマが多いという傾向は変わらない。しかし中世になると、ウマとウシの出土量比は逆転する。滋賀県野洲町の小篠原遺跡では、12世紀から15世紀にかけての溝から、ウシが154点、ウマが128点、イヌが8点出土し[松井・宮路2003]、兵庫県芦屋市若宮遺跡では、ウシが117点、ウマが104点、イヌが3点、イノシシが6点、ニホンジカが83点出土している[藤田・宮路・松井2002]。

SX901からは、最小個体数6個体のウシが出土している。ウシの下顎骨の後臼歯列長は、エナメル89.8mm、95.5mm、97.6mmを測り、体高は100～105cmと復元できる。現生の在来牛である見島牛にはほぼ等しい[西中川駿1991]。年齢は、第三後臼歯の萌出段階から、2～3才および5～6才の個体群であるといえる。橈骨や脛骨には、解体の際に付いた金属器特有の鋭利な傷が観察でき、解体された後に投棄されたことを示す。また角芯の輪切りが1点ある。

「魏志倭人伝」には、「其の地、虎豹鵠牛馬なし」と記載されているが、古い調査では、縄文遺跡からウシ・ウマが出土することが珍しくなかったため、かつては、考古学的には縄文・弥生時代にすでにウシやウマが存在したという意見が強かった[たとえば林田1978]。しかし、筆者らはそれまで縄文時代のものとされてきたウマの骨を、フッ素や放射性炭素年代測定法で測定し、後世の混入の可能性が高いことを明らかにし、縄文時代のウシ・ウマの存在の可能性は低くなった[近藤恵ほか1992]。

次に、それでは日本列島にいつ、ウシ・ウマが移入されたかという問題が大きくなった。文献では、『日本書紀』応神紀に、百済から良馬二頭が献上された記事が見え、神話を除けば、これが我が国へのウマの渡来の初現となる。これまでも古墳を中心に出土する馬具の研究から、ウマが普及するのは5世紀以降という意見が強かった。実際、松井も畿内の遺跡から出土するウシやウマは、古墳時代前期、つまり布留式土器に伴うものはほとんど無く、大部分が須恵器を伴うことがわかってきた[松井1991]。

大阪平野の動物遺存体研究に深く関わってきた久保和士も、ウマが一般的に出土するのは5世紀前半から中頃だとし、ウシは足跡でも長原遺跡のRK7Bi層上面(6世紀前半)が最古で、長原遺跡のNG96-66次調査の6世紀後半から7世紀前半の建物柱穴SP6001から出土したウシが古い例だと考える[久保和士1999]。特に長原遺跡の柱穴から出土したウシは、全身が解体されて建物を取り壊す際に祭祀に伴って埋納されたと想定され[久保1999]、全国的に類例のない出土状況を示している。

しかし、全国的に見ると確実にとされている最古のウシは、東京都伊皿子貝塚の弥生時代中期(宮ノ台式期)の第2号方形周溝墓の一角に収められた個体であるが、他には弥生時代のウシの確実な出土はほとんどない。古墳時代になると、後述するように神奈川県横須賀市鉾切遺跡から祭祀土坑からウシの頭蓋骨が出土している[横須賀市教育委員会1986]。

長崎県松浦郡福江市の大浜遺跡は以前から弥生時代のウシが出土することで名高く、現地に「日本最古の牛の出土遺跡」の石碑も建てられている。近年、長崎県教育委員会が発掘したところ、やはり多くのウシが出土した[宮路淳子1998]。しかし、この遺跡の上層には古代の包含層が重なり、海岸性の礫混じりの弥生時代の包含層に伴うかどうか疑問に思えた。長崎県教委がAMS放射性炭素年代測定法で出土したウシの臼歯1本、ウマの臼歯3本の測定を依頼したところ、弥生時代のものは見られず、すべて中央値で7世紀から8世紀、5%の誤差を入れても6世紀から9世紀の年代に収まった。しかし、福江市教育委員会が表採で得られたウシの臼歯の年代測定を依頼したところ、弥生時代中期の年代が得られたという[長崎県教育委員会1998](註1)。今後、さらに多くのウシやウマの年代測定が必要であろう。

ii) 文献に見るウシ

神話を除いた牛の記事は、『日本書紀』安閑紀2年の記事が古い。そこには「別に大連に勅して云く、宜しく牛を難波の大隅嶋と媛嶋の松原とに放つべし。ねがわくは名を後世に垂れむ」とあり、難波の大隅嶋、媛嶋にウシを放ったと記される。これが史実を反映しており、安閑天皇の在位(『日本書紀』では、531～535年)を6世紀前半から中頃にかけてとすると、大阪平野でウシが一般的に出土するより約半世紀前にあたり、牛牧の設置記事をウシの導入からさほど時を経ない時期と考えると、牛牧の設置から畿内に普及するまでに半世紀を要したと考えることはあながち不可能ではないだろう。佐伯有清は、安閑元年十月紀にみえる難波屯倉の設置と、安閑2年の牛牧とを関連づけ、屯倉経営の進展がウシの計画的な飼養・繁殖を促したと指摘している[佐伯有清1967]。

『三国志』[井上秀雄ほか訳注1980]の朝鮮半島に関するウシの記載を見ると、まず魏書東夷伝の韓の条(馬韓)には「牛馬に乗ることを知らない。牛馬は死体を運送することのみに使用している」とあり、牛馬はいるけれども、葬送儀礼に使われるだけで実用には用いられていないとされる。さらに辰韓の条には「牛馬に乗る」と乗用に使われると記述されている。『三国志』のこれらの記載は、日本の弥生時代後期から古墳時代のはじめ頃、朝鮮半島の南部ではウシが飼養されていたことを示唆しているといえる。さらに、韓伝の後半には、「また州胡がある。馬韓の西方海上の大きな島にある。(中略)好んで牛や豚を飼育し」とあり、馬韓の西方の島でウシおよびイノシシが飼養されていた有様を示している。

また、『三国史記』[井上ほか訳注1974]の新羅本紀第一には「婆娑尼師今、五年(84)夏五月、古施郡主が青牛を献上」、同本紀第三には「訥祗麻立干、二十二年(438)夏四月、国民に牛や車の扱い方を教えた」、同本紀第四には「智證麻立干、三年(502)春三月、州主や郡主にそれぞれ命令を下し、農業を奨励させた。はじめて牛を耕作に使用した」とあり、5世紀中葉～6世紀初頭に、新羅でウシを飼い、牛耕を行っていたと見ることができる。

肥前風土記・松浦郡の条の「値嘉嶋」は「在郡西南之海中、有倭家三所」(前略)彼白水郎富於牛馬(下

略)」と記述されており、この嶋に牛馬が豊富に存在していたことを推察しうる。値嘉嶋は五島列島と考えられ、福江島大浜遺跡との関連が思い起こされる

古墳時代の祭祀にウシを用いたと考えられるのは、神奈川県鉾切遺跡C地点のSK01(7世紀初頭)の発掘例である。これは1.3×約1mの長円型の周囲に石を配置した浅い土坑に、土師器杯3個体、甕4個体とウシの頭蓋骨を裏返しに配置していた祭祀遺構である[横須賀市教育委員会1986]。古墳時代から古代にかけての自然河川、溝、都城の側溝、水田の畦畔などからウシの頭蓋骨や下顎骨が祭祀具と共伴して出土することは珍しいことではないが、それだけで祭祀と認定するのは困難なことが多い。それは、不要になった祭祀具と、ウシやウマの骨とを同じ場所に投棄しただけかもしれないからである。

やや時代は降るが、『日本書紀』皇極紀元年七月の条に、「群臣相語りて曰く、村々の祝部(はふりべ)の所教(をしえ)の随(まま)に、或は牛馬を殺して諸の社の神を祭る。或いは河伯(かわのかみ)に祈る。既に所効(しるし)無し、」とあり、旱魃に際して、都の近くの村々が、牛馬を殺して河伯(かわのかみ)を祭ったと記す。この河伯は、漢神つまり道教の神と考えられているが、中国から朝鮮半島を経て移入された信仰であろう。『続日本紀』延暦十年に「断伊勢、尾張、近江、美濃、若狭、紀伊等国百姓、殺牛用祭漢神」とあり、同様の記事が『日本後紀』延暦20年にも見え、「越前国禁行□加□□□屠牛祭神」とあり、牛を屠って神を祭ることをたびたび国家が禁止したと読み取れよう。また『日本霊異記』中巻、「漢神の崇りに依り、牛を殺して祭り、又放生の善を修して、以て現に善惡の報を得し縁」の説話にも仏教の側からの漢神を祭ることの誤りを戒める内容がある。このように日本に伝えられた漢神を祭るのに、ウシを犠牲に用いたことがわかり、それが国家およびその庇護のもとにあった仏教の禁止するところとなったことがわかるだろう。このように古代を通じて、公的にウシを祭祀に用いることが禁止され、また文献からも姿を消すが、民間信仰として牛馬を神に供える習俗は生き続け、雨乞いの際や豊穰を祈る農耕祭祀を始め、神(漢神)に祈るためにウシ(またはウマ、あるいはそのほかの哺乳類)を殺して神に捧げる習俗が近現代まで続いたことが、発掘の成果[松井2003]や雨乞いの民俗学的研究[高谷重夫1982]によって明かにされてきた。『三国志』魏書東夷伝・扶余の条に[井上ほか訳注1974]、「牲(いけにえ)の牛を多く養い、(中略)戦争をはじめるときも、天を祭り、牛を殺し(その)蹄をみて、(開戦の)吉凶を占う。蹄が開いていれば凶、合わさっていれば吉」と、ウシが盛んに吉兆を占うのに使われたと記され、『晋書』扶余国伝にもそのまま踏襲されている。扶余の年代を1世紀はじめから3世紀を全盛期、それ以降を衰退期として5世紀末に滅亡したとすると、その頃に、扶余地方ではすでに多くのウシを飼育し、祭祀にも用いていたと考えて良いだろう。

iii) ウマの出土

ウマは、下顎骨の全臼歯列長が162mmであり、体高は130cm前後と復元できる。基節骨の最大長の大きさなどからも、本地区から出土しているウマには、体高が大きな個体が含まれることがわかる。

7世紀中頃の時期には、ウシの出土例は全国的にみてもまだ限られており、西日本に多い。またウマも大型の個体が含まれていることなどから、今回谷地形から出土したウシおよびウマは、有力者に保有された牛馬である可能性が高いといえるのではないだろうか。

4) まとめ

① 豊臣前期のSD401からは、ニホンジカの上腕骨・頸骨・中足骨が3点出土した。切痕は認められず、利用方法は不明であるが、本地区が櫛刈いの工房が存在した住友銅吹所[久保1998]の前身遺構の近隣に立地することから、シカを素材とした骨細工に関係する遺物であった可能性が考えられる。

② 7世紀中頃の、難波宮造営のための整地にとまって埋められた谷地形の埋土から、破片数でウシが83点、ウマが31点出土した。ウシとウマの出土破片数比は8:3で、ウシの出土数がこのように多いことは、古代では例がない。

③ ウシは体高105~110cmと復元でき、在来牛にほぼ等しい。

④ 散乱状態で出土したウシの橈骨、脛骨には鋭利な切痕が残り、解体されたことが明かである。

⑤ 7世紀中葉の他の遺跡の出土例と比較して、今回の出土数は多いと言え、背後に難波宮の造営に多くのウシが供出されたことをうかがわせる。

⑥ 難波宮造営直前に行われた整地に伴って埋め立てられた谷から、最小個体数で6個体(第7b2層および第8a層上面)のウシが出土している状況から、宮造営に伴う殺牛行為の可能性も視野に入れる必要がある。

⑦ ウマは体高130cm前後と復元でき、8世紀の平城京で出土する個体に匹敵するほど体格が良い

本地区から出土した動物遺存体は、7世紀中頃の難波宮造営期の動物利用の実態を知るうえで、貴重な資料といえる。

今回、難波宮造営期の貴重な資料分析を行わせて頂きました、財団法人大阪市文化財協会の皆様には、心より御礼を申し上げます。

註)

(1) しかし、以前の発掘で出土した歯を独自に年代測定したところ、1910±90 BP.(A.D.40)という年代も得られている。

<引用・参考文献>

鑄方貞亮1982、『改訂 日本古代家畜史』有明書房、586p

井上秀雄ほか訳注1974、『東アジア民族史』1 正史東夷伝 東洋文庫264 平凡社

1980、『三国史記』1 東洋文庫372 平凡社

加茂儀一1976、『日本畜産史 食肉・乳酪篇』法政大学出版局

久保和士1993、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.124-127

1995、「南口古墳出土のウマについて」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅤⅢ、pp.407-413

1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.339-377

1999、「動物遺体の調査結果と検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107-120

久保和士・松井章1999、「家畜その二—ウマ・ウシ」：『考古学と動物学』考古学と自然科学② 同成社、pp.169-208

- 久保和士・松井章・宮路淳子・佐久間桂子2000、「長原遺跡95-14次調査出土の動物遺存体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』X V、pp.159-172
- 近藤恵・松浦秀治・中井伸之・中村俊夫・松井章1992、「出水貝塚縄文後期貝層出土ウマ遺存体の年代学的研究」：『考古学と自然科学』第26号 日本文化財学会、pp.61-71
- 佐伯有清1967、『牛と古代人の生活』 至文堂、218p
- 高谷重夫1982、『雨乞習俗の研究』 法政大学出版局、746p
- 長崎県教育委員会1998、『大浜遺跡』、93p
- 西中川駿1991、『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(研究課題番号014900 18)平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、197p
- 林田重幸1978、『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会、180p
- 藤田正勝・宮路淳子・松井章2002、「若宮遺跡第34地点出土の動物遺存体」：芦屋市教育委員会編『若宮遺跡発掘調査報告書』、pp.230-243
- 松井章1984、「平城京右京8条1坊11坪の動物遺存体」：奈良国立文化財研究所編『平城京右京8条1坊11坪発掘調査報告書』、pp.54-56
- 1991、「家畜と牧-馬の生産-」：『古墳時代の研究』4 雄山閣出版、pp.105-119
- 2003、「動物祭祀」：『神々のいる風景(いくつもの日本Ⅶ)』 岩波書店、pp.89-119
- 松井章・宮路淳子2003、「小篠原遺跡(旧和田遺跡)出土の動物遺存体」：野洲町教育委員会編『野洲町文化財年報2000』、pp.242-249
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査団1981、『伊皿子貝塚遺跡』 日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会、640p
- 宮路淳子1998、「大浜遺跡出土の動物遺存体」：長崎県教育委員会編『大浜遺跡』、pp.55-60
- 横須賀市教育委員会1986、『鉞切遺跡-C・D地点の調査-』 横須賀市文化財調査報告書第12集、183p
- Cornwall,I.W.1956、Bones for the Archaeologist. J.M.Dent & Sona Ltd.

表20 NW90-7 次出土動物遺存体観察表(1)

No.	地層	遺構	小分類	part	portion	L/R	teethrow	existence	po	p	ms	d	do	CM	TM	BM	備考	GL	Bp	Bd	全臼歯列長	前臼歯列長	後臼歯列長
R479		SD401	ニホンジカ	上腕骨		L		0	0	1	1	1	1	0	0	0				37.3			
R480		SD401	ニホンジカ	脛骨		L		0	0	1	1	1	1	0	0	0				32.3			
R363		SD401	ニホンジカ	中足骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	上顎骨		L	P2-M3	0						0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	上顎骨		L		0						0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	上顎骨		L		0						0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	上顎骨		L		0						0	0	0							
R485	第7b2層		ウシ	下顎骨	関節突起	L		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	下顎骨	関節突起	R		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	下顎骨	関節突起	R		0						0	0	0							
R485	第7b2層		ウシ	下顎骨		R	M2-3	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	下顎骨		R	P2-M2	0						0	0	0					70.4		
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		L		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		L	M3	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		L		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		R		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		R		0						0	0	0						97.6	
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		R	P3-M2	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		L	M2-3	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		L	P2-M3	0						0	0	0						95.5	
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		R	P2-M3	0						0	0	0						89.8	
R493	第8層上面		ウシ	下顎骨		R	M1-2	0						0	0	0	M3萌出中 2-3才						
R492	第7b2層		ウシ	角		L/R		0						1	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	角		L/R		0						1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	角				0						1	0	0	輪切り						
R493	第8層上面		ウシ	基節骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	距骨		L		1	1	1	1	1	1	0	0	0		71.6					
R493	第8層上面		ウシ	距骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0		76.1					
R493	第8層上面		ウシ	距骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0		71.5					
R495	第8層上面		ウシ	距骨		R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R486	第8層上面		ウシ	脛骨		L		0	0	1	1	1	0	1	0	0	鋭利な傷						
R493	第8層上面		ウシ	脛骨		L		0	0	1	1	1	1	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	脛骨		R		0	0	0	1	1	1	0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	肩甲骨		L		0	0	0	0	0	1	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	肩甲骨		R		0	0	0	0	0	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	踵骨		R		0	0	1	1	1	1	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	踵骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0		144.5					
R493	第8層上面		ウシ	上腕骨		L		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	上腕骨		R		0	0	0	1	1	0	1	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	上腕骨		R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	上腕骨		R		0	0	0	1	1	1	1	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	上腕骨		R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	足根骨				1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	足根骨				1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	足根骨				1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	大腿骨		L		0	1	0	0	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	大腿骨		L		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	大腿骨		L		0	0	0	1	1	1	0	0	0							
R482	第7b1層		ウシ	大腿骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R482	第7b1層		ウシ	大腿骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	大腿骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	大腿骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	大腿骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	大腿骨		R		0	0	0	1	0	0	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	大腿骨	大腿骨頭	R		0	1	0	0	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	中間・外側楔状骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0							

表21 NW90-7次出土動物遺存体観察表(2)

No.	地層	遺構	小分類	part	portion	L/R	teethrow	existence	po	p	ms	d	do	CM	TM	BM	備考	GL	Bp	Bd	全臼歯列長	前臼歯列長	後臼歯列長
R493	第8層上面		ウシ	中間・外側楔状骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	中手/中足骨		L/R		0	0	0	0	0	1	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	中手/中足骨		L/R		0	0	0	0	1	1	0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	中手骨		L		0	1	1	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	中手骨		R		0	1	0	0		0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	中節骨		L/R		0	0	0	0	1	1	0	0	0							
R494	第8層上面		ウシ	中足骨		L/R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	中足骨		L		0	0	0	0	1	1	0	0	0				62.6			
R495	第8層上面		ウシ	中足骨		L		0	1	0	0	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	中足骨		R		0	0	1	1	1	0	0	0	0							
R495	第8層上面		ウシ	中足骨		R		0	1	1	0	0	0	0	0	0							
R482	第7b1層		ウシ	橈骨		L		0	0	0	1	0	0	1	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	橈骨		L		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	橈骨		R		0	0	0	0	0	1	0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	橈骨		R		0	0	0	0	0	1	1	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	橈骨		R		0	1	1	0	0	0	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	橈骨		R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	橈骨		R		0	0	0	1	0	0	1	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	舟状立方骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	舟状立方骨		R		1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R484	第7b2層		ウシ	遊離歯	上顎	L	白歯	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	下顎	L	M2	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	下顎	L	M3	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	下顎	L	P2	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	遊離歯	上顎	L	白歯	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	下顎	L/R	破片	0						0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ	遊離歯	下顎	R	白歯	0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	上顎	R		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウシ	遊離歯	上顎	R		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ	遊離歯	下顎		切歯	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		L	P2-M3	0						0	0	0					162.0	84.1	77.6
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		L		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		L	P4-M2	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		L/R		0						0	0	0							
R494	第8層上面		ウマ	下顎骨	関節突起	L/R		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		R	P2-M3	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨		R	M3	0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	下顎骨	関節突起	R		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウマ	寛骨		L		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウマ	基節骨		L/R		1	1	1	1	1	1	0	0	0				77.0			
R493	第8層上面		ウマ	基節骨		L/R		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	基節骨		L/R		0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	脛骨		L		0	0	1	1	1	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	肩甲骨		L		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	踵骨		R		0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R492	第7b2層		ウマ	中手/中足骨		L/R		0	0	0	0	1	1	1	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中手/中足骨		L/R		0	0	0	0	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中手/中足骨		L/R		0	0	0	0	0	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中手/中足骨		R		0	0	0	1	1	1	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中手骨		R		0	0	1	1	1	1	0	0	0							
R485	第7b2層		ウマ	中節骨		L/R		1	1	1	1	1	1	0	0	0							
R492	第7b2層		ウマ	中足骨		L		0	0	0	1	1	1	1	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中足骨		R		0	0	1	1	1	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中足骨		R		0	1	1	1	1	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中足骨		R		0	1	1	1	1	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	中足骨		R		0	1	1	1	1	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウマ	橈骨		L		0	0	1	1	1	1	0	0	0							

表22 NW90-7次出土動物遺存體觀察表(3)

No.	地層	遺構	小分類	part	portion	L/R	teeth	throw	existence	po	p	ms	d	do	CM	TM	BM	備考	GL	Bp	Bd	全白濁列長	前白濁列長	後白濁列長
R493	第8層上面		ウマ	焼骨		L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウマ	遊離歯	上顎	L	白歯		0						0	0	0							
R487	第7b2層		ウマ	遊離歯	上顎	R	白歯		0						0	0	0							
R492	第7b2層		ウマ	遊離歯	上顎	R			0						0	0	0							
R487	第7b2層		ウマ	遊離歯	破片				0						0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R487	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R460	第7b2層		ウシ/ウマ	下顎骨	破片				0						0	0	0							
R460	第7b2層		ウシ/ウマ	下顎骨	破片				0						0	0	0							
R460	第7b2層		ウシ/ウマ	四肢骨	破片				0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	頭蓋骨	破片				0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシ/ウマ	肋骨				</																

表23 NW90-7次出土動物遺存体観察表(4)

No.	地層	遺構	小分類	part	portion	L/R	teeth	throw	existence	po	p	ms	d	do	CM	TM	BM	備考	GL	Bp	Bd	全白歯列長	前白歯列長	後白歯列長
R493	第8層上面		ウシバウマ	上腕骨	上腕骨頭	L/R			0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肋骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	椎骨	棘				0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	椎骨	棘				0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	椎骨	棘				0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	椎骨	棘				0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	椎骨					0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	大腿骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R494	第8層上面		ウシバウマ	四肢骨	破片	L/R			0						0	0	0							
R494	第8層上面		ウシバウマ	四肢骨	破片	L/R			0						0	0	0							
R494	第8層上面		ウシバウマ	四肢骨	破片	L/R			0						0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	肩甲骨		L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	腕骨		L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R493	第8層上面		ウシバウマ	四肢骨	破片	L/R			0	0	0	1	0	0	0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R483	第7b2層		哺乳類	不明	破片				0						0	0	0							
R463	第8層上面		不明	破片					0						0	0	0							
R463	第8層上面		不明	破片					0						0	0	0							
R463	第8層上面		不明	破片					0						0	0	0							

(凡例)

No: 取り上げ時の番号

po: 近位 p: 近位 ms: 骨幹 d: 遠位 do: 遠位端

CM: 切痕 TM: 噛み痕 BM: 焼け痕 (0はなし、1はあり)

GL: 最大長 Bp: 近位端幅 Bd: 遠位端幅 BT: 滑車部幅 SD: 骨幹最小幅 (単位はmm)

第5節 法円坂2丁目所在近世墓地の出土人骨

大阪市立大学大学院医学研究科

安部みき子・石井麻里絵

1)はじめに

大阪市中央区に位置する国立大阪病院(現国立病院大阪医療センター)の敷地内で、18世紀中頃から19世紀の墓地が検出され、土葬および火葬された人骨が出土した(第Ⅳ章第1節)。これらの人骨の出土状況と観察結果ならびに骨計測値については表25～34で示した。また、長骨の最大長が計測できた個体についてはピアソンの推定式より身長を推定した。

2)各人骨の概要

1号墓人骨(図版29) 唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺から出土した。遺存部位は頭蓋骨骨片、左下顎第1乳臼歯、右下顎犬歯と第1大臼歯、椎骨の椎弓、肋骨骨片、四肢骨の長骨骨幹である(表25)。年齢は乳臼歯が遺存していること、第1大臼歯や切歯は歯冠のみ形成され、左右の椎弓が癒合していないことなどより2才前後と思われる。

2号墓人骨(図165、図版29) 唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺から

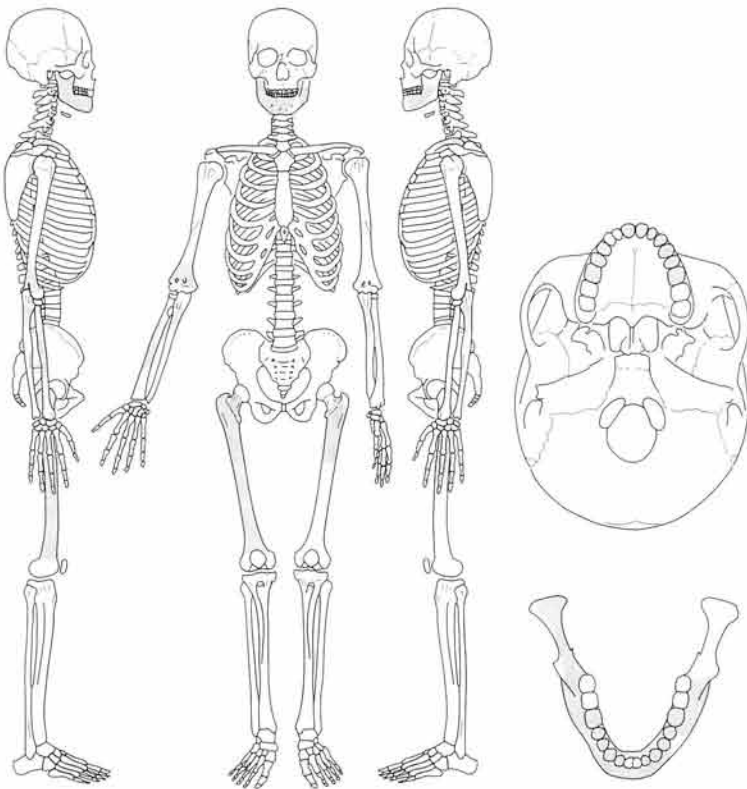


図165 2号墓人骨残存部位

表25 1・2号墓人骨の歯の残存状況

1号墓人骨									
左					右				
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	*i1	—	—
2号墓人骨									
左					右				
—	—	*M1	*p2	*p1	*c	*i2	*i1	*i1	—
—	—	*M1	*p2	*p1	c	i2	—	—	—
—	—	*M1	*p2	*p1	*c	*i2	*i1	*i1	—
—	—	*M1	*p2	*p1	c	i2	—	—	—

小文字は乳歯、*：遊離歯、—：不明、☆：齧歯、●：脱落後の歯槽または閉鎖した歯槽、「|」で区切ったものは複数個体、「/」は同一個体で乳歯と永久歯が釘植(以下の歯の残存状況の表はこれに倣う)

表26 3～5号墓人骨の歯の残存状況

3号墓人骨														
左							右							
—	—	—	—	—	*C	*I2	*I1	*I1	—	*C	—	—	*M1	*M2
—	—	*M1	*P2	*P1	*C	—	—	—	—	—	*P1	*P2	—	—
4号墓人骨														
左							右							
—	—	—	*P2	*P1	*C	*I2/i2	—	*I1/i1	*I2	*C/c	—	*p2	*M1	*M2
—	—	—	—	*P1/p1	—	I2	I1	I1	—	C/c	—	P2/p2	M1	—
5号墓人骨(成人2人分)														
左							右							
—	—	—	●	●	●	●, *I1	●	●	●	*P1	—	*M1	—	—
●, *M2	●	*P2	—	—	*I2	—	—	—	—	—	*P2	*M1, *M1	*M2	—

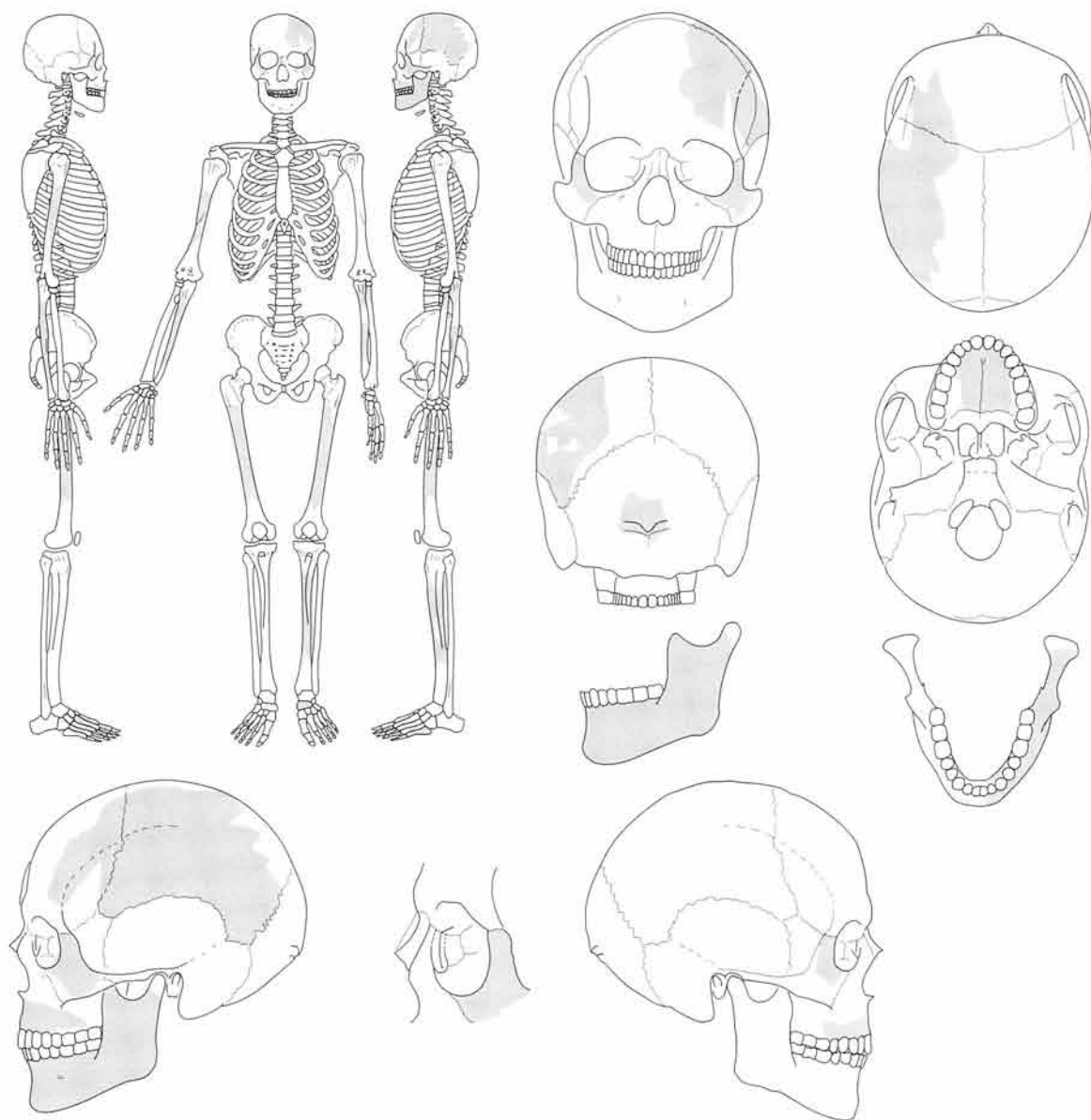


図166 5号墓人骨残存部位

出土した土葬人骨である。保存状態は比較的良く、下顎骨、肋骨片、鎖骨、上腕骨遠位端と前腕の骨幹、大腿骨が出土し、四肢骨の長骨骨端は化骨していない。下顎骨に釘植している歯は乳切歯と乳犬歯の萌出が完了し、乳臼歯は萌出途中である(表25)。第1大臼歯は歯冠のみできている。歯の状態より推定した年齢は18ヶ月前後である。両骨端が化骨していない右大腿骨の骨幹最大長を計測した結果、162.43mmである。

3号墓人骨(図版31) 桶棺より出土した人骨で、火葬骨と火葬されていないものとが混在している。火葬骨は左右不明の大腿骨骨幹部のみが遺存し、大きさは成人のものより小さい。土葬人骨は頭骨の前頭骨と左右側頭骨の錐体、歯が遺存している。その他の部位は碎片であり、同定はできなかった。年齢は下顎第3大臼歯の萌出が完了し、磨耗が始まっていることより20才前後と推定された(表26)。

4号墓人骨(図版31) 桶棺から出土した土葬の人骨は比較的保存状態が良く、頭骨は左右側頭骨錐体と頭蓋片、下顎骨と歯が遺存している。椎骨は環椎が細片となっているほかは椎体が5点出土し、肋骨は小片で多数出土している。上肢は左鎖骨と肩甲骨の外側縁、左右不明の上腕骨と前腕骨の骨幹が遺存している。下肢は長骨の骨幹のみが遺存している。年齢は第1大臼歯の歯根の形成がほぼ完了し、第2大臼歯の歯冠が形成され始めていること、切歯の生え変わりが始まっていることより5～6才と推定される(表26)。

そのほかに、火葬骨片が1点とモグラの上腕骨が出土しており、これは混入したものと思われる。

5号墓人骨(図166、図版30) 桶棺で土葬された人骨(図版16上)で、頭蓋冠の一部や下顎骨、四肢骨の長骨の骨幹などが出土した。遺存している下顎骨は左側で、第1、2大臼歯の歯槽が閉鎖し、第3大臼歯の歯槽は閉鎖途中であることより成人である(表26)。また、右下顎第1大臼歯が遊離歯で2点出土し、さらに、未萌出の永久歯歯冠3点と右上顎第1乳臼歯が出土した。四肢骨は成人のものと思える大きさであり、この墓が形成された状況から見て、埋葬された人骨は成人であると思われるが、重複する成人の下顎第1大臼歯や幼児の歯は混入と思われる。成人の性の判定はできなかった。

6号墓人骨(図167、図版27) 桶棺から出土した土葬人骨で、比較的保存状態が良くほぼ全身が出土しているが、頭骨では顔面頭蓋が、四肢骨では長骨の骨端が破損している。年齢は第3大臼歯が歯槽の中にあり萌出中であること(表27)、寛骨のY軟骨が未骨化であることなどから15才前後と思

表27 6～8号墓人骨の歯の残存状況

6号墓人骨															
左								右							
—	—	—	*P2	*P1	—	—	*I1	*I1	—	*C	—	—	—	—	—
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3
7号墓人骨															
左								右							
—	—	—	—	*P1	—	—	—	—	—	*C	—	—	—	—	—
☆M3	M2	M1	—	P1	—	—	—	—	—	C	—	—	—	—	—
8号墓人骨															
左								右							
—	—	—	*P2	*P1	*C	*I2	*I1	*I1	—	*C	*P1	—	*M1	—	—
—	*M2	*M1	*P2/p2	*P1/p1	—	*I2	*I1	*I1	*I2	—	*P1/p1	*P2	*M1	—	—

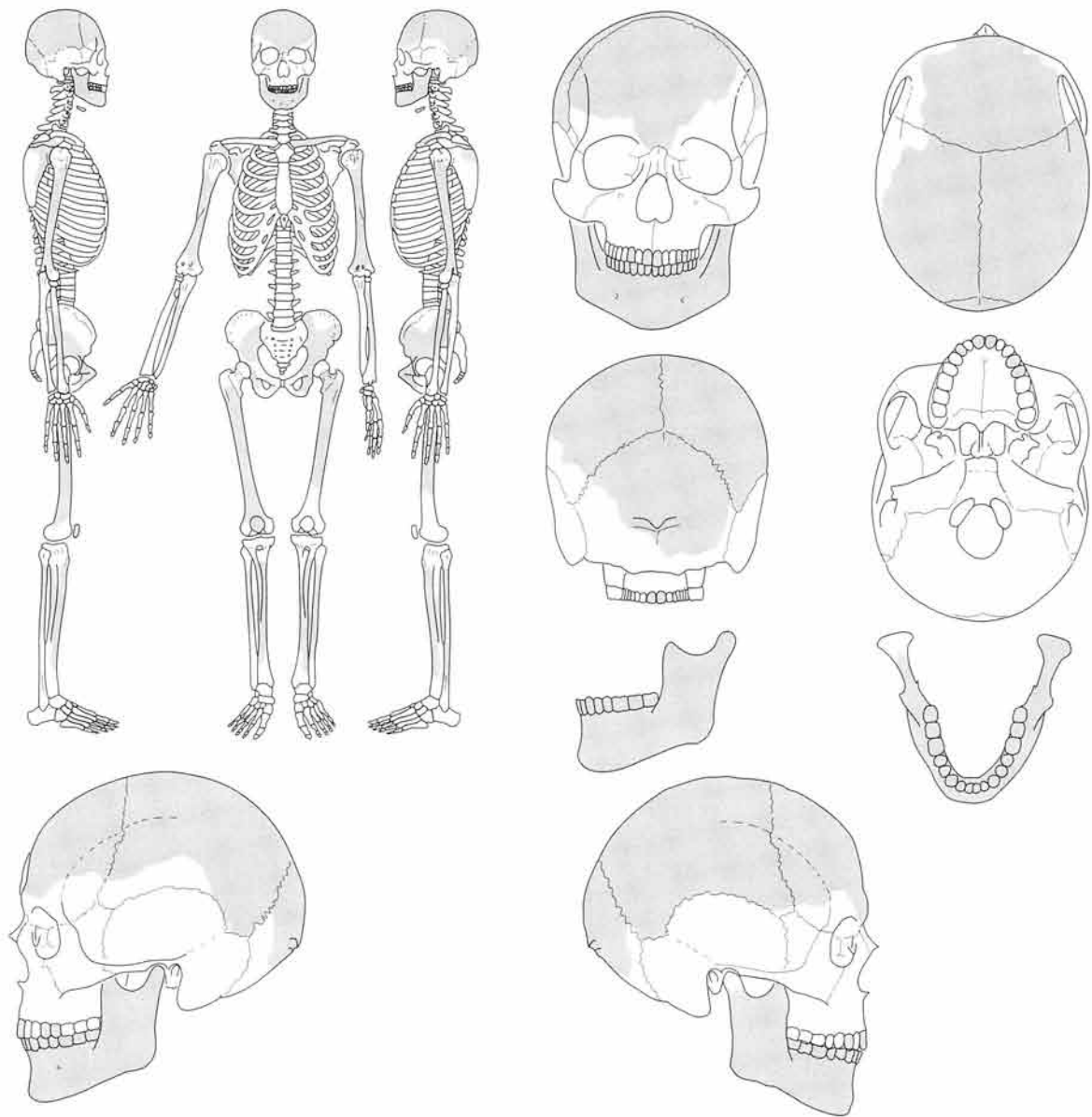


図167 6号墓人骨残存部位

われる。骨格が成長段階にあるため性の判定は行わなかった。

7号墓人骨(図168、表27・29、図版28) 桶棺で土葬された人骨(図版16中)で、ほぼ全身が出土し、特に四肢骨の保存状態がよいため骨計測ができた(表29)。性の判定は寛骨の大坐骨切痕の角度から女性と判定し、腸骨耳状面の下縁に現れる妊娠線も比較的浅いが確認できた。年齢は下顎の第3大臼歯が萌出し、磨耗が始まっていることより20才～25才程度と推測した。

頭骨は顔面部が破損しているため詳細な骨計測はできなかったが、脳頭蓋最大長と脳頭蓋最大幅が計測でき、前者が175.10mm、後者が138.65mmで頭蓋長幅示数は79.18となり、短頭に近い中頭である。四肢骨は、鎖骨の最大長は約125mmで短く、上腕骨は長厚示数が20.50で華奢である。大腿骨の骨幹上断面指数は90.84で真大腿骨であり、脛骨は栄養孔位で計測した結果、中脛に近い扁平脛骨である。身長は上腕骨の最大長より145.33cmとなる。これらの結果と筋の付着部位の観察などより、身長は平均よりやや低く、全身の骨格は華奢である。

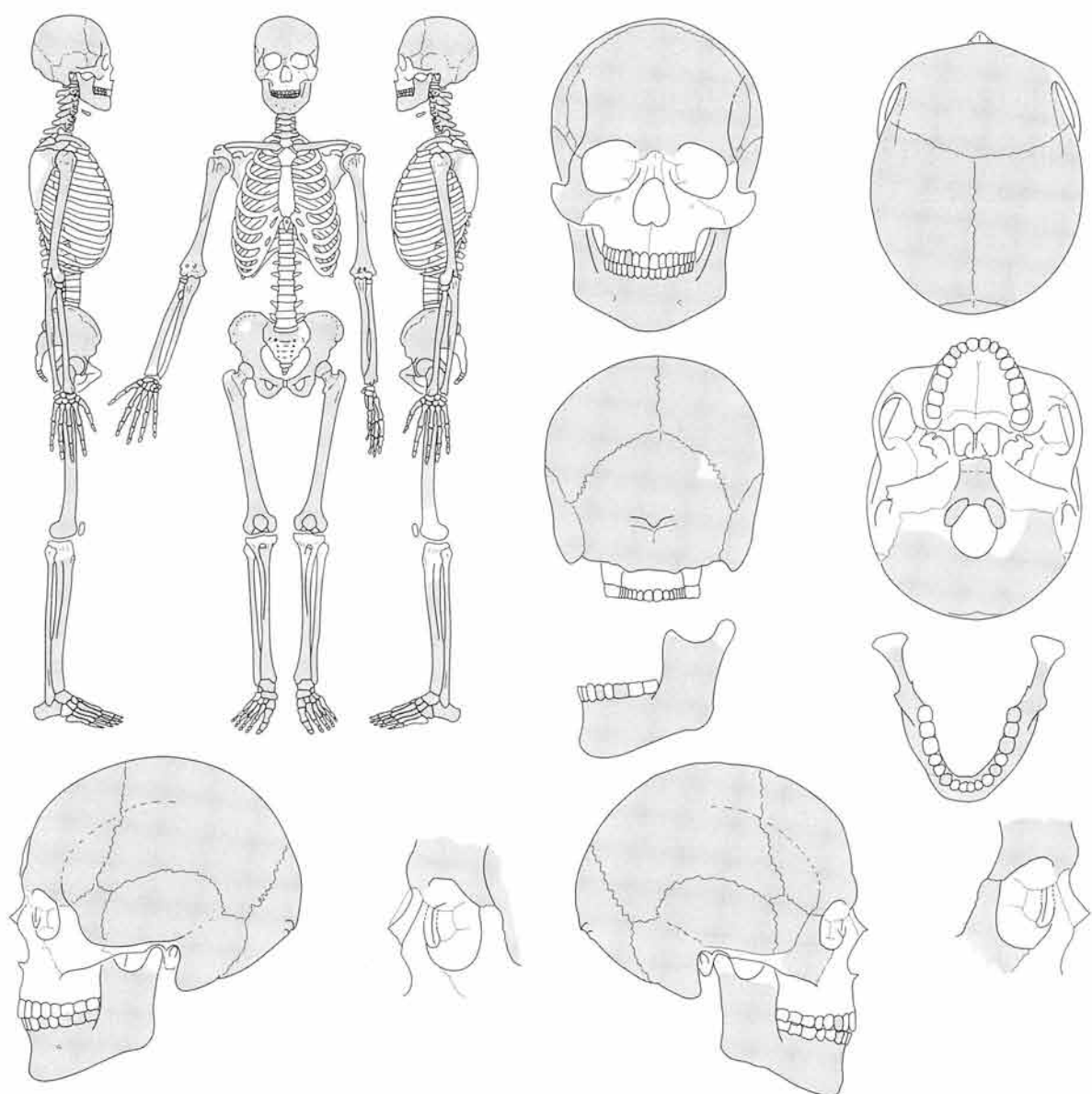


図168 7号墓人骨残存部位

左下顎第3大臼歯の舌側咬合面の後方が黒色に変色しているため、齲歯の初期段階と思われる。

8号墓人骨(図版32) 桶棺で土葬された人骨で、遺存している部位は歯で、顎骨は破損している。下顎は乳臼歯が遺存しているがほかの歯は全て永久歯であり、第2大臼歯の歯冠はほぼ完成している(表27)。これらの結果より9才前後と推定される。

9号墓人骨(図170、図版31) 桶棺から出土した土葬人骨のため、保存状態は比較的悪く、頭蓋骨骨片と臼歯、左右上腕骨、左尺骨と橈骨、左大腿骨骨幹、左脛骨骨幹と腓骨骨幹中央から遠位端まで、左第1中足骨と足根骨の一部が遺存している。これらの骨は成人の大きさであるが、詳細な年齢を推定できる部位が遺存していない。性も判定できる部位は遺存していない。出土した右上顎第1大臼歯は舌側後部が齲歯である(表28)。

10号墓人骨(図169、図版28) 桶棺から出土した土葬人骨(図版16下)で、保存状態が良く、ほぼ全身が出土している。しかし、骨端の保存は悪く、骨計測はできなかった。肉眼観察では長骨の骨幹

は華奢で、筋の付着部はあまり発達していない。歯は顎骨が破損しているためすべて遊離歯であった。第3大臼歯は一部の咬頭にわずかに磨耗が見られ、推定年齢は20～25才程度と思われる(表28)。性は頭骨や寛骨の大坐骨切痕が破損しているため判定できなかった。

11号墓人骨(図版32) 桶棺から出土した土葬人骨で、保存状態は悪く、歯と大腿骨骨幹以外は細片であった。歯は上顎が右第1大臼歯以外は出土していないが、下顎は左下顎第2小臼歯以外は第2大臼歯まで出土している。また、左右の第2乳臼歯も遺存している(表28)。年齢は、第2大臼歯の歯根が形成されていないこと、第2乳臼歯が存在していることから、10才前後と推定される。性の判定はできなかった。

12号墓人骨(図版32) 唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺から出土した土葬の人骨で、保存状態が悪く、歯以外は頭骨の破片がわずかに遺存しているのみである。遺存している歯は上顎が左右の第2

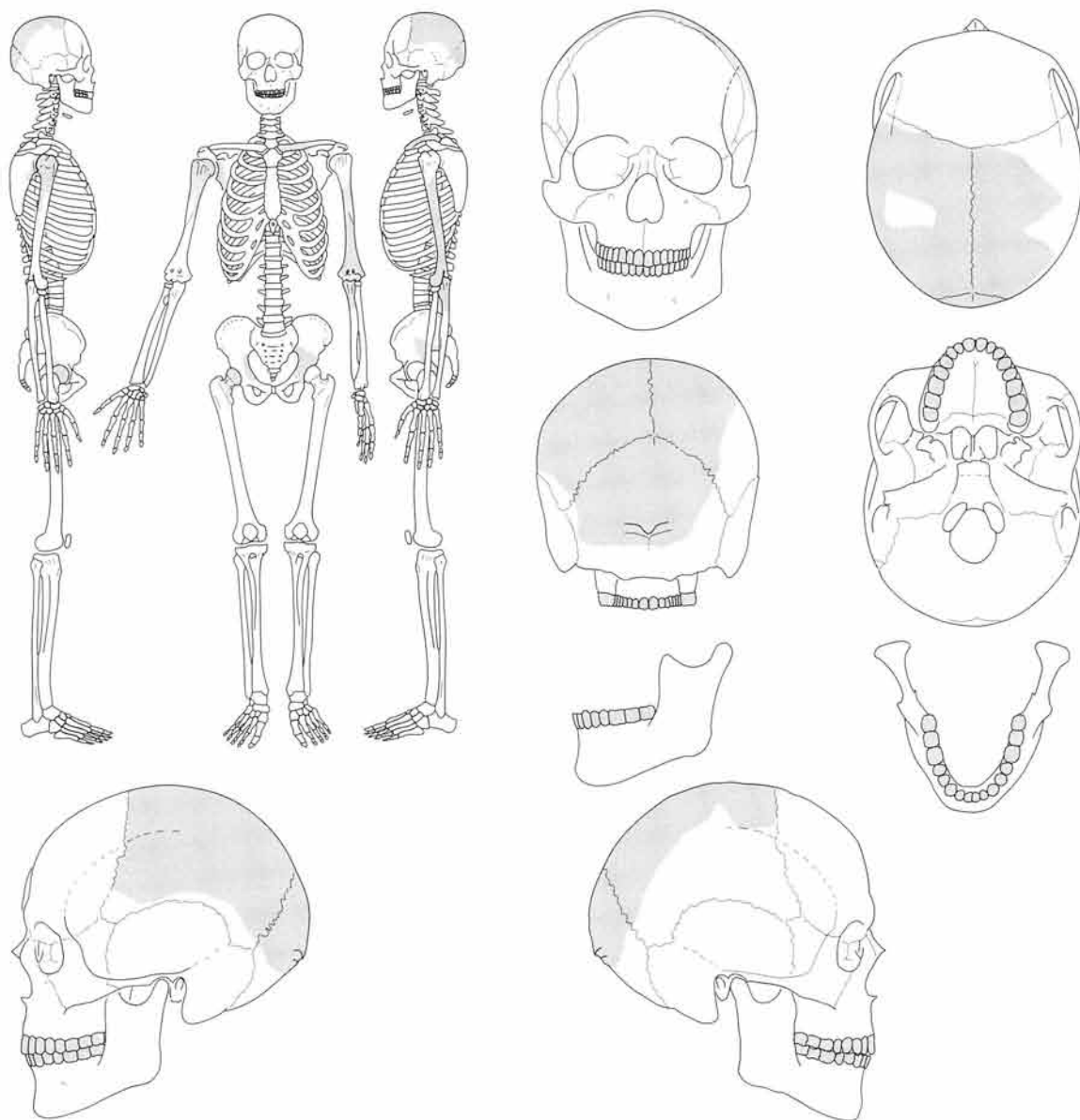
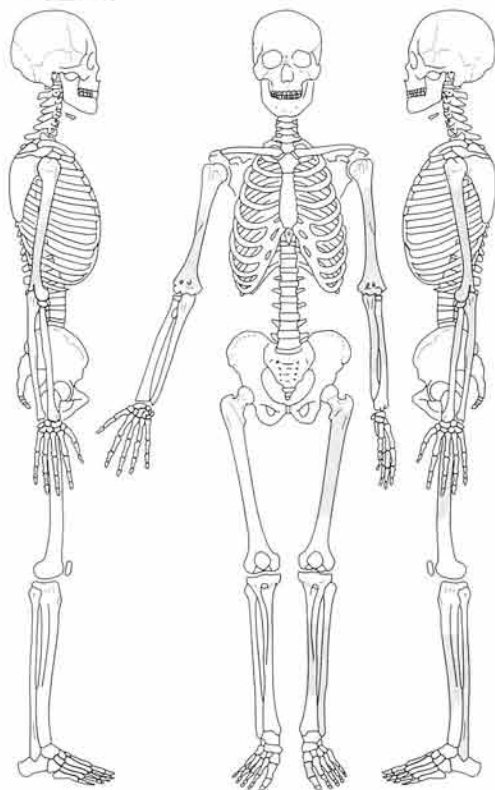


図169 10号墓人骨残存部位

表28 9～12・14号墓人骨の歯の残存状況

9号墓人骨																
左								右								
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	☆M1	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10号墓人骨																
左								右								
*M3	*M2	*M1	*P2	*P1	*C	*I2	*I1	*I1	*I2	*C	*P1	*P2	*M1	*M2	*M3	
*M3	*M2	*M1	*P2	*P1	*C	*I2	*I1	*I1	*I2	*C	*P1	*P2	*M1	*M2	*M3	
11号墓人骨																
左								右								
—	—	*M1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	*M1	—	—	—
—	*M2	—	—/p2	*P1	*C	*I2	*I1	*I1	*I2	*C	*P1	*P2/p2	*M1	*M2	—	—
12号墓人骨																
左								右								
—	—	—	—	—	*c	*i2	—	—	*i2	*c	—	*p2	*M1	—	—	—
—	—	—	*p2	*p1	*c	*i2	*i1	*i1	*i2	*c	*p1	*p2	*M1	—	—	—
14号墓人骨																
左								右								
*M3	*M2	*M1	*P2	*P1	C	I2,I2	I1	I1	I2,I2	C	—	—	*M1	*M2	—	
—	M2	M1	P2	P1	—	I2	I1	I1	I2	—	P1	●	M1	M2	M3	

9号墓人骨



13号墓人骨

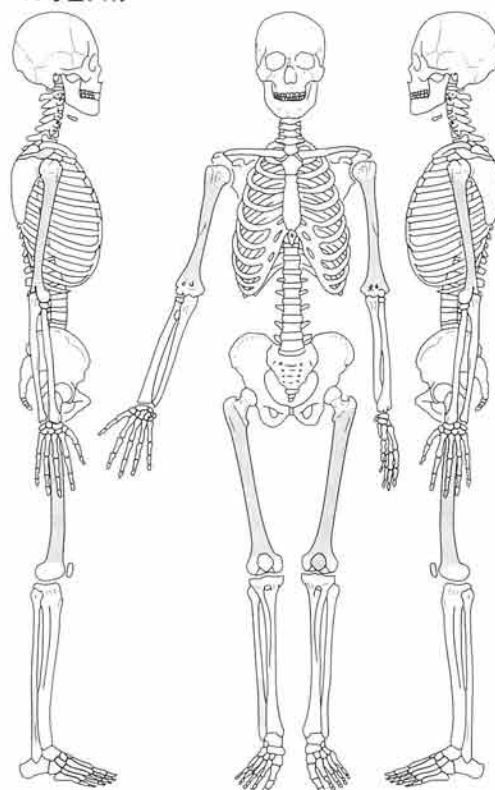


図170 9・13号墓人骨残存部位

乳切歯と乳犬歯、右第2乳臼歯、右第1大臼歯の未萌出の歯冠で、下顎は乳歯の全てと右第1大臼歯の未萌出の歯冠である(表28)。歯の萌出状態より推定年齢は2才前後である。

13号墓人骨(図170、図版31) 箱形桶棺から出土した土葬人骨で、保存状態は悪く、左鎖骨の肩峰端、右肩甲骨の肩峰端と左右上腕骨の両骨端が破損した状態で出土している。下肢では左右大腿骨の骨幹、左膝蓋骨と左右不明の腓骨の骨幹の一部が遺存している。上腕骨の三角筋粗面の発達が悪く、骨幹も細い。大腿骨の粗線はほとんど発達していない。膝蓋骨も比較的小さい。これらの骨の状態から成人であると推測されるが、詳細な年齢や性の推定はできない。

14号墓人骨(図171、図版27) 桶棺から出土した土葬人骨で、保存状態は比較的良いが、頭骨、環椎の左側、軸椎の歯突起と椎体、頸椎の椎体が1点と四肢骨の一部以外は碎片であり同定できなかった。

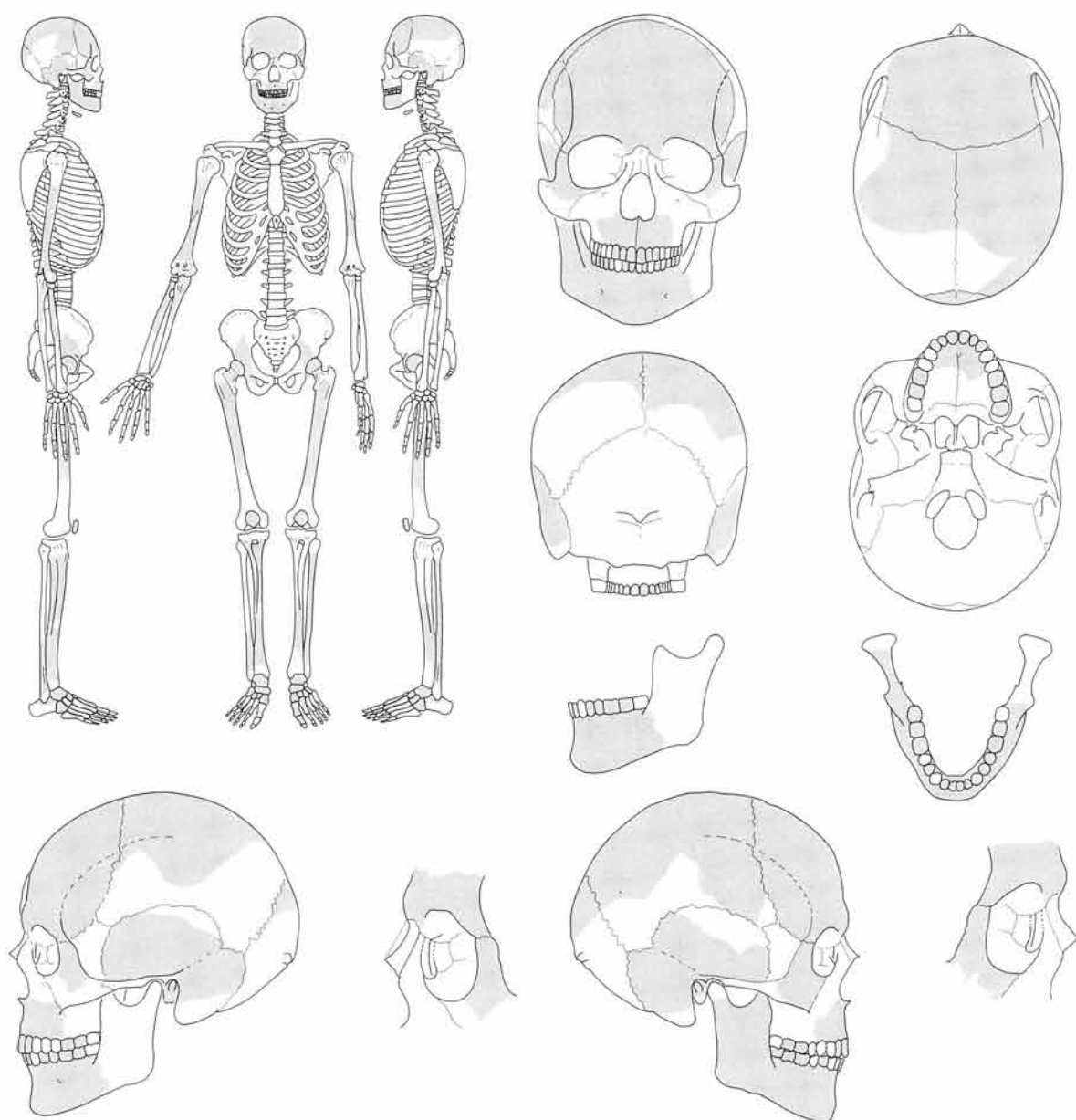


図171 14号墓人骨残存部位

腰椎が6であった。上肢骨、下肢骨ともに長骨はほぼ完全に遺存している。手根骨は右有鉤骨と左右の豆状骨が、足根骨は左舟状骨と外側楔状骨が欠損している以外は全て出土し、中手骨は右第5中手骨以外が遺存している。中足骨は左第4中足骨と右側のすべてが遺存している。

歯の磨耗程度や寛骨の恥骨結合面の状態から推定した年齢は30才前後であり、頭骨の乳様突起の大きさ、外後頭隆起や眉上隆起の発達の程度、寛骨の坐骨切痕の角度などから男性と判定した。

四肢骨の筋の付着部位は、殿筋粗面がやや発達しているが、その他の部位では平均的である。

頭骨の計測は頭蓋骨最大長が181.35mm、最大幅が131.70mmで、頭長幅示数は72.62と長頭である。四肢骨の骨計測から身長を推定した結果平均で153cmとなり、男性では低身長である。

骨に残存する病気の痕跡は頸椎と腰椎の椎体に異常骨増殖が見られ、脊椎症と思われる。また、第

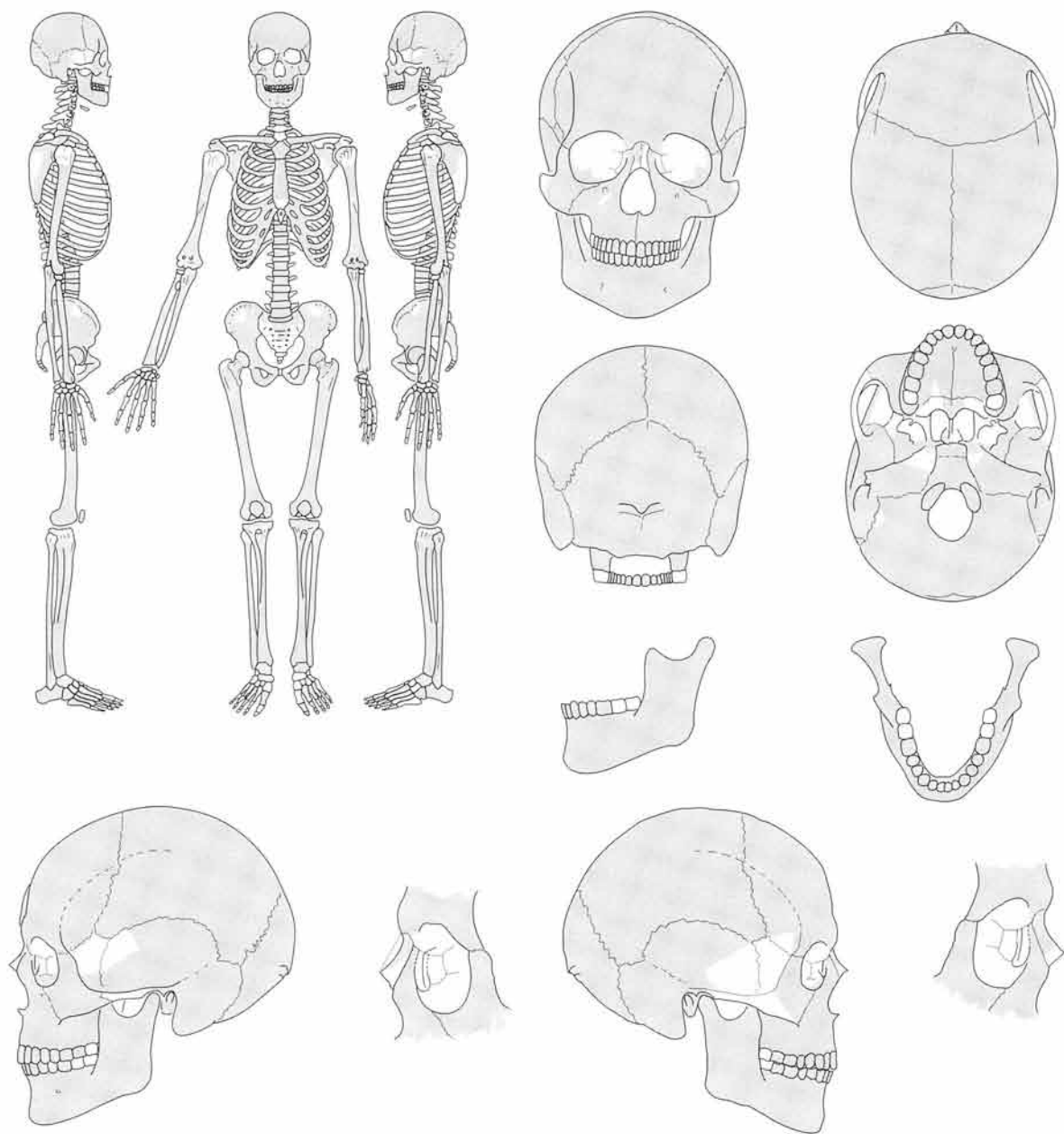


図172 15号墓人骨残存部位

9 胸椎から第1腰椎にかけて椎体の前方がやや低くなり、第11胸椎が最も著しく、圧迫骨折の可能性が認められる。

16号墓人骨(図173、図版26) 唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺から出土した土葬人骨である。出土状況は、生体では内側に位置する上腕骨関節面が左右ともに外側にあり、左大腿骨が上下逆転した

表30 15・16号墓人骨の歯の残存状況

15号墓人骨																
左								右								
●	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	●	
—	M2	M1	P2	P1	C	—	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	●	●	
16号墓人骨																
左								右								
●	●	M1	●	P1	C	*I2	*I1	*I1	—	—	P1	●	M1	—	—	
M3	M2	—	P2	—	—	*I2	—	—	—	C	P1	P2	—	—	M3	

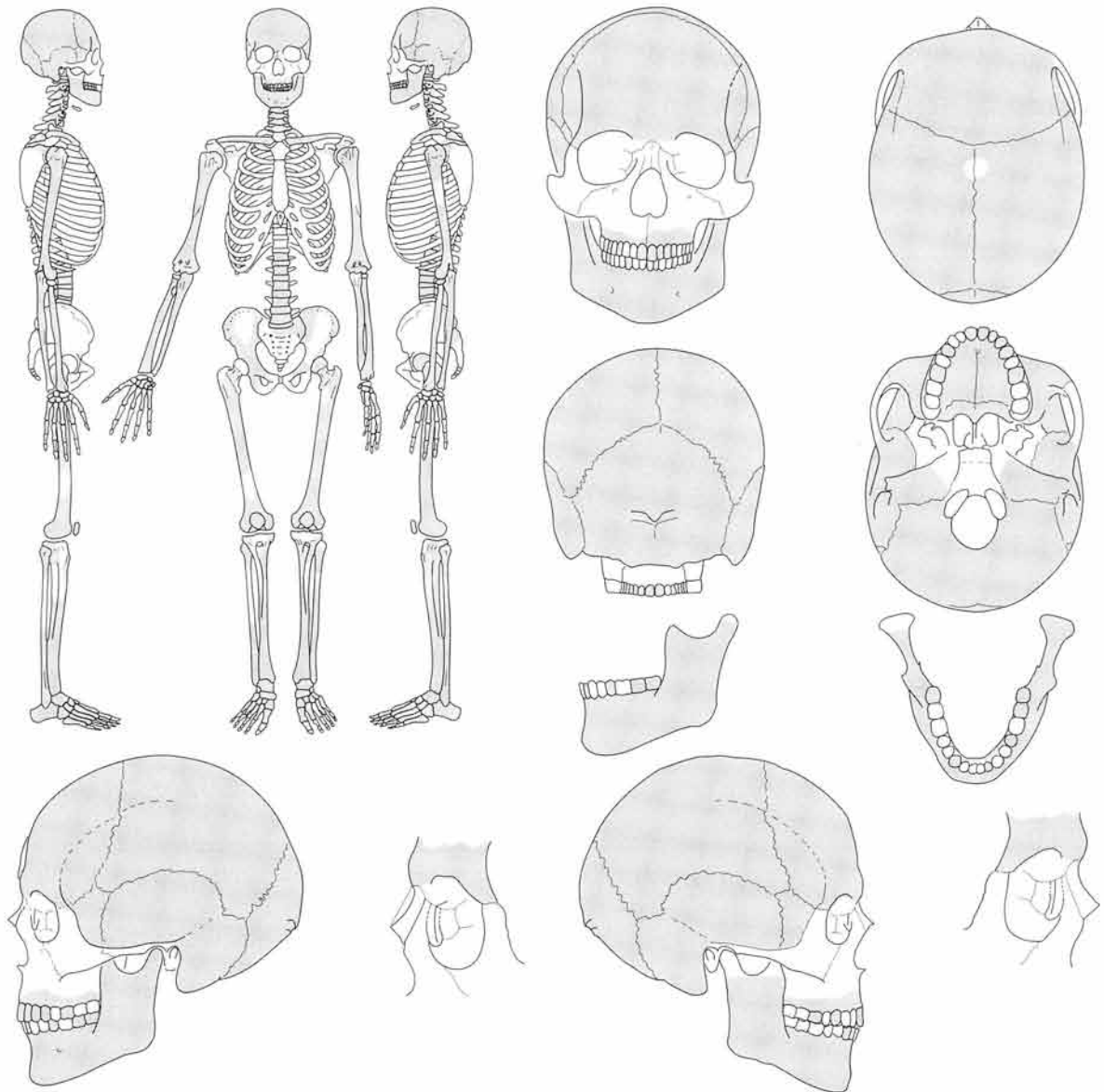


図173 16号墓人骨残存部位

状態であり、埋葬後に人為的に動かされたと思われる(図版17中)。人骨の保存状態は良く、ほぼ全身出土している。頭骨は顔面頭蓋が破損し、脳頭蓋、上顎骨の歯槽突起と口蓋突起、下顎骨が遺存している。上顎の歯槽に釘植している歯は左犬歯、左右第1小白歯と第1大白歯で、切歯部と右第2・3大白歯の歯槽は破損している。左第2・3大白歯の歯槽は歯の脱落による歯槽の閉鎖がみられる。下顎骨は左右の大白歯歯槽部の舌側に炎症の痕跡があり歯周病と思われる。特に、右第3大白歯は歯槽に埋没しているが前方に萌出しているため第2大白歯を圧迫し、このことは歯周病の一因とも考えられる。椎骨は上位のものより下位の方が遺存度が高い。右寛骨の保存状態は比較的良いが、四肢の長骨は骨表面の保存状態が悪い。手は左舟状骨と豆状骨、右大菱形骨と豆状骨が欠損し、中足骨はほぼ完全に遺存している。足根骨は左右ともすべて遺存し、中足骨は左第3中足骨が欠損する。

年齢は、上顎の臼歯は脱落しているが、下顎の臼歯は磨耗が少なく第3大白歯が未萌出であることより25才前後と推測される(表30)。性は寛骨の大坐骨切痕より女性と判定されるが、頭骨の外後頭隆起と乳様突起の発達がよく男性的である。また、女性寛骨に現れる妊娠痕は認められなかった。

骨計測ができた頭骨は、頭蓋骨最大長179.75mm、最大幅138.80mmで頭長幅指数が77.21となりで中頭である。四肢骨の長骨で最大長が計測できたものは左橈骨で、その値は209.84mmである。これから身長を推定すると151.37cmとなり、女性とするとやや高身長である。

頭骨の正中部に直径約25mmの孔があけられており、さらに、左右側頭骨の乳様突起の先端を鋭利な刃物で切断したような痕跡と後頭骨の右後頭顆の前方部に切傷痕が認められる。後頭骨の切傷跡は、第1頸椎と第2頸椎の右前方部にある傷跡の面と連続し、側頭骨の傷跡とともに何らか理由で傷を受けたと思われる。

17号墓人骨(図版32) 桶棺から出土した土葬人骨で、保存状態が悪く、頭骨の破片のほかに左右側頭骨の錐体と歯が遺存している。歯は左下顎第2乳臼歯と犬歯以外は乳歯の全てが遺存し、第1大白歯は歯冠が形成されているのみである(表31)。したがって、年齢は4才前後と推定される。側頭骨の錐体を錐体尖から錐体鱗裂までの最大距離を計測した結果、左が42.25mm、右が51.20mmである。

18号墓人骨(図版32) 桶棺から出土した土葬人骨で、成人の左下腿骨と距骨、踵骨のみが遺存している。脛骨と腓骨の両骨端と踵骨の外側面、距骨頭の内側が破損している。脛骨の骨幹縁の発達が顕著である。脛骨の栄養孔下位で計測ができ、最大径は26.44mm、横径が21.81mmで、扁平示数は82.49となり広脛である。

20号墓人骨 火消し壺から出土した火葬骨である。細片が数点出土しているのみで、性や年齢は不明である。

21号墓人骨 火消し壺から出土した火葬骨で、骨に歪みや亀裂が少なく炭化している椎体も、ることから比較的低温で火葬されたと思われる。同定できた遺存部位は頭骨片、椎骨の椎体片、左橈骨骨幹、左右不明の大腿骨骨幹の一部である。性は判定できる部位が出土していないため不明であり、年齢は骨の断面の厚さなどから成人のものと思われる。

22号墓人骨(図174、図版32) 甕から出土した土葬人骨で、遺存部位は下顎骨の歯槽部、右上腕骨遠位端、左右前腕骨の骨幹、寛骨の一部と左脛骨に脛骨粗面周辺である。年齢は下顎骨乳臼歯が完全

に萌出していること、第1大臼歯が萌出途上であること、第2大臼歯の歯冠が未完成であることなどから4才前後と推定された(表31)。性の判定は成長期であるため行わなかった。

24号墓人骨 火消し壺より出土した火葬人骨で、ひずみや亀裂が見られ、炭化しているところもあることから、火力のむらがあったと思われる。遺存部位は頬骨、右側頭骨、下顎骨、胸椎、仙骨、右上腕骨の骨幹、左尺骨の骨幹、右寛骨寛骨臼の一部、右大腿骨の近位部、左右脛骨の遠位部と腓骨の骨幹の一部である。このうち、右大腿骨の

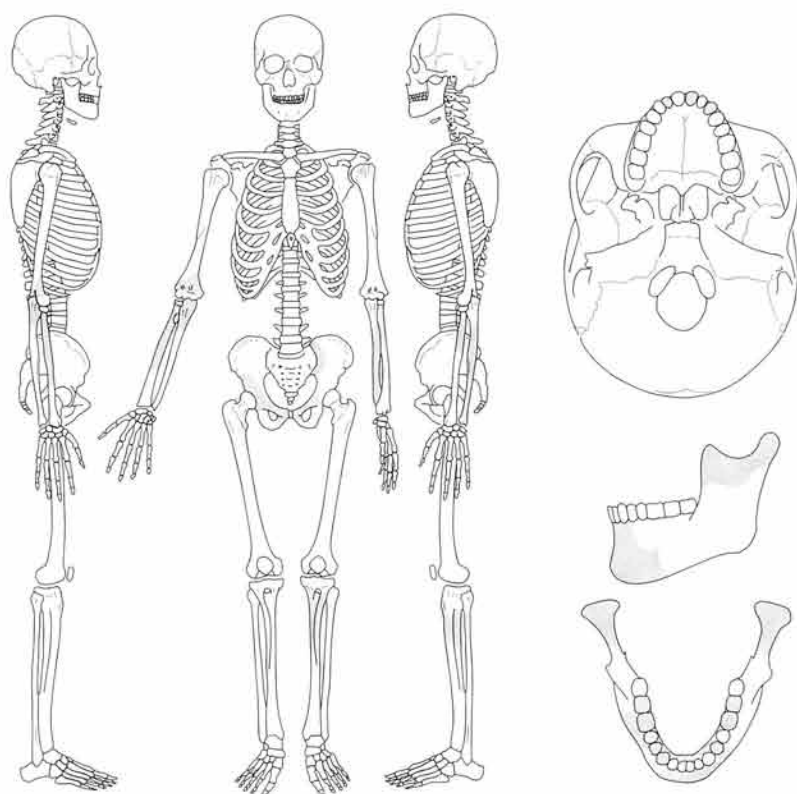


図174 22号墓人骨残存部位

近位部は2点出土し、大きさも異なる。しかしいずれも成人のものであり、この壺には少なくとも2体の人骨が埋葬されている。性の判定はできなかった。

29号墓人骨(図版31) 火葬骨の骨片が2点出土しているのみであり、性や年齢の推定はできない。

30号墓人骨 火消し壺から火葬骨が数点出土している。いずれも1cm以下の細片で部位は確定できないが長骨の骨幹の一部が多いが、骨質より成人のものと思われる。

31号墓人骨 火消し壺から出土した。人骨は火葬されているため骨は細片で、その数量が少ないため性や年齢は推定できなかった。

33号墓人骨(図版32) 焙烙から出土した人骨で、左側頭骨の錐体が未癒合で、錐体の最大長が21.07mmと48号墓人骨より小さく、胎児が土葬されたと思われる。

37号墓人骨(図175、図版30) 唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺から出土した土葬人骨で、保存状態が良く、ほぼ全身が出土している。頭骨は頭蓋冠、上顎骨と下顎骨が遺存し、歯は左上顎犬歯を除いて全て釘植している。歯は全て永久歯で、第3大臼歯は顎骨に開口した数mmの間隙から歯冠が見られる。椎骨は頸椎が1点遺失している以外は全て遺存し、仙骨は第1仙椎と第2仙椎のみ癒合している。四肢骨は長骨の骨端軟骨や寛骨のY軟骨が未骨化である。年齢は歯の萌出状態と全身の骨化の状況から13才前後と推測される(表31)。性の判定は成長期であるため行わなかった。

38号墓人骨(図176、図版31) 火消し壺に遺存していた人骨で、比較的高温で火葬されたと思われ、歪みや破損が大きい。遺存部位は、前頭骨の右側、軸椎の右側と椎骨の椎体8点、右尺骨の滑車切痕周辺、仙骨一部、左寛骨一部、右大腿骨、左大腿骨近位端、左右脛骨近位端、左距骨と踵骨などが出

表31 17・22・37号墓人骨の歯の残存状況

17号墓人骨																
左								右								
—	—	*M1	—/p2	—/p1	—/c	—	*I1	*I1	—	—/c1	—/p1	—/p2	*M1	—	—	—
—	—	*M1	—/p2	—/p1	—/c	*I2/i2	—	*I1/i1	*I2	—	—/p1	—/p2	*M1	—	—	—
22号墓人骨																
左								右								
—	—	—	—	*P1	*C/c	—	*i1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	*M2	*M1	—	*P1	—	—	—	—	—	*C	*P1	*p2	—	*M2	—	—
37号墓人骨																
左								右								
—	M2	M1	P2	P1	—	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	—	—
M3	M2	M1	P2	P1	C	I2	I1	I1	I2	C	P1	P2	M1	M2	M3	—

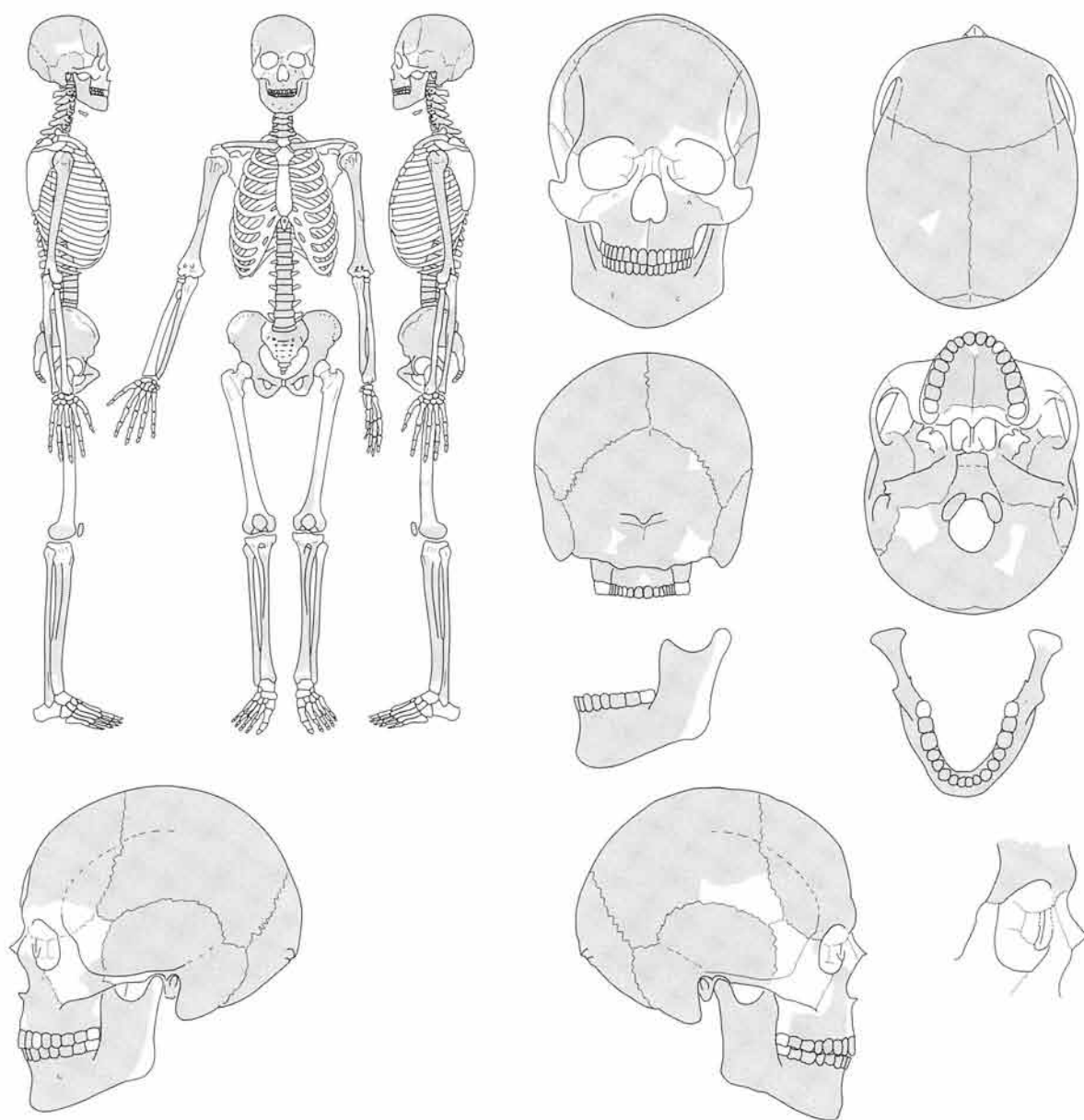


図175 37号墓人骨残存部位

土している。性は寛骨の腸骨耳状面の下部に深い妊娠痕がみられたことより、妊娠回数の多い成人女性と思われる。年齢は推定できる部位が出土していない。

39号墓人骨 火消し壺から骨片が出土しているが、骨質は薄く、破片で出土しているため、部位の特定はできなかった。しかし、骨の性状から乳幼児などの若い固体と思われる。また、イヌの骨片が混入している。

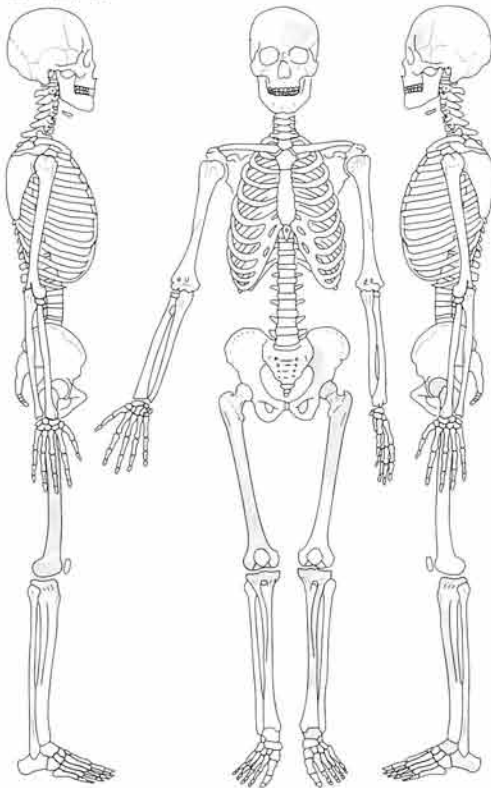
40号墓人骨(図版32) 小型壺から出土した火葬人骨で、出土部位は頭骨片が多く、また、第1頸椎(環椎)の右外側塊、左寛骨一部、左大腿骨頭、左大腿骨遠位端、脛骨近位端が出土している。年齢は左上顎骨が遺存し、第3大臼歯歯槽がみられることより成人である。性は寛骨の破損が大きく、判定できなかった。

41号墓人骨 丸型の壺から出土した人骨である。骨にひずみが見られ比較的高温で火葬されたと思われる、その保存状態は悪い。出土部位は左右不明の眼窩上縁や椎骨片であり、年齢や性の推定は遺存骨片が少ないことよりできなかったが、胸椎の右横突起が遺存しその大きさから成人である。

43号墓人骨(図版32) 火消し壺に右側頭骨の錐体のみが遺存している。この錐体は、側頭骨の鱗部とは未癒合である。保存状態が悪いため錐体の計測はできなかったが、大きさは**48号墓人骨**と同程度であり、胎児と思われる。

48号墓人骨(図176、図版32) 火消し壺から出土した人骨はほぼ全身が遺存している。これらの骨は化骨が不十分で、特に長骨は骨幹のみ化骨がみられる。遺存している骨を計測すると、側頭骨は錐

38号墓人骨



48号墓人骨

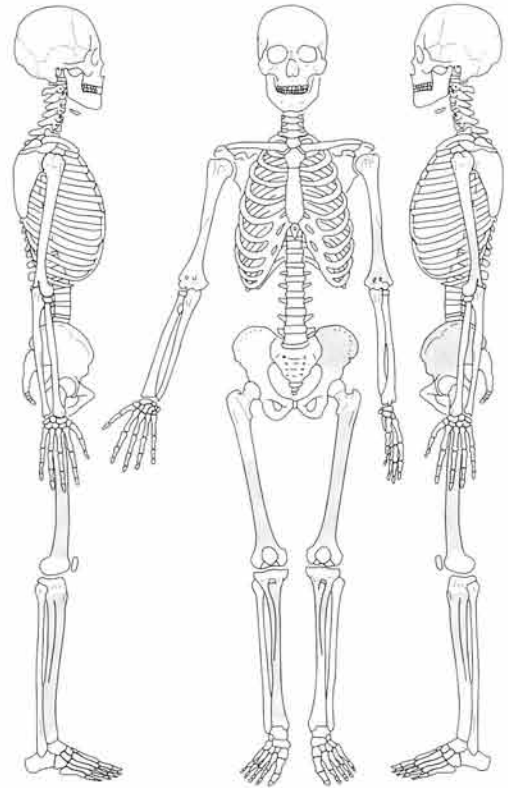


図176 38・48号墓人骨残存部位

体が未癒合で椎体のみの最大長は24.21mm、椎骨の椎体は最大のもので横径が8.07mm、右脛骨の骨幹長が51.96mmである。椎骨は左右の椎弓と椎体が癒合していないことから、胎児とおもわれる。

49号墓人骨(図版32) 火消し壺から出土した人骨で、火葬されていない骨と火葬骨が混在し、複数個体埋葬されている。火葬されていないものは椎骨が未癒合で椎体が遺存し、大きさは48号墓人骨よりも小さいため胎児である。火葬された骨で同定できた部位は左側頭骨の椎体の一部、下顎骨の左側骨体の大臼歯歯槽部の外側面と左下顎頭である。年齢は推定できないが骨の大きさから幼児と思われる。出土した骨片から性の判定はできなかった。

なお、調査時に墓と認識していた土墳(44号墓の東約1mの位置にあり、調査時はM19と呼称した)からはイヌの骨が出土した。四肢骨が出土しており、特に下肢骨の保存がよい。29号墓も出土したのは魚類の鰓蓋骨や種不明の動物遺体で、人骨は遺存していなかった。また、44号墓から出土した骨片の部位は肋骨片と思われるが、火葬されておらず、その形状と大きさから動物遺体の可能性が高い。

3) まとめ

1. 本遺跡は、胎児と思われるものから成人まで幅広い年齢層の人骨が埋葬されている。
2. 埋葬形態は土葬と火葬で、棺は唐津焼鉢を蓋にした丹波焼の甕棺、焙烙、火消し壺や桶棺などで、数基の墓は下位のものを切って埋葬されている。このうち、甕棺からは幼児から成人まで土葬の人骨が出土した。焙烙や火消し壺から出土した人骨について、成人は火葬されているが、乳幼児は火葬されずに埋葬された傾向がある。
3. 保存状態のよい成人の頭骨で歯周病や齲歯が見られた。また、15号墓人骨には重症の脊椎症と圧迫骨折と思われる椎体の変化が見られた。
4. 16号墓人骨は埋葬後、人為的に動かされた形跡が認められた。さらに、頭頂部に約25mmの孔があげられ、側頭骨と後頭骨から頸椎にかけて切傷痕が見られた。
5. 本墓地からはイヌの骨が出土した。特にM19は保存状態も良く、埋葬された可能性が高い。

表32 出土人骨の性別年齢一覧表

人骨番号	棺の種類	埋葬形態	時期	性	年齢	備考
1	唐津焼鉢 +丹波焼甕	土葬	18世紀中頃	不明	2才前後	
2	唐津焼鉢 +丹波焼甕	土葬	18世紀中頃	不明	18ヶ月前後	
3	桶	土葬	18世紀中頃	不明	20才前後1体、成人よりやや小さい1体	
4	桶	土葬	18世紀中頃	不明	5～6才前後	モグラ混入
5	桶	土葬	18世紀中頃	不明	成人2体、5才程度の幼児1体	
6	桶	土葬	18世紀中頃	不明	15才前後	
7	桶	土葬	18世紀中頃	女性	20～25才前後	妊娠痕あり
8	桶	土葬	18世紀中頃	不明	9才前後	
9	桶	土葬	18世紀中頃	不明	成人	
10	桶	土葬	18世紀中頃	不明	20～25才前後	
11	桶	土葬	18世紀中頃	不明	10才前後	
12	唐津焼鉢 +丹波焼甕	土葬	18世紀中頃	不明	2才前後	
13	箱形	土葬	18世紀中頃	不明	成人	
14	桶	土葬	18世紀中頃	女性?	30～40才前後の成人1体、年齢不明1体	
15	唐津焼鉢+堺播鉢 +丹波焼甕	土葬	18世紀中頃	男性	30才前後	
16	唐津焼鉢 +唐津焼甕	土葬	18世紀中頃	女性	25才前後	
17	桶	土葬	18末～19世紀	不明	4才前後	
18	桶	土葬	18末～19世紀	不明	成人	
19	甕	土葬	18末～19世紀	人骨なし		
20	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	不明	
21	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	成人	
22	甕	土葬	18末～19世紀	不明	4才前後、火葬骨混入	
23	甕	土葬	18末～19世紀	人骨なし		
24	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	成人2体	2体分の火葬骨
25	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	不明	
26	火消し壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
27	焙烙	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
28	丸形の壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
29	焙烙	火葬	18末～19世紀	人骨なし		付近から魚、犬、炭、土器
30	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	成人	
31	火消し壺	火葬	18末～19世紀	不明	不明	
32	唐津焼鉢 +丹波焼甕	土葬	18末～19世紀	人骨なし		
33	焙烙	土葬	18末～19世紀	不明	胎児	東南側より火葬骨と土葬のイス
34	焙烙	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
35	焙烙	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
36	丸形の壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		近くから土葬のイス
37	唐津焼鉢 +丹波焼甕	土葬	18末～19世紀	不明	13才前後	
38	火消し壺	火葬	18末～19世紀	女性	成人	かなり深い妊娠痕
39	火消し壺	土葬	18末～19世紀	不明	幼児	イスもあり
40	丸形の壺	火葬	18末～19世紀	不明	成人	
41	丸形の壺	火葬	18末～19世紀	不明	成人	
42	焙烙	火葬	18末～19世紀	人骨なし		
43	火消し壺	土葬	18末～19世紀	不明	胎児	
44	焙烙	土葬	18末～19世紀	人骨なし		動物遺存体
45	火消し壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		なし
46	火消し壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		なし
47	火消し壺	火葬	18末～19世紀	人骨なし		なし
48	火消し壺	土葬	18末～19世紀	不明	胎児	動物骨混入
49	火消し壺	火葬と 土葬の混入	18末～19世紀	不明	土葬骨→胎児、火葬骨→幼児	火葬骨→幼児、土葬骨→胎児
M29		土葬	18末～19世紀	人骨なし		イス。M19やや南のSK201 (調査時)から同じ個体

※各人骨の時期については、編集者(寺井)が加筆した。

表33 上顎の歯の計測値

人骨番号		1号墓人骨		2号墓人骨		3号墓人骨		4号墓人骨		5号墓人骨					
		左右		左 右		左 右		左 右		(成人2人分)				(子供)	
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
I1	頬舌径	—	—	—	#4.86	7.84	—	—	7.36	—	#4.31	8.56	—	—	—
	近遠心径	—	—	—	#6.79	8.41	8.84	—	8.42	—	#4.63	7.44	—	—	—
I2	頬舌径	—	—	#5.12	—	6.61	—	6.24	5.79	#5.10	—	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	#5.58	—	7.00	—	6.57	5.94	#5.45	—	—	—	—	—
C	頬舌径	—	—	#6.29	—	8.76	8.67	8.03	8.13	—	#6.29	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	#6.75	—	6.94	7.17	7.87	7.84	—	#6.91	—	—	—	—
P1	頬舌径	—	—	#9.06	#9.17	—	—	9.65	—	—	—	—	9.77	#8.69	#9.3
	近遠心径	—	—	#7.04	#7.13	—	—	7.90	—	—	—	—	7.02	#7.43	#7.4
P2	頬舌径	—	—	#10.27	#10.19	—	—	9.21	—	—	#10.20	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	#9.51	#9.73	—	—	7.18	—	—	#9.42	—	—	—	—
M1	頬舌径	—	10.83	11.79	11.50	—	12.28	—	11.22	—	—	—	11.67	—	11.71
	近遠心径	—	11.69	11.24	11.25	—	10.46	—	10.12	—	—	—	10.67	—	9.82
M2	頬舌径	—	—	—	—	—	10.57	—	11.30	—	—	—	—	—	—
	近遠心径	—	—	—	—	—	9.40	—	9.66	—	—	—	—	—	—

人骨番号		6号墓人骨		7号墓人骨		8号墓人骨		9号墓人骨	10号墓人骨		11号墓人骨		12号墓人骨		14号墓人骨	
		左	右	左	右	左	右	右	左	右	左	右	左	右	左	右
I1	頬舌径	6.73	6.79	—	—	7.20	7.31	—	6.84	6.63	—	—	—	—	5.01	5.05
	近遠心径	7.76	7.64	—	—	9.21	9.01	—	8.81	8.64	—	—	—	—	5.67	5.73
I2	頬舌径	—	—	—	—	6.02	—	—	7.19	7.27	—	—	#4.64	#4.54	6.02	5.98
	近遠心径	—	—	—	—	7.22	—	—	7.11	7.11	—	—	#5.80	#5.66	6.14	6.15
C	頬舌径	—	8.00	—	8.34	7.94	7.95	—	7.99	7.73	—	—	#5.47	#5.28	6.84	6.93
	近遠心径	—	8.62	—	7.41	7.63	7.76	—	8.36	7.92	—	—	#7.22	#7.15	6.73	6.60
P1	頬舌径	9.90	—	6.63	—	10.07	9.46	—	9.50	9.70	—	—	—	—	7.32	—
	近遠心径	7.76	—	5.54	—	7.49	7.63	—	8.11	7.95	—	—	—	—	5.83	—
P2	頬舌径	10.21	—	—	—	9.40	—	—	9.40	9.34	—	—	—	#10.63	8.03	—
	近遠心径	7.79	—	—	—	7.42	—	—	6.97	7.02	—	—	—	#9.95	6.39	—
M1	頬舌径	—	—	—	—	—	10.89	11.81	10.16	10.26	—	11.51	—	10.91	10.31	—
	近遠心径	—	—	—	—	—	10.33	9.59	10.74	10.31	—	10.49	—	10.61	9.48	—
M2	頬舌径	—	—	—	—	—	—	—	11.37	11.31	—	—	—	—	9.91	9.59
	近遠心径	—	—	—	—	—	—	—	9.66	9.68	—	—	—	—	8.58	8.28
M3	頬舌径	—	—	—	—	—	—	—	10.07	10.54	—	—	—	—	8.27	—
	近遠心径	—	—	—	—	—	—	—	8.16	8.61	—	—	—	—	6.89	—

人骨番号		15号墓人骨		16号墓人骨		17号墓人骨				22号墓人骨		37号墓人骨	
		左	右	左	右	左		右		左	右	左	右
I1	頬舌径	7.82	8.10	7.03	6.72	—	5.17	—	5.29	#5.46	—	7.24	7.34
	近遠心径	8.74	8.63	8.34	8.35	—	6.95	—	6.97	#5.73	—	9.20	8.66
I2	頬舌径	7.93	8.07	7.60	—	—	—	—	—	—	—	6.31	6.34
	近遠心径	7.17	7.21	6.78	—	—	—	—	—	—	—	7.53	7.87
C	頬舌径	8.38	8.67	7.81	—	#5.27	—	#5.14	—	5.52	—	—	7.17
	近遠心径	8.05	8.05	7.71	—	#6.12	—	#6.31	—	6.55	—	—	8.11
P1	頬舌径	8.74	9.19	8.26	8.03	#8.74	—	#8.87	—	6.59	—	10.00	9.64
	近遠心径	6.22	6.19	6.34	6.84	#6.82	—	#6.72	—	6.96	—	8.15	6.99
P2	頬舌径	9.00	8.95	—	—	#9.30	—	#9.48	—	—	—	9.56	9.67
	近遠心径	6.02	6.32	—	—	#8.83	—	#8.86	—	—	—	6.76	6.95
M1	頬舌径	11.82	11.24	11.16	11.23	—	11.30	—	11.21	—	—	10.94	11.48
	近遠心径	10.07	11.11	10.48	11.06	—	10.38	—	10.55	—	—	10.93	10.90
M2	頬舌径	11.57	12.02	—	—	—	—	—	—	—	—	11.54	11.39
	近遠心径	10.37	11.35	—	—	—	—	—	—	—	—	9.90	9.73

: 乳歯 単位: mm

表34 下顎の歯の計測値

人骨番号		1号墓人骨		2号墓人骨		3号墓人骨		4号墓人骨		5号墓人骨 (成人2人分)			
		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右
I1	頬舌径	5.67	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	近遠心径	5.83	—	—	—	—	—	5.71	5.50	—	—	—	—
I2	頬舌径	—	—	#4.35	#4.47	—	—	—	—	—	—	7.20	—
	近遠心径	—	—	#4.67	#5.01	—	—	—	—	—	—	6.55	—
C	頬舌径	—	—	#5.78	#5.77	6.74	—	—	7.37	—	#5.47	—	—
	近遠心径	—	—	#5.93	#5.83	6.48	—	—	6.80	—	#6.10	—	—
P1	頬舌径	—	—	#7.99	#7.25	8.31	8.32	7.57	—	#7.83	—	—	—
	近遠心径	—	—	#8.51	#8.91	7.08	7.40	7.58	—	#8.68	—	—	—
P2	頬舌径	—	—	#8.15	#9.29	8.96	8.78	—	—	—	#9.48	8.31	8.56
	近遠心径	—	—	#10.53	#11.05	7.70	7.74	—	—	—	#10.88	7.16	7.42
M1	頬舌径	—	—	11.22	—	10.53	—	—	10.23	—	—	10.80	10.22
	近遠心径	—	—	11.19	—	11.75	—	—	11.61	—	—	11.74	11.31
M2	頬舌径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.93	10.80
	近遠心径	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.86	11.49	—

人骨番号		6号墓人骨		7号墓人骨		8号墓人骨		9号墓人骨	10号墓人骨		11号墓人骨		12号墓人骨		14号墓人骨	
		左	右	左	右	左	右	右	左	右	左	右	左	右	左	右
I1	頬舌径	6.22	6.30	—	—	5.64	5.61	—	5.47	5.39	5.74	5.94	#3.38	#3.49	4.56	4.88
	近遠心径	5.96	5.95	—	—	5.71	5.63	—	5.59	5.40	5.69	5.58	#4.65	#4.68	5.08	4.95
I2	頬舌径	6.38	6.10	—	—	6.39	—	—	5.66	5.58	5.36	5.14	#4.5	#4.40	4.96	4.84
	近遠心径	6.56	6.65	—	—	6.25	6.20	—	6.62	6.67	6.32	6.41	#5.21	#5.30	5.44	5.53
C	頬舌径	7.50	7.62	—	7.50	—	—	—	7.02	6.98	7.38	—	#5.27	#5.25	—	—
	近遠心径	6.77	6.64	—	6.77	—	—	—	6.82	6.74	6.77	—	#6.20	#6.25	—	—
P1	頬舌径	7.63	7.74	7.93	—	7.37	7.14	—	7.24	7.52	7.54	7.36	#6.85	#7.17	5.86	6.22
	近遠心径	7.80	7.58	7.01	—	7.46	7.50	—	7.48	7.56	7.72	7.72	#9.07	#8.94	5.92	6.19
P2	頬舌径	8.13	8.50	—	—	7.55	7.71	—	8.22	8.40	—	7.36	#9.03	#8.92	6.88	—
	近遠心径	7.44	6.69	—	—	7.31	7.16	—	7.98	7.09	—	7.07	#11.40	#11.04	5.90	—
M1	頬舌径	10.51	10.47	10.25	—	9.83	9.88	—	10.51	10.48	10.51	10.75	10.18	—	9.70	10.02
	近遠心径	11.79	11.20	11.17	—	11.26	11.30	—	11.21	11.17	11.96	12.07	10.18	—	9.04	10.15
M2	頬舌径	10.60	10.63	10.00	—	9.90	—	—	9.92	9.81	9.94	9.93	—	—	9.91	9.21
	近遠心径	11.54	11.59	10.62	—	11.27	—	—	11.14	11.01	11.11	11.54	—	—	8.64	8.97
M3	頬舌径	—	—	9.42	—	—	—	—	10.09	9.98	8.69	8.98	—	—	—	6.81
	近遠心径	—	—	10.00	—	—	—	—	10.10	10.87	10.67	10.68	—	—	—	6.83

人骨番号		15号墓人骨		16号墓人骨		17号墓人骨				22号墓人骨		37号墓人骨	
		左	右	左	右	左		右		左	右	左	右
I1	頬舌径	6.38	6.13	—	—	—	5.00	—	5.13	—	—	6.28	6.09
	近遠心径	5.69	5.84	—	—	—	4.87	—	4.97	—	—	6.70	6.43
I2	頬舌径	—	6.07	5.91	—	—	5.12	#3.77	4.95	—	—	5.94	5.82
	近遠心径	—	6.53	6.08	—	—	5.20	#4.36	5.33	—	—	5.82	5.74
C	頬舌径	6.52	6.58	—	5.95	#5.02	—	—	—	—	5.64	6.96	7.01
	近遠心径	6.77	6.96	—	5.55	#5.31	—	—	—	—	5.76	7.64	6.36
P1	頬舌径	8.05	7.87	—	—	—	—	#6.87	—	7.00	6.62	7.53	7.58
	近遠心径	6.96	6.53	—	—	—	—	#7.48	—	7.38	7.27	5.79	7.82
P2	頬舌径	8.03	8.13	8.34	—	#8.22	—	#8.38	—	—	#8.36	8.46	8.39
	近遠心径	6.98	5.70	6.63	—	#10.18	—	#10.19	—	—	#9.52	7.79	6.65
M1	頬舌径	10.90	11.47	—	—	—	9.91	—	10.15	9.87	—	11.22	11.04
	近遠心径	10.59	11.13	—	—	—	11.07	—	11.19	10.70	—	11.74	11.64
M2	頬舌径	—	—	10.14	—	—	—	—	—	9.70	9.70	10.22	10.41
	近遠心径	—	—	10.85	—	—	—	—	—	10.86	11.04	10.75	10.46

#：乳歯 単位：mm

引用・参考文献

日本語文献は五十音順、韓国語文献はフヒロ(カナタ)順に並べ、一部は括弧内に日本語訳を示した。

〈日本語文献〉

浅野清1970、「古代建築の構造と建築遺跡」：奈良県立橿原考古学研究所編『日本古文化論攷』吉川弘文館、pp.487-504

1971、「講座宮殿と寺院遺跡③ 寺院遺跡(上)」：『仏教芸術』80号 朝日新聞社、pp.84-111

飛鳥資料館1980、『日本古代の鴟尾』

1984、『小建築の世界―埴輪から瓦塔まで―』

網伸也1997、「四天王寺出土瓦の編年的考察」：『堅田直先生古希記念論文集』真陽社、pp.535-551

李タウン1999、「百済の瓦からみた飛鳥時代初頭の瓦について」：帝塚山大学考古学研究所歴史考古学研究会・古代の土器研究会編『飛鳥・白鳳の瓦と土器―年代論―』、pp.83-96

鑄方貞亮1982、『改訂 日本古代家畜史』有明書房

石井清司1995、「篠簜須恵器」：中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』、pp.298-314

石田茂作1972、『飛鳥随想』学生社

伊藤純1991a、「スタンプのある土器三例」：大阪市文化財協会編『葦火』34号、p.8

1991b、「小池彰子氏による建築工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW90-29)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.18-28

井上秀雄ほか訳注1974、『東アジア民族史』1 正史東夷伝 東洋文庫264 平凡社

1980、『三国史記』1 東洋文庫372 平凡社

乾兼松1961、「規矩」：明治前日本科学史刊行会著『明治前日本建築技術史』日本学術振興会、pp.357-420

上垣幸徳・金村浩一1990、「大喜金属(株)による建築工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW86-12)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.29-33

植木久1991、「木本起佐子氏による建築工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW90-20)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.11-17

1998、「前期難波宮の造営年代に関する一考察―他宮殿との比較から―」：大阪市教育委員会文化財保護課編『大阪の歴史と文化財』創刊号、pp.13-21

1999、「前期難波宮遺構にみる建築的特色―いわゆる“小柱穴”遺構を中心に―」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.31-49

内田九州男1989、「豊臣秀吉の大坂建設」：佐久間貴士編『よみがえる中世2―本願寺から天下一へ 大坂』平凡社、pp.34-55

江浦洋1988、「日本出土の統一新羅系土器とその背景」：『考古学雑誌』第74巻第2号 日本考古学会、pp.52-88

1994、「海をわたった新羅の土器―土器からみた古代日羅交流の考古学的研究―」：荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版、pp.233-259

江谷寛1994、「平安京出土の河内産搬入瓦」：『古代学研究所研究紀要』第4輯 古代学協会、pp.31-52

大岡實1971、『日本建築の意匠と技法』、中央公論美術出版

大阪市教育委員会1984、『史跡難波宮跡―環境整備事業中間報告―』

大阪市教育委員会・大阪市文化財協会1982、「NW80-8次発掘調査概報」：『昭和55年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発

掘調査報告書』、pp.36-39

1985、『生野邸建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW83-20次)略報』、『昭和58

年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.61-63

大阪市文化財協会1979、『難波宮158-7次高津荘試掘調査略報』

1981a、『難波宮跡研究調査年報1975-1979.6』

1981b、『難波宮址の研究』第七

1981c、『財団法人教員会館敷地発掘調査(NW80-9)略報』

1982、『山喜株式会社大阪ビル新築工事に伴う発掘調査(NW81-30)略報』

1983a、『教員会館建設に伴う難波宮跡発掘調査(NW82-10、82-44)略報』

1983b、『株式会社センヨウ社屋建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW83-6)略報』

1984、『難波宮址の研究』第八

1985a、『史跡公園整備工事に伴う難波宮跡(NW84-30次)発掘調査略報』

1985b、『(株)三晃商会社屋建設に伴う難波宮跡(NW85-34次)発掘調査略報』

1992、『難波宮址の研究』第九

1995、『難波宮址の研究』第十

1996、『森の宮遺跡』Ⅱ

1998a、『KW91-8次調査』、『桑津遺跡発掘調査報告』、pp.145-163

1998b、『住友銅吹所跡発掘調査報告』

1999a、『大坂城跡』Ⅳ

1999b、『日本生命保険相互会社による建設工事に伴う森の宮遺跡等発掘調査(MR98-2)完了報告書』

1999c、『NW96-15次調査』：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1996年度-』、
pp.134-136

1999d、『NW95-24次調査』：同上、pp.107-136

1999e、『難波宮跡環境整備事業に伴う難波宮跡発掘調査(NW99-12)報告書』

2000a、『難波宮址の研究』第十一

2000b、『UR85-39、86-11次調査』、『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』、pp.87-126

2000c、『国立大阪病院による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW99-23)完了報告』

2002a、『大坂城跡』Ⅴ

2002b、『大坂城跡』Ⅵ

2003a、『大坂城跡』Ⅶ

2003b、『大阪市教育委員会による難波宮跡・大坂城跡発掘調査(NW02-13)報告書』

大阪城天守閣1984、『大阪城天守閣紀要』第12号

大阪市立博物館1995、『特別展 遷都1350年記念 難波宮』

大阪府教育委員会1991、『讃良郡条里遺跡発掘調査概要・Ⅱ 一寝屋川市出雲町所在一』

大阪府文化財センター2002、『大坂城跡発掘調査報告』Ⅰ

大阪府文化財調査研究センター2002、『大坂城址』Ⅱ

大阪文化財センター1983、『田山遺跡』

太田博太郎1957、『日本建築史古代』、『建築学体系四-I』 彰国社、pp.114-122

1977、『大安寺の歴史』、『大和古寺大観 第三巻』 岩波書店、pp.53-64

- 岡田英男1983a、「建築規矩術」：『講座・日本技術の社会史 第7巻』 日本評論社、pp.302-317
- 1983b、「古代における建造物移築再用の様相」：奈良国立文化財研究所編『文化財論叢』 同朋舎、pp.619-641
- 岡村勝行2002a、「吉岡昌治氏による建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW00-6)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成12年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.33-37
- 2002b、「遺跡の模造と考古学教育—大阪歴史博物館「歴史を掘る」の試み」：『月刊文化財』平成14年9月号 第一法規、pp.27-33
- 岡本良一1970、『大坂城』 岩波書店
- 小倉徹也・田中清美・小田木富慈美・宮本佐知子・池田研2003、「OS02-8次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—2001・2002年度—』、pp.49-74
- 橿原市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所1988、『橿原市四条大田中遺跡発掘調査現地説明会資料』
- 柏原市教育委員会1985、『大県・大県南遺跡—下水道管渠埋設工事に伴う—』
- 1995、『柏原市遺跡群発掘調査概報 1994年度』
- 上対馬町教育委員会1984、『コフノ塚遺跡』 上対馬町文化財調査報告書第1集
- 加茂儀一1976、『日本畜産史 食肉・乳酪篇』 法政大学出版局
- 川西宏幸1978、「円筒埴輪総論」：『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会、pp.95-104([川西1978]に再録)
- 1988、『古墳時代政治史序説』 塙書房
- 北野重1999、「ガラスについて」：『古文化研究会平成10年度勉強会資料』
- 鬼頭清明1994 「新たな発見が、ふるい発掘成果をよみがえらせる話。—前期難波宮朱雀門の発掘をめぐる—」：『月刊文化財発掘出土情報』94.4
- 木原克司1984、「上町台地の微地形と難波宮下層遺跡掘立柱建物」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第八、pp.194-207
- 1996、「古代難波地域の景観復原に関する諸問題」：大阪市史編纂所編『大阪の歴史』48、pp.1-25
- 金鍾萬(大竹弘之訳)2002、「百濟土器に見られる製作技法—泗沘時代を中心として」：『朝鮮古代研究』第3号 朝鮮古代研究刊行会、pp.29-44
- 京嶋覚1987、「難波宮下層遺跡」：『韓式土器研究』I 韓式土器研究会、pp.23-24
- 2000、「鋳型と玉造」：大阪市文化財協会編『葦火』85号、p.8
- 工藤圭章1976、「古代の建築技法」：『文化財講座 日本の建築2 古代Ⅱ・中世Ⅰ』 第一法規出版、pp.79-137
- 久保和士1993、「動物遺体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅴ、pp.124-127
- 1995、「南口古墳出土のウマについて」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ、pp.407-413
- 1998、「住友銅吹所跡出土の動物遺体」：大阪市文化財協会編『住友銅吹所跡発掘調査報告』、pp.339-377
- 1999、「動物遺体の調査結果と検討」：大阪市文化財協会編『長原遺跡東部地区発掘調査報告』Ⅱ、pp.107-120
- 久保和士・松井章1999、「家畜その二—ウマ・ウシ」：『考古学と動物学』考古学と自然科学② 同成社、pp.169-208
- 久保和士・松井章・宮路淳子・佐久間桂子2000、「長原遺跡95-14次調査出土の動物遺存体」：大阪市文化財協会編『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ、pp.159-172
- 黒崎直1997、「掘立柱塼と築地塼—藤原宮と平城宮の外周施設をめぐる—」：立命館大学考古学論集刊行会編『立命館大学考古学論集Ⅰ』、pp.323-336
- 2001、「近江大津宮「内裏南門」柱穴考」：西田弘先生米寿記念論集刊行会編『近江の考古と歴史』、pp.163-169
- 黒田慶一1984、「国立大阪病院内の歴史的変遷」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第八、pp.214-232
- 1995、「大坂城跡の『てつはう』木簡」：大阪市文化財協会編『葦火』58号、p.8

- 1996a、「豊臣氏大坂城の算用曲輪批判ー内田九州男・松尾信裕氏説に対する疑問ー」：『中世城郭研究』第10号 中世城郭研究会、pp.162-182
- 1996b、「鉄砲荷札木簡と玉造の大名屋敷ー大阪女学院は小出吉政邸跡かー」：『大阪の歴史』第48号 大阪市史編纂所、pp.27-46
- 黒田慶一・鳥居信子・豆谷浩之1996、「大阪・大坂城跡」：木簡学会編『木簡研究』第18号、pp.54-55
- 近藤恵・松浦秀治・中井伸之・中村俊夫・松井章1992、「出水貝塚縄文後期貝層出土ウマ遺存体の年代学的研究」：『考古学と自然科学』第26号 日本文化財学会、pp.61-71
- 齊藤忠1996、「第五 国分寺跡の規模と建物」：『新修国分寺の研究』第六巻 吉川弘文堂、pp.145-204
- 佐伯有清1967、『牛と古代人の生活』至文堂、218p
- 酒巻忠史1998、「東国における古墳時代の鑄造技術についてー鶴ヶ岡1号墳出土のガラス小玉鑄型を中心にー」：君津都市文化財センター『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅷ、pp.59-74
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注1965、『日本書紀』下 日本古典文学体系68
- 桜井市文化財協会1990、『上之宮遺跡第五次調査概要』
- 1990、『谷遺跡シヨブ地区発掘調査概要』
- 定森秀夫1994、「陶質土器からみた近畿と朝鮮」：荒木敏夫編『ヤマト王権と交流の諸相』古代王権と交流5 名著出版、pp.77-110
- 佐藤隆2000、「古代難波地域の土器様相とその史的背景」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.253-265
- 2001、「難波宮東方官衙の再検討」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.149-160
- 2002、「NS00-19次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告ー1999・2000年度ー』、pp.41-42
- 2003、「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年ー陶器窯跡編年の再構築に向けてー」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.1-30
- 沢村仁1959、「難波宮址第十次発掘調査略報」：難波宮址顕彰会編『難波宮址の研究』研究予察報告第参、pp.77-81
- 1961、「難波宮址第十次・十一次・第十二次発掘調査報告」：難波宮址顕彰会編『難波宮址の研究』研究予察報告第四、pp.47-73
- 2002、「(2)太宰府政庁中心域の建築」：九州歴史資料館編『太宰府正庁跡』吉川弘文館、pp.439-451
- 清水和1993、「国立大阪病院出土の金箔押し龍面鯉瓦」：大阪市文化財協会編『葦火』47号、p.8
- 2000、「(株)三香堂による建設工事に伴う発掘調査(NW98-19)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成10年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.37-40
- 清水重敦・長尾充・平澤麻衣子・中島義晴2002、「平城宮第1次大極殿院回廊基壇の復原」：『奈良文化財研究所紀要2002』、pp.27-29
- 清水眞一1992、「ガラス小玉鑄型についての一考察」：『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズV、pp.225-234
- 清水ひかる1990、「豊臣時代の板留め溝」：大阪市文化財協会編『葦火』28号、p.5
- 白井克也1996、「須恵器甕の叩き出し丸底技法と在来土器伝統一福岡市・比恵遺跡群第51次調査成果からみた工房の風景ー」：『古文化談叢』第36集、pp.1-24
- 鈴木嘉吉1982、日本の美術196『飛鳥・奈良建築』至文堂
- 鈴木英夫1996、「大化改新直前の倭国と百済ー百済王子翹岐と大佐平智積の来倭をめぐって」：鈴木英夫著『古代の倭国

- と朝鮮諸国』 青木書店、pp.276-300
- 積山洋1999、「難波京東部域の発掘調査」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第2号、pp.381-398
- 2000、「古代都市難波京の諸段階」：地方史研究協議会編『巨大都市大阪と摂河泉』、pp.113-132
- 2002、「難波宮の変容－奈良末から平安初頭の様相をめぐって－」：『条里制・古代都市研究会』第18号 条里制・古代都市研究会、pp.117-136
- 2004、「孝徳朝の難波宮と造都構想」：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』 山川出版社、pp.41-63
- 千田稔1984、「難波津補考」：『高地性集落と倭国大乱』 小野忠熙博士退官記念出版事業会、pp.376-397
- 高橋工1991、「桑津遺跡の掘立柱建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』34号、pp.2-3
- 高谷重夫1982、『雨乞習俗の研究』 法政大学出版局
- 田中清美1989、「上町台地北部出土の韓式系土器について」：『韓式系土器研究』Ⅱ 韓式系土器研究会、pp.70-83
- 1993、「上町台地北部地域出土の韓式系土器と異形須恵器」：『韓式系土器研究』Ⅳ 韓式系土器研究会、pp.50-60
- 田中琢1984、「古代窯業の展開」：『講座・日本技術の社会史』第四巻 窯業 日本評論社、pp.61-89
- 田辺昭三1966、『陶邑古窯址群』Ⅰ 平安学園考古クラブ
- 1975、『陶磁体系第4巻 須恵』 平凡社
- 1981、『須恵器大成』 角川書店
- 樽野博幸2000、「脊椎動物」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十一、pp.199-206
- 辻美紀2002a、「NW99-15次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.43-61
- 2002b、「OS99-72次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1999・2000年度-』、pp.95-103
- 角田栄1954、「大阪合同庁舎の基礎工並びに基礎地盤」：『建築と社会』Vol-35、pp.57-62
- 寺井誠2002、「前期難波宮成立前後の清水谷地域」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅴ、pp.51-56
- 2003、「前期難波宮南方の土器群と開発」：大阪市文化財協会編『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、pp.83-88
- 2004(印刷中)、「古代難波の開元通宝と流入の背景」：『出土銭貨』第20号 出土銭貨研究会
- 東京都北区教育委員会生涯学習推進課1995、『豊島馬場遺跡』 北区埋蔵文化財調査報告第16集
- 土質工学会関西支部・関西地質調査業協会1987、『新編 大阪地盤図』 コロナ社
- 戸田秀典2004、「宰相山遺跡第一次発掘調査について」：大阪市文化財協会編『宰相山遺跡発掘調査報告』Ⅰ、pp.59-63
- 富山直人1988、「丸三株式会社社屋建替工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW86-12)」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『昭和61年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.51-56
- 直木孝次郎・中尾芳治編2003、『シンポジウム 古代の難波と難波宮』 学生社
- 中尾芳治1974、「第57次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報 1973』、pp.23-25
- 1986、考古学ライブラリー46『難波京』 ニューサイエンス社
- 1992、「難波宮発掘」：直木孝次郎編『古代を考える 難波』 吉川弘文館、pp.120-169([中尾1995]に再録)
- 1995、『難波宮の研究』 吉川弘文館
- 1997、「難波宮－研究現状と課題－」：『都城研究の現在』 おうふう、pp.45-64
- 2003、「難波宮跡の調査・研究の現状と今後の課題」：直木・中尾編『シンポジウム 古代の難波と難波宮』 学生社、pp.325-337
- 中川信作・八木久栄1981、「第130次発掘調査概報」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報 1975～1979.6』、

pp.14-16

中島広顕1993、「東京都北区豊島馬場遺跡出土のガラス小玉鋳型」：日本考古学会編『考古学雑誌』第78巻第4号、pp.99-106

中村浩1989、「四天王寺境内出土陶磁、土器—その編年的聚成—」：大谷女子大学資料館編『四天王寺—引声堂と周辺地区の調査Ⅱ—』大谷女子大学資料館報告書第22冊、pp.43-70

永島暉臣愼1974c、「第54次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1973』、pp.20-22

永島暉臣愼・佐藤隆1995、「1993年度に注目された発掘調査の概要 大阪府大阪市難波宮跡」：『日本考古学年報』46(1993年度版) 日本考古学協会、pp.522-524

直木孝次郎1994、「孝徳朝の難波宮」：『難波宮と難波津の研究』、pp.72-101(1977年発表の「難波宮小郡宮と長柄豊碕宮」：難波宮址を守る会編『難波宮と日本古代国家』に若干の補註をつけたもの)

長崎県教育委員会1998、『大浜遺跡』

長山雅一1972、「財団法人教員会館敷地内高津荘増築工事に伴う緊急調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1971』、pp.11-14

1973a、「第45次発掘調査報告」：難波宮宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1972』、pp.17-23

1973b、「第43次発掘調査報告」：難波宮宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1972』、pp.29-33

1973c、「第47次発掘調査報告」：難波宮宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1972』、pp.34-41

1973d、「前期難波宮朝堂院の二つの門をめぐる」：難波宮宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1972』、pp.49-58

1974a、「第50次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1973』、pp.12-14

1974b、「第56次発掘調査報告」：難波宮宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1973』、pp.37-45

1981a、「難波宮跡の調査」：大阪市文化財協会『難波宮跡研究調査年報』1975-1979.6、pp.5-9

1981b、「NW137次発掘調査概報」：大阪市文化財協会『難波宮跡研究調査年報』1975-1979.6、pp.118-123

1995、「第2節 前期難波宮の内裏南門」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究 第十』、pp.149-158

難波宮址顕彰会1967、『昭和41年度(第23次(緊急)・第25次)難波宮跡調査報告書』

1969a、『昭和43年度(第30次)難波宮跡調査報告書』

1969b、「第32次発掘調査概要」：『昭和43年度(第31次・第32次・第33次)難波宮跡調査報告書』、pp.4-7

1973、「緊急立会調査報告Ⅳ」：『難波宮跡研究調査年報1972』、pp.46-47

1978、『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書』

奈良県立橿原考古学研究所1980、『新沢千塚古墳群』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書第39冊

1982、「飛鳥京址第74次調査、第78次調査」：『奈良県遺跡調査概報 1980年度』、pp.256-259・272-275

奈良国立文化財研究所1976、『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅰ 小墾田宮推定地・藤原宮の調査』

1981、『平城宮発掘調査報告Ⅺ —第1次大極殿地域の調査—』

1987、『薬師寺発掘調査報告』

1992、「飛鳥池遺跡の調査(飛鳥寺1991-1次調査)」：『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』22、pp.84-114

1993、『平城宮発掘調査報告』ⅪV

1994、『平城宮朱雀門の復原的研究』

- 1997、『平城京左京七条一坊十五・十六坪発掘調査報告』
- 奈良文化財研究所2002、『山田寺発掘調査報告』
- 2003a、『吉備池廃寺発掘調査報告』
- 2003b、『奈文研ニュース』NO.10
- 2003c、『大極殿院の調査 -117次-』：『奈良文化財研究所紀要2003』、pp.78-84
- 2003d、『飛鳥藤原第128次調査現地説明会資料 藤原宮朝堂院東南隅の調査』
- 西中川駿1991、『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』(研究課題番号014900
18)平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書、197p
- 西本昌弘1985、『豊璋と翹岐一大化改新前夜の倭国と百済-』：『ヒストリア』第107号 大阪歴史学会、pp.1-18
- 日本古文化研究所1941、『藤原宮址傳説地高殿の調査二』
- 林田重幸1978、『日本在来馬の系統に関する研究』 日本中央競馬会
- 林部均2003、『古代宮都と前期難波宮-その画期と限界-』：石野博信編『古代近畿と物流の考古学』、pp.328-337
- 平田洋司1995、『関合邸建設工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW93-8)略報』：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成5年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-9
- 2000、『豊臣氏大坂城の三ノ丸造成を巡って』：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第3号、pp.15-30
- 福岡県教育委員会2000、『西新町遺跡』Ⅱ 福岡県文化財調査報告書第154集
- 2003、『西新町遺跡』Ⅴ 福岡県文化財調査報告書第178集
- 福岡市教育委員会1977、『広石古墳群』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集
- 1988、『羽根戸遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集
- 1997、『鋤崎古墳群』2 福岡市埋蔵文化財調査報告書第506集
- 福山敏男1987、『難波宮跡出土の「宿世」木簡について』：京都府埋蔵文化財調査研究センター編『京都府埋蔵文化財論集』第1集、pp.241-246
- 藤田正勝・宮路淳子・松井章2002、『若宮遺跡第34地点出土の動物遺存体』：芦屋市教育委員会編『若宮遺跡発掘調査報告書』、pp.230-243
- 古市晃1999、『NW97-2次調査』：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-1997年度-』、pp.63-68
- 2002a、『難波宮発掘』：森公章編『日本の時代史3 倭国から日本へ』 吉川弘文館、pp.198-234
- 2002b、『都市の成立』：仁木宏編『【もの】から見る日本史 都市』 青木書店、pp.29-50
- 2004a、『都市史から見た難波宮・難波京研究の展望』：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』 山川出版社、pp.5-14
- 2004b、『孝徳朝難波宮と仏教世界-前期難波宮内裏八角殿院を中心に』：塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』 山川出版社、pp.15-40
- 平城宮跡発掘調査部1991、『平城京左京一条三坊出土のガラス小玉鋳型』：奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1991』
- 松井章1984、『平城京右京8条1坊11坪の動物遺存体』：奈良国立文化財研究所編『平城京右京8条1坊11坪発掘調査報告書』、pp.54-56
- 1991、『家畜と牧-馬の生産-』：『古墳時代の研究』4 雄山閣出版、pp.105-119
- 2003、『動物祭祀』：『神々のいる風景(いくつもの日本Ⅶ)』 岩波書店、pp.89-119
- 松井章・宮路淳子2003、『小篠原遺跡(旧和田遺跡)出土の動物遺存体』：野洲町教育委員会編『野洲町文化財年報2000』、

- 松尾信裕1994、「豊臣期大坂城の規模と構造」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財論集』、pp.291-330
- 2000、「大坂城内の大溝」：渡辺武館長退職記念論集刊行会編『大坂城と城下町』 思文閣出版、pp.61-89
- 2003、「戦国時代の大坂—寺内町から城下町へ—」：小野正敏・萩原三雄編『戦国時代の考古学』 高志書院、pp.83-92
- 松尾信裕・宮本佐知子・八木久栄1981、「第148次発掘調査概報」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、pp.27-30
- 溝口明訓1999、「山田寺金堂と法隆寺中門の柱間寸法計画について—古代建築の柱間寸法計画と垂木割計画(1)」：『日本建築学会計画系論文集』NO.516 日本建築学会、pp.229-234
- 港区伊皿子貝塚遺跡調査団1981、『伊皿子貝塚遺跡』 日本電信電話公社・港区伊皿子貝塚遺跡調査会
- 南秀雄1987、「瓜破遺跡で発見された7世紀の建物群」：大阪市文化財協会編『葦火』8号、pp.2-4
- 1994、「国立大阪病院で発掘された江戸時代の墓地」：大阪市文化財協会編『葦火』49号、pp.4-5
- 宮川禎一1988、「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」：高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『高井悌三郎先生喜寿記念論文集—歴史学と考古学』 真陽社、pp.73-94
- 宮路淳子1998、「大浜遺跡出土の動物遺存体」：長崎県教育委員会編『大浜遺跡』、pp.55-60
- 宮本佐知子1981、「第150次発掘調査概報」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、pp.66-68
- 1991、「和田年夫氏による建築工事に伴う難波宮跡発掘調査(NW90-2)略報」：大阪市教育委員会・大阪市文化財協会編『平成2年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』、pp.3-10
- 2001、「難波宮出土6241型式蓮華文軒丸瓦について」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.203-210
- 宮本佐知子・佐藤隆1996、「四天王寺とその周辺出土の古代瓦」：大阪市文化財協会編『四天王寺旧境内遺跡発掘調査報告』I、pp.93-119
- 宮本佐知子・寺井誠2003、「大阪市内出土の金箔瓦」：大阪市文化財協会編『大坂城跡』Ⅶ、pp.339-366
- 宮本長二郎1979、「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」：『日本古寺美術全集2 法隆寺と斑鳩の寺』 集英社、pp.97-104
- 森公章1992、「朝鮮半島をめぐる唐と倭—白村江会戦前夜—」：池田温編『古代を考える—唐と日本』 吉川弘文館(〔森著1998〕に再録)
- 1998、『古代日本の対外認識と通交』 吉川弘文館
- 森毅1992、「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第九、pp.40-52
- 1995、「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」：『ヒストリア』第149号、pp.87-106
- 2001、「大坂出土の李朝陶磁」：大阪市文化財協会編『大阪市文化財協会研究紀要』第4号、pp.211-222
- 八木久栄1968、「第29次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『昭和42年度(第26次～第29次)難波宮跡調査報告書』、p.5
- 1974a、「第49次発掘調査報告」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1973』、pp.8-11
- 1974b、「第51次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1973』、pp.15-16
- 1976a、「第61次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1974』、pp.20-22
- 1976b、「第66次発掘調査概報」：難波宮址顕彰会編『難波宮跡研究調査年報1974』、pp.25-30
- 1981、「第71次発掘調査概報」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、pp.49-52
- 1989、「難波宮の軒瓦についての覚書」：『郵政考古紀要』XIV 大阪・郵政考古学会、pp.5-22
- 1995、「後期難波宮大極殿院の屋瓦」：大阪市文化財協会編『難波宮址の研究』第十、pp.175-184

八木久栄・中川信作1981、「第96次発掘調査概報」：大阪市文化財協会編『難波宮跡研究調査年報1975～1979.6』、pp. 89-96

山尾幸久1992、「640年代の東アジアとヤマト国家」：『青丘學術論集』第2集 韓国文化研究振興財団、pp.141-195

山内紀嗣1991、「ガラス玉の鋳型」：天理大学附属天理参考館編『天理参考館報』第4号、pp.149-154

横須賀市教育委員会1986、『鉞切遺跡-C・D地点の調査』 横須賀市文化財調査報告書第12集

横山浩一1980、「須恵器の叩き目」：『史淵』第107輯 九州大学文学部、pp.127-150(〔横山2003〕に再録)
2003、『古代技術史攷』 岩波書店

吉井秀夫1991、「朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制」：『史林』第74巻第1号 史学研究会、pp.63-101

吉川真司1997、「難波長柄豊崎宮の歴史的位置」：大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質 古代・中世』(〔吉村武彦・小笠原好彦編2001『展望日本歴史5 飛鳥の朝廷』：pp.139-156〕に再録)

李陽浩2003、「NW01-3次調査」：大阪市文化財協会編『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告-2001・2002年度-』、pp. 28-32

〈英語文献〉

Cornwall, I.W. 1956, Bones for the Archaeologist. J.M.Dent & Sona Ltd.

〈韓国語文献〉

公州大学校博物館1997、『汾江・楮石里古墳群』

国立慶州博物館2000、『慶州隄城洞遺蹟』I 國立博物館學術調査報告第12冊

国立光州博物館1998、『榮山江의 古代文化(榮山江の古代文化)』 國立光州博物館20周年紀年特別展

国立扶餘文化財研究所2002、『益山王宮里發掘中間報告』IV 国立扶餘文化財研究所學術研究叢書第32輯

国立中央博物館1980、『中島 進展報告 I』 國立博物館古蹟調査報告第12冊

国立清州博物館・浦項産業科学研究院1997、『韓国古代鉄生産遺蹟發掘調査-鎭川 石帳里遺蹟-』

金鍾萬2001、「泗泚時代百濟土器에 나타난 地域差研究(泗泚時代百濟土器に現れた地域差研究)」：『科技考古研究』第7輯 아주대학교박물관(亞州大學校博物館)、pp.81-144

2003、「泗泚時代百濟土器과 社会相(泗泚時代百濟土器の社会相)」：『百濟研究』第37輯 忠南大学校百濟研究所、pp.37-55

2004、『사비시대 백제토기 연구(泗泚時代百濟土器研究)』 書景文化社

羅州市・木浦大学校博物館1999、『羅州市의 文化遺蹟(羅州市の文化遺蹟)』 木浦大學校博物館學術叢書第56冊

木浦大学博物館・全羅南道海南郡1987、『海南 郡谷里貝塚 I』 木浦大学博物館學術叢書第8冊

扶餘文化財研究所1993、『扶餘舊衙里百濟遺蹟發掘調査報告書』 扶餘文化財研究所學術研究叢書第7輯

漢沙里先史遺蹟發掘調査団・京畿道公宮開發事業団1994、『漢沙里 第5卷』 文化遺蹟發掘調査報告

徐聲勳1980、「百濟의 土器瓶考察(百濟の土器瓶考察)」：『百濟文化』第13輯 公州師範大学附設百濟文化研究所、pp.27-34

서울(ソウル)歴史博物館2002、『잃어버린 「王都」를 찾아서(風納土城 失われた「王都」を探して)』

成周鐸・車勇杰1984、『保寧保寧里百濟古墳發掘調査報告書』 忠南大学校百濟研究所

尹武炳1979、「連山地方 百濟土器의 研究」：『百濟研究』第10輯(〔尹1992〕に再録)

1992、『百濟考古學研究』百濟研究叢書第2輯 忠南大学校百濟研究所

全南大学校博物館・羅州市1999、『伏岩里古墳群』

全南大学校博物館・寶城郡1998、『寶城金坪遺蹟』

あ　と　が　き

本書は、1979～95年度に行われた難波宮跡における発掘調査をまとめたものである。難波宮跡の報告書は過去11冊が刊行され、概報も幾度か出されてきたが、多くは未報告のままであった。遅ればせながらであるが、こうした50件の調査報告を新たにできたことに一種の安堵を覚える。ただ、1件を除くすべての調査が10年以上前のものであり、報告に不鮮明さが生じたことは否めない。調査後の整理と報告書作成は続けて行わねばならないことを改めて感じた。

また、本書ではこれまで正報告が待望されていた前期難波宮「朱雀門」や「東方官衙」の成果を公にし、難波宮期の上町台地の開発や難波出土の新羅・百済土器、「朱雀門」の建築学的特徴についても検討を加えた。こういった成果が古代都市研究の一助となることを願う。

最後に、発掘調査および報告書作成で生じた課題は数多くある。本書は到着点ではなく、通過点である。今後とも問題意識を持ち、研究課題に取り組んでいきたい。

(京嶋覚)

索引

索引は遺構・遺物に関する用語と地名・遺跡名などの固有名詞とに分割して収録した。

〈遺構・遺物に関する用語〉

- M MT15型式 …………… 74
214, 218, 219
鬼板 …………… 51, 52, 66
折縁(ソギ)皿 …………… 58, 141, 143, 150, 153
- T TK10型式 …………… 74
TK23型式 …………… 22
TK43型式 …………… 121
TK208型式 …………… 22, 30, 74, 125
TK209型式 …………… 121
TK216型式 …………… 23
- い イイダコ壺 …………… 121
石垣 …………… 71, 83, 84, 88, 89, 102,
112, 118, 119, 170
井戸 …………… 37, 40, 47, 48, 71, 83,
88, 92, 96, 143, 144,
148, 168
イス …………… 194, 217~219
イノシシ …………… 121, 194, 195
印花文 …………… 171
- う 上町谷 …………… 8, 94, 163, 164, 168,
169
ウシ …………… 120, 121, 166, 169, 193
~198, 200~202
ウマ …………… 120, 121, 166, 169, 193
~198, 200~202
漆 …………… 126, 175
- え 円筒埴輪 …………… 23, 167, 169
円面硯 …………… 56, 58, 171
- お (大坂)夏ノ陣 …………… 8, 96, 97, 102, 119,
144, 145, 148~150, 154,
157
(大坂)本願寺期 …………… 8, 63, 66, 68
大手前谷 …………… 162, 164, 168
桶 …………… 103, 104, 205~208, 210,
214, 218, 219
瓦器 …………… 19, 36, 47, 61, 98
鍔付土器 …………… 132, 173, 174
瓦質(焼成土器) …………… 23, 53, 137~139, 142,
143, 153
火葬(墓) …………… 116, 203, 205, 214, 215,
217, 218
滑石製(品) …………… 72, 125
瓦陶兼業窯 …………… 58, 179
竈 …………… 20, 21, 71, 125, 129
唐草文軒平瓦 …………… 66, 144
ガラス玉鑄型 …………… 21, 23, 41, 42, 46
唐津焼 …………… 10, 39, 40, 92, 93, 102,
107, 114, 118, 138, 142
~144, 148, 203, 208,
211, 213, 215, 218, 219
雁首銭 …………… 104, 114
雁振瓦 …………… 66
- き 宮城南門(朱雀門) …………… 2, 69, 74, 80, 83, 86,
87, 89, 93, 94, 152,
155, 157, 169, 181~192
凝灰岩 …………… 2, 33, 34, 70~72, 82,
89
均等唐草文 …………… 66
金箔(押し)瓦 …………… 58, 83, 84, 96, 102,
103, 144

く 百濟土器	132, 148, 171, 173~175, 177~180	177, 179	人骨	107, 116, 203~221
け 径高指数	14, 121, 125, 129, 147, 153, 167		す スタンプ(文)	72, 141, 153, 173
蛍光X線分析	40, 46, 141, 149		スラグ	141, 148
こ 後期難波宮期	3, 24, 32, 33, 45~51, 53, 60, 61, 66, 80, 82, 87, 89~91, 96, 97, 100, 168		せ 製塩土器	34
小型(丸)瓦	34, 36, 47, 48		青花	10, 39, 40, 47, 58, 139, 141~144, 150, 153
黒色土器	36		青磁	39, 58, 139
五間門	184, 185, 190		整地(層)	1, 2, 8, 10, 13~15, 19, 49, 55, 56, 59, 60, 63, 64, 68, 70, 71, 82, 85, 88~91, 93~97, 100, 119, 120, 145~153, 155, 157, 161, 164~171, 173, 177, 179, 193, 197
コビキ	66		西方官衙	1, 9, 16, 95, 155, 157, 187
さ 皿A	34, 44, 91		瀬戸美濃焼	10, 39, 40, 56, 58, 102, 138, 140~144, 148, 150, 153
皿B	34, 44		埴	30
三国史記	195		前期難波宮期	8, 9, 12, 14, 15, 24, 33, 36, 42, 45, 49, 51, 59, 60, 62, 64, 68, 74, 82, 87, 96, 97, 100, 168
三ノ丸	10, 47, 55, 60, 71, 84, 148, 158, 168		そ 惣構	94, 148, 157, 158, 161, 164
し 信楽焼	138, 139		礎石	153, 185, 191
(小)支谷	14, 94, 95, 98, 118, 120, 145~148, 151, 155, 157, 162~164, 166, 168, 169		素文軒平瓦	58
志野	39, 40		た 太閤下水	155
鷗尾	2, 36, 42, 46		竪穴住居	19, 20
鯉瓦	102, 103, 138, 141		谷地形	1, 2, 6, 15, 49, 55, 58, 60, 63, 64, 93, 99, 119, 138, 149, 161~164, 168, 170, 193, 196, 197
清水谷	164, 168~170		玉造谷	47, 163, 164, 167~169
車輪文当て具	72, 121, 128, 129		玉虫厨子	36, 46
重圈文(軒丸・平)瓦	2, 34, 42, 46, 51, 52, 58, 60, 80, 85		丹波焼	107, 118, 138, 139, 203,
小柱穴	23~25, 29, 33, 45, 183, 189, 191			
焼土(層)	8, 18, 78, 79, 82, 96, 97, 101, 102, 104, 107, 119, 145, 149, 150, 153, 157			
縄文時代	164, 194			
続日本紀	46			
新羅土器	72, 168, 171~173, 175,			

- 208, 211, 213, 215, 218,
219
単廊 …………… 29, 42, 45, 188
- ち 朝堂院南門 …………… 2~4, 62, 69, 84, 85,
184, 185, 189, 190
- つ 杯A …………… 34, 44, 91, 138, 141,
151, 153, 157, 167, 170,
179
杯B …………… 34, 44, 58, 132, 148,
166, 167, 170, 173, 179
杯C …………… 13, 14, 25, 44, 58, 71,
79, 91, 121, 125, 129,
132, 135, 147, 153, 164,
166, 167, 173
杯G …………… 29, 45, 58, 60, 64, 71,
79, 91, 125, 129, 132,
135, 147, 148, 153, 164,
166, 167, 173, 179
杯H …………… 13, 14, 20, 22~25, 30,
33, 34, 58, 71, 74, 78,
79, 91, 121, 125, 126,
128, 129, 132, 135, 147,
148, 153, 164, 166, 173,
175
筒碗 …………… 141, 143, 150, 153
釣鐘谷 …………… 161, 164, 168, 169
- て てつはう(鉄砲) …………… 58, 60
鉄釉 …………… 141
天目碗 …………… 56, 58, 102, 141, 143,
144
- と 陶棺 …………… 169
陶質土器 …………… 22, 23
東方官衙 …………… 2~4, 17, 42, 164
常滑焼 …………… 40, 58
土鍾 …………… 125, 132
土壙墓 …………… 37
徳川期 …………… 8, 10, 18, 19, 24, 37,
40, 49, 63, 66, 67, 69,
- 71, 83, 88, 89, 93, 95~
97, 102, 118, 119, 144,
145, 150,
154, 160
土葬(墓) …………… 103, 114, 118, 203, 205
~208, 210, 213~215,
218, 219
豊臣(前・後)期 …………… 6, 8, 9, 14, 18, 19, 24,
31, 32, 37~39, 47, 55,
56, 58~60, 71, 83, 84,
92~97, 102, 103, 119,
135, 138, 143, 144, 147
~150, 153, 154, 157,
158, 160, 161, 164, 168,
170, 193, 197
- な 難波Ⅲ古段階 …………… 33, 42, 72, 79, 120, 121,
125, 129, 147, 151, 153
難波Ⅲ中段階 …………… 14, 23, 29, 30, 42, 45,
56, 58~60, 72, 79, 91,
94, 119, 120, 129, 135,
148, 164, 166~170, 173
難波Ⅲ新段階 …………… 2, 29, 42, 45, 151, 153,
157, 164, 166, 168, 170
難波Ⅳ古段階 …………… 58, 167, 168, 170
難波Ⅳ新段階 …………… 167
難波Ⅴ古段階 …………… 34, 44, 91, 167, 168,
170
難波Ⅴ中段階 …………… 166, 168, 169, 173
縄タタキ …………… 34, 42, 47, 48, 53
- に 西朝集殿 …………… 80, 82, 87
ニホンジカ …………… 138, 193, 198
日本書紀 …………… 87, 169, 179, 180, 194
~196
- ぬ 布目 …………… 13~15, 31, 34, 41, 48,
53, 132
- は 白磁 …………… 106, 139, 142, 144
畠 …………… 58, 60, 119, 145, 148
八角殿 …………… 2~4, 187~189

波頭文軒平瓦	66		169
ひ 東朝集殿	53, 69, 82, 87, 184	ま 丸皿	141, 143, 148, 150, 153
備前焼	10, 40, 58, 102, 138, 139, 142, 143, 153	饅頭心	39, 58, 139
瓶	40, 126, 127, 139, 148, 171, 173~177, 179, 180	も 木製人形	104, 114
		木簡	1, 2, 4, 55, 58, 60, 72, 164
ふ 韃羽口	138, 141, 148	森ノ宮谷	163, 164, 168, 169
複廊	78, 85, 181~183, 187~ 189, 191	や 焼塩壺	93, 138
芙蓉手	141, 144, 153	り 李朝	40, 139, 142, 144
振れ隅	185, 186	龍造寺谷	95, 97, 118, 120, 138, 146, 148, 150, 151, 155, 157, 163, 164, 166~168
ほ 紡錘車	125	緑釉(陶器)	168, 171, 173
墨書	58, 104, 114, 118, 139, 143	る 埴塙	138, 141, 148
堀	6, 24, 37, 55, 60, 63, 66, 68, 89, 94, 148, 157, 158, 161, 164	れ 蓮華文軒丸瓦	34, 36
本町谷	1, 162, 164, 166, 168,		

〈地名・遺跡名など（日本）〉

- あ (伝)飛鳥板蓋宮跡 …… 184, 190
飛鳥池遺跡 …… 41
飛鳥寺 …… 34, 58, 184, 185
- い 伊皿子貝塚 …… 195, 198
- う 上之宮遺跡 …… 41, 42
上町筋 …… 63, 118, 119, 143, 148,
155, 157, 158, 160
上町台地 …… 1~3, 4, 6, 8, 47, 59,
68, 161, 162, 168, 169,
178, 193
瓜破遺跡 …… 20
- え エビノコ郭 …… 184, 190
円周寺 …… 118
- お 大川 …… 3
大坂城(跡) …… 5, 10, 47, 60, 84, 116,
148, 150, 154, 157, 161,
164, 168, 193
大津宮 …… 190, 192
大浜遺跡 …… 195, 196, 198
太山田54号墳 …… 176
- か 川原寺 …… 185
- く 楠葉平野山瓦窯 …… 72
桑津遺跡 …… 20
- け 景德鎮(窯) …… 141, 143
- こ 孝徳(天皇・朝) …… 169, 189
鴻臚館 …… 170
コフノ塚遺跡 …… 176
- さ 宰相山遺跡 …… 170
猿投(窯) …… 175
讃良郡糸里遺跡 …… 41, 42
三韓(の館) …… 179
- し 四天王寺 …… 3, 58, 72, 157, 171,
184, 185
篠窯 …… 58
漳州(窯) …… 39, 141, 143
莊原池窯跡群 …… 176
- す 鋤崎古墳群 …… 175, 176
住友銅吹所跡 …… 197
- せ 石光山43号墳 …… 176
千本屋廃寺 …… 36
- た 大安寺 …… 184, 185, 191
橘寺 …… 184, 185
谷町筋 …… 6, 97, 138, 149, 150,
155, 162, 163, 166
- ち 中央大通 …… 160, 163
- つ 釣鐘町 …… 161
- て 天武朝 …… 3, 189
- と 唐招提寺 …… 184
東大寺 …… 183, 185, 189
東南新宮 …… 46
鳥羽離宮 …… 36
豊臣秀吉 …… 157
- な 中大谷13号墳 …… 176
長岡宮 …… 3
長原遺跡 …… 194, 197, 198
中大兄皇子 …… 169
長堀通 …… 6
鉞切遺跡 …… 195, 196, 198
難波大郡 …… 178
難波津 …… 1, 3, 171, 178
難波長柄豊碕宮 …… 36, 178
- に 新沢千塚281号墳 …… 176

- 西新町遺跡 …………… 41, 42
- ね 猫間川 …………… 161
- は 羽根戸古墳群 …………… 195, 198
- ひ 東横堀川 …………… 155
平等院 …………… 36
広石古墳群 …………… 176, 180
- ふ 藤原宮(跡) …………… 85, 183, 184, 187, 188,
190, 191, 192
布留遺跡 …………… 22, 41, 42
- へ 平安京 …………… 36
平城宮(跡) …………… 41, 42, 183~187, 190,
192
- ほ 平城京(跡) …………… 84, 194, 197, 198
- ほ 法円坂 …………… 2, 7, 18, 168, 203, 205,
211, 213, 217
法隆寺 …………… 36, 183, 185, 189, 191,
192
本町通 …………… 162
- ま 松屋町筋 …………… 155
- む 向山瓦窯 …………… 36
- や 薬師寺 …………… 185, 192
山田寺 …………… 189, 191, 192
- り 琉球列島 …………… 175
龍造寺町 …………… 138, 148~150, 155,
163, 166

〈地名・遺跡名など(韓国)〉

- ㄱ 官北里遺跡 …………… 173
金坪遺跡 …………… 40, 41
- ㄴ 弥勒寺 …………… 174, 180
漢沙里遺跡 …………… 40, 41
- ㄷ 百濟烏含寺 …………… 58
福泉洞1号墳 …………… 176
鳳溪里第197号墳 …………… 171
扶蘇山城 …………… 180
伏岩里2号墳 …………… 132, 173
- ㄹ 泗沘 …………… 127, 132, 173, 176,
179, 180
- ㅇ 王宮里遺跡 …………… 173, 174, 175, 176
熊津 …………… 176, 180
- ㅁ 表井里古墳群 …………… 176
- ㅂ 華山里古墳群 …………… 173
隍城洞遺跡 …………… 41

**The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XII)**

July 2004

Osaka City Cultural Properties Association

Notes

The following symbols are used to represent archaeological features and others in this text.

SA : Palisade or fence

SB : Building

SD : Ditch

SE : Well

SK : Pit

SM : Moat

SP : Pit or Posthole

SX : Other features

CONTENTS

Foreword

Explanatory Notes

Chapter I Outline of the excavations in the Naniwa Palace Site	1
S.1 Historical outline of the investigation into the Naniwa Palace Site	1
1) Outline	1
2) Introduction of the recent notable Researches	1
3) Public education related to the Naniwa Palace	3
S.2 Outline of the excavations reported in this volume	6
1) Outline of dividing the excavated area	6
2) Outline of Stratigraphy	6
Chapter II Researches on the east of the Palace	9
S.1 Researches on the NW84-6 and the surrounding	9
1) Outline of the Researches and the surrounding	9
2) Results of Current Researches	10
3) Conclusion	14
S.2 Researches on the NW80-9 and the surrounding	17
1) Outline of the Researches and the surrounding	17
2) Results of Current Researches	18
3) Conclusion	40
S.3 Researches on the OS89-89	47
1) Outline of the Researches and the surrounding	47
2) Results of Current Researches	47
3) Conclusion	48
S.4 Researches on the NW89-17 and the surrounding	49
1) Outline of the Researches and the surrounding	49
2) Results of Current Researches	49
3) Conclusion	53
S.5 Researches on the NW94-20 and 86-23	55
1) Outline of the Researches and the surrounding	55
2) Results of Current Researches	55
3) Conclusion	59
Chapter III Researches on the south of the Palace	61
S.1 Researches on the NW88-21 and 82-39	61
1) Outline of the Researches and the surrounding	61
2) Results of Current Researches	61
3) Conclusion	62
S.2 Researches on the NW87-21 and the surrounding	63
1) Outline of the Researches and the surrounding	63
2) Results of Current Researches	63
3) Conclusion	68

S.3 Researches on the NW93-5 and the surrounding	69
1) Outline of the Researches and the surrounding	69
2) Results of Current Researches	69
3) Conclusion	84
S4 Researches on the NW90-20 and the surrounding	88
1) Outline of the Researches and the surrounding	88
2) Results of Current Researches	89
3) Conclusion	93
Chapter IV Researches on the west of the Palace	95
S.1 Researches on the NW93-4・12 and the surrounding	95
1) Outline of the Researches and the surrounding	95
2) Results of Current Researches	95
3) Conclusion	116
S.2 Researches on the NW90-7 and 85-39	119
1) Outline of the Researches and the surrounding	119
2) Results of Current Researches	119
3) Conclusion	145
S.3 Researches on the NW90-29 and the surrounding	150
1) Outline of the Researches and the surrounding	150
2) Results of Current Researches	151
3) Conclusion	155
S.4 Researches on the NW84-40 and 85-44	159
1) Outline of the Researches and the surrounding	159
2) Results of Current Researches	160
Chapter V Examination of features and artifacts	161
S.1 Developmental work for the construction of the Former Naniwa Palace and the surrounding	161
1) Preface	161
2) Reconstruction on the geographical feature at the tip of Uemachi upland	161
3) The epoch and scales of the leveling	164
4) Conclusion	168
S.2 Foreign artifacts in Ancient Naniwa	171
1) Preface	171
2) Outline of the foreign artifacts	171
3) Examination of the bottle-shaped pottery	176
4) Negotiations with foreign nations practiced in Ancient Naniwa	177
5) Conclusion	180
S.3 Architectural consideration for the main palace gate and its compound corridor in the south side of the Former Naniwa palace	181
1) Preface	181
2) Consideration of the measure (the <i>shaku</i>) of construction	181
3) About the plan and structure of the gate based on the arrangement of pillars	182
4) About the compound corridor contiguous to the gate	187
5) Conclusion	188

S.4 Faunal remains unearthed at the NW90-7	193
1) Preface	193
2) Outline of the unearthed faunal remains	193
3) Consideration	194
4) Conclusion	197
S.5 Human bones unearthed from the premodern cemetery in Hoenzaka 2-chome	203
1) Preface	203
2) Outline of human bones	203
3) Conclusion	218
Bibliography and References	222
Postscript	
Index	
English Contents and Summary	
Reference Card	

ENGLISH SUMMARY

In this volume, we report on the results of 51 excavations (with total area of 17,782 m²) undertaken in the Naniwa Palace Site prior to the developmental works between fiscal 1979 and 1995. These excavations were carried out around the Naniwa Palace Site Park, and we divided the excavated area reported in this volume into Eastern, Southern and Western Area of the Naniwa Palace Park for the convenience (Fig 1).

Outline of the Naniwa Palace Site (Tab 1)

The Naniwa Palace Site is situated in Chuo Ward, Osaka City, on the northern tip of the Uemachi Upland (Fig 2). Excavations at this site have been continuing since 1954. These

investigations revealed that the palace was divided into two phases; the Former Naniwa Palace and the Latter Naniwa Palace. The Former Naniwa Palace was the first Chinese style palace built in Japan, and was probably “*Naniwa-no-Nagara Toyosaki-no-miya*” established by Emperor *Kotoku*. The Latter Naniwa Palace was built by Emperor *Shomu* in the Nara period.

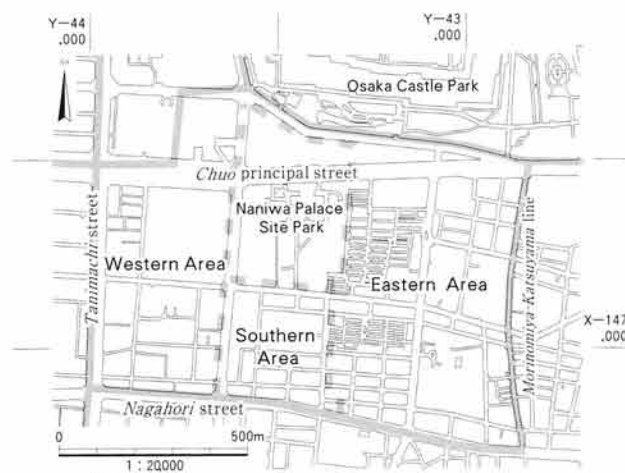


Fig 1. The detailed plan of the excavated area

Investigation Results

1) Middle Kofun Period (the 5th century)

In the Eastern area, features, such as

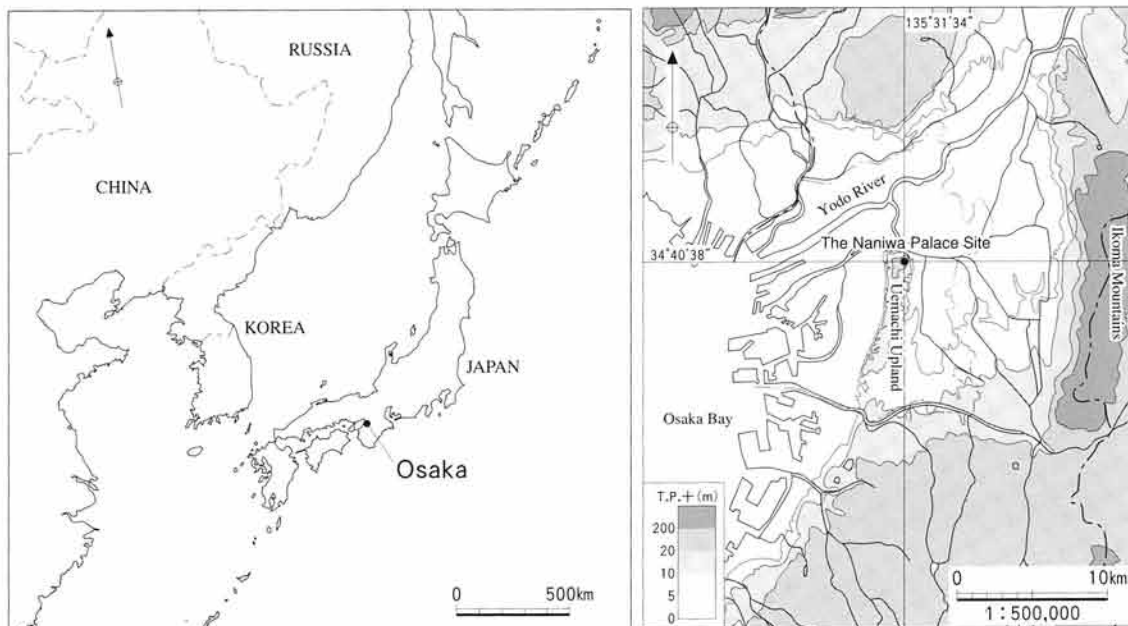


Fig2. The location of the Naniwa Palace Site in Osaka City

Tab1. The chronological table of the Naniwa Palace related events

The date (era name)	Event
643 (Kougyoku 2)	The <i>Beakje</i> missions stayed in Naniwa.
645 (<i>Taika</i> 1)	The <i>Taika</i> Reformation (<i>Taika no Kaishin</i>). The capital was transferred from <i>Asuka</i> to <i>Naniwa</i>
650 (<i>Hakuchi</i> 1)	Emperor Kotoku started the construction of the Naniwa Palace (<i>Naniwa-no-Nagara Toyosaki-no-miya</i>) . (This palace is usually called the Former Naniwa Palace.)
652 (<i>Hakuchi</i> 3)	The Naniwa Palace was completed.
653 (<i>Hakuchi</i> 4)	Prince <i>Nakano-oe</i> and his subordinates returned to Asuka.
654 (<i>Hakuchi</i> 5)	Emperor <i>Kotoku</i> passed away.
660 (Saimei 6)	<i>Baekje</i> collapsed.
663 (<i>Tenchi</i> 2)	Japanese army was defeated by the Allied Forces of <i>Tang</i> and <i>Silla</i> at the battle of <i>Hakusukinoe</i> in the southwest of Korean Peninsula.
667 (<i>Tenchi</i> 6)	The capital was transferred to <i>Ohtsu</i> .
683 (<i>Temmu</i> 12)	The sub-capital system was introduced. Naniwa was decided as the sub-capital.
686 (<i>Shucho</i> 1)	A great fire burnt down the Former Naniwa Palace.
726 (<i>Jinki</i> 3)	Reconstruction of the Naniwa Palace started. (This palace is usually called the Latter Naniwa Palace.)
744 (<i>Tempyo</i> 16)	Emperor <i>Shomu</i> came to <i>Naniwa</i> and decided there as the capital.
745 (<i>Tempyo</i> 17)	The capital was transferred to <i>Heijo-kyo</i> .
784 (<i>Enryaku</i> 3)	The capital was transferred to <i>Nagaoka</i> (the buildings of the Latter Naniwa Palace were dismantled and their parts were conveyed to <i>Nagaoka</i> for the recycling use.)

pit-dwellings with stove and pit, and many artifacts belongs to this age were excavated (research of NW80 - 9 : chapter II - 2). Especially, the mold of beads from a pit (SK 202) was similar to the one from a South Korean site, which enabled us to make a comparative study on the molds of Japan and Korea.

2)Just before the Former Naniwa Palace (the 6th century to the first half of 7th century)

Many features in this period were found from all the areas, such as pillar holes of the building and pits. In the Southern area, the tuff block, which is considered to be used on foundation platform of temples, roof tiles and Silla style pottery were unearthed from a large pit. The pit was destroyed by the construction of ‘*Suzakumon*’ gate (chapter III - 3). These might be the evidence to prove the existence of a large settlement or an early city with small temples in this stage.

Besides, *Beakje* style pottery was discovered from the fill buried in a gully, which was researched on NW90-7 in the Western area (chapter IV - 2). One of those is very similar to the bottle-shaped pottery from the Southwestern Korean Peninsula.

Some ancient documents in “*Nihonshoki*” mentioned the diplomatic institution called “*Naniwa Ohgori*” and the rest house for Chinese and Korean missions, such as “*Sankan-no-murotsumi*” existed in Naniwa. We considered that Naniwa had already developed due to its diplomatic role before the construction of the palace.

3) The Former Naniwa Palace phase (the second half of the 7th century)

In the Eastern area, building cluster was discovered (NW80 - 9 etc. : chapter II - 1 and 2). As a result of the examination on the context of each building and the analysis of the unearthed artifacts, it became clear that this cluster was rebuilt at least once during the Former Naniwa Palace phase. Besides, the miniatures of round tiles and the acroterium, a curved fish tail-shaped ornament, were also unearthed in these excavations. The scale of those is similar to the ones used on the roof of *Tamamushi-no-zushi*, the Buddhist miniature sanctuary ornamented with jewel-beetle's wings. Consequently, it is considered that the important institution related to Buddhism existed in the east of the Former Naniwa Palace.

In the Southern area, a huge gate (so-called ‘*Suzakumon*’, meaning the main palace gate in the south side), the compound corridors, several buildings and remains of levelling the ground were found (Fig 3). The gate was discovered in the research NW93 - 5 for the first time. It had the length of 23.52m and the width of 8.83m, and each pillar was 1.8m across in diameter. The compound corridors were connected with the western and the eastern sides of the gate. Since the burned lumps of soil, possibly parts of the wall of the gate, were unearthed from each pillar hole, it is considered that the gate was burned down in 686 as same as another building in the Former Naniwa Palace. In the northeast and the northwest of the gate, the long and slender buildings called *Choshuden*, meaning Morning Assembly Hall, were respectively found.

In the Western area, a gully buried for the preparations around the palace was found. Many artefacts dated to just before the construction of the palace, including the above mentioned *Beakje* pottery (chapter IV - 2) were unearthed from the buried fill. Moreover, many bones of cattle and horse were unearthed from the lowest layer of the fill, which

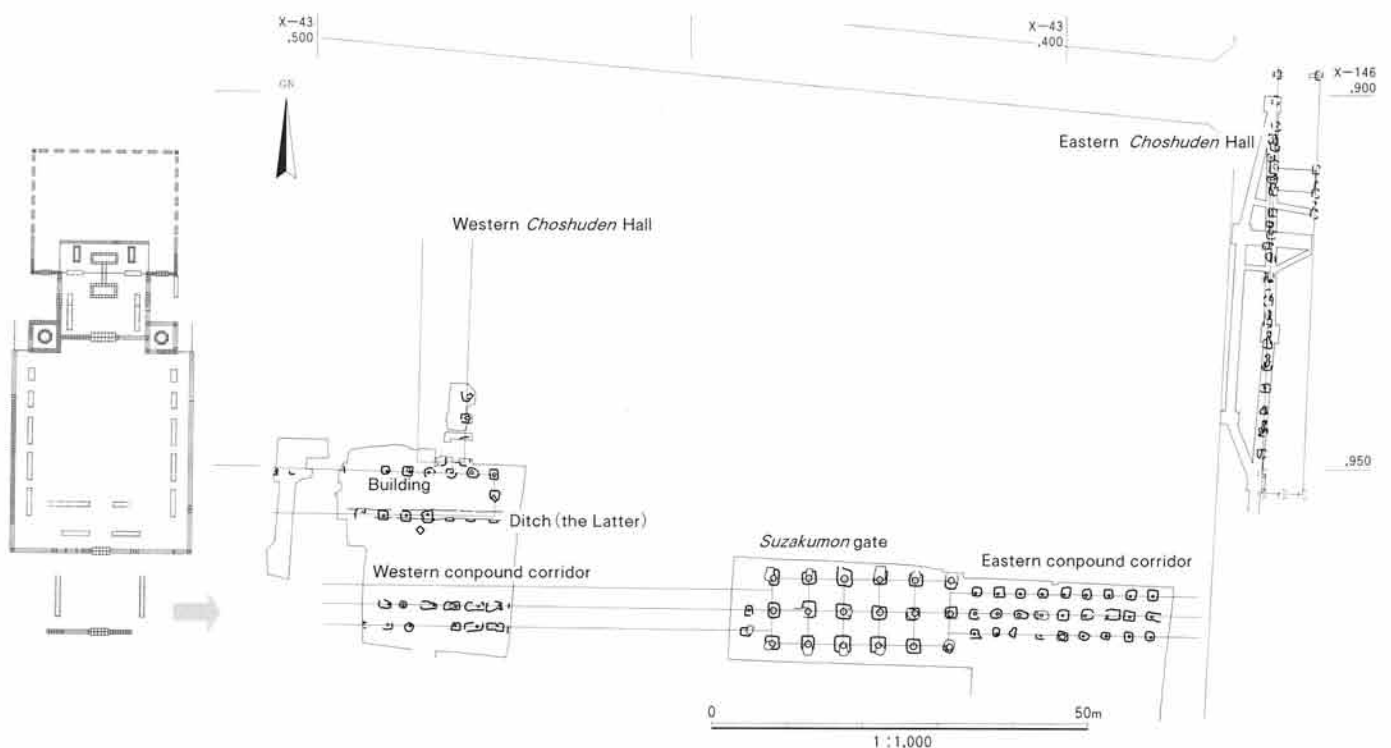


Fig 3. The plan of Suzakumon gate and the surrounding buildings

indicates the possibility of the sacrifice rituals just before the Palace construction.

4) The Latter Naniwa Palace phase (the 8th century)

In the Eastern area, the pottery and the roof tiles of the first half of the 8th century were unearthed from some pits on the upper surface of the building cluster, mentioned in the research of NW80 - 9 and 82 - 10 (chapter II - 2). Until a few years ago, because we considered the pits had been dug just after the destruction of the building cluster, we thought the newer buildings had belonged to the Latter Naniwa Palace phase and had been the institution related to 'Tounanshinkyu', where Emperor *Kouken* visited in 756 according to "Shoku-nihongi". Nevertheless, as a result of recent reexamination on the features and the artifacts, it became clear that the newer building cluster had not belonged to the Latter Naniwa Palace phase, but to the Former phase, while the unearthed pottery and roof tiles may show the existence of the buildings in the Latter around there.

In the middle of the Eastern area and the Southern area, several ditches streaming from west to east were found. The fill in one of them contained many round and flat eave tiles and terminal ridge-end tiles with the concentric circle pattern (chapter II - 4).

5) The *Osaka-Honganji* Temple Era (from 1496 to 1580)

At the NW87-21 of the Southern area, the huge moats with the width of 9m and the depth of 4.3m were excavated and many roof tiles of the *Muromachi* style were unearthed there (chapter III - 2). The moats were buried artificially because, we consider, the levelling was carried out on the construction of the Toyotomi Osaka Castle after the downfall of *Osaka-Honganji* Temple.

6) The Toyotomi Era (from 1580 to 1615)

At the NW80-9 of the Eastern area, buildings and fences, aligning in parallel to each other, were found (chapter II - 2). These were considered to be a part of the residential area of *samurai*(warrior).

In the Southern area, many ceramics and metalwork related artifacts were unearthed from the ditch on the NW90 - 7. These ceramics were dated to the Early Toyotomi Era, containing *Seika* porcelains from China, *Chosun*-dynasty style porcelains, *Setomino* style ceramics, *Bizen* style ceramics and so on. The metalwork related artifacts were a tuyere and crucibles, contained in the recycled *Setomino* style ceramics. Besides, the analysis of X-ray fluorescence spectrometry made it clear that the slags, clinging to the surface of the metalwork related artifacts, contained mostly copper (Cu) and zinc (Zn), and a very little gold (Ag). We inferred that metal-workshops existed somewhere near this research point since the features related to the metalwork were not found here.

7) The Tokugawa Era (from 1615 to 1867)

In the Western area, a cemetery was researched on the NW93 - 12, which contained 49 burials, such as the cremations and direct inhumations put in the ceramic vessels. Many parts of the human bones were able to be estimated their age and most of those were younger than 20 years old. Some infant's burials had mortuary goods, such as wooden puppets and small ceramics.

New perspective about ancient Naniwa

Through the editorial work of this volume, we could reach two new perspectives on ancient Naniwa.

Firstly, as a result of reconstructing original topography of the northern tip of Uemachi upland, it became clear that there were many valleys and gullies under the present ground and most of the gullies were buried due to the construction of the Former Naniwa Palace and the surrounding preparations. Under the reign of Emperor *Kotoku*, though these preparations had largely progressed, the developments had not been continuing because only a few building were found in the excavations. Therefore we considered the developments were not finished because of the political confusion as described in “*Nihonshoki*” (see Tab1).

Secondly, it became obvious that the amount of unearthed *Silla* and *Beakje* style pottery was larger in Naniwa than in other places in the middle 7th century, just before the construction of the Former Naniwa Palace (Fig 4). This implies that Naniwa was the entrance of foreign missions to *Yamato* therefore many foreign people, such as *Silla* and *Beakje*'s, came and stay in Naniwa from pre-Naniwa Palace phase. Besides, several ancient documents described that *Goguryeo* and *Beakje* had become hostile with *Tang* and *Silla* in the 640s of the Pre-Naniwa Palace phase, and Korean Three Kingdoms frequently dispatched the mission to Japan for the alliance with Japan. Especially, description in “*Nihonshoki*” depicted more on the missions of *Beakje* in the 640s than on the missions of the other Korean Kingdoms. Since we believed that the *Beakje* style pottery, unearthed on the NW90-7 was dated to the 640s, the *Beakje* missions might have conveyed those pieces then.

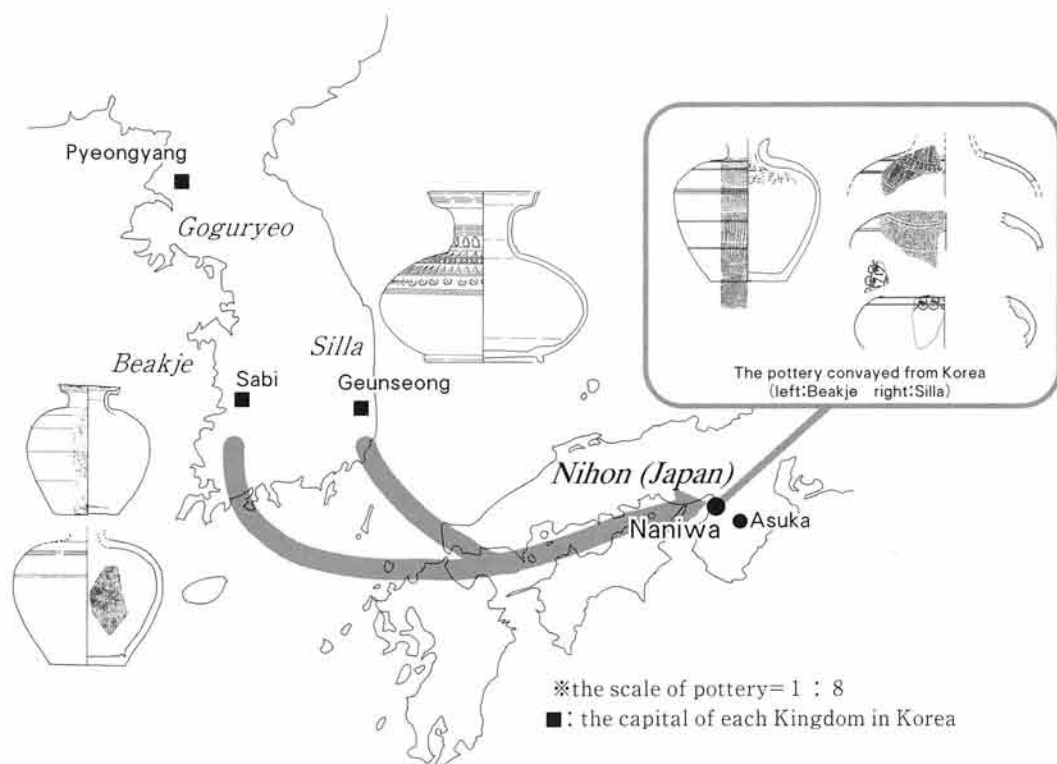


Fig 4. The Korean Peninsula and the Japanese Archipelago in the middle 7th century and the *Silla* and *Beakje* style pottery conveyed from Korea to Naniwa

報 告 書 抄 録

ふ り が な		なにわきゅうしのけんきゅうだい12						
書 名		難波宮址の研究第十二						
編 著 者 名		寺井誠・京嶋覚・佐藤隆・南秀雄・李陽浩・宮路淳子・松井章・安部みき子・石井麻里絵						
編 集 機 関		財団法人 大阪市文化財協会						
所 在 地		〒540-0006 大阪市中央区法円坂1－1－35 TEL 06-6943-6833						
発行年月日		西暦 2004年7月12日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なにわのみやあと 難波宮跡	中央区馬場町・ 法円坂・森ノ宮中央・ 上町・谷町・内久宝 寺町・龍造寺町・安 堂寺町	27128	－	34° 40′ 38″	135° 31′ 34″	19790820 ～ 19950908	17,782m ²	大阪市教育局の公共事業のほか、民間の建設工事。計50件。
所収遺跡名	種別	主 な 時 代		主 な 遺 構		主 な 遺 物		
難波宮跡	集落	古墳時代		竪穴住居・土壙		土師器・須恵器・陶質土器・韓式系土器・埴輪・ガラス玉鑄型		
	都城	飛鳥時代		掘立柱建物・塀・土壙・溝		土師器・須恵器・新羅土器・百済土器・瓦・凝灰岩切石・動物遺存体		
	都城	奈良時代		掘立柱建物・土壙・溝		土師器・須恵器・瓦		
	城郭・ 城下町	豊臣期		掘立柱建物・塀・溝・土壙・井戸・石垣		土師器・瓦質土器・備前焼・丹波焼・信楽焼・青花・李朝陶磁・瀬戸美濃焼・唐津焼・金箔押瓦・金属加工関係遺物・動物遺存体・墨書土器		
	城下町	徳川期		畠・石垣・墓		陶磁器・土師器・木製人形・墨書土器・人骨・動物遺存体		

原 色 図 版



NW80-9 次調査地全景(西から)



NW80-9 次調査地全景(北から)



NW80—9 次のガラス玉鑄型と共伴須恵器



NW80—9 次・OS89—89次出土小型丸瓦
(右はNW30次出土の小型鵝尾、背後はNW85次出土の蓮華文軒丸瓦で半径約 9 cm)



NW93-5次SB701全景



焼土を含む柱穴(NW93-5次SC701のC2)



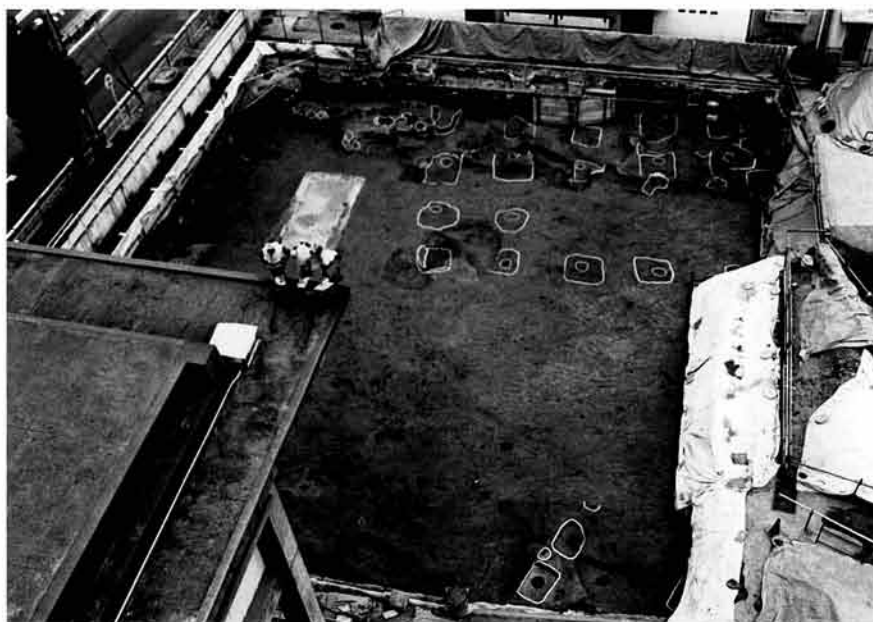
百済土器瓶



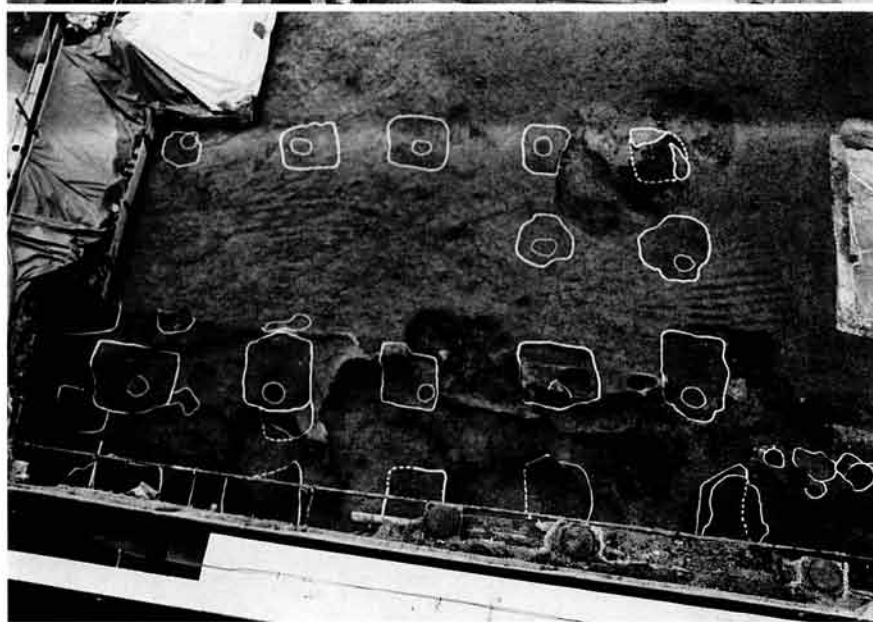
その他の朝鮮半島系土器

図 版

調査地全景(西から)

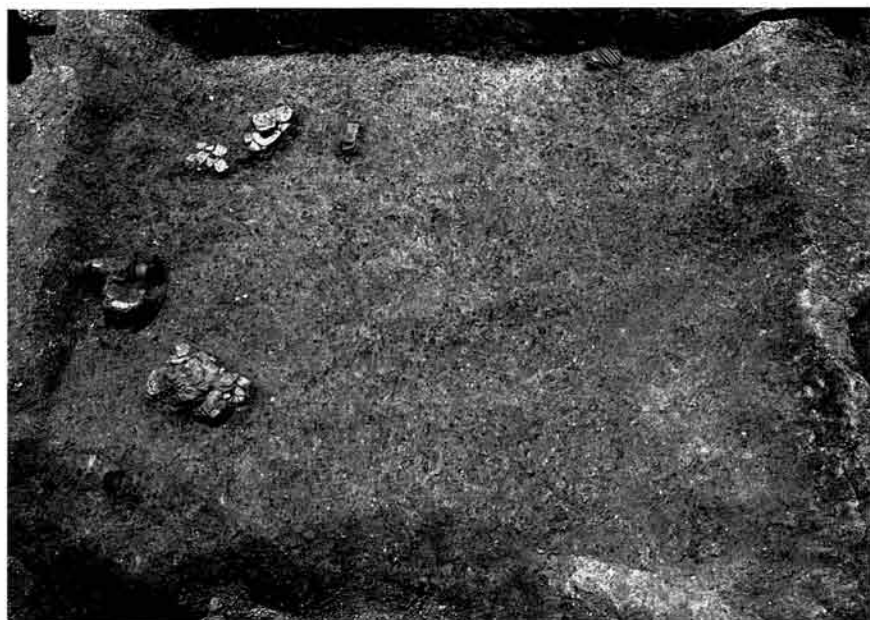


SB701検出状況
(東から)

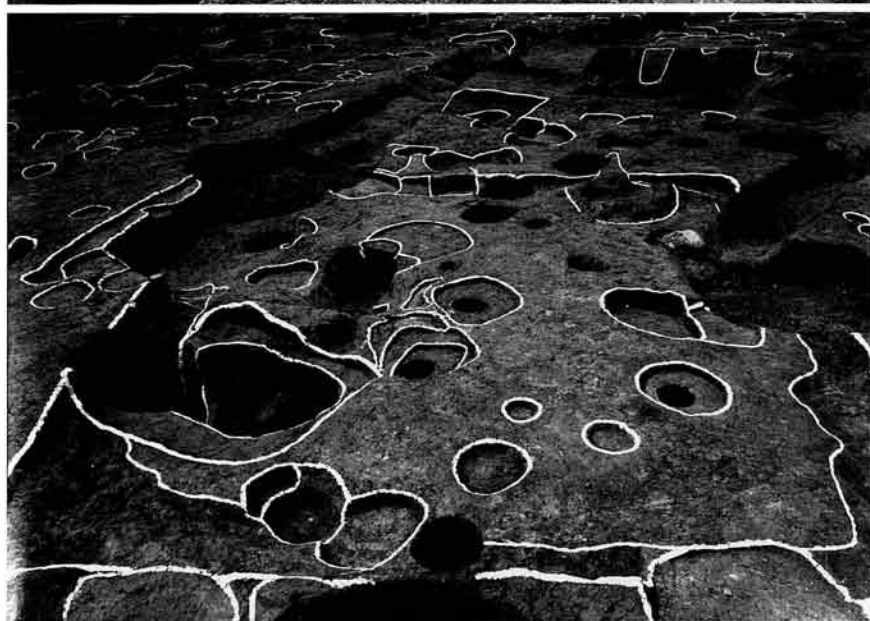


SK701遺物出土状況





SK802遺物出土状況
(北から)



SB813完掘状況
(南東から)



SB814竈検出状況
(南から)

SB706・707および
周辺遺構
(西から)



SB706(北から)



SB707(北から)





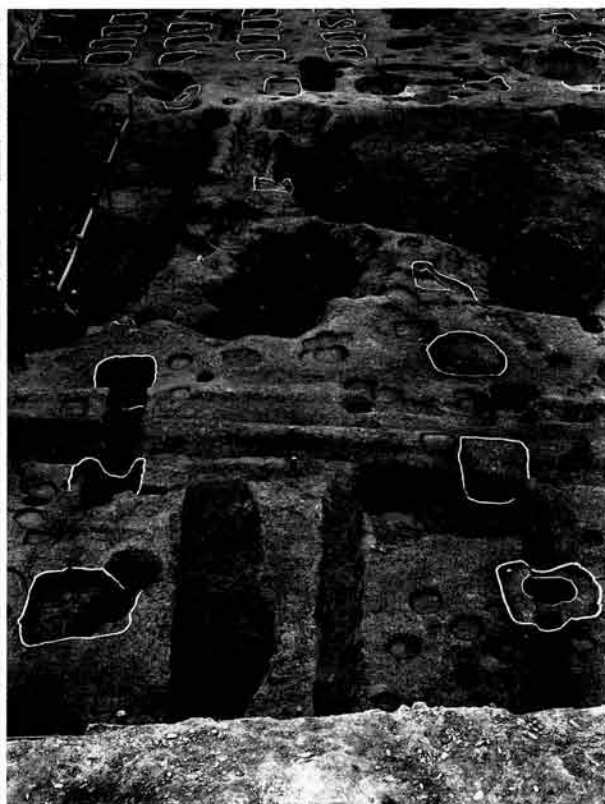
SB703(南から)



SB702(南から)

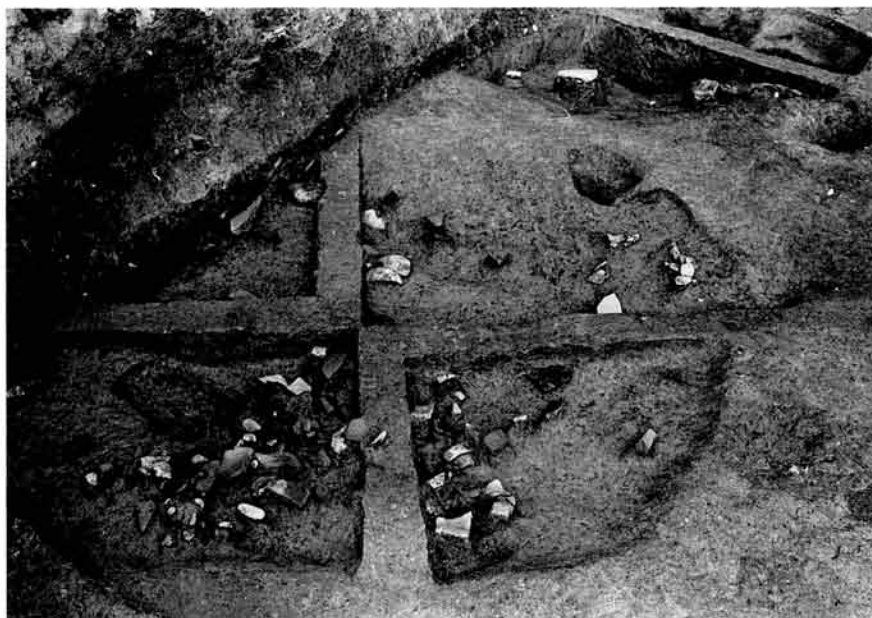


SA702(南から)

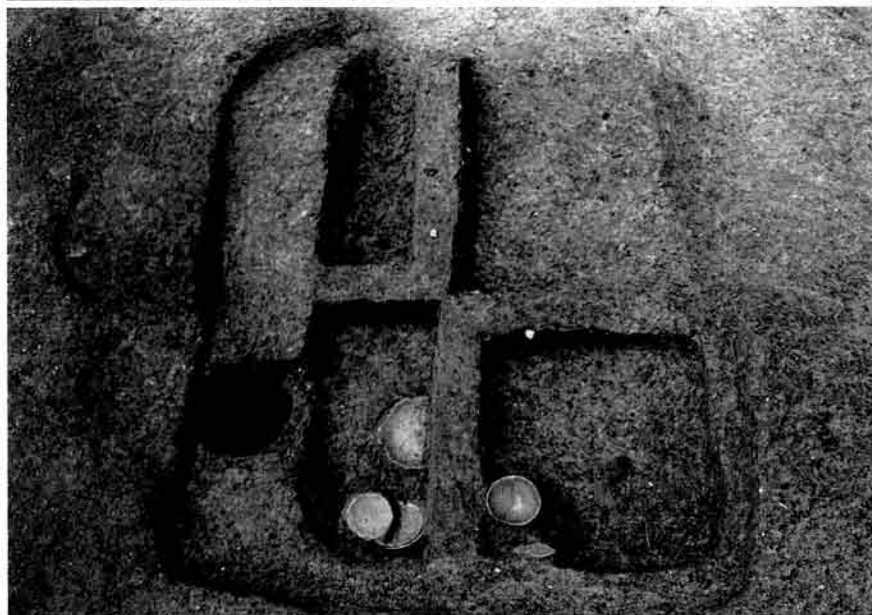


SB701(南から)

SK702遺物出土状況
(南東から)

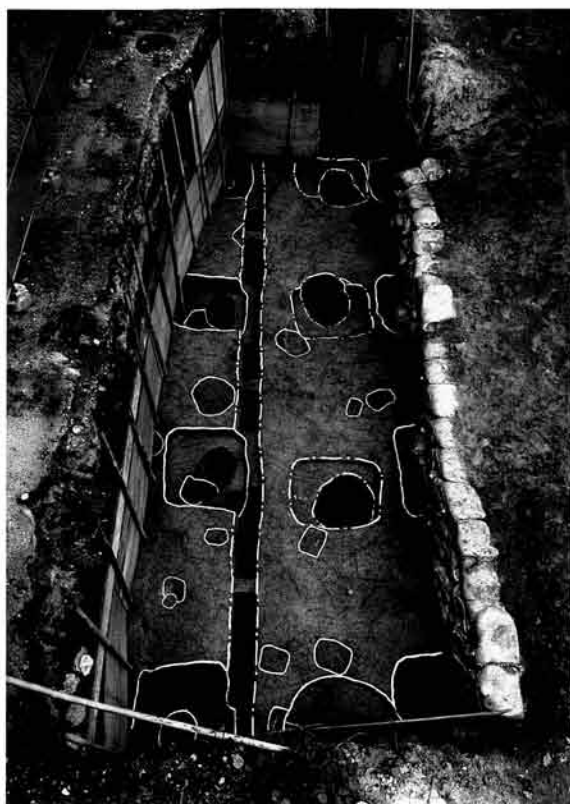


SK503遺物出土状況
(北から)



中近世遺構完掘状況
(北から)





NW82-10次SC701・SA703・SD703
(第Ⅱトレンチ：南から)



NW82-10次SB815・SC701・SA703・SD703
(第Ⅲトレンチ：北から)

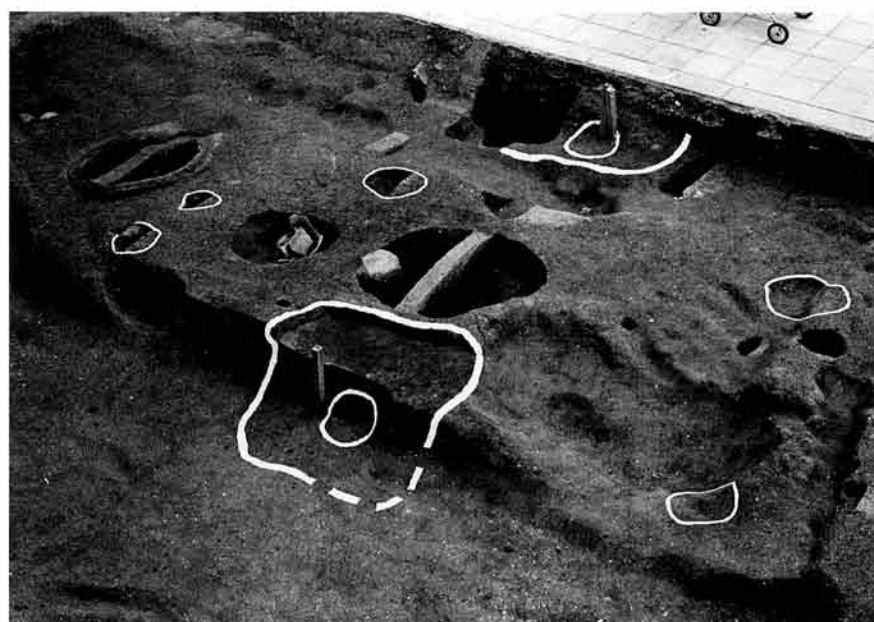


NW82-44次全景
(西から)



NW82-44次SA706・SD404・SA406
(東から)

NW86-12次
柱穴検出状況
(北東から)



NW89-17次
SD701瓦出土状況
(東から)



NW94-20次
谷地形完掘状況
(南東から)





NW80-8次
調査地西部完掘状況
(南から)



NW87-21次
SM501・502完掘状況
(西から)



NW87-21次SM501断面
(東から)



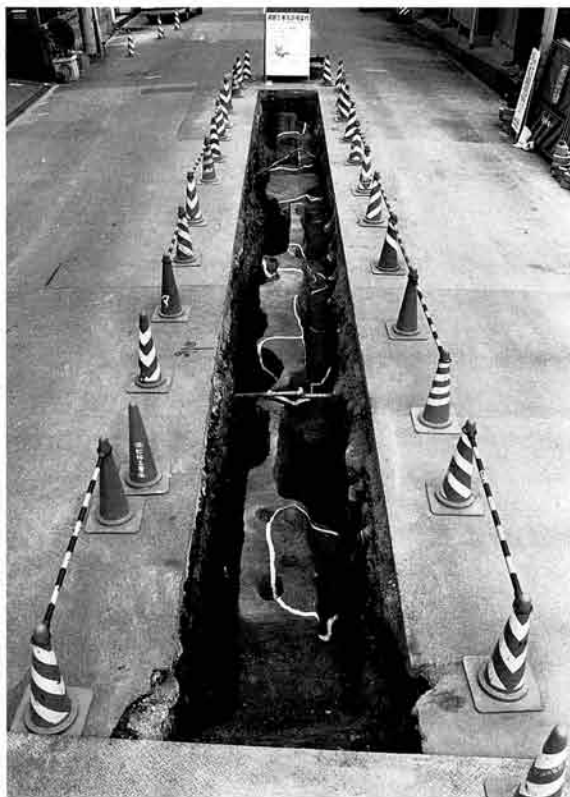
NW86-2次調査地全景
(南から)



NW89-20次SP705・706
(西から)



NW86-2次SB704西側柱列
およびSB705(北から)



NW86-2次SB704
西側柱列(南から)



SK801検出状況
(北から)

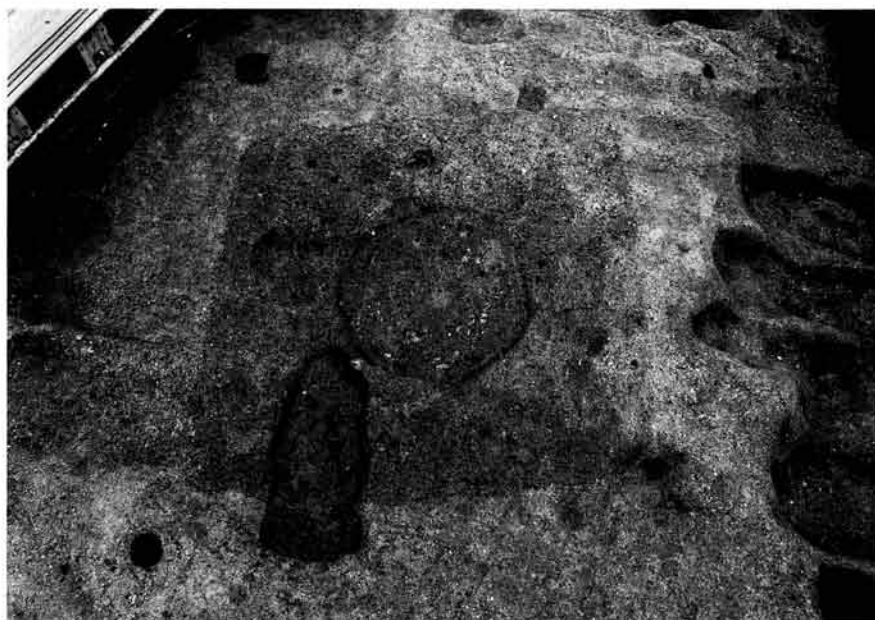


SK801断面



SC701のN2断面
(南から)

SB701のS5検出状況
(西から)



SB701のS5断面
(南から)



SB701のS3断面
(南から)





SP804~806および
SC702柱穴
(南から)



SB702・703
(北から)

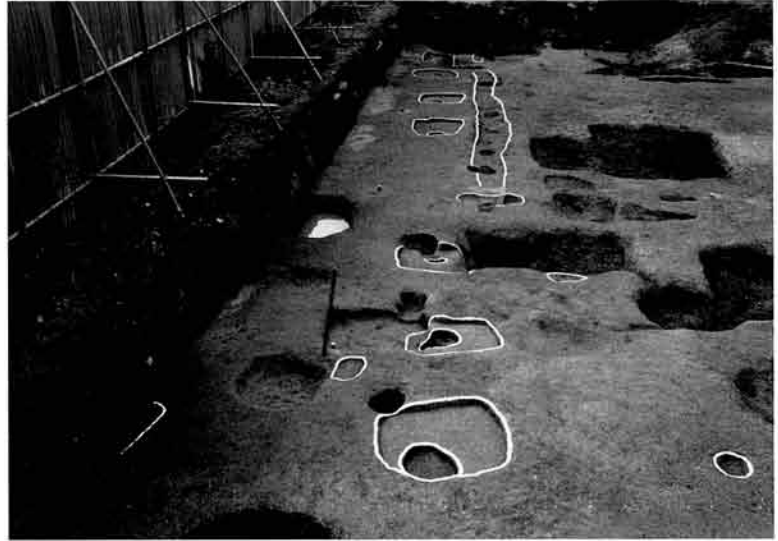


SB703・SD701
(北から)

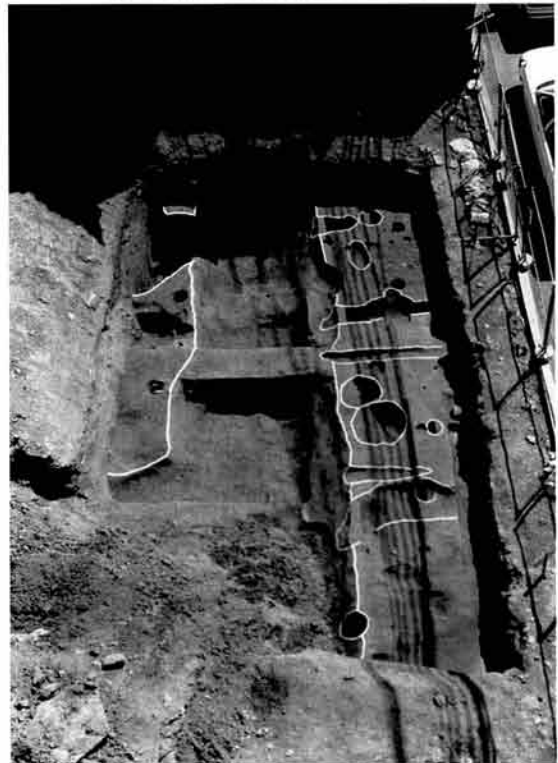
NW90-20次
調査地全景
(南から)



NW90-20次
SB701・702
(北から)



NW95-10次SD401
(西から)





NW84-46次SB801・
802検出状況
(南から)



NW85-10次SB701検出状況
(西から)

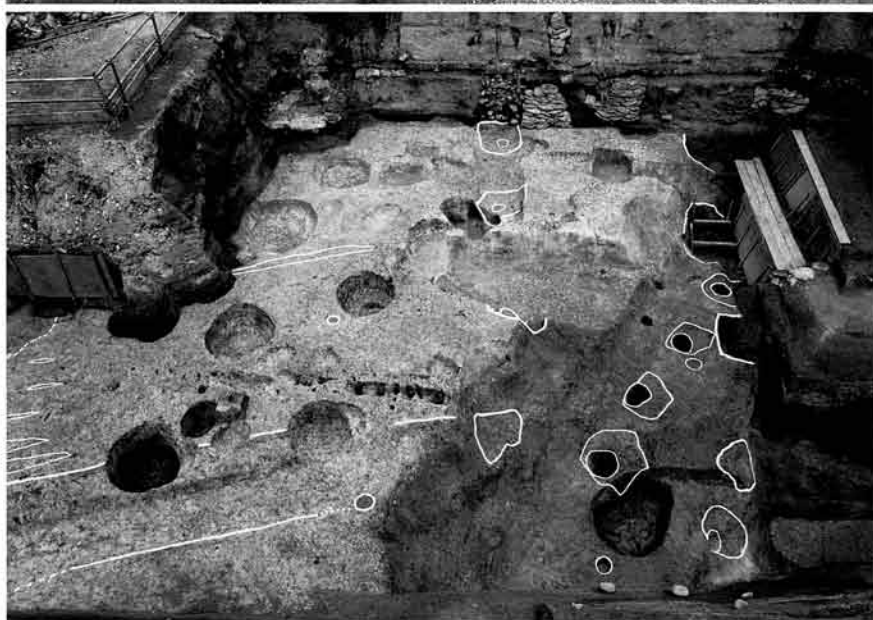


NW86-24次SP701・702
検出状況(北から)

NW93-4次SB703
(東から)



NW93-12次
SB702・SB803
(南から)



NW93-12次近世墓地
(北から)





5号墓人骨出土状況
(写真上が東)



7号墓人骨出土状況
(写真上が北)



10号墓人骨出土状況
(写真上が北)

15号墓人骨出土状況
(写真上が北)



16号墓人骨出土状況
(写真上が北)

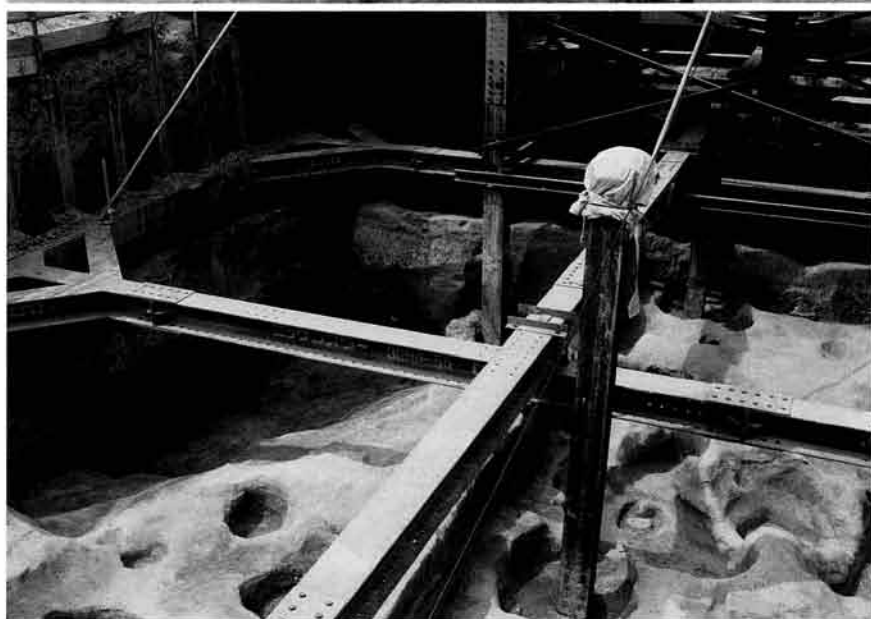


38号墓検出状況





SX901断面
(北から)



SX901完掘状況
(南東から)



SX901獣骨出土状況
(北西から)

SD401南半完掘状況
(南西から)



SD401南半の横矢板
(西から)



SD401南端完掘状況
(北東から)





SX901・SD701断面
(西から)



SX901完掘状況
(南から)



SA401検出状況
(南から)



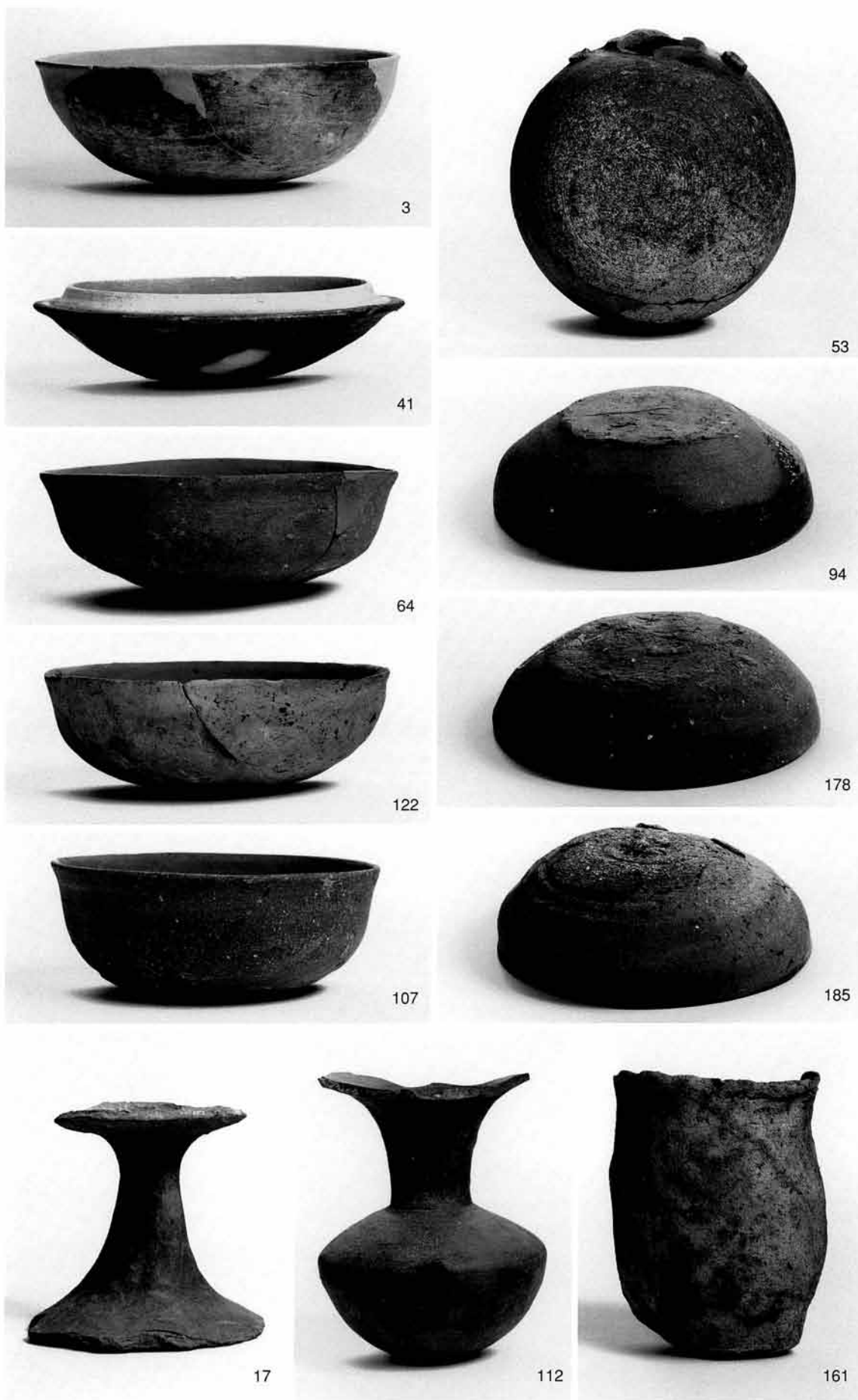
NW84-6次SK701(3~6・9)、NW90-29次第7b2層(15)



NW94-20次第7b層(11)



NW80-9次SK502(98)、NW89-17次SD701(3・4)



第8a層(3・17・41・53)、第7b2層(64・94・107・112)、第7b1層(122・161・178・185)



191



212



196



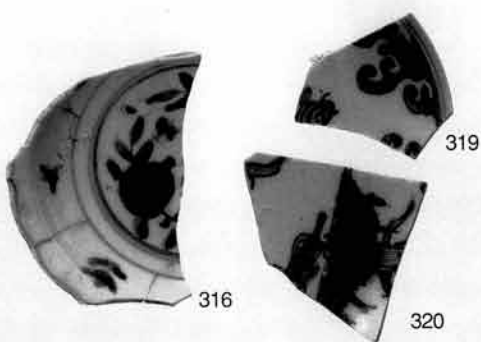
240



238



314



373



403



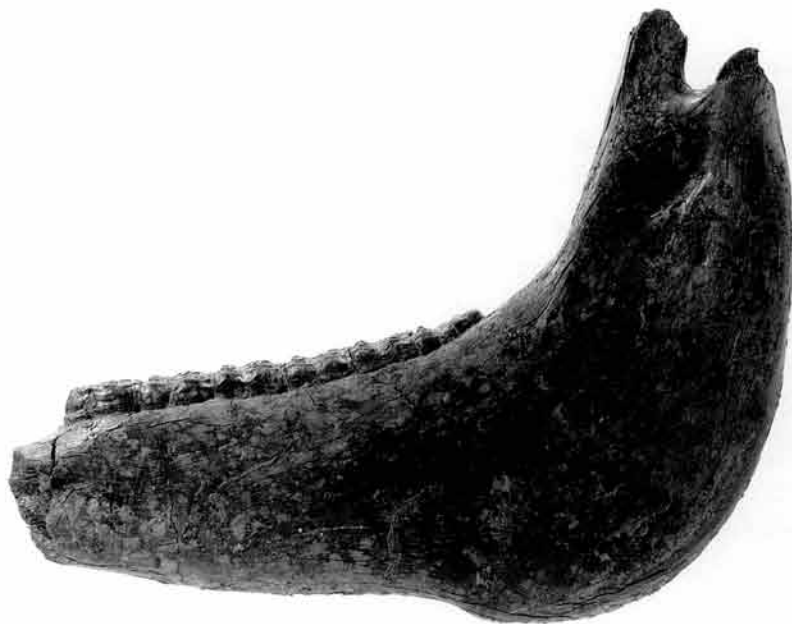
400



339

第7b1層(191・196・212・238・240)、SD401-3層(303・305~307・314・316・319・320・339・373)、SD401-2層(400・403)

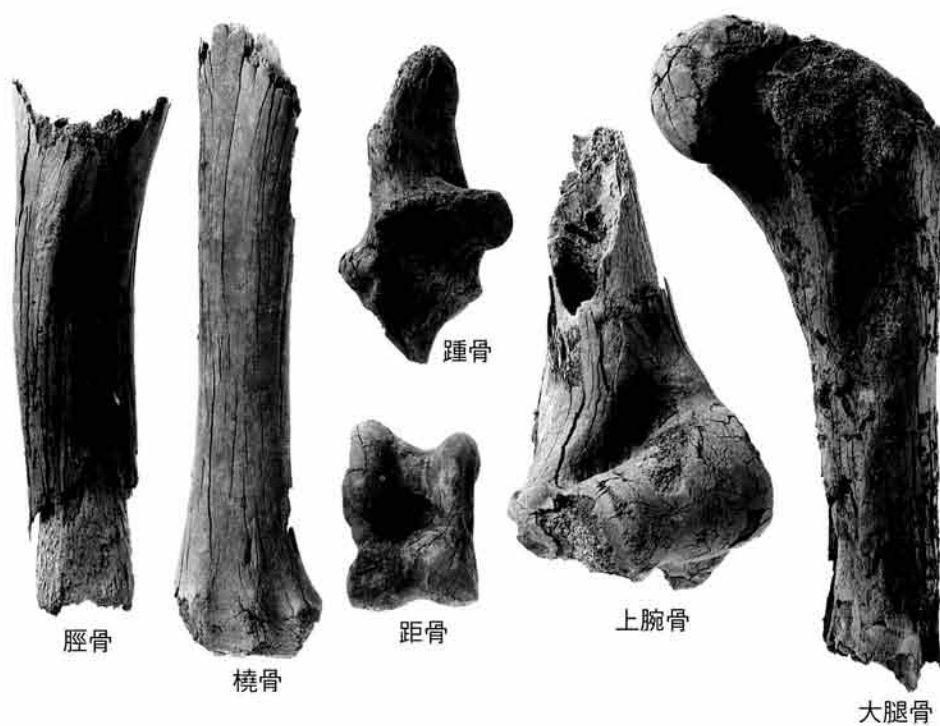
第8a層上面出土のウシ下顎骨



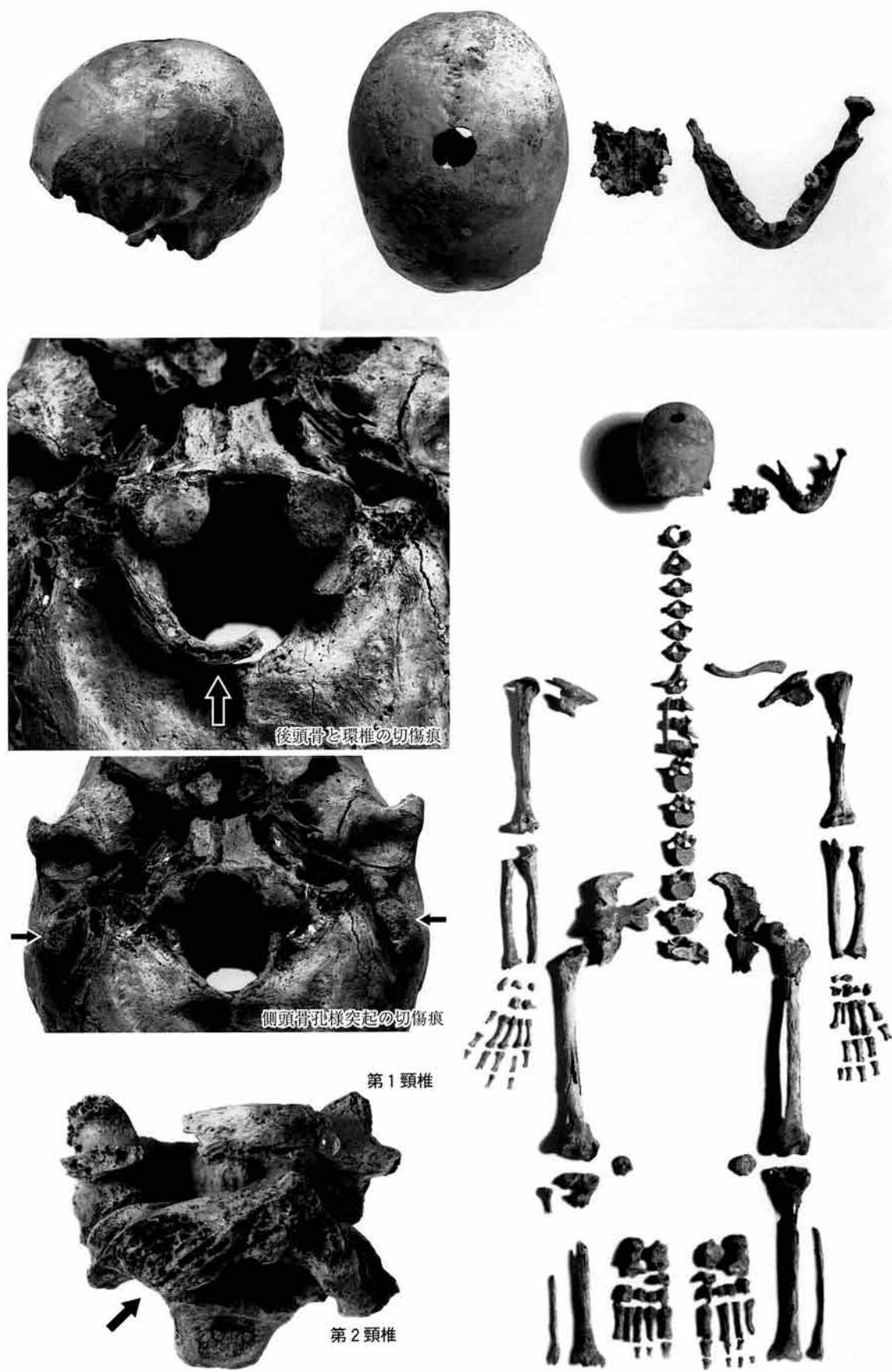
第8a層上面出土の整地層出土のウマ下顎骨



第8a層上面出土のウマおよびSD401出土のニホンジカ(右から1・2点目)

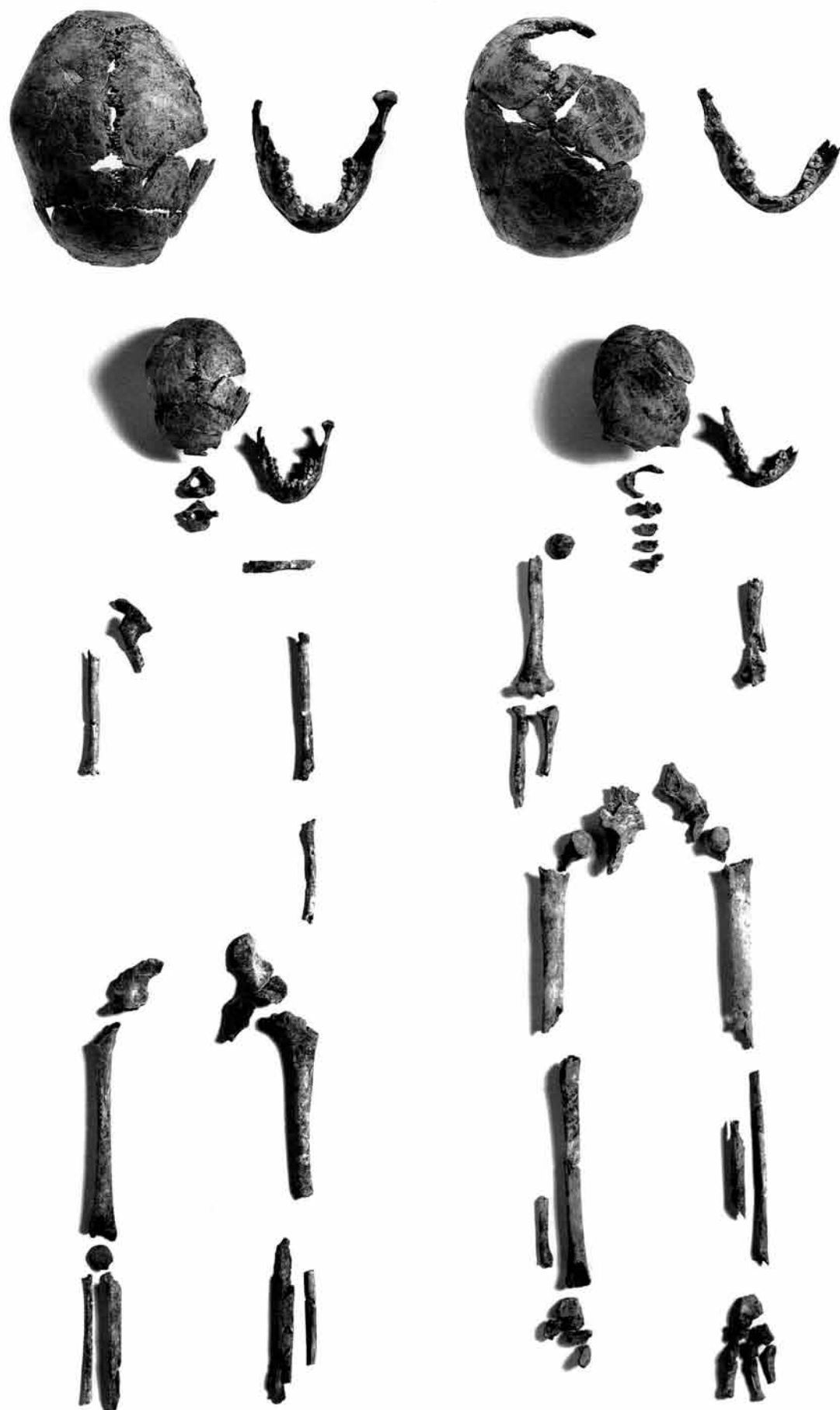


第8a層上面出土のウシ

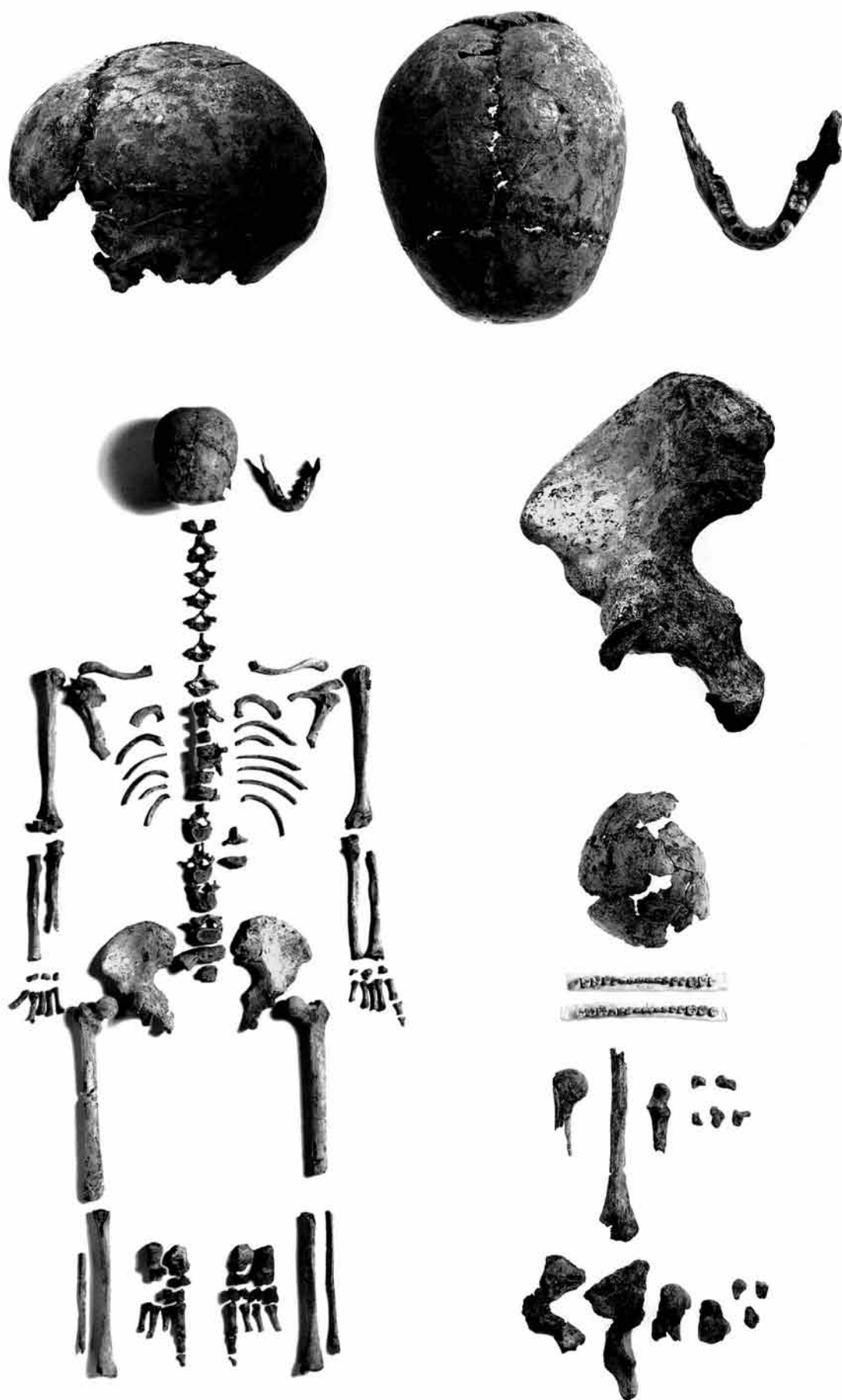


第1頸椎と第2頸椎の切傷痕(後方より)

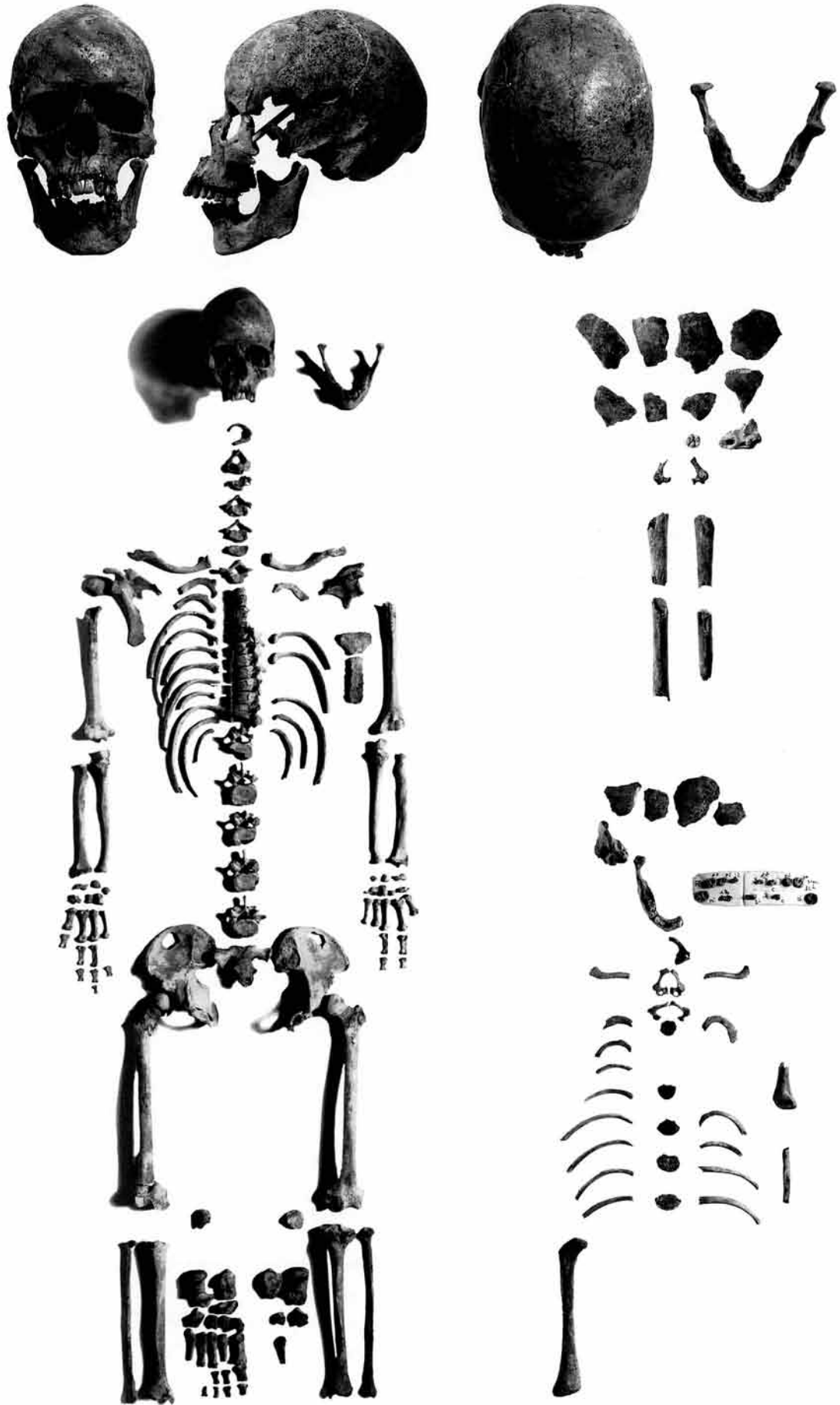
16号墓人骨(矢印は切傷痕)



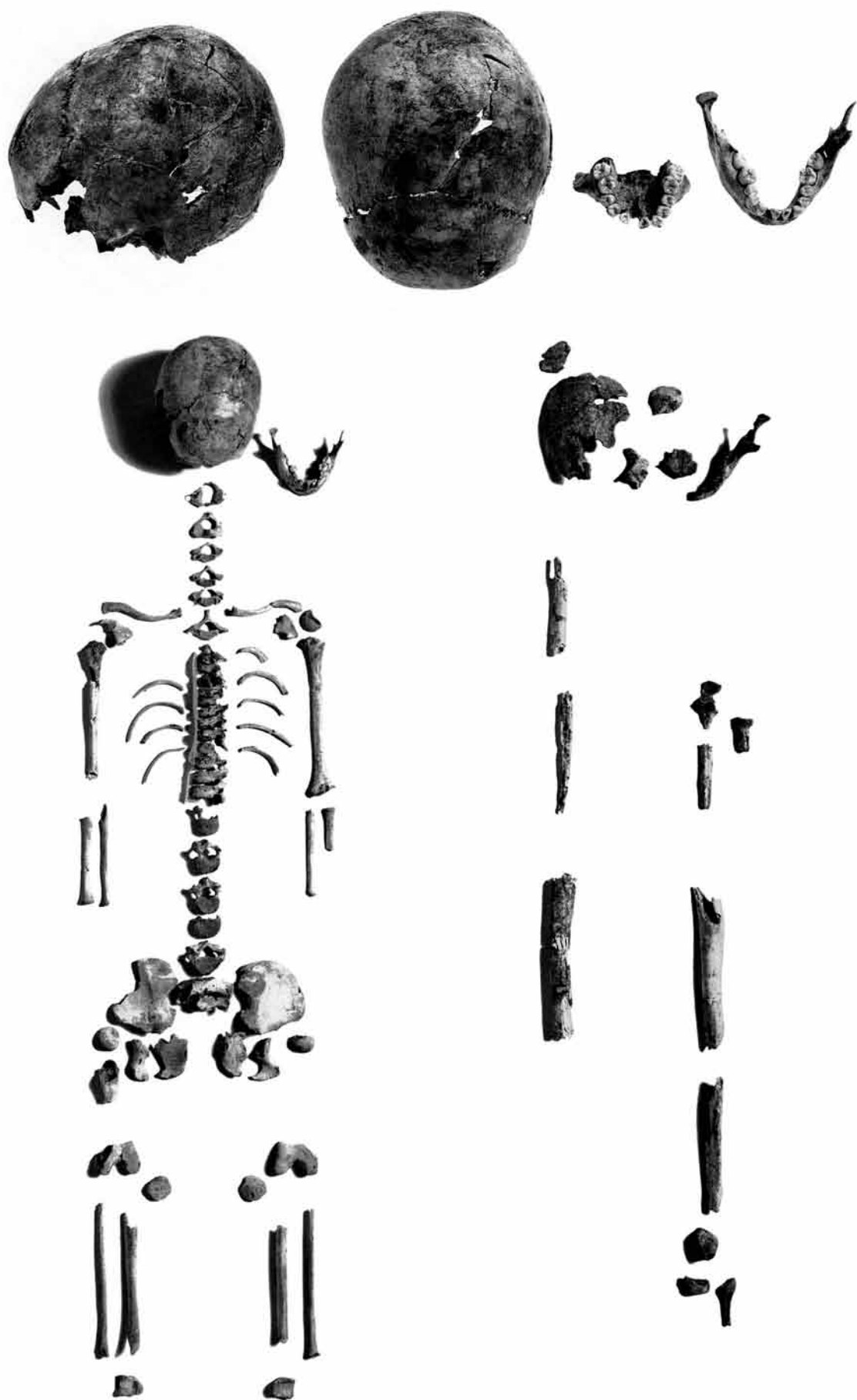
6号墓人骨(左)、14号墓人骨(右)



7号墓人骨(上・左下・右中)、10号墓人骨(右下)



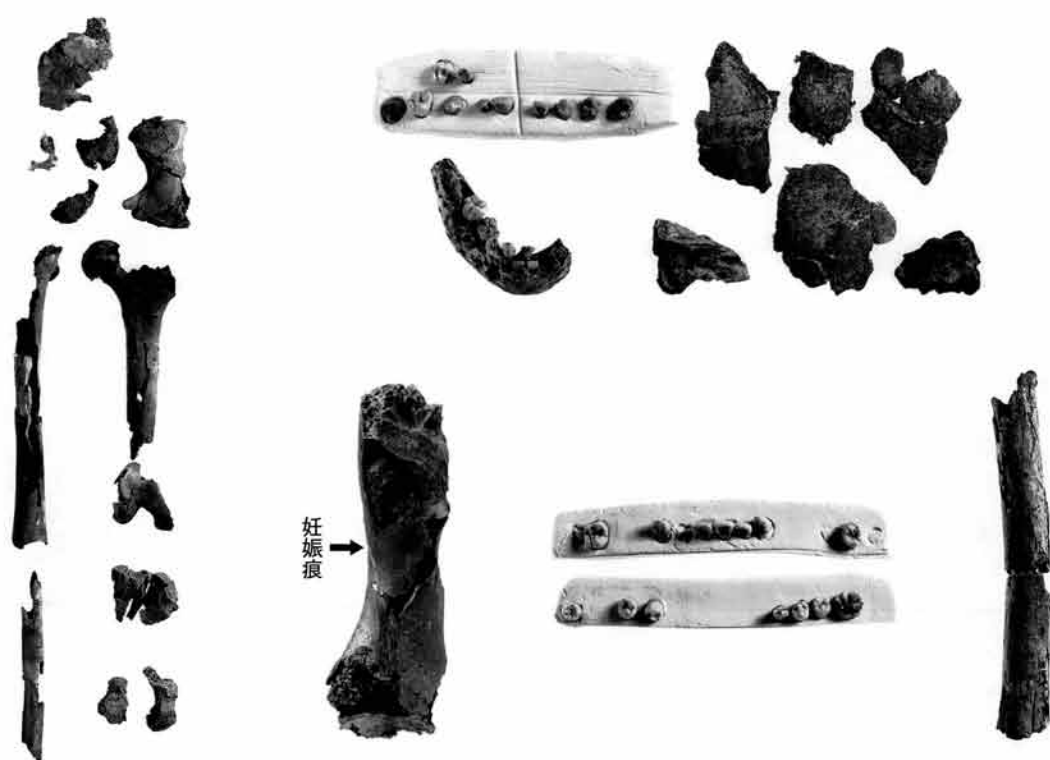
15号墓人骨(左・右上)、1号墓人骨(右中)、2号墓人骨(右下)



37号墓人骨(上・左下)、5号墓人骨(右下)



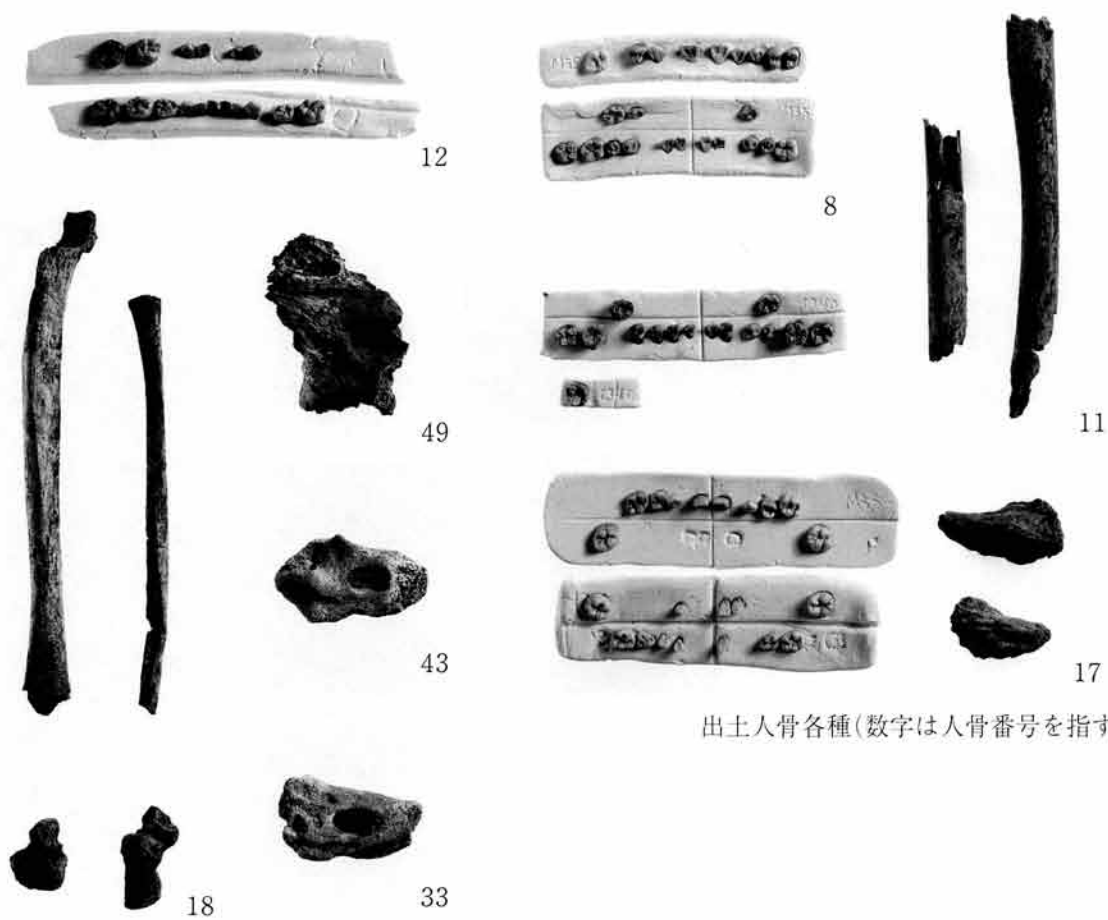
9号墓人骨(左)、13号墓人骨(中)、29号墓人骨(右)



38号墓人骨(左・中下)、4号墓人骨(右上)、3号墓人骨(右下)



22号墓人骨(左)、40号墓人骨(中)、48号墓人骨(右)



出土人骨各種(数字は人骨番号を指す)

難波宮址の研究 第十二

ISBN 4 - 900687 - 83 - 9

2004年7月12日 発行 ©

編集・発行 財団法人 大阪市文化財協会

〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-35

(TEL.06-6943-6833 FAX.06-6920-2272)

<http://www.occpa.or.jp/>

印刷・製本 ヨシタ印刷株式会社 大阪営業所

〒532-0003 大阪市淀川区宮原 5-1-18

**The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XII)**



July 2004

Osaka City Cultural Properties Association

**The Excavation Reports
of
the Naniwa Palace Site**

**(The Historical Investigation of
the Forbidden City of Naniwa: Volume XII)**



July 2004

Osaka City Cultural Properties Association

難波宮址の研究XII正誤表

ページ	行・位置	誤	正
目次v	図版2 1	NW80-9・84-6・89-17・ 94-20次調査出土遺物	NW80-9・84-6・89-17・ <u>90-29</u> ・94-20次調査出土遺物
1	11	[古市見2002・2004a]	[古市見2002 <u>a</u> ・2004a]
51	1	[大阪市文化財協会1985]	[大阪市文化財協会1985 <u>b</u>]
図版2 1の柱		NW80-9・84-6・89-17・ 94-20次調査出土遺物	NW80-9・84-6・89-17・ <u>90-29</u> ・94-20次調査出土遺物

